

# 七飯町 鳴川右岸遺跡

一般国道5号函館新道(自動車専用道路)工事用地内  
及び鳴川砂防工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

平成4・5年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター









# 七飯町 鳴川右岸遺跡

一般国道5号函館新道(自動車専用道路)工事用地内  
及び鳴川砂防工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

平成4・5年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター







遺跡遠景（手前は久根別川）









調査風景









1. II群B類土器



2. II群B類土器







1. III群A類土器



2. V群B類土器



## 例 言

1. 本書は、一般国道5号函館新道（自動車専用道路）工事および鳴川砂防工事にともない、財団法人北海道埋蔵文化センターが平成4年度と5年度に実施した、七飯町鳴川右岸遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は調査部調査第2課が担当した。
3. 本書の文責者については、文頭か文末に記した。
4. 黒曜石産地同定は、京都大学薬科哲男氏に依頼した。
5. 放射性炭素による年代測定は、京都産業大学山田治氏に依頼した。
6. 炭化種子の同定は、北海道大学吉崎昌一氏に依頼した。
7. 炭化材の同定は、農林水産省森林総合研究所平川泰彦氏に依頼した。
8. 出土資料は、七飯町教育委員会で保管する。
9. 調査にあたっては、下記の機関および人々のご協力、ご助言をいただいた。

七飯町教育委員会 石本省三、上磯町教育委員会 森 靖裕・野辺地初雄、茂辺地中学校 香河正人、大野町教育委員会 三上敏一、函館市教育委員会 中村公宣・佐藤智雄、市立函館博物館 田原良信、函館市北方民族博物館 長谷部一弘、木古内町教育委員会 鈴木正語・菅野文二・三上英則、戸井町教育委員会 古屋敷則雄、森町教育委員会 藤田 登、八雲町教育委員会 三浦孝一・柴田信一、今金町教育委員会 寺崎康史、南茅部町教育委員会 阿部千春・福田祐二・山口 敦、松前町教育委員会 久保泰・前田正憲、上ノ国町教育委員会 松崎水穂・斎藤邦典・佐藤一志、乙部町教育委員会 森 広樹・仙庭晋一、札幌市埋蔵文化財センター 加藤邦雄・上野秀一・羽賀憲二・仙庭伸久、江別市教育委員会 高橋正勝・直井孝一・園部真幸・稲垣和幸・野中一宏、石狩町教育委員会 石橋孝夫・工藤義衛、恵庭市教育委員会 上屋真一・松谷純一、苫小牧市埋蔵文化財センター 佐藤一夫・宮夫靖夫・渡辺俊一・工藤 肇、静内町郷土資料館 古原敏弘、帯広市百年記念館 北沢 実、釧路市埋蔵文化財センター 西幸隆・松田 猛・石川 朗、美幌町博物館 小林 敬・荒尾健志、常呂町教育委員会 武田 修、斜里町立知床博物館 金盛典夫・村田良介・松田 功、端野町教育委員会 大橋秀樹、北海道開拓記念館 野村 崇・平川善祥・右代啓視、アイヌ民族博物館 藪中剛、北海道大学 吉崎昌一・椿坂泰代・林 謙作、札幌医科大学 大島直行、札幌大学 木村英明、札幌学院大学 鶴丸俊明、東京大学 宇田川 洋・大貫静夫、福島大学 工藤雅樹、北海道教育大学函館分校 千代 肇・鴈沢好博、青森県立郷土館 福田友之、八戸市教育委員会 工藤竹久・大野 亨、岩手県埋蔵文化財センター 工藤利幸、秋田県埋蔵文化財センター 桜田 隆、大阪文化財センター 鋤柄俊夫



## 凡 例

1. 本文及び図表中では、次の略号を使用した。

H：住居跡      P：土壇      F：焼土      S：配石

HP：住居跡内柱穴      HF：住居跡内焼土

2. 実測図の縮尺は、原則として次のとおりである。

遺 構      1：40      遺 物 出 土 状 況      1：20

遺 構 内 遺 物 分 布      1：50      土 壇 内 遺 物 出 土 状 況      1：30

復元土器      1：4      土器柘本      1：3      土 製 品      1：2

剥片石器      1：2      石 斧      1：2      礫 石 器      1：3

石 皿      1：4      石 製 品      1：2

3. 遺構の規模については、次の要領で示した。なお、一部破壊されているものは、現存長を（ ）で示した。

確認面での長径×短径／底面での長径×短径／最大深さ（単位 m）

4. 土層の表記は、基本土層についてはローマ数字で、遺構、沢跡等部分的な層位についてはアラビア数字で示した。

5. 遺構図中の方位は真北を、細数字は標高（単位 m）を示す。

6. 遺物分布図のドットは、特に注記しない限り白抜きは包含層、黒塗りは遺構覆土の遺物を示す。ドットの形状は次のように使いわけた。

土 器：○●      剥片石器・Uフレイク：▽▼      剥 片：△▲

礫 石 器：◇◆      礫・礫片：□■

# 目 次

口絵

例言

凡例

目次

## I 調査の概要

1 調査要項 .....	1
2 調査体制 .....	1
3 調査にいたる経緯 .....	2
4 遺跡の概要 .....	3

## II. 遺跡の環境と周辺の遺跡

1. 自然環境 .....	9
2. 歴史的環境 .....	13

## III. 遺物の分類

1. 土器 .....	17
2. 石器等 .....	18

## IV. 調査の方法

1. 調査区の設定 .....	19
2. 土層 .....	24
3. 包含層の調査 .....	29
4. 遺構の調査 .....	29

## V. 遺構

1. 概要 .....	31
2. 住居跡 .....	33
H-1 .....	33
H-2 .....	35
H-3 .....	37
H-4 .....	39
H-5 .....	44

### 2. 土壌

(1) 土壌A類 .....	45
(P-2 ~ 5, 33, 42, 43)	
(2) 土壌B類 .....	50
(P-1, 6, 8, 9, 12, 14, 15, 17~32, 35)	
(3) その他の土壌 .....	64
(P-7, 10, 11, 13, 16, 36, 39, 40, 41, 44)	
3. 配石遺構 .....	70
4. 埋設土器 .....	70

5. 焼土	
(1) IIIa・IIIb 1 層の焼土	71
(F-33, 63, 71)	
(2) B 1 層の焼土	72
(F-9, 53, 54, 61, 62, 66~69, 72~75)	
(3) III b 2・B 2 層の焼土	74
(F-10~18, 20~22)	
(4) 斜面の焼土	77
(F-2~7, 19, 23~32, 34~52, 55~60, 64, 65, 70~78)	
*浮遊選別一覧表	90
*遺構一覧表	92
*遺構及び周辺出土の掲載土器・石器	95
VI. 包含層の遺物	99
1. 土器	99
(1) 土器の出土状況	99
(2) 土器	102
*包含層出土の掲載土器	147
2. 石器等	38
(1) 石器の出土状況	157
1) 剥片石器	
一括石器 1	157
2) 礫石器	
一括石器 3	161
石皿	162
3) 礫	
一括石器 2	162
*一括石器 2・3, W-1・3・4 出土石器計測表	163
(2) 石器	167
*包含層出土の掲載石器	191
VII. 自然科学的手法による分析結果	195
1. 鳴川右岸遺跡出土の黒曜石製遺物の原産地分析	藁科哲男 195
2. 放射性炭素年代測定結果	山田 治 203
3. 北海道亀田郡鳴川右岸遺跡で検出された植物種子	吉崎昌一 205
4. 鳴川右岸遺跡住居跡 H-4 出土の炭化材	211
図版	213



# I 調査の概要

## 1 調査要項

- 1) 事業名 一般国道5号函館新道(自動車専用道路)工事用地内埋蔵文化財発掘調査  
事業委託者 北海道開発局函館開発建設部  
事業受託者 財団法人北海道埋蔵文化財センター  
調査期間 平成4年7月20日～平成5年3月26日  
平成5年7月8日～平成6年3月25日  
遺跡名 鳴川右岸遺跡(道教委登録番号 B-08-69)  
(平成4年度は、国立療養所裏2遺跡と仮称)  
所在地 亀田郡七飯町字桜町695-1ほか  
調査面積 平成4年度 2,975m<sup>2</sup>  
平成5年度 2,647m<sup>2</sup>  
発掘期間 平成4年8月17日～10月27日  
平成5年7月26日～10月27日
- 2) 事業名 鳴川右岸砂防工事用地内埋蔵文化財発掘調査  
事業委託者 北海道函館土木現業所  
事業受託者 財団法人北海道埋蔵文化財センター  
調査期間 平成5年7月8日～平成6年3月25日  
遺跡名 鳴川右岸遺跡(道教委登録番号 B-08-69)  
所在地 亀田郡七飯町字桜町695  
調査面積 平成5年度 250m<sup>2</sup>  
発掘期間 平成5年7月19日～7月24日  
平成5年10月1日・2日

## 2 調査体制

平成4年度	理事長	寺山 敏保			
	専務理事	永田 春男	常務理事	中村 福彦	
	業務部長	伊藤 庄吉	調査部長	森田 知忠	
	調査第2課長	越田賢一郎	主 任	工藤 研治	
	文化財保護主事	中田 由香	嘱 託	西脇対名夫	
平成5年度	理事長	寺山敏保(8月10日付退任)	阿部 茂(8月11日付就任)		
	専務理事	永田 春男	常務理事	中村 福彦	
	業務部長	中野 眞吾	調査部長	森田 知忠	
	調査第2課長	越田賢一郎	主 任	工藤 研治	
	嘱 託	西脇対名夫			

### 3 調査にいたる経緯

#### 1) 函館新道関連

国道5号線の七飯町付近は、赤松街道と呼ばれるほど見事な並木道が続いている。この並木の保護と混雑緩和を目的にして、函館新道の建設工事が函館市昭和町から七飯町峠下にかけて進められ、現在その一部にあたる、石川町から桔梗町までの区間が供用開始されている。将来、現在建設中の北海道縦貫自動車道と接続すると共に、高規格幹線道函館・江差自動車道との分岐が予定されている。

函館新道の工事区間は、横津岳西側の緩斜面と久根別川の河岸段丘沿いにあたり、多くの遺跡が存在することが予想された。そのため北海道教育庁文化課では、この工事に関連して事前協議を行い、遺跡確認調査（A調査）および範囲確認調査（B調査）を実施してきている。

函館市内の既に通している区間では、北海道埋蔵文化財センターが昭和60～62年度に函館市石川1遺跡（10,460m<sup>2</sup>）、昭和62年度に函館市桔梗2遺跡（3,540m<sup>2</sup>）の発掘調査を行った。<sup>1</sup>

七飯町内では9ヵ所の遺跡が確認されて、順次B調査が実施されてきている。平成3年度には七飯町大中山13遺跡（2,850m<sup>2</sup>）の発掘調査が行われており、<sup>2</sup> 今回の鳴川右岸遺跡の発掘調査は、同事業関連では4件目にあたる。

町内では、久根別川の一支流である鳴川の流域に、多くの遺跡が存在している。そのなかで、縄文時代早期の貝殻文土器を出土した鳴川遺跡、中期の円筒土器上層式の遺跡である国立療養所裏遺跡、続縄文時代の桜町遺跡が良く知られている。<sup>3</sup> 今回発掘調査が行われた地区は、既知の遺跡はなかったものの、鳴川をはさんで国立療養所裏遺跡の対岸にあたるため、A調査によって遺跡である可能性が指摘されていた。平成4年7月に文化課によってB調査が実施され、約8,000m<sup>2</sup>におよぶ遺跡の存在が確認された。

埋蔵文化財センターでは、急遽同年8月から発掘調査を実施した。なお当初は国立療養所裏2遺跡と仮称していたが、その後七飯町教育委員会による遺跡発見届出の際、鳴川右岸遺跡と変更された。遺跡の調査は翌5年度にも継続して行っただが、まだ2,500m<sup>2</sup>が未調査となっている。

#### 2) 鳴川砂防工事

函館新道の建設とは別に、鳴川砂防工事が北海道函館土木現業所によって進められている。既に上流部の工事は終了し、下流部は河川改修工事が行われているため、残る1.6kmほどの区間が対象になっている。この部分の河川敷には、わずかに自然の姿が残されていて、鳴川が運んだ大小様々の礫が両岸に数多く並び、土石流の凄まじさを示している。

この工事に伴う事前協議は平成3年に行われ、道教育委員会によるA調査では4ヵ所の遺跡が確認された。同年10月のB調査の結果、国立療養所裏遺跡は発掘調査が必要であると判断され、平成4年度に町教育委員会によって発掘調査が実施された。<sup>4</sup>

鳴川右岸遺跡にかかる部分は、函館新道関連の調査と一連のものであるため、平成4年に函館新道関連地区と合わせてB調査が実施され、250m<sup>2</sup>について発掘調査が必要であると判断された。なお、発掘調査必要範囲が小規模であるため、平成5年度に函館新道関連の調査地区と合わせて、埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

#### 4 調査の概要

##### (1) B調査の結果

横津岳から流れ出る鳴川が形成した扇状地は、現在の七飯本町の範囲に広がっている。遺跡はこの扇状地の扇頂部付近、鳴川右岸の丘陵縁辺部から旧河道にかけて立地する。丘陵縁辺部はかなり急な斜面となり、旧河道部は平坦ではあるものの、雑木と笹の間から巨大な礫が顔をだしている状況であった。なおこの周辺一帯は落葉松と杉の植林地として利用されていた。

B調査は、20m おきにバックホウによって1×3m ほどの範囲を掘開し、人力によって掘り上げ土から遺物を収集する方法がとられた。調査の結果、駒ヶ岳d火山灰(Ko-d)と苦小牧火山灰(B-Tm)に覆われている黒色土(III層)から遺物が出土することが判明した。包含層の残存状況は良好で、丘陵縁辺部の斜面では、縄文時代中期の円筒土器上層式土器が比較的まとまって検出された。また旧河道部でも同時期の土器が散布していることが明らかになったが、大きな礫が多く砂礫層がみられ、遺物の含まれている層位が確定できない試掘穴もあった。また、晩期の土器が最も上流よりから数片出土し、この2時期が主体となる遺跡であると予想された。

以上の調査結果に基づき、遺物の集中する丘陵斜面から平坦部にかけての8,322m<sup>2</sup>について発掘調査が必要で、そのうち急斜面となる部分は、遺構確認調査が必要であると判断された。

##### (2) 平成4年度の調査

##### 調査計画

遺跡の下流側にあたる2,800m<sup>2</sup>(2,000m<sup>2</sup>については重機を併用した遺構確認調査)を調査する計画を立てた。そのうち斜面部が5分の4程度を占めている。

発掘調査の決定が急であったため十分な予備調査ができなかったが、B調査の結果から次のような調査にあたっての問題点が指摘できた。

##### a. 立地

扇状地の扇頂部付近に立地する。そのため川は流れが早く、増水時には大形の礫を押し流すことがある。扇状地の成立および河道の変遷と、遺跡の形成がどのように関連するのか問題となる。

##### b. 時期

晩期の土器の出土範囲から外れるため、縄文時代中期円筒土器上層式の単純遺跡であると想定した。

##### c. 遺跡と遺物

斜面部では遺物がまとまって出土していたので、住居跡、土壇などの遺構が存在する可能性が強いと思われた。一方平坦部では、遺物が水の営力により移動した可能性もあり、巨大な礫が多いことから、遺構の存在は考えにくかった。

##### d. 性格

函館周辺では、サイベ沢遺跡に代表されるように、大規模な円筒土器文化の遺跡が、広い河岸段丘上に立地することが知られていた。この遺跡のように奥まったところで発見されることは少なく、遺跡の性格についての解明に興味をもたれた。また、対岸の扇状地上

にある国立療養所裏遺跡からも同時期の遺物が発見されているので、それとの関係も問題となることが予想された。

#### 調査方法・結果

調査範囲は、落葉松などの根が残り、また笹藪となっているため、表土（Ⅰ層）および抜根をバックホウで行い、排土は土砂の流失を防ぐために、すべて近くの平坦地に運搬することとした。

遺構確認調査範囲は、火山灰層（Ⅱ層）まで重機で掘り下げた段階で、遺物が確認された範囲を手掘り調査に切り替えたため、当初の計画より減って1,700m<sup>2</sup>となった。この範囲については、黒色土（Ⅲ層）を重機でわずかず除去した後、人力で清掃を行って、基盤となる層（Ⅳ層）での遺構の発見につとめた。黒色土層中で焼土2ヵ所、基盤層で土壇1基を検出した。

通常の発掘調査範囲は当初800m<sup>2</sup>であったが、上記の地区と拡張部分を合わせ、最終的に1,225m<sup>2</sup>となった。

平坦部では、黒色土層上部で焼土1ヵ所を検出した。さらに掘り下げていくと、すぐに大小様々な礫や砂礫層が顔を出しはじめた。遺物は、黒色土層の上部および巨大な礫の間に挟まるようにして出土し、一部は砂層に含まれているものもあった。

礫群と砂礫層は、大きく3時期に分けることができた。丘陵縁辺の急崖下に小沢があり、その河道側に最も巨きな礫群が見られる。駒ヶ岳g (Ko-g) 火山灰が小沢の底と礫群を覆っており、最も古い一群である。次にこの巨礫群の河道より大礫群があり、次に砂礫層となっていた。大きく斜面から現在の河道よりへと、堆積が進んでいった状況が観察できた（第Ⅱ章2）。しかし、範囲が狭く、石を除去して掘り下げることが困難であり、遺物との対比ができなかった。

斜面部は風倒木が多く、抜根の跡と重なって遺構の検出が難しかったものの、住居跡3基、土壇4基、焼土9ヵ所を検出できた。

遺物は遺構の周辺から多く出土した。土器は予想通り中期前半の円筒土器上層式が多く、一個体の土器がまとまって出土することもあった。また、前期後半の円筒土器下層式や中期後半の土器も確認された。石器では、円筒土器に伴ういわゆる「扁平打製石器」と、これと組み合わせられると考えられる大形の石皿・台石が数多く出土した。ほとんどが河原にある安山岩を利用し、斜面部にまで持ち上げて使用したものである。それに比べ、石鏃、槍先、つまみ付きナイフ、石斧など、ほかの地域から持ち込んだ石を素材とする石器は、極端に数が少なかった。

遺物と遺構の分布状況から見て、平成5年度の調査区に集中域が広がっていることが予想できた。

#### (3) 平成5年度の調査

##### 調査計画

平成4年度の調査区と隣接する部分と、砂防工事関連の地区を合わせ2,897m<sup>2</sup>（うち遺構確認調査862m<sup>2</sup>）について発掘調査を実施する。旧河川跡の平坦部が全体の3分の1程を占めている。

昨年度の成果を合わせ、次のような調査計画を立てた。

## a. 立地

平成4年度に七飯町教育委員会によって行われた、対岸の国立療養所裏遺跡の発掘調査で、数次にわたる砂礫層の堆積が確認され、扇状地の形成史と火山灰についての調査がなされた。<sup>5</sup> これに関連して、旧河道部の調査にあたって、扇状地および河道の変遷と遺跡の形成とのかかわりが問題となった。礫群や砂礫層の形成時期を知るために、遺物との関係を明らかにすることが必要である。

## b. 時期・分布域

昨年度は、遺構・遺物集中範囲の一部を調査しただけで、今年度が主体部分となる。中期の円筒土器上層式だけでなく、下層式も相当量出土する可能性がある。これに中期後半の土器を加え、それぞれの土器と遺構がどのように分布を異にして出土するのかを明らかにしていきたい。

一方、砂防工事関連の地区は、晩期の土器が出土しており、墓が存在する可能性がある。また、円筒土器の分布域と晩期のそれとはどこで区別できるのであろうか。

## c. 遺構・遺物

斜面部は遺構遺物集中範囲で、昨年度と同様、住居跡、土壇、焼土が相当数存在することが予想される。そのため、重機による掘り下げは火山灰までとし、木の根はそのまま残して土層の攪乱を防ぐこととした。

一方平坦面は礫が多く、遺構の存在する可能性は薄いと判断した。

## d. 性格

昨年度に引き続き、遺構と遺物の出土状況から、遺跡の性格について考える。

## 調査方法・結果

平成4年度と5年度にわたる調査成果を簡単にまとめておく。

## a. 立地

表土と火山灰を除去した段階で、平坦面は予想以上に平で、現河道沿いの小さな段差部分まで2枚の火山灰に覆われていて、最近の洪水による包含層の流失はないことがはっきりした。

そこで、礫層まで掘り下げないうちに何本かの試掘溝を入れ、層位の確認を行った。土層の堆積状況は大変複雑で、黒色土層中にも何枚かの砂層が見られた。また、礫群や砂礫層の下にも黒色のバンドがあり、遺物が出土することも明確になった。そこで大きく、黒色土をⅢa、Ⅲb1、Ⅲb2、Ⅲcに、砂層をA、B1、B2、Cに分けた。なお、砂層中の黒色土については、砂層に関連してとらえることとした。

これらの層位をもとにした地形の変遷については、第Ⅱ章－1で詳細に述べることとし、ここでは概略のみ触れることとしたい（図Ⅰ－1参照）。

鳴川扇状地の形成は20,000年前に遡り、扇頂部では、安山岩の巨礫を含む9,000年前頃の、第2期の扇状地堆積物が見られることが指摘されている。<sup>6</sup> 丘陵縁辺部に最も近い位置の巨礫群は、Ko-gに覆われており、第2期の扇状地堆積物の一部と考えられる。現在のところ、Ko-g下層からは遺物が出土していない。

この頃、O-25周辺は半島状に突き出て攻撃面となっており、丘陵斜面と巨礫群の間に位置する小沢は、時折水が流れる程度であった。ここに黒色土(Ⅲd)が形成された後に、Ko-g火山灰が降下し、まもなく河川の増水により小沢に砂Cが流入する。その後も洪水に

よる砂層の堆積を繰り返す（黒色土Ⅲc, 砂 B2とそれに挟まれる黒色土）が、やがて安定期を迎える。巨礫層の山側における、黒色土Ⅲb2の形成期である。円筒土器下層式の頃、人々がここに生活をはじめた。

巨礫層の川側では、まだ黒色土と砂層の形成が繰り返される（砂 B1とそれに挟まれる黒色土）。ただ、焼土や遺物は各黒色土ごとに見られ、繰り返して円筒土器下層式から上層式頃の人々の生活が行われたことを示している。この地区も、黒色土Ⅲb1形成期には安定する。おそらく縄文時代中期後半である。

さらにこの黒色土Ⅲb1を、薄い砂層（砂 A）が覆っている部分がある。この上層（黒色土Ⅲa）は、晩期と続縄文時代の包含層である。それ以降、川岸の一部を除いて、大きな地形の変動がなかったことは、B-Tm と Ko-d の堆積が物語っている。

河道は丘陵斜面縁辺から次第に離れていき、そこに人が住む空間が生まれていったと、いえるのではなかろうか。

#### b. 時期と遺物の分布

今から6,000年前に降下したとされる Ko-g の下層では、遺物が確認されていない。土器では、円筒土器下層 d 式が最も古く、それに続く円筒土器上層 a 式は少ないが、同 b 式、サイベ沢Ⅶ式土器は、本遺跡の主体を占めている。その後、榎林式並行期、余市式、晩期聖山Ⅱ群土器などが見られるが数は多くない。他に続縄文（恵山式土器、後北式土器）と擦文土器が少量ずつ出土している。

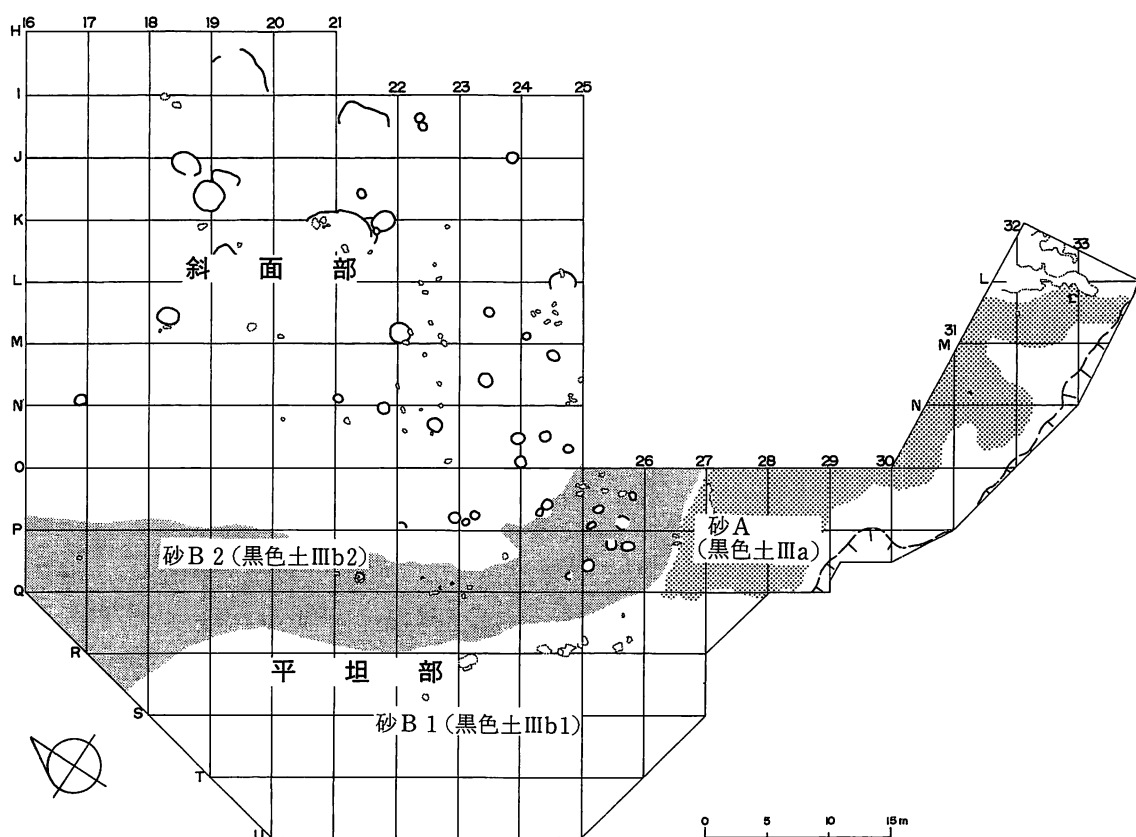


図 I - 1 地形模式図

これらの土器の分布と、前述の黒色土の形成とは、次のように関連する。

円筒土器下層 d 式は、丘陵斜面周辺に堆積する黒色土Ⅲb2層（砂層 B2の分布とほぼ一致する）に多く分布する。特にⅢb2層直下の砂層 B2に挟まれる黒色土（Zで示す）は、この時期のみの包含層である。また斜面部の低い位置にもまとまりがみられる。

円筒土器上層式の分布は、下層式の分布を一回り大きくした形で、特に斜面の高い位置にまで広がっている。平坦部では、黒色土Ⅲb2層上部に多い。

砂層 B1に挟まれる数枚の黒色土からは、円筒土器下層式と上層式が出土する。焼土も存在するが、遺物量は少ない。

中期後半と後記初頭の土器は、25ラインの東側平坦部に見られる。黒色土Ⅲb1層（砂層 B1の分布とほぼ一致する）と関連する。

晩期の土器は、黒色土Ⅲa層（砂層 Aの分布とほぼ一致する）中に含まれる。

続縄文土器は、数個体が点在する形でⅢ層上部から検出された。擦文土器と B-Tm の関係は明確でない。

### c. 遺構と遺物（表1）

遺構は、住居跡5基、土壇43基、焼土78ヵ所、配石1ヵ所、埋設土器1ヵ所を検出できた。

〔住居跡〕斜面に構築されているため、下側は輪郭が明らかでないものが多い。平面形は1, 3, 4号住居跡が隅丸方形、5号が方形、2号が円形と推定される。小形のものが多く、床面中央には焼土がある。柱穴は3号と4号で4本検出されており、小形の2号には壁柱穴がある。円筒土器上層式終末の4号住居跡床面から出土した、炭化材の<sup>14</sup>C年代測定では、4,000から4,300年前を示している（Ⅶ章2）。

〔土壇〕斜面から、黒色土Ⅲb2にかけて分布する。底面が砂層に達しているものもある。大きさから AB2 形態とその他の土壇に分けられる。

Aは径2m ほどの大形で、住居規模に近い。不整円形ないし方形を呈す。底面の掘り込みは浅く、平坦になっている。

Bは直径1.5m ほどの円形を呈する。深さ70～80cm で、底面は平である。

土壇の覆土から出土する遺物は少ない。ただ、礫が投げ込まれたかのようにまとまっている例が目される。

〔焼土〕層位と伴出遺物から円筒下層、円筒上層、晩期、続縄文の4時期に分けられる。焼土が広い範囲に広がるもの（F-64, F-65）があり、函館市中野A・B遺跡などで見られる広域焼土（PD-3）と同じ性格を持つ可能性がある。<sup>8</sup> おそらく野火によるもので、斜面部に密集している焼土のなかにも、同様の性格を持つものが含まれよう。

遺物は土器35,220点、石器等4,180点で、遺構の分布する範囲に集中する。

〔土器〕先述したように、円筒土器下層 d 式から擦文土器までである。29ヵ所で、1個体ないし2個体の土器がまとまって出土している。

〔石器〕各機種が見られる。ナイフ・スクレイパー、すり石、石皿が多い。すり石がまとまって出土している地点（一括石器3）、石皿が2枚重なって出土した地点もある。剥片・破片が少なく、1ヵ所で1,800点近くがまとまって出土した（一括石器1）のを除くと、300

点あまりに過ぎない。原石を持ち込んで、剥片石器を製作することはあまり行われなかったようである。一方、河原の安山岩はいろいろな用途に使用されている。「扁平打製石器」と呼ばれているもの、石皿・台石のほとんどが河原の石を利用している。

黒曜石製遺物 6 点が出土したため、京都大学原子炉研究所薬科哲男氏に依頼して原産地分析を行った結果、5 点が赤井川産、1 点が置戸産であることが判明した（Ⅶ章 1）。

また、住居の床面および土壌の底部、焼土の土壌を採取してフローテーションを行い、検出した炭化種子の同定を北海道大学吉崎昌一氏に依頼した。その結果、焼土 F-60 からヒエの炭化種子が検出された（Ⅶ章 3）。

#### d. 性格

遺跡が斜面中心で住居の規模が小さく、焼土のみ存在することが多い。また旧河道部においても、洪水の跡を示す砂層に挟まれた黒色土層に焼土が形成されている。このことから継続的に生活していたのではなく、断続的な居住に適していたと思われる。

土器は、廃棄されてから傾斜に沿って移動はしているものの、後世の人為的攪乱はあまり受けていないようである。従って、長期に亘り継続して居住していたとは考えにくい。石皿とすり石が多いので、秋に木の実を採集するためのキャンプ地で、円形の土壌はそれを一時的に貯蔵した施設ではないかとも考えられる。（越田賢一郎）

#### 註

1. 北海道埋蔵文化財センター 1988 『石川 1 遺跡』  
北海道埋蔵文化財センター 1988 『桔梗 2 遺跡』
2. 北海道埋蔵文化財センター 1991 『大中山 13 遺跡』
3. 七飯町 1976 『七飯町史』
4. 七飯町教育委員会 1993 『国立療養所裏遺跡』
5. 鷹澤好博 1993 「七飯町鳴川扇状地調査報告」『国立療養所裏遺跡』七飯町教育委員会
6. 5 に同じ。
7. それ以前にも、縄文時代早期末から前期前半頃の特徴を持つ石器があるが、単独出土である。
8. 北海道埋蔵文化財センター 1993 中野 A 遺跡（Ⅱ）

表 I - 1 鳴川右岸遺跡出土の遺物

土器				石器等					
時 期	分類	点 数		分 類	点 数		分 類	点 数	
		遺構	包含層		遺構	包含層		遺構	包含層
縄文前期	II B	55	4,825	石 鏃	4	43	礫 ・ 礫 片	283	755
	中期	III A	774	石 錐		5	使 用 痕 礫	4	95
後期	III B	4	571	石槍またはナイフ	1	2	原 石		11
	IV A	78	1,775	つまみ付きナイフ		21	石 核	1	12
晩期	V	30	888	ナイス・スクレーパー	4	107	剥 片 ・ 碎 片	19	2,087
続縄文 擦 文	VI		158	石 斧		24	U・R フレイク	7	58
	VII		66	た た き 石	9	43	土 製 品		12
				す り 石	14	382	石 製 品		7
				石 皿 ・ 台 石	19	151			
計		941	34,279		51	778		314	3,037
総 計		35,220		4,180					



## II 遺跡の環境と周辺の遺跡

### 1. 自然環境

#### 1) 遺跡位置および自然環境の概略

北海道島の南西部には東経140°付近を山がちの渡島半島が南北に伸び、南は津軽海峡を挟んで本州東北地方の津軽半島、出羽丘陵へと連なる。渡島半島南部の北緯42°付近から南東へ亀田半島が分岐し、以南の渡島半島本体は松前半島の名で呼ばれている。鳴川右岸遺跡は亀田半島基部の内陸に位置し、北緯41°53'15"、東経140°42'30"前後の地点にある(図II-1)。

遺跡の所在する七飯町は、亀田半島と渡島半島本体との境界をなす低地帯から亀田半島の南西斜面にかけての地域を占める。町の北部は優美な成層火山駒ヶ岳、東部は死火山横津岳を中心とする山塊が占め、ともに標高1000mを超す。これらは南東方の半島先端にある活火山恵山、また津軽海峡を隔てた下北半島の恐山山地などとともに関東地方にまで連なる東北日本弧外弧の火山帯の一部をなしている。一方亀田半島の東には太平洋が、また北には駒ヶ岳・胆振地方南部の火山群と渡島山地に囲まれて内浦湾が広がっている。

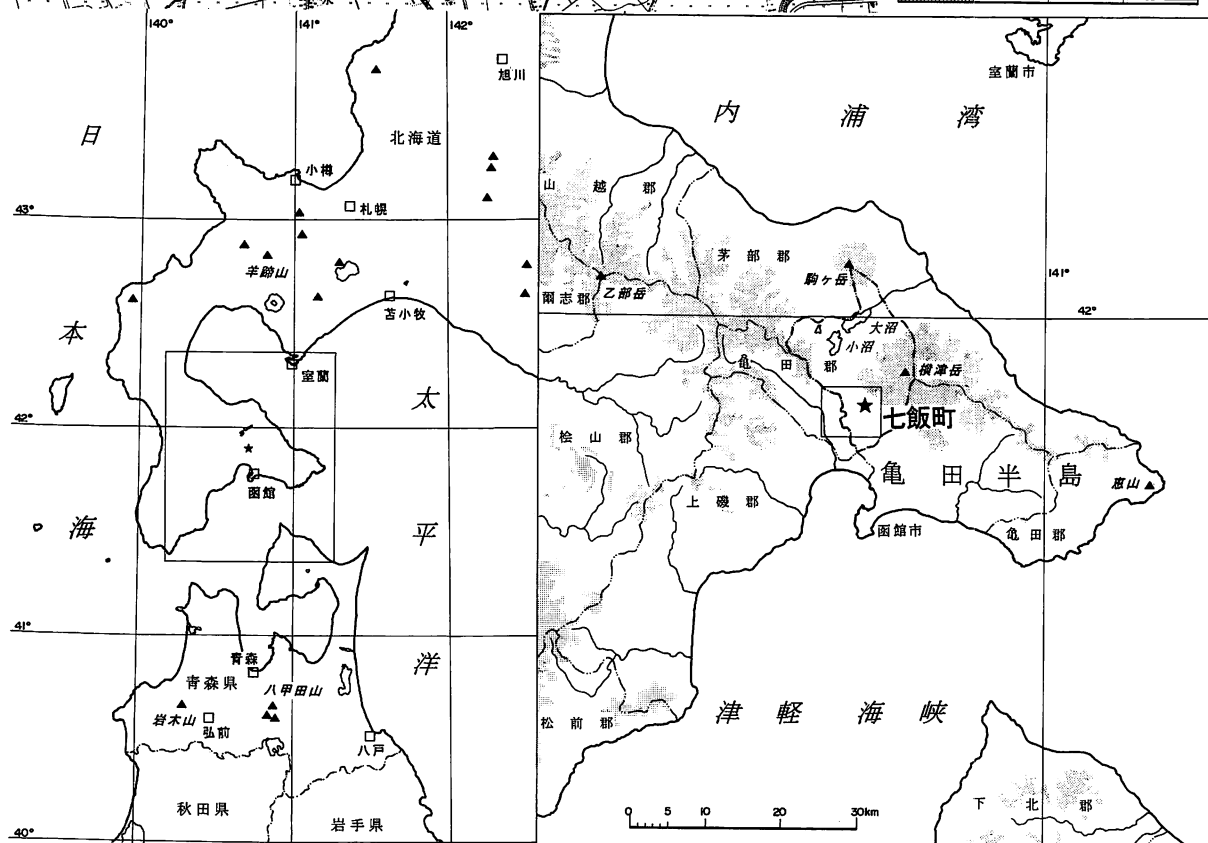
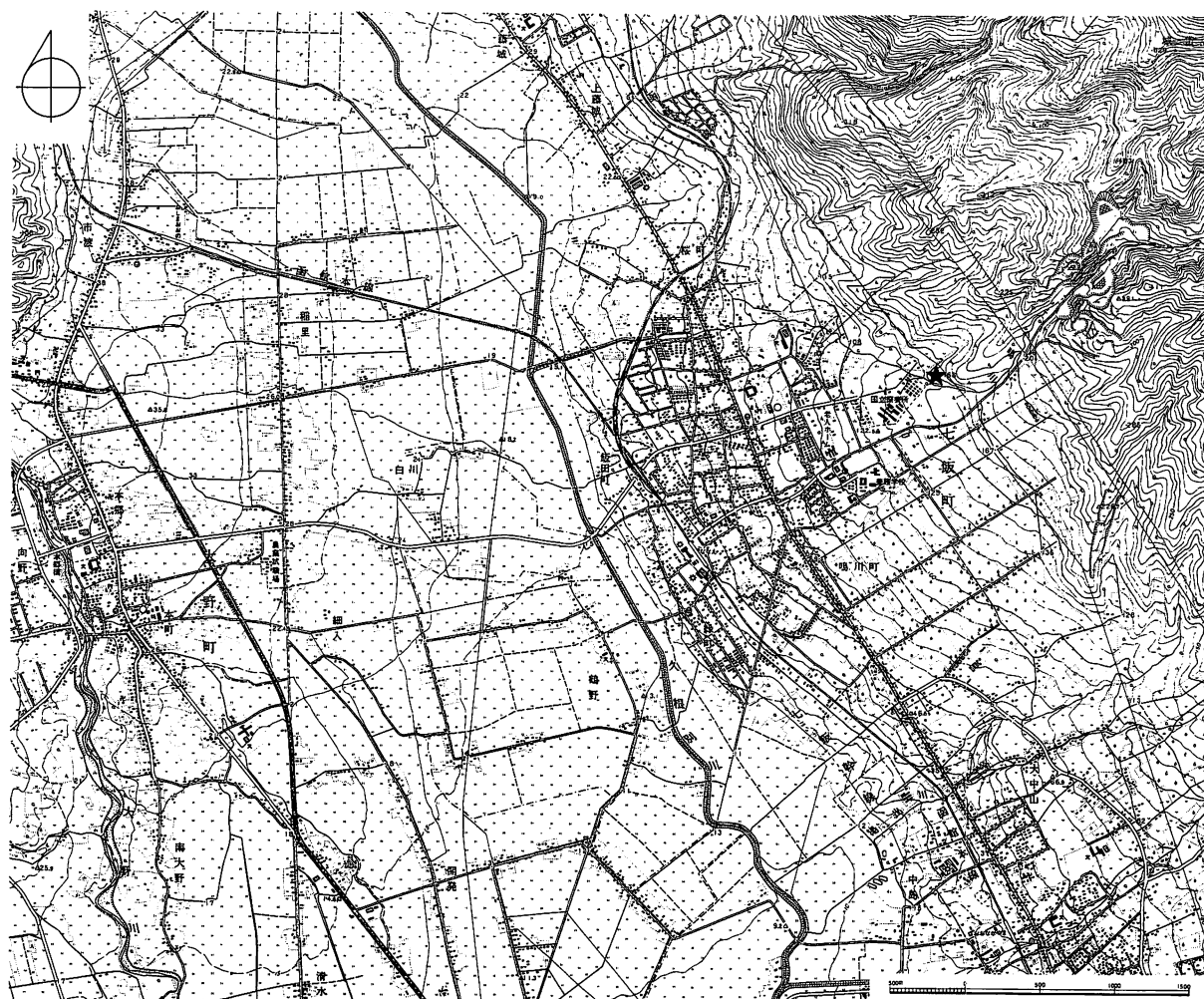
渡島半島北部の寿都町付近から内浦湾を経て南北に連なる低地帯は七飯町北部で大沼・小沼などの湖沼群を形成し、さらに南方の函館平野へと続く。函館平野の中央部は東西の山地から流入した土砂で形成された沖積低地、縁辺部は主に海成の段丘で、それらと山地との間に扇状地が発達する。段丘・扇状地の前縁には渡島山地側に大野川・戸切地川、亀田半島側に久根別川が流れ、平野の南端で合流して函館湾に注ぐ。久根別川は扇状地の地下水と、東側の山地から注ぐ鳴川・大川・蒜沢川などの支流によって涵養されている。

七飯町における平均気温は2月で-1℃、7月22℃前後で道内としては比較的温暖であるが、冬季の積雪は平野部で1m以上に達する。山地・山麓における本来の植生はミズナラ・ブナ・シナノキなどを中心とする落葉広葉樹林であったと考えられ、クリ・トチノキの自生も見られる。横津岳山頂付近など山地の上部にはダケカンバ・ミヤマハンノキなどの林が形成されるが、トドマツなどの針葉樹林が発達しない点に一つの特徴がある。開田以前の沖積低地はハンノキ林やヨシなどの群落で占められていたと思われる。

#### 2) 遺跡周辺の地形・地質について

鳴川右岸遺跡周辺の地形は、大きく東北側の山地と南東側の山麓緩斜面とに分けることができる。緩斜面のさらに南東には津軽海峡に向って函館平野が広がり、また平野の西には新第三系を主として一部中・古生界を含む渡島山地が続いている(図II-1)。

遺跡の東北側に広がる山地は主に峠下火山碎屑岩類<sup>1</sup>と総称される新第三系の火砕岩からなり、その上位に横津岳下部・上部溶岩<sup>2</sup>と呼ぶ安山岩の溶岩が載る。上部溶岩の噴出年代は更新世前期と考えられているが、これに近い年代の板状節理の発達した安山岩が峠下火山碎屑岩類に貫入して鳴川上流部の山地にも露出しており(鳴川安山岩<sup>3</sup>)、現在採石場として利用されている。鳴川右岸遺跡で石皿や扁平打製石器の素材となっている扁平な礫の多くがこの安山岩に由来するものと思われる。なお山地の表面付近は以上のような基盤の岩石の風化物、あるいは固結の進まない火砕流堆積物が覆っており、特に遺跡に近い山地の下部ではかなりの厚さを有して斜面を形成している。



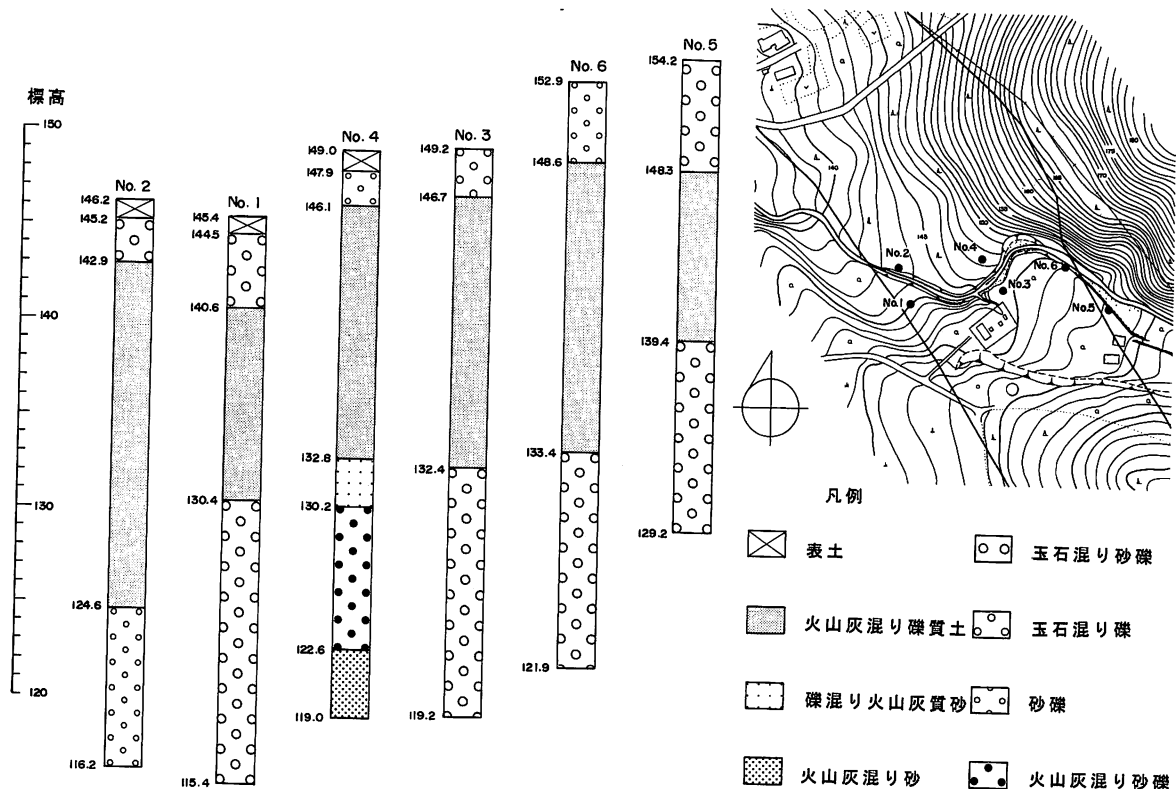
図II-1 遺跡の位置 (★印)

遺跡の南東側には函館平野に向って鳴川扇状地が広がっている。鳴川扇状地は扇央角度、平均勾配、扇頂勾配、堆積物の層厚・体積のすべてについて南東に隣接する亀田川扇状地より大きな値を示し、非常に顕著な発達を見せている。これは標高1000mを超える後背地から非常に急な溪床勾配で流れ下る鳴川が平野部に出て一挙に粗粒物質を堆積させるためであることを鴈澤好博が指摘している。<sup>4</sup> また鳴川扇状地と山地との間には崖錐が記載される場合があり、<sup>5</sup> 鳴川の右岸にいくつかある小規模な谷を埋めて形成された緩斜面がこれに相当すると思われる。なお花岡正光<sup>6</sup> は、峠下火山碎屑岩類の露出地域にも緩斜面が分布することを理由に、山麓の緩斜面には扇状地や崖錐とは異なる成因によるものが含まれることを推定している。

函館平野の縁辺には段丘が発達するが、七飯町内では扇状地の存在のために不明瞭な部分が多い。町の南端に近い字中島・字中野付近や平野北部の字仁山・字峠下付近の一部に標高60～20mの平坦面が存在する。この平坦面は瀬川秀良<sup>7</sup>の区分による日吉町段丘に相当し、関東地方の下末吉段丘に対比される。近年亀田半島では更新世後期以降の火山灰層序の研究が進んでおり、地形・地層の対比や年代決定に重要な役割を果たしている。七飯町内では主に駒ヶ岳と渡島山地の濁川カルデラ起源の噴出物が確認されている。鴈澤好博はKo-h およびNg-a 火山灰が初期の鳴川扇状地の堆積物とみられるものを覆っていることを理由に、鳴川扇状地の形成時期は最終氷期の最寒冷期を大きく遡らないものと考えた。<sup>4</sup> 瀬川が鳴川扇状地を含む「新火山扇状地」と日吉町段丘とは概ね並行的に形成されたと考えた<sup>7</sup>のに対し、鴈澤の判断に従えば下末吉段丘相当の平坦面である日吉町段丘は鳴川扇状地の下に埋没し、扇状地の南北で露出しているということになる。

### 3) 調査時点の地形・地質について

鳴川右岸遺跡は標高140m～160mの地点にあり、山地と山麓の緩斜面にまたがる位置を占めている。調査地点のうち南西寄りの傾斜の緩やかな部分は大きく見れば鳴川扇状地の



図II-2 ポーリング調査による新鳴川橋予定地の地質柱状図

一部であると考えられるが、同時に鳴川の谷床としての性格を帯びている。例えば扇状地の堆積物の上面と遺跡の南東部を占める緩斜面との間には、鳴川の左岸で認められるように平均して約3～4 mの段差があり、扇頂部に発達する沖積錐の末端(調査時点から100 mほど上流の左岸に見られる。図IV-1参照)では扇状地の上面より8 m以上も低い。

函館新道新鳴川橋の建設に先立って地質調査のために河川敷でおこなわれたボーリングの成果(北海道開発局函館開発建設部提供)を図II-2に示す。地表の直下には鳴川に沿った掃流堆積物とみられる砂礫層が存在するが、地表下3～6 mで火山灰混りの礫質土に変化する。発掘調査でも砂礫層の下位に礫混りの砂質粘土が確認され(図IV-5, E層)、埋没した山地斜面の堆積物ではないかとも考えた。しかしボーリングの結果ではこの層は地表下15～20 mで止まり、再び河道付近のものと思われる砂礫層が現れて地表下25 m以上の深さに達している。従って上記の淘汰の悪い部分は山地の単純な延長ではありえず、おそらく主に土石流によって形成された扇状地本体の堆積物に連続するものであろう。これを間に挟んで上下に砂礫層が発達することからみて、試錐地点はむしろ谷床中にあった期間が長く、土石流堆積の激しい時期にのみ扇状地の上面と連絡したというように理解ではないか。火山灰混り礫質土下位の砂礫層上面の標高はわずかな試錐地点の移動で大きく変化しているが、これは自然堤防のような河岸の微高地というより、むしろ段丘のような地形が埋没していることを想像させる。また発掘調査にともなって縄文時代前期(約6000年前)以降の堆積物を取り去ってみると、調査区の北西部や南東端で山地斜面の前縁に川の侵蝕による急崖が現れる(図IV-3下)。この地形が形成された時期の谷床平坦面は縄文時代前期より古い堆積物に深く埋没しているが、上述の火山灰混り礫質土下位の砂礫層などがそのような古い谷床に相当するのかも知れない。

このように現在見られる鳴川の谷床はかなり長い履歴をもつように思われるが、それは扇状地が発達するにつれて山地と扇状地の境が谷状の凹地となり、ここに恒常的な河道が形成されやすいためであろう。特に鳴川扇状地の場合は谷口の部分が鳴川安山岩の露出地域に当たって幅が狭く、ここを経過する土石流の進行が扇中央方向へ固定されがちなので、扇側付近の凹地が埋まりにくいものと想像される。扇頂の標高が山地下部の安山岩露出地域付近まで達して以来、扇状地性の堆積が特に激しく進んだ短い時期を除けば、鳴川は下刻と埋積を繰り返しながら扇側の緩斜面を谷床に取り込んでいったものと想像できる。結局遺跡が位置する緩斜面は扇状地そのものとは言いがたいが、また扇状地性の地形であることも否定しがたいということになる。

## 註

1. 三谷勝利・鈴木守・松下勝秀・国分谷盛明 1966 5万分の1地質図幅『大沼公園』 北海道立地下資源調査所
2. 鈴木守・長谷川 潔・三谷勝利 1969 5万分の1地質図幅『東海』 北海道開発庁
3. 鈴木守・国分谷盛明 1964 『七飯町の地質』 七飯町
4. 鷹澤好博 1993 「七飯町鳴川扇状地調査報告」(石本省三編 『国立療養所裏遺跡』 七飯町教育委員会 pp. 34-44)
5. 註1および註3文献
6. 花岡正光 1988 「遺跡周辺の地形・地質の概要」(財北海道埋蔵文化センター編 『函館市石川1遺跡』 同センター pp. 16-17)
7. 瀬川秀良 1974 「西桔梗遺跡と段丘形成について」(千代 肇編 『西桔梗』 函館圏開発事業団 pp. 24-32)

## 2. 歴史的環境

### 1) 歴史的時代における遺跡の位置

鳴川右岸遺跡が位置する鳴川扇状地の北半には現在、町役場・JR 七飯駅・国立療養所北海道第一病院などが置かれて七飯町の中心的市街をなしており、桜町・本町・鳴川町・緑町などの行政字に分かれている。遺跡の地籍は字桜町605-1ほかである。

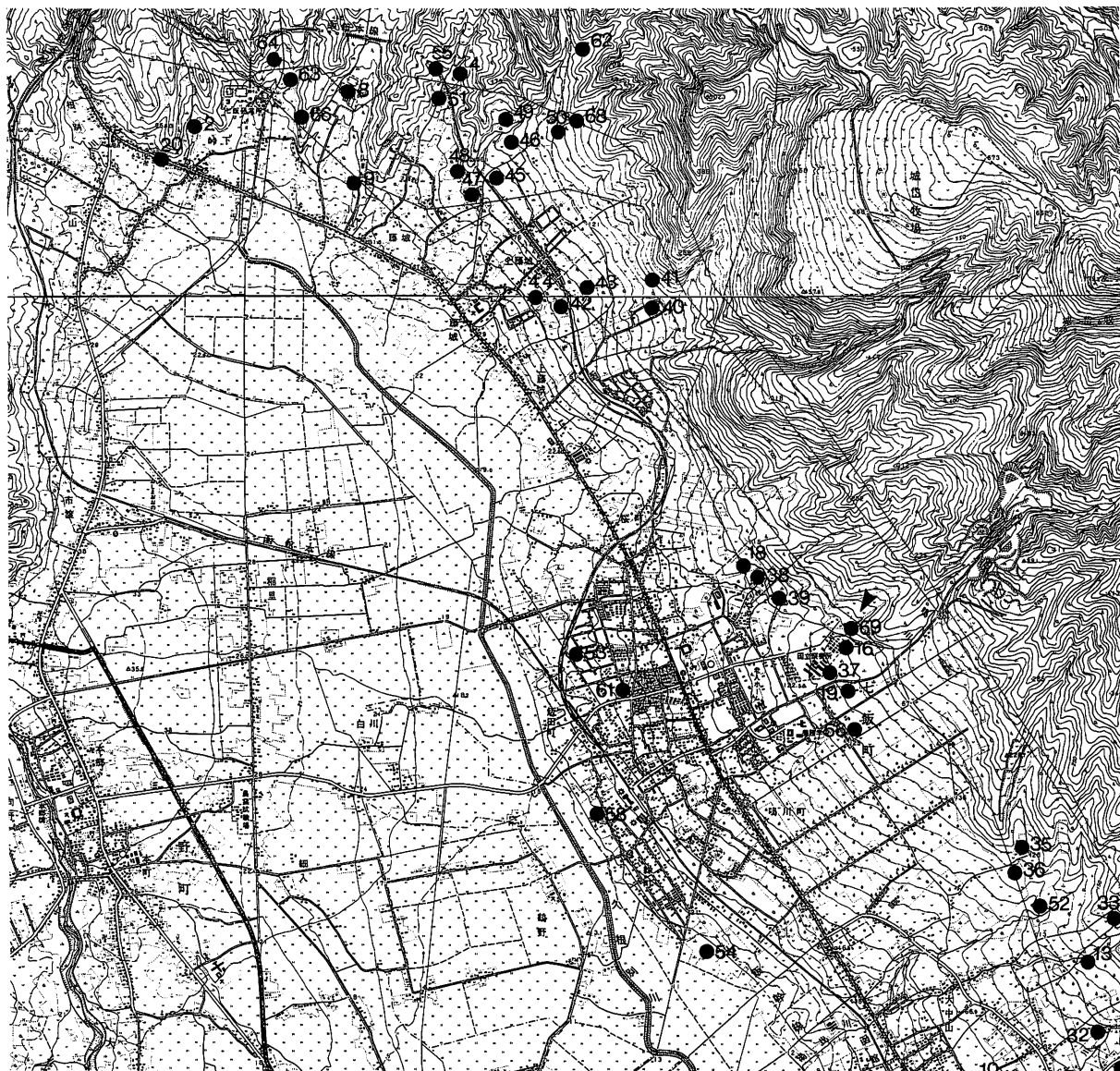
遺跡のある字桜町の対岸、字本町付近は中世末以来旧七重村の集落のあった場所である。字本町の三島神社は天文元（1532）年、字大中山の三島神社（現大中山神社）は天正4（1576）年の勧請と言われ、いわゆるコシャマインの乱の直後から現在に続く和人集落が成立し始めたことが知られる。以後東北地方からの移住者や八王子千人同心などを迎えながら、幕末までに山麓に沿って七重村・大川村・藤山村・峠下村、函館平野に臨んで鶴野村・飯田郷・中島郷などの集落が形成された。明治維新後にこれが漸次行政的に統合されて明治35（1902）年に現在の七飯町の前身である七飯村が成立している。

遺跡付近では広大な鳴川扇状地を利用して政府の主導による勧業の試みが近世以来継続し、箱館奉行所と七重村の倉山卯之助による苗圃・人参畑経営（文化年間）、官営菜園（安政4年）、開拓使七重官園（明治3年）など各種の圃場が設けられたが、鳴川右岸の山麓は概ねそれらの敷地外にあって、遺跡付近は遅くまで一部を除いて耕地となったことはなかったようである。明治14年頃の七重村を描いた「官私山林区別絵図<sup>1)</sup>」（以下「絵図」と略記）には遺跡背後の山々に「七重村飯田村入会山」の符箋がある。戦後には遺跡付近も広く開墾され、調査の開始時にはカラマツの植林地であった。遺跡に隣接する鳴川の河川敷から国立療養所裏の国有地にかけては樹齢百年を超すクリ・トチノキなどの茂る林が最近まで残り、開拓以前の扇状地の景観を偲ばせるものがあった。これが函館新道建設と鳴川の改修にともなってほとんど伐り尽くされたのは残念である。

### 2) 先住民族の存在について

永田方正によれば、七重の名は函館市と上磯町との境で函館湾に注いでいる石川の河口付近を呼んだ nu-an-nai（豊漁—ある—川）というアイヌ語地名に由来するもので、すなわち現在上磯町に属する七重浜の地が七重という地名の本貫であるという。<sup>2)</sup> 幕末まで七重浜と七重村が本・支村の関係にあったことは事実であるらしい<sup>3)</sup> ので、おそらく永田はそれを根拠に地名の移動を推論したのであろう。しかし寛政年間には鳴川扇状地を見上げるあたりの久根別川上流（あるいはその支流）を「七重川」と呼んでいたらしく、<sup>4)</sup> この名が古いものであるなら山麓の七重の地名は七重浜とは別に起源した可能性もあることになる。この場合「七重」は nam-nai（冷たい—川）のような形に遡るかもしれない。先にも触れた「絵図」には旧七重村の中心地である三島神社付近に「字ヒヤミツ」とあるが、古くはそういう名で呼ばれる小流があって、しかもそれは nam-nai というアイヌ語地名を翻訳したものではなかったかとも想像されるのである。

「絵図」では現在の鳴川にあたる流路に「鳴加川」とあり、周辺に字上ナリカ川・字下ナリカ川などの地名が見える。陸地測量部の北海道假製五万分一図「無澤峠」（明治29年）にも「ナルカ川」が記入され、明治年間までこのような旧称が行われていたことが分かる。「絵図」では鳴川上流の現在採石場となっている付近に「字鳴加」と記入しているが、この地名はあるいは nainar-ka（丘—の上）のような形に由来するのではあるまいか。鳴川扇状地の扇頂部にあたるこの付近が ninarka と呼ばれるのは一応自然のように思える。ま



図II-3 周辺の遺跡（数字は道教委登録番号）

たninarのアクセントは第二音節にあるので、アイヌ語の原義が不明になると語頭のni-が落ちる場合がある。例えば有珠郡洞爺村字成香の旧地名はninarkaであったという。なお知里真志保はninarの人称形（所属形）としてninari・ninaruを示している。<sup>5</sup>「絵図」の「ナリカ川」は所属形を含むninari-kaの形に由来する可能性もあろう。

これらアイヌ語起源らしい地名が和人に採用された時期は近世以前に遡る可能性があるが、和人入植の過程で先住のアイヌとの間に生じた交渉についての記録は乏しく、例えば七飯町付近での近世アイヌ集落の有無や数などを確かめることはできない。文字史料が乏しいのは権益の対象となる漁場から遠い土地柄によるところが大きいと思われるが、先住民の存在に関する口承も消滅しつつある。例えば鳴川という地名について、現在地元では大水の時に岩を交えて流れ下る川の音が凄じいので「鳴る川」だという説明がおこなわれており、ナリカ（ナルカ）川という旧称を記憶する人はほとんどいない。

### 3) 周辺の遺跡と調査

七飯町内の遺跡の分布については『七飯町史』<sup>6</sup>のほか、聖山遺跡・大中山13遺跡の発掘調査報告書<sup>7</sup>などに詳しい紹介がある。それらによって要点を述べると、遺跡数の大半を縄

表II-1 七飯町の遺跡

市町村記号番号 (B-08)

登載番号 遺跡名	登載番号 遺跡名	登載番号 遺跡名	登載番号 遺跡名	登載番号 遺跡名
1 大中山3	15 古小沼	29 大中山18	43 上藤城4	57 大中山27
2 上久根別	*16 国立療養所裏	30 大中山19	44 上藤城5	58 緑町2
3 大中山6	17 大沼学院	31 大中山20	45 藤城2	59 古小沼
4 藤城1	*18 桜町	32 大中山21	46 藤城3	60 小沼
5 大中山8	*19 鳴川	33 大中山22	47 藤城4	*61 七飯本町2
6 大中山9	*20 峠下	34 大中山23	48 藤城5	62 上藤城6
7 大中山10	21 七飯台場	35 大中山24	49 藤城6	63 古峠1
*8 聖山	22 大中山11	36 大中山25	50 藤城7	64 古峠2
*9 長万川	23 大中山12	37 鳴川2	51 藤城8	65 古峠炭窯跡
*10 大中山5	*24 大中山13	38 桜町2	*52 大中山26	66 峠下土塁跡
11 大中山4	25 大中山14	39 桜町3	*53 七飯本町1	67 上軍川1
12 大中山7	26 大中山15	40 上藤城1	*54 緑町1	*68 上藤城7
*13 武佐川	27 大中山16	41 上藤城3	55 藤城9	69 鳴川右岸
*14 大中山1	28 大中山17	42 上藤城3	56 鳴川3	

\* 発掘調査実施遺跡

表II-2 七飯町内発掘調査一覧

調査年	遺跡名(登載番号)	発掘主体者および報告者・文献・主な遺構及び遺物	
1952	武佐川(13)	市立函館博物館	縄文晩期
1958	桜町(18)	千代 肇	続縄文
1959	鳴川(19)	函館東高等学校考古学部	1960 「函館近郊鳴川遺跡紹介」 縄文早期
1961	鳴川(19)	市立函館博物館	縄文早期貝殻文土器
		高橋正勝	1967 「北海道七飯町鳴川遺跡の尖底貝殻文土器について」『石器時代』第8号
1973	聖山(8)	東北大学文学部考古学研究会	1979 『聖山』 縄文晩期土壇：8，石囲炉：4，合せ口土器：1
1974	〃	〃	廃棄場
1975	峠下(20)	町教育委員会	1979 『峠下遺跡の発掘調査』 縄文中期住居跡：10，土壇：6
1976	聖山(8)	町教育委員会	1984 『聖山』 縄文中・後期住居跡：3，土壇：2，
1977	〃	〃	縄文晩期石囲炉：25，焼土多数，集石ほか
1982	大中山5(10)	町教育委員会	1983 『大中山5遺跡』 続縄文(恵山)土壇墓：1
1985	七飯本町1(53)	町教育委員会	1986 『七飯本町1・2遺跡』 縄文中・後期住居跡：18ほか
1985	七飯本町2(61)	町教育委員会	1986 〃 縄文前～後期 焼土
1988	緑町1(54)	町教育委員会	1989 『緑町1遺跡』 続縄文堅穴遺構：1，縄文後期土壇：1
1988	大中山26(52)	町教育委員会	1989 『大中山26遺跡』 縄文中期住居跡：12，土壇：23
1990	長万川(9)	町教育委員会	1991 『長万川遺跡』 縄文中期住居跡：2，続縄文
1990	上藤城7(68)	町教育委員会	1991 『上藤城7遺跡』 縄文中期住居跡：7，土壇：14ほか
1991	大中山13(24)	道埋蔵文化財センター	1992 『大中山13遺跡』 縄文焼土，続縄文，近代土塁
1992	国立療養所裏(16)	町教育委員会	1993 『国立療養所裏遺跡』 縄文中期堅穴遺構：1，焼土
1992	大中山1(14)	町教育委員会	1993 『大中山1遺跡』 縄文前・中期



文・続縄文時代遺跡が占め、中でも続縄文時代遺跡の多さが特徴的である。旧石器時代遺跡は未発見で擦文時代遺跡もごく少ない。遺跡の大半は函館平野と山地との間の斜面で発見されており、斜面の頂部と下部、比較的水量の多い河川（蒜沢川・大川等）の両岸などに集中する傾向がある（図Ⅱ－3）。これは扇状地が広がり豊富な地表水を得がたいこの地域の条件からして自然な分布というべきであろう。表Ⅱ－1，2に町内所在の埋蔵文化財包蔵地（平成5年度現在）と町内における組織的な発掘調査の一覧を示す。

本書で報告する鳴川右岸遺跡を含めて、これまでに発掘調査のおこなわれた七飯町内の遺跡14ヶ所のうち7ヶ所で竪穴住居跡が発見されている。延べ53基を数える住民跡のほとんどは縄文時代中期中頃（大木8a式並行期）から後期初頭までのもので、この地域における縄文集落形成の盛期を示している。サイベ沢Ⅵ・Ⅶ式期から榎林式もしくは中の平Ⅱ・Ⅲ式期の住居跡が確認された峠下・長万川・上藤城7・鳴川右岸・大中山26の5遺跡のうち、長万川を除く4遺跡では山地の前縁に近い比較急な斜面に住居を設けている。これに対して煉瓦台式ないし余市式期に属する聖山遺跡と七飯本町1遺跡の住居跡は小さい河川に開析された緩斜面（扇状地あるいは段丘）にある。長万川遺跡の立地は後者に近いものの、斜面の傾斜はやはり聖山・七飯本町1に比べてかなり急であることが注意を引く。例数があまりに少ないので問題はあるが、この地域では中期末・後期初頭とそれ以前との間で集落立地の変化が起こっている可能性を考えてよいのではないと思われる。しかし中期末以前といえども、函館市内など段丘の広く発達する隣接地域では平坦な台地の上に集落が形成されているわけで、急斜面に住居を構えたのはかなり局地的な何らかの制約によるものであろうと推測できる。

今回の鳴川右岸遺跡の調査で一部確認されたように、縄文時代中期後半には鳴川の氾濫原で砂礫の堆積が激しく、山地から山麓の斜面にかけての地形が比較的不安定であったことが窺われる。このような時期には通常の氾濫原より高い位置にある扇状地・段丘上でも土石流などを経験する場合があったかも知れない。もとよりこれは憶測の域を出ないものの、鳴川をはじめ急峻な山地から大きな勾配で流れ下る河川の多い七飯町内のようなところでは、一旦後背山地の荒廃が起これば長期にわたって地形が不安定になった可能性がある。仮にそのような事実があれば、山地斜面への住居構築には災害を避ける意味があったのではないかと考えられるわけであるが、今後の調査に待つところが大きい。

（西脇対名夫）

## 註

1. 北海道七飯町編 1976 『七飯町史』 同町 表紙見返し
2. 永田方正 1891 『北海道蝦夷語地名解』 北海道庁
3. 『函館市史』史料編第1巻（函館市編・発行、1974年）に収録された松浦武四郎の「蝦夷日誌」には、巻之二有川村の頃、「桔梗野」に割注して「七重浜の上なる野なり。七重浜は七重村の出郷なれば也（後略）」とある。
4. 寛政九年二月の奥書をもつ「蝦夷巡覧筆記」（書名は「松前東西地理」とも。高橋壮四郎以下4名が松前藩主の命を受けて藩内の地理を調査したもの）の七重村の項には、「当所右ノ方山近ク木アリ左ノ方七重川アリ幅一二間夫ヨリ大野村マテ谷地ツムキ」とあり、村と谷地（現在は水田）の間に幅の狭い「七重川」が流れていたことがわかる。
5. 知里真志保 1956 『地名アイヌ語小辞典』 楡書房
6. 註1文献「文字のない時代」（pp.91-128）に町内の遺跡分布図と各遺跡の概説がある。
7. 東北大学文学部考古学研究会編 1972 『聖山』 同会  
（財）北海道埋蔵文化財センター編 1992 『七飯町大中山13遺跡』 同センター



### III 遺物の分類

2年度にわたる発掘によって、土器35,220点、石器等4,180点、計39,400が出土した。土器が遺物全体の90%を占めている。

出土した遺物には縄文時代、続縄文時代、擦文時代のものがあり、そのほとんどが縄文時代前期末から中期前半のものである。

#### 1 土器

本遺跡では縄文時代前期から晩期の各時期、続縄文時代及び擦文時代の資料が出土している。便宜的に、以下のとおり区分して記載していく。

##### I 群土器

縄文時代早期の資料。本遺跡の調査では出土していない。

##### II 群土器

縄文時代前期の資料。本群は前半期のものと後半期のものに大きく二分される。

A類 縄文の施された尖底を主体とするグループ。本遺跡では出土していない。

B類 円筒土器下層式に相当するもの。

##### III 群土器

縄文時代中期に属する資料。本群も大きく二分される。

A類 円筒上層a, b式, サイベ沢Ⅶ式, 見晴町式に相当するもの。本遺跡の主体となる土器群である。

B類 本類は次のように細分される。

B1類 榎林式に相当するもの。

B2類 大安在B式に相当するもの。

B3類 ノダップⅡ式, 煉瓦台式に相当するもの。

##### IV 群土器

縄文時代後期の資料。

A類 天佑寺式, 涌元式, トリサキ式, 大津式, 白坂3式に相当する前葉の土器群。

B類 ウサクマイC式, 手稲式, 鯨瀬式に相当する中葉の土器群。

C類 堂林式, 三ツ谷式, 湯の里3式に相当する後葉の土器群。

本遺跡ではB類, C類は出土していない。

##### V 群土器

縄文時代晩期の資料。

A類 大洞B, B-C式に相当するもの。

B類 大洞C1, C<sub>2</sub>式に相当するもの。

C類 大洞A, A'式に相当するもの。

##### VI 群土器

続縄文時代の資料。

##### VII 群土器

擦文時代の資料。

## 2 石器等

石器は、時期による区分が困難なため、形態と機能に主眼をおいて区分した。ここでは主な特徴についてのみ触れておく。

### 剥片石器

〔石鏃〕 無茎と有茎のものがある。ほとんど後者に分類される。

〔石錐〕 刺突の機能を持つものと、回転痕を持つものがある。

〔槍先またはナイフ〕 破片のみで、全体形は不明である。「突き刺す」より「切る」「削る」機能を持つと思われる。

〔つまみ付きナイフ〕 いわゆる「石匕（匙）」である。縦型のみで、両面加工と片面加工のものがある。

〔ナイフ・スクレイパー〕 身が薄く角度の浅い刃部を持つものをナイフ、厚身で急角度の刃部をもつものをスクレイパーとして区分したが、中間形態も多くその差は明確でない。

### 礫石器

〔石斧〕 大形から小形のものまである。打ち欠きによる整形後、全面を研磨している。

〔たたき石〕 手に持てる程度の礫の一部に、たたき痕を持つもの。礫の形態と、使用痕の付き方は様々である。いわゆる「凹み石」も含める。

〔すり石〕 手に持てる程度の礫の一部に、すり面を残すもの。すり面の幅は、広狭様々である。いわゆる「北海道式石冠」「扁平打製石器」を含めている。

〔石皿・台石〕 大形の礫に、すり痕、たたき痕などを持つもの。据えて使用されたと考えられる。

### 礫

〔礫・礫片〕 遺跡が河原に立地するため、包含層中に多くの礫が含まれ、自然遺物と意図的に運びこんだものとの区分ができない。そのため、遺構の覆土や周辺出土のもの、人為的に集積したと思われるもののみを取り扱った。

〔使用痕礫〕 礫石器片と思われるが器種を特定できないもの、使用痕や被熱痕のある礫など。

〔原石〕 頁岩、硅質頁岩など明らかに持ちこまれたもので、剥片石器の材料となる礫。

### 石核・剥片

〔石核〕 連続的に剥片を打ち欠いているものを抽出した。

〔剥片・碎片（フレイクチップ）〕

〔Uフレイク〕 使用痕のある剥片。

〔Rフレイク〕 加工痕のある剥片。

### その他

〔土製品〕 土偶、土製円板、装飾品類、へら状のものなど。

〔石製品〕 石棒など。

## IV 調査の方法

### 1. 調査区の設定

北海道教育委員会が平成4年7月に実施した遺跡範囲確認調査の結果、町道より南東側、鳴川との間の遺物包含層の存在する範囲が発掘調査必要範囲として決定された（図IV-1）。調査区の設定に当たっては、道路工事用地の中心線抗 SP-9700と SP-9600を結ぶ直線、およびこれに直交し SP-9700を通る直線を基準線として、これらに平行する5m間隔の方格（グリッド）割りをおこない、これによって調査地点の傾斜方向に概ね平行・直交する方格を設定した（図IV-2上）。北海道開発局函館開発建設部から提供された中心線抗 SP-9700・9600の測量結果は次の通りである（平面直角座標系第XI系中の位置）。

SP-9700 X=-233,759.290 Y=-38,290.337

-9600 X=-233,676.797 Y=-38,233.887

グリッドの区画線には斜面の上方から下方へ向かってアルファベット、鳴川から離れた北西側から川寄りの南東へ向かってアラビア数字による呼称を与え、SP-9700を通る区画線をMラインおよび20ラインと呼んだ。5m四方の各グリッド単位にはその斜面上方側と北西側を区切る区画線の呼称を組み合わせて名称を与えた。例えばSP-9700杭の斜面下手、南東側にあるグリッドにはM-20という名称が与えられる。また各区画線の交点に設置した杭にも区画線の呼称を組み合わせて名称を与えた。従って例えばM-20グリッドの斜面上手、北西側の角にある杭がM-20杭と呼ばれることになる（図IV-2上）。

上記の方格と工事用地の境界に沿って図IV-2に示すような調査範囲を設定し、砂防工事用地の境界杭R6およびR5-3を結んだ線を挟んで函館新道用地内では8,072m<sup>2</sup>、砂防工事用地内では250m<sup>2</sup>を調査対象とした。平成4年度は20ラインから北西側とH・I・L～N-20の5グリッドの計2,925m<sup>2</sup>、平成5年度には20ラインから南東側（Oラインから北東では25ラインまで）の残りグリッドと砂防工事用地を合わせた2,897m<sup>2</sup>の調査を実施した。このうち遺跡範囲確認調査の結果遺物量がごく少ないと判断された部分について重機を併用した遺構確認調査をおこない、平成4年度ではHライン・18ラインより北側の1,725m<sup>2</sup>、平成5年度ではIラインから北東側の862m<sup>2</sup>がその対象となった。以上の結果遺物包含層のすべてについて人力のみによる調査をおこなったのは調査区の南東寄り部分3,235m<sup>2</sup>となり、また調査必要範囲のうち南東部分2,500m<sup>2</sup>は未調査範囲として次年度以降に残されている（図IV-2下）。

### 2. 基本層序の区分

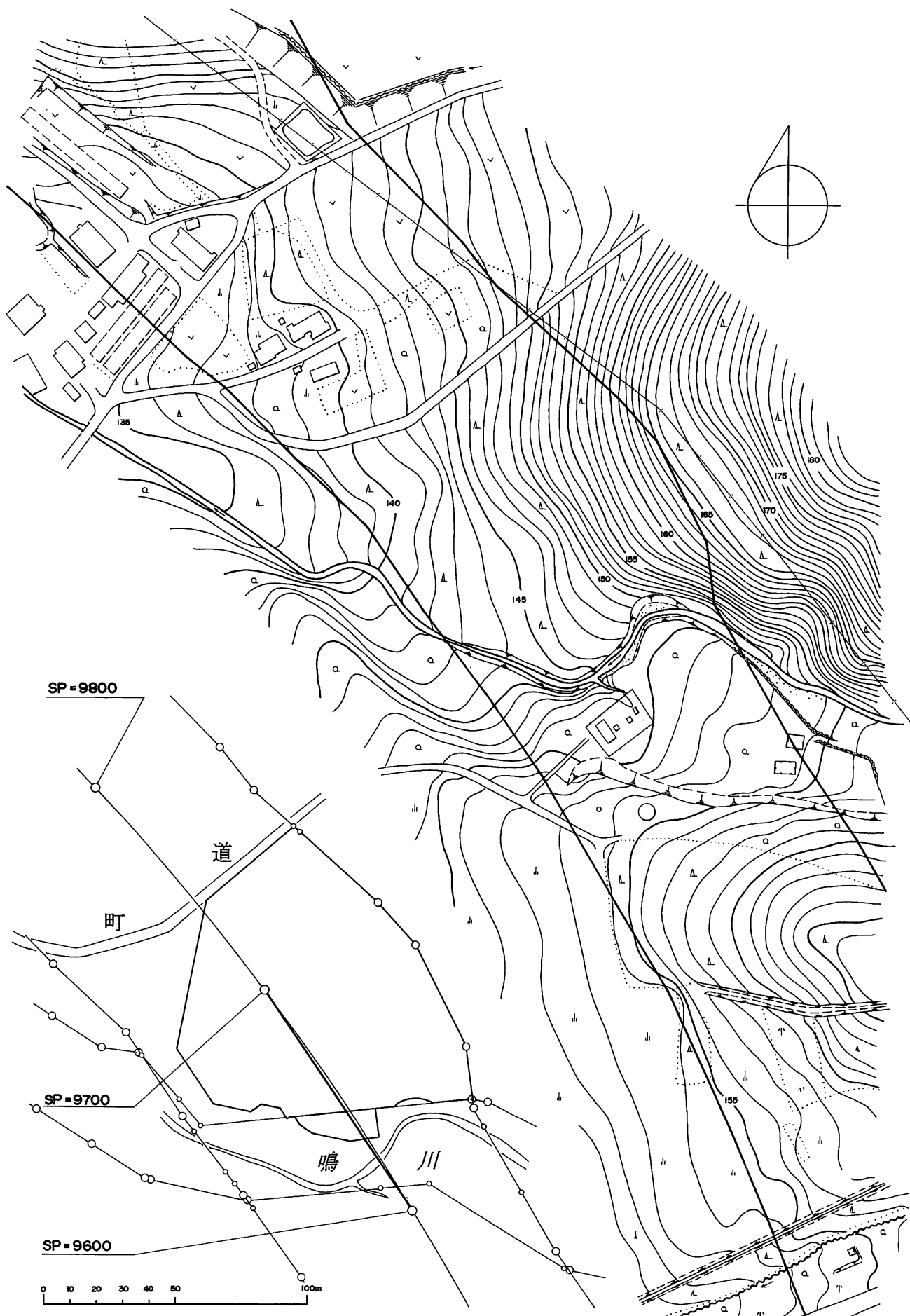
平成4年度には主に山地斜面の調査をおこない、七飯町教育委員会による近隣遺跡の調査結果を参考にしながら斜面部分の基本層序を次のように区分した（図IV-5左）。

I層：主に暗褐色（明度3・彩度2前後）粘土質シルト。

色調は一定せず場所によって礫・砂を含む。軟らかい。層厚も不定で最大50cm前後。下限は画然としている。断続的に広く分布する。植林・耕作による人為攪乱層である。

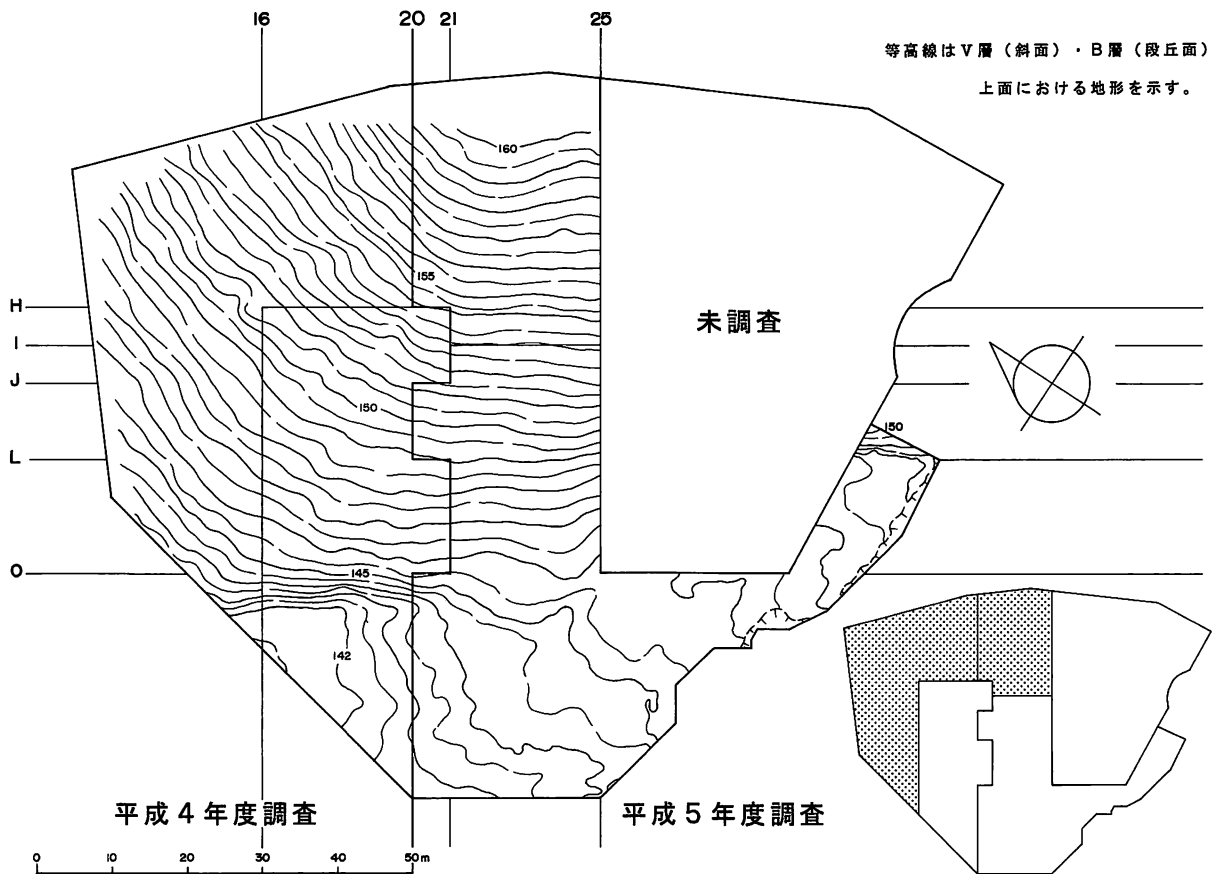
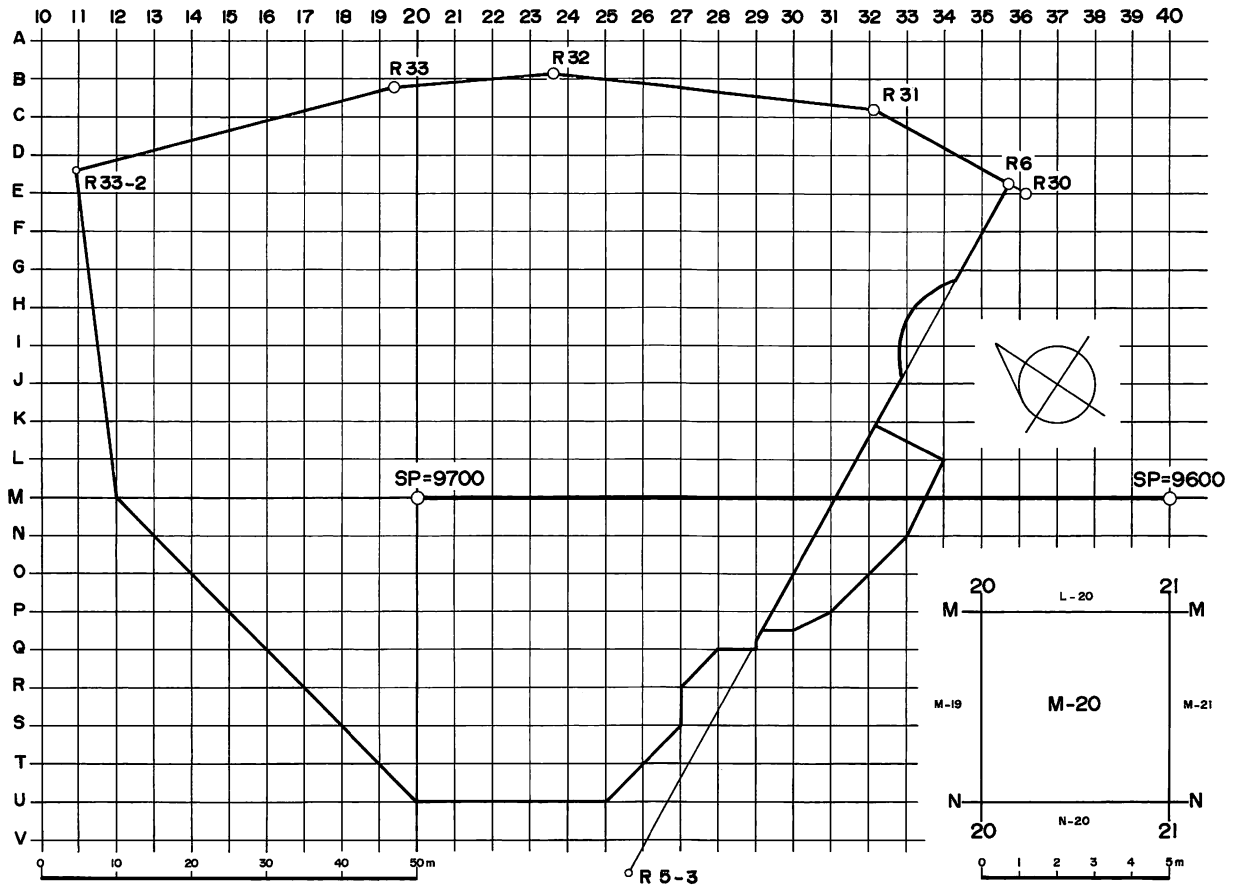
II層：暗褐色（明度3・彩度2前後）粘土質シルト。

軟らかい。下限は判然としている。層厚は約20～50cm。調査範囲の全域に連続的に



図IV-1 遺跡周辺の地形

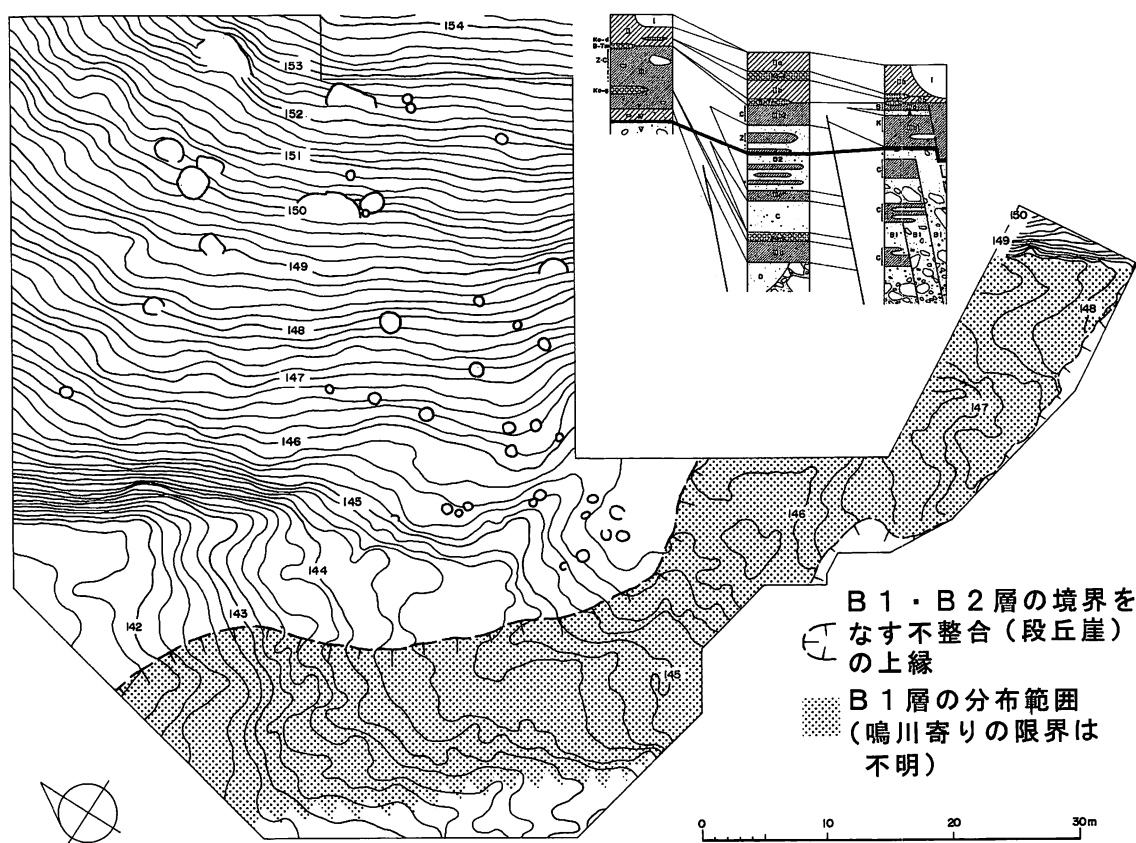
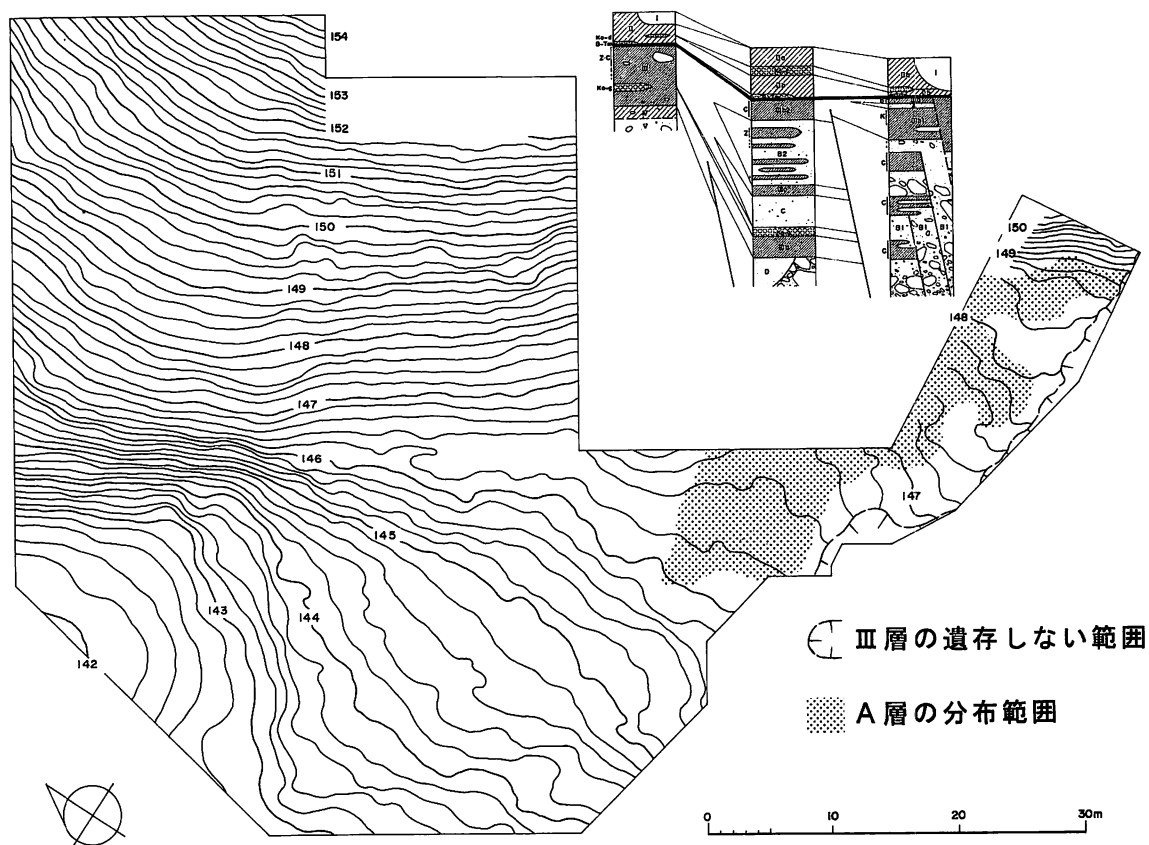
# IV 調査の方法



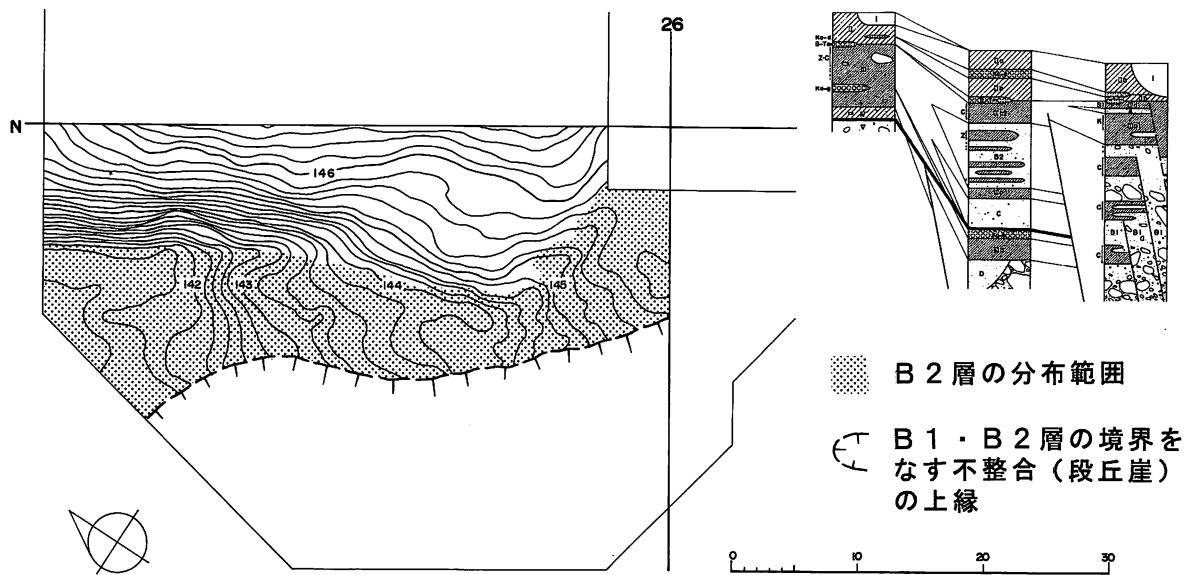
図IV-2 調査区の設定

重機を併用した遺構確認調査の範囲

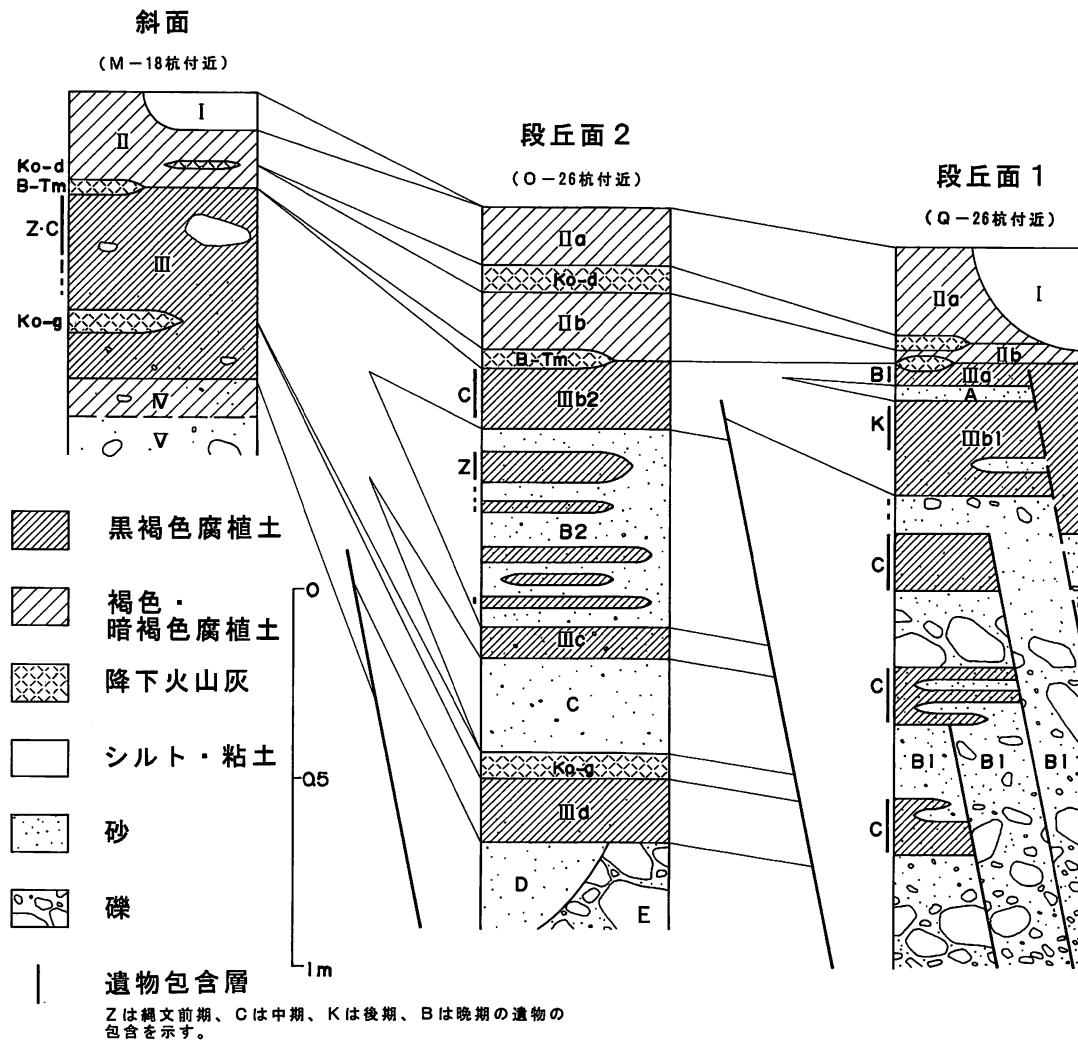




図IV-3 III層上面（上）およびV層・B層上面付近（下）における地形



図IV-4 V層・Ko-g層上面における地形



図IV-5 基本層序模式図

分布する。場所によって層の下部と下限に各1枚の火山灰層が認められ、これらの降下堆積物を主な起源とするものと考えられる。遺物の出土は確認されない。二枚の火山灰層が安定して分布する範囲ではII層は上位の火山灰より上のIIa層と下のIIb層とに区分できる。IIa層は暗褐色（明度3前後、彩度2弱）粘土質シルト。軟らかい。下限は判然としている。上位の火山灰層は灰白色（明度7・彩度2前後）砂質シルト。やや堅い。下限は画然としている。断続的に広く分布し、特に斜面の裾付近に厚い（最大20cm）堆積が見られる。野外での外見は1640年に下降した駒ヶ岳火山灰d層<sup>1</sup>に似ている。IIb層は暗褐色（明度3前後、彩度2強）粘土質シルトでIIa層より茶色っぽい。軟らかく、下限は判然としている。下位の火山灰層はにぶい黄橙色（明度5・彩度3前後）の粘土質シルト。やや堅い。層厚は最大約5cm。下限は画然としており、断続的に広く分布する。外見は10世紀頃降下した白頭山－苦小牧火山灰<sup>1</sup>に似る。

III層：黒褐色（明度・彩度とも2前後）細礫・砂混りシルト質粘土。

軟らかいが場所によってやや堅い。下限は曖昧である。層厚は約20～70cm。調査範囲の斜面全域に連続的に分布する。堆積の厚い場所では3～4層に細分できる場合がある（図IV－6）。また場所によって層の下部に火山灰層が認められる。この層はにぶい黄橙色（明度6・彩度3前後）の砂・シルト質粘土で、風化した軽石粒を多く含み、堅く、下限は画然としている。斜面の全域で断続的に、また斜面直下の平坦面では安定した堆積が見られ、層厚は約5～10cm。平成4年度の調査中にP－18杭付近で層序を観察した北海道教育大学函館分校の鴈澤好博氏はこの層を約6000年前に降下した駒ヶ岳火山灰g層に対比している。<sup>2</sup> III層はこのような降下堆積物と山地斜面の風化物とを母材とする土壤に、人為的に掘り揚げられた土が複合したものと考えられる。

#### 図IV－6の注記

巨礫・大礫は図中に描いているので、中礫以下の粒径の構成物について注記する。

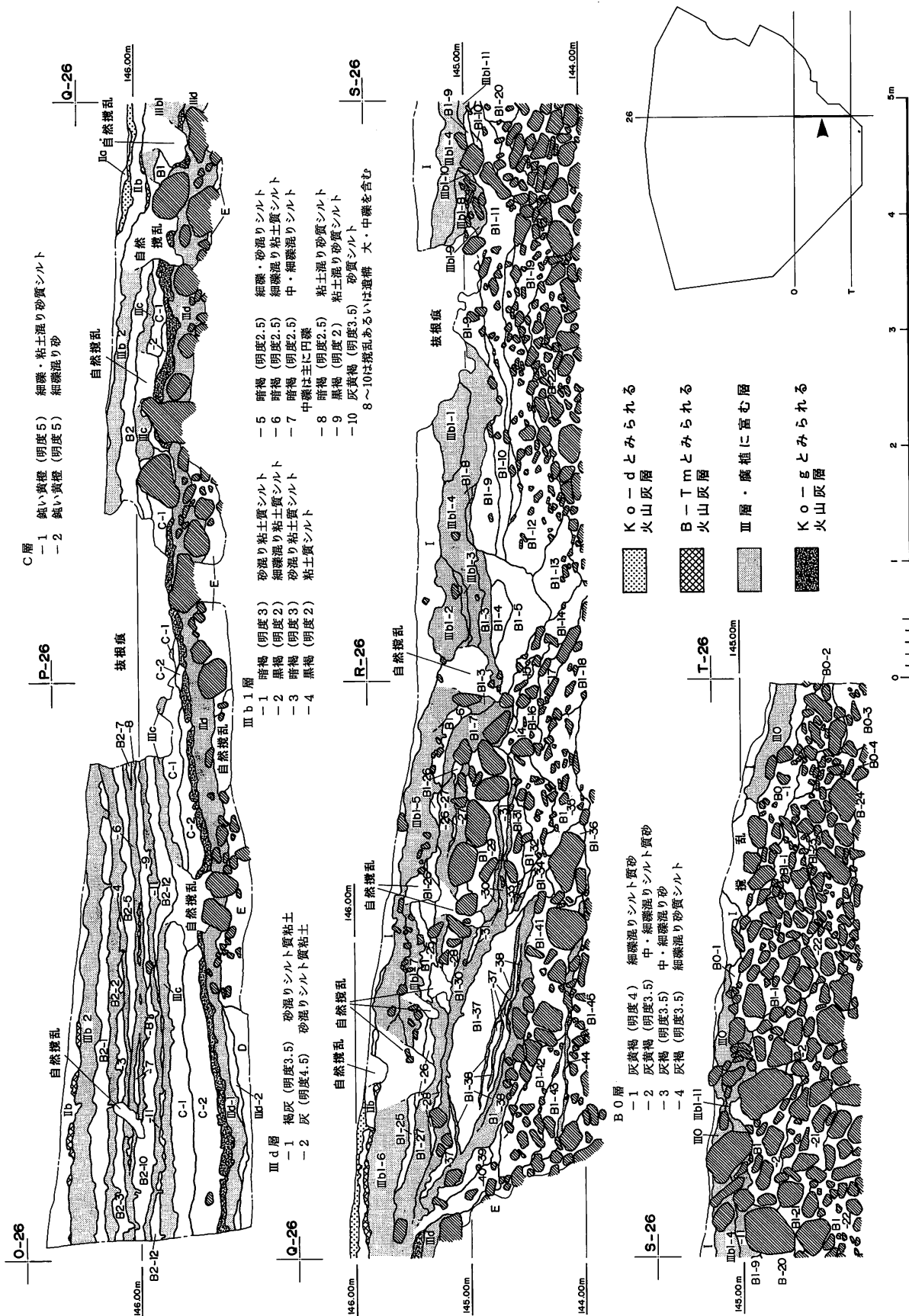
##### B1層

- －1 鈍い黄橙（明度4.5）シルト混り中・細礫質砂
- －2 灰黄褐（明度4）中・細礫混りシルト質砂
- －3 灰褐（明度3.5）砂混り粘土質シルト
- －4 鈍い黄橙（明度5）中・細礫混り砂
- －5 灰白（明度6）シルト質砂
- －6 灰黄褐（明度4.5）中・細礫混り砂
- －7 灰褐（明度3.5）細礫・粘土混り砂質シルト
- －8 暗褐（明度3）シルト質砂
- －9 灰黄褐（明度4）シルト混り砂～砂質シルト
- －10 鈍い黄橙（明度4）中・細礫混り砂
- －11 黄灰（明度4）中礫混り砂質細礫
- －12 褐灰（明度4.5）砂質中・細礫
- －13 褐灰（明度4.5）細礫・シルト混り砂
- －14 灰白（明度5）シルト質砂
- －15 褐灰（明度4.5）細礫混り砂
- －16 灰褐（明度4）細礫・粘土混り砂質シルト
- －17 褐灰（明度4.5）中・細礫混り砂
- －18 褐灰（明度4.5）細礫混り砂～粘土質シルト
- －19 灰黄褐（明度4）中礫混り細礫質砂
- －20 鈍い黄橙（明度5）中礫混り細礫・砂質シルト～粘土
- －21 褐灰（明度5）細礫混り砂
- －22 褐灰（明度4）細礫・シルト混り砂
- －23 灰黄褐（明度4.5）中・細礫混りシルト質砂
- －24 褐灰（明度4）中・細礫混り砂
- －25 鈍い黄橙（明度5）細礫混りシルト質砂
- －26 灰黄褐（明度5）シルト質砂
- －27 灰黄褐（明度3～4）粘土混り砂質シルト
- －28 灰黄褐（明度4.5）細礫混り砂質シルト

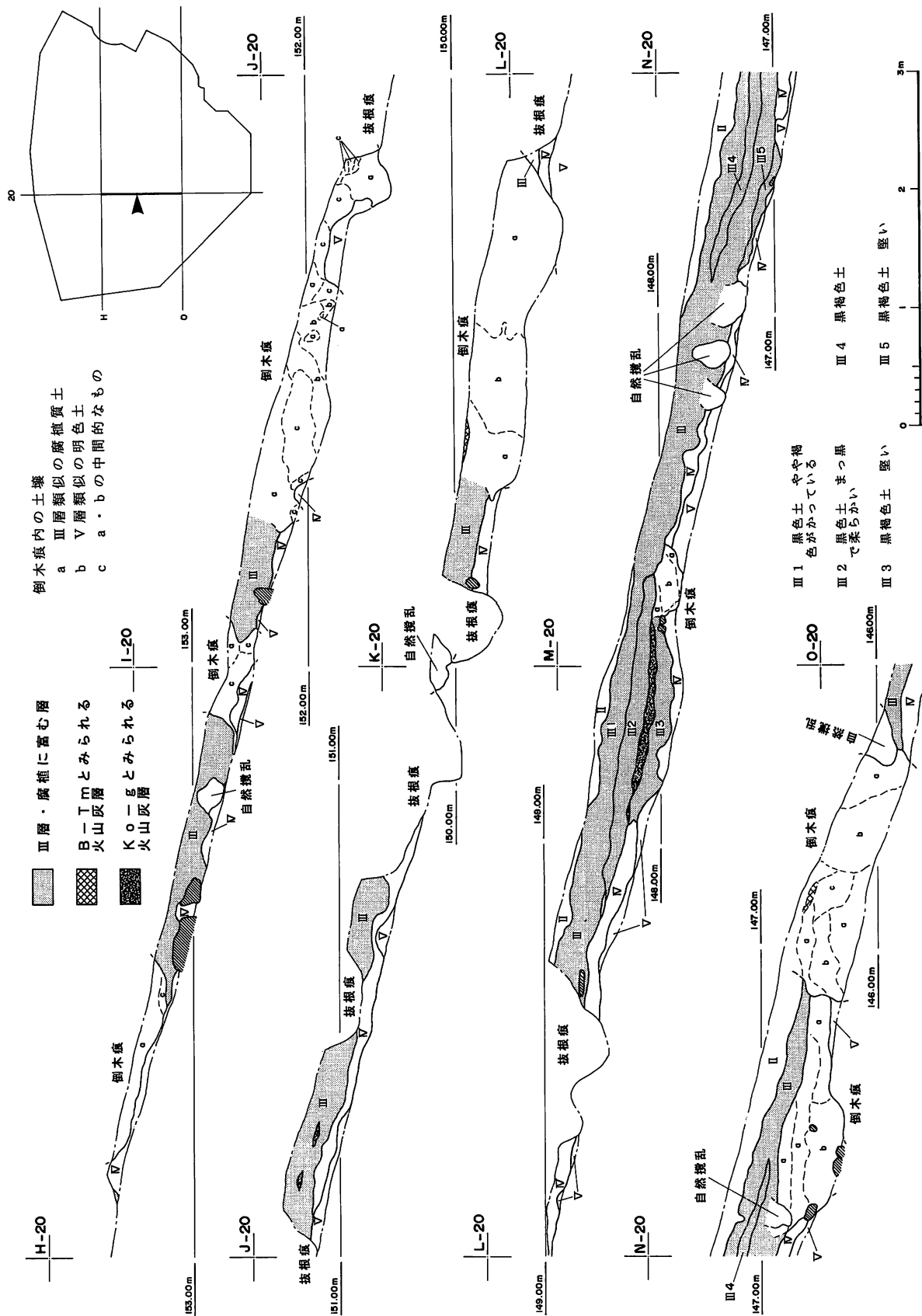
- －29 灰黄褐（明度4.5）中・細礫混りシルト質砂
- －30 暗褐（明度3）粘土混り砂質シルト
- －31 鈍い黄橙（明度5）シルト混り砂
- －32 灰黄褐（明度5）中・細礫混りシルト質砂
- －33 灰褐（明度3.5）細礫・砂混り粘土質シルト
- －34 灰黄褐（明度5）粘土混りシルト質砂
- －35 鈍い黄橙（明度5）中・細礫混り砂
- －36 灰黄褐（明度4）細礫・粘土混り砂質シルト
- －37 鈍い黄橙（明度5）細礫混りシルト質砂
- －38 暗褐灰（明度3.5）砂混り粘土質シルト
- －39 褐灰（明度3～4）細礫混り砂質シルト Ko-gを含む
- －40 灰黄褐（明度4）中・細礫混り砂質シルト～粘土
- －41 灰黄褐（明度4.5）中・細礫混り砂～砂質シルト
- －42 灰黄褐（明度4.5）中・細礫質砂
- －43 鈍い黄橙（明度5）シルト混り中・細礫質砂
- －44 暗赤褐（明度3.5）・黒褐色（明度2.5）細礫混り砂  
鉄分が集積し固結

##### B2層

- －1 灰黄褐（明度4）細礫混り砂質シルト
- －2 黒褐（明度2）砂混り粘土質シルト
- －3 鈍い黄橙（明度4～5）シルト質砂
- －4 灰黄褐（明度3.5）粘土混り砂質シルト
- －5 鈍い黄橙（明度4～5）シルト質砂
- －6 褐灰（明度3）砂混り粘土質シルト
- －7 鈍い黄橙（明度4～5）シルト質砂
- －8 褐灰（明度3.5）砂質シルト
- －9 灰黄褐（明度4）砂質シルト
- －10 鈍い黄橙（明度5～6）シルト混り砂
- －11 暗褐（明度3）砂混り粘土質シルト
- －12 灰黄（明度5）細礫混り砂

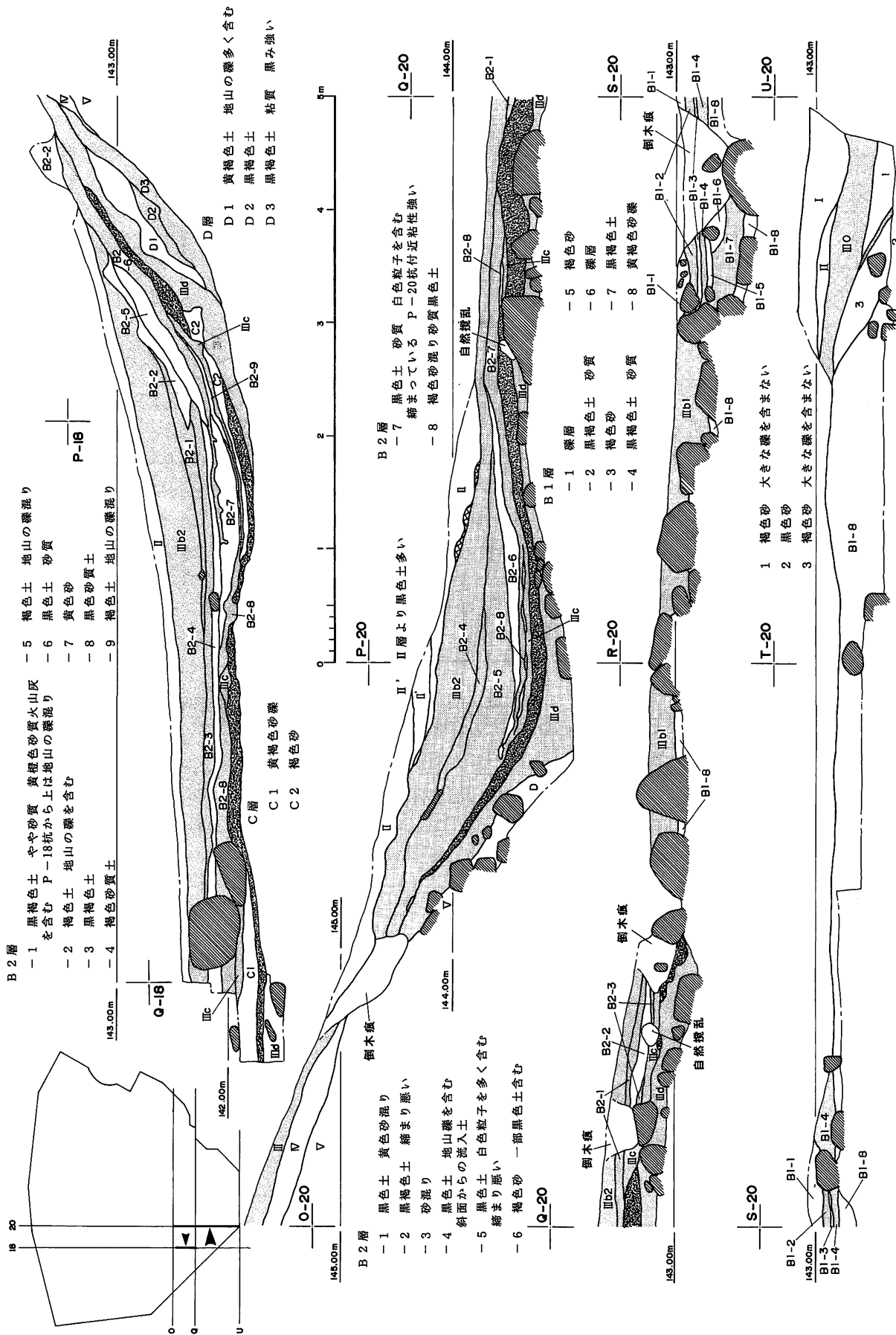


図IV-6 26ライン 土層断面図



図IV-7 20ライン 土層断面図





図IV-8 18ライン・20ライン 土層断面図

Ko-g 層の位置から考えて多くの部分が6000年前以降に形成されたように見える。縄文時代前期から縄文時代におよぶ遺物の包含層である。

IV層：暗褐色（明度4・彩度3前後）大～細礫・砂混りシルト質粘土。

やや堅い。上位のIII層との境界は曖昧，下位のV層との境界は漸移的であり，いわゆる漸移層。斜面の全域に連続的に分布し，層厚は約10～20cm。遺物は出土していない。

V層：にぶい橙色（明度6・彩度3前後）大～細礫・砂混りシルト質粘土。

堅い。主に山地の基盤となっている火成岩の風化物が堆積した層と考えられる。円磨が弱く風化の進んだ安山岩の礫が目立つ。斜面全域に分布し，確認はできないが2m以上の厚さがあるらしい。遺物は出土していない。

次いで平成5年度に扇状地の端にあたる緩斜面を広く調査した結果，斜面のIII層に対応する腐植土層は鳴川が形成した砂礫層の上に形成されていることが明らかになった。この砂礫層はIV・V層とは成因の異なるものであるのでアルファベットによる呼称を与え，A～D層に区分した。この砂礫層を精査した結果，上面では概ね連続した緩斜面（図IV-3上）と見えていたものが実際は年代の異なる堆積面の複合したもので，極めて小規模ではあるが鳴川の形成した段丘とみなしうることを，調査範囲では少なくとも2つの平坦面を区別できることがわかった（図IV-3下）。低い方の面を段丘面1，高い方の面を段丘面2と仮称する。段丘面1では段丘堆積物（B1層）の上に腐植土（III b1層）が形成され，さらに薄い砂層（A層）と腐植土（III a層）が覆っている。（図IV-5右）。

III a層：黒褐色（明度2.5・彩度1前後）粘土混り砂質シルト。

軟らかく，下限は判然としている。厚さ約5 cm，分布は26ラインから南東のA層の範囲に重なる。ほぼ縄文時代晩期の遺物のみが出土する。

A層：にぶい黄橙色（明度4・彩度3前後）のシルト質砂。

やや堅く，下限は画然としている。厚さ約5 cm，26ラインから南東に連続的に分布するが，河道寄りには及ばない（図IV-3上）。遺物は確認されない。

III b1層：黒褐色（明度2.5・彩度1前後）砂混り粘土質シルト。

場所によって礫を含み，また上下2～3層に細分できる場合がある（図IV-6）。軟らかく，下限は判然としている。段丘面1全体に連続して分布し，厚さ約20～40cm。縄文時代中・後期の遺物を含み，特にA層の分布する範囲からはほぼ後期の遺物のみが出土する。

B1層：段丘面2に近い部分では灰黄褐色からにぶい黄橙色（明度4～5・彩度2～3前後）の礫混り砂と，暗褐色から灰黄褐色（明度3.5・彩度2前後）の腐植の加わった砂質シルトとが層界の画然とした互層をなしているが，川寄りではほぼ純粋な砂礫層となる。

やや堅い層で，厚さは確認できた範囲で1.5m以上に達する。26ライン上では層中に2個所以上の不整合があり（図IV-6）R-26杭付近では不整合を境に上面に段差が見られる。年代差のある堆積物が複合しているのかも知れない。中期の遺物を少量含み，確認できる最も下位の腐植質土（図IV-6，B1-38層）から中期前葉の土器（図VI-30-140），またB1層上面付近では同中葉の土器が出土している。

段丘面2では段丘堆積物（B2層）の下位にやや性質の異なる堆積物（C・D層）があり，それぞれの上に腐植土（III b2・III c・III d層）が形成される。C層とIII d層の間に安定

した Ko-g 層が介在し、段丘面 1 との区別を容易にしている。(図 IV-5 中)。B2 層から上で遺物の出土を確認している。

IIIb2 層：黒褐色（明度 2・彩度 2 前後）粘土質シルト。

軟らかく、下限は判然としている。約 20～30cm の厚さで段丘面 2 全体に連続的に分布する。縄文時代前期から続縄文時代までの遺物を包含し、特に縄文時代中期の遺物が目立つ。

B2 層：灰黄褐色からにぶい黄橙色（明度 4～5・彩度 2～3 前後）のやや堅い砂・シルト層と、暗褐色から褐灰色（明度 3・彩度 2 前後）の腐植の加わった軟らかい粘土質シルト層とが各 5～10cm の厚さで層界の画然とした互層をなし、総厚は約 60cm に達するが、薄い部分では 10cm 足らずの暗褐色（明度 3・彩度 2 前後）砂混り粘土質シルト層となる。

砂・シルト層はかなり淘汰の良いもので、比較的穏やかな増水による堆積を考えさせる。腐植質土の部分から縄文時代前期後葉の遺物が出土する。

IIIc 層：黒褐色（明度 3・彩度 1 前後）の細礫・砂混り粘土。

IIIb2 層や B2 層中の腐植質土に比べて青黒い印象を与える。やや堅く下限は画然としている。約 5～10cm の厚さで連続的に段丘面 2 全体に分布。場所によって炭化材が出土する。

C 層：にぶい橙色から灰褐色（明度 5・彩度 2 前後）の細礫・粘土混り砂～シルト層。

堅い。画然とした下限は Ko-g 層に接し、厚さ約 10～40cm で連続的に段丘面 2 全体に分布している。構成や色調は V 層に近く、淘汰が悪い。

IIId 層：褐灰色か暗褐色（明度 3～4 前後、彩度 2 強）の砂混りシルト質粘土。

やや堅く、下限は画然としている。約 20cm の厚さで段丘面 2 全体に安定した分布をみせる。上面は Ko-g 層に覆われる。

D 層：にぶい橙色（明度 5・彩度 2 前後）のシルト質砂。

軟らかい。斜面直下の凹地（図 IV-4 上）に 50cm を超える厚さ（下限は未確認）で堆積する。淘汰が悪く、C 層とともに山地斜面の土が再堆積したように見える。締まりが悪いのは崖錐のような成因によるかと思われる。

D 層より下位については調査を加えていないが、P・O ライン付近に分布する巨礫はおそらく D 層以前の堆積物的一部分であると思われる。この巨礫の堆積は確認できる範囲ではそれほど厚くなく（2m 未満）、この下位に淘汰の悪い大～細礫混りの砂質粘土が認められる（図 IV-6、E 層）。これは斜面の V 層に似た外見を有するが、II 章 1 節で述べたように斜面の延長そのものではないと思われる。

B1 層が段丘化した以後も調査区の一部は氾濫原となった可能性があり、縄文時代の遺物がまったく出土しない調査区南西縁の部分はそのような新しい時期の平坦面ではないかと考えられる。T ライン付近に見られる砂礫層上面の段差は段丘面 1 とこの新しい平坦面の間の段丘崖である可能性がある（図 IV-3 下）。この段差より川寄りの砂礫層とその上に形成された腐植土を便宜的に B0 層、III0 層と呼ぶことにした。

III0 層：黒褐色（明度 2.5・彩度 2 前後）細礫・砂混り粘土質シルト。

やや鬆で下限は判然としている。厚さ約 20～50cm で連続的に分布する。

B0 層：灰褐色（明度 4・彩度 2 前後）の礫混りシルト質砂で巨礫・大礫も多い。

概して堅く、厚さはかなりあると思われるが精査していない。

以上の段丘がB-Tm・Ko-d火山灰ないしII層に整合的に覆われていることからみて、調査範囲の地形は最近の1000年近くにわたって大きく変化していないものと思われる。ただし調査範囲の南端ではおそらくKo-d降下以後と思われる砂礫層が段丘面を1切っているのが見られた(図IV-3上)。(西脇対名夫)

### 3. 包含層の調査

包含層については、バックホウにより表土の除去と伐根を行って後、5×5mの調査区(グリッド)を単位にしてIII層の掘り下げを実施した。斜面部についてはIII層を分層できなかったが、平坦面では砂層が間層として入るため、分層して調査を進めている。

出土した遺物は、5×5mの調査区を単位にして、層ごとにまとめて取り上げている。1個体ないし複数の土器がまとめて出土した場合は、出土状況・出土位置を実測図・写真で記録し一括土器1から29までの番号を付した。また、石器、剥片、礫が集中していた部分は、一括石器1から3と呼称した。このうち剥片の集中地点(一括石器1)では、50cm角に区切り土壌ごとに取り上げ、水洗して遺物を採取した。

遺構確認調査範囲については、バックホウにより表土の除去と伐根を行い、続けて火山灰を除去し、黒色土を掘り下げた。この間遺物・遺構を検出した場合は、その時点で掘り下げを中止し、手作業による発掘調査に切り替えた。その他は、IV層まで掘り下げて、基盤層であるV層上面で清掃作業をして遺構確認調査を行った。

通常の発掘調査を行った範囲では、100分の1の縮尺でIII層上面とV層上面の地形図を作成した。さらにIII層中に焼土や搬入礫が群在していた地区では、それらの検出面でも地形作図を作成したことがある。遺構確認調査範囲についてはV層上面の地形図のみとした。また遺跡の基本層序を観察するために20・26ライン、さらに一部では18ラインで土層断面図を作成した。この断面は写真でも記録をおこない、また他の地点では必要に応じて地形・調査状況などを撮影した。

### 4. 遺構の調査

遺構は調査区名との混同を防ぐため、遺跡名の頭文字を付して住居跡をNH1~5、土壌をNP1~43、焼土をNF1~71、配石遺構をNS-1として表示した(ただし本報告ではNをはずしている)。

遺構のうち住居跡や土壌については、輪郭を想定した段階で、斜面方向土層を観察できるよう適宜四分法・二分法による掘り下げを行った。焼土は斜面方向に半割して土層を記録した。なお遺構の土層は、基本層序とは別にアラビア数字により層名を付けた。

遺構平面図及び断面図は縮尺20分の1で作成し、調査の進行に応じて写真を撮影した。平面図はグリッド交点杭をもとに1m方眼の割り付けをおこない、これを基準に実測した。遺構覆土及び周辺包含層の遺物は、必要なものについて出土状況図(縮尺10分の1)の作成や平面位置・標高を記録した。また住居跡の炉や焼土など、炭化種子や骨片の検出が期待される遺構内の土壌を採取して、浮遊選別(フローテーション)を実施した。<sup>3</sup>

(越田賢一郎)

### 註

1. 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 1984 「テフラと日本考古学 一考古学研究と関係するテフラのカタログ」(古文化財編集委員会編『古文化財の自然科学的研究』同朋舎 pp.865-928)
2. 鷹澤好博 1993 「七飯町鳴川扇状地調査報告」(石本省三編『国立療養所裏遺跡』七飯町教育委員会 pp.34-44)
3. 椿坂恭代 1989「フローテーションの方法」(『Project Seeds News』No.1 プロジェクトシーズ pp.6-7)

## V 遺 構

### 1. 遺構の概要

2年度にわたる調査で確認された遺構は住居跡5軒、土壇43基、埋設土器1基、炉・焼土78ヵ所で、全て縄文時代か続縄文時代のものとみられる。これらの遺構の覆土から出土した遺物は1,306点で、出土遺物総数の3%強を占めるに過ぎない。

住居跡：底面が平坦でその長径が約2m（成人が横になれる長さ）以上あり、柱穴もしくは炉跡の認められる掘り込みを住居跡とした。これらは丘陵斜面の比較的高い位置（標高149～153m前後）に構築され、いずれも斜面下手の壁面は残りが良くない。底面の長径が約4m以上あるもの（H-1・3・4）と3m未満の小型のもの（H-2・5）とがある。大型の3軒と小型の1軒（H-5）は方形か隅丸方形の掘り方をもつものらしいが、残る1軒（H-2）は円形の掘り方で他とは異なる。H-2～4では柱穴と炉跡が確認され、H-3・4は4本支柱でさらに一端に近い主軸上に掘り込みを有する「サイベ沢型住居跡<sup>1</sup>」に近いものであると考えられる。この2軒では完形に近いⅢ群A類土器が出土し、他の3軒についても覆土・付近の包含層の土器の多数をⅢ群A類が占めている。住居跡相互の切り合いはないが、H-2・4が土壇A類を切っており、H-4は覆土中に焼土が形成されている。H-4では底面付近で建材の一部かと思われる炭化材が出土し、これを14C年代測定に供したところ3920～4280y. B. P. 前後（KSU-2313～2315）の結果が報告されている（Ⅶ章2節）。炭化材の樹種についても同定をおこなった（Ⅶ章4節）。

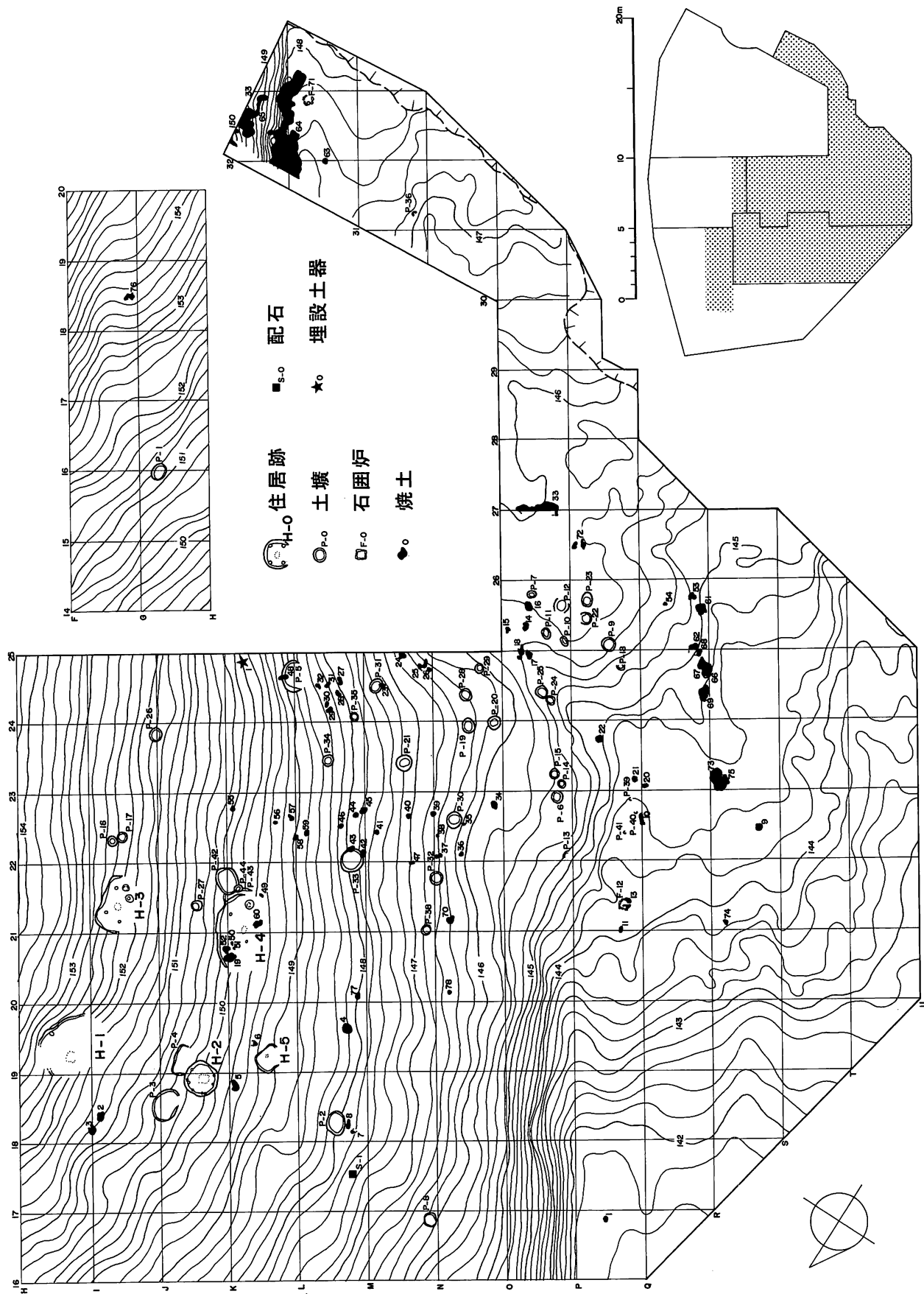
土壇：住居跡の条件を満たさない掘り込みを土壇とした。土壇は斜面のかなり上部から段丘面2まで広く分布しているが、縄文時代晩期の土器が出土した一例（P-36）を除くと段丘面1から川寄りでは確認できない。底面が平坦でその長径が約2mかそれ以上あるものを土壇A類とし、同じく平坦な底面をもち確認面で径約1m程度、ほぼ円形のものを土壇B類と呼んだ。A類は7基、B類は26基が確認され、ともに出土遺物は多くないが土器が出土した例ではほとんどがⅢ群A類を交えている。B類では意図的に入れたものとみられる礫が出土する場合も多いが、そのあり方は一様でない。A類では2基の重複やⅢ群A類土器の時期の住居跡に切られている例がある。B類はしばしば2～4基が隣接して作られているが、互いに、また他の土壇や住居跡と切り合う例がない。A・B類とも覆土の上に焼土が形成される場合がある。以上の2類以外の土壇には層位的に縄文時代前期と思われるものがある。しかしこれらは遺構であるかどうかやや疑わしい部分もある。

配石遺構：人為的に礫が配置され、周囲に掘り込みを確認できない場合これを配石遺構とした。遺構分布の西北端に近い所で1基確認された。時期は不明である。

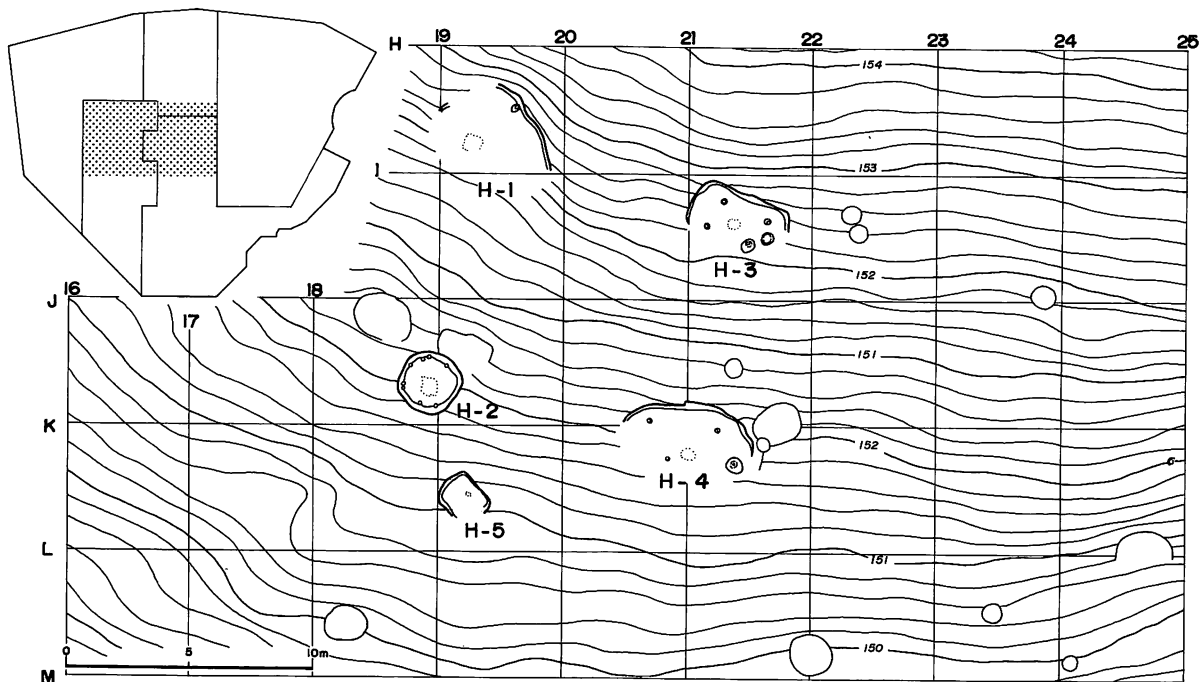
埋設土器：完形に近い土器をあまり大きくない掘り込みの中に固定したと考えられるものを埋設土器とした。縄文時代前期末の埋設土器を斜面のやや上部で1基確認した。

炉・焼土：周囲に人為的な掘り込みの確認できない焼け跡のうち、火の燃える範囲を囲ってあるものを炉とし、囲いのわからないものを焼土とした。これらの焼け跡は斜面のかなり上部から段丘面1まで広い範囲で確認され、段丘面に位置するものでは縄文時代前期・中期・中期後葉～後期・晩期以降と層位的に区別することができる。斜面の焼土も竪穴住居跡の覆土中で確認される例などほぼ縄文時代中期のものと判断できる場合がある。斜面





図V-1 遺構の位置



等高線はV層上面の地形を示す。住居跡・土壌以外の遺構は省略。

図V-2 住居跡の分布

の南東端ではかなり規模の大きい焼土の一部が確認されたが(F-64・65)、これらは最近函館市中野A遺跡で注意された広大な面積をもつ焼土に近い性格のものであるかも知れない。なお炉・焼土の大多数から土壌を採取して浮遊選別を実施しており、炭化材を主とする植物遺体や微細な剥片等が得られている(表V-1)。食用となりうる植物の種子が確認されたものもあり、特に住居跡H-4の覆土中に形成された焼土(F-60)からは1点のみながら栽培された可能性のあるヒエ属種子が見出された(VII章3節)。

#### 註

1. 高橋正勝 1974 「日の浜型住居址」(『北海道考古学』第10輯 pp. 77-88)
2. (財)北海道埋蔵文化財センター編 1993 『函館市中野A遺跡(II)』 同センター  
花岡正光 1993 「『銭亀沢層』は火山灰か?」(『郷土と科学』No. 106 pp. 21-25)

## 2. 住居跡

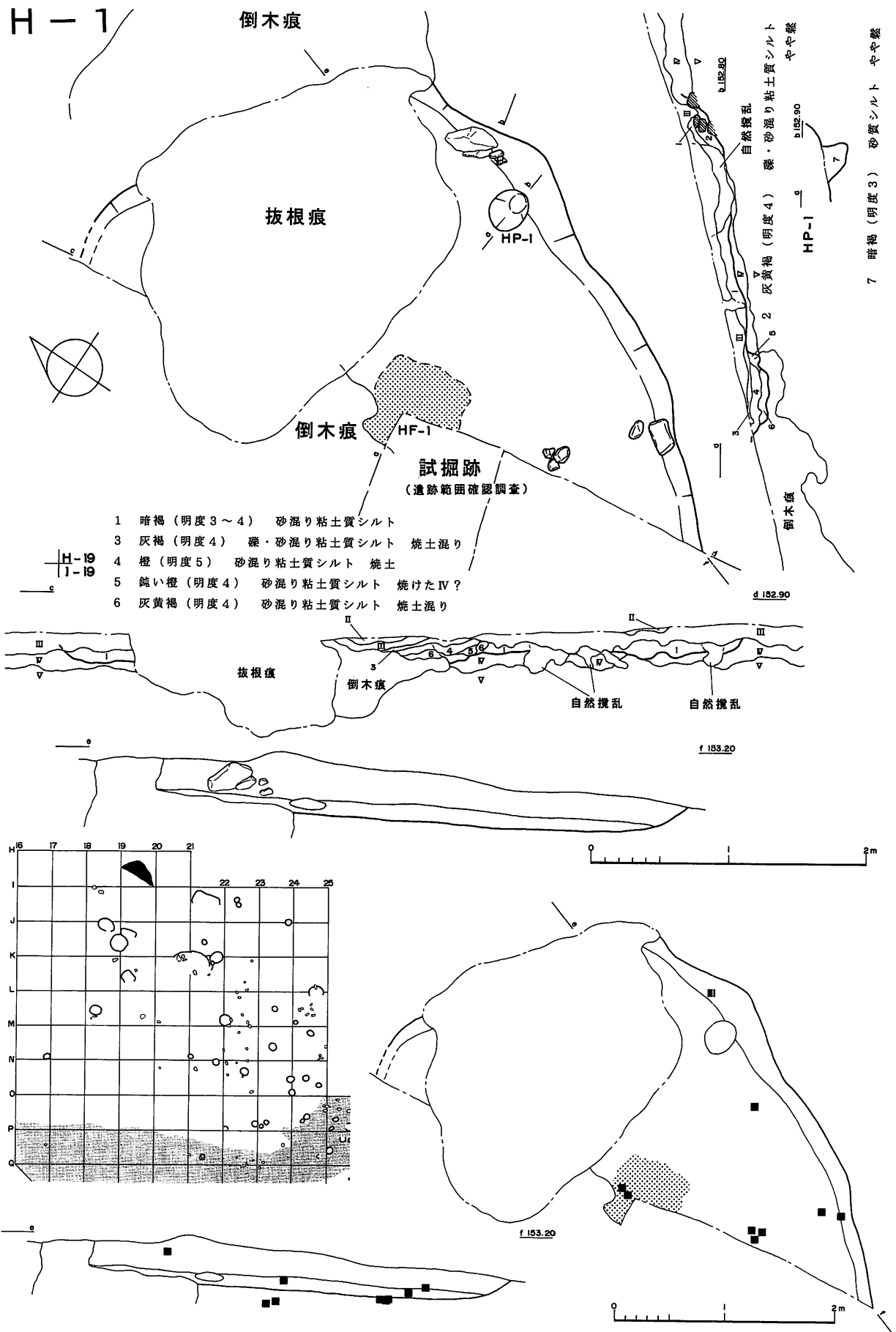
H-1 (図V-3・4, 図版8)

位置 H-19・20

規模  $(5.0) \times (2.4) / (4.6) \times (2.1) / (0.2)$

特徴 III層の調査中に焼土が発見され、その層位を確認するため傍らの遺跡範囲確認調査時の試掘坑の壁面を清掃した結果、それがIV層を掘り込んだ遺構の底面にある炉跡であることがわかった。試掘坑壁面に沿って設定したトレンチから上手では断面の土層を頼りに輪郭を追ったが、斜面下手では遺構底面の広がりをつまえることができなかった。斜面下手の輪郭を確認できず、また倒木痕・試掘坑・抜根による攪乱が大きかったため規模は不明であるが、かなり直線的に走る斜面上手側の輪郭から考えて、方形か隅丸方形の平面形を有する可能性がある。

覆土はやや明色ではあるが上位のIII層と大差がなく、薄い(1層)。壁際では壁面から崩



図V-3 住居跡H-1

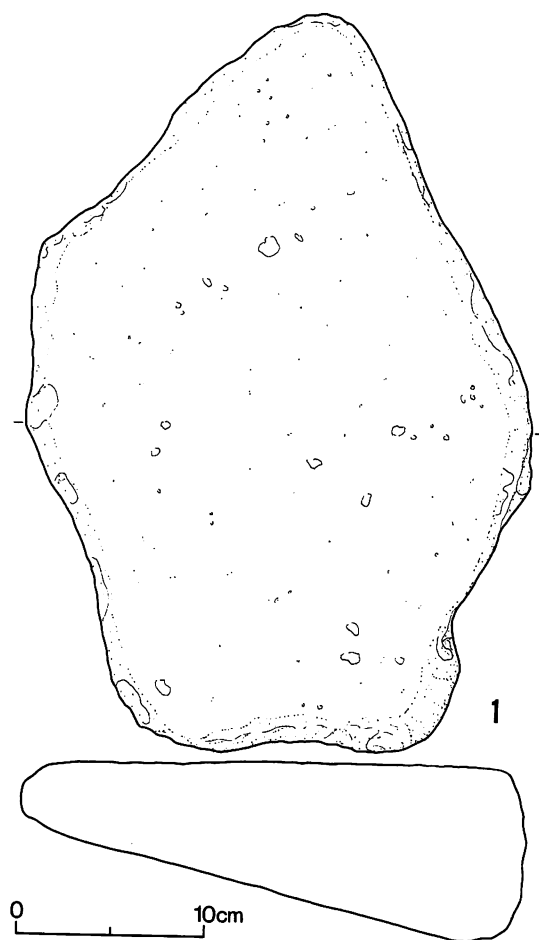
れたらしい土が見られる(2層)。底面は細かい凹凸が多く、斜面の傾斜に沿って少し傾いている。壁面の立ち上がりは小さく、V層の礫が露出している部分もあり、かなり崩れているらしい。東側の壁に接して小さい落ち込みが確認されたが(HP-1)確実に人為的なものとは言えない。炉跡は地床炉で概ね遺構の中央にあるらしく、深さ15cm程度まで焼土が混っている。

時期は決定できない。付近の包含層の土器はほとんどⅢ群A類であったが、掘り込みは浅く柱穴も不明瞭で、縄文時代中期の竪穴住居跡として典型的なものではない。

遺物 発掘中に確認した遺物は台石・使用痕のある礫各1点と礫4点で、特に集中して出土することはなかった。

HF-1の焼土を採取して浮遊選別をおこなった結果、炭化物以外に頁岩の剝片15点が確認された。この遺跡の焼土としてはむしろ剝片の数が多い方

で、付近で剝片石器の加工がおこなわれた可能性がある。図V-4-1は台石とされたもの。抜根痕から出土したが本来覆土中にあったと考えられる。平坦な節理面をもつ安山岩の礫で、敲打痕は顕著でない。



図V-4 H-1の台石

(西脇対名夫)

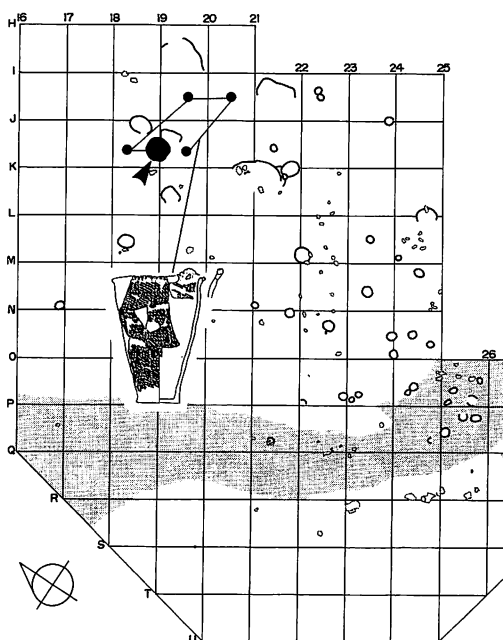
#### H-2 (図V-5・6, 図版9)

位置 J-18・19

規模  $2.6 \times 2.5 / 2.1 \times 2.1 / 0.3$

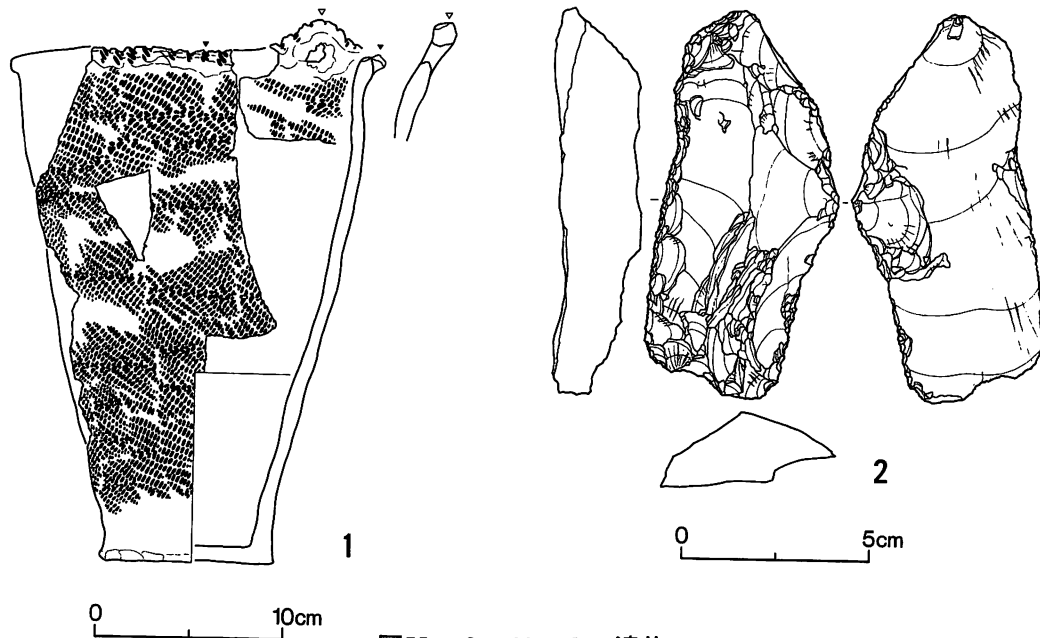
特徴 Ⅲ層上位で焼土(F-5)が検出されたため、土層観察用のあぜを残して斜面の傾斜の方向にトレンチを入れた。トレンチ内の地山の上面では焼土が検出され、あぜには竪穴住居跡の壁の立ち上がりと思われるものがみられた。そこで、このトレンチに直交してもう1本のトレンチを設定し、床面や壁の立ち上がりを確認した後に遺構全体の掘り下げを行った。なお、F-5はH-2の壁の外側にあり、直接関係はないことが確認された。壁はⅢ層中から掘り込まれ、立ち上がりはゆるやかである。平面形は円形である。斜面の上方ではP-4を切っている。覆土は暗褐色土が主である。覆土中には二次的に動いたと思われる焼土も検出された。壁の立ち上がり付近には黄褐色土が堆積している。床面には凹凸があり、地山に含まれる礫が露出した部分もある。焼土は住居跡の中央部にあり、住居の大きさのわりに径が大きい。柱穴は斜面の上方の壁面や壁の立ち上がり付近から5本検出され、いずれも住居の中央に向かって傾いていた。

P - 4



图V-5 住居跡H-2





図V-6 H-2の遺物

遺物 出土した遺物は少ない。覆土からⅢ群A類土器（1）、スクレイパー（2）等が出土している。1は釣り耳状の突起をもつもの。器面には結束縄文が施されている。口唇には縄の押圧による刻み目がある。2はスクレイパー。厚手の縦長剥片を素材として、背面左縁に急角度の刃部を作る。腹面左縁の突出部には少し深い細部調整が入る。背面の先行剝離面には光沢がある。あるいは礫面なのかも知れないが、使用痕である可能性もある。

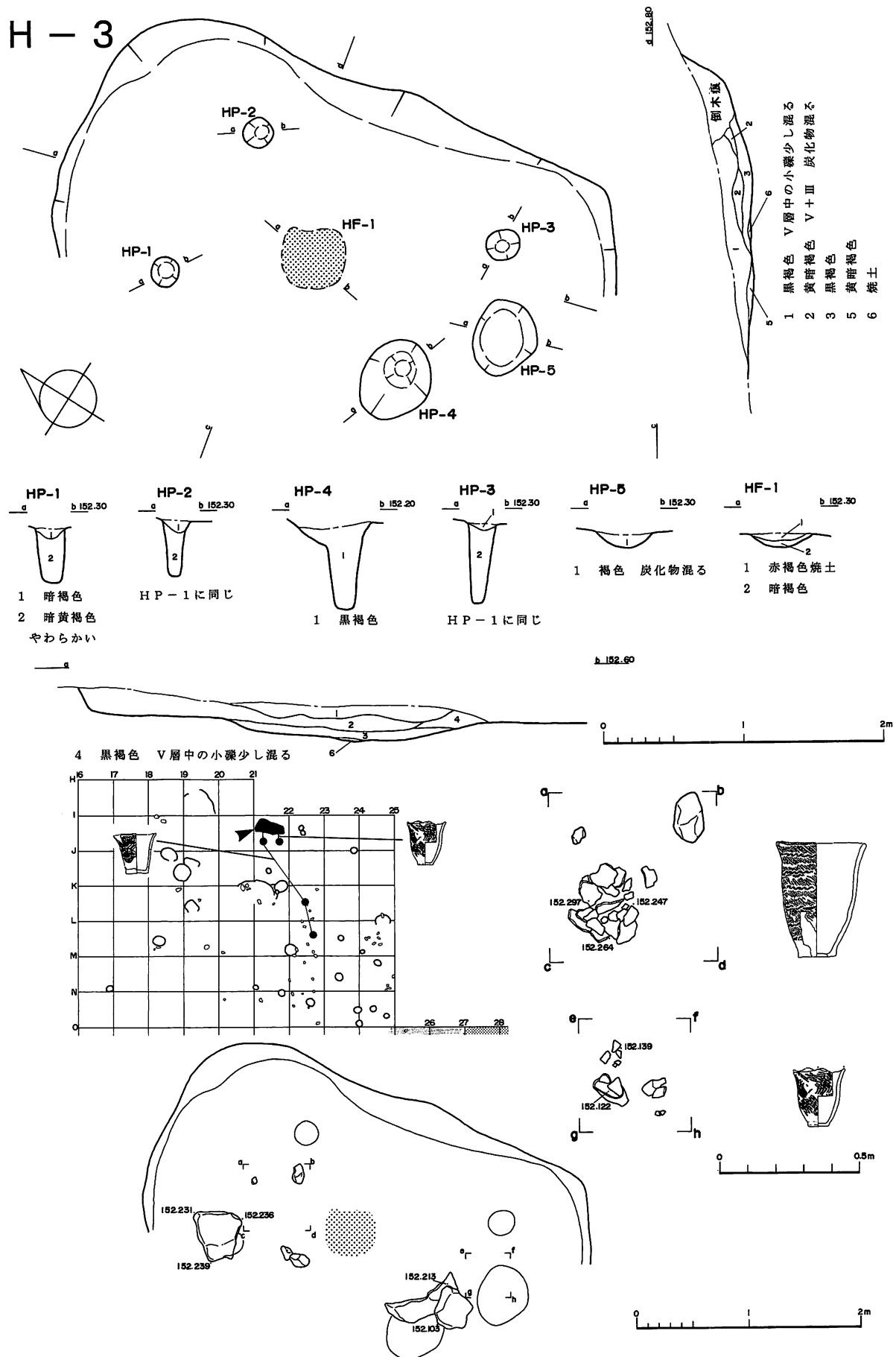
### H-3（図-V-7・8，図版10）

位置 I-21

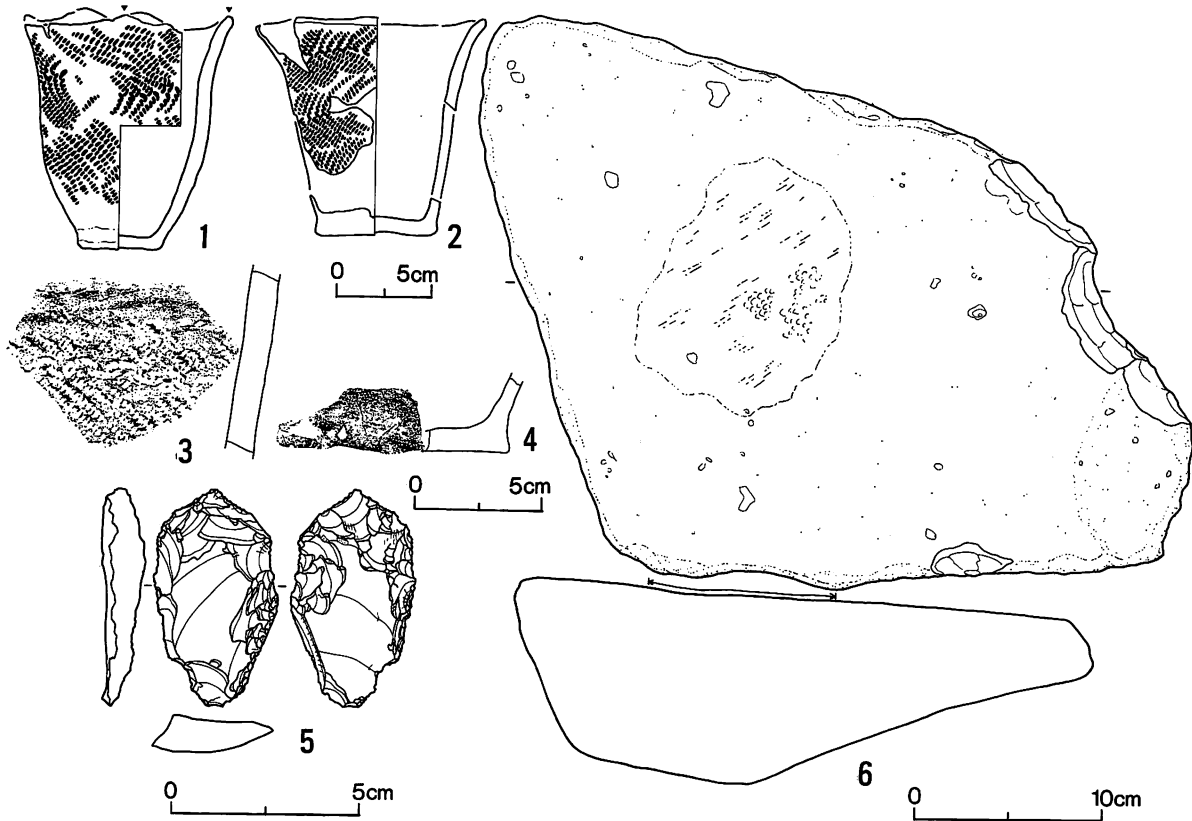
規模  $(4.0) \times (2.0) / (3.9) \times (1.9) / (0.2)$

特徴 V層上面で黒褐色土の落ち込みを検出した。当初、H-21区にある大きな風倒木痕の一部かと思われたが、黒褐色土（覆土1層）から2個体分の土器（1，図VI-27-119）がつぶれた状態で出土したのでトレンチを掘って調査したところ、遺構であることがわかった。V層上面まで掘り下げていたため斜面下方の壁は確認できなかったが、平面形は隅丸方形に近いと推定される。壁は急に立ち上がる。床面には凹凸があり、中央部には焼土が1か所ある。柱穴は4本検出された（HP-1～4）。ほかに浅いピットが1基ある（HP-5）。覆土から上述の2個体の土器のほか石皿様の大形礫が出土していることから、住居廃絶後に窪地を利用していた可能性もある。

遺物 床面からⅢ群A類土器（2）、石皿（6）、覆土からⅢ群A類土器（1・3・4）、スクレイパー（5）等が出土している。2は平縁の小形土器。床及び床直上から出土したものと周囲の包含層から出土したものが接合した。器面には結束羽状縄文が施されている。1は4か所の低い山形突起がある小形土器。結束羽状縄文が施されている。3は胴部の小片。包含層から同一個体の資料が出土している（図VI-189a・b）。4は底部。5はスクレイパー。腹面両縁と背面の右側にやや深い細部調整が入る。石鏃のような両面加工石器の未製品かもしれない。6は安山岩の板状礫を素材とする石皿。一方の側縁に近い狭い範囲が弱く凹んだ滑らかなすり面となっている。この部分にはまた敲打による浅い凹みが複合しており、すり面がこれを切っているらしい。



図V-7 住居跡H-3



図V-8 H-3の遺物

H-4 (図V-9～12, 図版10)

位置 J-20・21, K-20・21

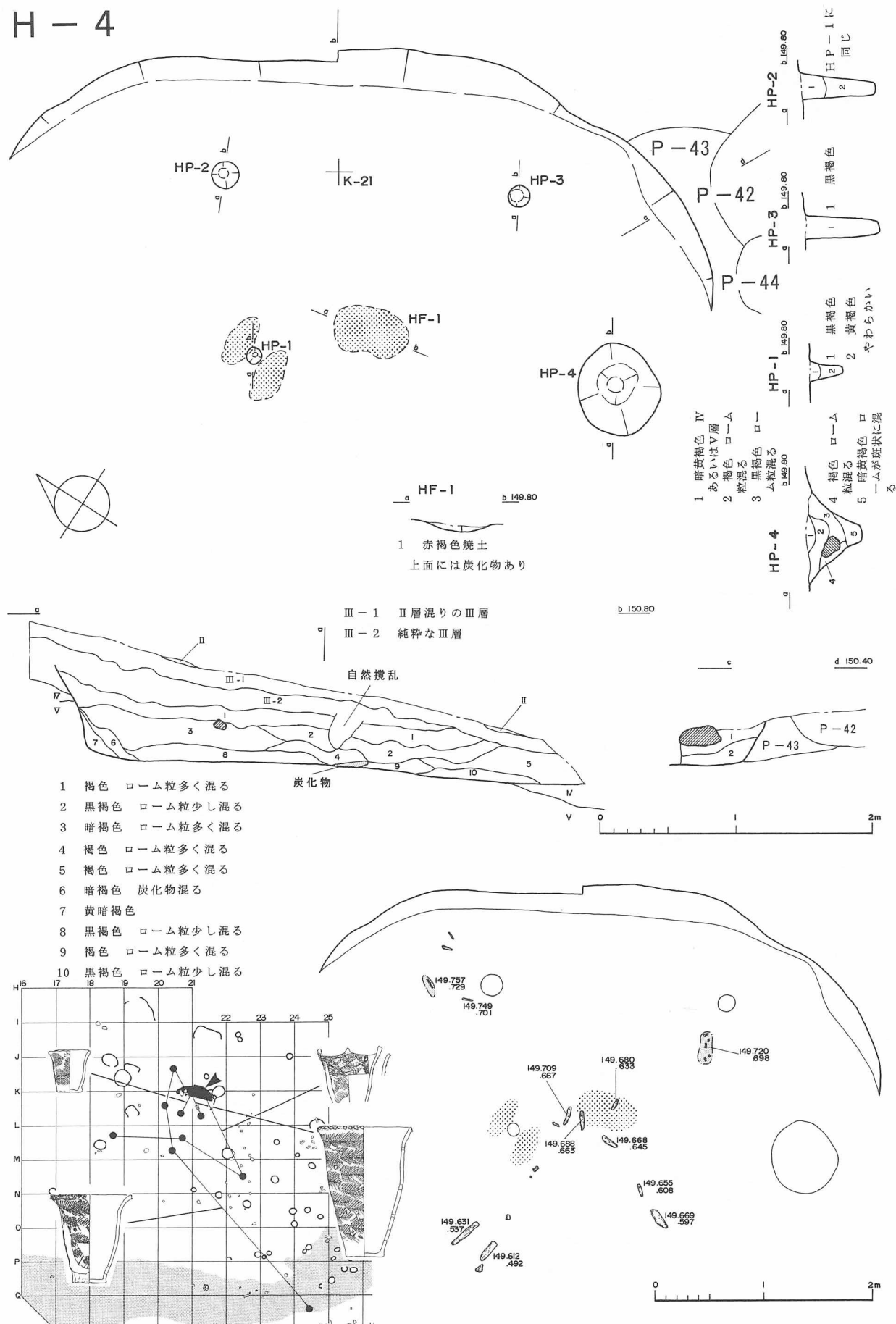
規模  $(5.3) \times (2.7) / (5.2) \times (2.5) / (0.5)$

特徴 J-20区をIV層まで掘り下げた時点で褐色土の落ち込みを認め、斜面に直交するベルトを残して調査を進めた。斜面上方では壁を検出できたが、斜面下方ではすでにIV層まで掘り下げていたこと、風倒木による攪乱が大きかったことから全容を把握するに至らなかった。掘り込み面はIII層の中程であり、壁は急に立ち上がる。斜面上方では床はV層を掘り込んで作られており、全体に固くしまっている。床面中央部には炉跡と考えられる焼土が1か所ある(HF-1)。柱穴は4本確認できた。柱穴の配置や壁を確認できた部分から、平面形はH-3と同じく隅丸方形に近いと推定される。南東側ではP-43を切っている。覆土の下部では床面からやや浮いた状態で炭化材が散在し、ほぼ同じレベルで焼土の薄層が部分的に認められた。堅穴の南半では床面から覆土の中部にかけて石皿や石皿様の大形の礫がまとまって出土し、F-60とした焼土が床面近くで検出された。この焼土は厚さが3～5 cm程あるが、堅穴の床は焼けていない。

なお、床面近くから出土した炭化材については樹種同定及びC14年代測定を行っている(Ⅶ章2・4節)。

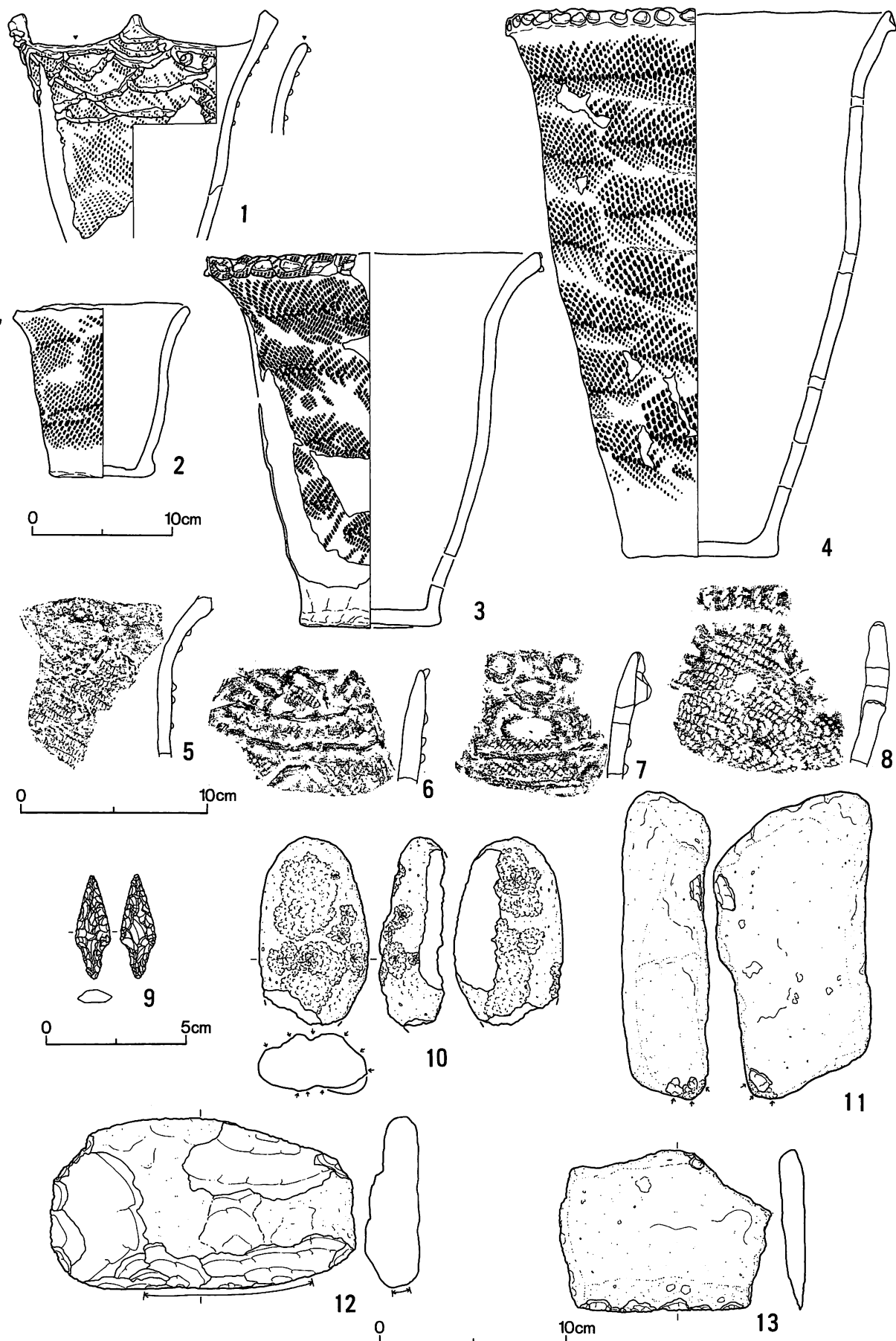
遺物 床面から石皿(14・15)、柱穴(H P-4)からⅢ群A類土器が出土している。覆土からⅢ群A類土器(1～4・6～8)、石鏃(9)、たたき石(10・11)、扁平打製石器(12・13)等が出土している。土器のうち2, 4は覆土1層の上部でそれぞれつぶれた状態で出

# H-4



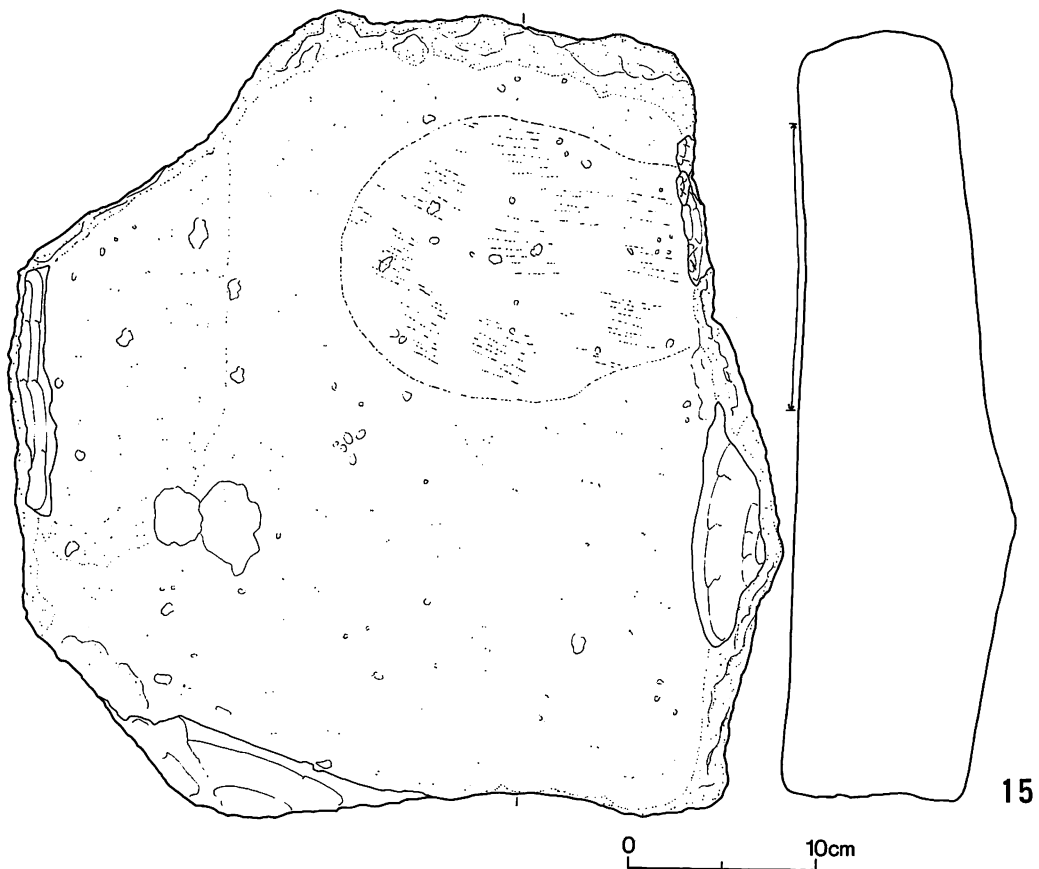
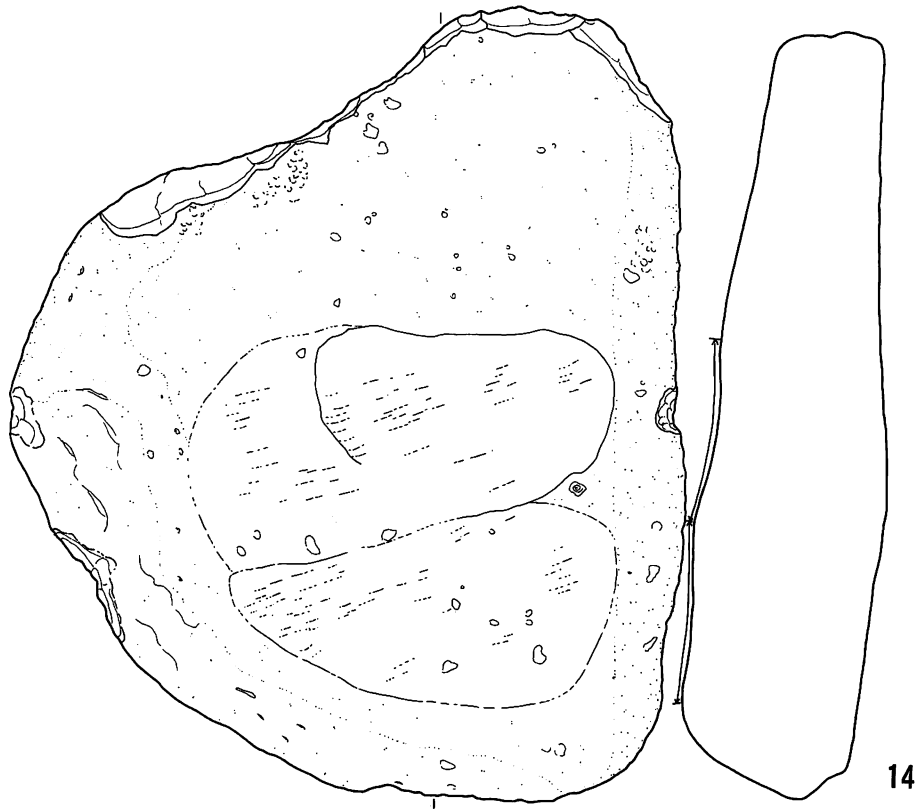
図V-9 住居跡H-4





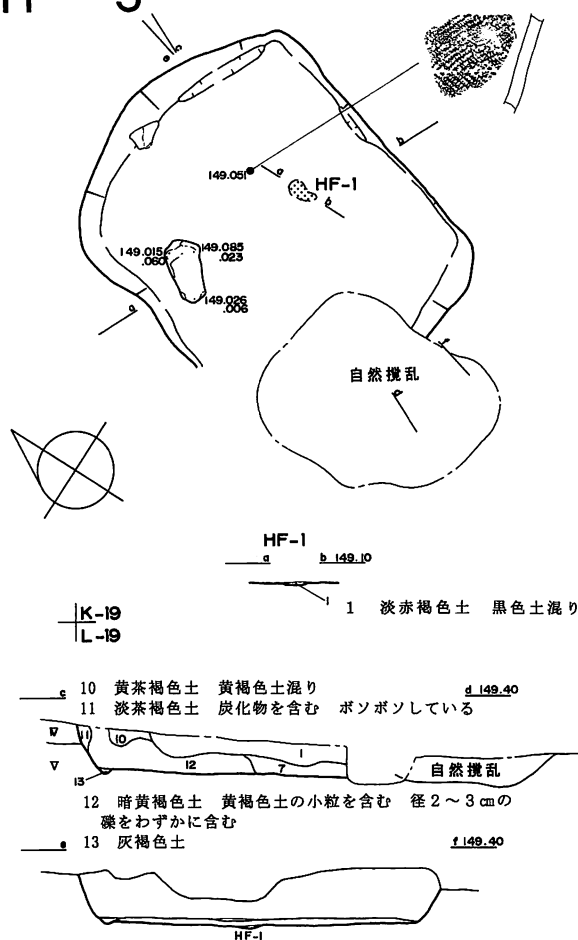
図V-11 H-4の遺物(1)



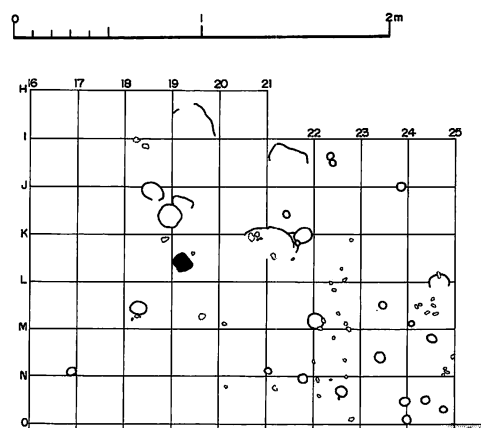


図V-12 H-4の遺物(2)

H-5



- 1 黒褐色土 黄褐色土の小粒を含む
- 2 暗黄茶褐色土 黄褐色土の小粒を含む
- 3 暗黄褐色土 ボンボンしている 黄褐色土の小粒を含む
- 4 暗茶褐色土 黄褐色土混り
- 5 黒色土 黄褐色土の小粒をわずかに含む ややボンボンしている
- 6 暗黄褐色土 黄褐色土混り
- 7 暗茶褐色土 径2~3cmの礫(軽石?亜角礫)を多量に含む
- 8 暗黄茶褐色土 黒色土混り 黄褐色土の小粒を含む ややボンボンしている
- 9 暗黄茶褐色土 黒色土混り



図V-13 住居跡H-5

H-5 (図V-13・14, 図版12)

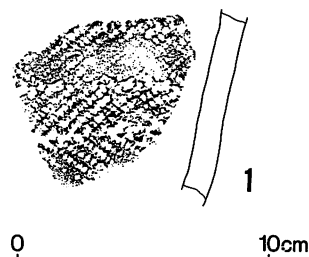
位置 K-19

規模  $(2.0) \times 1.6 / (1.7) \times 1.5 / 0.2$

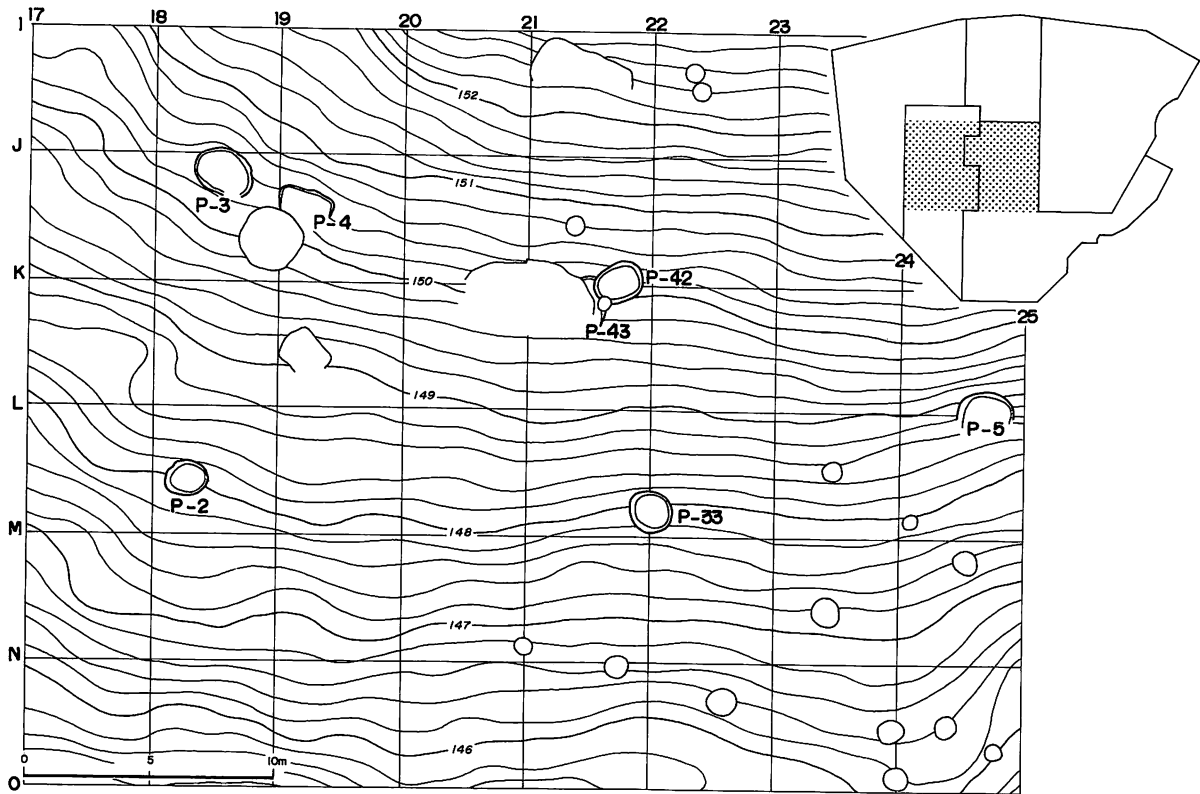
特徴 IV層の下部で暗茶褐色土の落ち込みがみられたことから確認された。小形の竪穴である。南西側は攪乱されているが、平面形は方形と推定される。壁の立ち上がりは急である。床は地山を15cmほど掘りこんでつくられており、ほぼ平坦である。北東壁と東壁の立ち上がり付近には深さ15cm 足らずの浅い溝が一部みられる。床面の中央よりもやや東側からは焼土がわずかに検出された。柱穴は検出されなかった。覆土はまじりが多く、特にいわゆる床面直上の土は暗褐色土と黄褐色土のまじったきたない土だった。南東隅の覆土は黒味が強く、炭化物が含まれていた。

遺物 覆土下部から土器の小片がややまとまって出土したほか、台石様の礫も出土している。1は覆土出土のⅢ群A類土器。結束羽状縄文の施された胴部片である。

(工藤 研治)



図V-14 H-5の土器



等高線はV層上面の地形を示す。住居跡・土壌以外の遺構は省略。

図V-15 土壌A類の分布

### 3. 土 壌

#### 1) 土壌A類 (図V-14~18, 図版13)

底面が平坦でその長径が約2 m かそれ以上ある比較的大型のものを土壌A類とし、P-2~5・33・42・43の7基をこれに含めた。斜面にのみ分布し、標高148~151m と住居跡と同じか、わずかに低い位置に見られる。P-3と4が隣接し、P-42と43が切り合っているが、全体としては間隔を置いて散在するように見える (図V-14)。

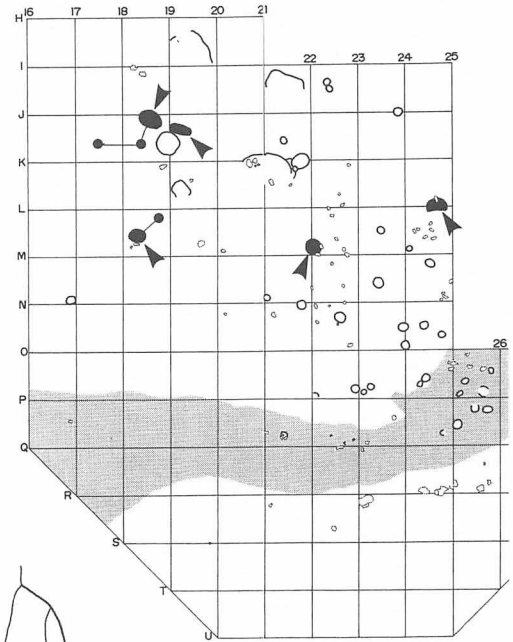
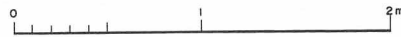
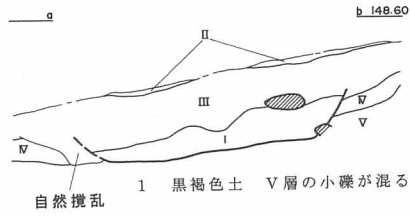
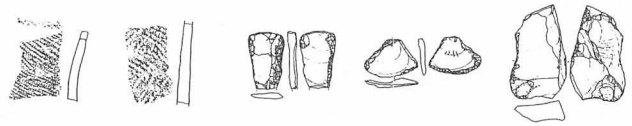
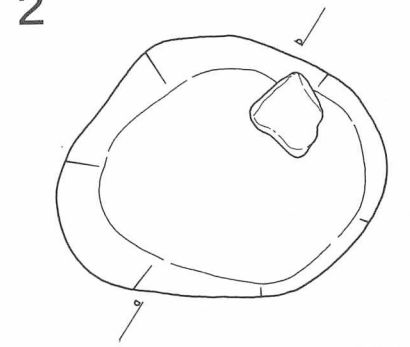
確認面での規模は1.8×1.4から2.4×1.8、底面では1.4×1.2から2.2×1.6m を測り、いずれもP-2が最小、P-3が最大である。確認面からの深さは0.2から0.5m でやはりP-2が最小、P-5・33が最も深い。平面形は楕円形 (P-2・3) か隅丸方形 (P-5・42・43) で、P-33のみは長軸のはっきりしない不整な円形を呈する。他の6基では長軸が等高線に平行する場合が多いように見えるが、P-43のみは等高線と直交する長軸をもつ可能性がある。

いずれもⅢ層下部からⅣ層上面で暗色の落ち込みとして確認された。多くは底面付近や壁際に壁から崩れたらしい明色の土が見られ、それ以上の大部分は腐植に富む覆土で埋まっている。P-33・42・43では覆土の中にも褐色の土が認められ、人為的に掘り揚げた土が入り込んでいる可能性がある。しかし意図的に埋めたことの確実なものはない。

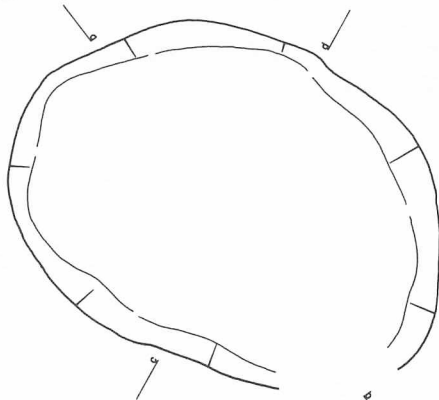
底面は平坦でV層まで掘り込まれ、斜面の傾斜に沿っていくらか傾いているものがある。壁際の崩落土を考慮すると概ね垂直な壁をもっていたと考えられるが、P-2では最初から緩い傾斜の壁面であった可能性がある。

底面で出土した遺物はほとんどなく、多くは覆土中に散在していた。P-5では覆土の

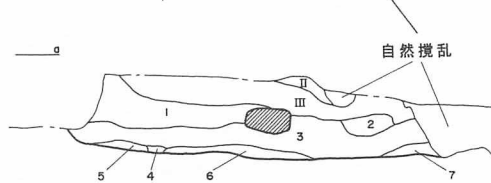
P - 2



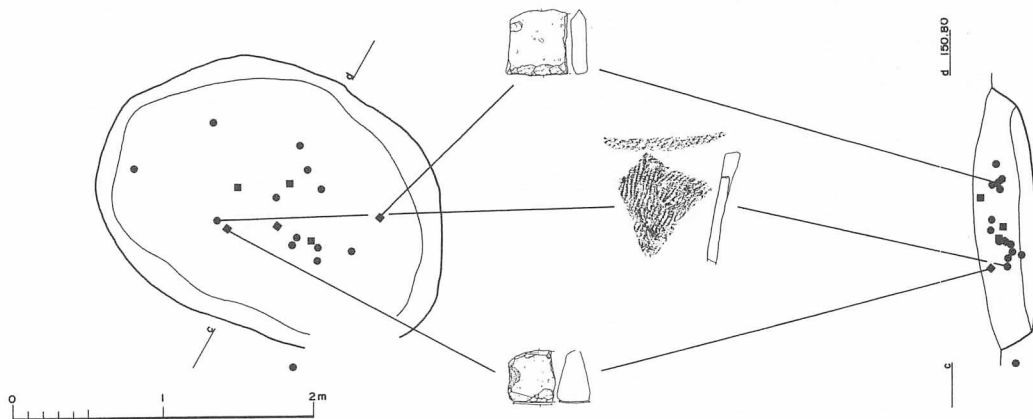
P - 3



d 150.80

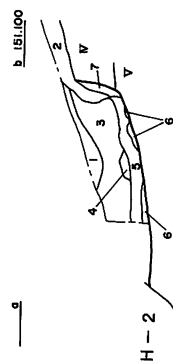
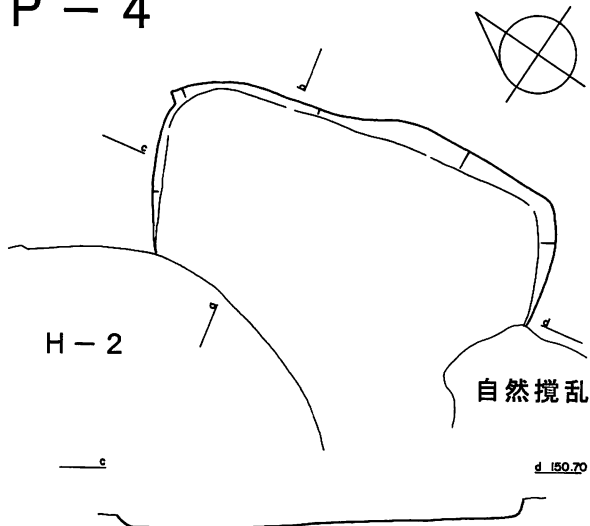


- 1 黒褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 暗褐色土 黄褐色土の小粒をわずかに含む
- 4 暗褐色土 黄褐色土の小粒を含む
- 5 黄褐色土 ややボロボロする
- 6 暗黄褐色土 暗茶褐色土混り
- 7 暗黄茶褐色土 ボソボソしている



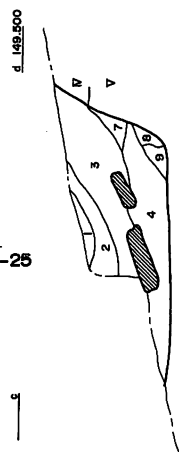
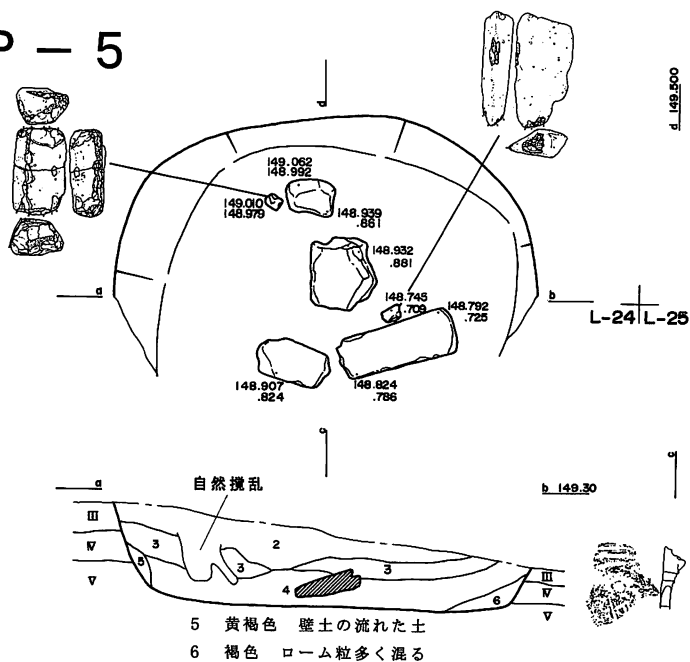
図V-16 土壌A類 P-2・P-3

P-4



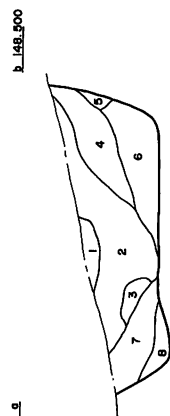
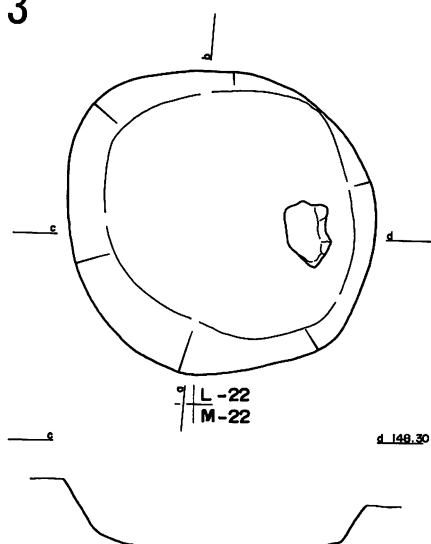
- 1 暗茶褐色土
- 2 暗黄茶褐色土 暗褐色土をわずかに含む
- 3 暗褐色土 灰白色火山灰、黄褐色土の小粒をわずかに含む 木の根の影響?
- 4 暗黄茶褐色土 暗褐色土混り
- 5 暗黄褐色土 黒褐色土混じり ボンボンしている
- 6 暗黄褐色土 砂質
- 7 暗黄褐色土 暗茶褐色土混り IV層?

P-5



- 1 黒褐色 ローム粒混る
- 2 暗褐色 ローム粒・焼土粒混る
- 3 黒褐色 ローム粒少し混る
- 4 暗褐色 ローム粒多く混る 炭化物少し混る
- 7 褐色 ローム粒多く混る
- 8 黄暗褐色 壁のV層の崩落・流れ込み
- 9 褐色 ローム粒多く混る

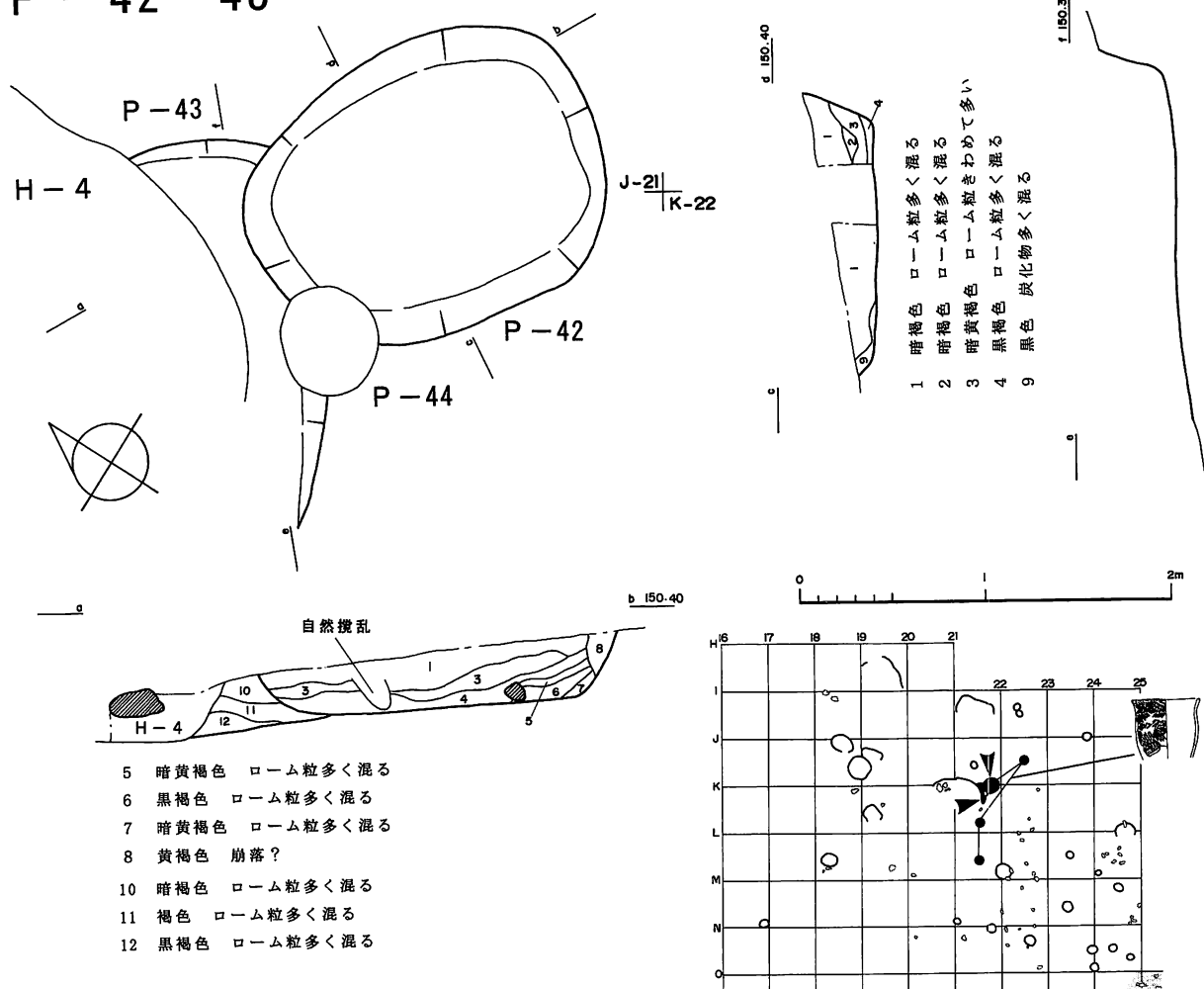
P-33



- 1 暗褐色 ローム粒混る
- 2 黒色 ローム粒ほとんどない
- 3 黒色 ローム粒少し混る 木の根?
- 4 黒褐色
- 5 暗黄褐色 汚れたローム 壁の崩落
- 6 暗褐色 ローム粒混る
- 7 褐色 ローム粒混る IV層の土
- 8 暗褐色 ローム粒多く混る

図V-17 土壌A類 P-4・P-5・P-33

# P-42・43



図V-18 土壌A類 P-42・43

中ほどに板状の礫や礫石器の出土する面が認められた（図V-16）。覆土の浮遊選別・水洗はおこなっていないので微細遺物については不明である。各遺構の出土遺物の内訳・点数は表V-2に示した。

覆土出土の土器から考えて、Ⅲ群A類土器の時期かそれ以降に形成されたものが多いと思われるが、剥片だけが出土したP-43はそれ以前に遡る可能性もある。やや規模が小さく壁面の立ち上がりも明瞭でないP-2は遺構でない疑いも残る。土壌A類の性格は不明であるが、類似の遺構は町内の遺跡で普通に確認され、「堅穴遺構」として報告されたものが多い。

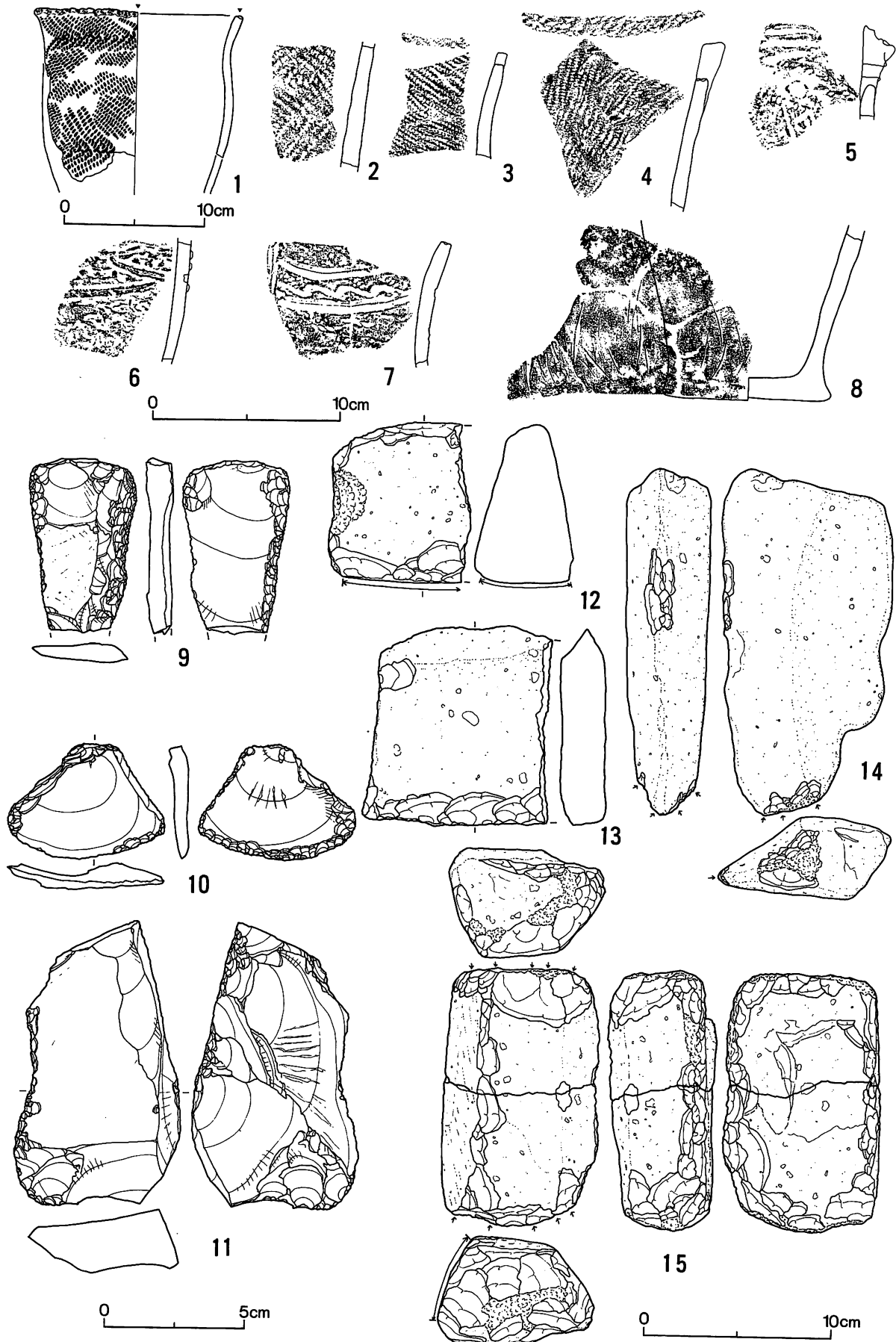
土壌A類出土の遺物（図V-19）

土器（1～8）

掲載した資料はいずれもⅢ群A類土器である。遺構ごとに記載する。

P-2（2～4）：2は結束羽状縄文の施された胴部破片。3は斜行縄文の施された突起部に近い口縁部。口唇に縄文が施されている。4は山形の突起部。器面には斜行縄文が施され、口唇には2段の縄を押捺した刻み目がある。





図V-19 土壌A類の遺物

P-5(5~8): 5は貫通孔のある突起部の破片である。縄文地に沈線で文様が描かれている。6は無文地に細い貼付帯で文様が描かれたもの。貼付帯上には細い1段の縄が2本並べて押捺されている。7は縄文地に沈線で文様が描かれたもの。口唇には竹管状の工具による斜めの刻み目がある。8は羽状縄文の施された底部。

P-42(1): 1は口縁部が少し外反する平縁の土器。体部には結束羽状縄文が施され、口唇には縄を押捺した刻み目がある。(工藤 研治)

#### 石器(9~15)

P-2(9~11): 9・10はスクレイパー。ともに切子打面の素材。9は両縁に錯向剝離様に直線的な刃付けをした両刃削器、10は裏面に凸形の刃を付けた横形削器である。11はUフレイクとされたもの。石核素材で、礫面の残る背面の左縁にやや不連続な剝離痕がある。

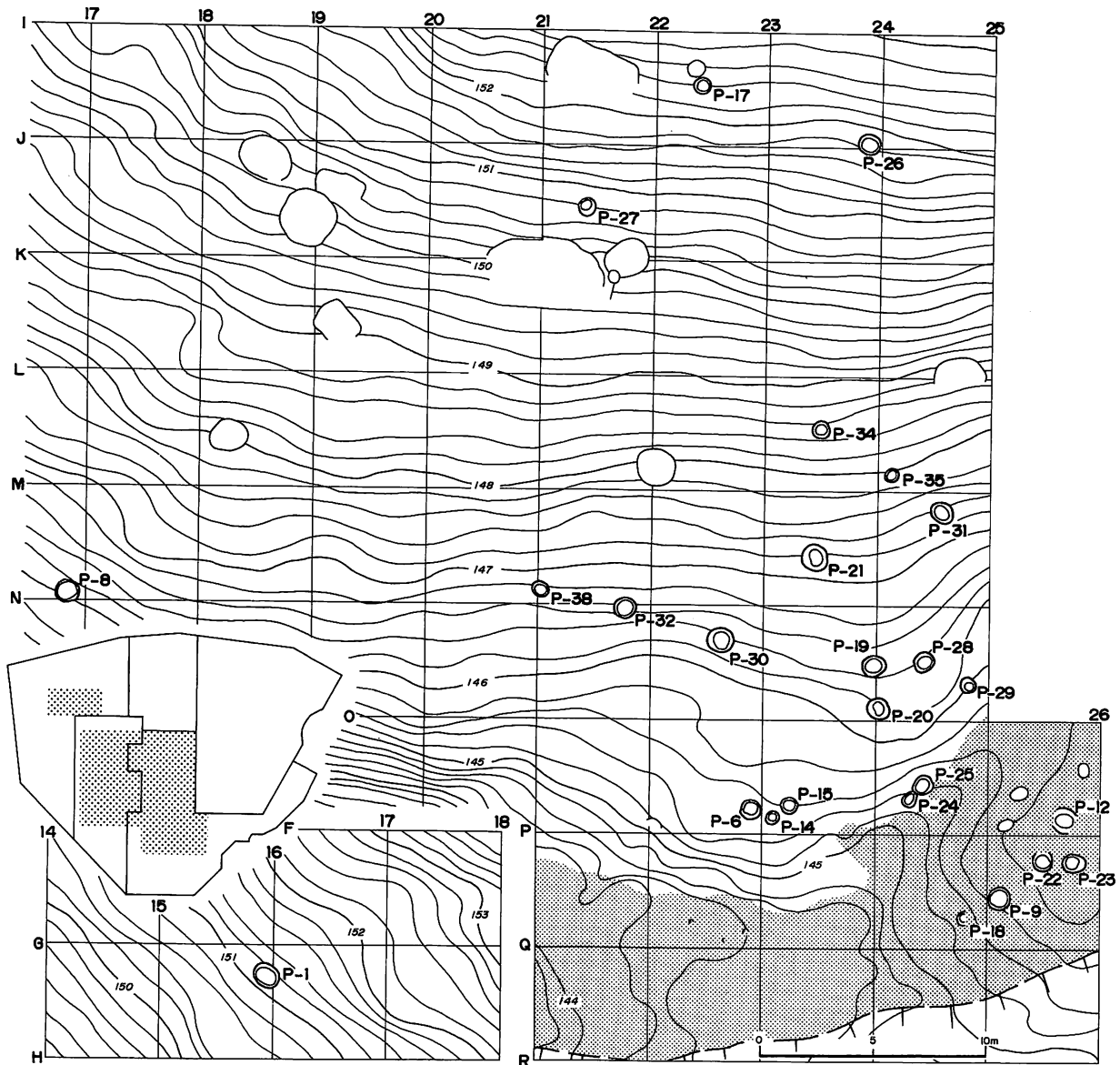
P-3(12・13): 12は幅広く平滑なすり面のあるすり石。すり面を打面とする剝離痕があり、概ねすり面に切られる。端部の両面に抉りを作っており、北海道式石冠に近い。上縁も片面から剝離を加えて整形する。13は扁平打製石器。礫素材で下縁から両面を調整するが、下縁にはなお礫面が1 cm 余りの幅で残っており、すり面は未形成。他の部分の加工はほとんどない。

P-5(14・15): 14はたたき石。下端に敲打痕が集中、また一縁には浅い剝離痕の見られる部分がある。15もたたき石とされたもの。側面に幅が広く平滑なすり面が発達。このすり面と片方の主面が作る鋭角の稜(図の右面右縁)にも幅が狭く比較的平滑なすり面が見られる。その他の稜上と図の下端には敲打痕が集中し、二つのすり面から両主面へは浅い剝離が入る。(西脇対名夫)

#### 2) 土壌B類(図V-20~32, 図版14~17)

平坦な底面をもち確認面で径約1 m 程度、ほぼ円形のものを土壌B類とする。P-1・6~9・12・14・15・17~32・34・35・38の26基をこれに含めた。P-1・8はそれぞれ遺構分布の北端・北西端に他の遺構と離れて存在し、P-17・27・26は住居跡に近い斜面の上部に散在する。残りの21基は調査範囲中央の斜面下部から段丘面2にかけて、住居跡やそれ以外の土壌をほとんど交えない集中域を作っている。段丘面2のものはP-24区からO-25区にかけて周囲より少し高まった尾根状の部分に列をなし、B2層上面の標高で145m 強から低い場所には認められない。住居跡などより低い場所に多いとは言っても低湿な場所は避けているように思われる。P-6・14・15, P-24・25など非常に接近して作られたものがあるが、B類相互や他の土壌・住居跡との切り合い関係はなかった。ただしP-12で出土した焼土や板状の礫は、先に存在した石囲炉を壊して片付けた可能性を示す。焼土がB類の上位に重複している例が1か所だけある(P-31とF-23)。

確認面での規模は0.6×0.5m(P-14)から1.2×1.1m(P-21)、底面では0.4×0.4(P-29)から0.9×0.7m(P-1)で、いずれもほとんど倍に近い規模の開きがあり、また底面は確認面よりかなり小さい場合が多い。深さも0.2m から0.6m まで幅があるが、比較的上位から確認できたものについて考えると少なくとも底径と同程度の深さはあったようである。確認面での平面形は、P-1が明確に楕円形である以外は多くが円形かそれに近い不整形を呈し、長径と短径の差は小さい。底面は楕円形や隅丸方形に近いことが多いが意図したものとは考えにくく、底面の長軸方向にも明瞭な規則性はない。



等高線はV層・B層上面の地形、網掛けはB 2層の分布を示す。住居跡・土壌以外の遺構は省略。

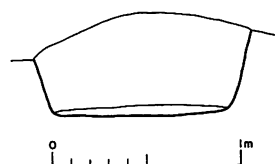
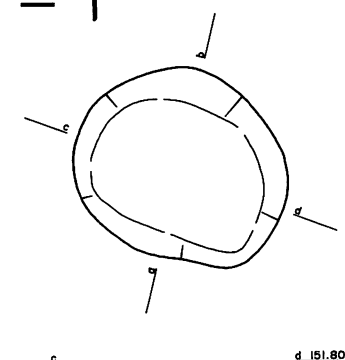
図V-20 土壌B類の分布

多くはIII層下部からIV層上面で確認したが、段丘面2では覆土とB 2層の区別ができず、III c層の上面近くまで掘り下げてから気付いたものもある（P-22～25）。覆土の上・中部はIII層に近い腐植質の土で占められ、底面付近と壁際には壁から崩れたものらしい少し汚れた地山の土が認められることが多い。周囲に他の土壌がある場合には覆土の比較的浅い部分にも地山の成分が多い土が見られることがあり（P-6・23・28・29・31・32）、遺構の掘り揚げ土が流入したものかと思われる。意図的に投入したことのほぼ間違いのない覆土としては、P-12の下部に堆積していた焼土混りの土（7層）が挙げられる。

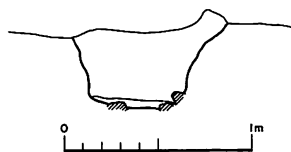
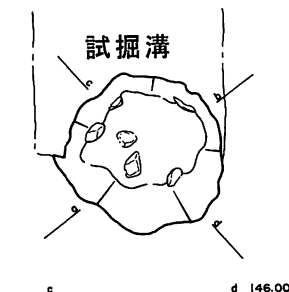
崩落を考慮すると壁面の上部は多くの土壌で本来もっと垂直に近かった可能性がある。しかし床面の隅から壁にかけての立ち上がりは大体保存されているように思われ、覆土の内容からもフラスコ状土壌のように壁が内傾したものが含まれていたとは考えられない。

人工遺物が底面で出土した例はほとんどなく、土器の細片（P-6・14・23）がわずかにある程度である。多くは上・中部の腐植がちの覆土から土器片や石器が散発的に出土し、

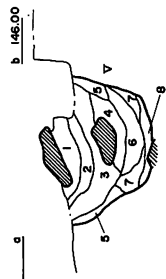
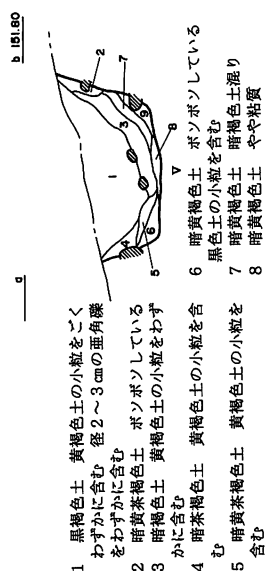
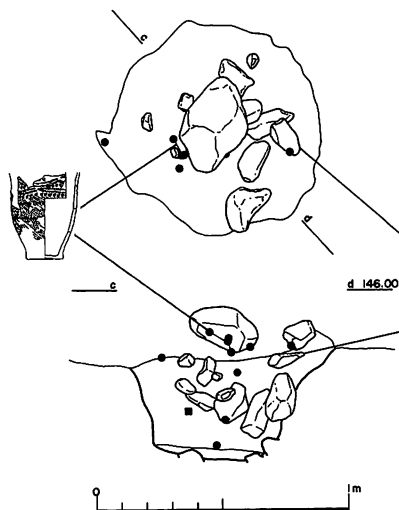
P - 1



P - 6



## 覆土の遺物出土状況



1 暗褐 (明度2.5) シルト質粘土  
2 灰黄褐 (明度3~5) シルト質粘土

3 暗褐色 (明度3~4) シルト質

粘土 やや鬆 シルト質粘土

5 やや堅 シルト質 灰黄褐 (明度4~5)

粘土 やや鬆 V 屑塊めだつ

Condition	Control (n=10)	MCI (n=10)	AD (n=10)
A	~85%	~65%	~45%
B	~95%	~75%	~55%
C	100%	75%	50%
D	~90%	~70%	~40%

10

1

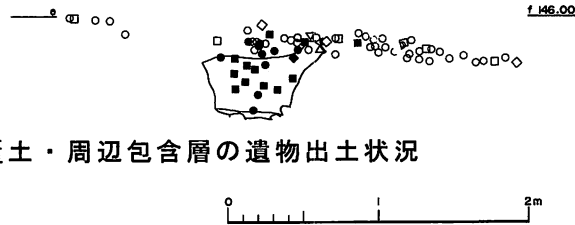


23

2

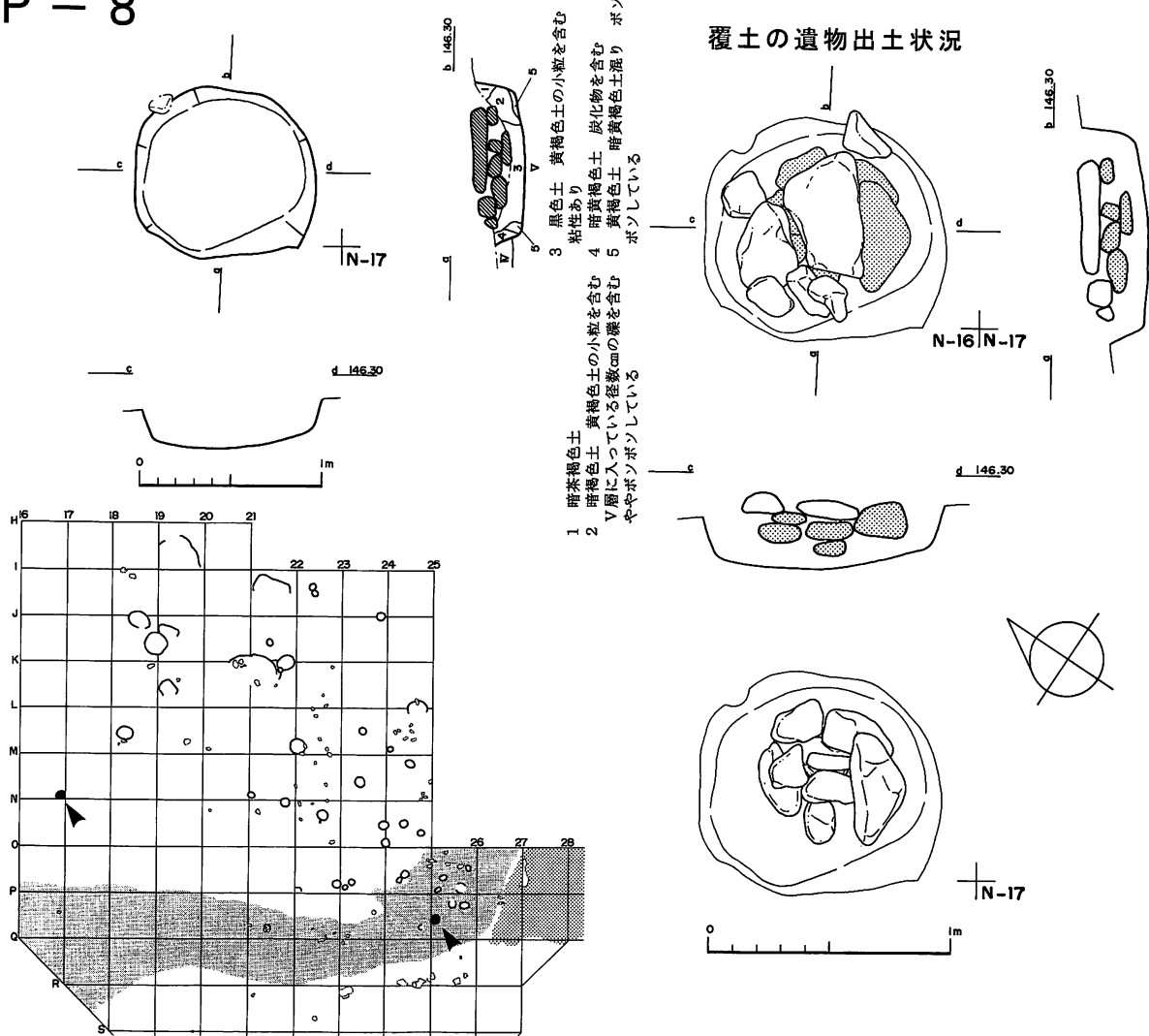
---

覆土・周辺包含層の遺物出土状況

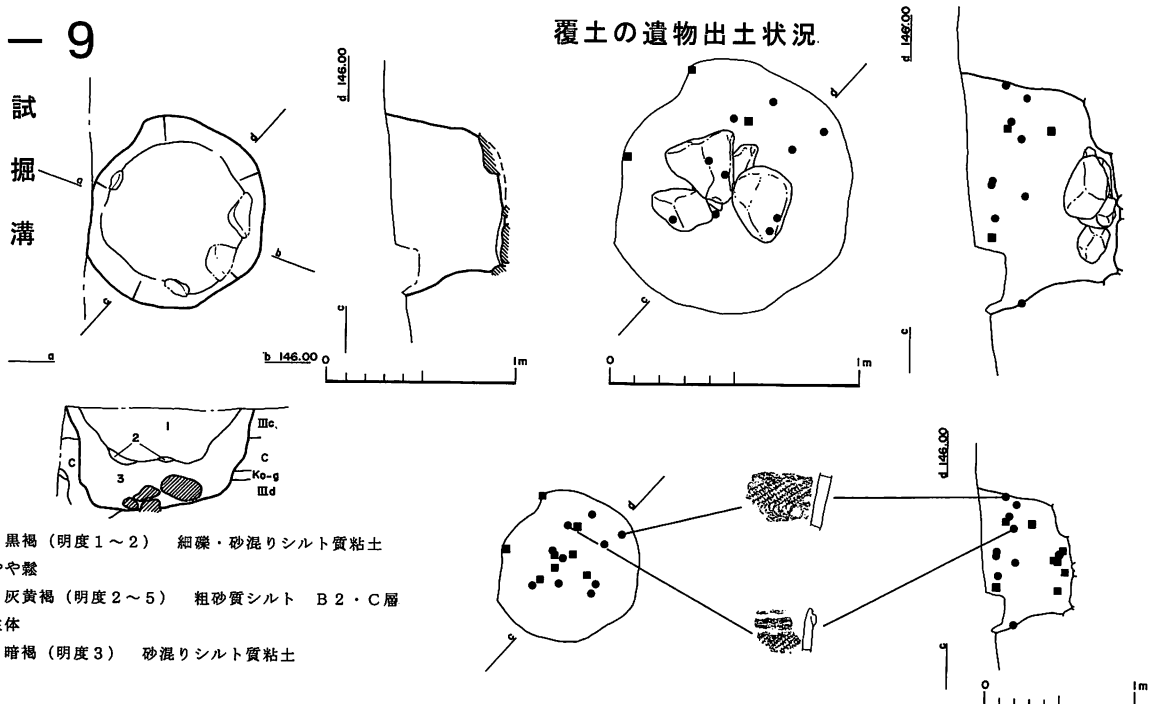


図V-21 土壌B類 P-1・P-6

P - 8

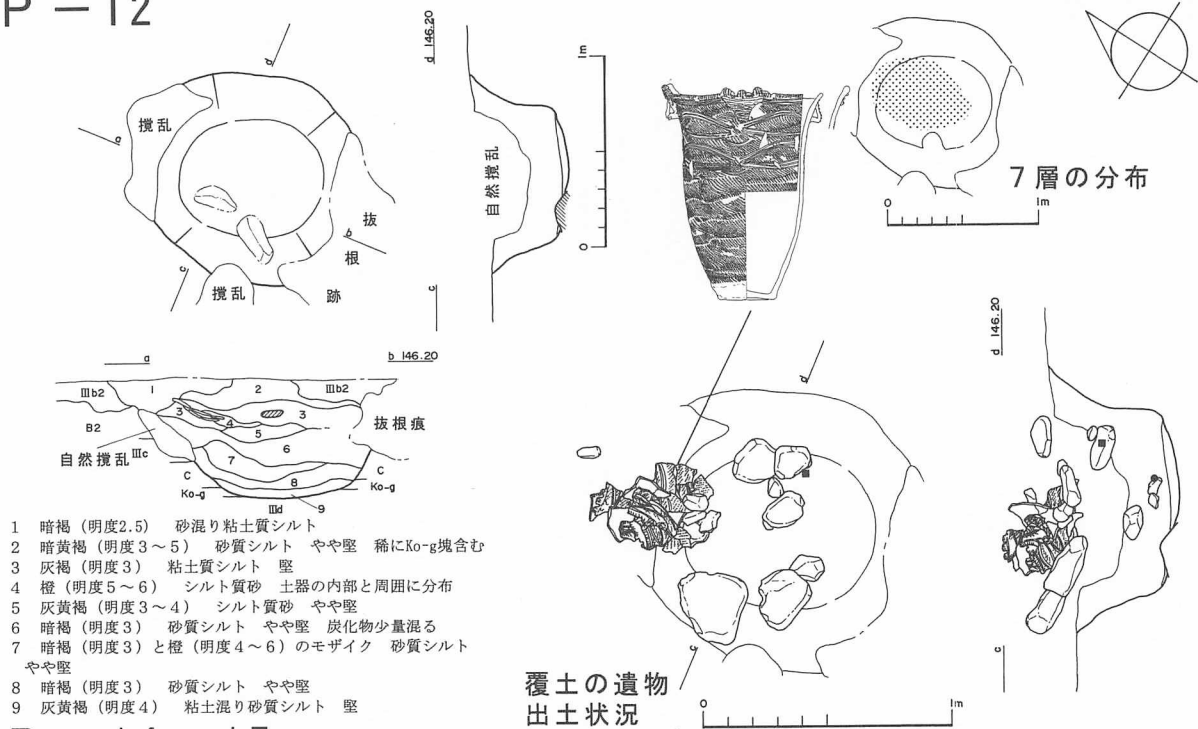


P - 9

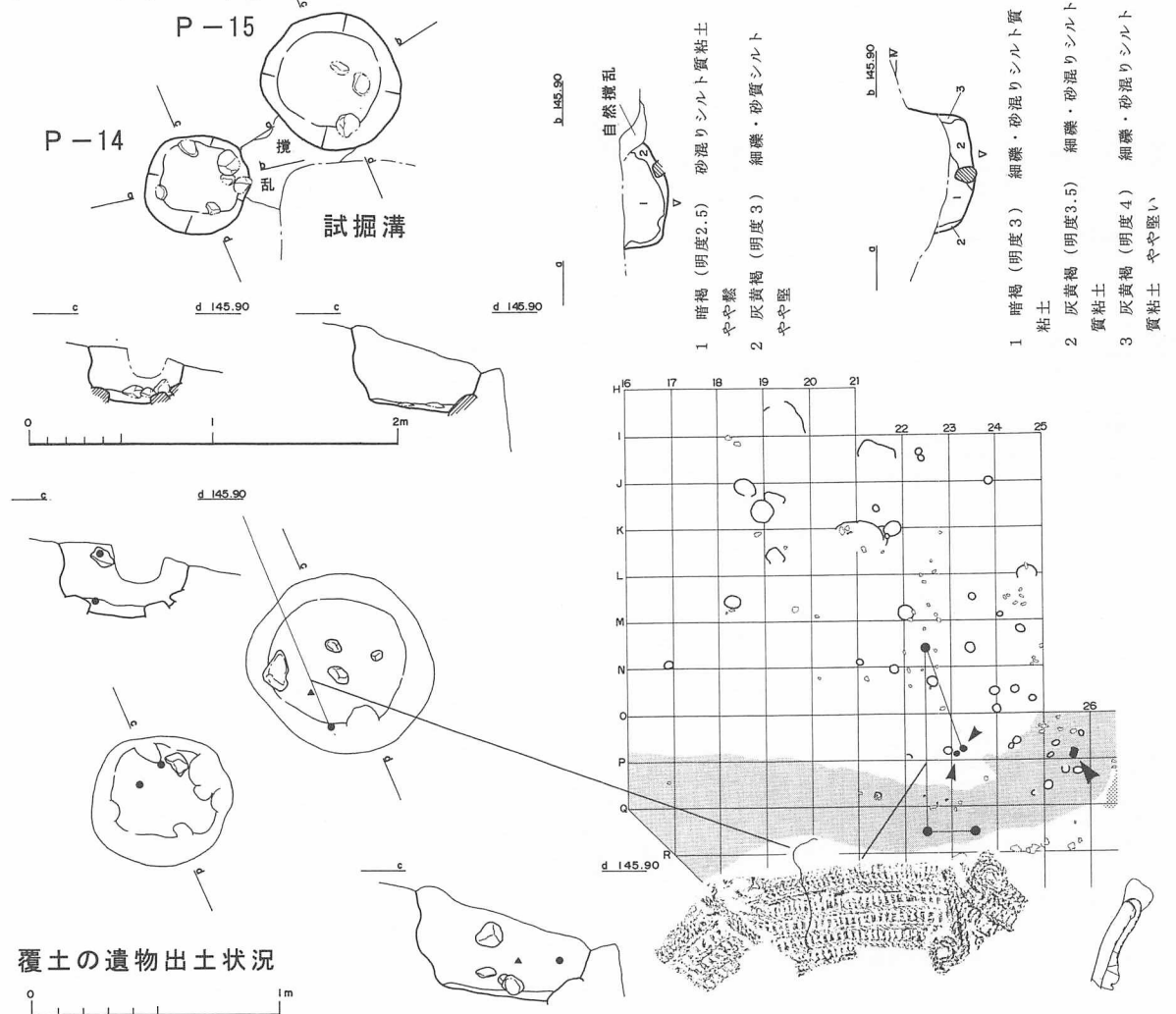


図V-22 土壌B類 P-8・P-9

P-12

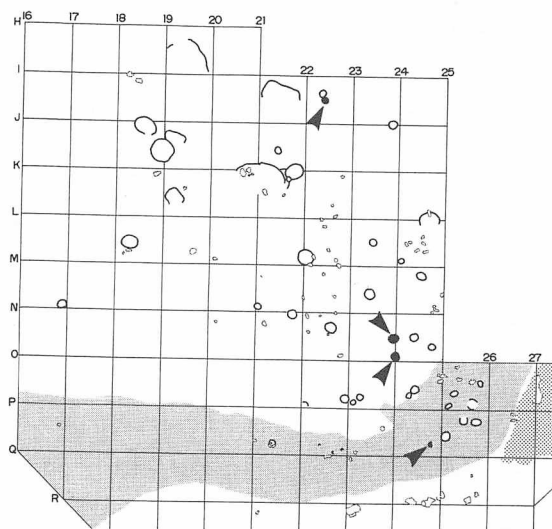
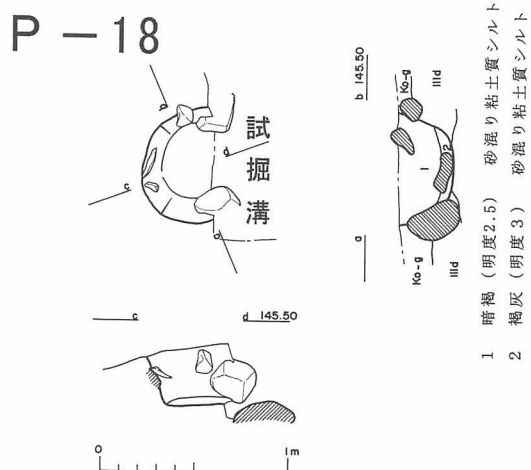
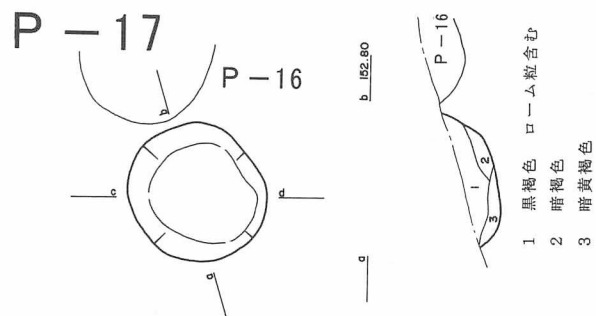


P-14・15

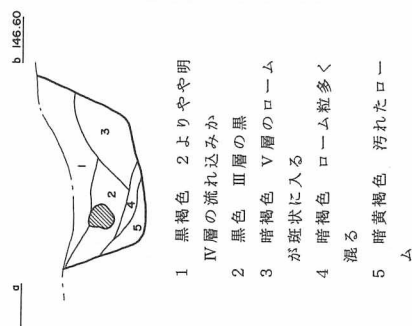
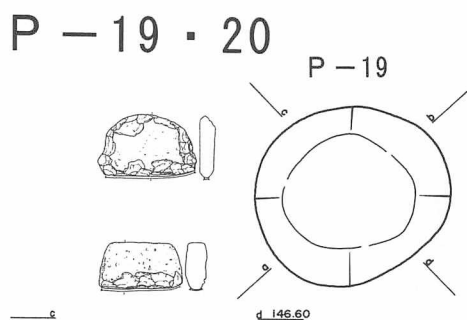
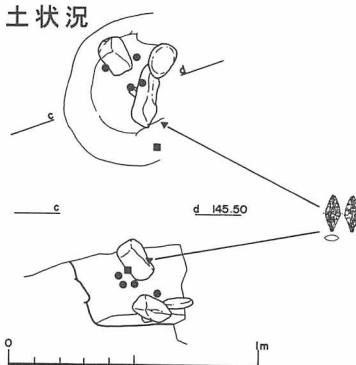


図V-23 土壌B類 P-12・P-14・15

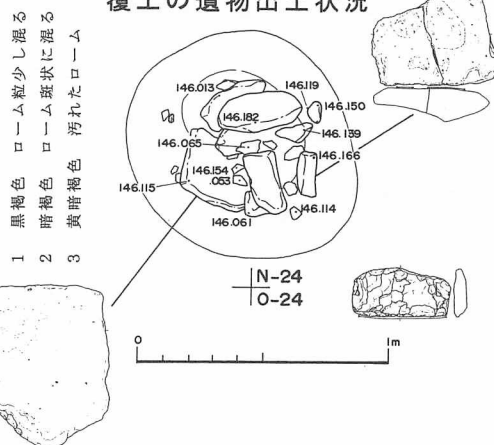




覆土の遺物出土状況

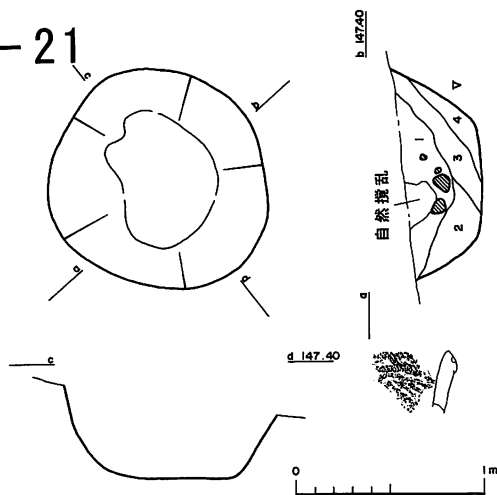


覆土の遺物出土状況

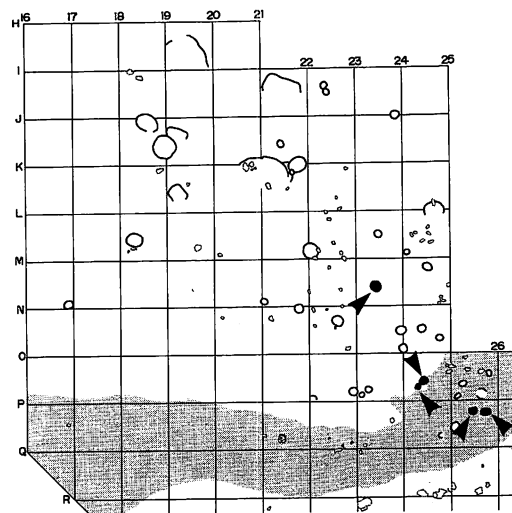


図V-24 土壌B類 P-17・P-18・P-19・20

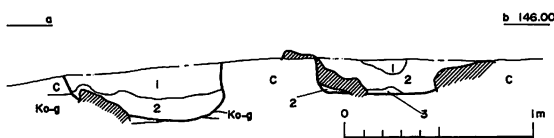
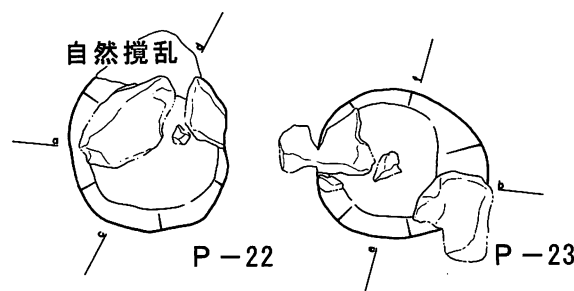
P-21



- 1 暗褐色 ローム少し混る
- 2 暗黄褐色 ローム斑状に入る
- 3 黒褐色 ローム粒少し混る
- 4 暗黄褐色 ローム粒多く混る



P-22・23



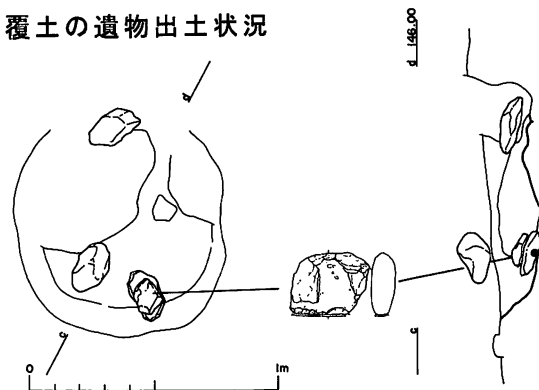
P-22

- 1 暗褐 (明度2.5) 砂質シルト C層の塊を含む
- 2 黒褐 (明度3) シルト質砂 稀にC層の塊を含む

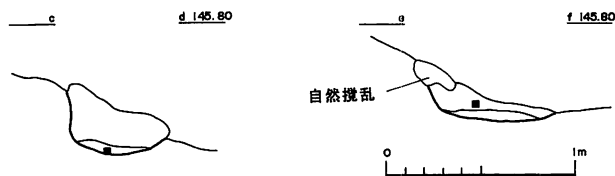
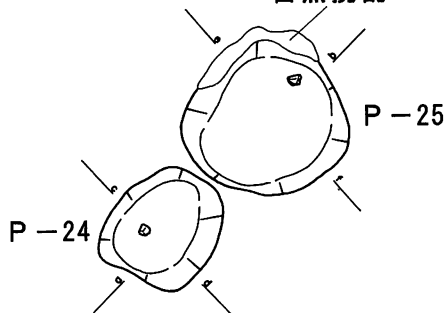
P-23

- 1 灰褐 (明度3~4) 細礫混りシルト質砂 (C層の塊)
- 2 暗褐 (明度2.5) 細礫混り砂質シルト C層の塊を含む
- 3 灰褐 1層に同じ

覆土の遺物出土状況



P-24・25 自然攪乱



P-24

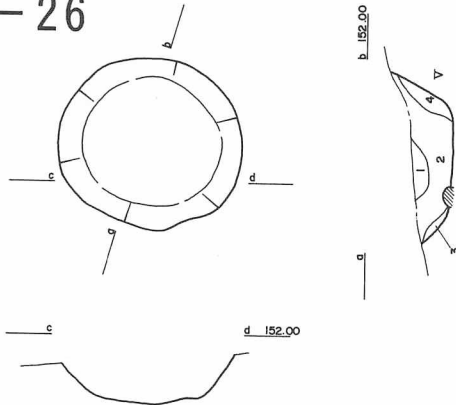
- 1 灰黄褐 (明度4) 細礫混りシルト質粘土 かなり粘る 主にⅢd層か
- 2 黒褐 (明度2) 砂混り粘土質シルト 砂はC層か
- 3 灰褐 (明度3) 砂混り粘土質シルト 主にⅢd層

P-25

- 1 灰褐 (明度3~4) 細礫・砂混り粘土質シルト
- 2 黒褐 (明度2) 砂混りシルト質粘土
- 3 暗褐 (明度3.5) 砂混りシルト質粘土 Ⅲd層含む

図V-25 土壌B類 P-21・P-22・23・P-24・25

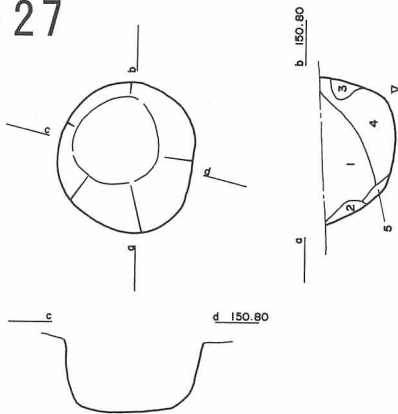
P-26



- 1 暗褐色
- 2 黒褐色
- 3 暗黄褐色 V層のローム
- 4 暗黄褐色 プロック混り 壁の崩落土



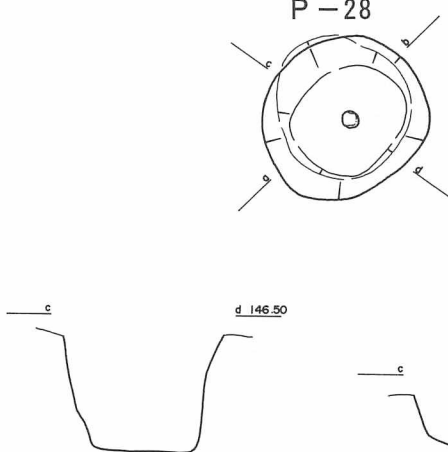
P-27



- 1 黒褐色 ローム粒少し混る
- 2 黄褐色 V層
- 3 黄褐色 V層
- 4 暗褐色 ローム粒多く混る
- 5 暗黄褐色 ローム粒多く混る

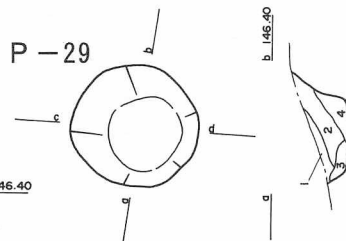
P-28・29

P-28



- 1 黒褐色 III層の黒 柔かい
- 2 暗褐色 ローム粒少し混る
- 3 暗褐色 ローム粒多く混る
- 4 黒褐色 ローム粒少し混る
- 5 暗黄褐色 ローム均質に混る (III+V)
- 6 暗褐色 5より暗い色調
- 7 暗褐色 ローム均質に混る
- 8 黄褐色 ローム粒混る
- 9 黒褐色 黒褐色土にロームが斑状に混る
- 10 黄褐色 汚れたローム

P-29

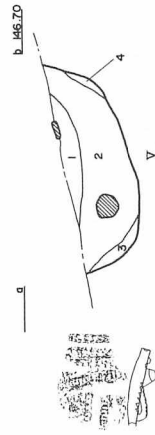
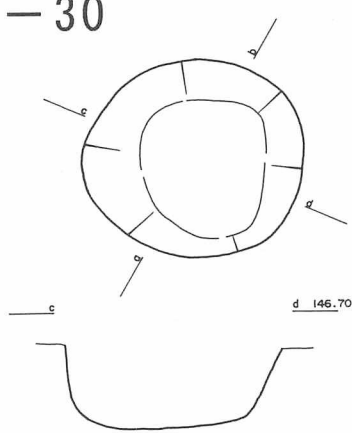


- 1 暗褐色 ローム粒多く混る
- 2 黒褐色 ローム粒少し混る
- 3 黄暗褐色
- 4 暗褐色 ローム粒多く混る

図V-26 土壌B類 P-26・P-27・P-28・29

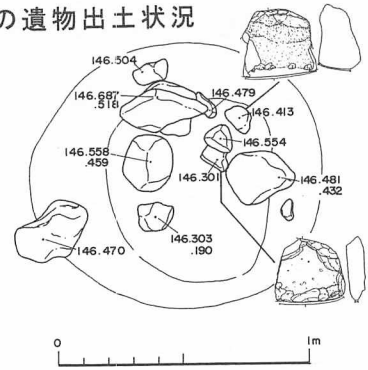
遺物のまったく認められなかった土壌も6基ある(表V-2参照)。確実に遺構に近い時期の遺物としてはP-12の覆土上部で出土した完形のIII群A類土器がある(図V-29)。斜面の下部にある土壌ではII群B類土器も出土しているが、包含層に含まれていたものが流入したと考えた方が穏当であろう(図V-21・23・27)。覆土や周辺の包含層から出土した石器としては扁平打製石器が目立つ。剥片石器では少数の石鏃・刺突器があり、この遺跡で多いスクレイパーは見られなかった。

P-30

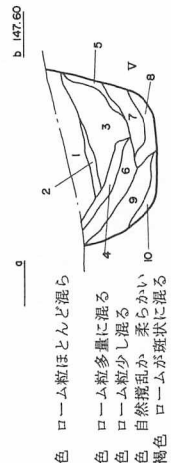
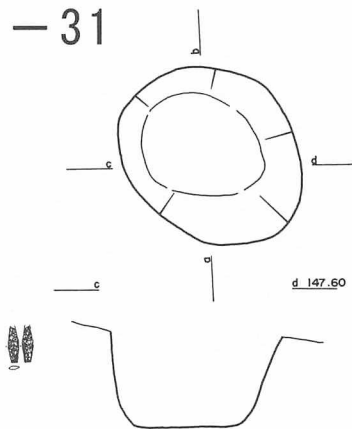


- 1 暗黒褐色 Ⅲ層にローム粒混る
- 2 黒褐色 Ⅲ層主体
- 3 黄暗褐色 地山・壁崩落土
- 4 暗褐色 壁の流れ込み

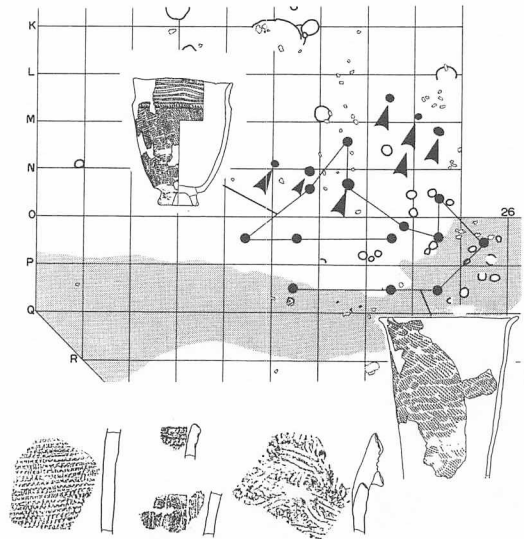
覆土の遺物出土状況



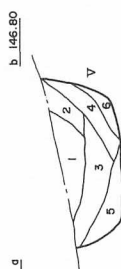
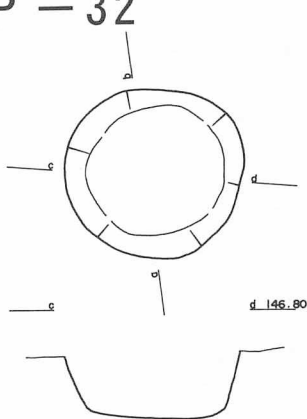
P-31



- 1 黒褐色 ローム粒ほとんど混らない
- 2 暗褐色 ローム粒多量に混る
- 3 黒褐色 ローム粒少し混る
- 4 黒褐色 自然攪乱か、柔らかい
- 5 黄暗褐色 ロームが斑状に混る
- 6 暗褐色
- 7 暗褐色 ローム粒多く混る
- 8 褐色 黒色土にロームが斑状に混る
- 9 黒褐色 ローム粒混る
- 10 黄暗褐色 汚れたローム

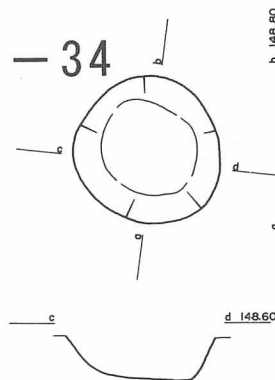


P-32



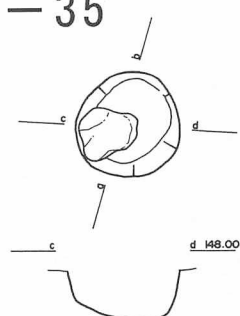
- 1 暗褐色 ローム粒多く混る
- 2 黒褐色 ローム粒ほとんどなし
- 3 柔らかい
- 4 黒褐色 ローム粒少し混る
- 5 暗褐色 ローム粒多く混る
- 6 黄暗褐色 V層のローム斑状に混る

P-34



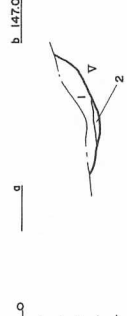
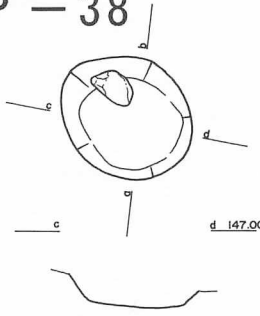
- 1 暗褐色 ローム粒少し混る
- 2 黒褐色 ローム粒多く混る
- 3 褐色 IV層の流れ込み

P-35



- 1 黒褐色
- 2 暗褐色

P-38



- 1 黒褐色
- 2 黄暗褐色

図V-27 土壌B類 P-30~32・P-34・P-35・P-38

また土壌B類では礫の出土状況が注意を引く場合がある。覆土の比較的上部に集中する例（P-6・12・20・30のほかP-31もその可能性がある。図V-50参照）のほか、底面のやや上にぎっしりと詰め込まれる例（P-8）、底面にまとまる例（P-9）、大型の礫が1点入る例（P-28・35）などが見られた。複数の礫が出土するときには礫石器を交えている場合が多い。周囲の包含層についても遺物の出土状況を記録したP-6の例では、明らかに包含層より土壌覆土に礫・礫石器の密度が高い（図V-21）。P-8・9のように意図的な配置を示すもの以外にも、人為的に集めて投入した礫があることがわかる。

土壌B類ではP-12覆土の焼土を含む部分を採取して浮遊選別をおこなった（Ⅶ章3節）。この試料からは炭化物のほか土器の細片2点、剥片5点が見出された。

土壌B類は詳しい時期の決定できるものが少ない。段丘面1に存在せず、段丘面2ではB2層を切って作られること、完形土器が出土したP-12の例や、覆土出土の土器に例外なくⅢ群A類が混じっていることなどから、縄文時代中期中葉を中心とするものと考えておくのが穏当であろう。切り合わずに隣接する点や覆土の状況からは、意図的に埋めずにしばらく凹みとして残っていたことが想像できる。あるいは何らかの目印を伴っていたのかも知れない。類似の土壌は町内の上藤城7遺跡などで報告されており、やはり礫の入るものがある。なお孤立して作られ、形状や礫の出土状況が特異であるP-1・8は他の土壌と区別して考えるべきであろう。（西脇対名夫）

土壌B類出土の遺物（図V-28～32）

土器（図V-28～30-1～29）

P-6（1～11）：1、4～7はⅡ群B類。2・3、9～11はⅢ群A類。8はⅢ群B類1は口縁部に縄線文が施されたもの。体部には横位の浅い条痕文施文後に細い縦位の沈線文が密に施される。2は無文の土器。器面は丁寧に磨かれている。

P-9（12・13）：12はⅢ群A類。13はⅢ群B類土器。内面は丁寧に磨かれている。

P-12(20)：20はⅢ群A類土器。口縁部には4か所の突起があり、突起下にはそれぞれ釣り耳状の貼付文がある。内面は丁寧に調整されている。

P-15(14)：14はⅡ群B類土器。図示しなかったけれども、包含層から出土している同一個体の胴部破片には多軸絡条体の回転文が施されている。

P-20（15～17）：15～17はⅢ群A類。15・16の口唇には縄を押捺した刻み目がある。

P-21（18・19）：19はⅡ群B類。18は口縁部に貼付文が施されたⅢ群A類。

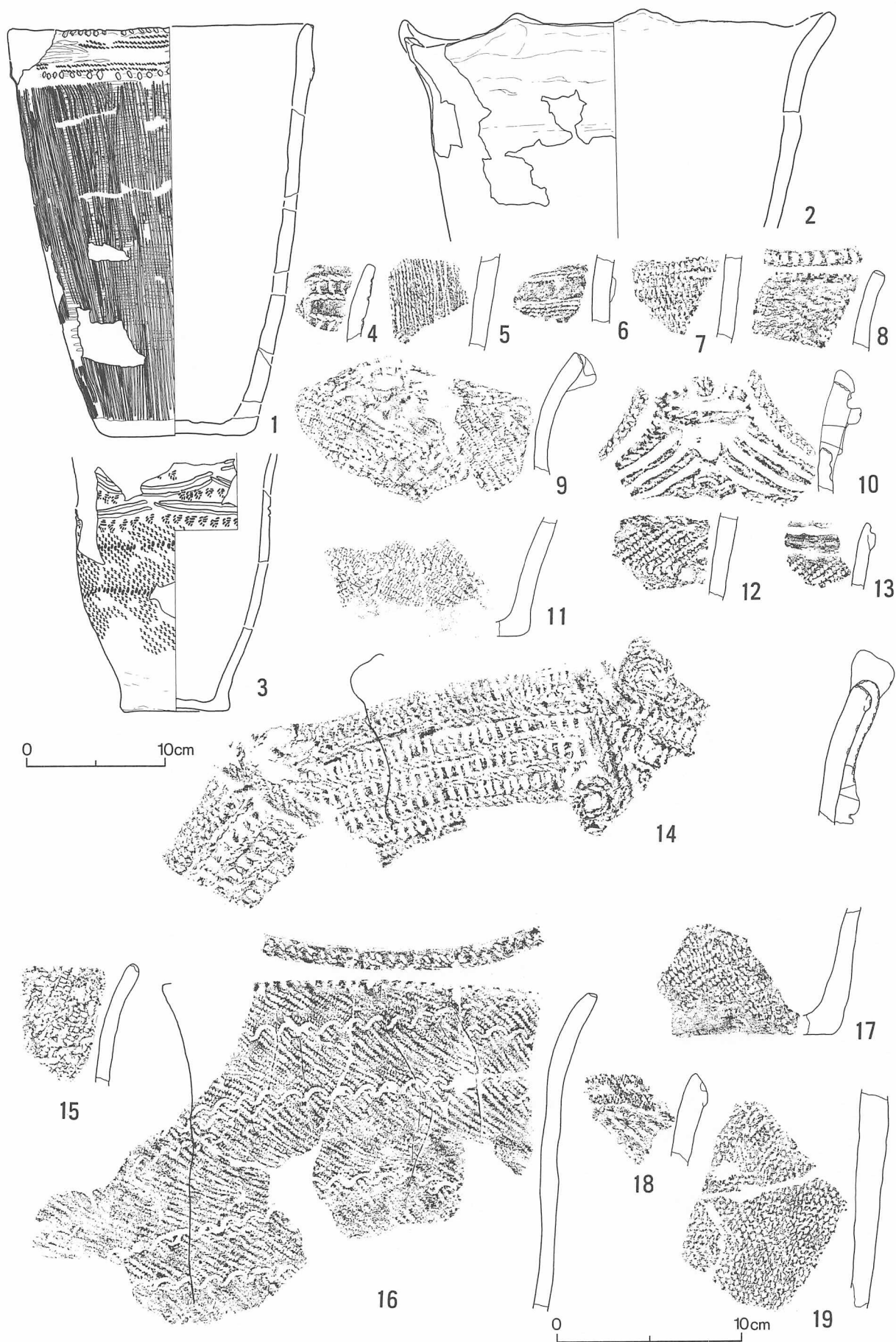
P-24（23・24）：23・24はⅢ群A類で同一個体。口唇には縄による刻み目がある。

P-30（21・22・25）：21・22はⅡ群B類。21は口縁部に2段の原体による縄線文、体部には多軸絡条体の回転文が施された台付土器。22は複節の縄文が施されたものである。

P-31（26～29）：26～28はⅡ群B類。29はⅢ群A類。（工藤 研治）

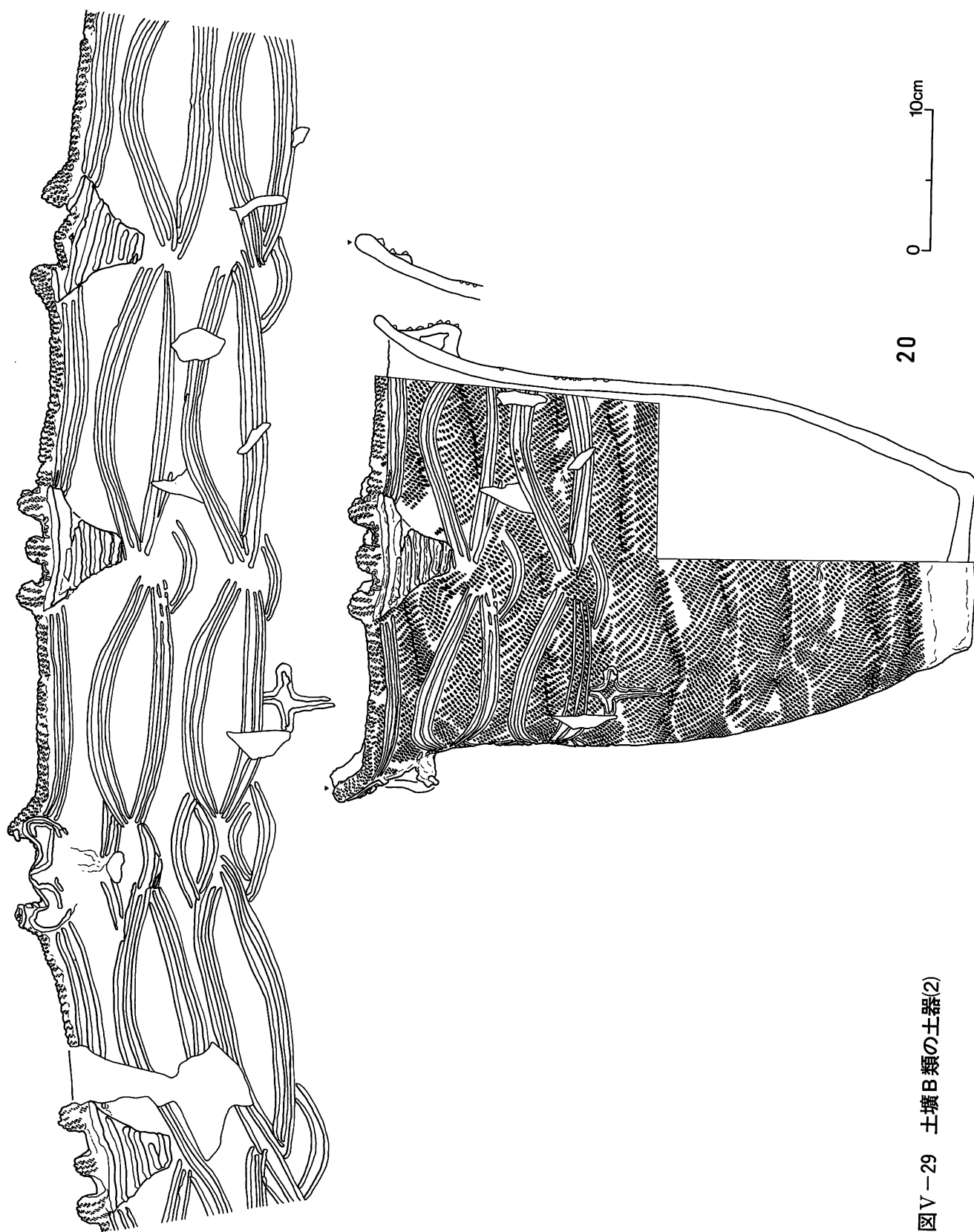
石器（図V-31・32）

P-6覆土（5）およびP-6周辺包含層（1・6～9）：1は刺突器、平坦打面の横長の素材の両面に浅い整形。背面の打面付近が大きく焼け弾けている。5～9は扁平打製石器。5は礫片、6～9は礫素材。5、図の左端は両面を整形、上下縁も両面に浅い整形が入るが連続していない。右端は折面。6・7は全周の両面を整形。6下縁の図化した面にも素材礫の稜を取り除こうとした打撃の痕が見られる。8、下縁のみ両面を整形。9、確実な整形はない。7～9には粉っぽい外観の幅の狭いすり面が形成される。5の礫面の稜

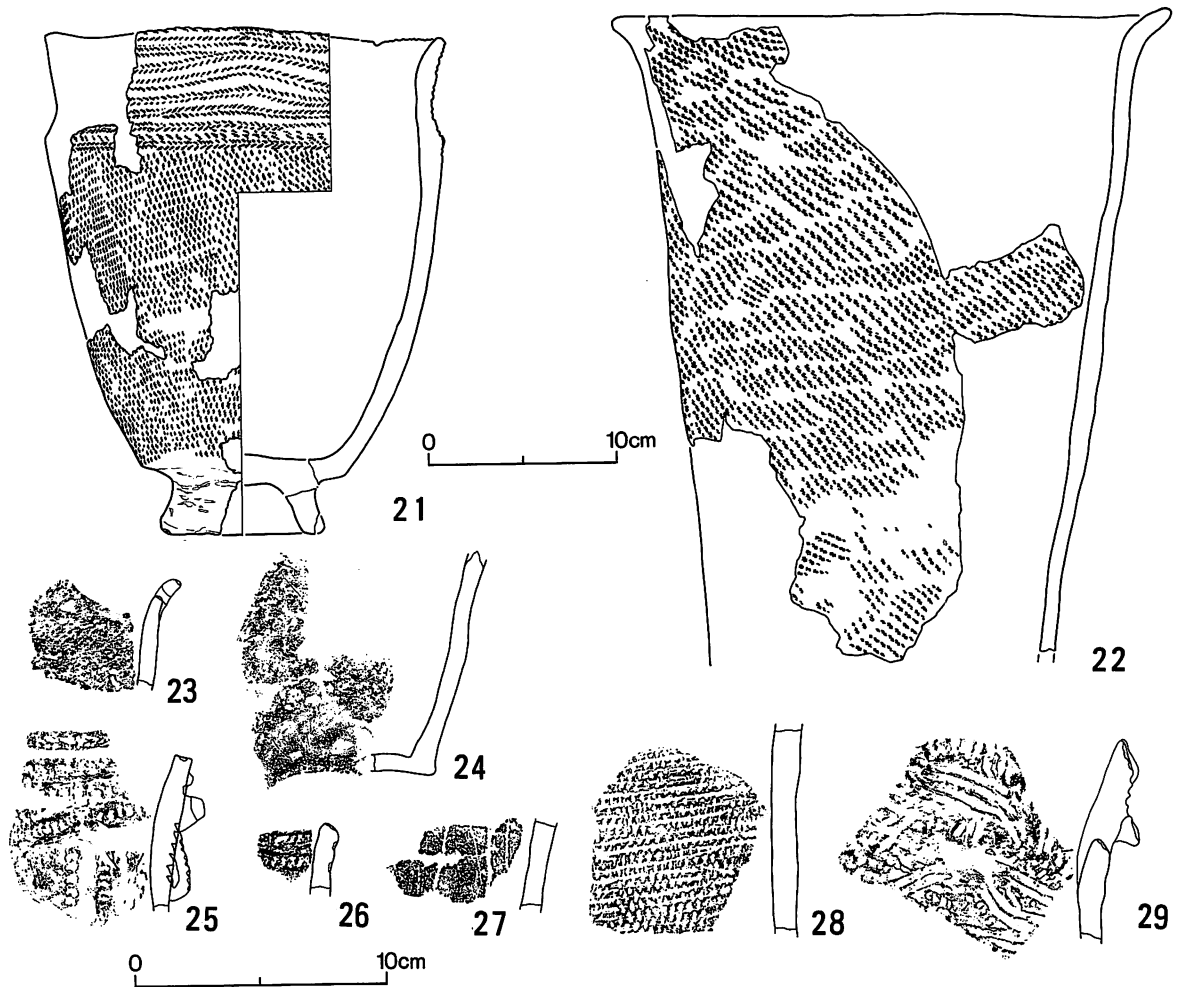


図V-28 土壌B類の土器(1)





図V-29 土壇B類の土器(2)



図V-30 土壌B類の土器(3)

上には敲打痕が集中する。9は焼けて変色している。

P-18覆土(2): 2は石鏃, 背面のごく一部に礫面らしいものが残る。

P-19覆土(10・11): 10・11ともに礫素材の扁平打製石器で11は全周, 10は下縁の両面に整形をおこなう。下縁に粉っぽい外見のすり面を形成し, 11ではその他の部分の縁辺ほとんど全部にも整形後の摩滅が見られる。

P-20覆土(16・17): 16は板状の礫の一角に掌ほどの大きさの, 弱く凹んだ平滑なすり面が見られる石皿。縁辺と接する部分にすり面に垂直な打撃を加え, 「掃き出し口」を作る。17も石皿で明瞭なすり面を形成しないが, 弱く摩滅した部分があるらしい。

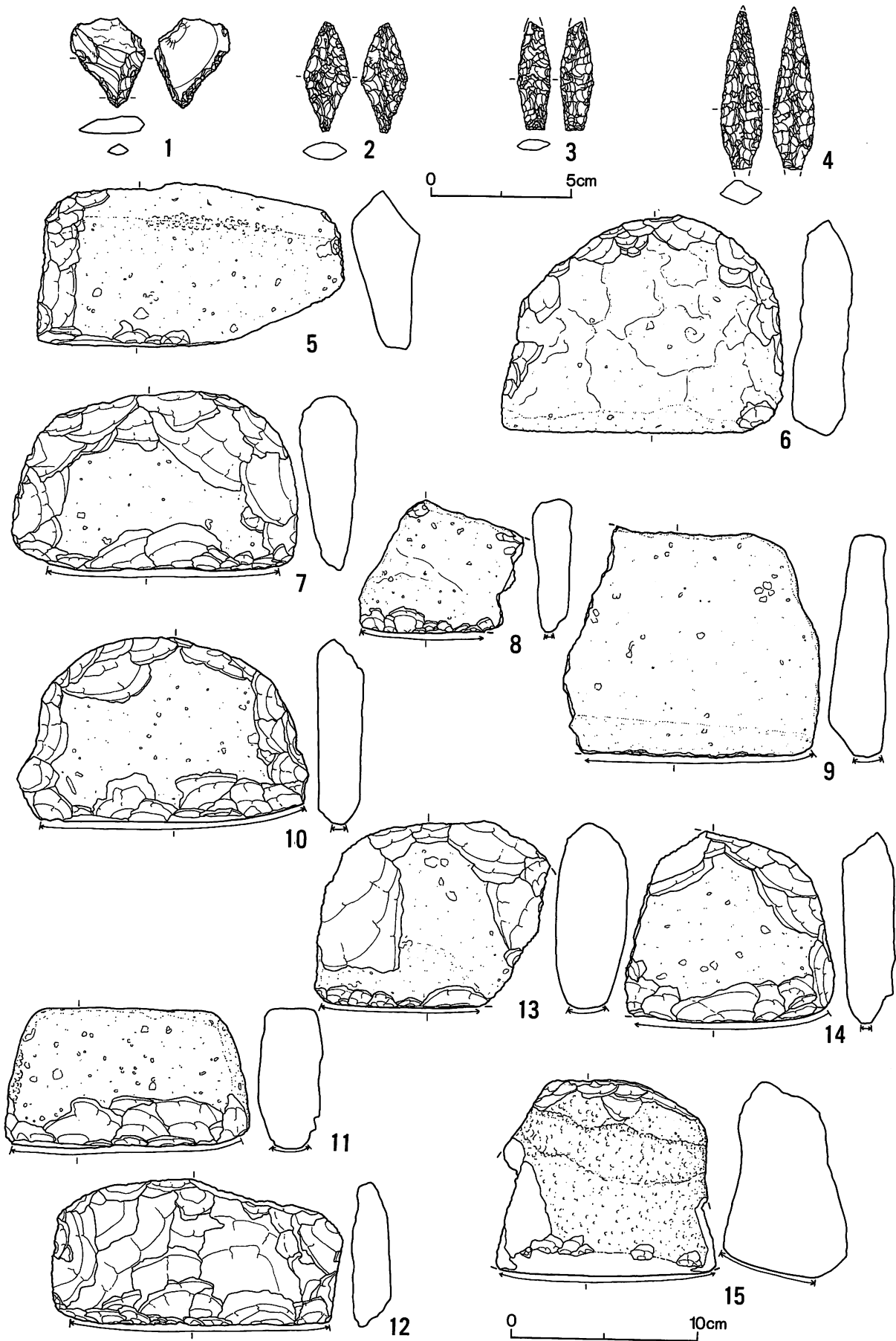
P-22覆土(13): 13は礫素材の扁平打製石器, ほぼ全周の両面を整形するようだが下縁の剝離は不連続で, すり面形成時のものかも知れない。幅1.5cmほどの安定したかなり平滑なすり面。

P-30覆土(14・15): 14, 扁平打製石器で礫片素材のようにも見える。全周の両面を整形するらしい。下縁に粉っぽい外見のすり面。15は北海道式石冠でほぼ全面を整形, 上縁近くにわずかに礫面が残る。すり面は平滑, 周辺で少しざらつく。

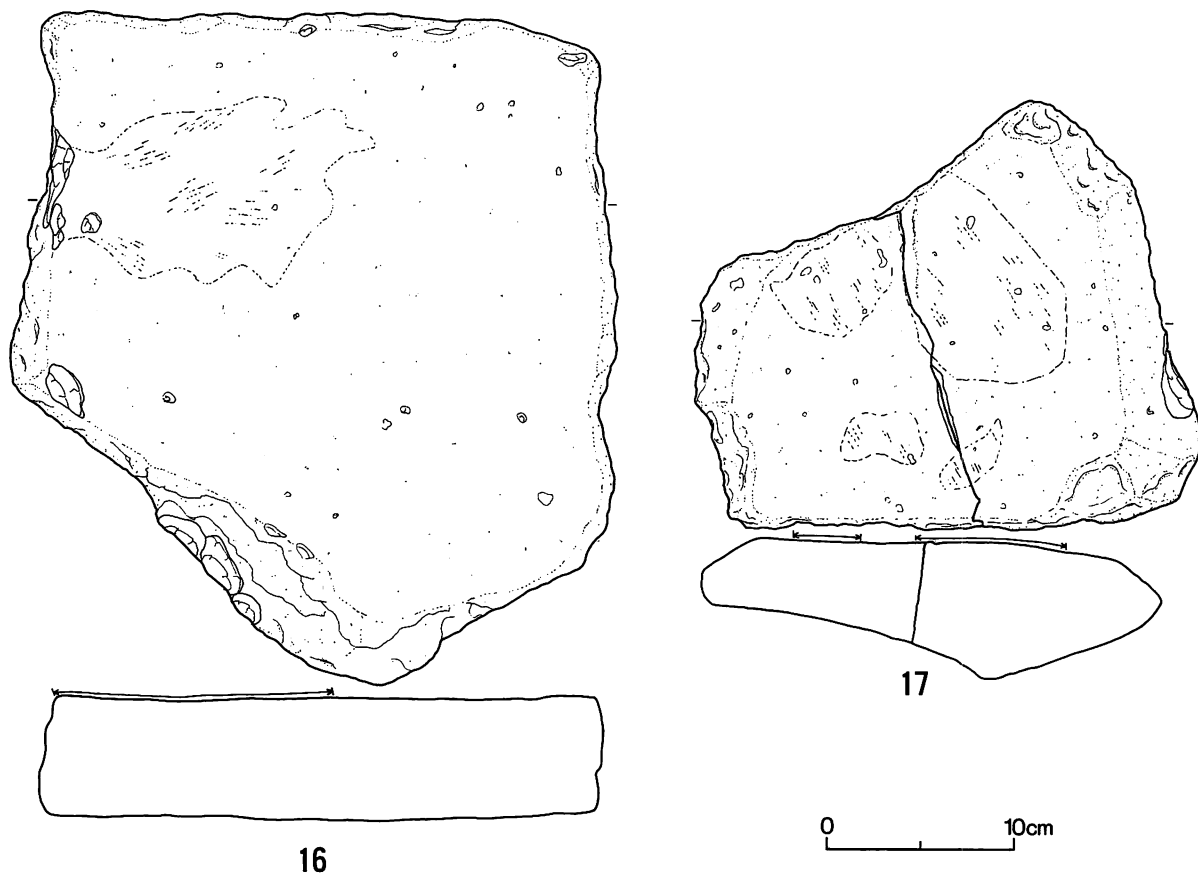
P-31覆土(3): 3は完全な両面調整, 平基で五角形に近い石鏃。

P-35覆土(4): 4は厚手で重い(5.7g)石鏃。

(西脇対名夫)



図V-31 土壌B類の石器(1)



図V-32 土壇B類の石器(2)

3)その他の土壇(図V-33~37, 図版17)

土壇A・B類の条件に適合しない土壇は10基あった。斜面の上部に2基, 段丘面2に6基, 段丘面1に1基が分布する。残る1基は斜面の下部にあるが(P-13), B類の壊れたものではないかという疑いがある。斜面上部の1基は土壇A類を切り(P-44), 段丘面2のものは焼土の付近に位置する。

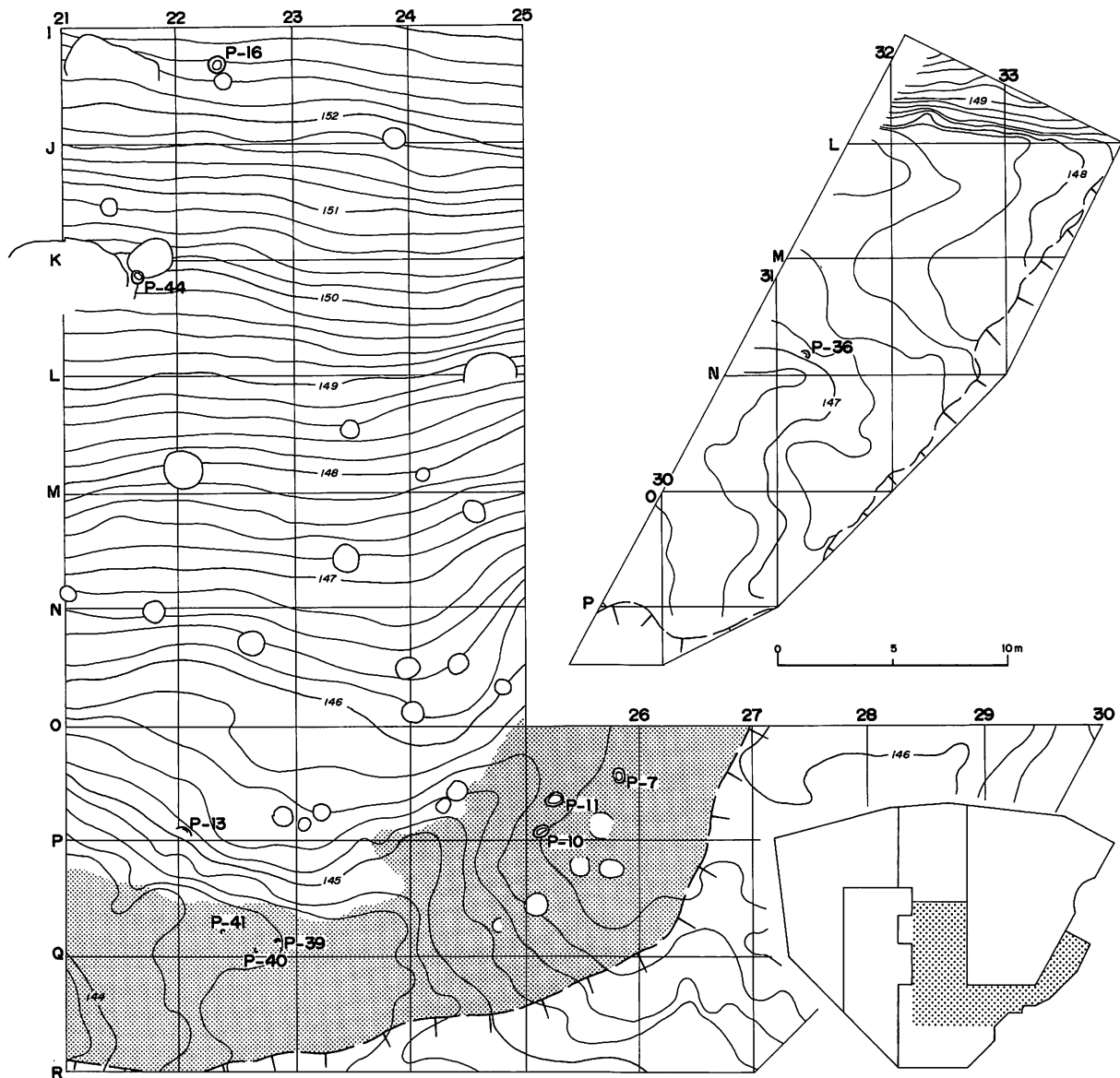
規模は概して小さく, 最も大きいものでも確認面の長径0.8m程度(P-11)である。P-39~41は径0.2m程度と特に小さく, 柱穴状である。平面形は隅丸方形(P-7)・楕円形(P-10・11)のものとはほぼ円形(P-16・36・39~41・44)のものがみられる。

段丘面2に位置する6基のうち, P-7はB2層上面で確認されたのでⅢb2層から掘り込まれ, また他の5基はB2層中に掘り込みを持つと思われる。完形に近い土器が出土したP-36・44では土器を確認した段階で断ち割って断面から土壇を確認した。断面の観察では, 底面近くまで腐植質の土が入っていたものが多い。下部に比較的地山の成分の多い覆土が見られた土壇(P-16・44)も2基あった。

底面は概ね平坦であるが, 確認面よりかなり狭い場合が多く, 壁面の崩れを考慮してもあまり整った掘り方ではない。完形に近い土器が出土したP-36・44以外は倒木痕のような自然の落ち込みである可能性も残る。

P-36の土器は墳口付近のやや壁寄りに正立していた可能性がある。P-44の土器は墳壁に沿うように傾いていた。この土器の口縁部は周囲の包含層からも発見されなかった。P-13は抜根のため攪乱されたものの, やはり1個体分に近い破片が出土した。

出土遺物からP-13・44は縄文時代中期中葉, P-36は同晩期中葉のものである。B2



等高線はV層・B層上面の地形，網掛けはB 2層の分布を示す。住居跡・土壌以外の遺構は省略。

図V-33 その他の土壌の分布

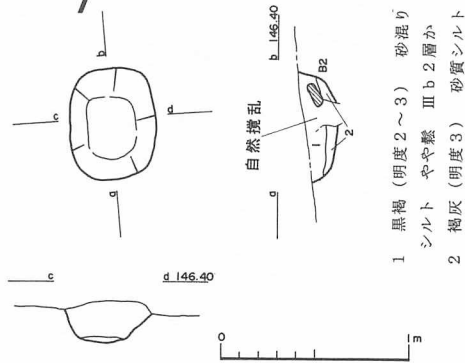
層中に掘り込み面を持つP-10・11・39～41は縄文時代前期と考えられ，P-7・16は判断できない。各土壌の性格は不明であるが，先に述べたように自然の落ち込みと区別する手続も問題となる。  
(西脇対名夫)

その他の土壌出土の遺物 (図V-36・37)

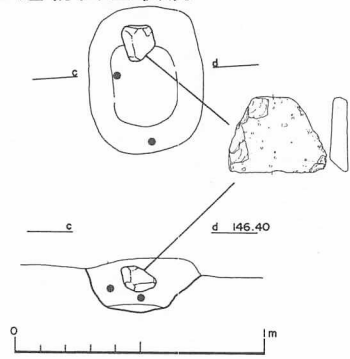
土器 (図V-36～37-1～8)

P-13(1～5)：3はII群B類，他はIII群A類。3は結束羽状縄文と多軸絡条体の回転文が施されたもの。1は無文地に太い貼付帯が施された大形の土器。口縁部はゆるやかに開き，4か所の突起がある。口縁部には縄線文で鋸歯状の文様が2段描かれ，貼付帯によって文様帯が区画されている。部分的に半截竹管による刺突文がみられる。貼付帯の上には細い縄の圧痕文がつけられている。体部には結束縄文が施されている。2は無文地に細めの貼付帯で文様が描かれているもの。口縁部は大きく開き，4か所の突起がある。貼付帯

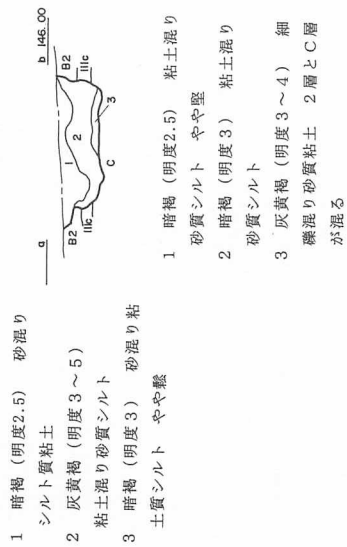
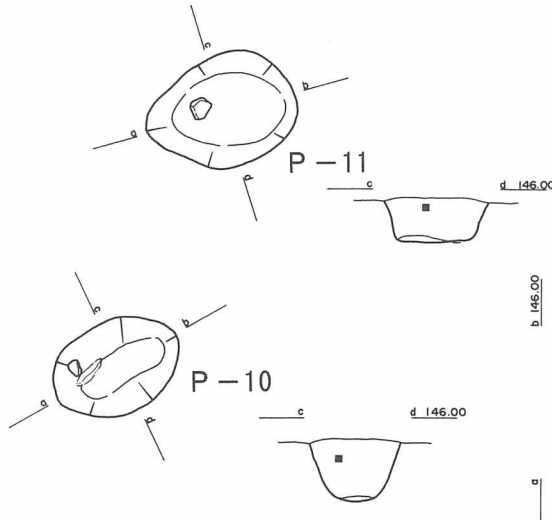
P-7



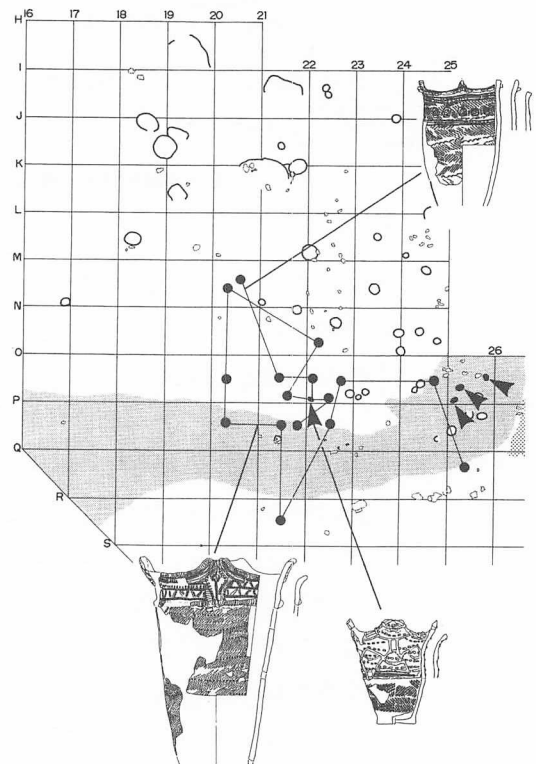
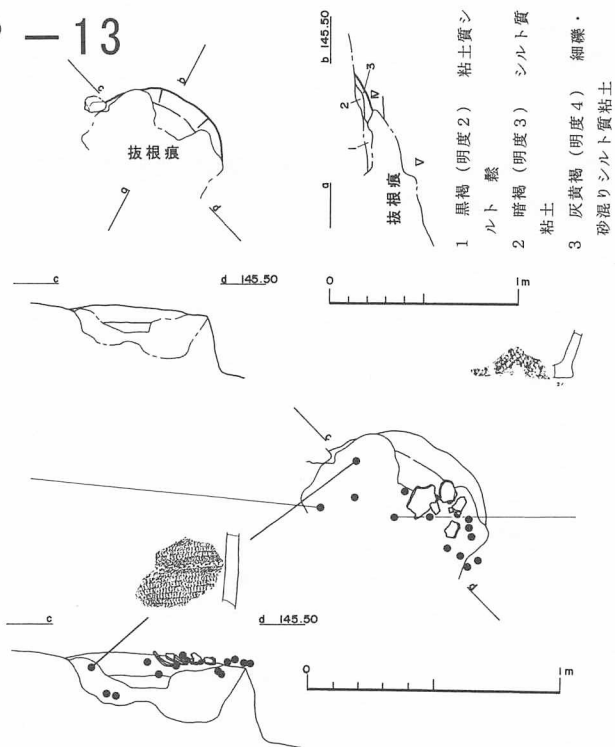
覆土の遺物出土状況



P-10・11

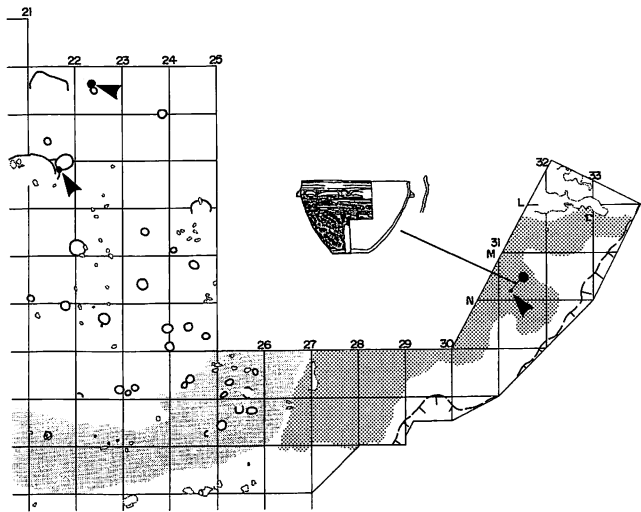
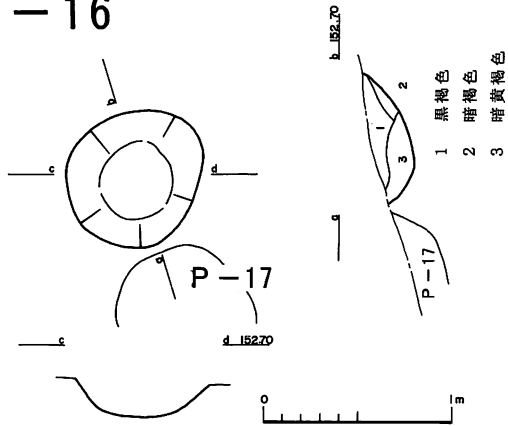


P-13

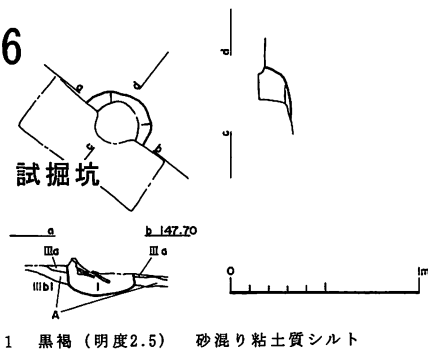


図V-34 その他の土壌 P-7・P-10・11・P-13

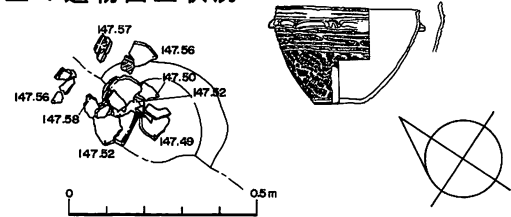
P-16



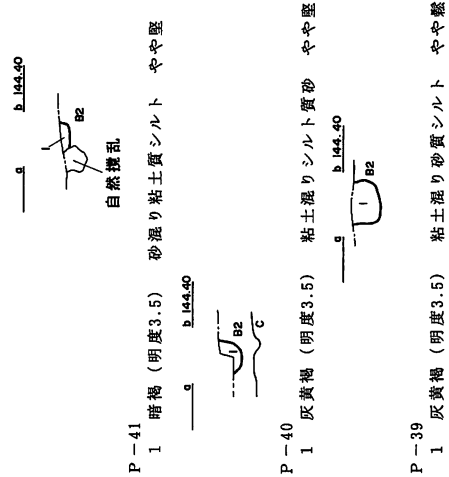
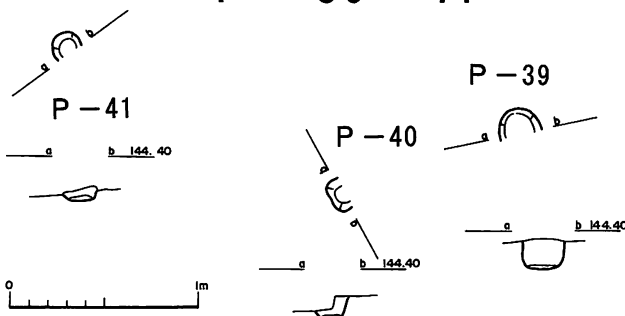
P-36



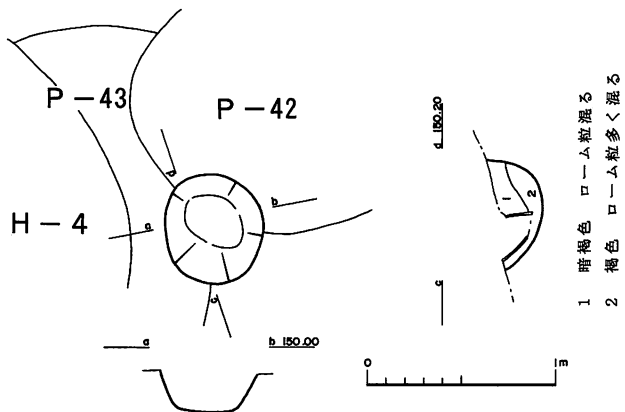
覆土の遺物出土状況



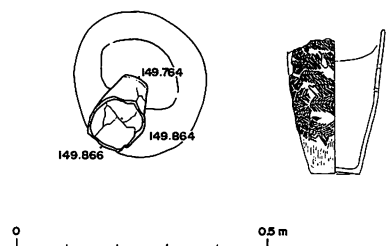
P-39~41



P-44

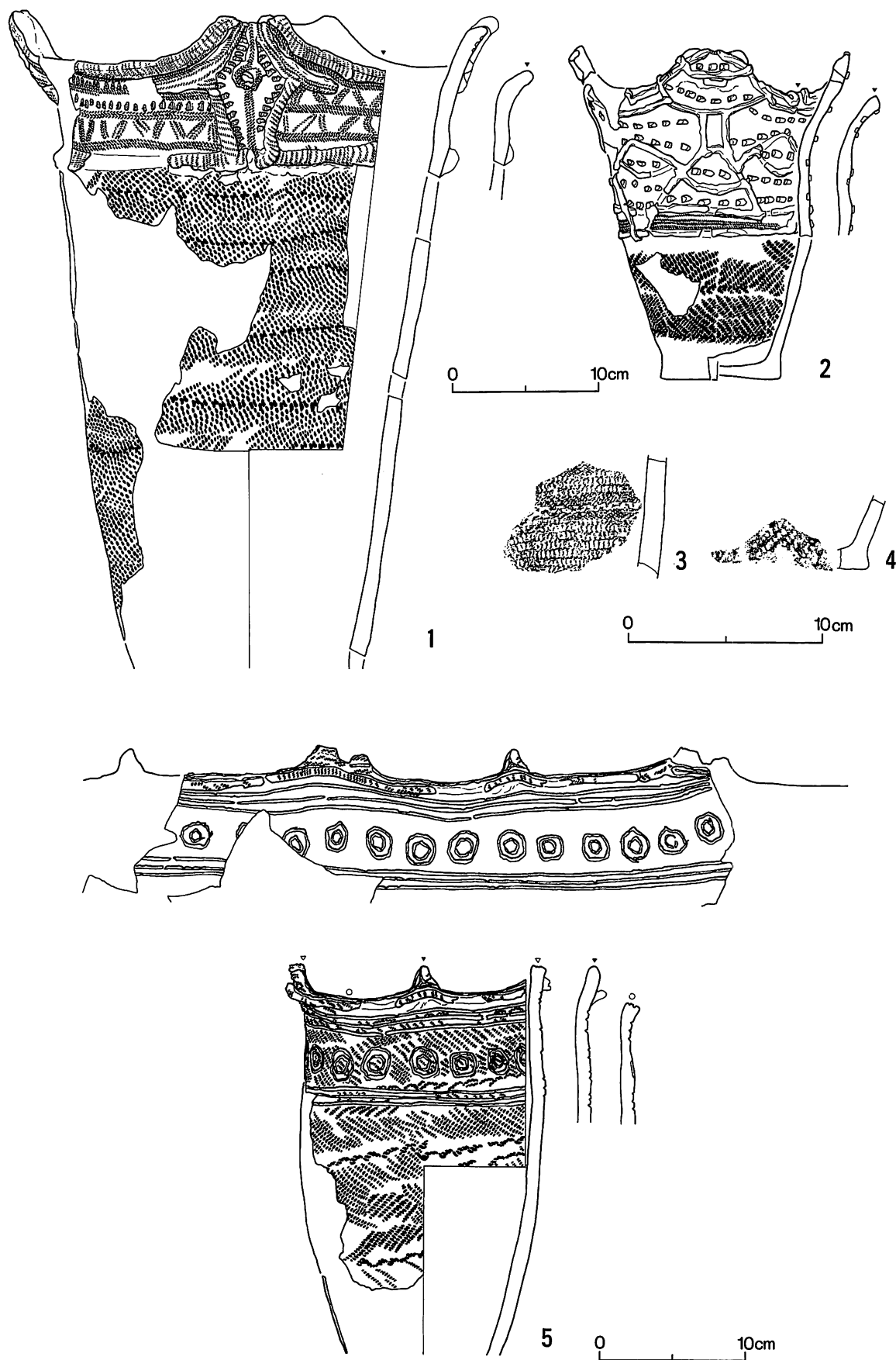


覆土の遺物出土状況

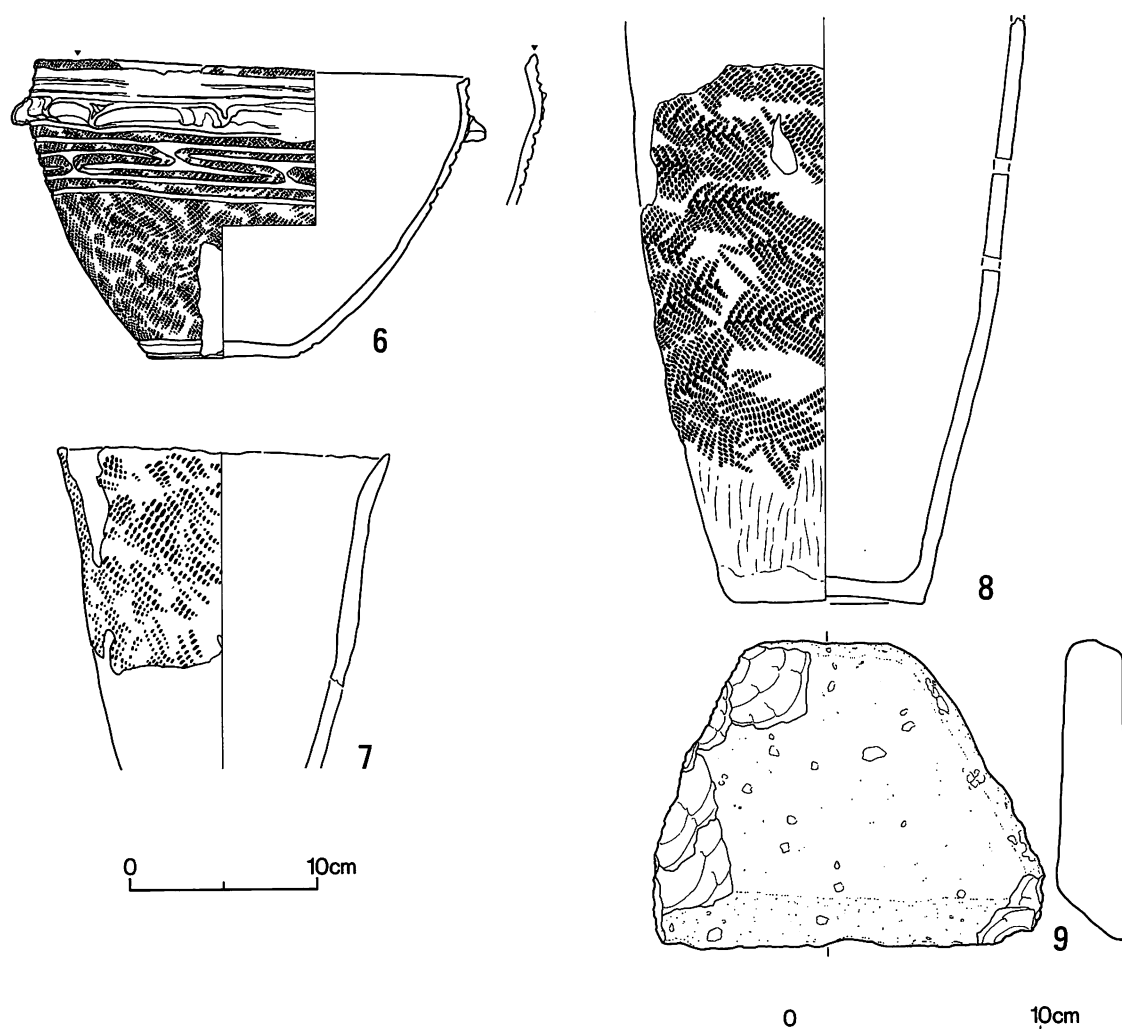


図V-35 その他の土壌 P-16・P-36・P-39~41・P-44





図V-36 その他の土壌の遺物(1)



図V-37 その他の土壌の遺物(2)

で区画された内側には半截竹管による刺突文が施されている。体部には結束羽状縄文が施されている。4は底部。5は縄文地に沈線で文様が描かれるもの。口縁には4か所の小突起があり、突起の部分ではやや外反する。口縁部の文様帯は横位の沈線文によって上下を区画され、その間に二重の円形文が横に並ぶ。沈線は細く、断面はV字形である。口唇にも2条の沈線がめぐる、

P-36(6): 6はV群B類。亀ヶ岡系の鉢形土器である。

P-44(7・8): 7・8はIII群A類。7は口縁が開く平縁の土器。体部には斜行縄文が施されている。8は結束羽状縄文の施された体下半部。内面は丁寧に調整されている。

(工藤 研治)

#### 石器(図V-37-9)

P-7(9): 9は扁平打製石器である。礫素材で図の左端に両面の加工がある以外は図にない裏面に不連続な整形が見られるのみ。すり面も未形成である。(西脇対名夫)

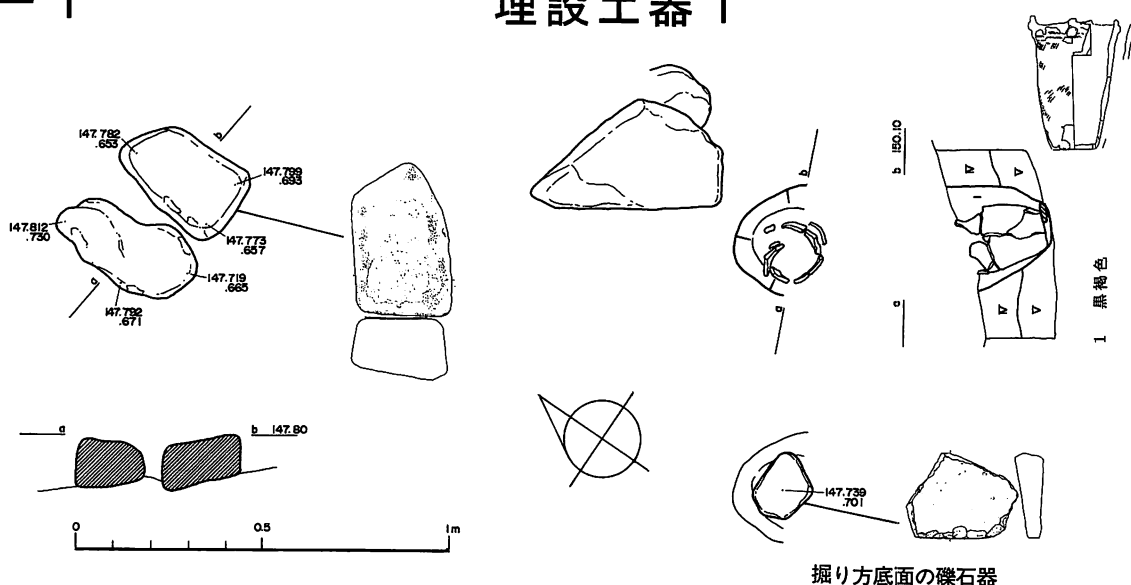
#### 註

1. 聖山遺跡・七飯本町1遺跡・国立療養所裏遺跡で報告されている。文献は表を参照。

2. 石本省三編 1991 『上藤城7遺跡』 七飯町教育委員会

# S - 1

# 埋設土器 1



図V-38 S-1と埋設土器 1

## 4. 配石遺構

S-1 (図V-38・39)

位置 L-17

特徴 V層上面で石皿と石皿様の礫が2点並んで出土した。周囲を精査したが、掘りこみなどは確認できなかった。

遺物 図V-39-3は石皿である。一方の主面のほぼ全体が平滑なすり面となっている中にごく弱い稜があり、二つの弱く凹んだすり面が複合しているように思われる。

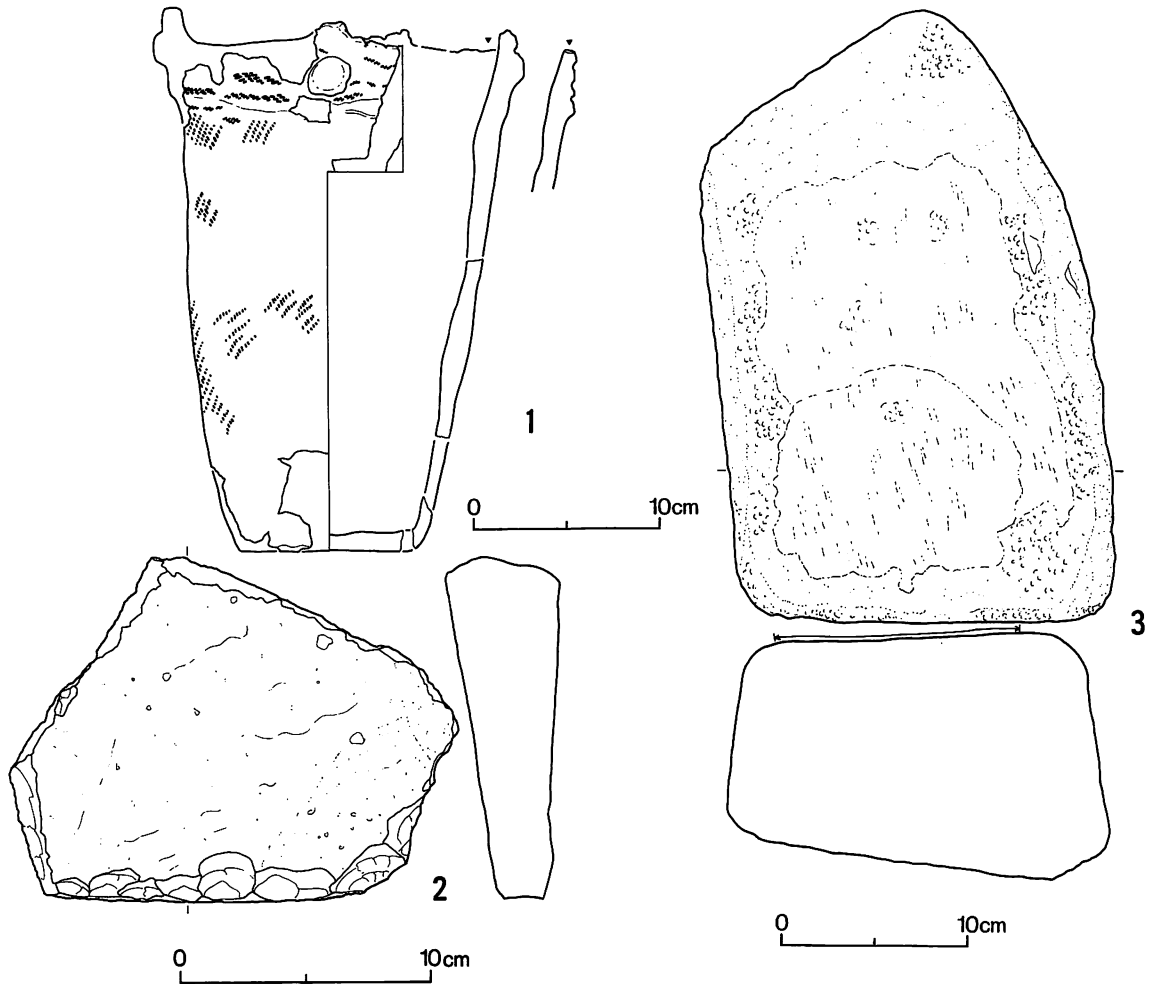
## 5. 埋設土器

埋設土器 1 (図V-38・39, 図版17)

位置 K-24

K-24区をIV層上面まで掘り下げたところで検出した。土器の上半はすでに取り上げていたが、残った部分を半割したところ、土器を埋設した遺構であることがわかった。土器の大きさ程度の小ピットの底に2の扁平打製石器が敷かれ、その上に1の土器が底部を下に置かれていた。

遺物 図V-39-1はII群B類土器。4か所の小突起がある。口縁部には縄線文が2～3条めぐり、突起下にはボタン状の貼りつけがある。体部には疎らに斜行縄文が施されている。胎土には砂が多く含まれており、脆い。2は扁平打製石器。礫素材らしい。図の左端・左縁は意図的な折面か。上縁には図化した面から整形が入る。下縁の両面に浅い調整があるが礫面は1 cm以上の幅で残り、すり面は未形成。  
(工藤 研治)



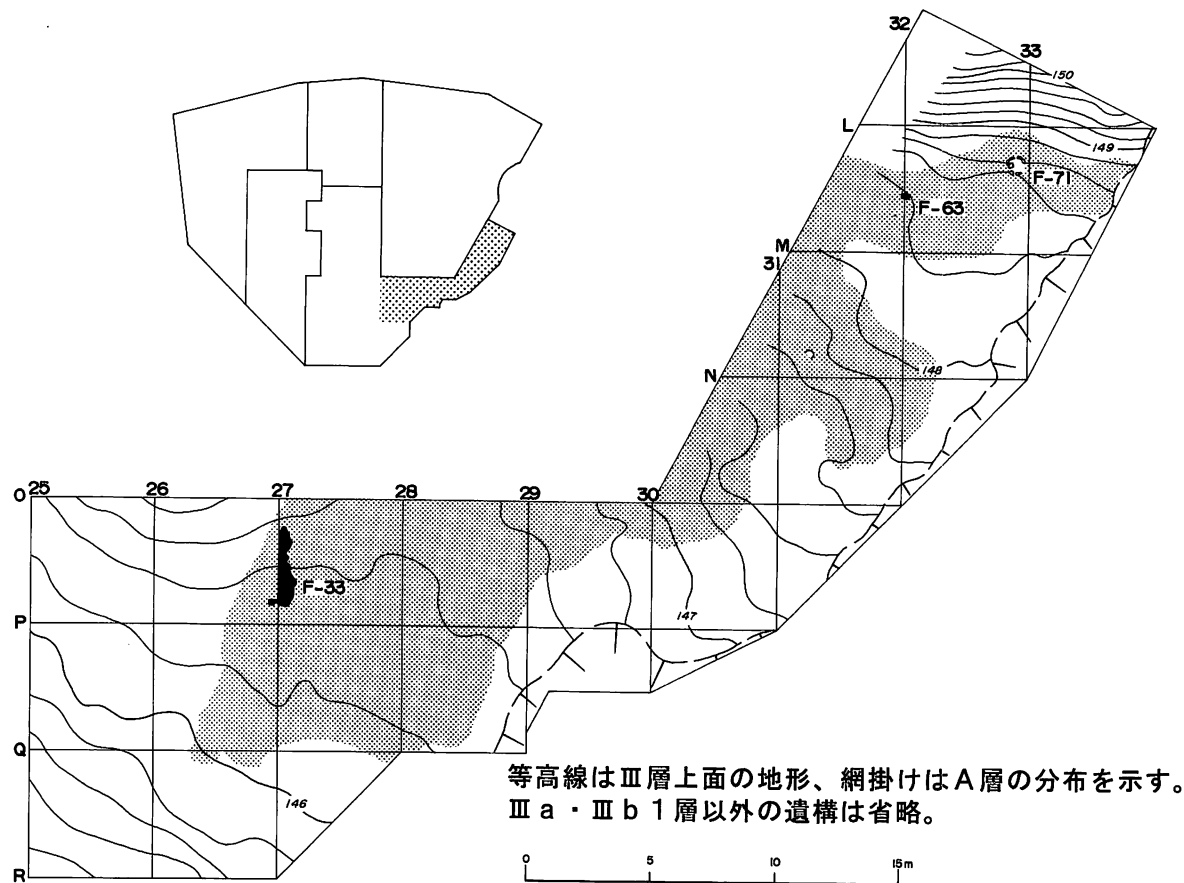
図V-39 埋設土器1とS-1の遺物

## 6. 炉・焼土

### 1) III a・III b 1 層の炉・焼土 (図V-40・41)

III a 層では焼土1基, III b 1 層では炉・焼土各1基が確認された。III a 層のF-63は同じ層の土壌(P-36)から5 mほど離れ, またIII b 1 層の炉と焼土は互いに離れて存在する。III b 1 層中では他の遺構は確認されていない。F-63は遺存部分の長径0.4mと小さい。III b 1 層の焼土F-33は長径3.1mと段丘面の焼土としては最も大きい。石囲炉F-71は平面正方形に近く一辺約0.7m。厚さ20cm弱の焼土をともない, 遺存していた炉石7点の大きさは次のとおり(長径×短径×厚さcm/重さkg)。29×23×11/7.8, 25×22×11/6.9, 20×19×12/5.1, 24×18×8/4.1, 18×14×6/2.2, 21×9×8/2.0, 19×14×5/1.8。

F-63はIII a 層上面付近, F-33・71はIII b 1 層の下面付近で確認。F-33は赤く変色した部分がなく, 最大でも径5 cm程度の炭化材片がIII b 1 層に混じった状態であった。F-71は炉石の天辺が平坦に揃っており, これが構築面を示すとすればIII b 1 層下部に作られたものである。F-33・63では発掘中に出土した遺物はなく, 浮遊選別でも人工遺物は認められなかった。F-33は炭化物の量が非常に多く, 試料1 kgあたり4～7 g以上が得られている(表V-1)。多量の炭化材の他にキハダ属などの種子も認められる(Ⅷ章3節)。F-71ではほぼ炉石天辺の高さで周囲のIII b 1 層から主に縄文時代後期初頭の土器が出土し(図V-41), また焼土の浮遊選別で土器・剥片を見出した。土器はほぼ隣接する遺



図V-40 Ⅲ a・Ⅲ b 1層の焼土の分布

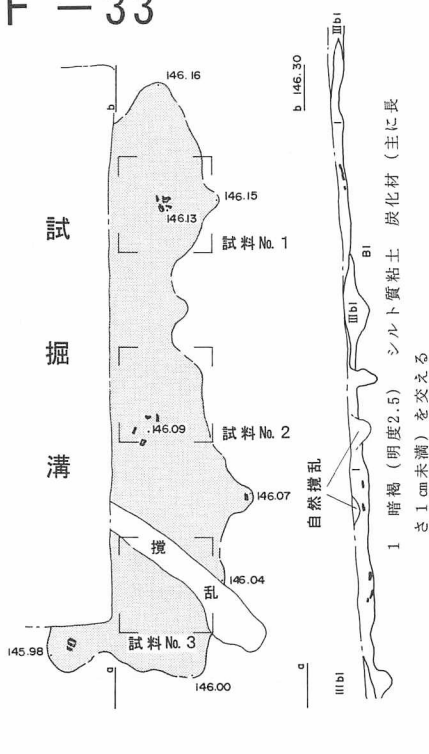
構・グリッド間で接合している。F-64覆土の遺物と接合している例があるが、これは地表に露出していたF-64に後期初頭の遺物がそれにもぐり込んだためで、F-64と71の関連を示すものではないと考えている。

F-63は周辺の出土遺物から縄文時代晩期中葉のものである可能性が高い。F-33は覆土・周辺の同じ層準から人工遺物が出土していないが、他のグリッドではB 1層上面で完形に近いⅢ群B類土器が出土していることを考えると、縄文時代中期後半に近い時期が推定される。F-71は出土土器から縄文時代後期初頭のもものとみられる。炭化物だけが集中していたF-33は他の場所で焼けたものを廃棄したとも、また低湿な場所で燃えたために生焼けで残ったとも考えられる。F-71は南隅の炉石を抜いている可能性がある。

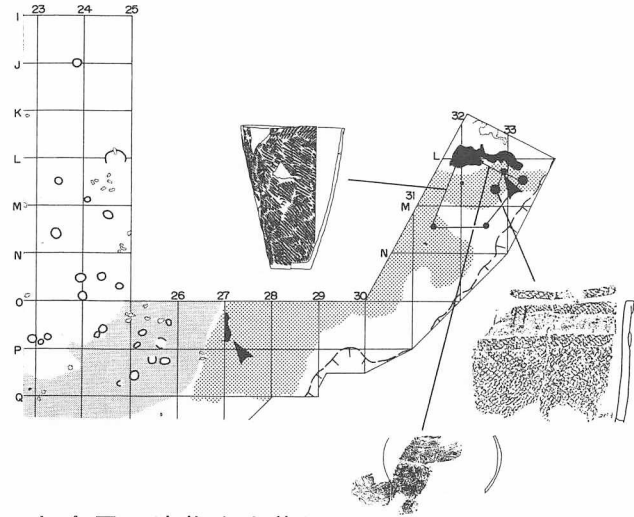
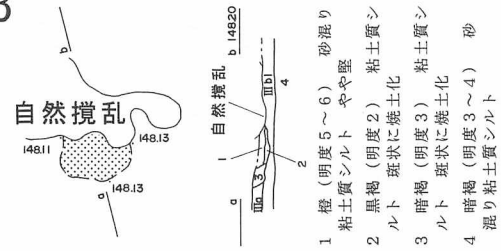
## 2) B 1層の焼土 (図V-42~44, 図版19)

B 1層では焼土13基 (F-72に2基の焼土が含まれるが、F-62・68は一連の焼土である可能性が高い。一応総数13基としておく) が他の遺構を交えずに発見された。B 1層を調査できた範囲は限られており (図V-42)、この範囲についてもB 1層上面から0.5~1 m程度の深さを掘削するにとどまった。調査できた限りでは段丘面1の最も奥、段丘崖の裾に沿って確認されたものが多い。R-23区からO-25区にかけてはあまり間隔を置かずに焼土が連なり、2基がほぼ同じ位置に重複しているものも2例見られた (F-66・67, 73・75)。なおB 1層は鳴川の氾濫原に堆積したものと考えられるので、形成後間もなく厚い堆積物に覆われてその後侵蝕を受けなかった焼土だけがたまたま遺存しているものと考えられるべきであろう。焼土の規模は様々であるが、長径1 m以上の、この遺跡の焼土として

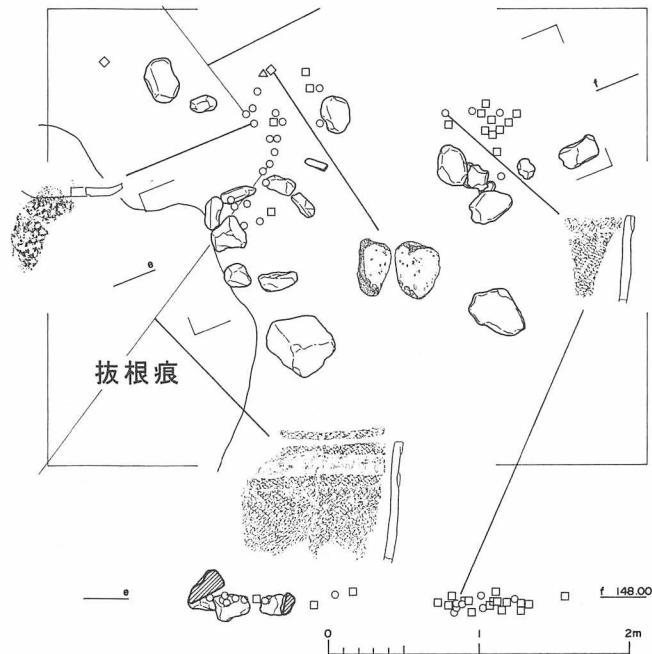
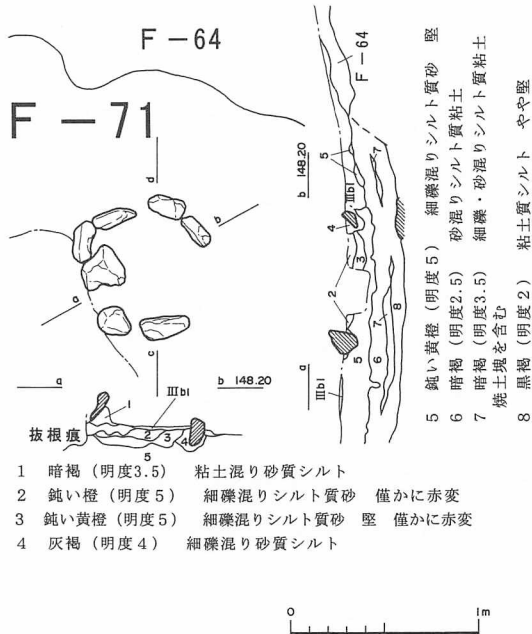
F-33



F-63

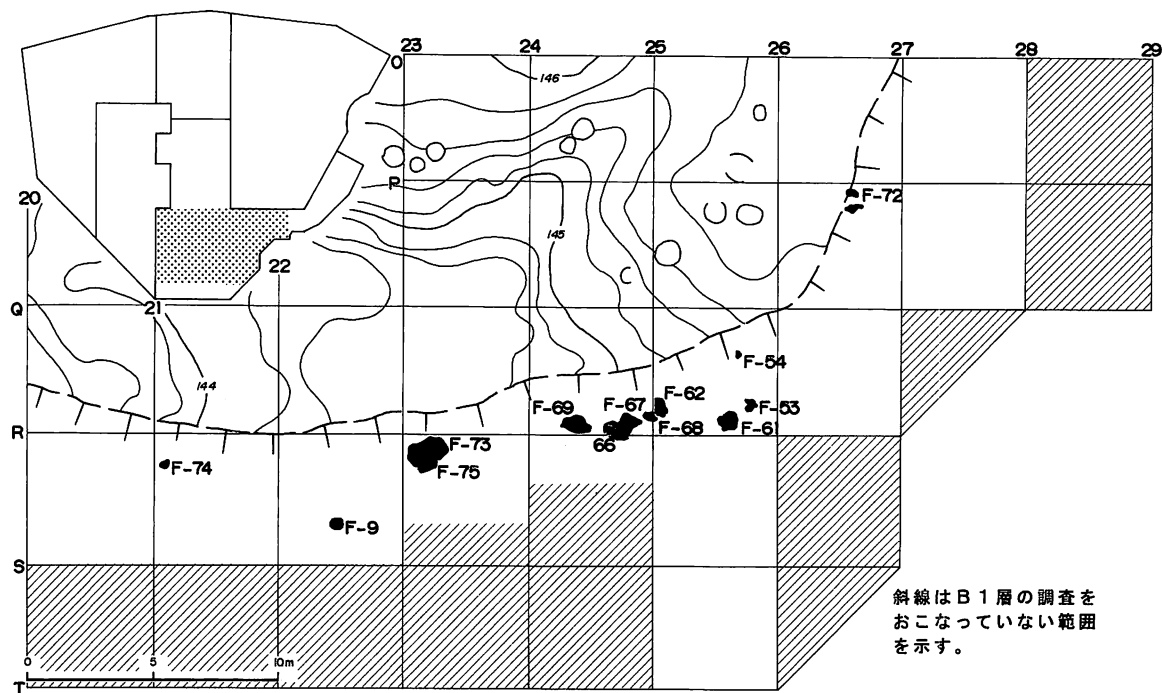


周辺包含層の遺物出土状況



図V-41 III a・III b 1層の焼土 F-33・63・71

は大きなものが3基 (F-67・69・73) 見られる。これはB 1層では赤く変色した焼土の周囲に炭化物が濃く分布する例が多く (F-53・61・62・67~69・72・73・75) この範囲までを焼土として計測したことによる。厚さは多くが10cm未満である。焼土はB 1層の中でもシルト質で腐植の多い特定の面に形成される傾向があり、R-23区からO-25区付近では間層を挟んで少なくとも2つ以上の面で確認された。上位の面は標高144.5m前後で



等高線はV層・B層上面の地形を示す。B2層の遺構は省略。

図V-42 B1層の焼土の分布

F-53・66・67があり、下位には144.2m前後の標高でF-61・62・68・69・73～75がある。炭化物の散布はほぼこの腐植質の面に限られ、赤く変色した部分はその下の砂礫に及ぶ。掘り込みや焼土・灰のかき出しが確認できたものはない。

発掘中に確実な人工遺物が出土した焼土はない。浮遊選別の過程で少数の土器細片と頁岩製の細かい剥片が見出された(表V-1)。F-53(38点)出土の剥片は本遺跡の浮遊選別試料から得られたものとしてはF-49(204点)に次ぐ。焼け弾けのある剥片を含み、焼土にともなうものとみて差し支えないようである。炭化物の量は概して多く、土壌1kgあたり1gを超えたものが7基、F-61では8.31gに達した(表V-1)。炭化種子はF-62でブドウ属、F-68でマタタビ属が見出されている(VII章3節)。

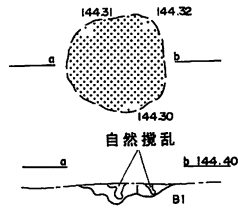
B1層中では主にIII群A類土器の破片が出土し、またB1層上面ではIII群A類の新しい類やIII群B類が完形に近い状態で出土することから、焼土の年代もほぼ縄文時代中期中葉に限定される。覆土や炭化物のあり方は焚火がなかば自然に消えて放置された状況を示すように思われ、同じ位置に重複する例は焼土群の年代的な幅を示すというよりむしろ、短い期間に同じ人間が場所を決めて何度も火を焚いたことを思わせる。

### 3) III b 2・B2層の炉・焼土(図V-45～48, 図版19)

段丘面2に堆積するIII b 2・B2層では石囲炉と焼土合わせて13基が確認された。このうち確実な石囲炉(F-12)と、本来石囲炉であった可能性の高い焼土(F-16)が各1基。すべて山地の斜面とD層下位の巨礫群が作る高まりとに挟まれた谷状の凹地の底で検出されている。P-20区からO-25区にかけてこの凹地に沿って帯状の分布を見せ、また少し離れてP-16区に1基がある(図V-45)。同じ層準に2基が隣接して形成された例が

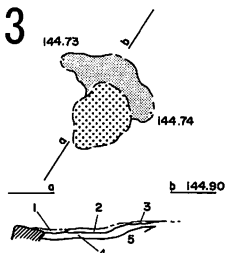


F - 9



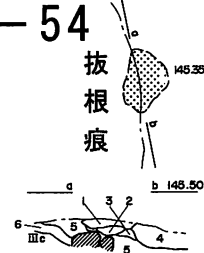
- 1 鈍い橙 (明度4~6) シルト質砂 炭・骨を見ず

F - 53



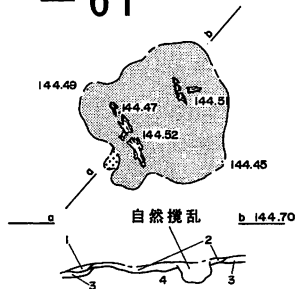
- 1 砂 (B1層)
- 2 橙 (明度6) シルト質砂 炭・骨を見ず
- 3 暗褐 (明度3) 粘土混りシルト質砂 炭片を含む
- 4 腐植質土 (B1層)
- 5 砂礫 (B1層)

F - 54



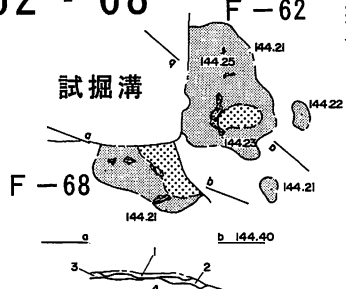
- 1 鈍い黄橙 (明度5) 砂混りシルト やや堅 稀に炭片を含む
- 2 黄橙 (明度6~7) 粘土混りシルト やや堅 炭を見ず
- 3 灰黄褐 (明度4) 粘土混りシルト 炭を見ず
- 4 砂質シルト
- 5 腐植質土
- 6 砂礫 (4~6はB1層)

F - 61



- 1 黄橙 (明度6~7) 細礫混り砂質シルト 炭を見ず
- 2 暗灰褐 (明度3.5) 砂混り粘土質シルト 炭化材を含む
- 3 腐植質土 (B1層)
- 4 砂礫 (B1層)

F - 62 - 68

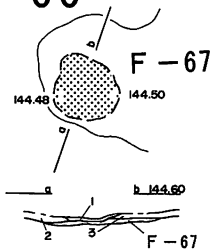


- 1 暗灰褐 (明度3.5) 砂混り粘土質シルト 炭化材を含む
- 2 鈍い橙 (明度5~6) 砂混りシルト質粘土 稀に炭を含む
- 3 腐植質土 (B1層)
- 4 砂礫 (B1層)

- 1 灰黄褐 (明度3.5) 砂混り粘土質シルト 炭化材を含む
- 2 鈍い黄橙 (明度4) 粘土に炭土化
- 3 腐植質土 (B1層)
- 4 砂礫 (B1層)

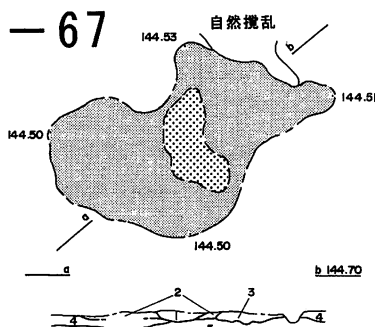


F - 66



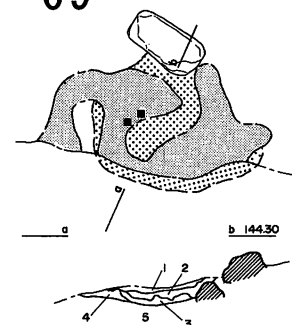
- 1 赤橙 (明度5~6) 砂 堅 炭・骨を見ず
- 2 砂 (B1層)
- 3 腐植質土 (B1層)

F - 67



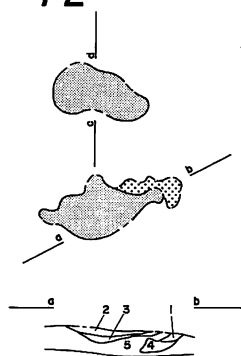
- 1 鈍い橙 (明度4) 粘土混り砂質シルト やや堅 稀に炭を含む
- 2 暗褐 (明度3) 砂混り粘土質シルト やや堅 炭化材を含む
- 3 暗褐灰 (明度3.5) 砂混り粘土質シルト やや堅
- 4 腐植質土 (B1層)
- 5 砂礫 (B1層)

F - 69



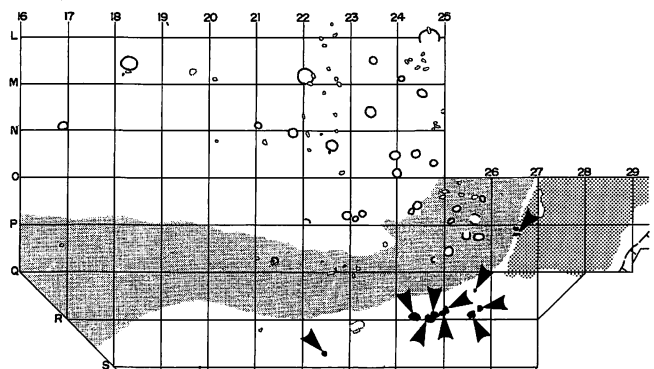
- 1 黄褐 (明度4) 砂混り粘土質シルト 炭化材を含む
- 2 黄橙 (明度6) シルト質砂 堅 焼土
- 3 鈍い赤橙 (明度5) シルト質砂 堅 焼土
- 4 腐植質土 (B1層)
- 5 砂礫 (B1層)

F - 72



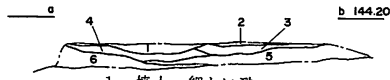
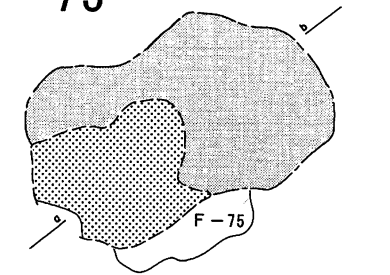
- 1 赤褐色焼土
- 2 黒色土 炭化物混り
- 3 明褐色砂 (B1層)
- 4 暗褐色砂 (B1層)
- 5 褐色砂 (B1層)

- 1 黒色土 炭化物混り
- 2 黒褐色砂 (B1層)
- 3 明褐色砂 (B1層)
- 4 暗褐色砂 (B1層)
- 5 褐色砂 (B1層)



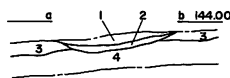
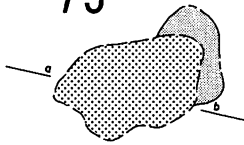
図V-43 B1層の焼土(1)

F-73



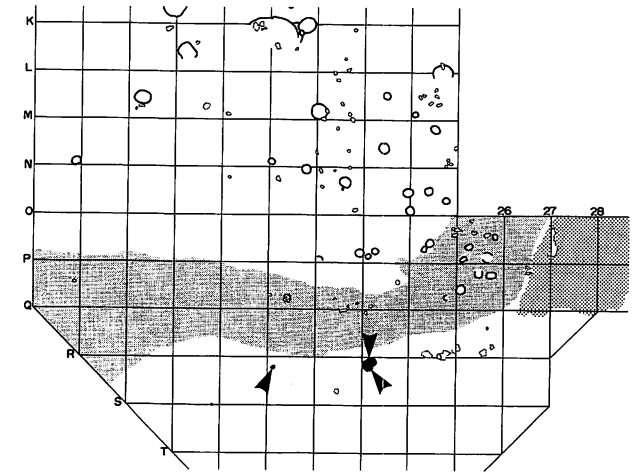
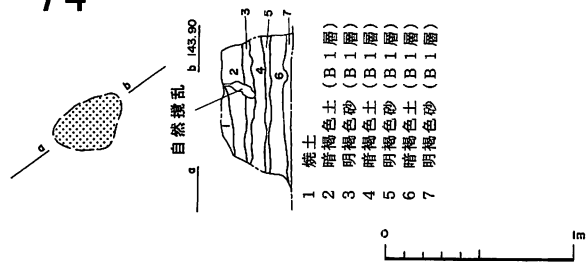
- 1 焼土 細かい砂
- 2 褐色砂
- 3 黒褐色砂 炭化物混入
- 4 暗赤褐色焼土 粗い砂
- 5 白色砂 (B1層)
- 6 褐色土 (B1層)

F-75



- 1 赤褐色焼土
- 2 暗赤褐色焼土
- 3 黒褐色土 (B1層)
- 4 灰色砂 (B1層)

F-74

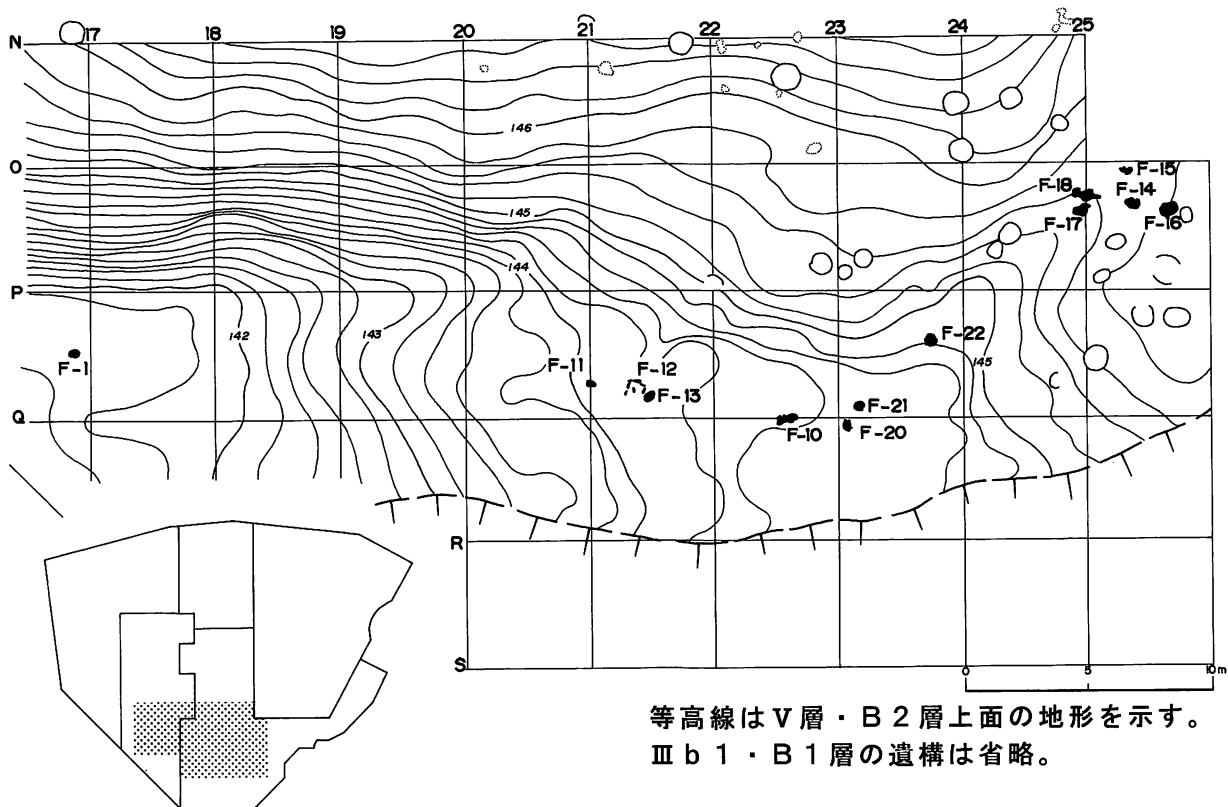


図V-44 B1層の焼土(2)

あり、付近に土壌が作られることもあるが、炉・焼土相互、あるいは他の遺構との重複・切り合いは認められない。ただし土壌B類の1つがⅢb2層かB2層の石囲炉を壊して作られた可能性があることについては先に述べた(本書 p. 50)。あまり規模の大きい焼土はなく、長径で最大1.0m (F-18) 程度、厚さも10cm を大きく超えない。F-12は一边約0.7m の方形で、焼土の厚さが20cm 近い。遺存していた炉石8点の大きさは26×23×8/7.5, 38×16×8/6.8, 31×15×9/6.2, 24×17×8/4.9, 26×16×6/3.6, 20×19×8/3.6, 18×18×8/2.5, 19×12×8/2.0 (以上 cm/kg)。F-16は長径1 m ほどの囲いが想定される。

F-14・15はⅢb2層の下部で、その他の炉・焼土はB2層で確認した。B2層の中には焼土の形成される面が複数あるようだが明確な分層はできなかった。B2層下部の比較的砂礫がちの部分(図IV-6のB2-10層, 図IV-8上のB2-7層など)から下位では見つかっていない。覆土の状況から、多くはその場で形成された焼土で、明確な掘り込みをもたないことを観察できる。ただしF-17・18・20は下位のB2層との境が画然としており、形成された場所から動いている可能性もある。F-20は隣接するF-21から掻き出された焼土、F-17・18は付近の礫群とともに石囲炉を壊した跡であるのかも知れない。F-16周囲には炉石の抜き取り痕と思われる落ち込みがめぐる。なおF-12の東側に斜面を切る立ち上がり、同周囲には大きな礫のない平坦な面が認められたが、人為的な掘り方ではないと判断した(図V-46)。

発掘中には覆土から縄文時代前期の土器(F-12・16)、石皿(F-22)、礫(F-14・16)などが出土し、周辺の包含層でも主に前期の土器・礫石器・礫などが見られた。遺物



図V-45 III b 2・B 2層の焼土の分布

の出土位置を記録したF-17・18周辺では、縄文時代中期の遺物は攪乱によって混入したものであることを確認できる(図V-47)。傍らに石皿が平坦に据えられていた例(F-21)もある。浮遊選別では土器細片と頁岩製の剥片少数が見つかった(表V-1)。炭化物は土壌1 kgあたり0.2g前後かそれ以下と比較的少ない。タデ属(F-17)などの炭化種子が確認された(Ⅶ章3節)。

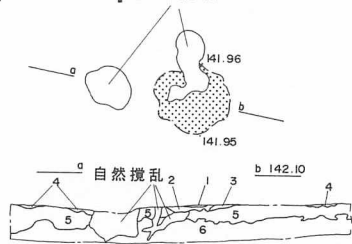
III b 2層のF-14・15は縄文時代中期以降に下る可能性もあるが、他は縄文時代前期後葉の遺構である。覆土中や付近の包含層に土器や台石・石皿をとまなう例が多く、それらを用いた作業の跡とも考えられる。ただし土器は斜面の包含層から出土した破片と接合することも多く、偶然炉・焼土付近に転落した(あるいは投棄された)ものが含まれるようである。F-12は西側、F-16ではほぼ全周の囲いを抜き取っているようであり、F-17・18についても石囲炉を意図的に壊した可能性が皆無でない。廃用時の儀礼であろうか。

#### 4) 斜面の焼土 (図V-49～58, 図版18)

斜面部分では49基の焼土が確認された。分布は広いが住居跡や土壇の分布範囲に概ね重なり、19ライン・Kラインから東側では見つからない。住居跡の凹みに形成されたものが5基(F-19・50～52・60)、土壇A類・B類の上位にあるものがそれぞれ3基(F-42・43・48)・1基(F-23)。焼土相互の重複・切り合いはない。K～N-22区、L-24区で小さい焼土が一定の面にまとまるように確認されている(図V-49・52)。

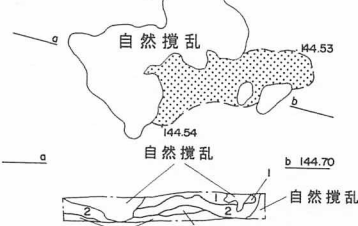
斜面東南端にこの遺跡で最も大きい焼土が確認され(F-64・65)、さらに未調査範囲へ続いている。それ以外はむしろ小さく、24基までが長径0.5m以下、厚さも10cm前後かそれ以下のものが多い。B 1層の焼土のように炭化物の集中範囲が確認できた例はない。

F-1 自然攪乱



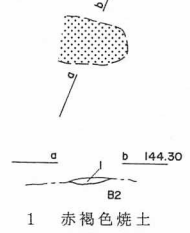
- 1 暗褐 (明度2.5) 砂混り粘土質シルト
- 2 橙 (明度5) 砂質シルト 斑状に焼土化
- 3 暗褐 (明度3~4) 砂質シルト 焼土混り
- 4 暗褐 (明度2.5) 粘土質シルト (B2層)
- 5 灰黄褐 (明度3~4) 砂質シルト (B2層)
- 6 鈍い黄橙 (明度5) シルト質砂 (B2層)

F-10



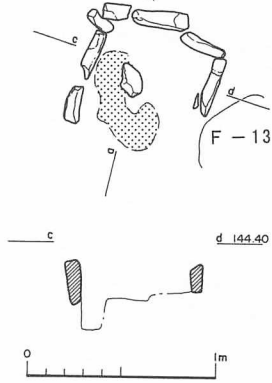
- 1 橙 (明度5) 砂質シルト やや堅 炭見ず
- 2 灰黄褐 (明度3) 砂混り粘土質シルト (B2層)
- 3 鈍い黄橙 (明度5) 砂 (B2層)
- 4 暗褐 (明度2.5) 粘土質シルト (B2層)

F-11

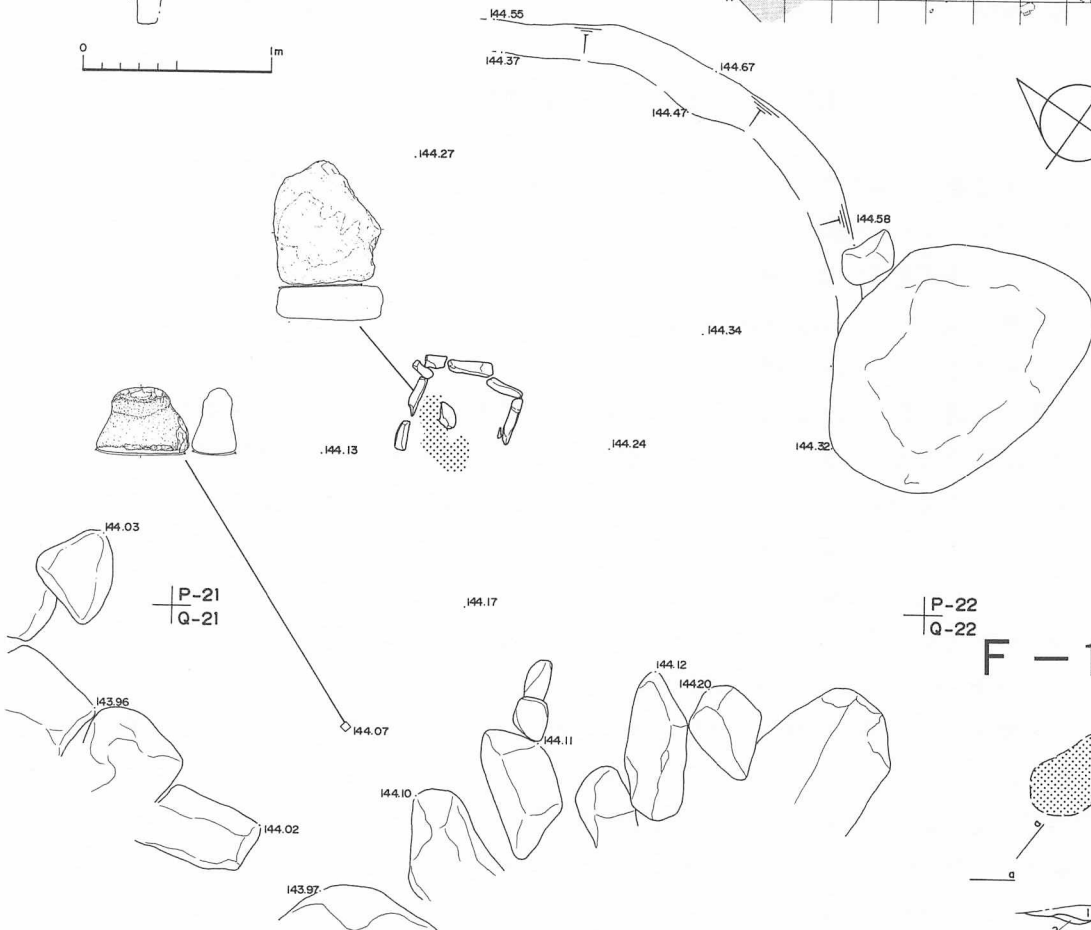
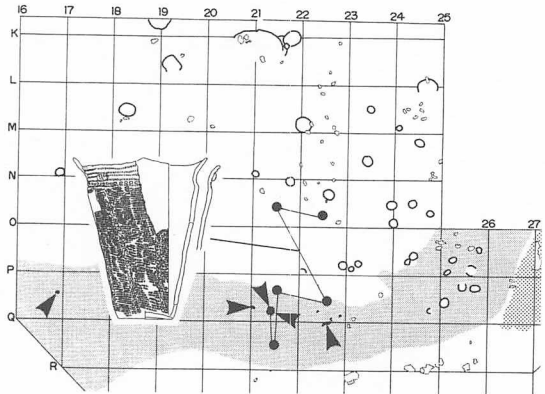


- 1 赤褐色焼土

F-12

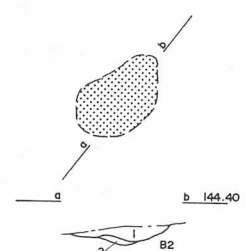


- 1 黒色土 細かい砂を少し含む
- 2 焼土 細かい砂が焼けている
- 3 黄灰色砂 (B2層)
- 4 黒褐色 砂+腐植土 (B2層)
- 5 暗灰色砂 (B2層)
- 6 明黄灰色砂 (B2層)
- 7 暗褐色砂 (B2層)
- 8 黒褐色砂 (B2層)
- 9 明黄褐色砂 (C層)



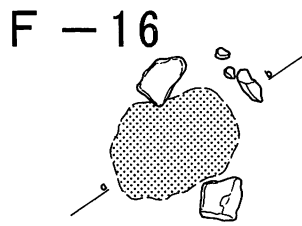
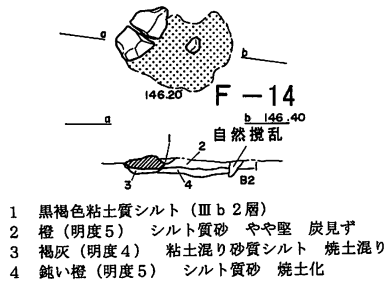
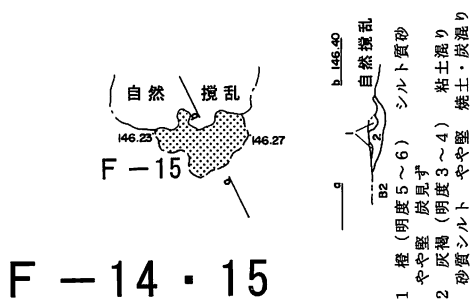
F-12周囲の平坦面と巨礫の分布

F-13

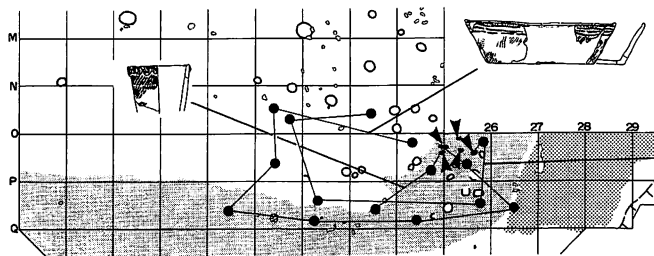
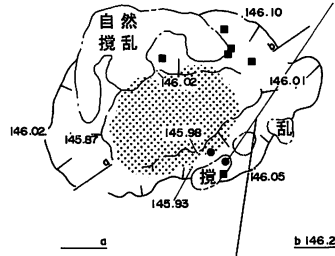


- 1 赤褐色焼土
- 2 焼土混じり暗赤褐色

図V-46 III b 2・B 2層の焼土(1)

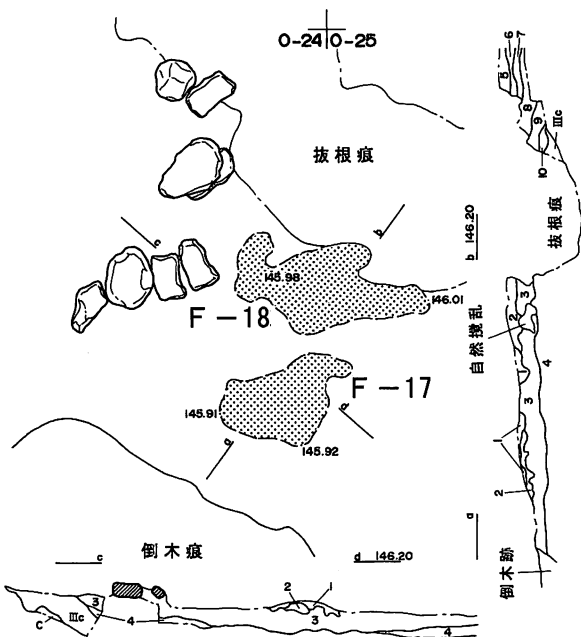


F-16周囲の落ちこみと遺物の出土状況



F-17・18

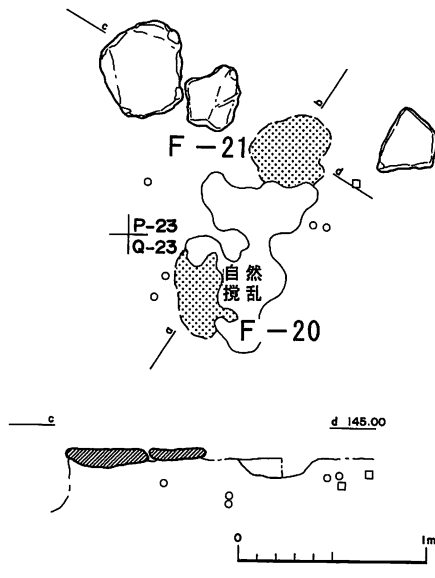
周辺包含層の遺物出土状況



- 1 灰黄褐 (明度 4) 砂混りシルト質粘土 焼土混り 炭見ず  
2 黄橙 (明度 4~7) 砂混り粘土質シルト 焼土化 炭見ず  
3 黒褐色シルト質粘土 (B 2層)  
4 鈍い黄橙色砂 (B 2層)  
5 黒褐色粘土質シルト (III b 2層) 6 鈍い黄橙色砂 (B 2層)  
7 黒褐色シルト質粘土 (B 2層) 8 鈍い黄橙色砂 (B 2層)  
9 暗褐色粘土質シルト (B 2層) 10 鈍い黄橙色砂 (B 2層)

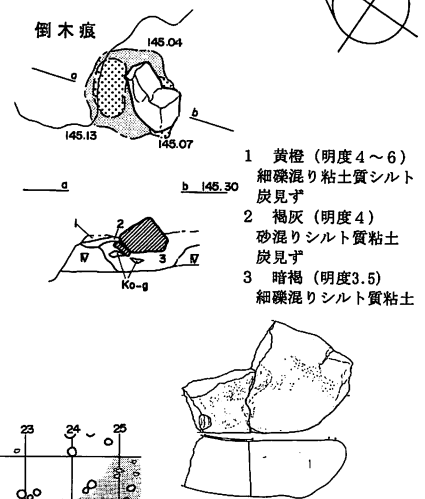
図V-47 III b 2・B 2層の焼土(2)

F-20・21



- 1 黄橙 (明度5~6) 砂質シルト  
2 暗褐 (明度3) 砂質シルト  
3 暗褐 (明度4~5) シルト  
4 暗褐 (明度3) 粘土質シルト  
5 暗褐 (明度3) 粘土質シルト  
6 暗褐色粘土質シルト  
7 暗褐色粘土質シルト  
8 暗褐色粘土質シルト  
9 暗褐色砂混り粘土質シルト  
(6~9はB2層)
- やや堅 焼土化 稀に炭を含む  
やや堅 焼土化 稀に炭を含む  
やや堅 焼土化 稀に炭を含む  
やや堅 焼土化 稀に炭を含む  
やや堅 焼土化 稀に炭を含む  
やや堅 焼土化 稀に炭を含む  
やや堅 焼土化 稀に炭を含む  
やや堅 焼土化 稀に炭を含む  
やや堅 焼土化 稀に炭を含む

F-22

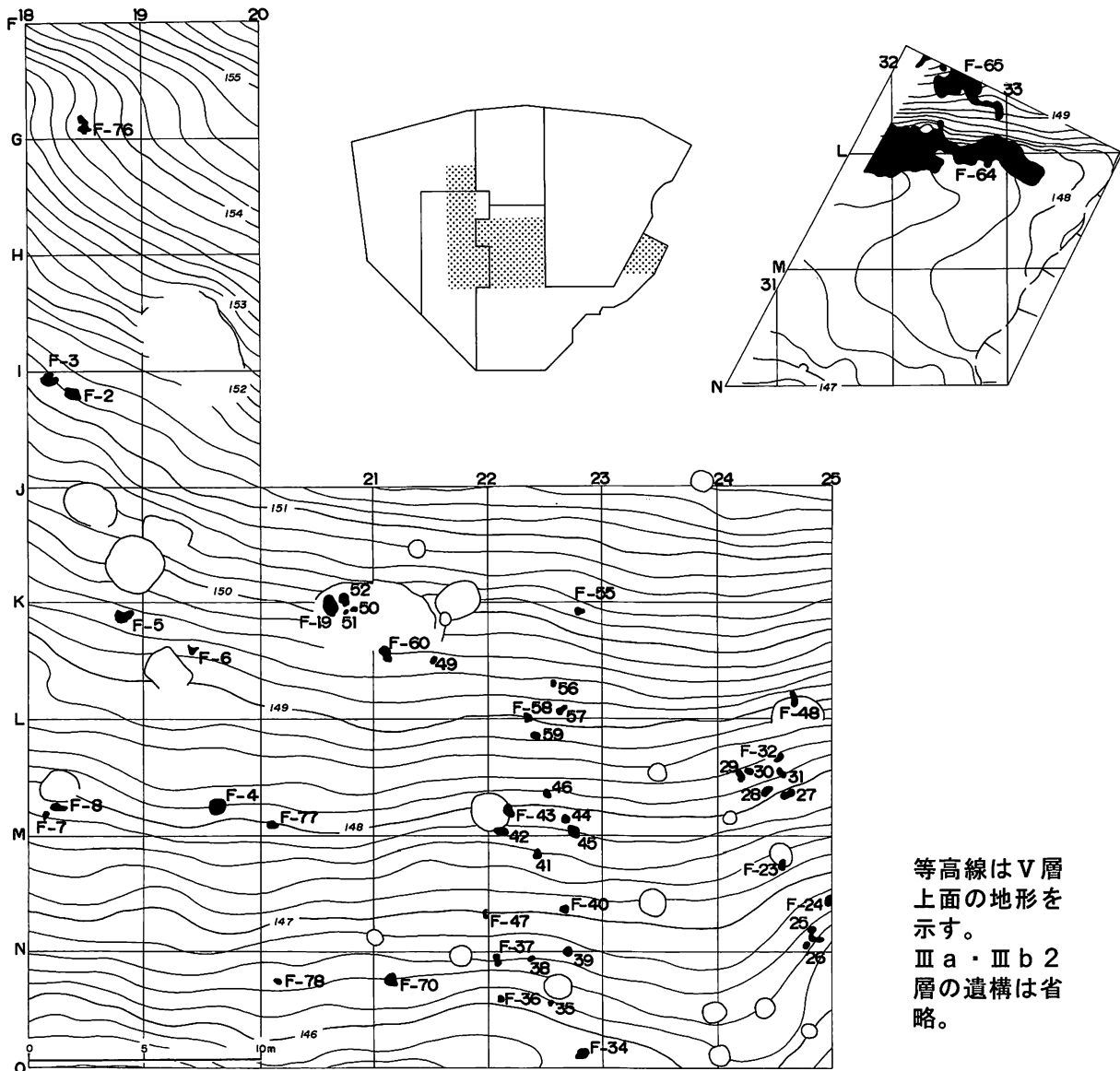


図V-48 III b 2・B 2 層の焼土(3)

焼土の多くがIII層の上部から中ほどで確認されている。Ko-g 層より下で確認されたものは1基 (F-77) のみで、これも倒木痕の中にあつて層位が混乱しているおそれがある。倒木痕の中で確認された焼土は他にも3基 (F-2・3・78) あり、住居跡内のものと同様に凹みを利用して形成された可能性がある。覆土の下限は焼土からやや曖昧に下位のIII層へ漸移するものが多く、その場で形成されたことを示唆する。ただF-64はかなり明瞭な下限の上に焼土が厚く堆積しており、炎の高熱に曝されるはずの上面付近に焼けた遺物が少ない (図V-54) ことから、斜面で形成された焼土が流れ落ちたものではないかと考える。掘り込みや焼土の掻き出しが確認されたものはない。

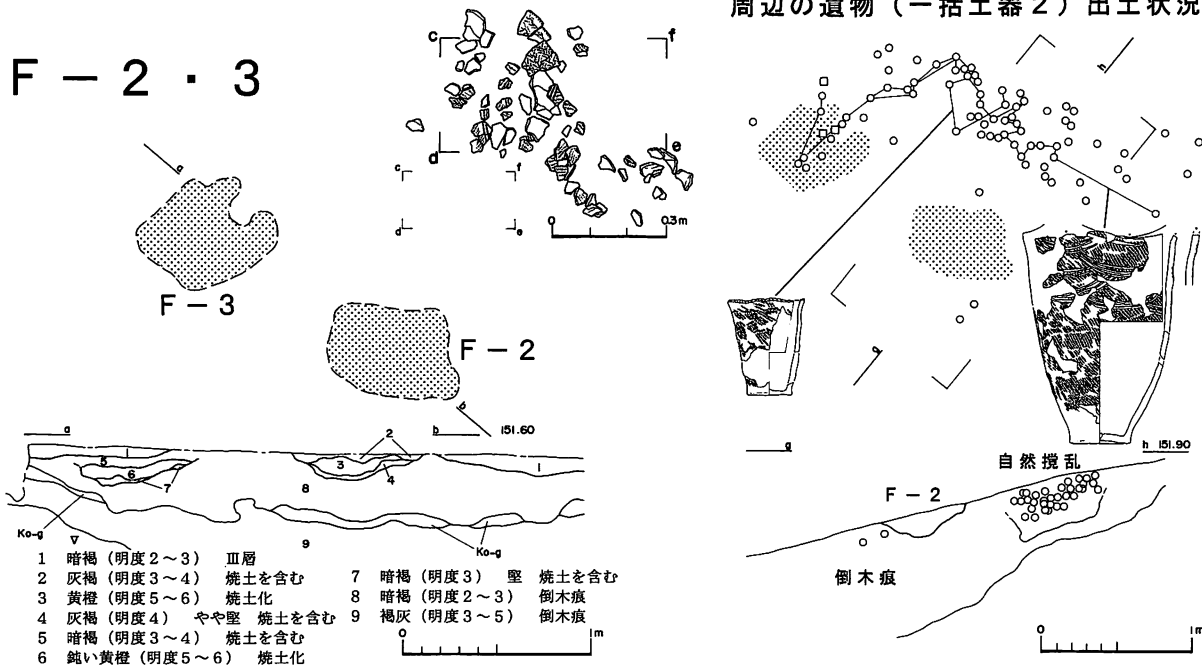
発掘中に覆土からは土器・礫が少数出土し (表V-2)、台石あるいは比較的大きな礫をともなったもの (F-5・57・70) も3基ある。周辺の包含層では焼土上面に近い高さではほぼ完形の土器 (F-2~4) や河原から運び上げた礫 (台石・石皿を含む) がまとまって出土する例 (図V-52) が注意された。F-64・65は覆土から多数の礫が出土した点で特異であるが、その多くはV層に含まれている風化礫で、人為的なものかどうか疑問がある。またF-64出土の土器の多くは後に上位から入り込んだ可能性があり (p. 72)、結局F-64・65は規模の割に人工遺物がかなり少ないように思われる。浮遊選別では少数の土器・頁岩製剥片が見出されたのみであるが、F-49覆土の試料からは焼け弾けのあるものを含め204点の剥片が選別された。炭化物量は土壌1kgあたり0.1g未満の例が一般的である (表V-1) が、F-50では3.88gと例外的にかなり多い。

上面付近で完形に近いIII群A類土器が出土したF-2~4、住居跡H-4の凹みにあるF-19・50~52・60は縄文時代中期中葉の遺構と推定される。B1層の上部に切られているF-64、これと一連のものとみられるF-65は中期後半より古くなる可能性が高い。その他については時期の判断は困難である。焼土付近で土器や礫石器が出土していることか



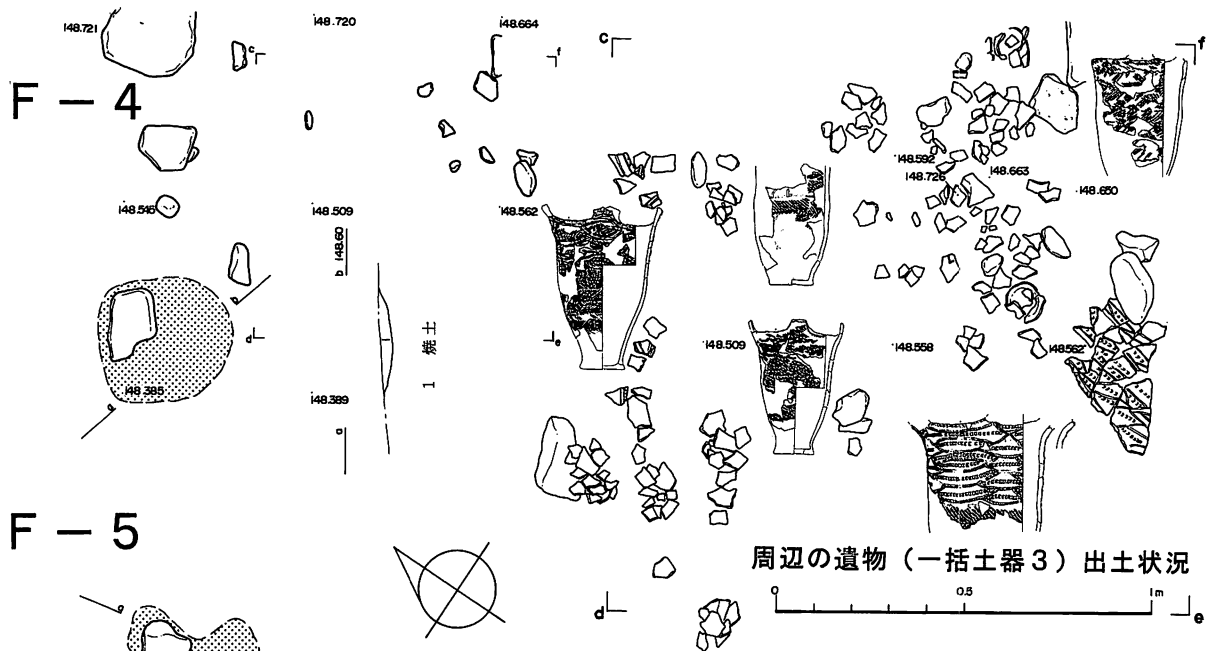
周辺の遺物（一括土器2）出土状況

F-2・3

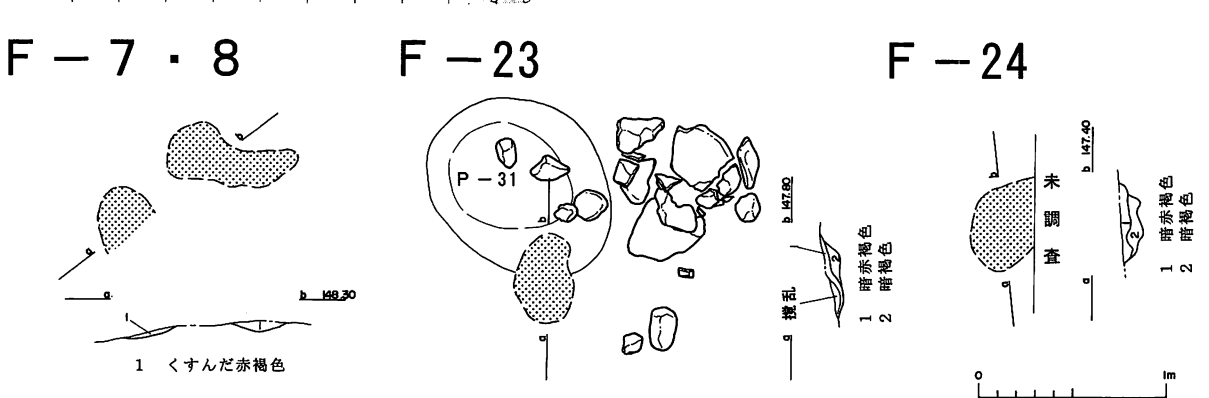
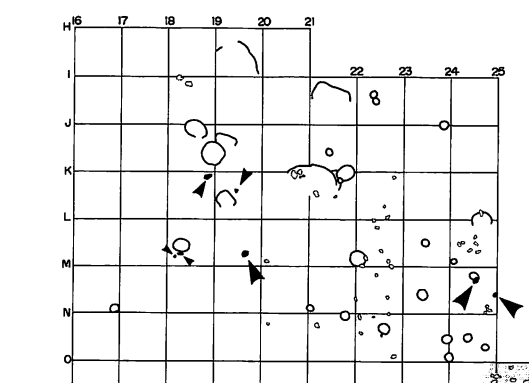
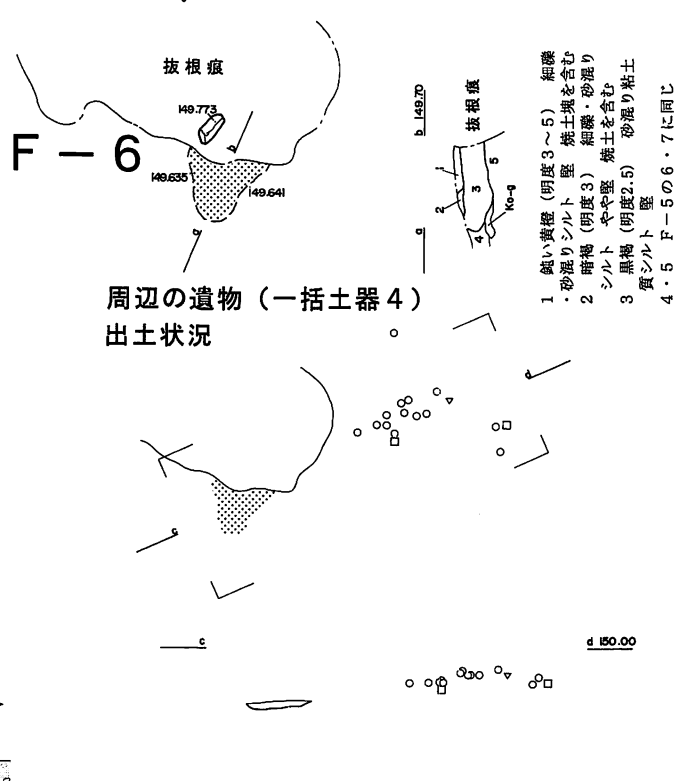


図V-49 斜面の焼土(1)



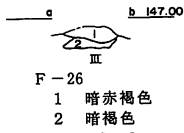
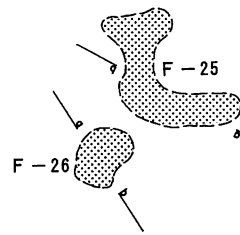


- 自然攪乱
- 1 暗褐（明度3）シルト 焼土混り
  - 2 暗褐（明度3）細礫・砂混りシルト 焼土含む
  - 3 鈍い黄橙（明度4～6）細礫・砂混りシルト 焼土化
  - 4 暗褐（明度3）粘土質シルト 焼土混り
  - 5 黒褐（明度2.5）細礫・砂混りシルト 堅 遺構掘揚土か
  - 6 暗褐（明度3）粘土質シルト（Ⅲ層）
  - 7 褐灰（明度3.5）細礫・砂混りシルト やや堅（Ⅲ層）

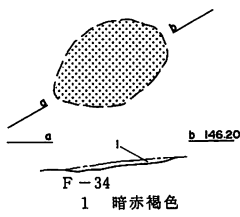


図V-50 斜面の焼土(2)

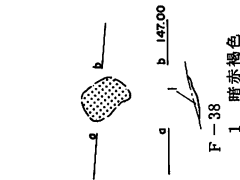
F-25・26



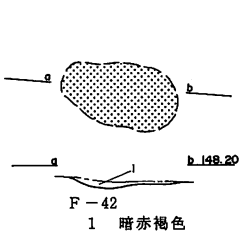
F-34



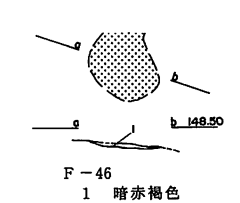
F-38



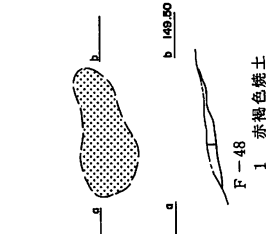
F-42



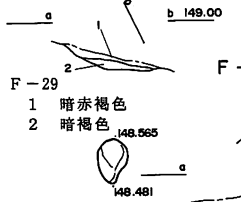
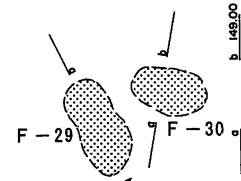
F-46



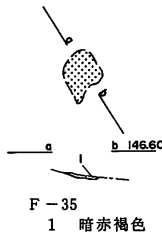
F-48



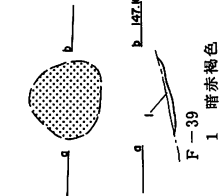
F-27~32



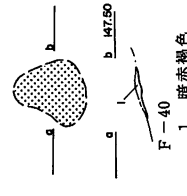
F-35



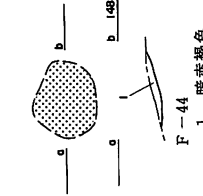
F-39



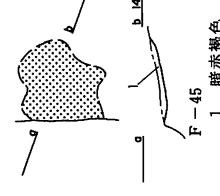
F-40



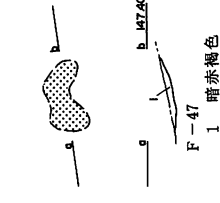
F-44



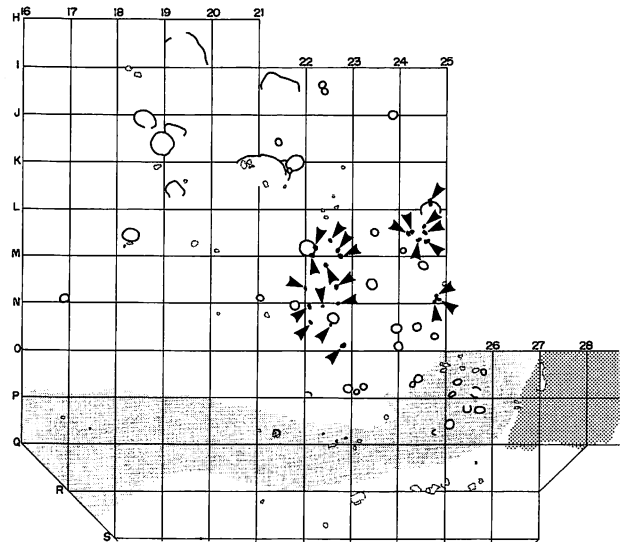
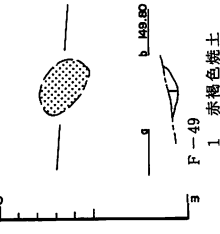
F-45



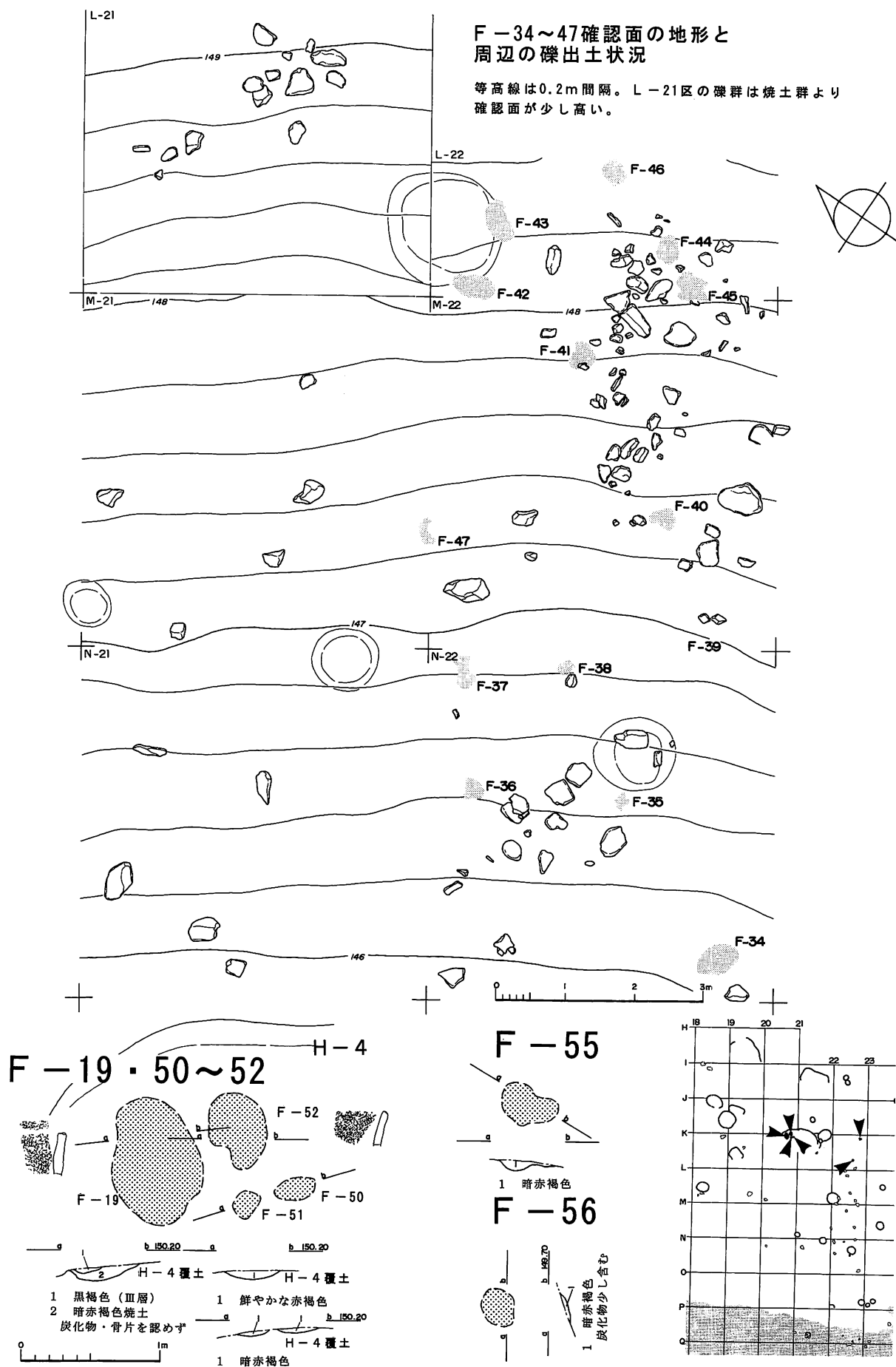
F-47



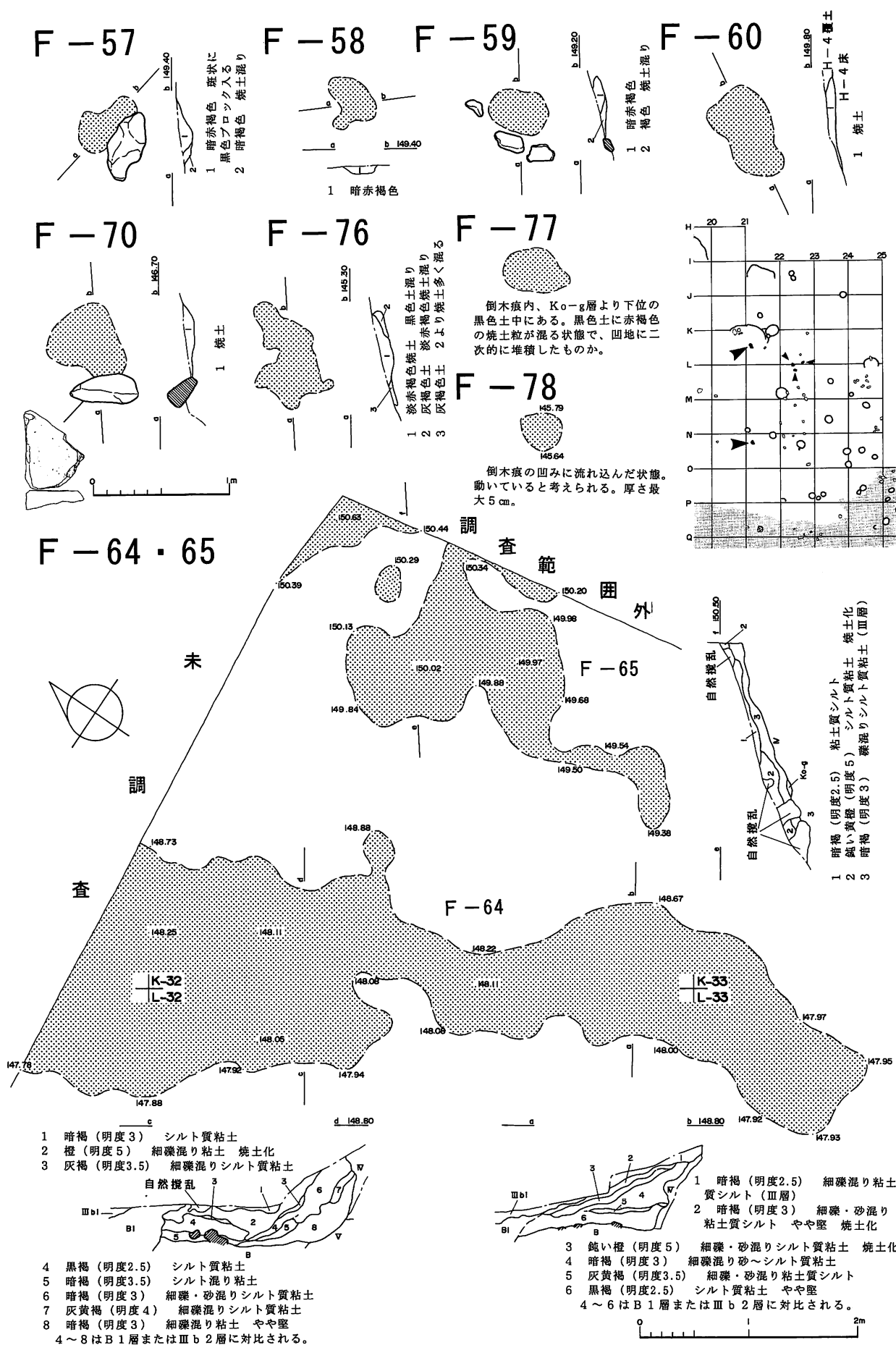
F-49



図V-51 斜面の焼土(3)

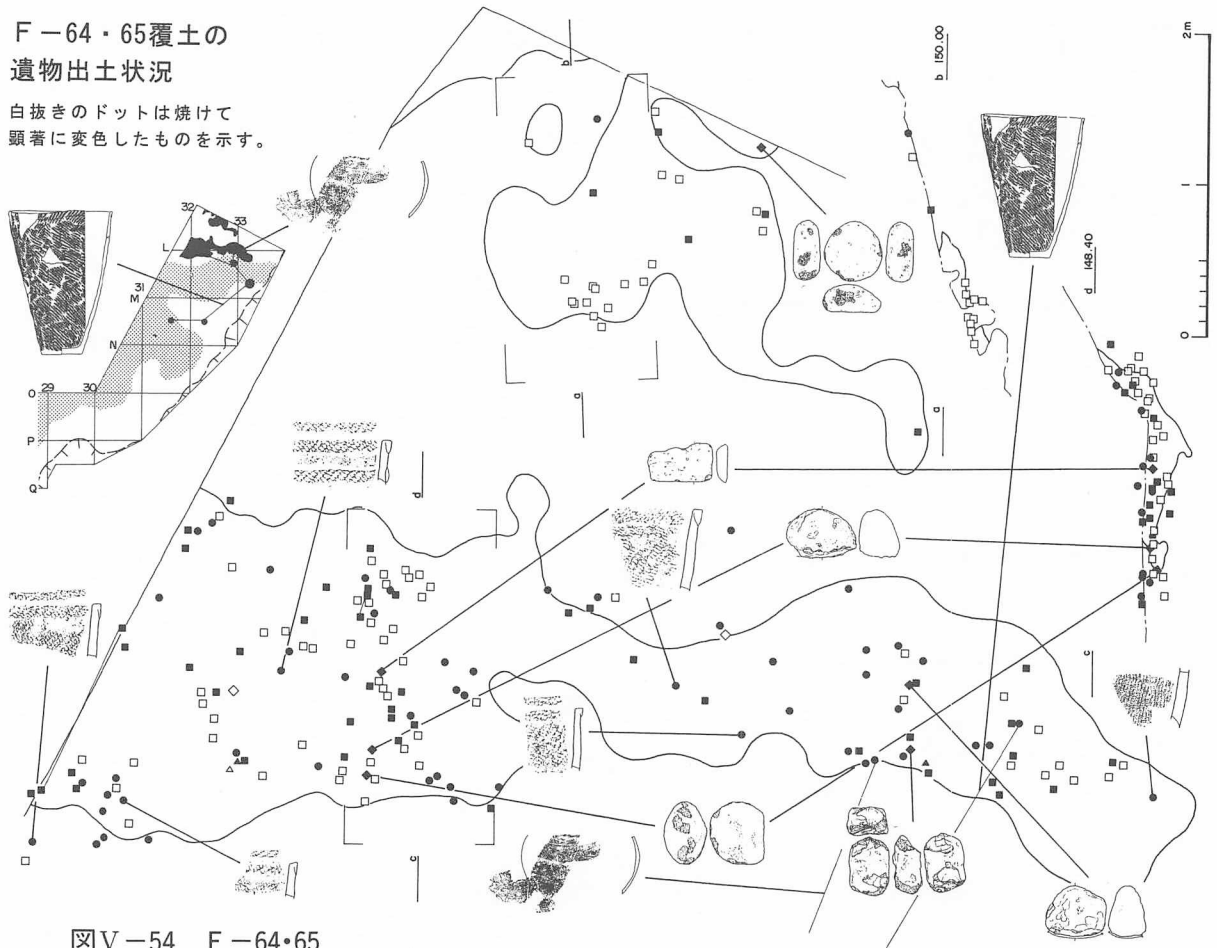


図V-52 斜面の焼土(4)

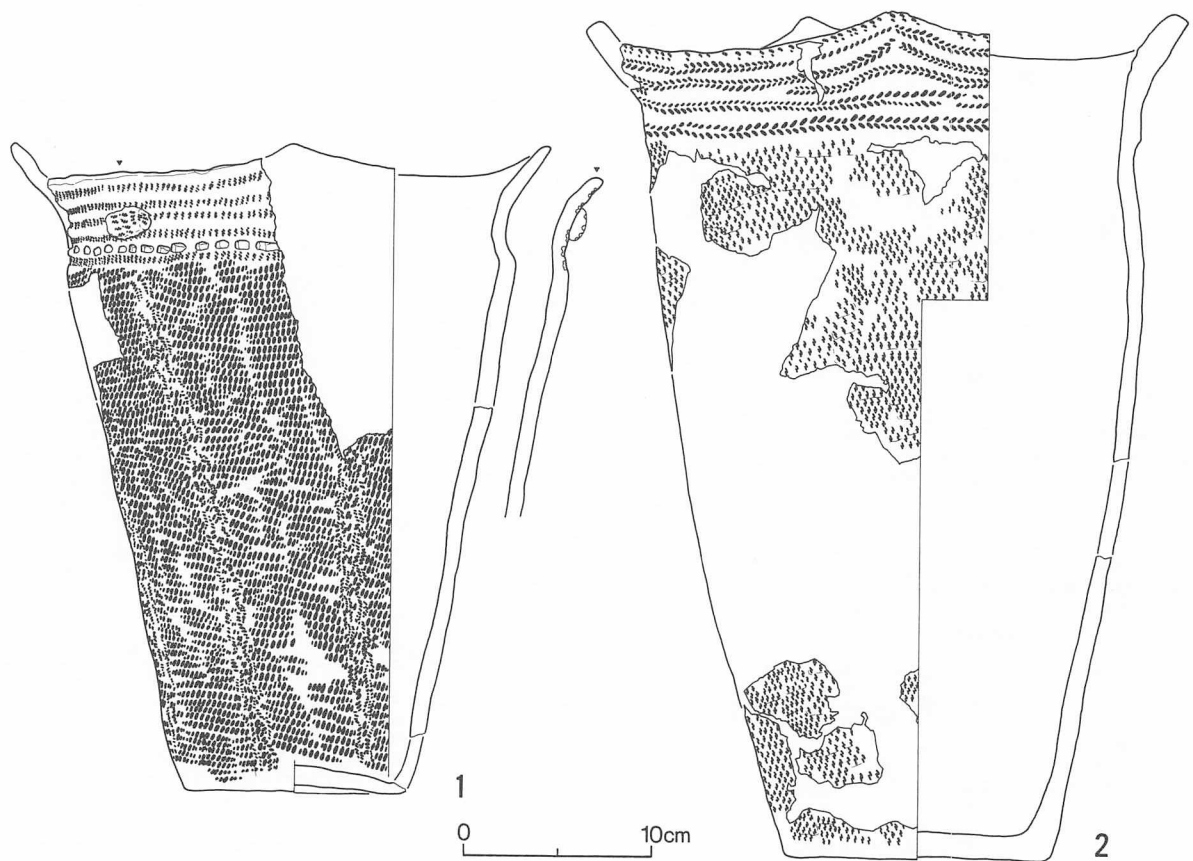


F-64・65覆土の  
遺物出土状況

白抜きのドットは焼けて  
顕著に変色したものを示す。



図V-54 F-64・65



図V-55 焼土の遺物(1)

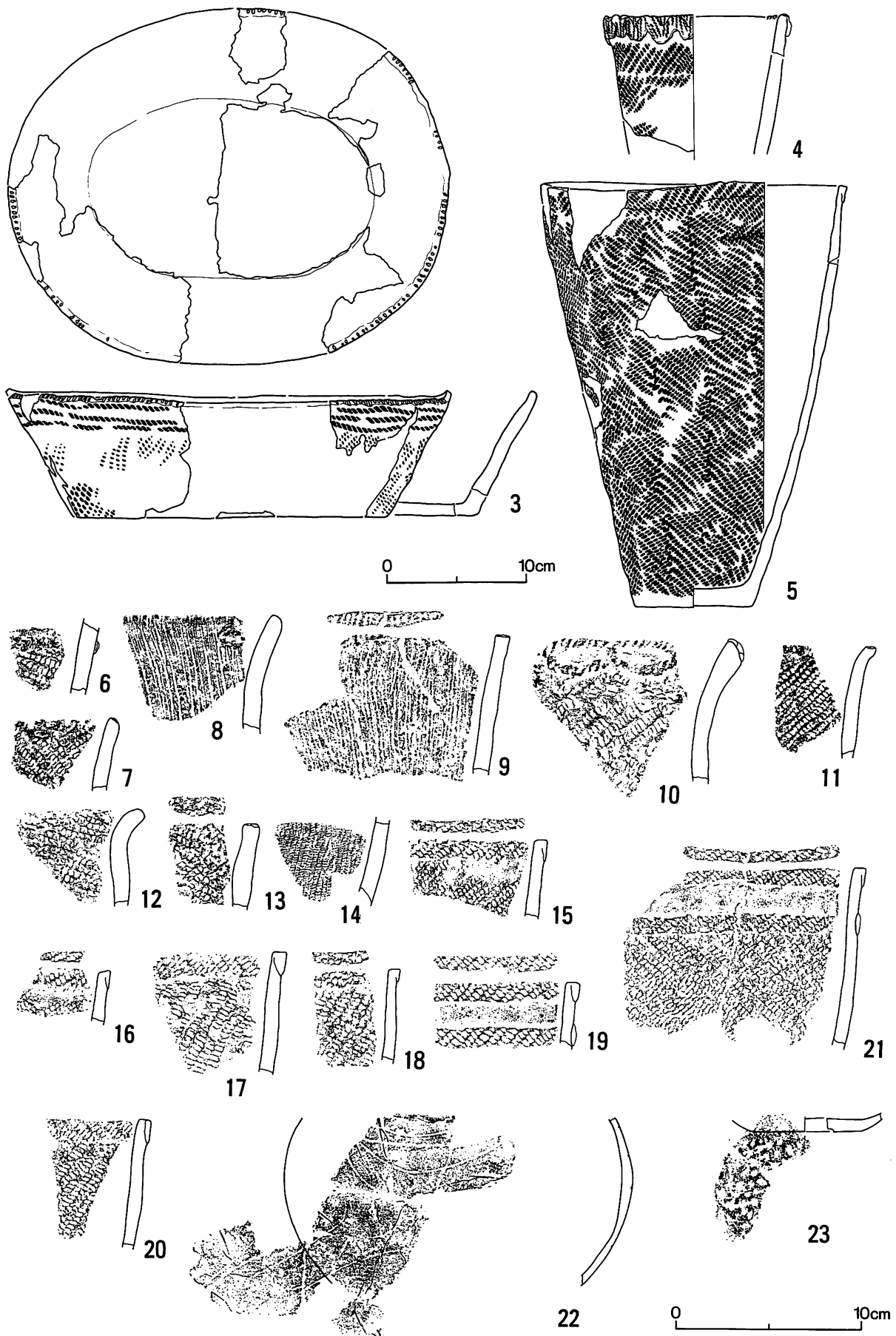
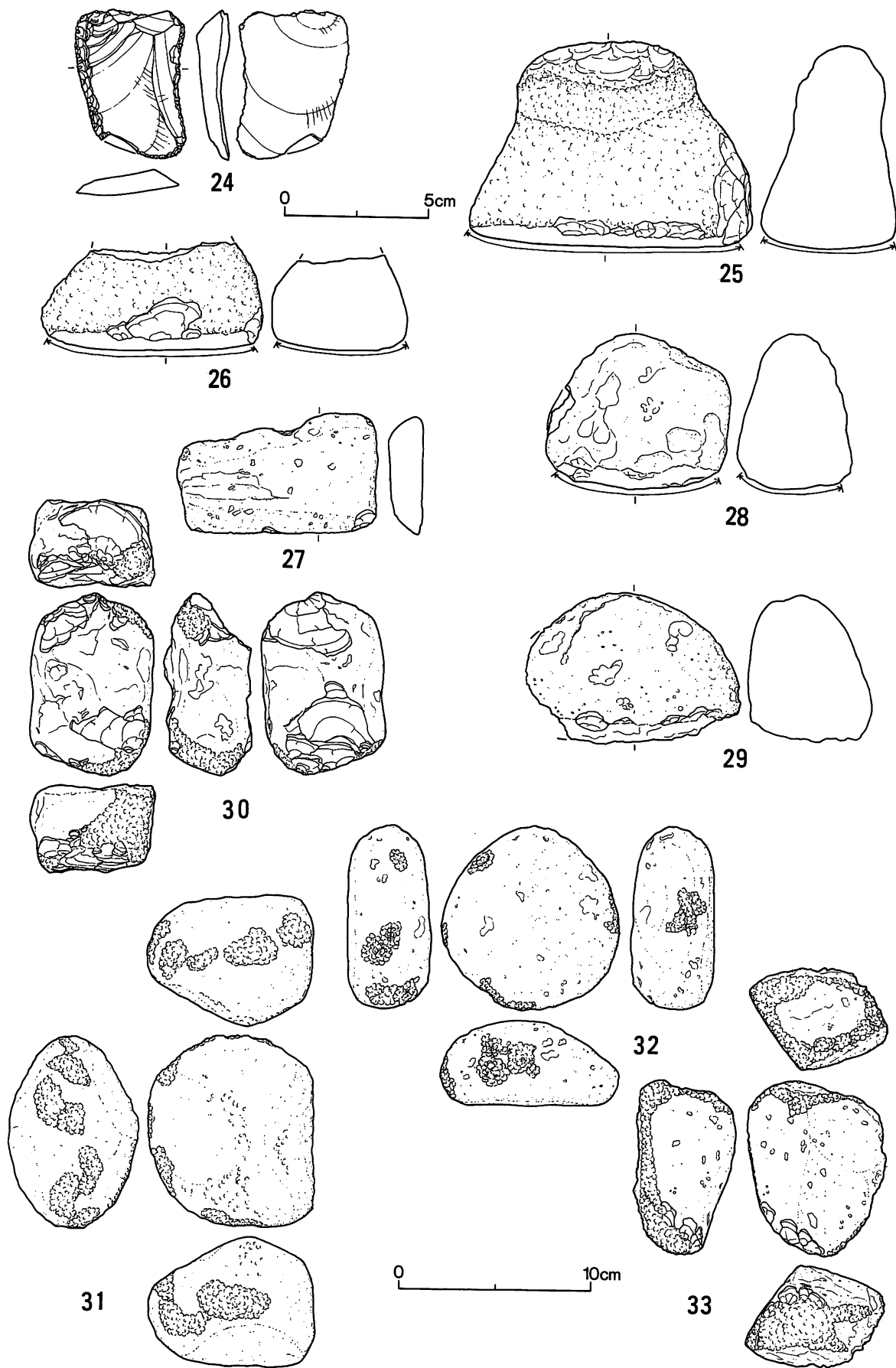
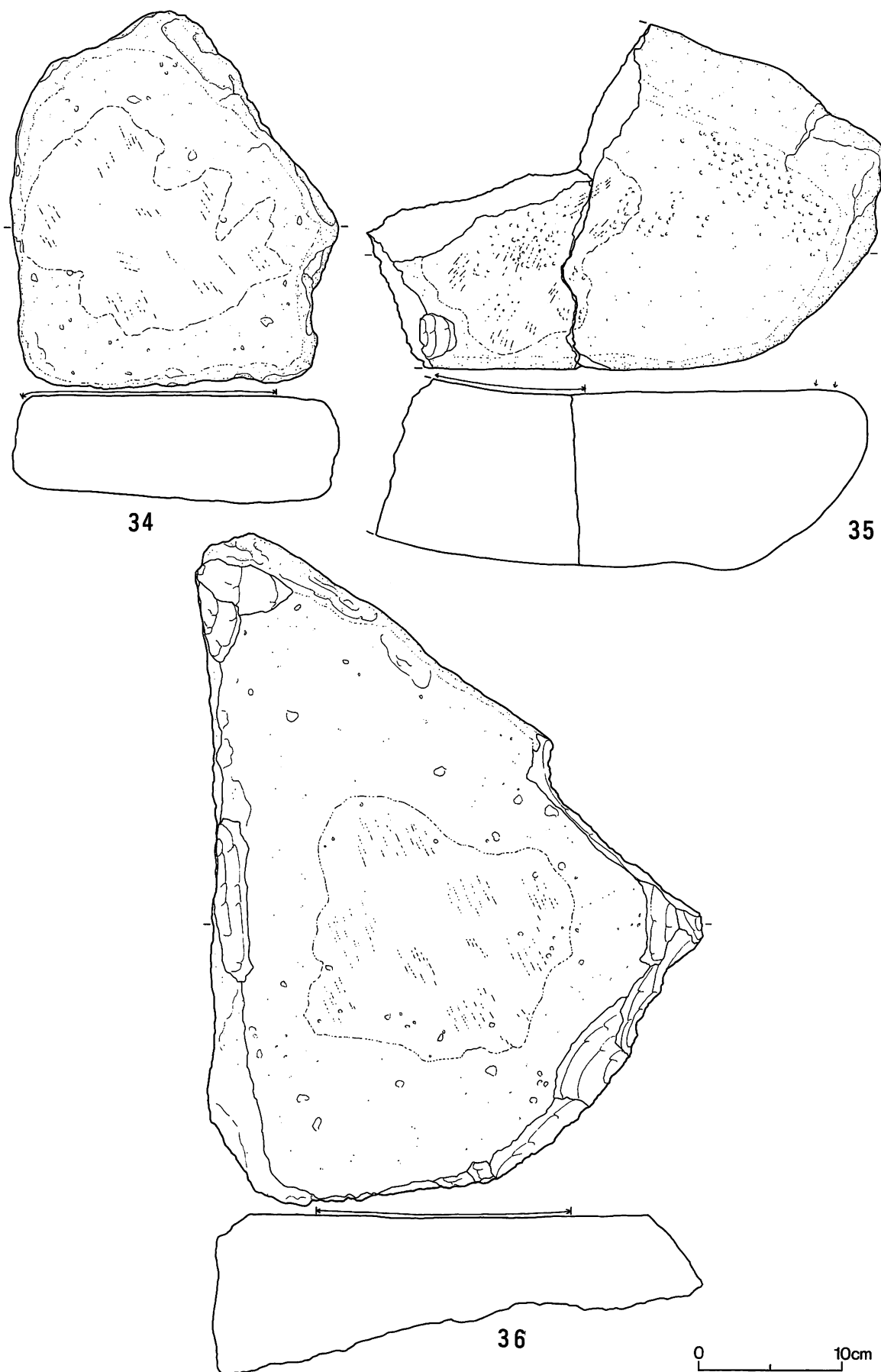


図 V-56 焼土の遺物(2)



図V-57 焼土の遺物(3)



図V-58 焼土の遺物(4)



らIII b 2・B 2層の炉・焼土と同様な作業の跡とも考えられるが、かなり急な斜面で作業をする理由を説明しにくい。F-64・65は規模が大きく人工遺物の少ない特殊な焼土で、函館市中野A遺跡などで確認された非常に大規模な焼土層に似ているという印象を受ける。なおK～N-22区、L-24区で確認された小さい焼土のまとまりは、F-64・65のような面積の大きい焼け跡が断片的に遺存したものであるとも考えられる。(西脇対名夫) 焼土出土の遺物(図V-55～58)

土器(図V-55～56-1～23)

F-5(6), F-12(1), F-16(2), F-17・18周辺(3・4, 8～12), F-19(13), F-64(14～18), F-71周辺(5, 22・23)出土のものを図示した。個々の資料の分類については表を参照していただきたい(表V-3・4)。(工藤 研治)

石器(図V-57～58-24～36)

図V-57-24はナイフ, 25・26, 27は扁平打製石器, 28・29はすり石, 30～33はたたき石, 図V-58-34～36は石皿に分類された。

F-12炉石(34)・F-12周辺包含層(25): 25, すり面以外の全面を整形, すり面は中央で平滑, 周辺では粉っぽくなる。34, 礫の片面ほぼ全体に弱く凹んだ平滑なすり面が2つ複合しているらしい。F-17・18周辺包含層(24・26): 24, 線状に近い打面をもつ素材の背面に浅い細部調整が連続する。素材末端から背面右縁にかけては細部調整の角度が急。26, すり面以外の全面を整形, すり面中央部にはすり面を切って敲打痕が集中。F-22覆土(35): 礫の片面の一部が凹んだ平滑なすり面となり, そこに深い敲打痕が複合。また一端に近く浅い敲打痕が散在する部分がある。F-64覆土(27～31)・F-65覆土(32): 27は下縁片面に不連続な調整があり, すり面は未形成。28・29は幅の広いすり面を持つようにも見えるが, 焼けたためか脆くなっており不確実。30は両端, 31・32は両端から1側面に敲打痕が集中する。30は焼けて赤く変色。31・32は焼けのためか脆く, 岩石の組織が風化崩壊した痕が敲打痕のように見えるのではないかという疑いが残る。F-70覆土(36): 36は礫の片面中央付近に平滑なすり面。比較的広いすり面であるがほぼ一連の凹面。敲打痕はほとんど見られない。F-71周辺包含層(33): 33は両面と両側面に敲打痕が集中。

表V-1 浮遊選別一覧表

(西脇対名夫)

遺 構 層 位	試料乾重 (g)	浮遊炭化物 (g)	残遺炭化物 (g)	炭化物合計 (g)	炭化物 重量比	Ⅱ群土器 (点)	Ⅲ群土器 (点)	不明土器 (点)	土器合計 (点)	Uフレイク (点)	剥 片 (点)	石器合計 (点)
H-1 HF-1	8120	0.09	0.20	0.29	0.04				0		15	15
H-2 HF-1	8600	—	—	—	—				0		1	1
H-3 HF-1	10000	0.01	0.11	0.12	0.01			2	2		11	11
H-4 HF-1	5600	0.01	1.21	1.22	0.22				0		10	10
P-12 覆土4層	400	+	+	+	+				0		1	1
P-12 覆土7層	22340	2.55	1.01	3.56	0.16	2			2		4	4
P-44 土器の中	1000	—	0.03	0.03	0.03		68		68		3	3
F-1 焼 土	1680	0.04	0.01	0.05	0.03				0			0
F-2 焼 土	3470	—	—	—	—				0		1	1
F-3 焼 土	2090	0.03	+	0.03	0.01				0			0
F-4 焼 土	4460	—	0.03	0.03	0.01				0		1	1
F-5 焼 土	2490	—	0.03	0.03	0.01				0		3	3
F-6 焼 土	2840	—	—	—	—				0		1	1
F-9 焼 土	13600	0.08	0.39	0.47	0.03				0			0
F-10 焼 土	18060	0.16	0.05	0.21	0.01			4	4			0
F-11 焼 土	1120	0.22	0.01	0.23	0.21				0			0
F-12 焼 土	13800	0.04	0.06	0.10	0.01	1	3		4		6	6
F-13 焼 土	3920	0.16	0.12	0.28	0.07			1	1			0
F-14 焼 土	15200	0.08	0.09	0.17	0.01			3	3			0
F-15 焼 土	6600	0.19	0.37	0.56	0.08			2	2			0
F-16 焼 土	22300	0.25	0.07	0.32	0.14	1			1		5	5

## V 遺 構

遺 構 層 位	試料乾重 (g)	浮遊炭化物 (g)	残渣炭化物 (g)	炭化物合計 (g)	炭化物 重量比	II群土器 (点)	III群土器 (点)	不明土器 (点)	土器合計 (点)	Uフレイク (点)	剥 片 (点)	石器合計 (点)
F - 17 焼 土	4880	0.06	0.02	0.08	0.02				0			0
F - 18 焼 土	3100	0.20	0.02	0.22	0.07				0			0
F - 19 焼 土	10900	0.04	0.51	0.55	0.05			1	1			0
F - 20 焼 土	2540	0.37	0.18	0.55	0.22	4			4		1	1
F - 21 焼 土	8720	0.27	0.11	0.38	0.04				0		1	1
F - 22 焼 土	3700	0.19	0.01	0.20	0.05				0			0
F - 23 焼 土	2200	+	0.12	0.12	0.05				0		1	1
F - 24 焼 土	3600	0.03	0.01	0.04	0.01				0		1	1
F - 25 焼 土	2200	0.06	0.19	0.25	0.11				0			0
F - 26 焼 土	3760	0.02	0.01	0.03	0.01				0		1	1
F - 27 焼 土	2000	+	0.03	0.03	0.02			2	2			0
F - 28 焼 土	4980	+	0.18	0.18	0.04				0			0
F - 29 焼 土	2100	-	0.01	0.01	0.00				0			0
F - 30 焼 土	980	0.03	0.02	0.05	0.05				0			0
F - 31 焼 土	2700	0.20	0.04	0.24	0.09				0		6	6
F - 32 焼 土	4080	0.36	0.13	0.49	0.12			1	1			0
F - 33 試料No.1	8900	8.63	27.75	36.38	4.09				0			0
F - 33 試料No.2	9000	25.15	38.25	63.40	7.04				0			0
F - 33 試料No.3	10120	15.98	51.18	67.16	6.64				0			0
F - 34 焼 土	5200	0.83	0.09	0.92	0.18				0		1	1
F - 35 焼 土	800	0.01	0.01	0.02	0.03				0			0
F - 36 焼 土	580	0.05	0.03	0.08	0.14			1	1			0
F - 37 焼 土	1040	0.13	0.17	0.30	0.29	1			1			0
F - 38 焼 土	220	+	+	+	+				0			0
F - 39 焼 土	1100	-	0.02	0.02	0.02				0		2	2
F - 40 焼 土	1760	0.01	0.03	0.04	0.02				0		2	2
F - 41 焼 土	1700	0.06	0.04	0.10	0.06				0		3	3
F - 42 焼 土	3640	0.01	0.03	0.04	0.01				0		1	1
F - 43 焼 土	1400	-	0.07	0.07	0.05				0			0
F - 44 焼 土	1580	0.11	0.02	0.13	0.08			6	6			0
F - 45 焼 土	3200	0.02	0.15	0.17	0.05		3		3			0
F - 46 焼 土	2800	0.02	0.02	0.04	0.01				0		1	1
F - 47 焼 土	540	-	+	+	+				0			0
F - 48 焼 土	2600	+	+	+	+	1			1			0
F - 49 焼 土	1180	0.21	+	0.21	0.18				0	1	204	205
F - 50 焼 土	400	0.24	1.31	1.55	3.88				0			0
F - 51 焼 土	1100	0.15	0.05	0.20	0.18				0			0
F - 52 焼 土	8040	0.02	0.33	0.35	0.04				0			0
F - 53 焼 土	8900	0.40	0.68	1.08	0.12			1	1		38	38
F - 54 焼 土	2880	0.02	0.01	0.03	0.01				0			0
F - 55 焼 土	3740	+	-	+	+				0			0
F - 56 焼 土	500	0.01	0.04	0.05	0.10				0			0
F - 57 焼 土	4200	+	0.06	0.06	0.01				0		3	3
F - 58 焼 土	3540	-	0.13	0.13	0.04				0			0
F - 59 焼 土	6300	0.11	0.28	0.39	0.06				0		10	10
F - 60 焼 土	6700	1.53	1.30	2.83	0.42				0			0
F - 61 焼 土	16800	46.79	92.83	139.62	8.31				0			0
F - 62 焼 土	13580	6.76	8.95	15.71	1.16				0			0
F - 63 焼 土	2060	0.12	1.06	1.18	0.57				0			0
F - 64 焼土試料	37220	1.78	2.04	3.82	0.10			5	5		8	8
F - 65 焼土試料	5920	0.70	0.20	0.90	0.15				0			0
F - 67 焼 土	14660	3.27	14.80	18.07	1.23				0		2	2
F - 68 焼 土	7000	1.71	4.28	5.99	0.85				0			0
F - 69 焼 土	20540	2.66	20.13	22.79	1.11				0			13
F - 70 焼 土	15000	0.01	0.25	0.26	0.02				0		9	9
F - 71 焼 土	16800	0.84	4.17	5.01	0.30			17	17		4	4
F - 72 焼 土	750	0.62	0.14	0.76	1.01		1		1			0
F - 73 焼 土	4240	0.30	4.87	5.17	1.21				0		4	4
F - 74 焼 土	10140	+	0.20	0.20	0.02				0			0
F - 75 焼 土	11200	11.12	3.85	14.97	1.34				0		1	1
F - 76 焼 土	4940	0.42	0.02	0.44	0.08				0			0
一部土器24 土器の中	180	+	0.04	0.04	0.22			6	6			0

註

- 炭化物の重量は音叉振動式デジタル表示の電子天秤で計量した。「+」と記入した欄は、炭化物が少量あるが秤に「0.00g」と表示されたことを示す。「-」は炭化物が認められないことを示す。
- 浮遊炭化物の重量は2.00mm 目の篩に残ったものだけを計量した。選別の労力に限界があり、またたとえ全てを選び出したところで重量はそれほど大きくないと考えられるので、0.425mm の篩に残った炭化物の重量は無視してある。
- 残渣炭化物の重量は1.41mm 目の篩に残った炭化物を全て選び出して計ったものである。
- 「炭化物重量比」の欄には、炭化物の合計重量（単位 g）を処理した試料の乾燥重量（単位 kg）で割った数値を記入してある。つまり 1 kg の土壌を処理したとき何 g の炭化物が得られるかを示すものである。

表V-2 遺構一覧表

住居跡 (H)

遺構番号	調査区	形状	規模	炉	柱穴	遺物
H-1	H-18・19, I-19	不明	(5.0)×(2.4)×(0.2)	有		台石:1, 使用痕礫:1, 礫:4
H-2	J-18・19	円形	2.6×2.5×0.3	有		土器:13, スクレーパー:1
H-3	I-21	隅丸方形?	(4.0)×(2.0)×(0.2)	有	4	土器:96, スクレーパー:1, 石皿:1
H-4	J-20・21 K-20・21	隅丸方形?	(5.3)×(2.7)×(0.5)	有3	4	土器:231, 石鏃:1, すり石:2, たたき石:2, 石皿:4, Uフレイク:3, 礫:4
H-5	K-19, L-19	方形	(2.0)×1.6×0.2	有		土器:2, 礫:1

土壇 (P) A類

遺構番号	調査区	形状	規模	遺物
P-2	L-18	楕円形	1.8×1.4×0.2	土器:10, スクレーパー:2, Uフレイク:1
P-3	I・J-18	楕円形	2.4×1.8×0.3	土器:17, すり石:2, 石皿:1, 使用痕礫:1, 礫:4
P-4	J-19	不明	(2.2)×(1.5)×(0.3)	土器:2
P-5	K・L-24	楕円形?	(2.2)×(1.4)×(0.5)	土器32, たたき石:2, 台石:1
P-33	L-21・22	円形	1.8×1.6×0.5	土器:17
P-42	J・K-21	隅丸方形	2.0×1.5×0.3	土器:2
P-43	K-21	隅丸方形	(2.2)×(0.7)×(0.3)	剥片:4

土壇 (P) B類

遺構番号	調査区	形状	規模	遺物
P-1	G-15・16	楕円形	1.2×1.0×0.5	
P-6	O-22	不整円形	0.9×0.8×0.5	土器:11, すり石:1, 礫:15
P-8	M-16・17	円形	1.0×1.0×0.2	台石:3, 使用痕礫:2, 礫:11
P-9	P-25	円形	1.0×0.9×0.6	土器:10, 礫:8
P-12	O-25	楕円形	(0.9)×1.1×0.6	土器:86, 剥片:1, 礫:20
P-14	O-23	円形	0.6×0.5×0.3	土器:4, 礫:1
P-15	O-23	円形	0.8×0.7×0.4	土器:2, Uフレイク:1, 礫:4
P-17	I-22	円形	0.7×0.7×0.2	
P-18	P-24	円形	(0.6)×(0.4)×(0.3)	土器:4, 石鏃:1, 礫:5
P-19	N-23・24	楕円形	1.0×0.9×0.4	すり石:2, 剥片:1, 礫:5
P-20	N-23・24	楕円形	1.0×0.9×0.5	土器:33, すり石:1, たたき石:1, 台石:3, 礫:10
P-21	M-23	円形	1.2×1.1×0.4	土器:10, Uフレイク:1, 礫:1
P-22	P-25	円形	0.9×0.9×0.3	土器:1, すり石:1, 礫:3
P-23	P-25	楕円形	0.9×0.8×0.2	
P-24	O-24	楕円形	0.7×0.5×0.3	礫:1
P-25	O-24	不整円形	0.8×(0.8)×0.2	礫:1
P-26	I・J-23	円形	1.0×0.9×0.3	
P-27	J-21	不整円形	0.8×0.8×0.4	
P-28	N-24	楕円形	0.9×0.8×0.6	土器:12, 剥片:2
P-29	N-24	円形	0.7×0.6×0.3	土器:1, 槍先:1, 剥片:1

P-30	N-22	楕円形	1.2×1.0×0.4	土器：36, すり石：2
P-31	M-24	楕円形	1.1×0.9×0.5	土器：30, 石鏃：1
P-32	M・N-21	円形	1.0×0.9×0.3	土器：3
P-34	L-23	円形	0.8×0.8×0.3	土器：1
P-35	L-24	円形	0.6×0.5×0.2	土器：1, 石鏃：1, 礫：2
P-38	M-20・21	楕円形	0.7×0.6×0.2	

## 土坑（P）その他

遺構番号	調 査 区	形 状	規 模	遺 物
P-7	O-25	隅丸方形	0.6×0.5×0.2	土器：2, すり石：1
P-10	O-25	楕円形	0.7×0.5×0.3	礫：1
P-11	O-25	楕円形	0.8×0.6×0.2	礫：1
P-13	O-22	不明	(0.7)×(0.2)×(0.1)	土器：52
P-16	P-22	不整円形	0.8×0.7×0.2	Uフレイク：1
P-36	P-22	円形	0.4×(0.3)×0.2	土器：30
P-39	P-22	円形	(0.2)×0.2×0.1	
P-40	P-22	不明	0.2×(0.1)×0.1	
P-41	P-22	円形	(0.1)×0.2×0.1	
P-44	K-21	楕円形	0.6×0.5×0.2	土器：31

## 石囲炉・焼土（F）Ⅲa・Ⅲb 1層

遺構番号	調 査 区	規 模	遺 物
F-33	O-26・27	3.1×(0.8)×0.1	
F-63	L-31・32	0.4×(0.3)×0.1	
F-71	L-32	0.7×0.7×0.2	

## 石囲炉・焼土（F）Ⅲb2・B2層

遺構番号	調 査 区	規 模	遺 物
F-1	P-16	0.4×0.4×0.0	
F-10	P・Q-22	(0.9)×(0.4)×0.1	
F-11	P-20・21	(0.4)×0.3×0.0	
F-12	P-21	0.7×0.7×0.2 土器：2, 台石：2, 礫：9	
F-13	P-21	0.5×0.3×0.1	
F-14	O-25	0.6×0.4×0.1	礫：3
F-15	O-25	0.5×(0.4)×0.1	
F-16	O-25	0.7×0.5×0.1 土器：3, 礫：6	
F-17	O-24・25	0.7×0.4×0.1	
F-18	O-24・25	1.0×(0.5)×0.1	
F-20	Q-23	(0.5)×(0.3)×(0.0)	
F-21	P-23	(0.4)×0.4×0.1	
F-22	P-23	(0.5)×0.5×0.1	台石：2

## 焼土（F）B1層

遺構番号	調 査 区	規 模	遺 物
F-9	R-22	0.5×0.5×0.1	
F-53	Q-25	0.6×0.5×0.0	
F-54	Q-25	(0.3)×(0.3)×(0.1)	
F-61	Q-25	0.9×0.8×0.0	
F-62	Q-25	(0.8)×(0.5)×(0.0)	
F-66	Q・R-24	0.4×0.3×0.0	
F-67	Q-24	1.6×0.8×0.1	
F-68	Q-25	(0.6)×(0.3)×(0.0)	
F-69	Q-24	(1.2)×(0.7)×0.1	礫：3
F-72	P-26	{ 0.5×0.3×0.1 0.8×0.3×0.1	
F-73	R-23	1.7×1.0×0.1	
F-74	R-21	0.4×0.3×0.1	
F-75	R-23	0.9×0.5×0.1	

焼土 (F) 斜面

遺構番号	調査区	規模	遺物
F-2	I-18	0.8×0.6×0.1	
F-3	I-18	0.7×0.6×0.1	
F-4	L-19	0.7×0.7×0.1	
F-5	K-18	0.7×0.6×0.2	土器：1, 礫：1
F-6	K-19	(0.4)×(0.4)×0.0	礫：1
F-7	L-18	(0.3)×(0.3)×(0.0)	
F-8	L-18	0.7×0.3×0.1	
F-23	M-24	0.5×0.3×0.1	
F-24	M-24	(0.5)×(0.4)×0.1	
F-25	M-24	0.9×0.5×0.1	
F-26	M-24	0.4×0.3×0.1	
F-27	L-24	0.6×0.3×0.1	土器：1
F-28	L-24	0.5×0.3×0.0	
F-29	L-24	0.5×0.3×0.1	
F-30	L-24	0.4×0.2×0.1	
F-31	L-24	0.5×0.2×0.0	
F-32	L-24	0.4×0.2×0.0	
F-34	N-22	0.7×0.4×0.0	
F-35	N-22	0.3×0.2×0.0	
F-36	N-22	0.4×0.3×0.0	
F-37	N-22	0.5×0.3×0.0	
F-38	N-22	0.3×0.2×0.0	
F-39	M・N-22	0.4×0.4×0.0	土器：1
F-40	M-22	0.4×0.3×0.0	土器：2
F-41	M-22	0.4×0.3×0.0	
F-42	L-22	0.6×0.3×0.0	
F-43	L-22	0.6×0.3×0.0	
F-44	L-22	0.4×0.3×0.0	土器：1

遺構番号	調査区	規模	遺物
F-45	L・M-22	(0.5)×0.5×0.0	土器：1
F-46	L-22	(0.4)×0.4×0.0	
F-47	M-21	0.4×0.2×0.0	
F-48	K-24	0.7×0.3×0.0	
F-49	K-21	0.3×0.2×0.0	
F-19	J・K-20	0.9×0.7×0.1	土器：5, 礫：1
F-50	K-20	0.3×0.2×0.0	
F-51	K-20	0.2×0.2×0.0	
F-52	J・K-20	0.6×0.4×0.1	土器：1
F-55	K-22	0.4×0.3×0.1	
F-56	K-22	0.3×0.2×0.0	
F-57	K-22	0.5×0.3×0.1	
F-58	K・L-22	0.4×0.4×0.0	
F-59	L-22	0.4×0.3×0.1	
F-60	K-21	0.7×0.4×0.1	
F-70	N-21	0.6×0.5×0.1	台石：1
F-76	F-18	0.8×0.5×0.1	
F-77	L-20	0.5×0.3×0.0	
F-78	N-20	0.3×0.3×0.1	
F-64	K・L-31・32・33	(6.2)×(1.8)×(0.2)	土器：79, すり石：1 たたき石：3, 剥片：2, 礫：129
F-65	K-32	(3.3)×(1.6)×(0.1)	土器：1, たたき石：1, 礫：31

配石 (S)

S-1	L-17	台石：1, 礫：1
-----	------	-----------

埋設土器

	J-24	土器：62, すり石：1
--	------	--------------

表V-3 遺構及び周辺出土の掲載土器(実測図)

挿 図 番 号	遺構名 発掘区	遺物 番号	層位	破片数	分類	大きさ (cm)
V-6-1	(未接合 同一個体)	H-2	2	覆土	9	III A 口径 19.8 底径 8.5 器高 28.6
		I-19		III	1	
		I-20		I	2	
		J-18		III	1	
		J-19		I	3	
		"		III	8	
		計			24	
		J-19		III	2	
		合 計			26	
V-8-1	(未接合 同一個体)	H-3	2		14	III A 口径 11.1 底径 3.9 器高 12.6
		合 計			14	
V-8-2	(未接合 同一個体)	H-3	7	床	1	III A 口径 12.3 底径 5.7 器高 11.5
		"	8	床直上	1	
		"	9	床直上	1	
		I-21	2	III	1	
		K-22	3	"	1	
		"	9	"	1	
		"	15	"	8	
		合 計			14	
V-11-1	(未接合 同一個体)	H-4		覆土	6	III A 口径 19.3 底径 - 器高 (16.0)
		L-20	6	III	4	
		M-22	12	"	1	
		計			11	
		L-18		III	1	
V-11-2	(未接合 同一個体)	H-4	15	III	12	III A 口径 12.7 底径 6.8 器高 12.3
		合 計			12	
V-11-3	(未接合 同一個体)	H-4	16	覆土	24	III A 口径 24.9 底径 9.1 器高 26.4
		J-20	14	III	2	
		K-20	3	"	2	
		"	10	"	2	
		"	16	"	1	
		K-21	3	"	1	
		"	12	"	1	
		L-20			1	
		計			34	
		Q-24	12	IIIa・b	2	
V-11-4	(未接合 同一個体)	H-4	16	覆土上	98	III A 口径 27.7 底径 11.1 器高 38.9
		計			98	
		H-4	16	覆土上	65	
V-19-1	(未接合 同一個体)	P-42	1	覆土	2	III A 口径 4.8 底径 - 器高 (12.4)
		J-22	2	III	2	
		K-21	3	III	2	
		L-21	21	III	1	
		合 計			7	
V-28-1	(未接合 同一個体)	P-6	85	覆土	1	II B 口径 21.9 底径 9.7 器高 29.4
		N-22	1	III	1	
		"	9	"	3	
		"	47	"	8	
		"	78	"	3	
		O-21	2	"	1	
		"	10	"	1	
		"	14	"	12	
挿 図 番 号	遺構名 発掘区	遺物 番号	層位	破片数	分類	大きさ (cm)
V-28-1 (続き)	(未接合 同一個体)	"	21	"	8	
		P-21	1	"	1	
		P-22	7	"	1	
		不 明			21	
		計			61	
		N-22	47	III	1	
		N-23	3	II	1	
		"	6	III	1	
		O-21	13	"	1	
		"	14	"	1	
		"	21	"	1	
		O-23	11	"	1	
		O-24	42	IIIb上	1	
		P-21	36	III	1	
		P-23	8	IIIa	1	
		不 明			2	
		合 計			73	
V-28-2	(未接合 同一個体)	P-6	62	覆土	1	III A 口径 31.3 底径 - 器高 (13.6)
		"	68	"	1	
		"	76	"	1	
		L-20		III	1	
		M-24	27	"	1	
		N-18		"	1	
		O-22	11	"	1	
		"	12	"	1	
		"	15	"	1	
		P-22	8	"	1	
		"	12	"	3	
		"	18	"	1	
		"	28	"	1	
		"	34	"	4	
		計			19	
		O-22	22	III	1	
		P-22	18	"	2	
		"	28	"	2	
		"	34	"	2	
		合 計			26	
V-28-3	(未接合 同一個体)	P-6	15	覆土	1	III A 口径 (14.7) 底径 7.4 器高 17.9
		"	77	"	7	
		"	86	"	1	
		"	87	"	6	
		"	89	"	1	
		"	90	"	1	
		"	98	"	1	
		"	99	"	3	
		"	100	"	1	
		O-22	11	III	7	
		P-23	35	IIb	1	
		計			30	
		P-6	94	覆土	1	
		O-22	12	IIIa	1	
		合 計			32	
V-29-20	(未接合 同一個体)	P-12	1	覆土	62	III A 口径 34.5 底径 10.8 器高 46.4
		"	2	"	12	
		計			74	
		P-12	1	覆土	2	
		"	2	"	3	
		合 計			79	

挿図番号	遺構名 発掘区	遺物 番号	層位	破片数	分類	大きさ (cm)
V-30-21	P-30	3	覆土	1	II B	口径 (21.3) 底径 7.8 器高 26.8
	M-23	13	III	1		
	N-21	3	"	31		
	"	22	"	4		
	"	32	"	2		
	N-22	8	"	1		
	"	47	"	4		
	O-23	21	"	1		
	計			45		
	(未接合 同一個体)					
	N-21	3	IIIb	15		
	"	14	III	1		
	"	21	"	1		
	N-22	8	"	3		
	"	27	"	1		
	O-20	4	II	2		
	O-21	2	"	1		
	"	3	III	1		
	"	24	"	1		
	合 計			71		
V-30-22	P-30	4	覆土	1	II B	口径 (29.1) 底径 — 器高 34.1
	O-23	9	IIIa	1		
	O-25	1	II	2		
	"	26	IIIa	1		
	"	40	IIIb	1		
	P-23	2	II	3		
	"	20	III	1		
	"	27	"	2		
	"	35	IIIb	1		
	"	52	III	2		
	"	62	"	4		
	P-24	12	IIIa-b	1		
	"	37	IIIa	1		
	"	43	"	1		
	不 明			5		
	計			27		
	(未接合 同一個体)					
	N-24	5	III	2		
	O-24	2	II	1		
	"	11	"	1		
	"	14	IIIa	1		
	"	22	"	2		
	P-23	2	II	1		
	"	20	III	1		
	"	35	IIIb	2		
	P-24	2	II	1		
	"	12	IIIa-b	1		
	R-21	1	II	1		
	不 明			1		
	合 計			42		
V-36-1	P-13	16	覆土	1	III A	口径 33.4 底径 — 器高 43.0)
	M-20	B		1		
	N-22	8	III	1		
	"	10	"	2		
	"	47	"	2		
	"	48	"	4		
	O-20	14	"	5		
	"	15	"	1		
	O-21	2	II	2		
	"	25	III	1		
	P-20	6	"	1		
	P-21	1	"	1		
	"	2	"	10		
V-36-1 (続き)	"	6	"	1		
	"	20	"	3		
	P-22	8	"	1		
	"	16	"	1		
	"	28	"	3		
	R-21	1	II	8		
	不 明			8		
	計			67		
	(未接合 同一個体)					
	O-21	14	III	2		
V-36-2	O-22	15	"	1	III A	口径 19.1 底径 7.9 器高 22.6
	O-24	2	II	1		
	P-21	2	III	1		
	"	19	"	2		
	Q-25	10	砂B1	1		
	R-21	1	II	3		
	"	20	III	2		
	合 計			80		
	(未接合 同一個体)					
	P-13	6	覆土	1		
V-36-5	O-22	15	III	15	III A	口径 17.6 底径 — 器高 22.0
	P-21	20	"	1		
	合 計			17		
	(未接合 同一個体)					
V-36-5	P-13	7	覆土	2	III A	口径 17.6 底径 — 器高 22.0
	"	8	"	1		
	"	10	"	6		
	"	11	"	1		
	"	15	"	1		
	O-21	12	III	1		
	O-22	12	"	1		
	"	15	"	2		
	"	17	"	1		
	不 明			1		
	計			17		
	(未接合 同一個体)					
	P-13	8	覆土	2		
	合 計			19		
V-37-6	P-36	1	覆土	27	V	口径 23.1 底径 7.7 器高 17.8
	M-31	19	IIIb	1		
	計			28		
	(未接合 同一個体)					
	P-36	1	覆土	1		
V-37-6	M-31	3	III	1		
	不 明			1		
	合 計			31		
	(未接合 同一個体)					
	P-13	8	覆土	2		
V-37-7	P-20	3	覆土	3	III A	口径 17.6 底径 — 器高 (11.9)
	"	10	"	1		
	N-23	22	III	7		
	N-24	2	II	1		
	"	5	III	7		
V-37-7	O-23	12	"	1		
	Q-23	5	IIIa	1		
	合 計			21		
	(未接合 同一個体)					
	P-44	1	覆土	24		
V-37-8	計			24	III A	口径 — 底径 10.0 器高 (30.8)
	(未接合 同一個体)					
	P-44	1	覆土	8		
V-39-1	合 計			32		
	(未接合 同一個体)					
	K-24	4		41		
V-39-1	計			41	II B	口径 (19.3) 底径 ( 8.6) 器高 27.7
	(未接合 同一個体)					
	K-24	4		30		
V-39-1	合 計			71		
	(未接合 同一個体)					

V 遺 構

挿 図 番 号	遺構名 発掘区	遺物 番号	層位	破片数	分類	大きさ (cm)
V-55-1	F-12	11		1	II B	口径 (28.6) 底径 11.3 器高 34.5
	N-21	3	III	1		
	N-22	7	"	5		
	P-21	1	"	1		
	"	31	"	3		
	"	43	"	3		
	Q-21	3	IIIb	2		
	不 明			26		
	計			42		
	(未接合 同一個体)					
V-55-2	P-21	1	III	1	II B	口径 (32.0) 底径 13.3 器高 45.0
	P-22	7	"	4		
	不 明			1		
	合 計			48		
	F-16			2		
	M-23	25	III	2		
	"	30	"	5		
	O-25	6	II	2		
	"	8	IIIa	1		
	"	39	IIIb	65		
(未接合 同一個体)	P-25	6	"	9	II B	口径 13.0 底径 - 器高 ( 9.7)
	P-25	12	IIIc	3		
	P-25		"	1		
	計			90		
	M-23	2	II	1		
	"	25	III	2		
	N-21	3		1		
	O-25	30	IIIa	1		
	"	39	IIIb	17		
	P-22	33	III	1		
(未接合 同一個体)	P-25	1	II	3	IV A	口径 21.9 底径 8.0 器高 29.9
	"	6	IIIb	2		
	合 計			118		
	F-17・18周辺	14	IIIb	1		
	N-21	3	III	1		
	"	23	"	4		
	O-21	13	"	1		
	"	14	"	1		
	O-24	22	IIIa	1		
	O-25	39	IIIb	1		
V-56-3	P-20	5	III	2	II B	口径 31.7 底径 22.0 器高 8.9
	P-22	27	"	1		
	P-24	37	IIIc	1		
	"	38	"	1		
	"	41	"	1		
	P-26	22	IIIb	1		
	合 計			17		
	F-17・18周辺	26	IIIb	1		
	O-24	21	"	1		
	P-23	27	"	3		
V-56-4	合 計			5	II B	口径 13.0 底径 - 器高 ( 9.7)
	F-71	12		4		
	"	32		4		
	"	33		5		
	F-64	33		1		
	L-33	15	IIIb	10		
	計			24		
	(未接合 同一個体)					
	F-71	29		1		
	M-31	14	IIIb	1		
V-56-5	M-32	17	IIIb	1	IV A	口径 21.9 底径 8.0 器高 29.9
	合 計			27		

表V-4 遺構及び周辺出土の掲載土器 (拓本)

挿 図 番 号	遺構名 発掘区	遺物 番号	層位	破片数	分類
V-8-3	H-3	11	覆土	1	III A
-4	"	10	"	1	"
V-11-5	H-4		"	1	"
	H-4		"	1	"
	(HP-4)				
	H-4	6	"	1	"
-6	"	12	"	1	"
-7	"	6	"	1	"
-8	"	1	"	1	"
V-14-1	H-5	1	"	1	"
V-19-2	P-2	2	"	1	"
-3	"	2	"	1	"
-4	P-3	3	"	1	"
-5	P-5	1	"	1	"
-6	"	1	"	1	"
-7	"	1	"	2	"
-8	"	1	"	5	"
V-28-4	P-6	22	"	1	II B
-5	"	67	"	1	"
-6	"	33	"	1	"
-7	"	57	"	1	"
-8	"	2	"	1	"
-9	"	35	"	1	III A
挿 図 番 号	遺構名 発掘区	遺物 番号	層位	破片数	分類
V-28-9	P-6	79	覆土	1	III A
-10	"	73	"	1	"
-11	"	30	"	1	"
	"	41	"	1	"
-12	P-9	12	"	1	"
-13	"	8	"	1	"
-14	P-15	6	"	2	II B
	Q-23	1	"	1	"
-15	P-20	8	"	1	III A
-16	"	1	"	1	"
	"	3	"	3	"
	"	22	"	6	"
-17	"	3	"	1	"
-18	P-21	2	"	1	"
-19	"	3	"	2	II B
V-30-23	P-24	41	"	1	III A
-24	"	12	"	3	"
-25	P-30	4	"	1	"
-26	P-31	1	"	1	II B
-27	"	1	"	1	"
-28	"	5	"	1	"
-29	"	6	"	1	III A
挿 図 番 号	遺構名 発掘区	遺物 番号	層位	破片数	分類
V-36-3	P-13	14	覆土	1	II B
-4	"	17	"	1	III A
V-56-6	F-5	1		1	"
-7	F-52	1		1	"
-8	F-17・18周辺	10		1	II B
-9	"	7		3	"
-10	"	2		1	III A
-11	"	25		1	"
-12	"	22		1	"
-13	F-19	1		1	"
-14	F-64	109		1	"
-15	"	67		1	IV A
-16	"	67		1	"
-17	"	9		"	"
-18	"	29		1	"
-19	F-64	39		1	"
-20	F-71	5		1	"
-21	"	6		2	"
-22	"	5		5	"
	F-64	110		3	"
	不 明			2	"
-23	F-71	4		2	"



表V-5 遺構及び周辺出土の掲載石器

挿 図	番号	遺 構 名	遺物 番号	層位	名 称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	石 質	備 考
V-4	1	H-1		抜根	石皿, 台石	39.0 × 28.5 × 9.0	12000	安山岩	
V-6	2	H-2	3	覆土	スクレイパー	10.0 × 4.5 × 2.0	92	頁岩	
V-8	5	H-3, HP-1	14	覆土	スクレイパー	5.6 × 3.2 × 1.0	18	頁岩	
"	6	H-3	16	床面	石皿	32.0 × 30.0 × 10	15000	安山岩	
V-11	9	H-4	3	覆土	石鏃	3.6 × 1.2 × 0.4	1	頁岩	
"	10	H-4	7	覆土	たたき石	(9.8) × 5.6 × 3.1	(158)	安山岩	
"	11	H-4	13	覆土	扁平打製石器	16.5 × 8.9 × 3.0	500	安山岩	
"	12	H-4	14	覆土	扁平打製石器	11.2 × 8.4 × 1.1	192	安山岩	
"	13	H-4	5	覆土	たたき石	14.7 × 8.4 × 4.3	840	安山岩	
V-12	14	H-4	18	床面	石皿	42.0 × 36.0 × 12	23000	安山岩	
"	15	H-4	10	床面	石皿	42.5 × 42.5 × 17	35000	安山岩	
V-19	9	P-2	3	覆土	Uフレイク	(9.9) × 5.7 × 2.3	(138)	頁岩	
"	10	P-2	4	覆土	スクレイパー	6.0 × 3.8 × 0.8	22	頁岩	
"	11	P-2	5	覆土	スクレイパー	5.6 × 3.9 × 0.5	14	頁岩	
"	12	P-3	4	覆土	北海道式石冠	7.5 × (8.3) × 5.1	(499)	安山岩	
"	13	P-3	11	覆土	すり石	9.7 × (10.3) × 2.6	(510)	安山岩	
"	14	P-5	2	覆土	たたき石	1.8 × 8.9 × 4.8	900	安山岩	
"	15	P-5	3	覆土	たたき石	13.7 × 8.1 × 5.6	1200	安山岩	
V-31	1	P-6	6	III	刺突器	3.2 × 2.4 × 0.6	5	頁岩	
"	2	P-18	1	覆土	石鏃	3.8 × 1.6 × 0.6	3	頁岩	
"	3	P-31	4	覆土	石鏃	(3.7) × 1.1 × 0.3	(2)	頁岩	
"	4	P-35	2	覆土	石鏃	(5.4) × 1.3 × 0.7	(6)	頁岩	
"	5	P-6	97	覆土	扁平打製石器	4.3 × 8.3 × 3.4	600	安山岩	
"	6	P-6	12	III	扁平打製石器	14.8 × 11.3 × 2.9	690	安山岩	
"	7	P-6	17	III	扁平打製石器	15.1 × 9.3 × 2.9	600	安山岩	
"	8	P-6	49	III	扁平打製石器	(7.5) × 7.4 × 2.0	(183)	安山岩	
"	9	P-6	58	III	扁平打製石器	(13.5) × 11.8 × 2.9	(850)	安山岩	
"	10	P-19	2	覆土	扁平打製石器	13.0 × 7.4 × 3.7	620	安山岩	
"	11	P-19	1	覆土	扁平打製石器	15.3 × 9.7 × 2.5	590	安山岩	
"	12	P-20	7	覆土	扁平打製石器	15.2 × 7.6 × 2.0	374	安山岩	
"	13	P-22	3	覆土	扁平打製石器	(11.5) × 9.9 × 3.7	(700)	安山岩	
"	14	P-30	5	覆土	扁平打製石器	10.9 × 10.0 × 2.7	48	安山岩	
"	15	P-30	6	覆土	北海道式石冠	(11.4) × 10.6 × 7.1	(1060)	安山岩	
V-32	16	P-20	11	覆土	石皿	35.0 × 30.0 × 7.5	13500	安山岩	
"	17	P-20		覆土	石皿	25.0 × 22.5 × 7.0	5100	安山岩	
V-37	9	P-7	3	覆土	扁平打製石器	15.3 × 11.8 × 3.0	840	安山岩	
V-39	2	埋設土器	5		扁平打製石器	17.5 × 13.2 × 4.6	1300	安山岩	
"	3	S-1	1		石皿	33 × 21 × 13	14000	安山岩	
V-57	24	F17, 18周辺	8	III b	ナイフ	3.6 × 4.8 × 0.9	17	頁岩	
"	25	F-12周辺	1	III	北海道式石冠	13.6 × 10.8 × 7.0	1390	安山岩	
"	26	F17, 18周辺	16	III b	北海道式石冠	(11.4) × 5.1 × 7.2	(660)	安山岩	
"	27	F-64	127	覆土	扁平打製石器	10.3 × 6.0 × 2.4	220	安山岩	
"	28	F-64		覆土	すり石	9.3 × 7.8 × 6.0	498	安山岩	
"	29	F-64	130	覆土	すり石	(11.0) × 7.3 × 6.1	(524)	安山岩	
"	30	F-64	20	覆土	たたき石	9.0 × 6.2 × 4.1	340	頁岩	
"	31	F-64	133	覆土	たたき石	9.8 × 8.5 × 6.8	620	安山岩	
"	32	F-65	19	覆土	たたき石	9.0 × 9.3 × 4.4	454	安山岩	
"	33	F-71周辺	2	III b	たたき石	8.6 × 6.1 × 5.1	380	安山岩	
V-58	34	F-12	2		石皿	(25.5) × 23.0 × 7.4	7500	安山岩	
"	35	F-22	1		石皿	(39.0) × (26) × 17	14500	安山岩	
"	36	F-70	1	覆土	石皿	46.5 × 35.0 × 16.5	23000	安山岩	

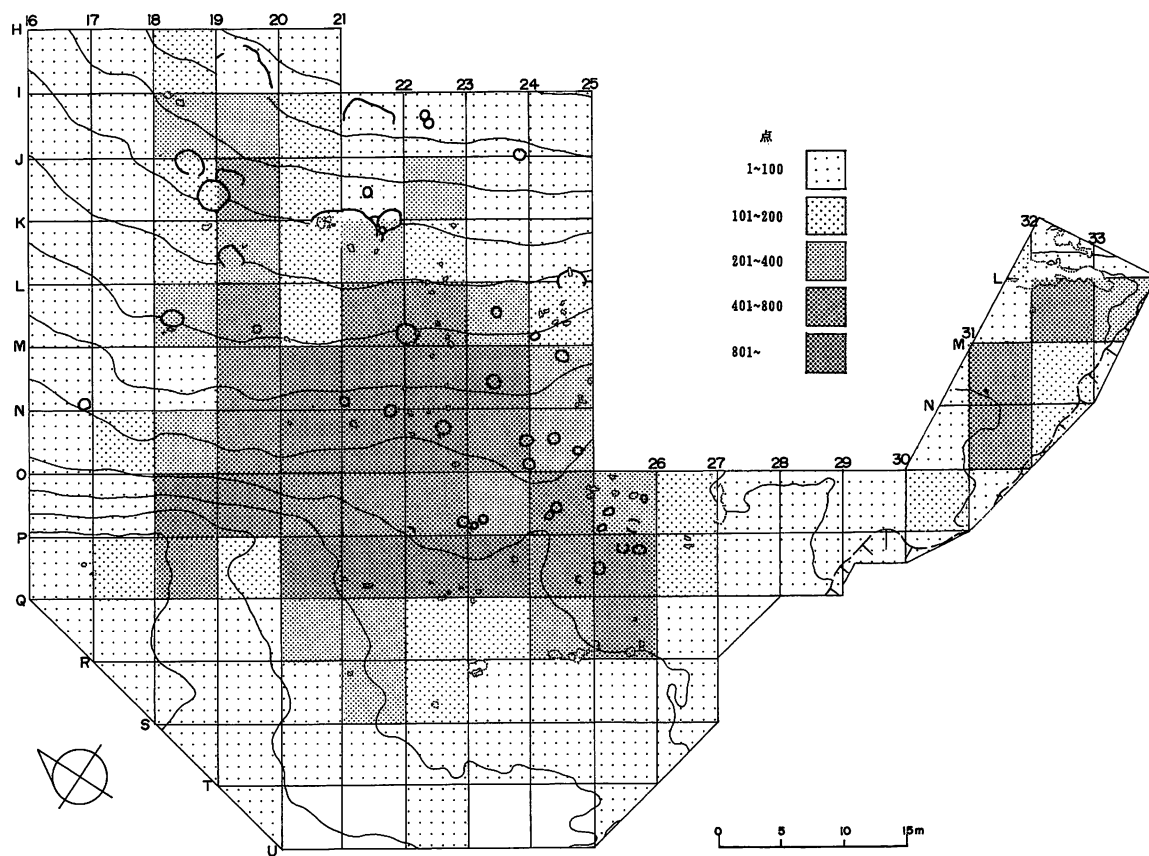
## VI 包含層の遺物

### 1 土器 (図VI-1~45)

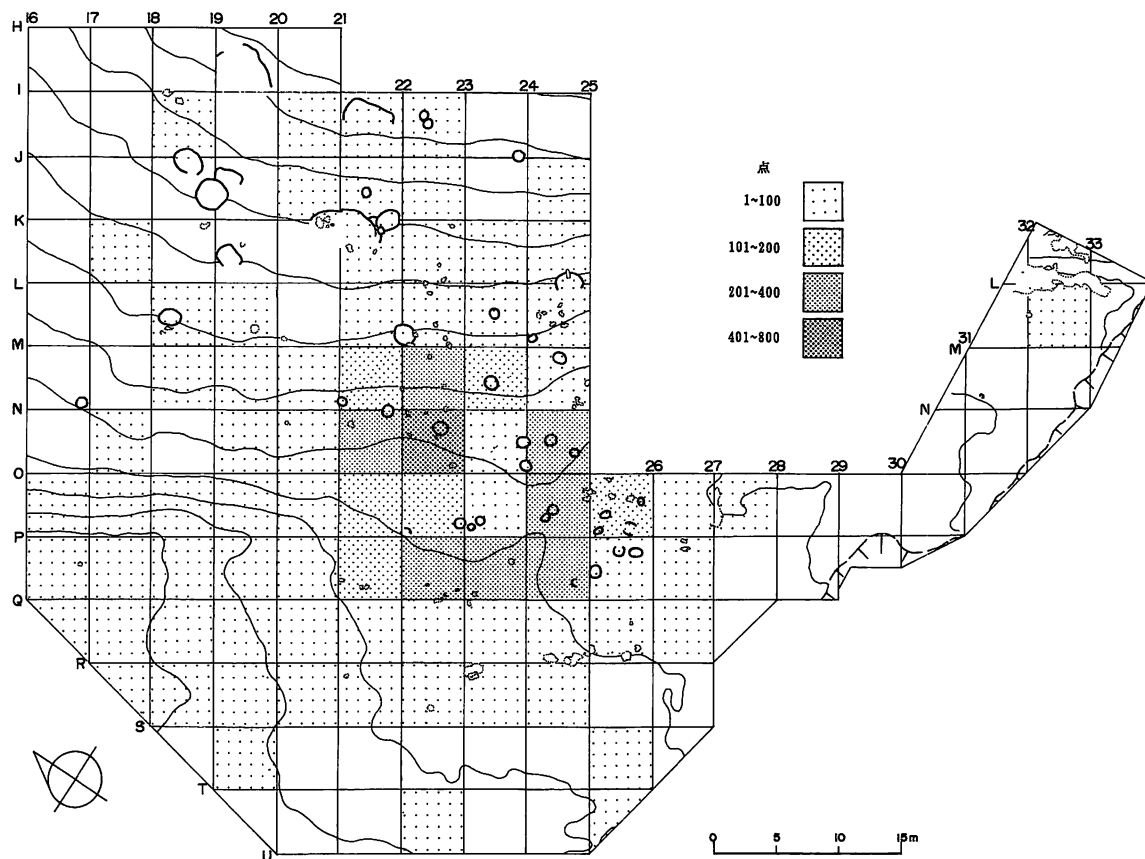
#### (1)土器の出土状況 (図VI-1~9)

包含層から34,279点の土器が出土している。出土した土器には縄文時代前期から晩期の各時期、続縄文時代及び擦文時代に属するものがある。このうちⅢ群A類の円筒土器上層式が25,936点と最も多く、Ⅱ群B類の円筒土器下層式が、4,825点でこれに次ぎ、両者で包含層出土土器の約9割を占めている。

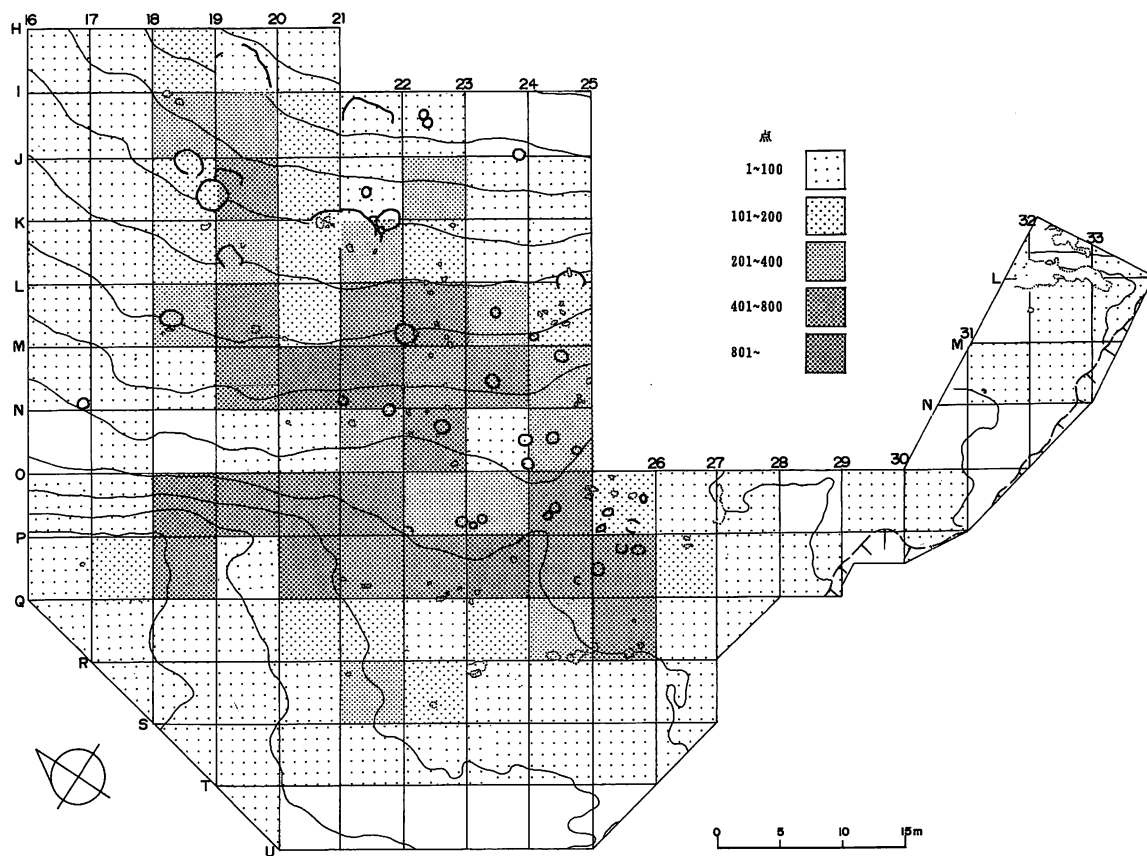
土器はN-22区あたりを中心とする緩斜面から段丘面2にかけての区域と、30ライン以南の段丘面1に濃く分布しており、時期ごとにそれぞれ特色のある分布の傾向を示している(図VI-2~6)。Ⅱ群B類土器はN-22区を中心とする緩斜面からその下方の段丘面2にかけての狭い範囲にまとまっている。Ⅲ群A類土器はⅡ群B類土器の分布と重複してより広い範囲に分布し、斜面中程の住居跡のあたりまで広がっている。Ⅲ群B類土器、Ⅵ群A類土器は主に25ライン以南の段丘面1にまとまっている。Ⅴ群土器も26ライン以南の段丘面1に集中している。Ⅵ群土器、Ⅶ群土器については図示しなかったけれども、いずれも段丘面1と段丘面2に散点的にみられる。



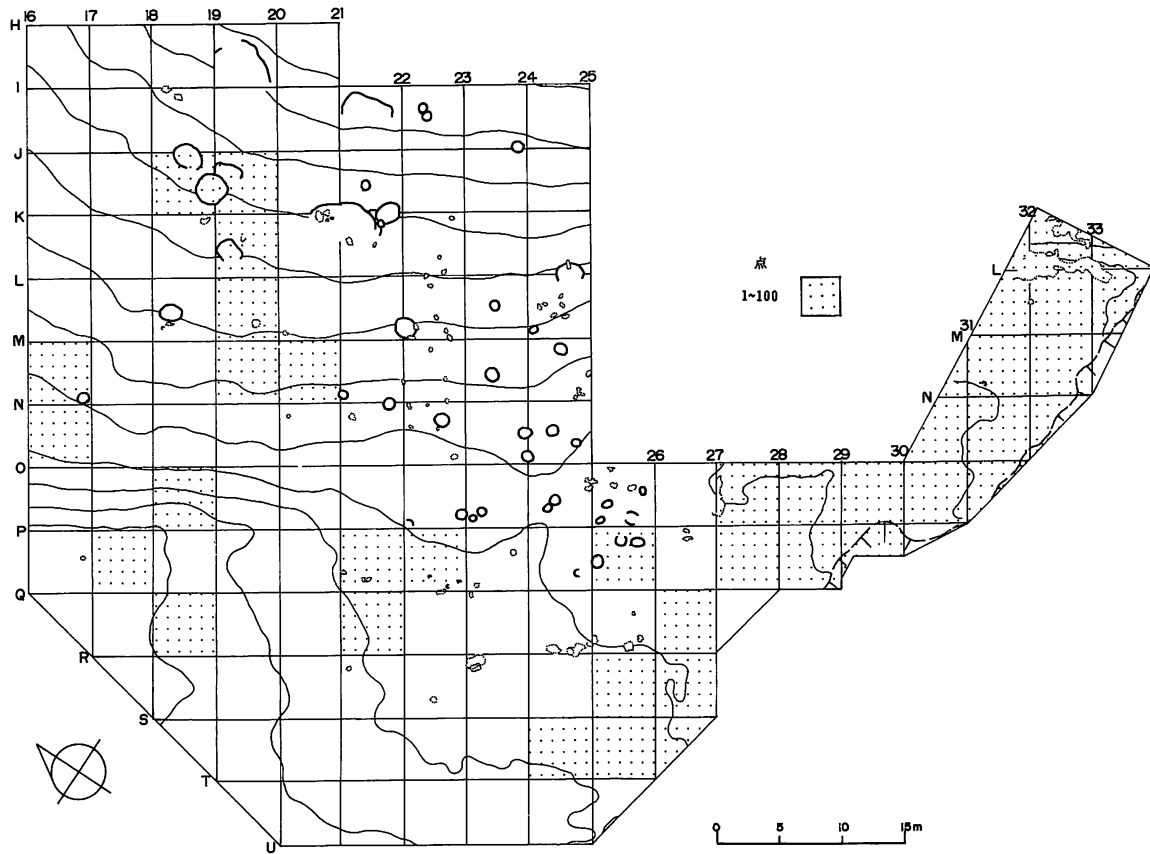
図VI-1 土器の分布



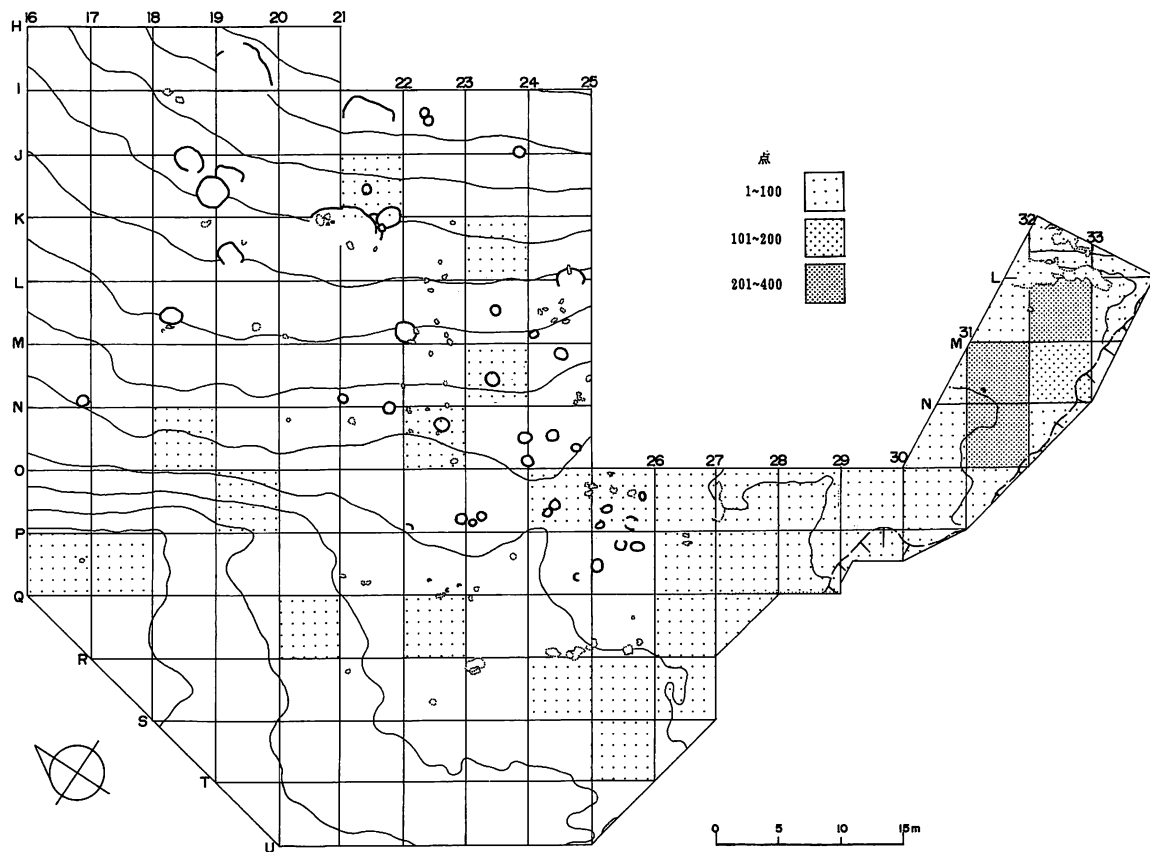
図VI-2 土器の分布 (II群B類)



図VI-3 土器の分布 (III群A類)



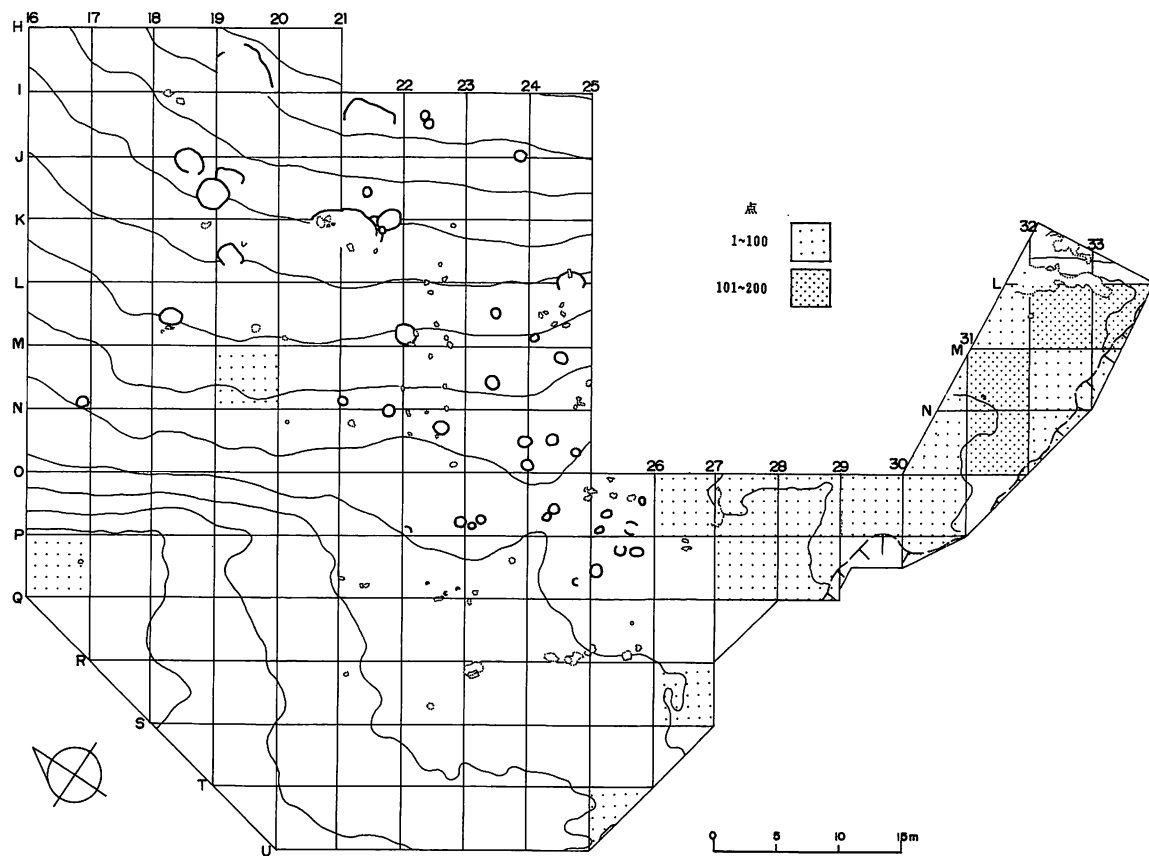
図VI-4 土器の分布 (Ⅲ群B類)



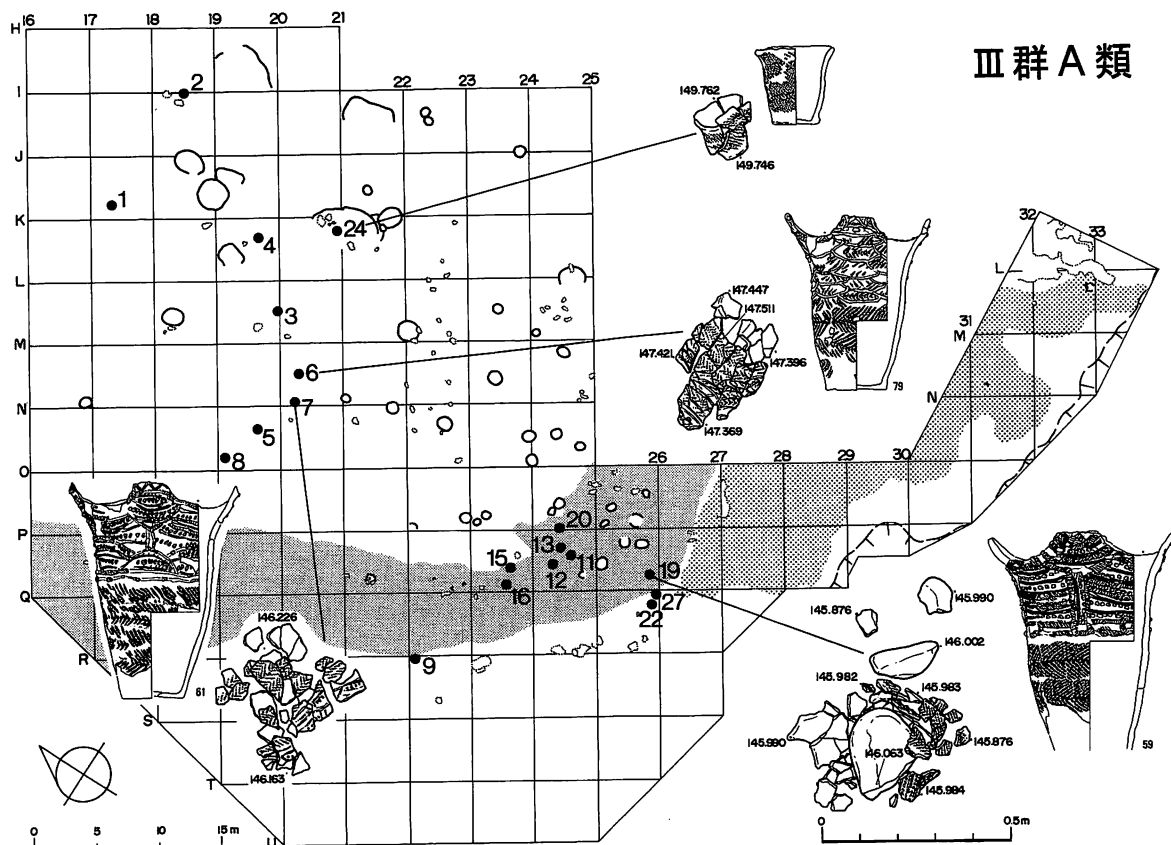
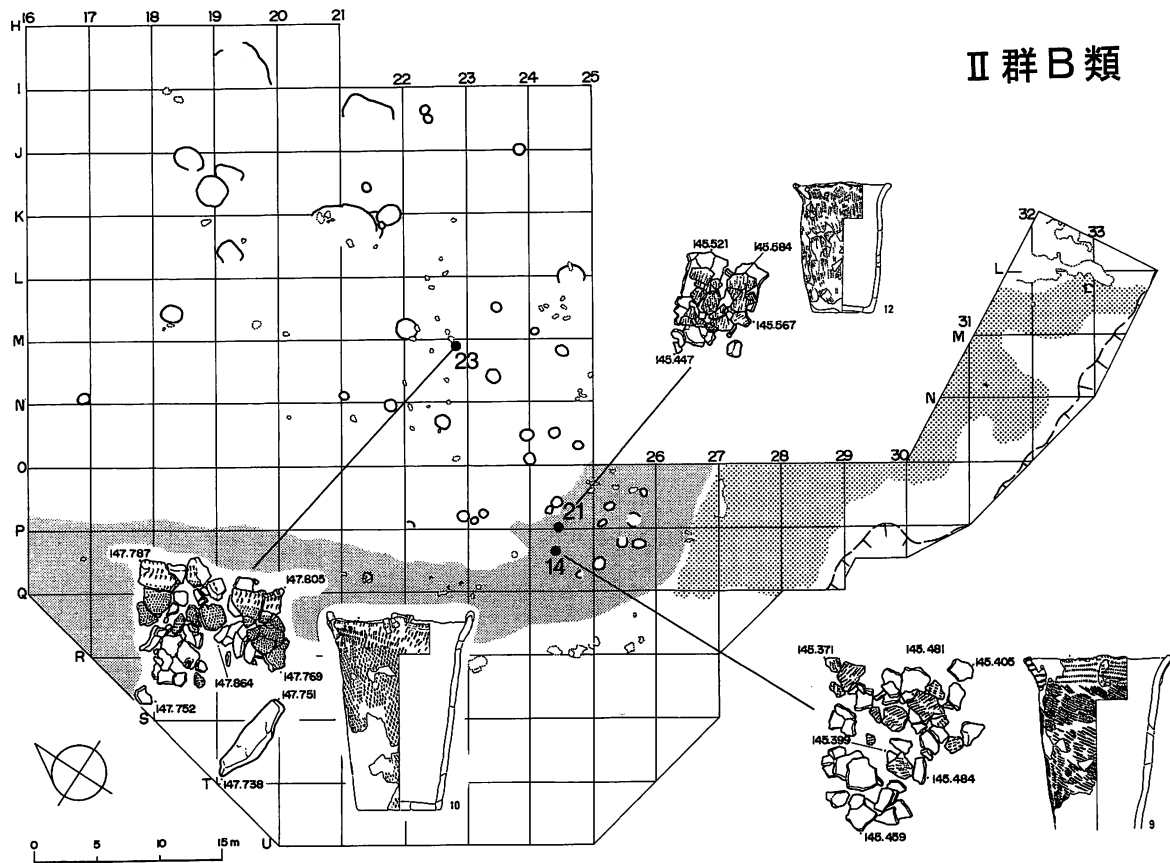
図VI-5 土器の分布 (Ⅳ群A類)

これらの土器を接合した結果、遺構出土の土器と接合したものも含めて130個体あまりの復元資料が得られた。復元された資料の大半は同一の発掘区あるいは近隣の発掘区から出土した土器が接合したものであり、このうち一個体あるいは複数の個体が一か所からまとまって出土した「一括土器」が29例ある。広い範囲に破片が分散していたものはⅡ群B類に3例（図VI-10-2・6，図VI-11-11），Ⅲ群A類に2例（図VI-23-86，図VI-26-110）あるにすぎない。このように、土器の二次的な移動が少ないことが本遺跡の特徴である。個々の出土状態をみると「土器塚」のように意図的に一定の場所に集中して廃棄されたものではなく、多くは使用した場所あるいはその周辺に放置または廃棄されたもののように考えられる。最も出土量の多いⅢ群A類の場合、石皿や石皿様の大形礫と共に焼土の周辺からまとまって出土する例が多い。

（工藤 研治）

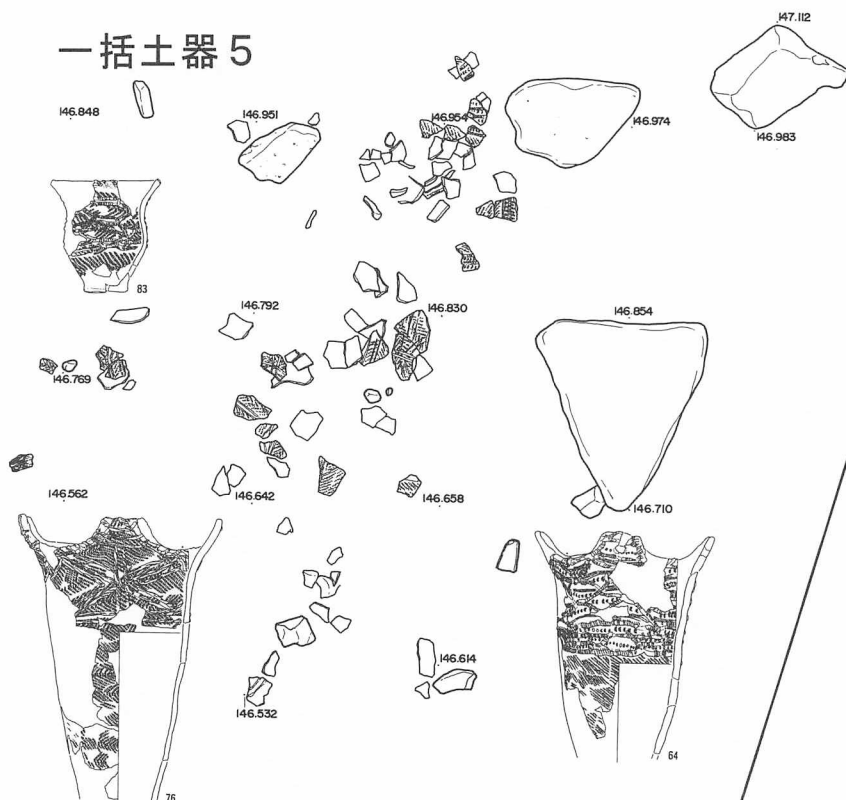


図VI-6 土器の分布（V群）

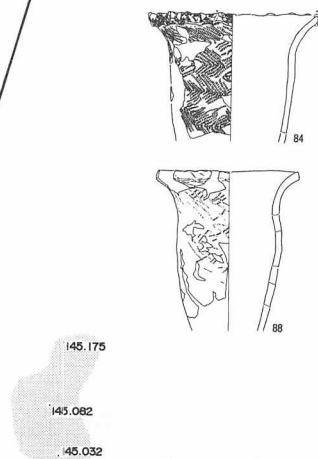


図VI-7 一括土器出土状況(1)

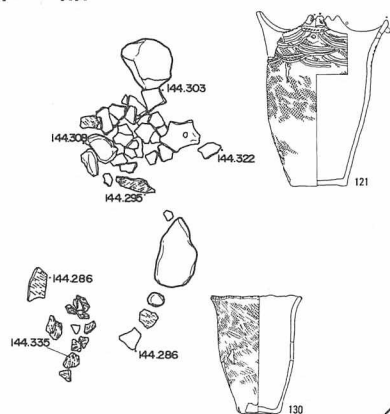
# 一括土器 5



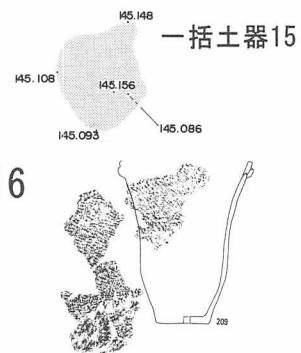
# 一括土器 8



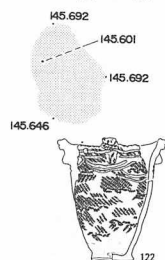
# 一括土器 9



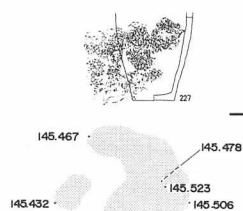
# 一括土器 15 · 16



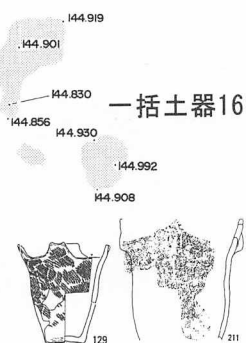
# 一括土器 13



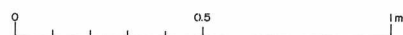
# 一括土器 12 · 13



# 一括土器 12

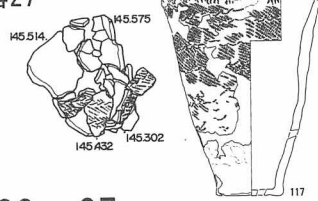


# 一括土器 16



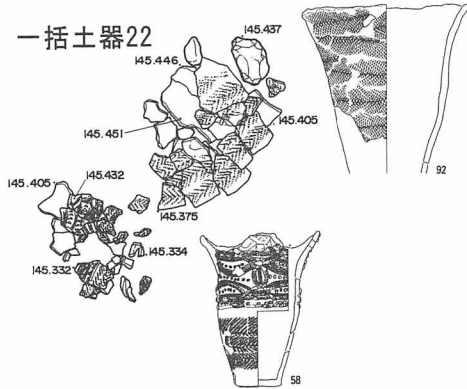
图VI-8 一括土器出土状况(2)

一括土器27

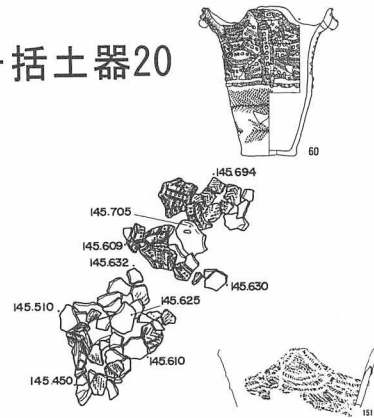


一括土器22・27

一括土器22



一括土器20



0 0.5 1m



図VI-9 一括土器出土状況(3)



## (2)土器 (図VI-10~45)

### II群B類 (図VI-10~15-1~56)

円筒下層d式に相当するものである。次のように細分される。

#### 1群 (13) 比較的古い様相を示すものである。

13は体部に撚糸文の施されたもの。口縁部は直線的に立ち上がり、口唇はやや尖る。口縁部には縄線文の施された幅の狭い文様帯があり、文様帯の下縁には結束第2種の羽状縄文が施されている。

2群 (1~6, 14~31) 比較的新しい段階のものである。平縁のもの、ゆるやかな波状口縁のもの、4か所の山形突起をもつものがある。口縁部は外反し、口縁部と体部の境に明瞭な段を形成するものが多い。口唇には縄の圧痕あるいはその他の工具による刻み目が付けられているものが多い。

a (1, 14~17, 29・31) 体部に撚糸文の施されたもの。1は口縁部に撚りの異なる縄を2本一組にして押捺した縄線文がめぐり、文様帯の下縁には縄端の圧痕が付けられている。14は口縁部に1段の原体による細い縄線文が施され口縁部と体部の境には細い棒状工具による刺突文がめぐり、刺突列の直下には結束羽状縄文が施されている。15は口縁部に2段の原体による縄線文が施されたもの。文様帯の幅は狭い。口唇には縄を押捺した刻み目がある。16は口唇部に撚りの異なる縄を2本並列して押捺したもの。口唇と口縁部の文様帯の下縁には縄を押捺した刻み目が付けられている。17は体部に木目状撚糸文が施されたもの。口縁部には縄線文と棒状工具による刺突文が交互に施されている。29は口縁部に縄線文が施され、その間に縄端圧痕文が一条めぐり、31は口縁部に縄線文で菱形の文様が描かれ、その間に半截竹管状の工具に撚る刺突文が施されている。口唇にも同様の刺突文がある。体部には撚糸文に重ねて横位の条痕文が付けられている。

b (2~5, 18~24, 52~56) 体部に多軸絡条体の回転文が施されたもの。2は口縁部に撚りの異なる2本の縄を並列して押捺している。文様帯の幅は比較的広く、上半は波状、下半は横位の文様が描かれている。口縁部文様帯の直下には結束羽状縄文が二段施され、体部にはさらに口縁部文様帯の波頂部に対応する位置に縦位の結束羽状縄文が施される。3は口縁部に太めの縄線文がめぐり、口唇には縄の押捺による刻み目が付けられている。文様帯の下縁には縄端の圧痕文がめぐり、4は口縁部に2本の縄を並列した縄線文が施されたもので、口唇及び文様帯の下縁には縄を押捺した刻み目が付けられている。5も口縁部に2本の縄を並列して施した縄線文がめぐり、口唇及び文様帯の下縁にはヘラ状の工具によるとみられる刻み目が付けられている。18・20・23は口縁部に縄線文が菱形に施されたもの。口唇及び口縁部文様帯の下縁には縄を押捺した刻み目が付けられている。18には文様帯の直下に結束羽状縄文が施されている。19・21・24は口縁部に縄線文がめぐり、口唇と口縁部文様帯の下縁には縄による刻み目がある。19の体部には結束羽状縄文が幾段か施されている。22は口縁部に縄線文のめぐり小形の土器である。口唇と口縁部の下縁にはヘラ状工具による鋭い刻み目がある。52~56は多軸絡条体の回転文の施された底部。52には結束羽状縄文が重ねられている。53は地文施文後に横位の条痕文が付けられている。

c (25・51) 体部に縄文の施されたもの。25は口縁部に縄線文が施されている。口唇と口縁部の文様帯の下縁には縄を押捺し、その上からさらに鋭い工具による刻み目が付け

られている。51は縄文の施された底部。

d (6・26~28) 体部に沈線文が施されたもの。6は口縁部に幅の狭い無文帯が形成されている。26~28は口縁部に縄線文が施され、口唇及び口縁部文様帯の下縁には鋭い工具による刻み目が付けられている。26・27は同一個体。28の体下部には縄文が施されている。

3群(7~12, 32~50) 平縁のもの、小突起の付くものがある。口縁部は外反し、突起の部分に対応して貼付帯の付くものがある。口縁部と体部の境に段が形成されるものは少ない。

a (7・8, 32~35, 41~43) 口縁部に縄線文の施されたもの。7は口唇に鋭い工具による刻み目が付けられている。体部には撚糸文が施されている。32~35は体部に縄文の施されたもの。32の口唇には縄文が施されている。33・34は同一個体。口唇に半截竹管状工具により斜め方向からの刺突文が施されている。35は口縁部に縄線文が施され、その間に棒状工具による刺突文が付けられている。口唇には縄の圧痕文がある。8は小突起の部分に対応して縦位の貼付帯があり、貼付帯には棒状工具による刻み目がつけられている。口唇には縄を押捺した刻み目がある。体部には多軸絡条体の回転文が施されている。41・43は口縁部に細い縄線文で鋸歯状の文様を描くもの。41の体部には多軸絡条体の回転文が施されている。口唇には鋭い工具による刻み目がある。42は口唇にも縄線文が施されている。体部には縄文が施されている。

b (9, 36~39, 44) 口縁部に絡条体圧痕文が施されたもの。9, 37~39には口縁の突起部に対応して貼付帯があり、体部には縄文が施されている。9の口唇には鋭い工具による刻み目がある。3の口唇には縄の圧痕が付けられている。39の口唇には縄文が施されている。36は体部に撚糸文が施されている。44は体部に多軸絡条体の回転文が施されたもの。口唇と体部にも絡条体圧痕文が施されている。

d (10・40) 口縁部に刺突文が施されたもの。10は口縁部に爪形文様の刺突部がめぐるもの。口縁部には突起の部分に貼付帯があり、体部には多軸絡条体の回転文が施されている。40は口縁部に半截竹管状工具による刺突文が施されるもの。突起の部分に対応して貼付帯がある。図中左側の貼付帯を境にその左側には縄線文が施されている。体部には縄文が施されている。

e (45・46) 口縁部に半截竹管状工具による沈線文の施されたもの。45・46は同一個体。口唇と文様帯の下縁には鋭い工具による刻み目が付けられている。体部には多軸絡条体の回転文が施されている。

f (11・12, 47~50) 口縁部に文様帯をもたないもの。49は多軸絡条体の回転文が施されたもの。他は縄文が施されたものである。

### III群A類(図VI-16~41-57~248)

円筒土器上層式に相当するものである。以下のように細分される。

1群(139) 円筒上層a式に相当するもの。139は口縁に二又の突起があり、それに対応して太い貼付帯がV字状に付けられている。器面には無文地に細めの原体を3本並列して鋸歯状の文様を描かれている。文様帯の下縁は貼付帯によって区画されている。貼付帯には細い原体の押捺文が付けられている。

2群(57~94, 140~164) 円筒上層b式に相当するもの。4か所の弁状突起の付くも

のと、平縁のものがある。無文地に貼付帯で文様が描かれるもの、縄文地に貼付帯で文様が描かれるもの、縄文のみのものがある。

a (57~67, 140~144) 無文地に貼付帯で文様が描かれるもの。

a-1 (57, 140・141) 太めの貼付帯で文様が描かれるもの。貼付帯上には細い縄による刻み目が密に付けられている。文様帯の幅は狭い。口唇断面は丸みを帯びている。57は突起下に2状の貼付帯が垂下し、その下縁を横体の貼付帯で区画しているもの。その内側には縄線による馬蹄形圧痕文が施されている。貼付帯の縁には撚りの異なる3本組の縄線文が施されている。140は貼付帯で連続する円形文を描き、その中程を横位の貼付帯で区画しているもの。円形文の内側には3本組の縄線文と縄線による馬蹄形圧痕文が施されている。141は低い突起下に縦位の貼付帯が施されたもの。文様帯の内側には3本組の縄線が施されている。140・141の体部には結束羽状縄文が縦位に施文されている。

a-2 (58~67, 142~144) 比較的細めの貼付帯が施されたもの。貼付帯上には細い縄の圧痕が施され、貼付帯に沿って2本または3本組の縄線文が施されている。文様帯の幅は広い。口唇断面は切り出し状または尖りぎみである。体部には結束羽状縄文が施されている。58~63, 66・67は突起部から垂下する2条の貼付帯を横、斜め、あるいは弧状の貼付帯で繋ぐもの。58・60・67の突起部には孔がある。58の文様帯の内側には竹管状工具による刺突文が施されている。59は貼付帯に沿って半截竹管状工具による刺突文が施されている。60・61・67も同様である。62には半截竹管状工具による馬蹄形の刺突部がある。63・66は縄を丸めて押捺した馬蹄形圧痕文が施されているもの。64・65, 141~144は貼付帯で連続する弧状の文様が描かれたもの。64・65の突起部には孔が穿たれている。貼付帯の間には縄による馬蹄形圧痕文が施されている。142・144には半截竹管状工具による刺突文が施されている。143は縄による馬蹄形圧痕文と半截竹管状工具による刺突文が施されている。口縁には円形の貼付文がある。

b (68~86, 78, 145~154, 156~158) 縄文地に貼付帯で文様を描くもの。弁状突起をもつものと平縁のものがある。貼付帯上には縄の圧痕文が施されているものが多い。口唇断面は切り出し形や尖りぎみのものが多いけれども、やや丸みを帯びたものもある。体部には結束羽状縄文の施されたものが多い。68~76, 78, 145~149, 151, 153・154は突起をもつもので、突起下に垂下する貼付文の間を横、斜め、弧状の貼付文で繋いでいる。69, 78, 153の突起には孔が穿たれている。75・77・153・154の貼付帯は無文である。7の貼付帯上には縄線文が施されている部分がある。79・81・150は突起をもち、貼付帯で弧状を基調とする文様が描かれたもの。79・150の突起には孔がある。79の貼付帯には一部に刻み目がある。82~86, 156~158は平縁のもの。82は垂下する貼付帯を弧状の貼付帯で繋いでいる。83は貼付帯で弧状の文様が描かれている。84~86, 156~157は口縁にのみ波状の貼付帯が付けられている。158は連続する小円形を貼付帯で描いている。貼付帯は無文である。

c (87~93, 159~164) 縄文のみのものである。弁状突起をもつものと平縁のものがある。体部に結束羽状縄文が施されるものが多い。87・159は突起のあるもの。他は平縁のもの。88は無節の縄文と単節の縄文が施されている。93は口縁部が折り返し状になっているもの。便宜的にここに含めている。

d (94) 無文のものである。

3群 (95~98, 165~168) 2群と4群の中間的様相をもつもの。弁状突起のあるもの

と平縁のものがあり、無文地に貼付帯が施されるもの、縄文地に貼付帯が施されるもの、縄文だけのものがある。これらに共通して、口唇には縄または鋭い工具による刻み目が付けられている。体部に結束羽状縄文の施されたものが多い。

a (95・165) 無文地に貼付帯が施されたもの。95は突起部が欠損したもの。比較的細めの貼付帯で連続する弧状の文様を描いている。内側には半截竹管状工具で刺突文が施されている。貼付帯上には縄の圧痕文がある。口唇には縄による刻み目が施されている。165は細い貼付帯が施されたもの。貼付帯は無文である。縄による馬蹄形圧痕文が施されている。95・165には縄線文はみられない。

b (96・97, 166～168) 縄文地に貼付帯が施されるもの。97, 166～168は突起のあるもの。166は口唇に鋭い工具による大柄な刻み目が施されている。他の口唇には縄の圧痕による刻み目がある。96は平縁のもの。口縁に「C」形の貼付帯が施されている。

c (98) 縄文だけのもの。98は小形の鉢形土器、口唇に縄による刻み目が施されている。体部には無節の結束縄文が施されている。

4群 (99～106, 155, 169～170, 172～185) 口縁部に小突起や釣り耳のあるもの、平縁のものがある。口唇には縄による刻み目のあるもの、縄文の施されたものがある。5群に含めるのが妥当かと思われる資料もあるが、やや厚手で体部に結束羽状縄文が多用されるグループを本群とした。

a (99・170) 無文地に細めの貼付帯が施されたもの。99は口縁に円形の小突起がある。貼付帯は比較的細く、無文である。貼付帯の間には半截竹管状工具による刺突文が施されている。口唇には指頭で円形の凹みが付けられている。170は縄を押捺した刻み目のある貼付文が施されている。

b (100・101・103・155・169, 172～178) 縄文地に貼付帯の施されるもの。100は小突起のほかに把手が付けられている。101は突起の部分が釣り耳になっている。103は口縁に貼付帯で波状の文様が描かれている。155・169, 172～174・178は縄による刻み目の付けられた細めの貼付帯が施されている。

c (102・103～106, 179～185) 縄文だけのもの。突起のあるものと平縁のものがある。体部には結束羽状縄文が施されている。105・183・185は口唇に縄文が施されている。ほかのものは口唇に縄を押捺した刻み目が付けられている。179は口唇にヘラ状のもので抉りとしたような凹みが連続して付けられている。それぞれの凹みの間には2本組の短い縄線文で区切られている。

5群 (107～135, 171, 186～224) サイベ沢Ⅶ式、見晴町式に相当するもの。細い貼付帯が施されたもの、沈線文が施されたもの、縄文のみのものがある。口縁部には小さな弁状突起のあるもの、山形突起のあるもの、円形の小突起のあるもの、平縁のものがある。

a (171) 無文地に細い貼付帯で文様が描かれるもの。171は口縁に小突起があり、つぶれた小孔が穿たれている。貼付帯上には縄線文が施されている。貼付帯の間には半截竹管状工具による刺突文が付けられている。口唇には縄の刻み目が密に施されている。薄手の土器である。

b (107～112) 縄文地に細い貼付帯で文様が描かれたもの。107は山形突起のある小形のもの。突起部から垂下する貼付帯の上に円形の貼り瘤がある。貼付帯上には縄文が施されている。108・112は小さめの弁状突起のあるもの。突起の上面は幅が広がっている。

口唇には縄による刻み目が施されている。貼付帯上には縄線文が施されている。109・110は山形突起のあるもの。貼付帯上には縄線文が施されている。111は口縁に二又の小突起のあるもの。細い貼付帯が刻み目のように口唇に付けられている。貼付帯上には縄線文が施されている。

c (122~125, 136, 195~206) 沈線が施されたもの。122は口縁に小突起のあるもの。口唇には刻み目がある。体部には綾絡文が施されている。123は口縁に2個一組の小突起があり、その下位の器面には釣り耳がある。口唇には縄による刻み目がある。体部には斜行縄文が施されている。14は山形突起のあるもので、突起の部分を弧状の沈線で区画している。突起下の器面には円形の貼り瘤がある。口唇には縄を押捺した刻み目がある。体部には結束第2種の羽状縄文が施されている。125・195, 196~202, 205・206は斜行縄文の地に沈線文施されたもの。199・201・205・206の口唇には縄による刻み目が施されている。202の口唇には縄文が施されている。197・198は同一個体。小形の土器である。無文地に細い沈線で文様が描かれている。136は無文地に沈線部が施されたミニチュア土器。

d (113~119, 126~135, 186~194, 207~222) 縄文のみのものである。口縁部に小さな弁状突起や小突起のあるもの、平縁のものがある。体部には結束縄文の施されたもの、綾絡文の施されたもの、斜行縄文の施されたものがある。

d-1 (126・131・132) 結束縄文の施されたもの。126は口縁部に小突起のあるもの。131・132は小さな山形突起のある小形のもの。

d-2 (113~119, 188~191・193) 綾絡文の施されたもの。口唇に縄を押捺した刻み目の付けられているものが多い。113は弁状突起のあるもので、突起下には横位の釣り耳が付けられている。115は小突起のあるもの。116は弁状突起のあるもの。188は横長の切れめのある山形突起が付いているもの。189は大きな円形の突起のあるものである。193は山形の突起部に縦長の貼り瘤が付けられたもの。ほかは平縁のものである。

d-3 (127~130, 133~135, 192・194, 207~222) 斜行縄文の施されたものである。口縁部に弁状突起のあるもの、山形突起のあるもの、小突起のあるもの、平縁のものがある。

このほかに、無文のミニチュア土器(137・138・223)、魚骨文の施された胴部の小片(224)がある。225~148は底部である。225は台付土器の脚部。

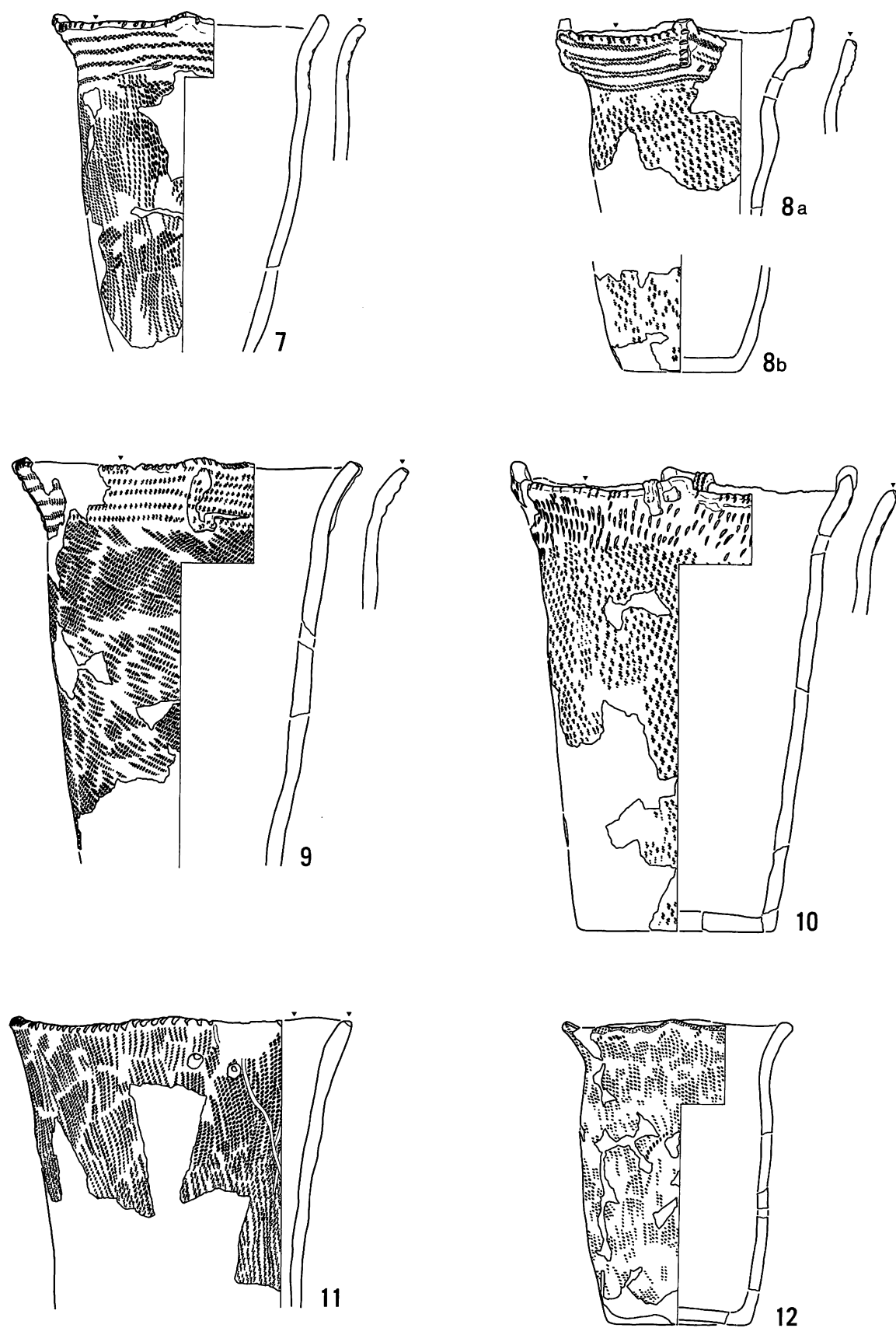
以上のうち、3群、4群、5群については分析が不十分なので再度検討を要するものである。今後の課題としたい。

III群B1類(図VI-42-249~255) 榎林式に相当するもの。

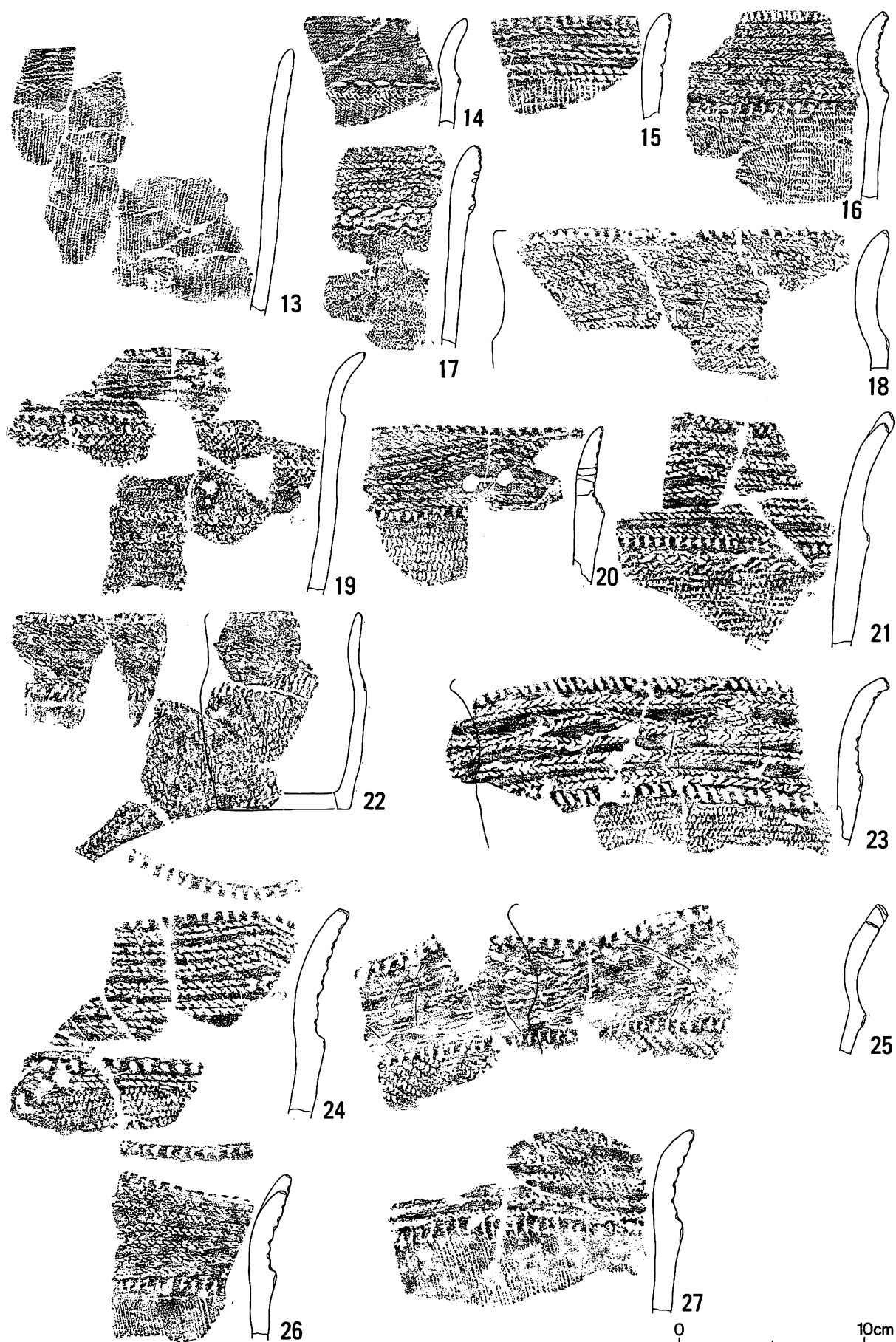
253は口縁が肥厚しそこに沈線が施されるもの。肥厚部は丁寧に調整されている。249は山形口縁のもので、口縁部は外反する。縄文地に沈線が施されている。内面は丁寧に調整されている。251は山形口縁のもので口縁部はゆるく外反する。252も同じく山形口縁のもの。口縁部は開く。体部には粗い縄文が施されている。254は口縁部が急に外反するもの。255は口縁に沿って縄線が施されている。250は横走する粗い縄文の施された平縁のもの。IV群A類に含まれる可能性もあるが、便宜的にここに含めておく。



図VI-10 包含層出土の土器(1)

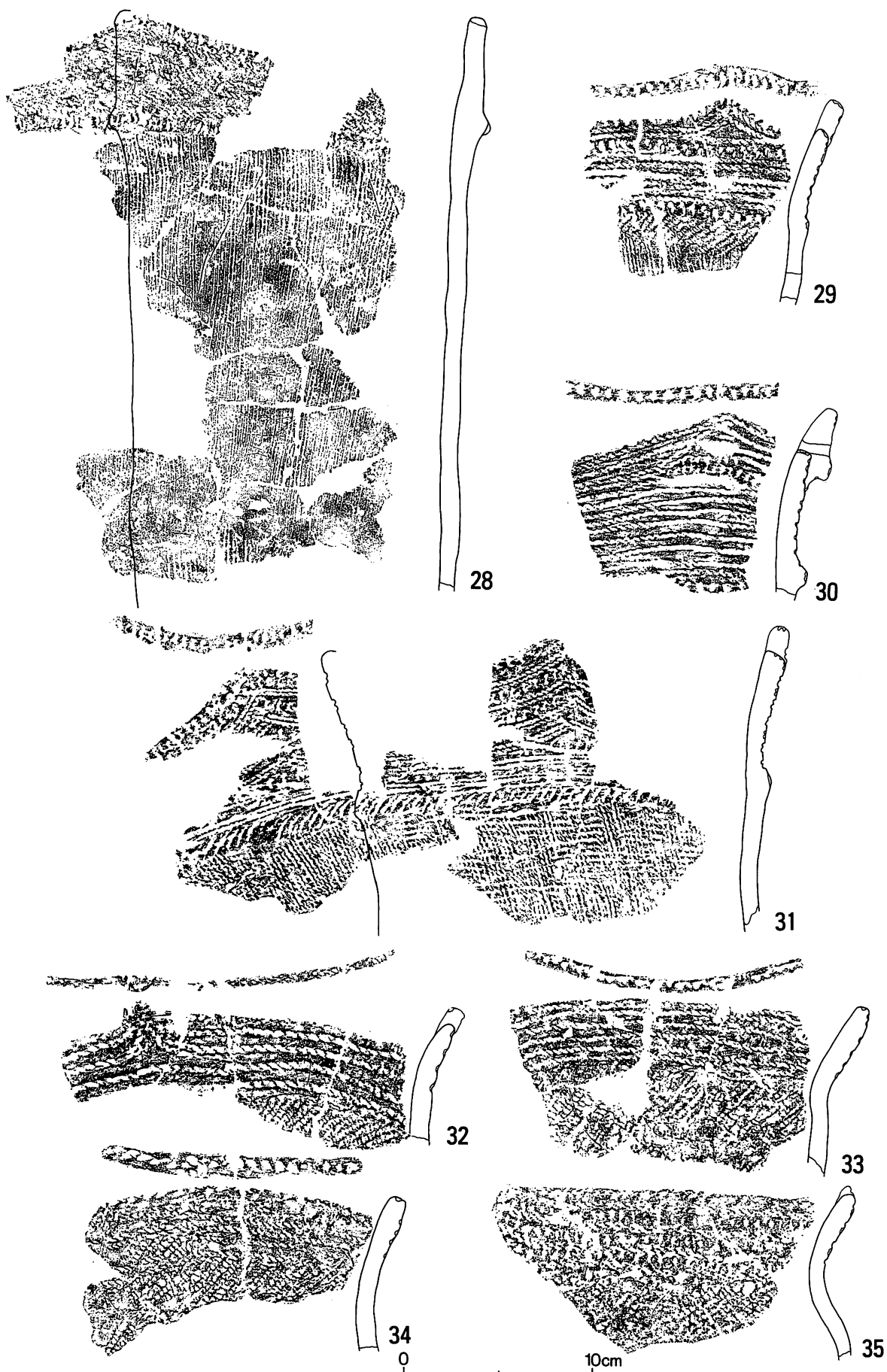


図VI-11 包含層出土の土器(2)

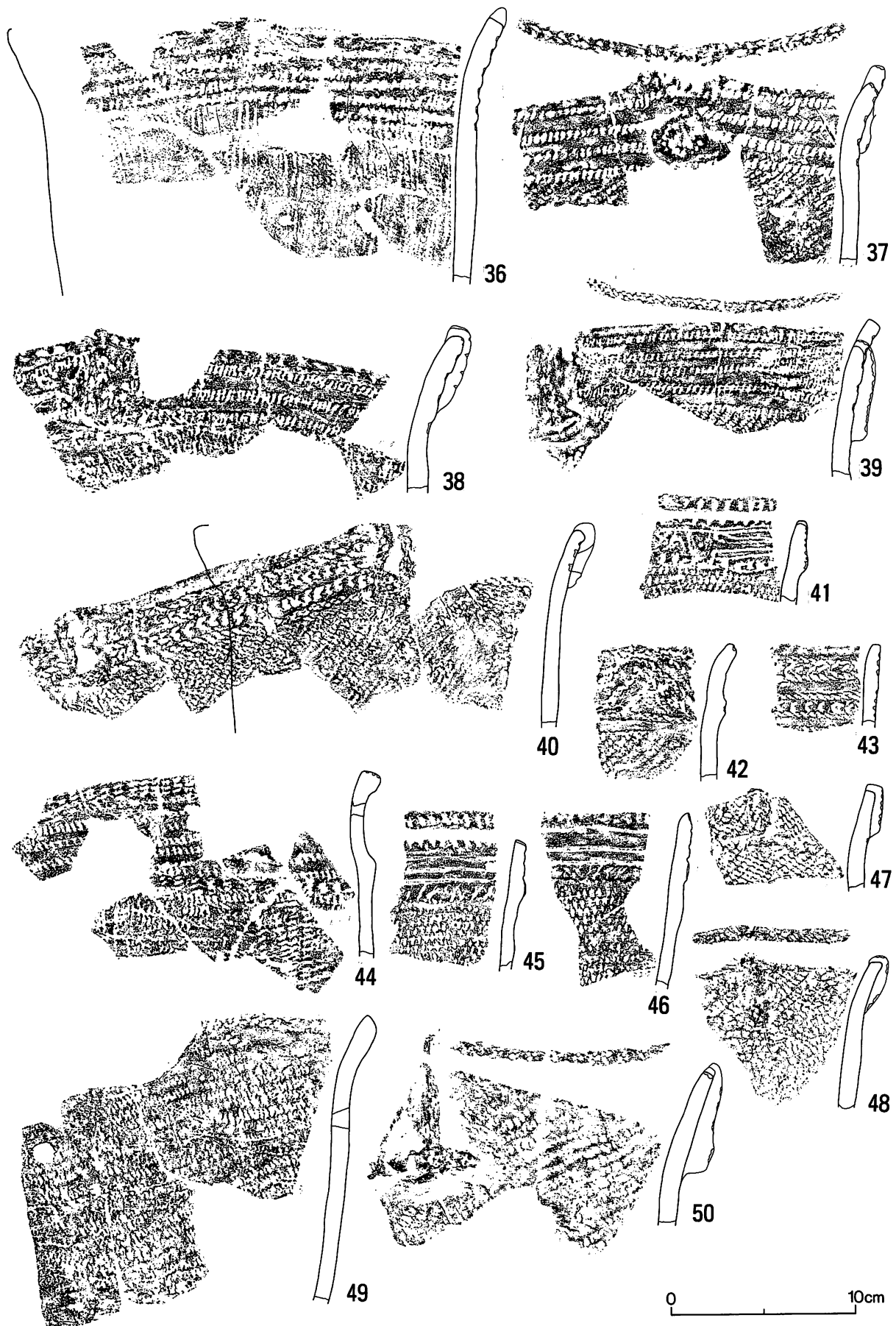


図VI-12 包含層出土の土器(3)

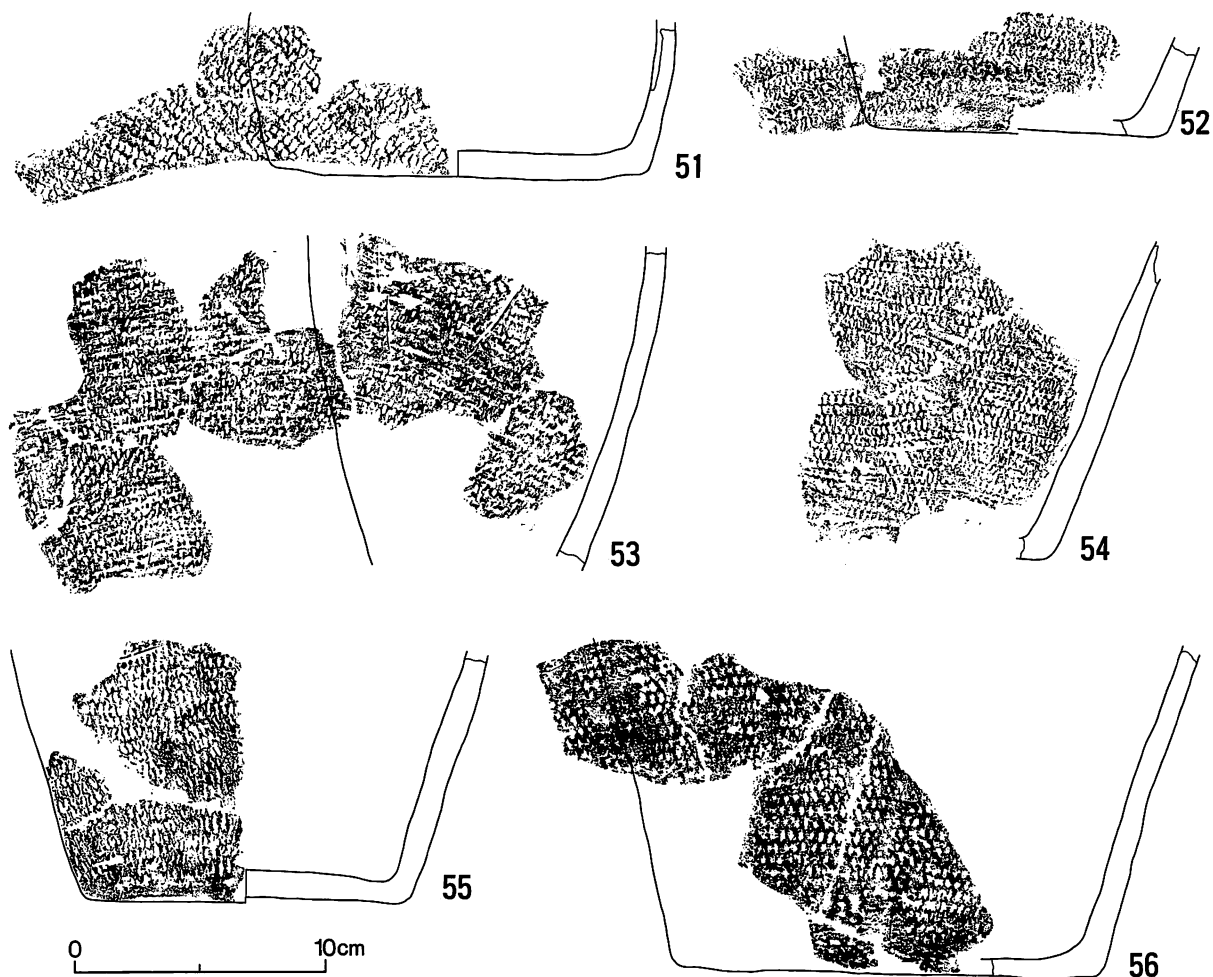




図VI-13 包含層出土の土器(4)



図VI-14 包含層出土の土器(5)



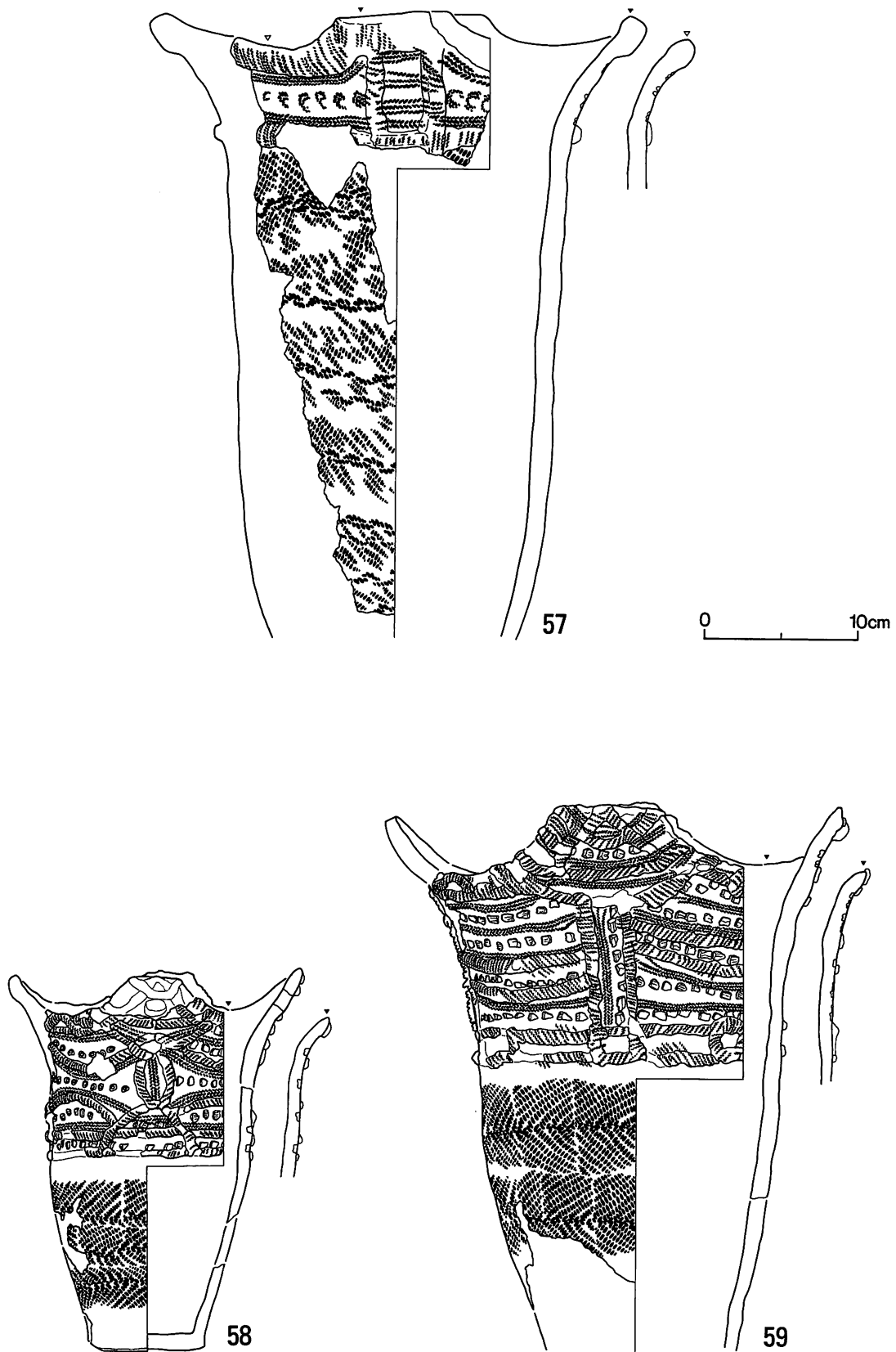
図VI-15 包含層出土の土器(6)

III群B 3類 (図VI-42-256・257) ノダップII式に相当するもの。

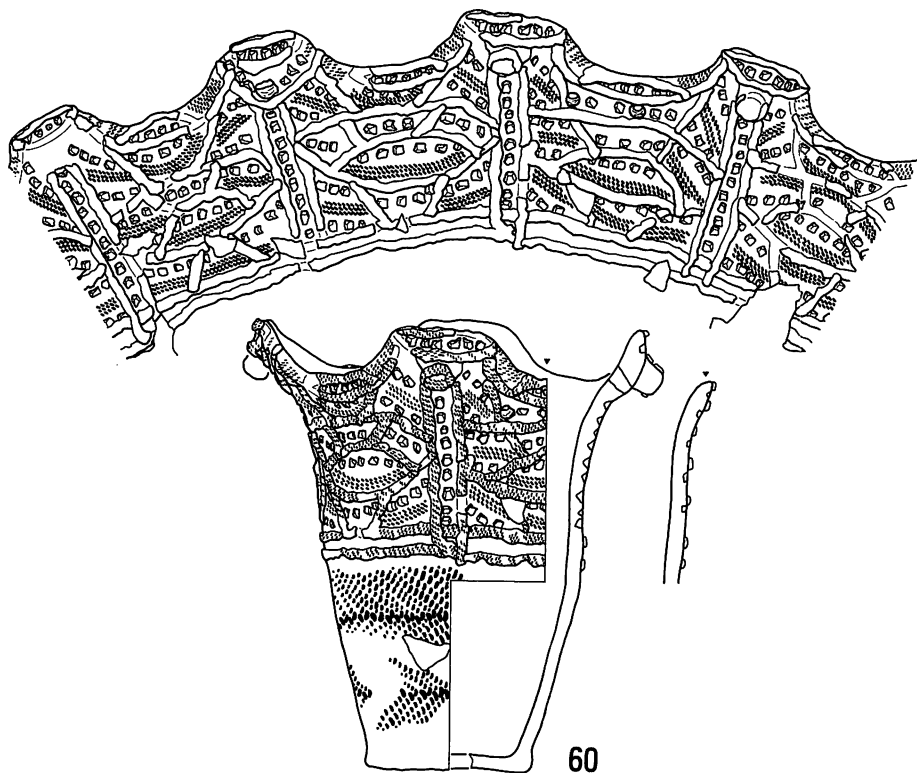
256・257は同一個体。口縁と体部に細い隆起帯があり、隆起帯上には縄線文が施されている。

IV群A類 (図VI-43-258～276)

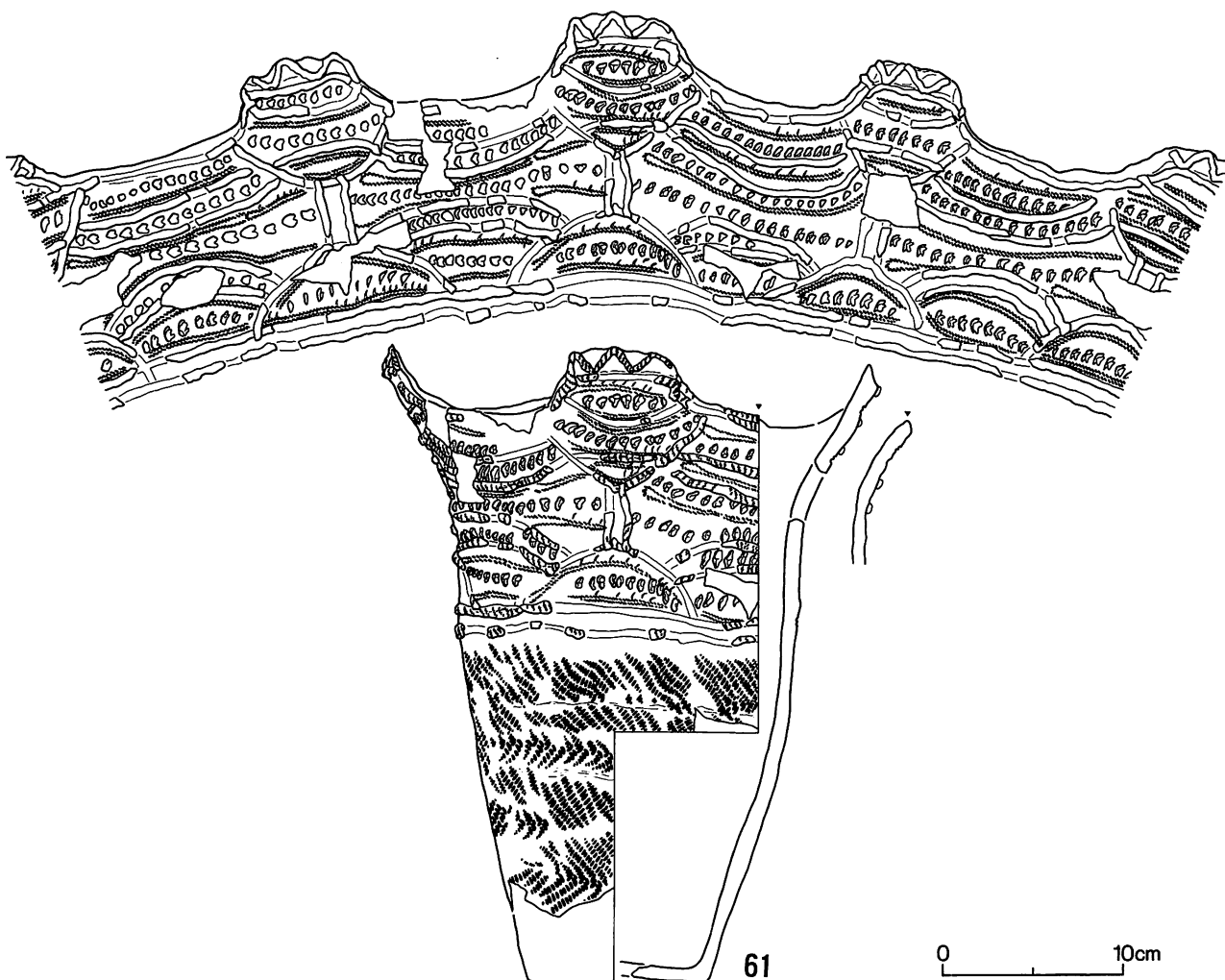
259は低い山形口縁のあるもの。口縁部は外反する。なで調整された器面に3条の横走沈線が施され、その間に沈線で鋸歯状文が2段施される。胎土には小礫が含まれている。260は折り返し状の口縁のもの。肥厚部は原体を横位に、体部は縦位に施文している。口唇にも縄文が施されている。261・262は同一個体。口縁に貼付帯の施されたものである。貼付帯上は横位、体部は縦位に縄文が施文されている。口唇にも縄文が施されている。263～268は口縁部に無文帯のあるもの。267・268には口縁からの垂下する貼付帯が加わる。いずれも貼付帯には横位、体部には縦位に縄文が施文されている。269～272は貼付帯に2段の原体の縄線文が施されたもの。縄線文の付けられた貼付帯はあらかじめ器面につけられた溝に施されている。274は原体の施文方向を替えて羽状縄文としたもの。275～276は底部。258は口縁部がやや外反する無文土器。胎土に砂粒を多く含む。出土位置、胎土等から本群に含めた。



図VI-16 包含層出土の土器(7)



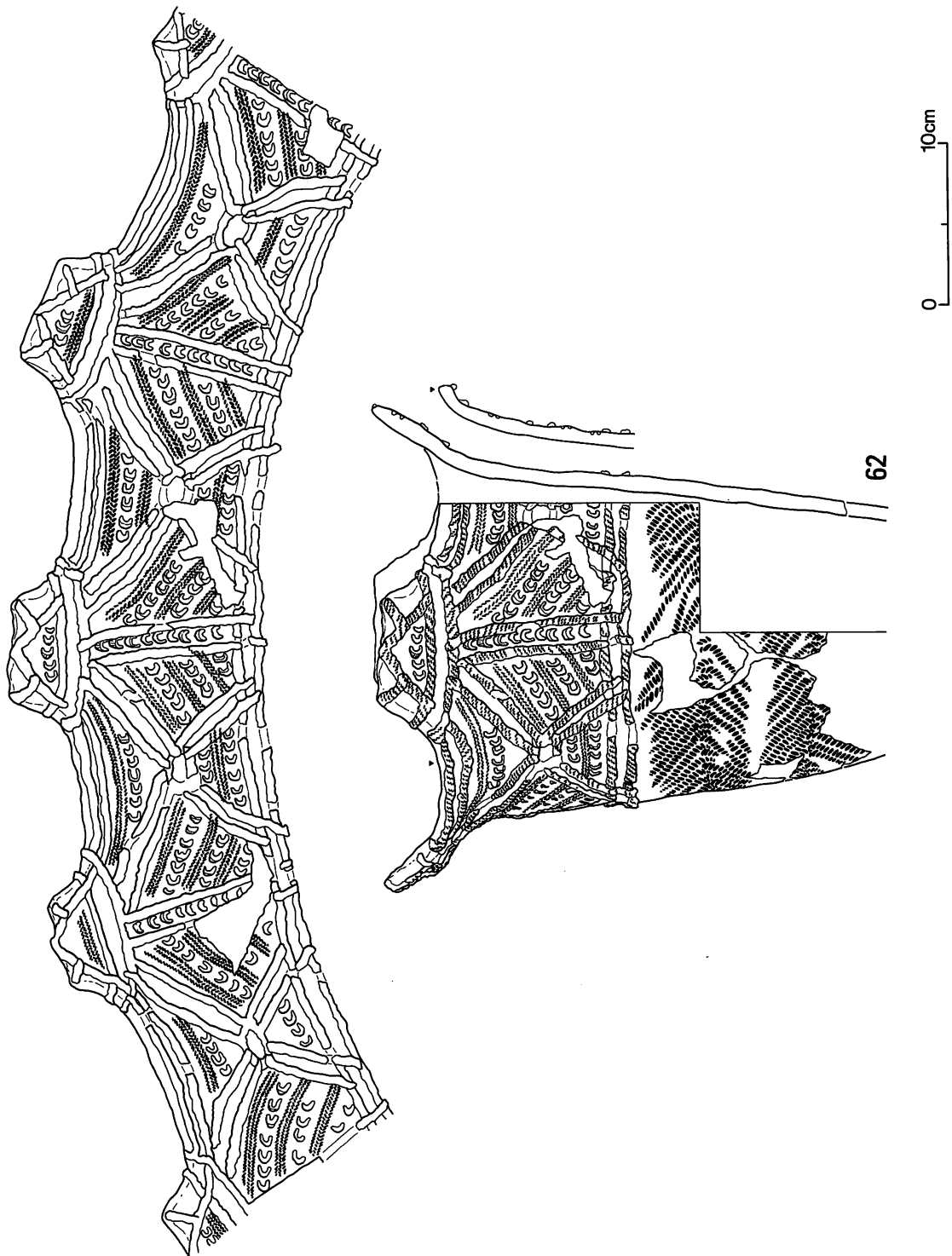
60



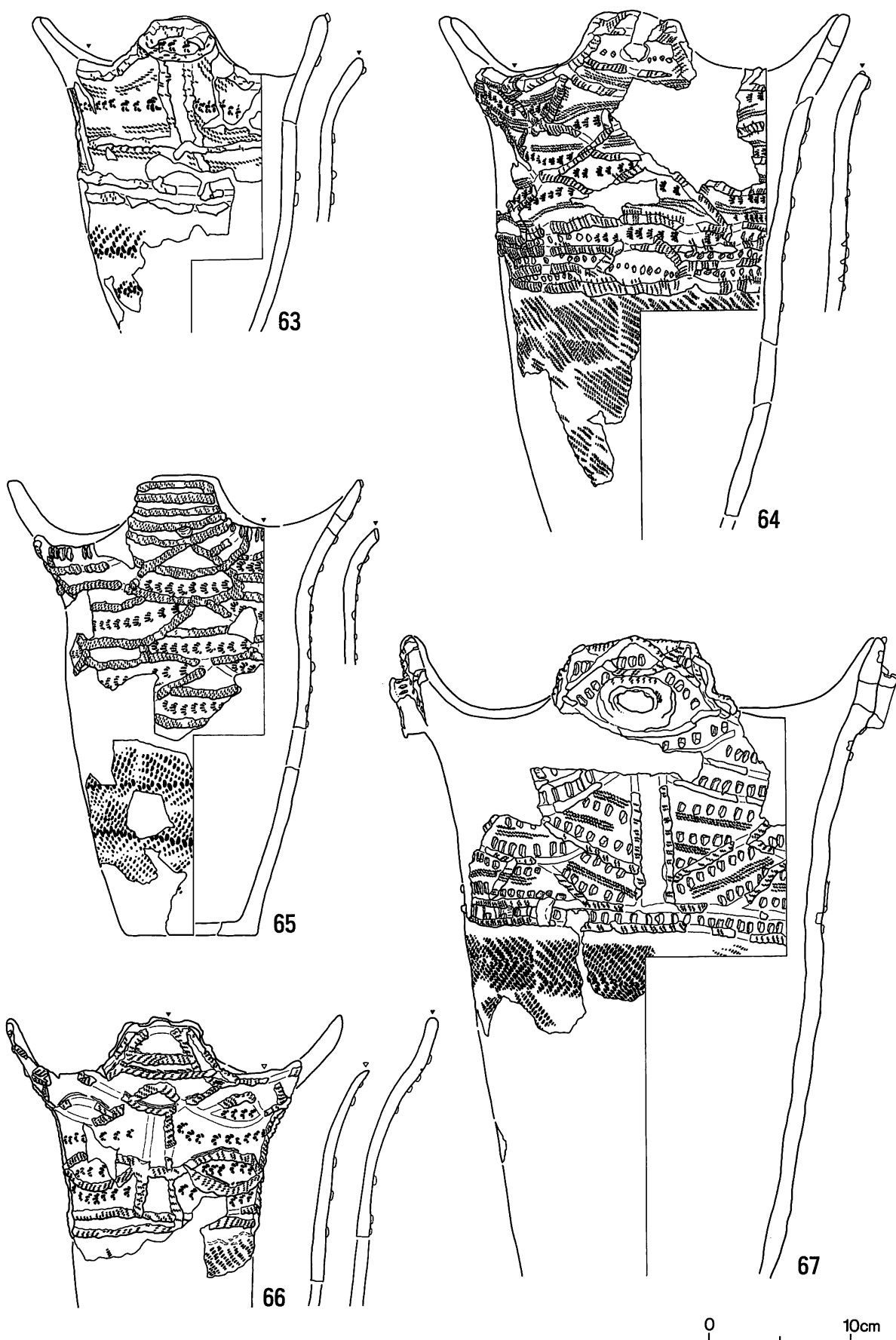
61

0 10cm

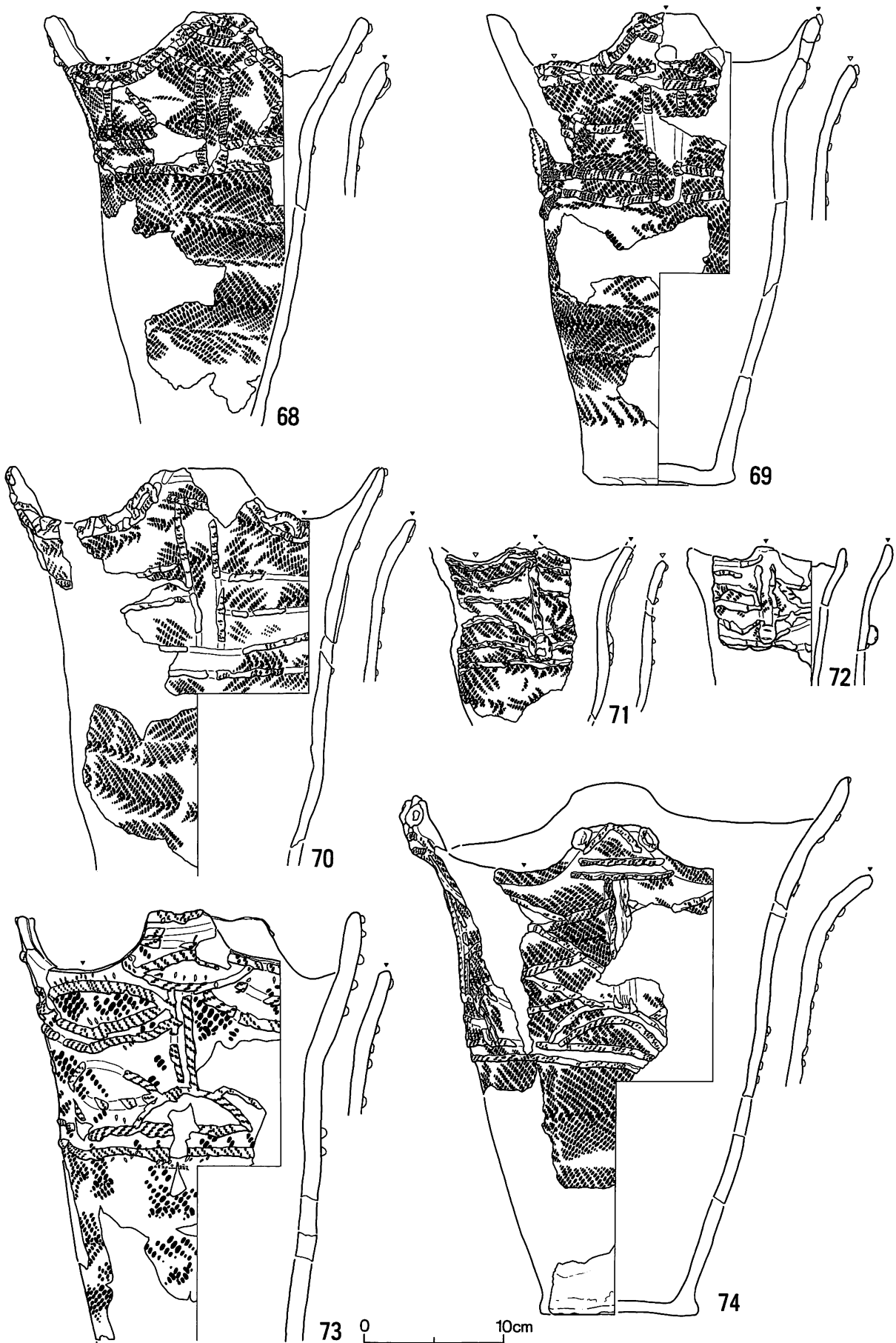
図VI-17 包含層出土の土器(8)



図VI-18 包含層出土の土器(9)

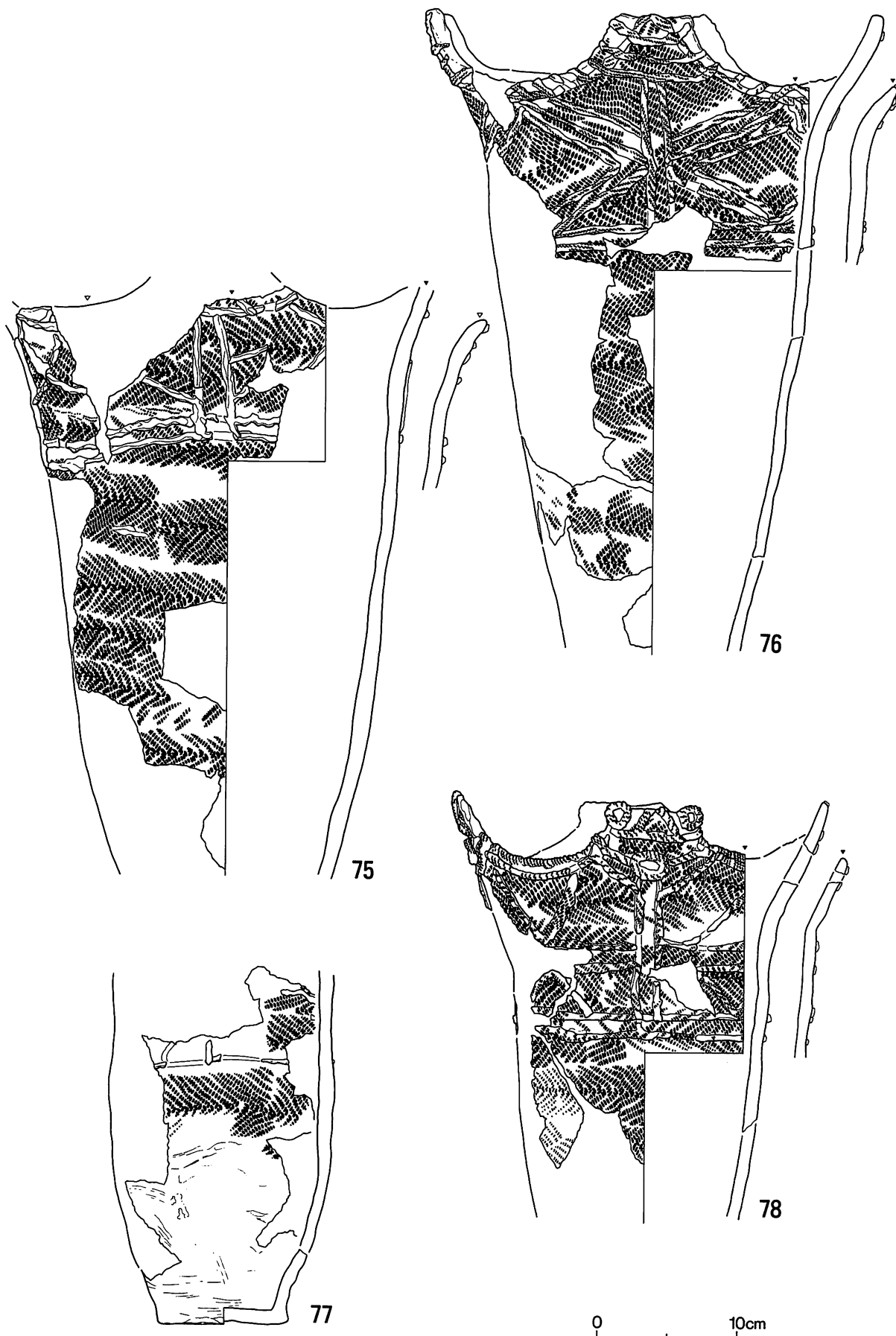


図VI-19 包含層出土の土器(10)

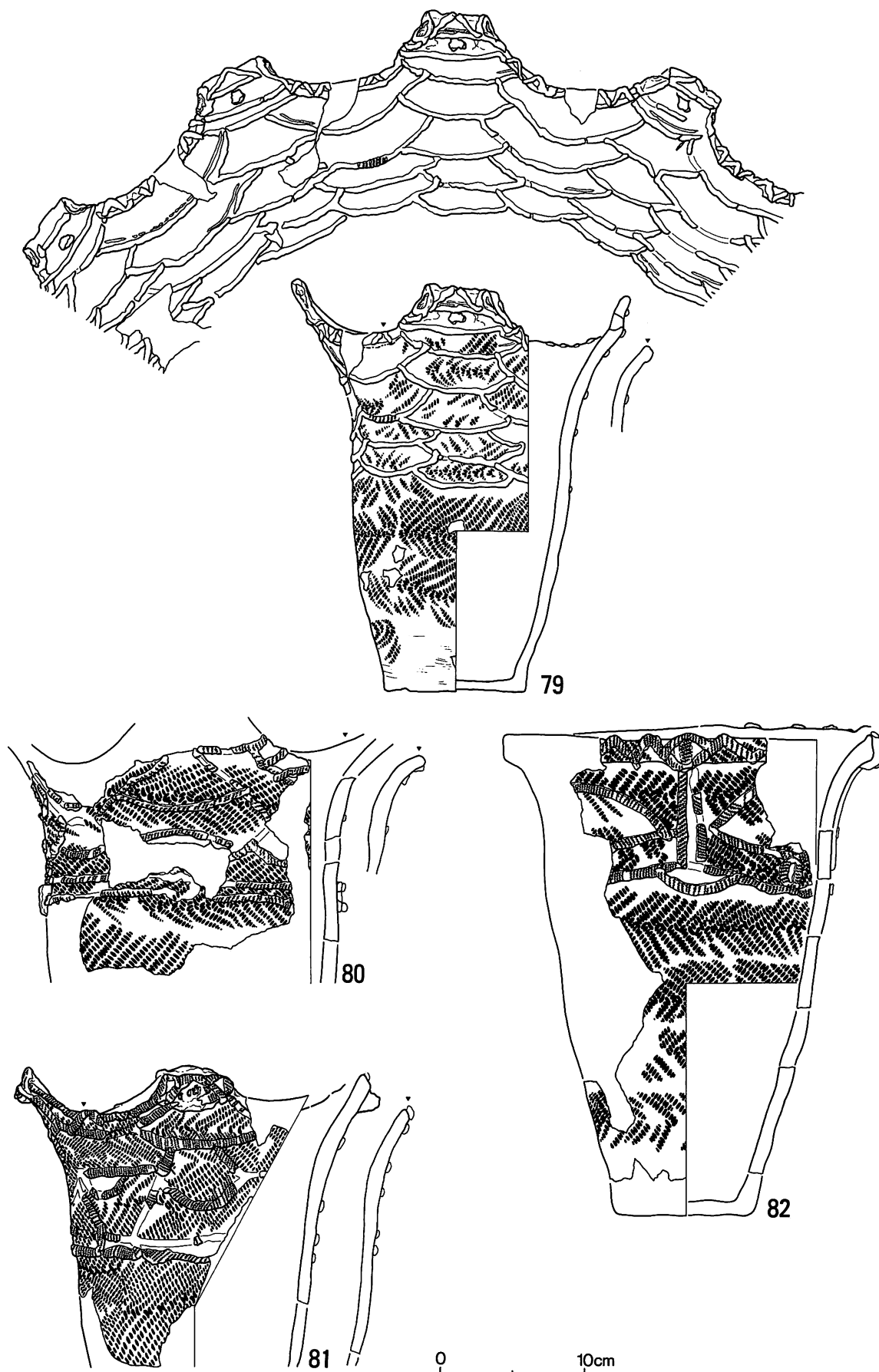


図VI-20 包含層出土の土器(1)

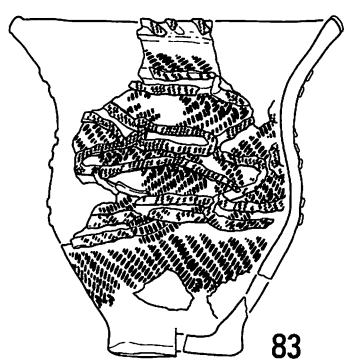




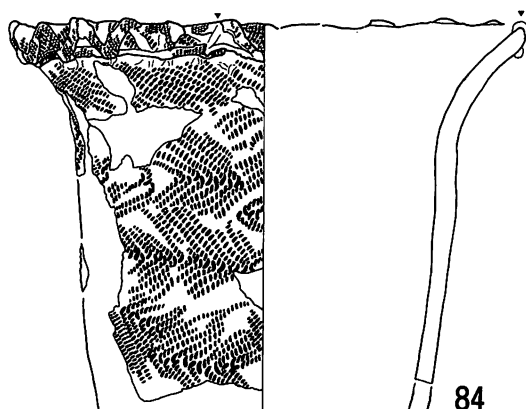
図VI-21 包含層出土の土器(12)



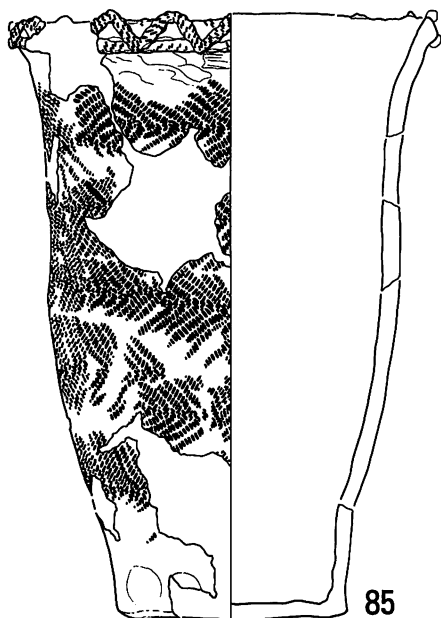
図VI-22 包含層出土の土器(13)



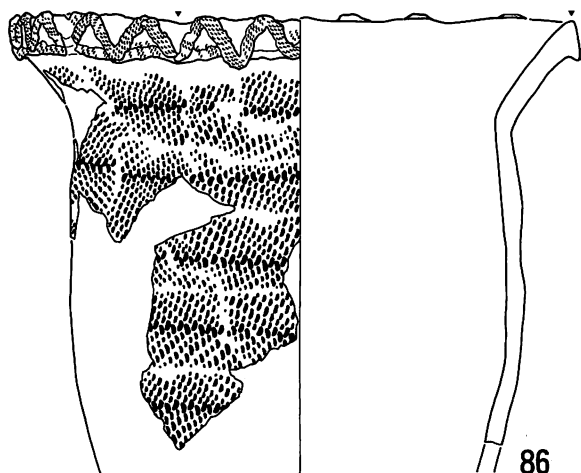
83



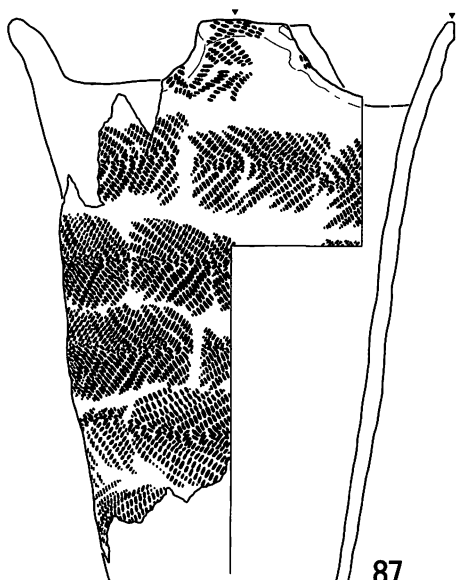
84



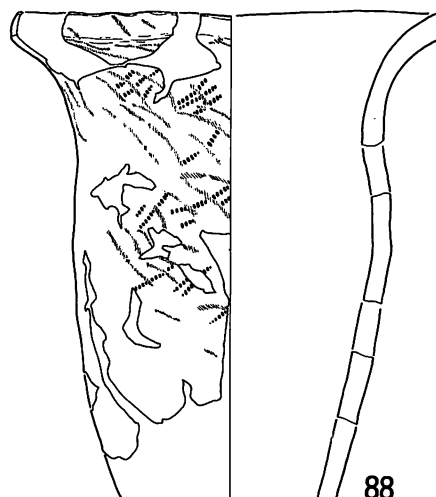
85



86



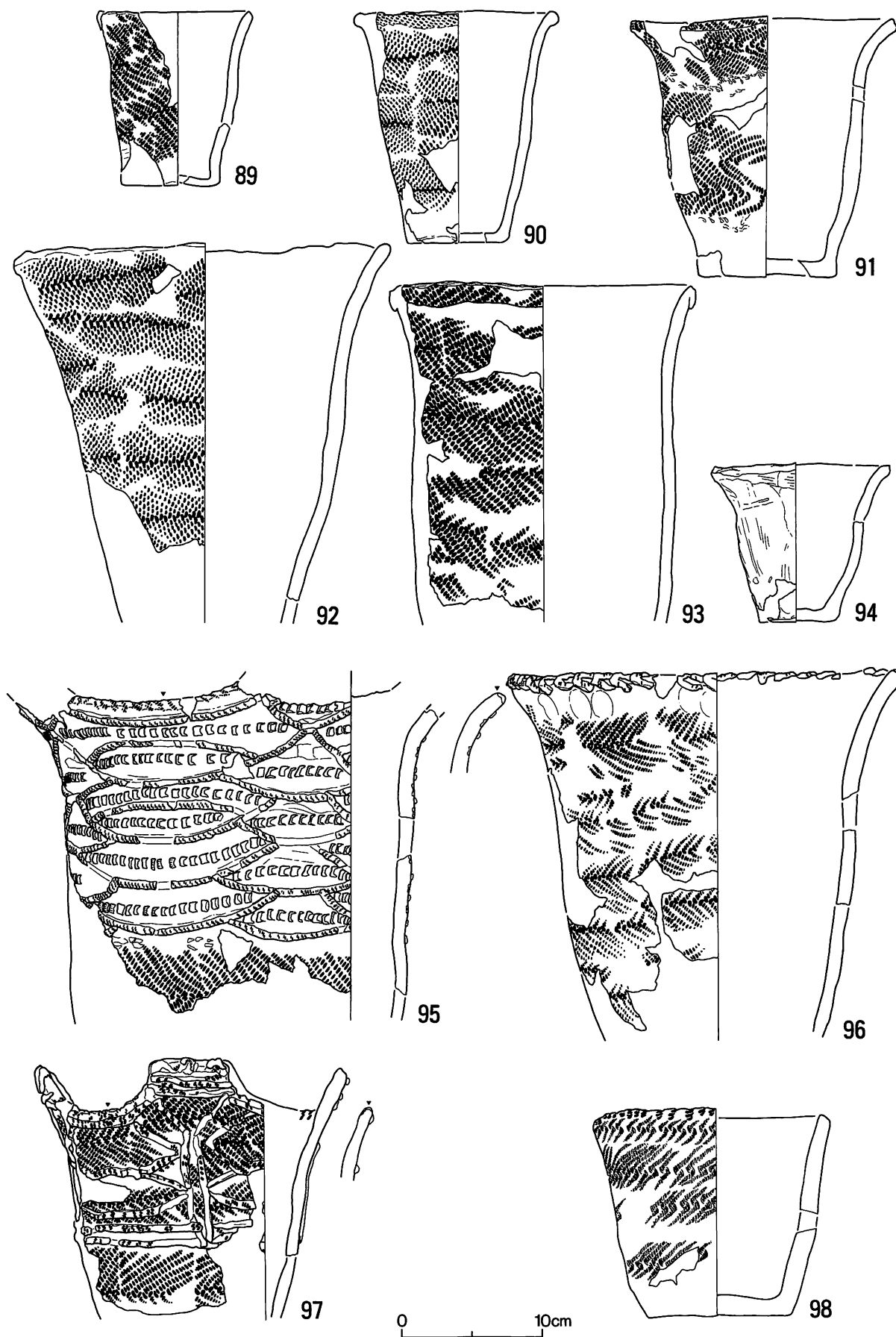
87



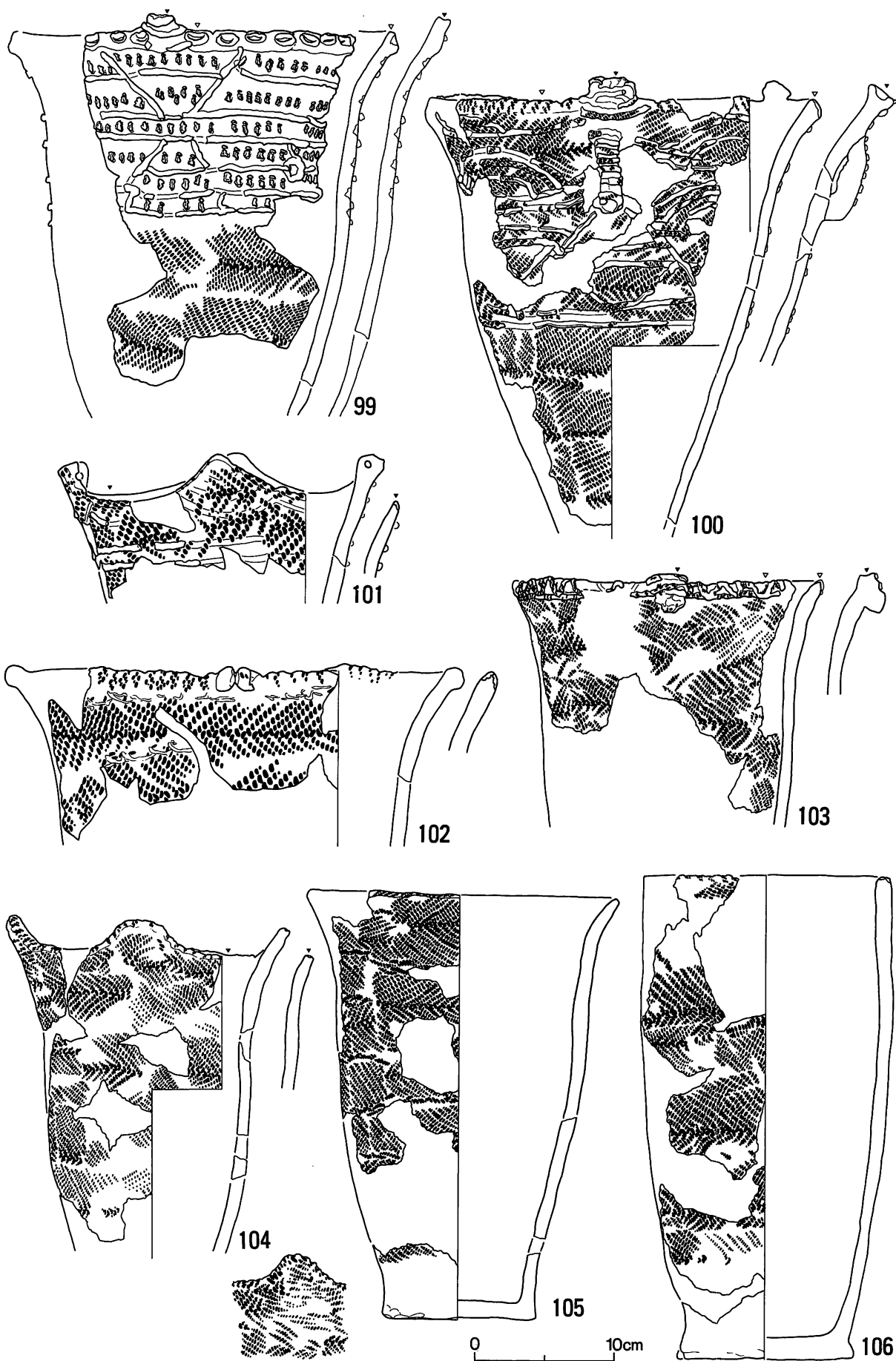
88

0 10cm

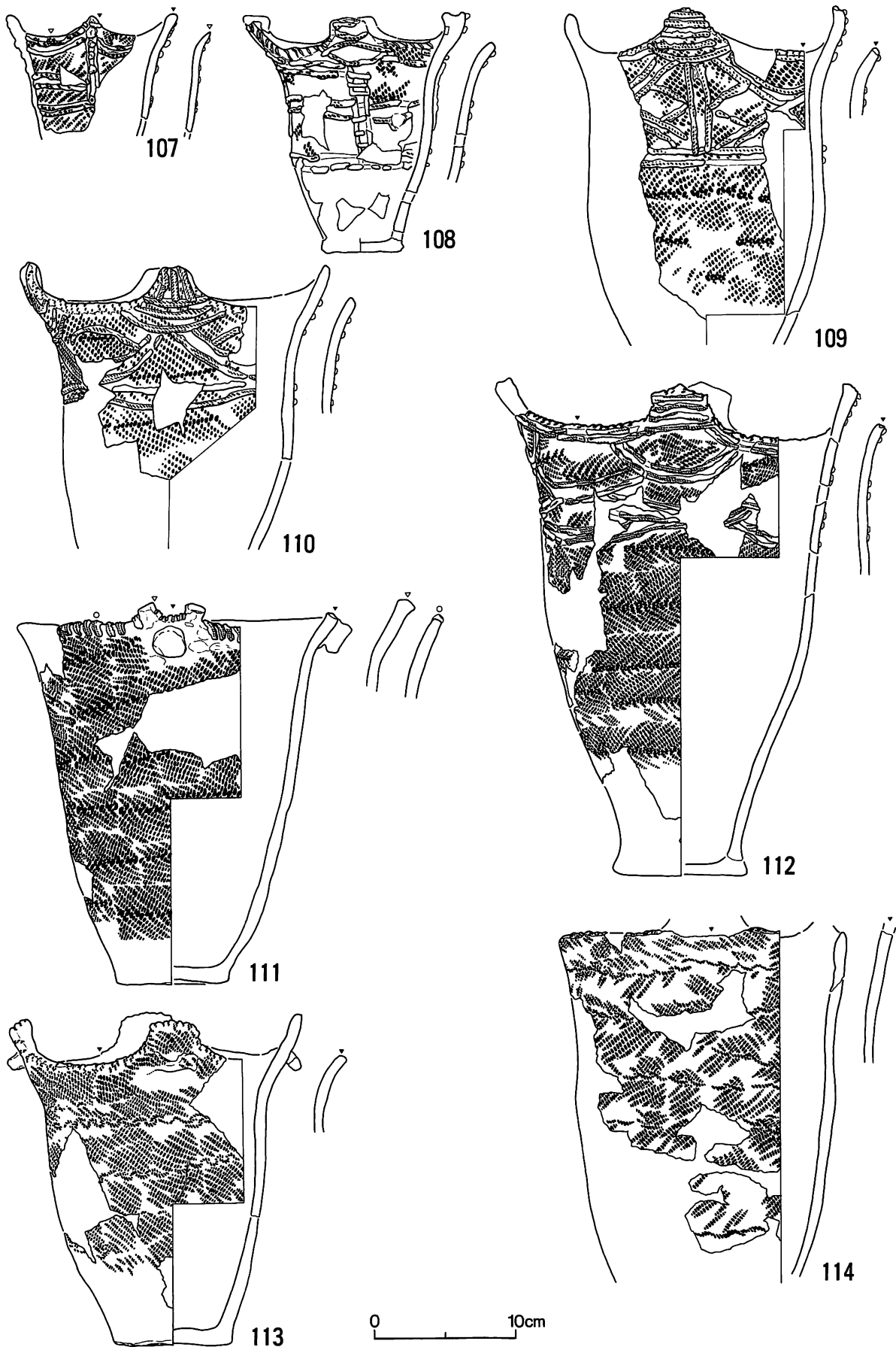
図VI-23 包含層出土の土器(14)



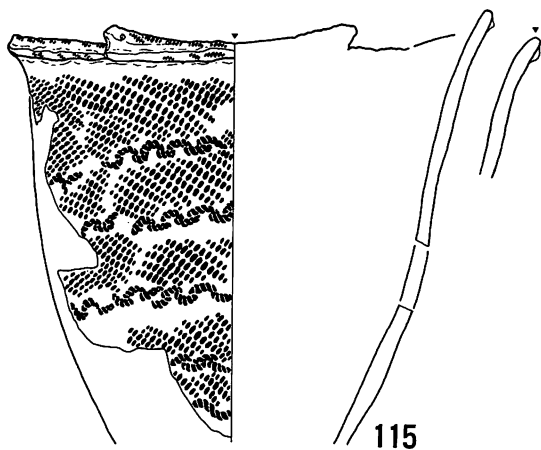
図VI-24 包含層出土の土器(15)



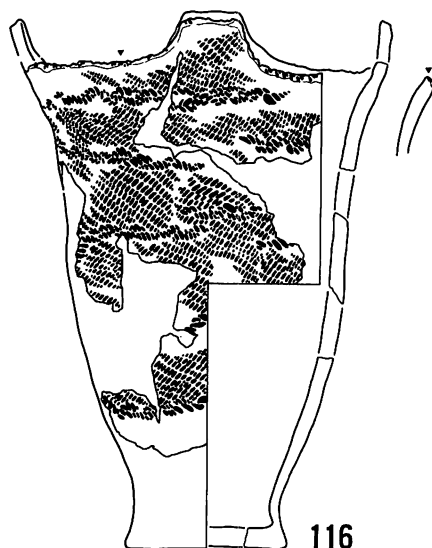
図VI-25 包含層出土の土器(16)



図VI-26 包含層出土の土器(17)



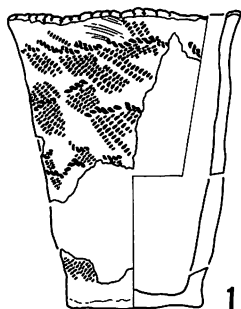
115



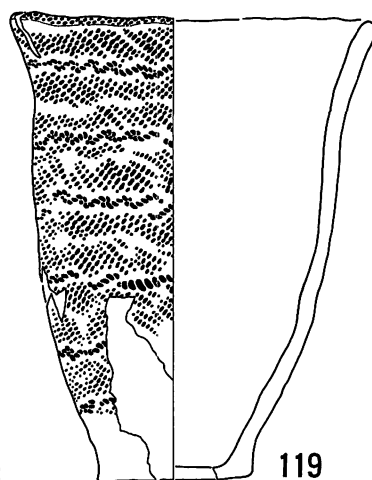
116



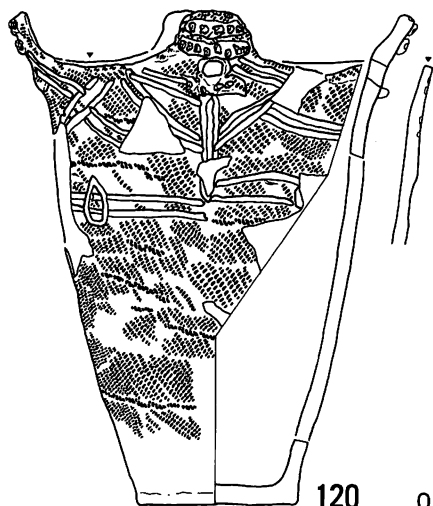
117



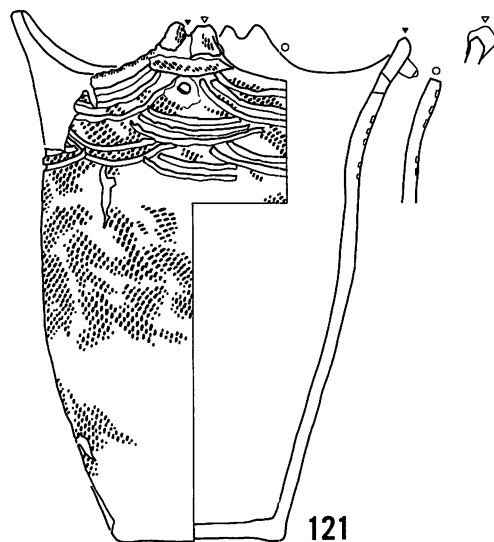
118



119



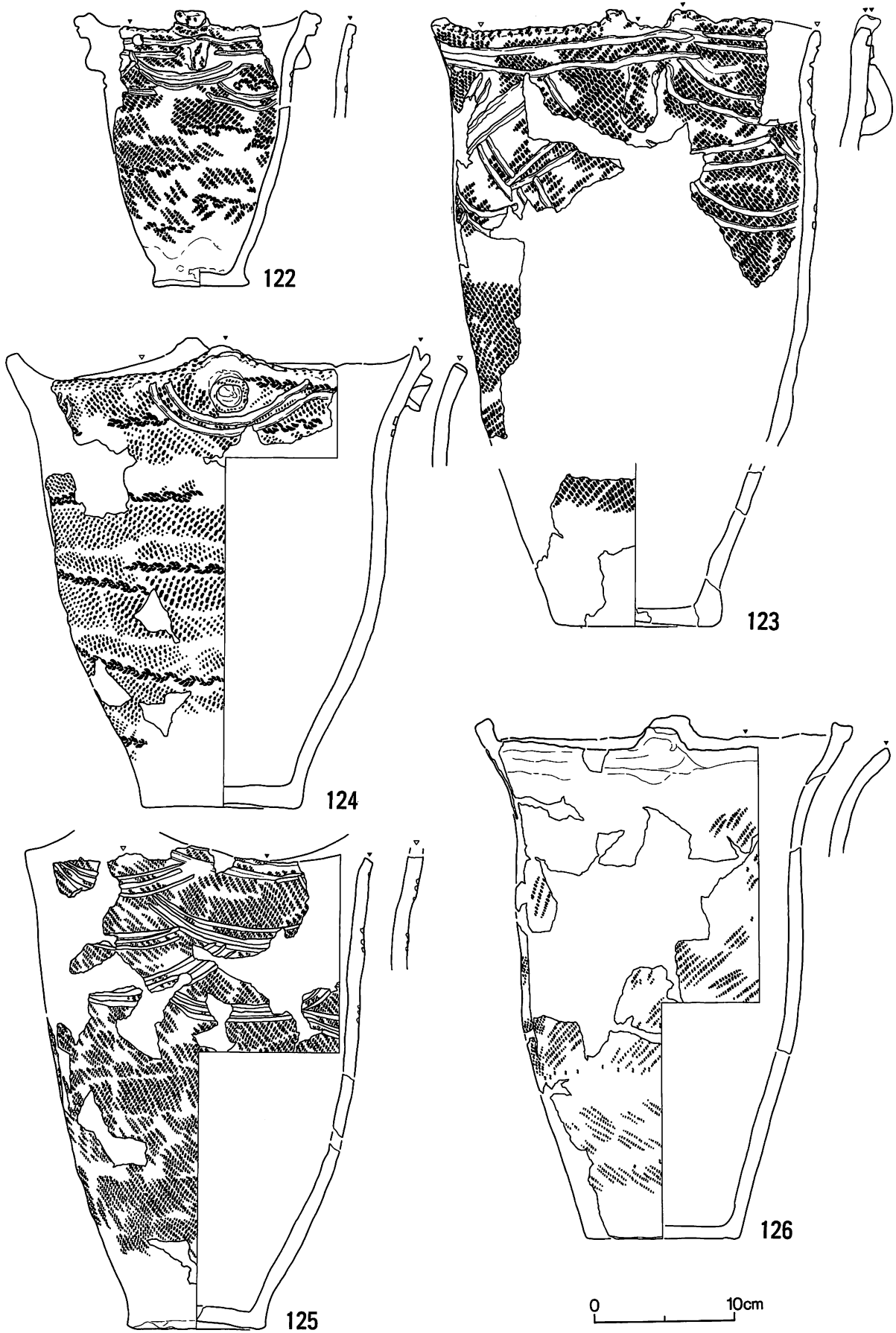
120



121

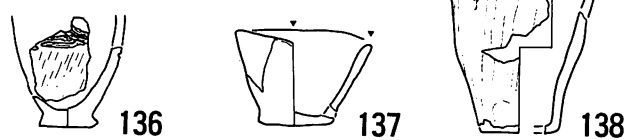
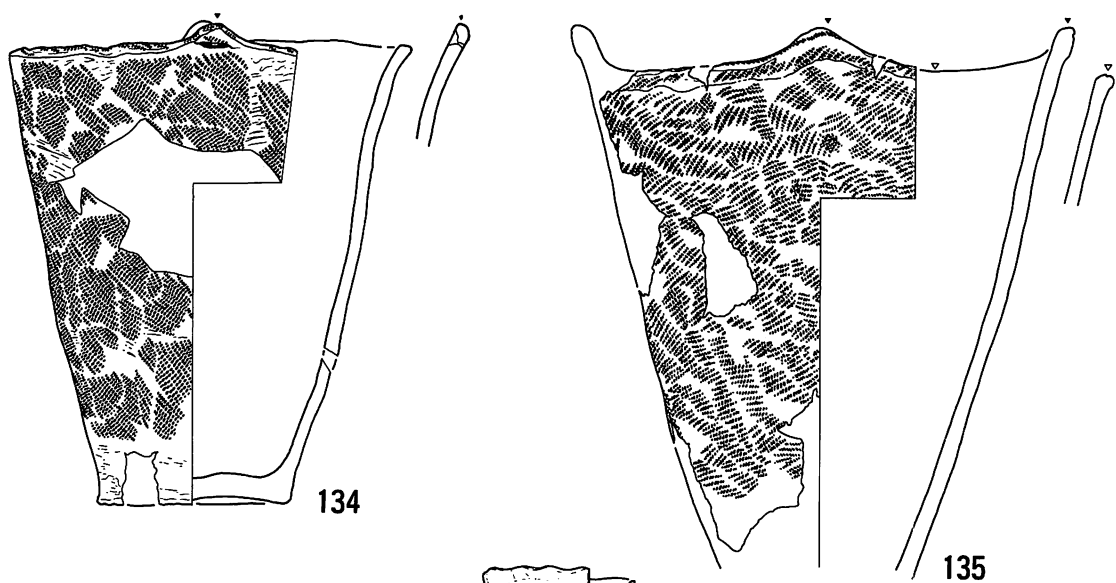
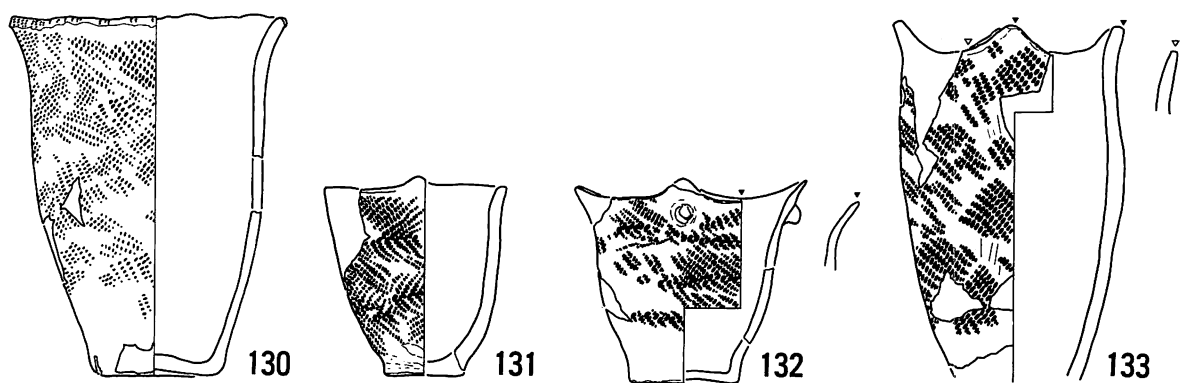
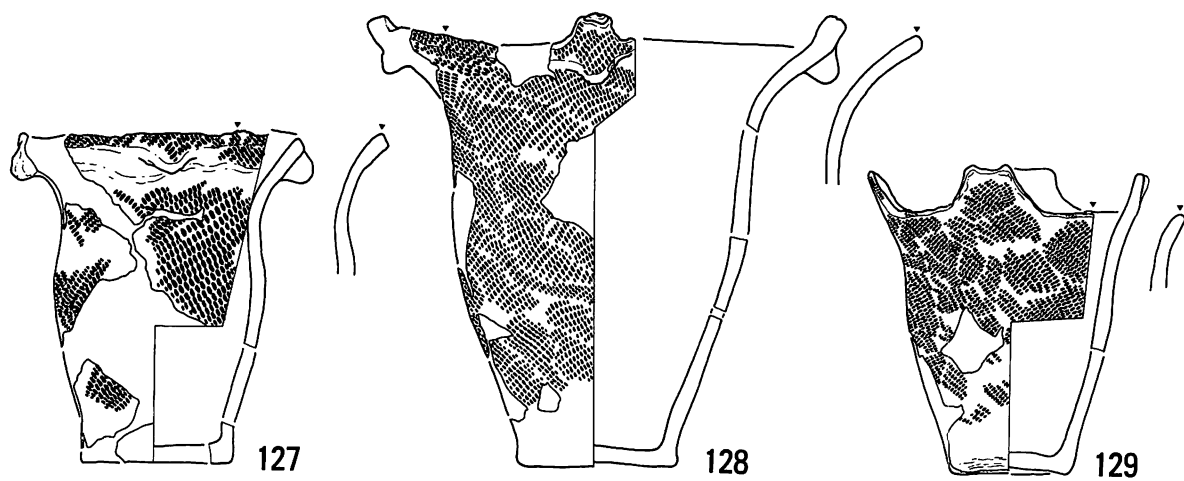
0 10cm

図VI-27 包含層出土の土器(18)



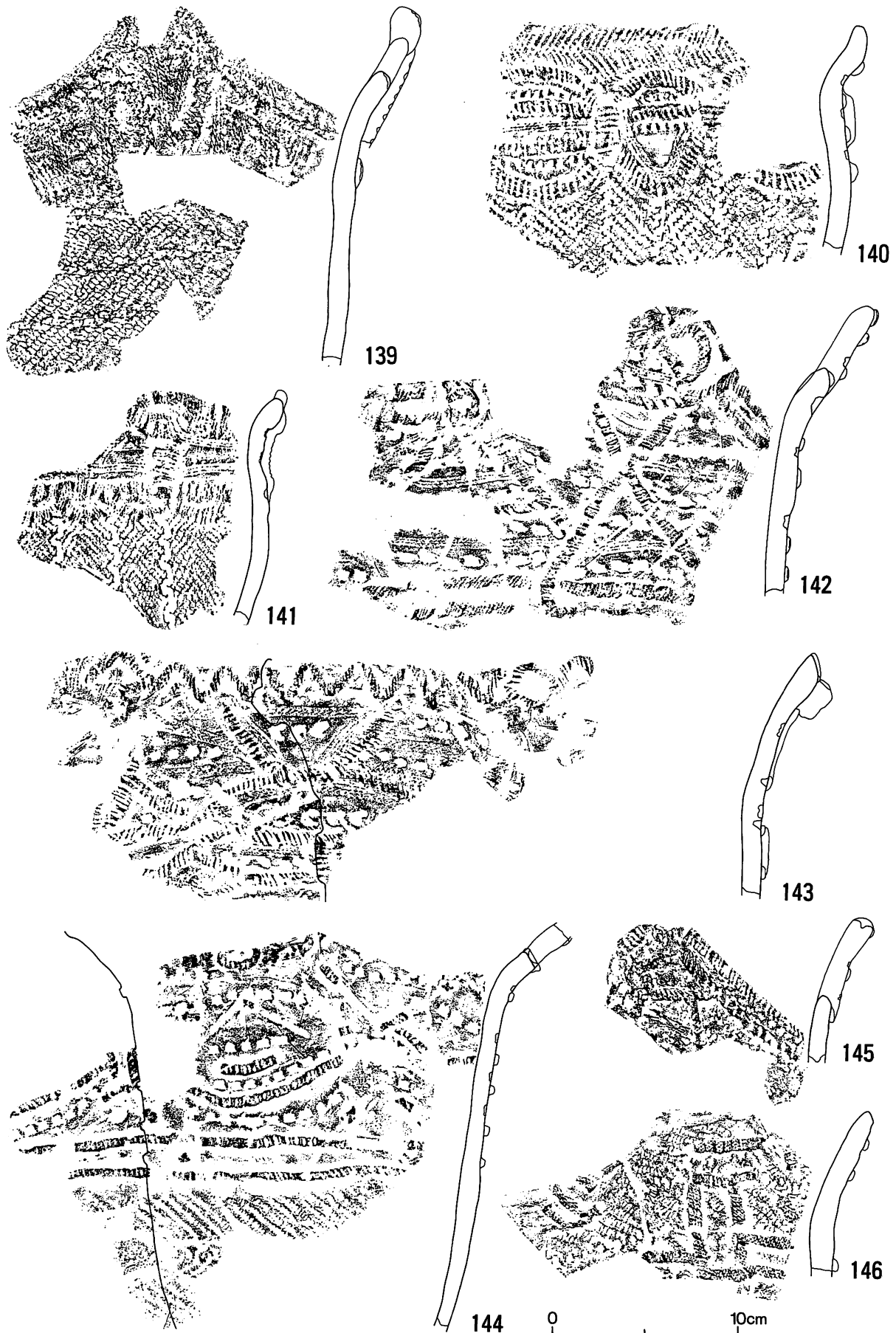
図VI-28 包含層出土の土器(19)



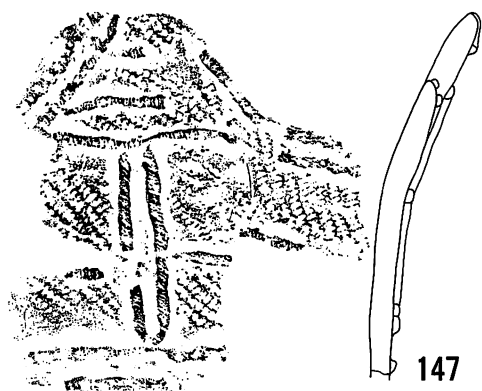


0 10cm

図VI-29 包含層出土の土器(20)



図VI-30 包含層出土の土器(2)



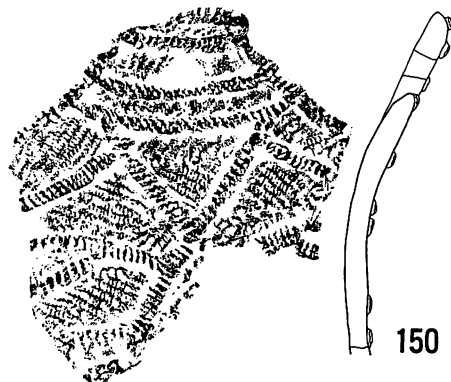
147



148



149



150



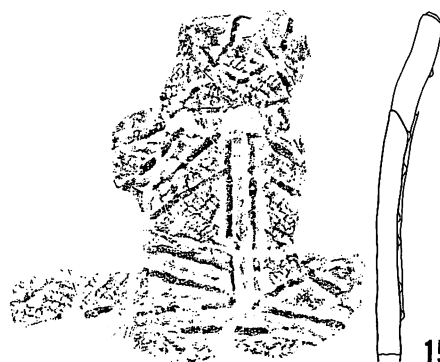
151



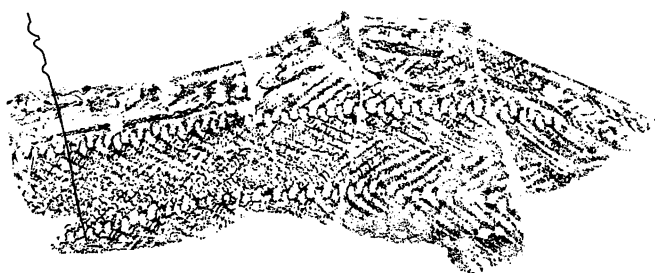
152



153



154



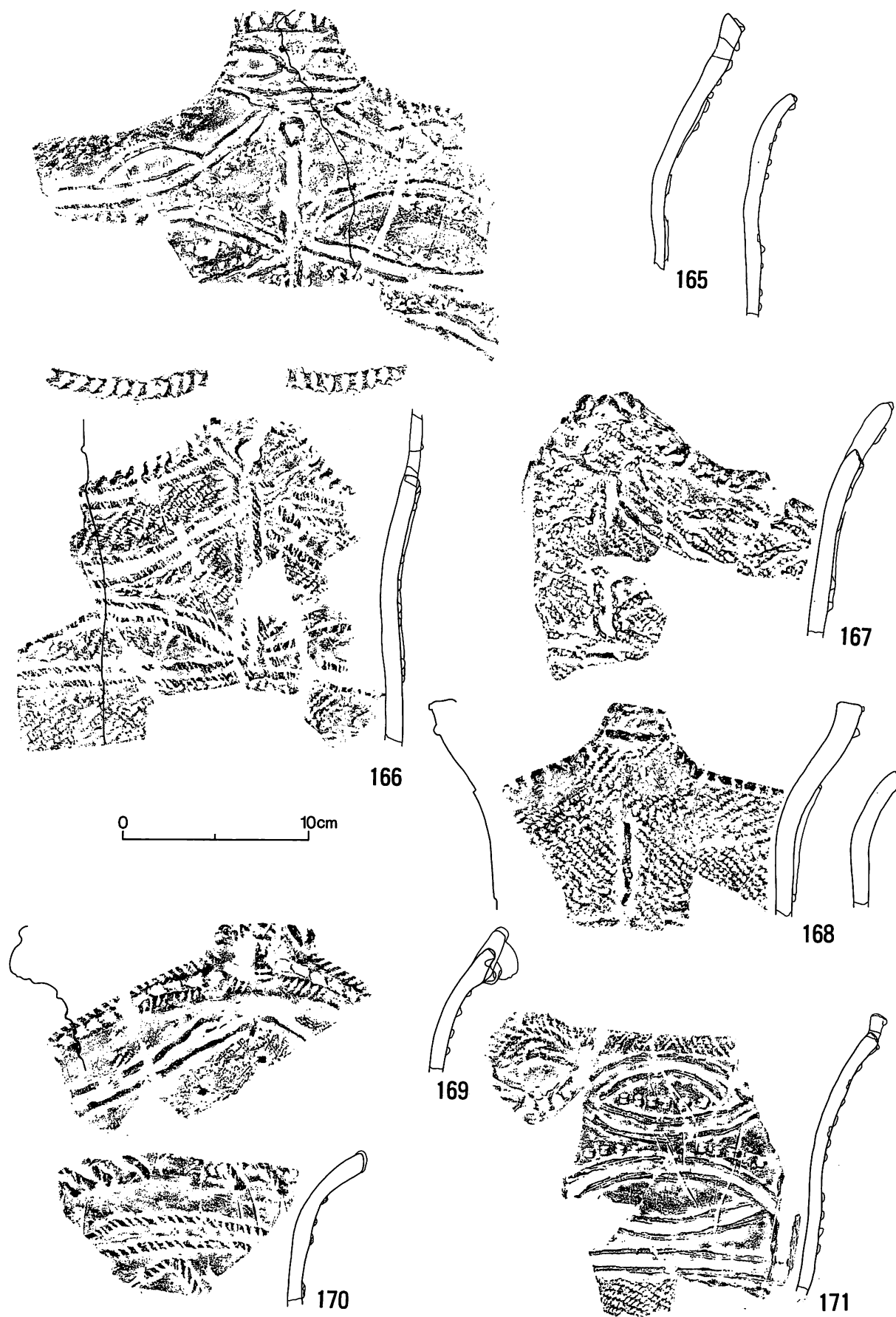
155

0 10cm

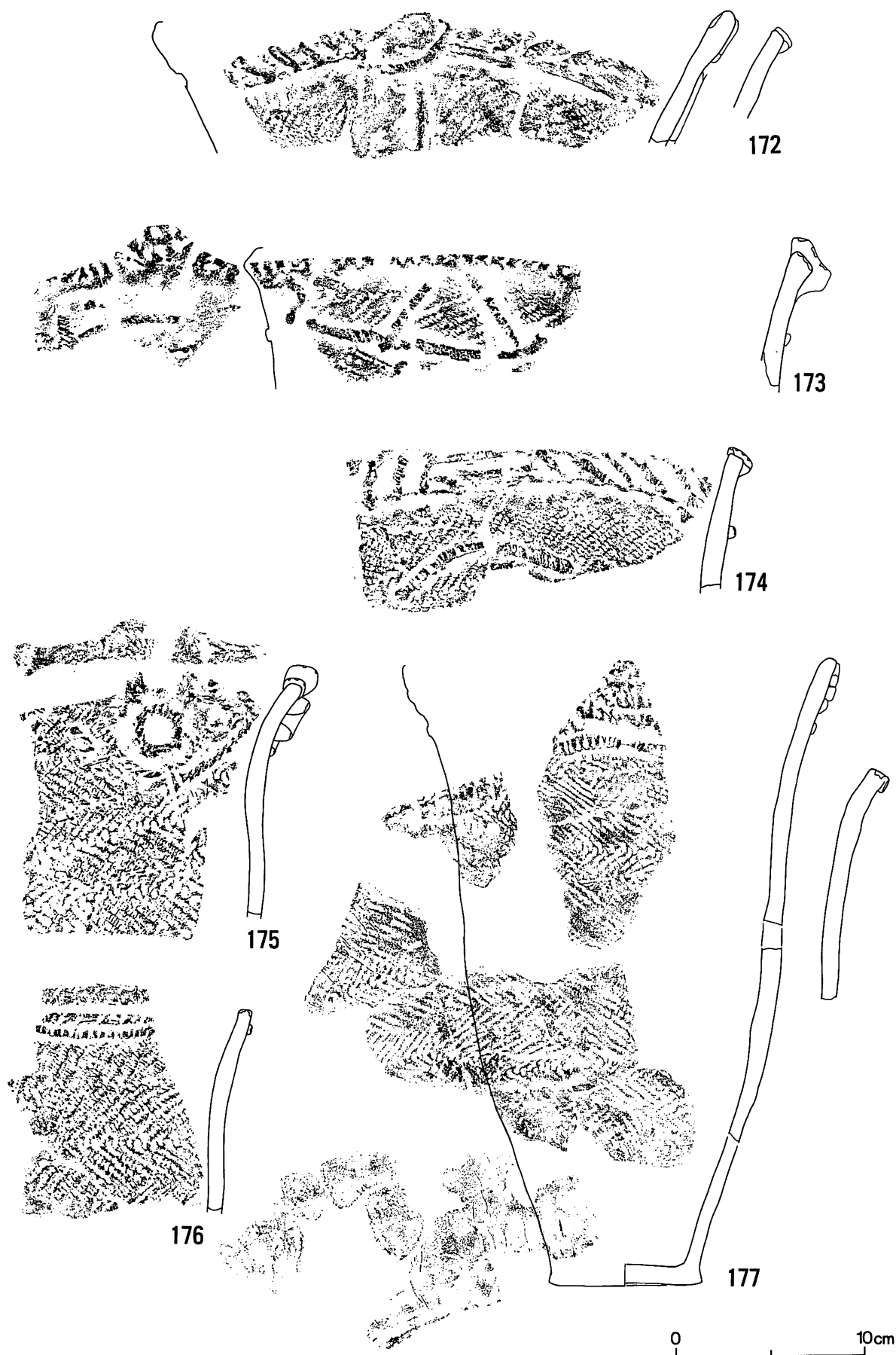
図VI-31 包含層出土の土器(22)



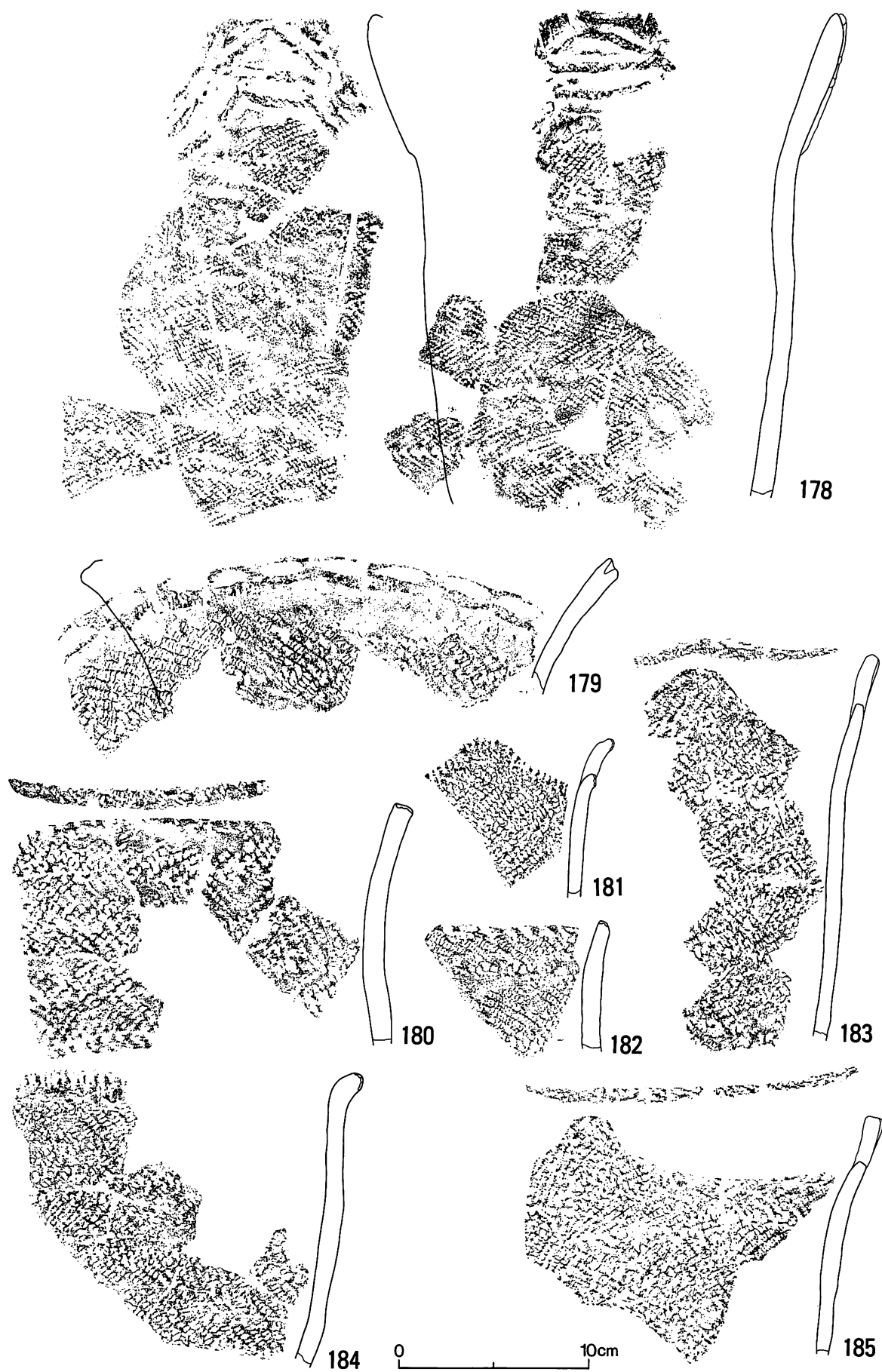
図VI-32 包含層出土の土器(23)



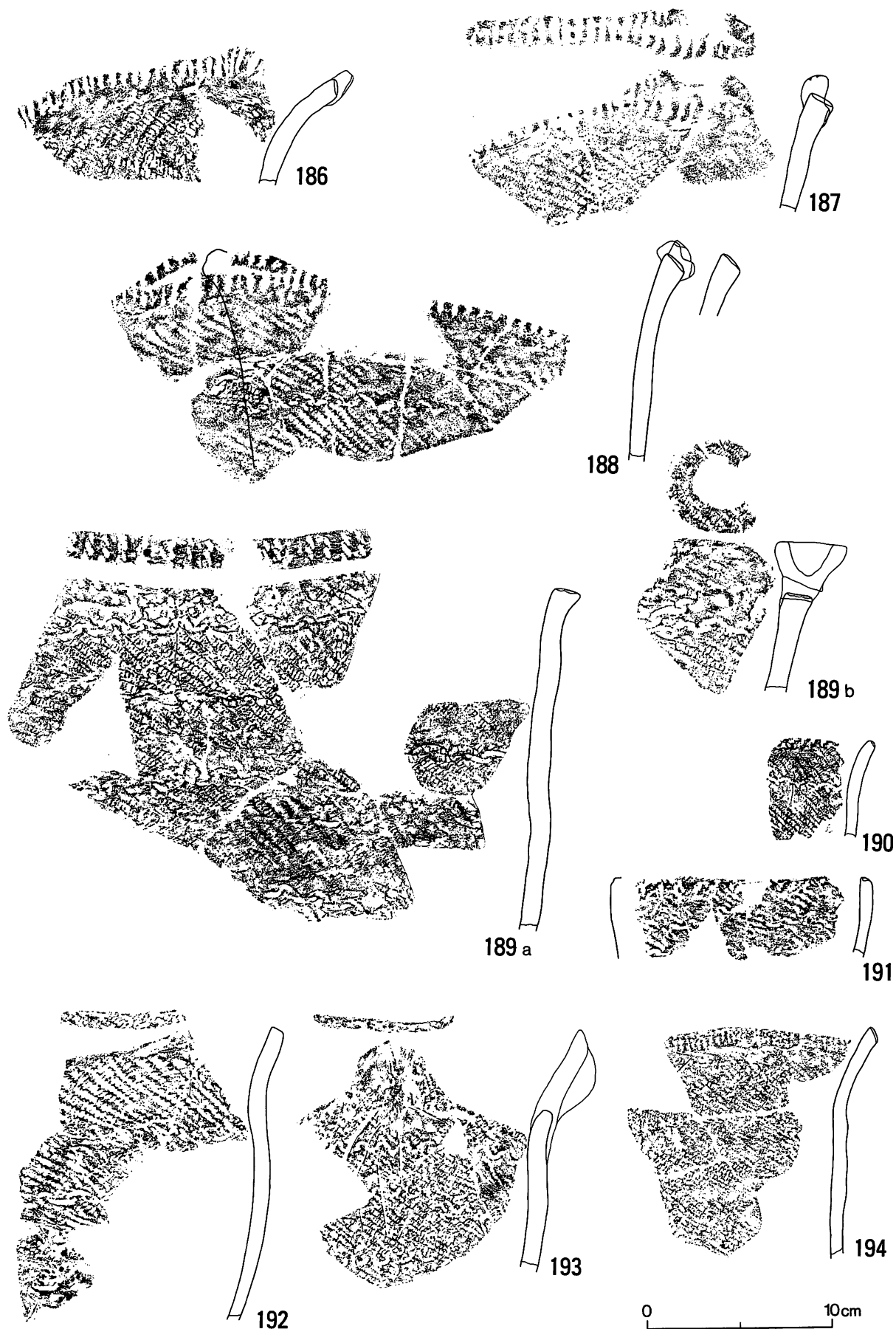
図VI-33 包含層出土の土器(24)



図VI-34 包含層出土の土器(25)

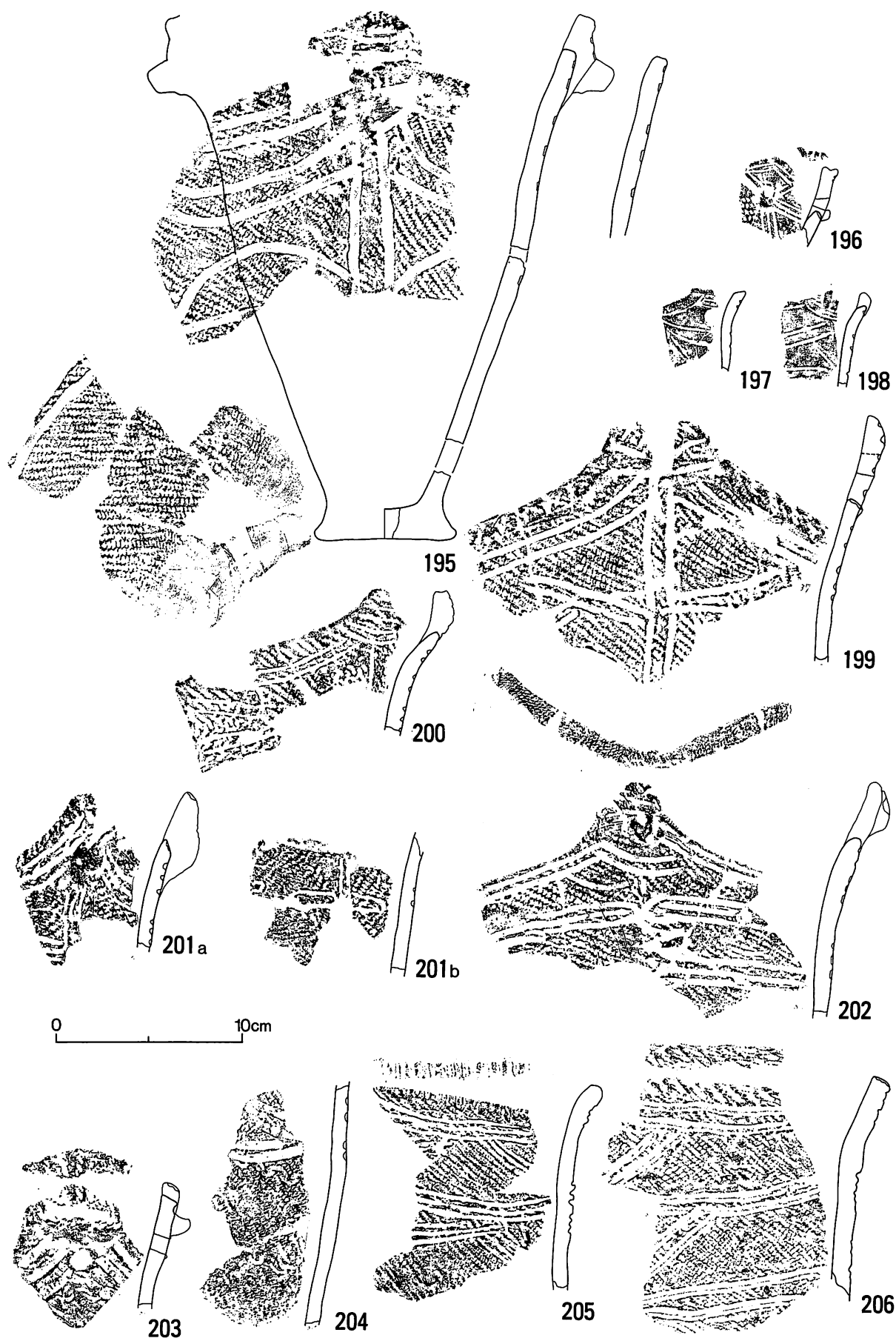


図VI-35 包含層出土の土器(26)



図VI-36 包含層出土の土器(27)

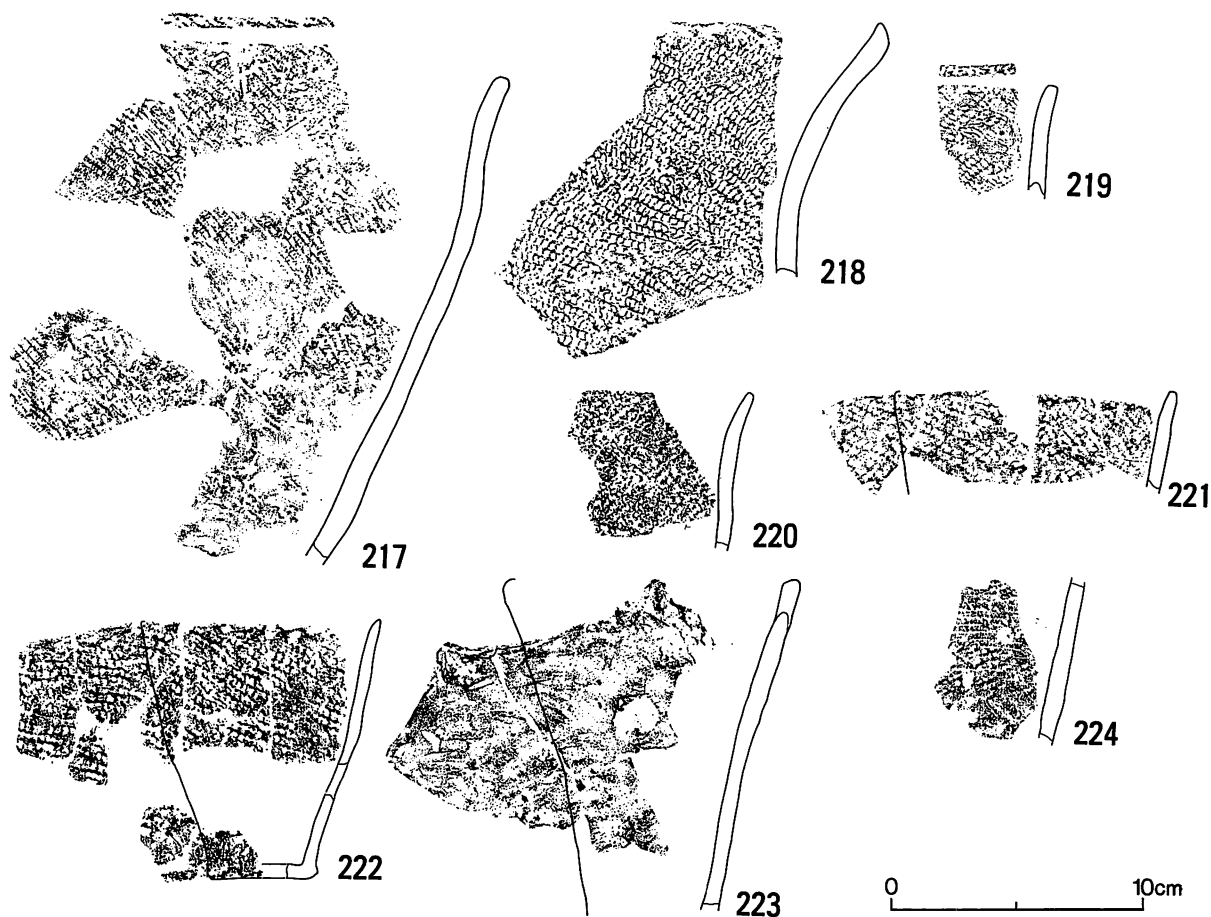




図VI-37 包含層出土の土器(28)



図VI-38 包含層出土の土器(29)



図VI-39 包含層出土の土器(30)

#### V群A類 (図VI-44-277)

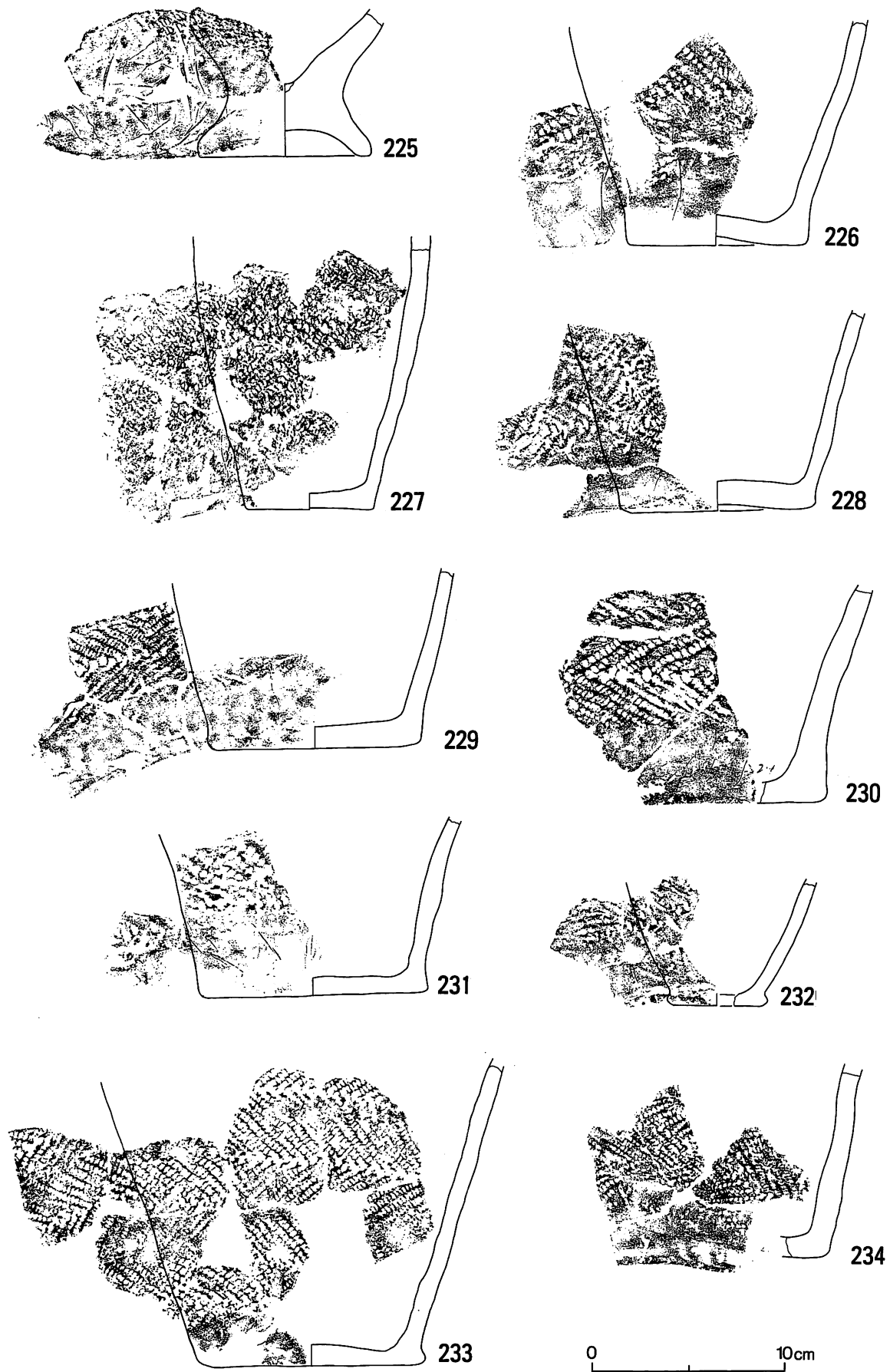
277は口縁に爪形文の施された鉢形土器。底部はあげ底である。

#### V群B類 (図VI-44~45-278~295)

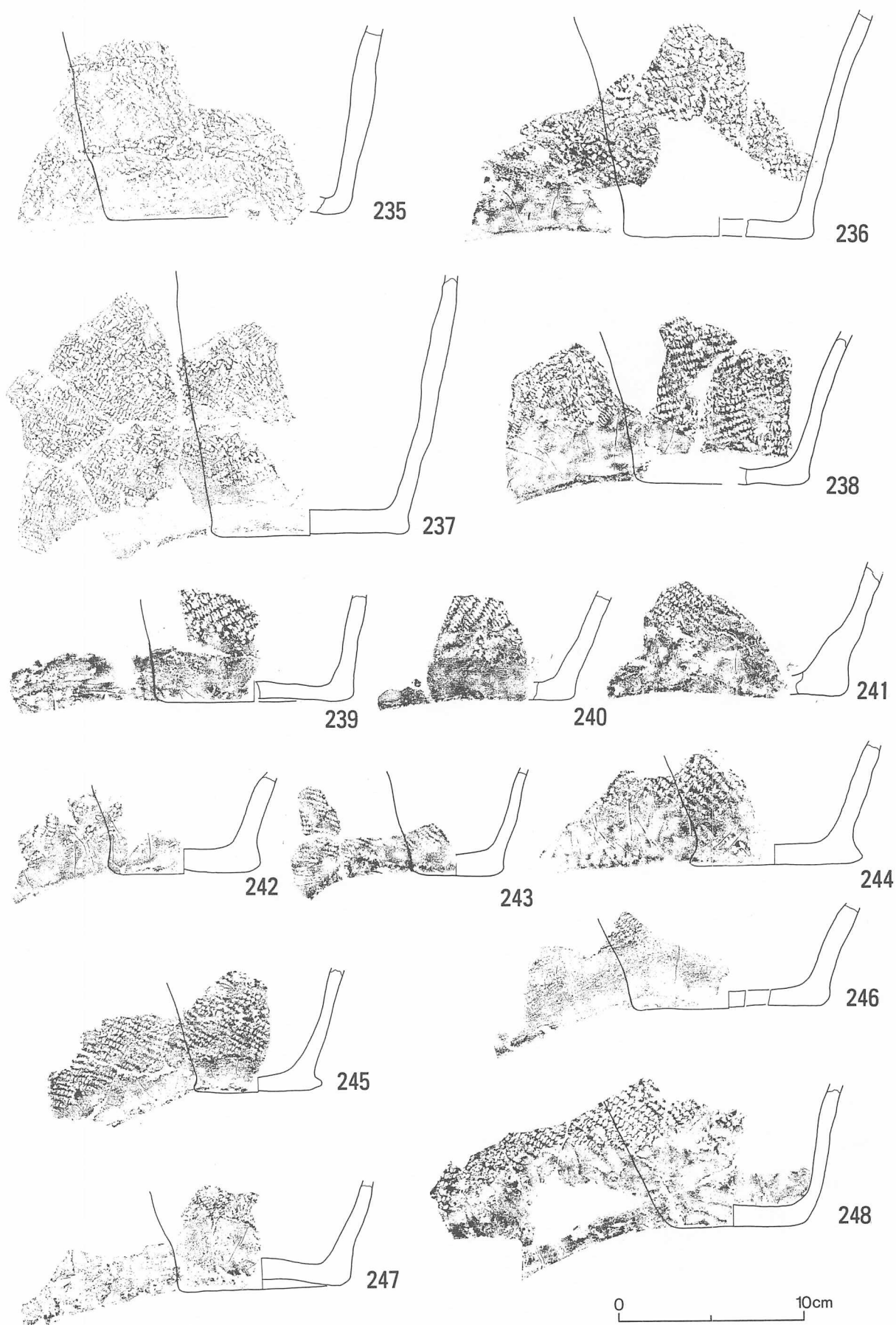
在地系のもものと(279・284~290), 亀ヶ岡系のももの(278・280~282, 291~295)がある。284は口縁部に沈線が施されたもの。鉢形土器かと思われる。286・287・289・290も鉢形と思われる。286は口縁部に浅い沈線が施されたもの。口唇には棒状工具による刻み目が付けられている。287は縄文のみのもの。口唇には棒状工具による大きめの刻み目が付けられ、口縁は小波状を呈している。289・290は無文のもの。288口唇に刻み目が付けられている。279は深鉢。285と同一個体である。口唇には鋭い工具によって斜めに刻まれている。278・280~282, 291~294は亀ヶ岡系の浅鉢。278, 280には大きな把手が付けられている。これらの亀ヶ岡系の土器は聖山II式に相当するものである。

#### VI群 (図VI-45-296~299)

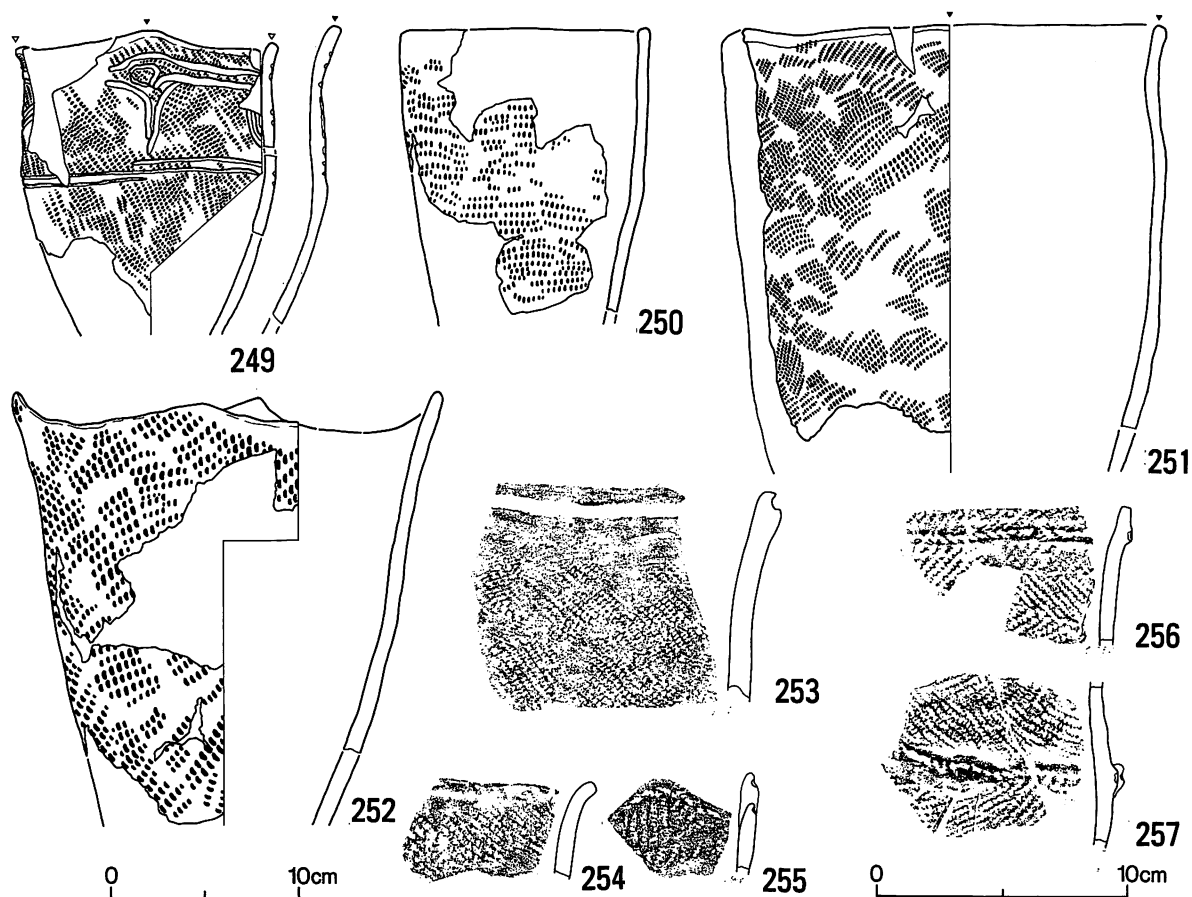
296~298は聖山E群に相当するもの。296・297は口縁部が大きく外反する甕。RLの原体により口縁部には斜行縄文、頸部には横走縄文、胴部には縦走縄文が施され、頸部の文様帯は沈線で区画されている。器面は縄文施文後にかかるく磨かれている。298は底部。あげ底である。299は後北C<sub>2</sub>式の注口土器。



図VI-40 包含層出土の土器(31)



図VI-41 包含層出土の土器(32)

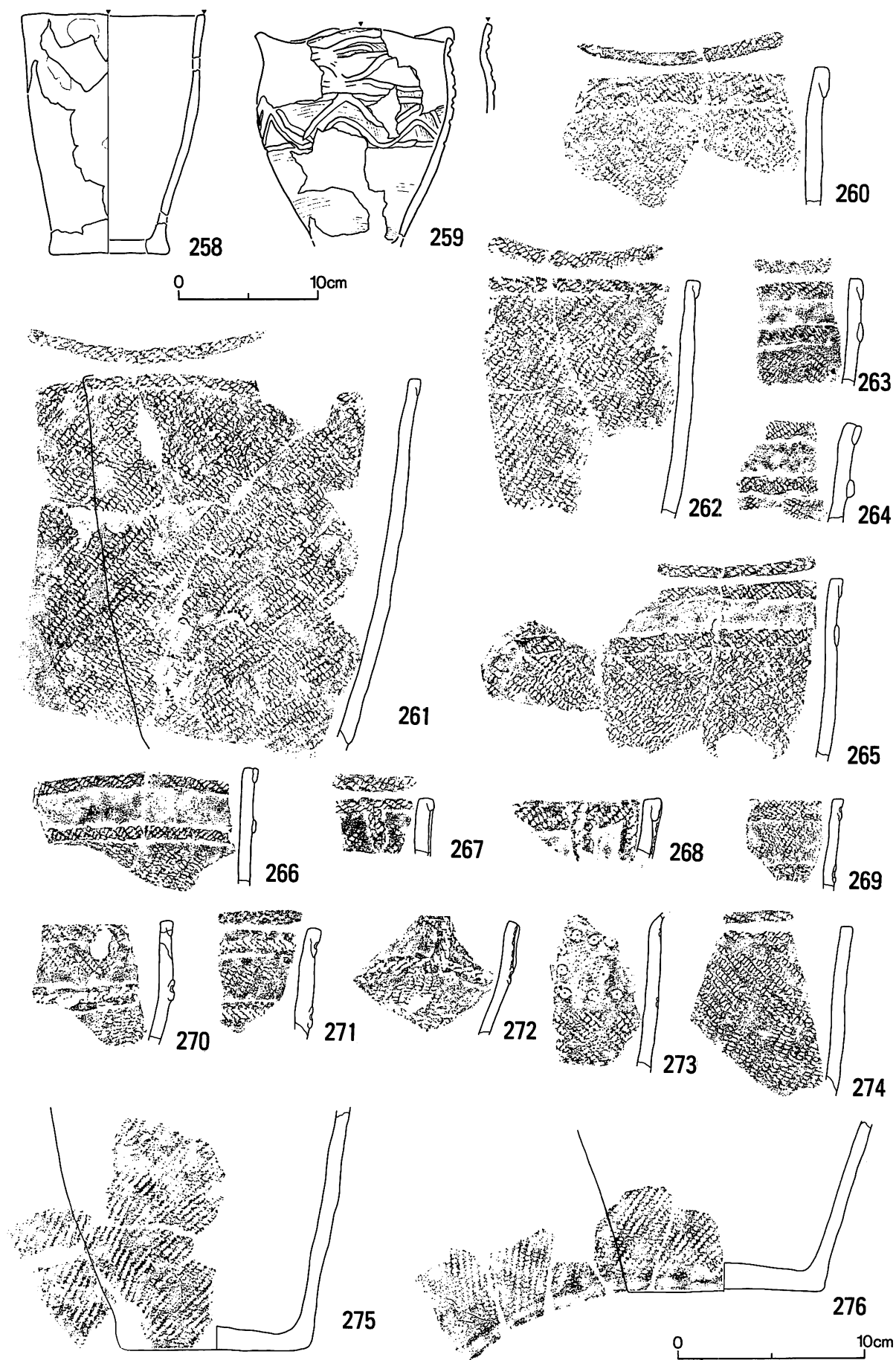


図VI-42 包含層出土の土器(33)

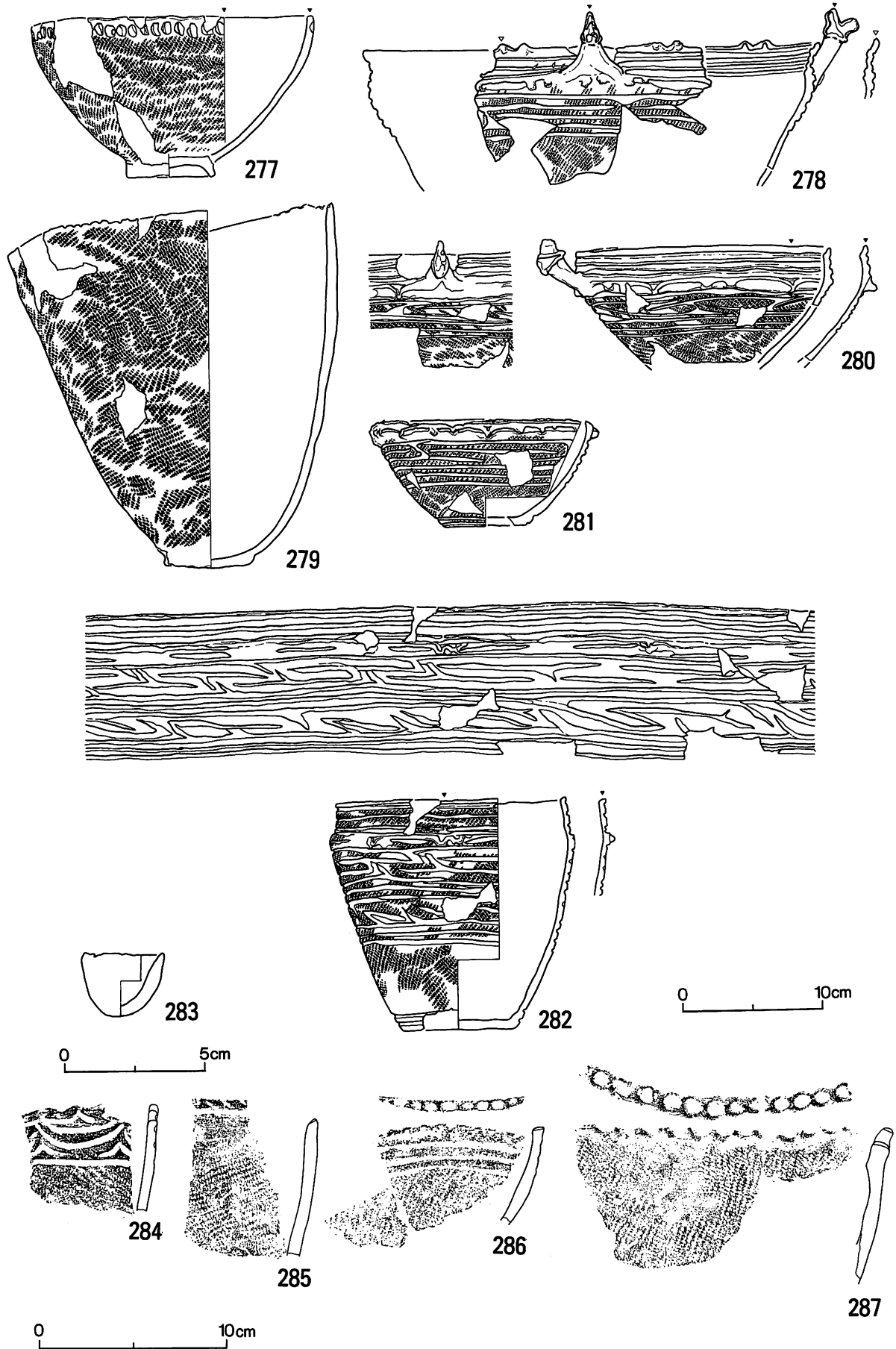
## VII群 (図VI-45-300~304)

300・302・304は同一個体。口縁部は屈曲する。内外面に粗雑な調整痕がみられる。胎土は比較的きめ細かく、細砂粒を含んでいる。明るい褐色を呈する。301は外面が磨かれている。内面は部分的にナデ調整されていて黒色を呈する。303の内面にはハケメがみられる。外面は磨かれているようである。300・302・304については本群に含められるのか疑問が残るけれども資料の増加を待って検討していきたい。

(工藤 研治)

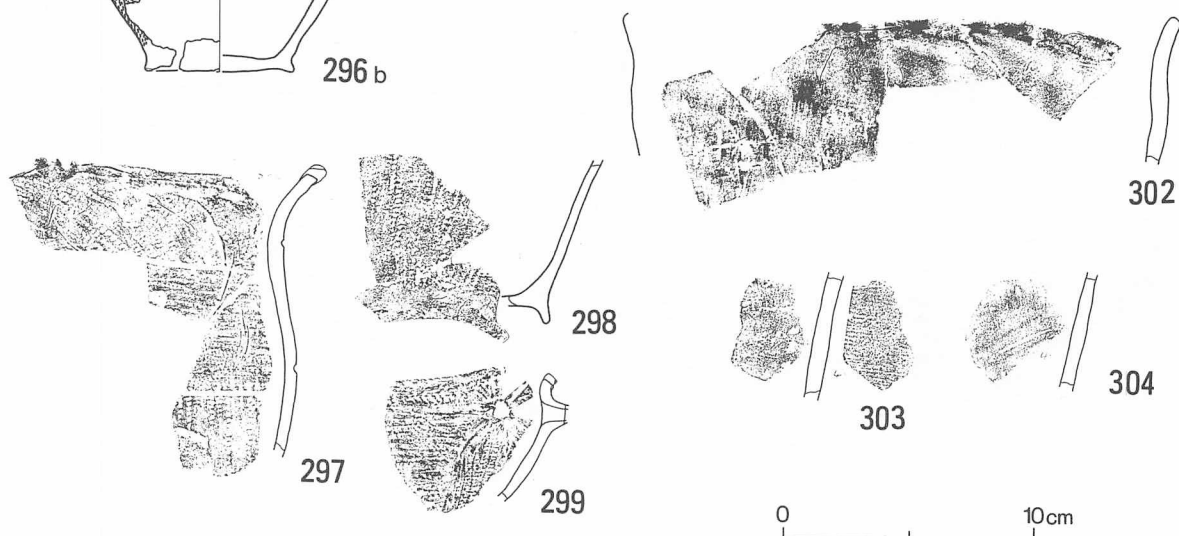
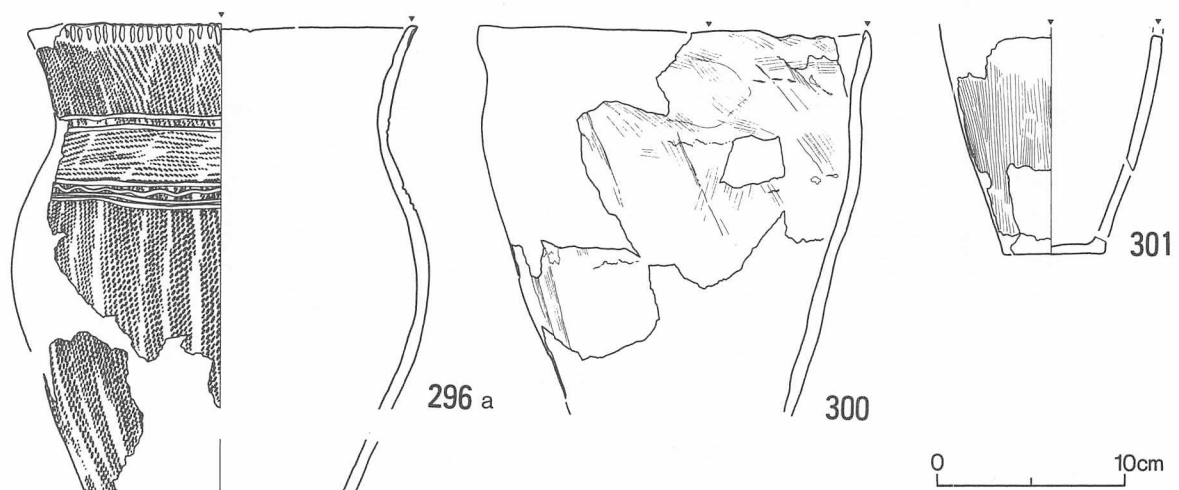
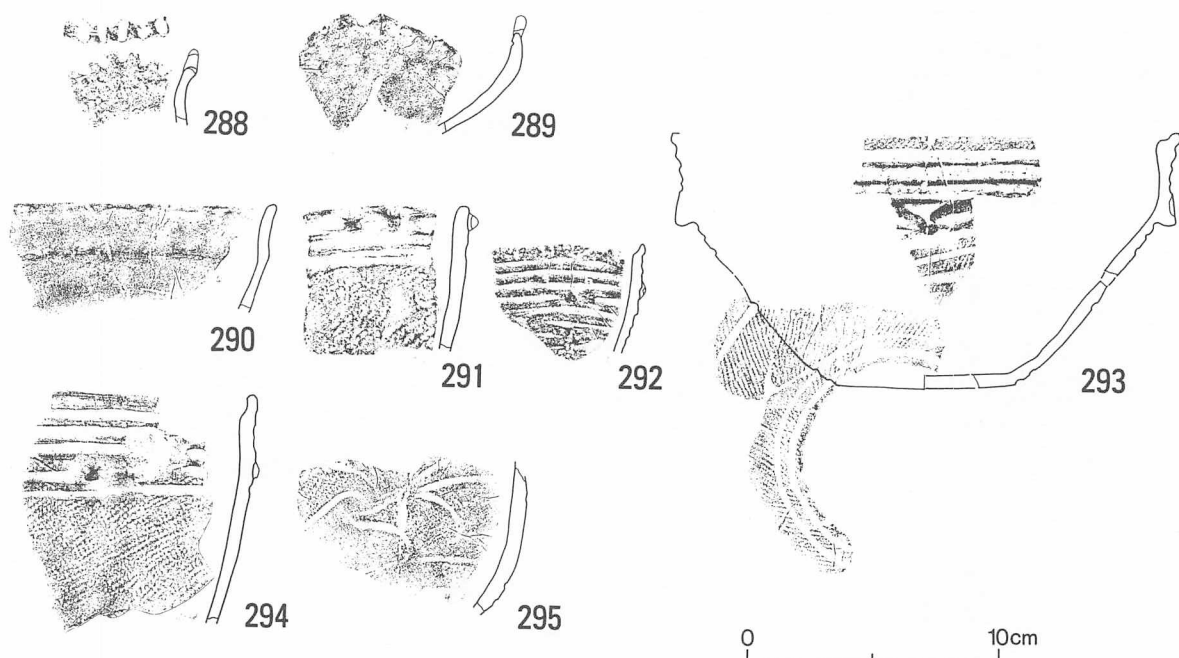


図VI-43 包含層出土の土器(34)



図VI-44 包含層出土の土器(35)





図VI-45 包含層出土の土器(36)

表VI-1 包含層出土の掲載土器(実測図)

挿図番号	発掘区	遺物番号	層位	破片数	分類	大きさ (cm)	挿図番号	発掘区	遺物番号	層位	破片数	分類	大きさ (cm)									
図VI-10-1	M-21	5	III	4	II B	口径 19.4 底径 8.8 器高 26.7	図VI-10-5	P-21	1	IIIb2	1	II B	口径 31.1 底径 17.0 器高 42.6									
	〃	10	〃	49				P-22	4	III	1											
	〃	18	〃	4				〃	7	〃	2											
	計			57				〃	10	〃	1											
	(未接合 同一個体)	M-21	5	III				1	〃	15	〃			1								
		〃	10	〃				12	〃	16	〃			1								
		〃	11	〃				1	〃	27	〃			4								
		〃	18	〃				2	〃	33	〃			5								
		合計						73	〃	48	B2			1								
	図VI-10-2	N-21	36	III				1	II B	口径 17.9 底径 7.1 器高 24.9	P-23			8	IIIb2	1	(未接合 同一個体)	口径 (18.4) 底径 8.2 器高 21.2				
P-20		16	IIIb2	6	〃	20	III	4														
P-21		1	〃	7	〃	26	〃	8														
〃		31	〃	1	〃	34	B2	2														
〃		36	〃	7	〃	50	III	15														
P-22		36	III	1	Q-23	9	B2	1														
Q-25		21	B1	1	〃	21	〃	3														
計				24	〃	27	III	1														
(未接合 同一個体)		P-20	5	IIIb2	1	R-23	1	IIIb1			1											
		P-21	1	〃	8	〃	4	〃			2											
		〃	28	〃	2	〃	50	〃			4											
		〃	36	〃	2	不明計					14 73											
		P-22	14	〃	1	P-22	7	III			1											
図VI-10-3		N-22	47	III	13	II B	口径 16.8 底径 — 器高 15.4	図VI-10-6			J-24	1	II	1	(未接合 同一個体)	口径 (18.4) 底径 8.2 器高 21.2						
		〃	66	〃	6						K-19		III	1								
	計			19	L-18					〃	1											
	(未接合 同一個体)	N-22	8	III	2				L-21	4	〃	1										
		N-23	6	〃	1				L-22	12	〃	1										
		O-20	14	〃	1				〃	24	〃	4										
		O-21	8	〃	1				L-23	5	〃	1										
		〃	13	〃	2				M-22	38	〃	1										
	合計			26	P-25				26	IIIb2	1	図VI-11-7	O-24	-42			B2	25	II B	口径 18.9 底径 — 器高 22.4		
	図VI-10-4	M-21	5	III	2				II B	口径 (21.5) 底径 — 器高 (15.9)	(未接合 同一個体)		不明計									
M-22		11	〃	6	L-21	20	III	1														
M-23		13	〃	4	不明			1														
〃		25	〃	3	合計			21														
M-24		4	〃	1	図VI-11-7	〃	40	〃							1							
N-22		8	〃	1		〃	62	〃							4							
〃		47	〃	4		〃	62	〃							3							
計				21		計									33							
(未接合 同一個体)		M-22	11	III		2	(未接合 同一個体)	不明計														
		〃	38	〃		3						図VI-11-7							〃	40		
	M-23	1	II	2		〃			62	〃	4											
	〃	13	III	2		〃			62	〃	3											
	〃	25	〃	2		計					33											
	〃	30	〃	2		図VI-11-7			〃	40	〃		1									
	M-24	4	〃	1	〃				62	〃	4											
	N-22	3	〃	1	〃				62	〃	3											
	〃	44	〃	1	計						33											
	合計			37	図VI-11-7				〃	40	〃		1									
(未接合 同一個体)	M-22	11	III	2			(未接合 同一個体)	不明計														
	〃	38	〃	3								図VI-11-7				〃	40	〃	1			
	M-23	1	II	2												〃	62	〃	4			
	〃	13	III	2												〃	62	〃	3			
	〃	25	〃	2												計			33			
	〃	30	〃	2		図VI-11-7										〃	40	〃	1			
	M-24	4	〃	1												〃	62	〃	4			
	N-22	3	〃	1												〃	62	〃	3			
	〃	44	〃	1												計			33			
	合計			37	図VI-11-7											〃	40	〃	1			

挿 図 番 号	発掘区	遺物 番号	層位	破片数	分類	大きさ (cm)
(未接合 同一個体)	O-23	11	III	1		
	O-24	40	B2	1		
	"	42	"	1		
	"	62	"	3		
	合 計			39		
図VI-11-8	P-22	27	III	16	II B	口径 17.6 底径 (7.8) 器高 18.7
	"	28	"	2		
	"	33	"	10		
	P-23	20	"	1		
	計			29		
(未接合 同一個体)	P-22	27	III	1		
	"	33	"	6		
	P-23	34	"	1		
	合 計			37		
図VI-11-9	P-24	8	II	1		口径 23.6 底径 - 器高 (26.3)
	"	11	IIIb2	1		
	"	37	B2	50		
	P-27	27	"	1		
	計			53		
(未接合 同一個体)	P-24	11	IIIb2	1		
	"	37	B2	9		
	合 計			63		
図VI-11-10	M-22	12	III	84	II B	口径 23.8 底径 (13.0) 器高 31.9
	計			84		
	M-22	47	III	28		
(未接合 同一個体)	合 計			112		
図VI-11-11	N-21	3	III	2	II B	口径 23.3 底径 - 器高 (18.6)
	O-18		"	1		
	O-20	14	"	3		
	"	27	"	1		
	P-21	1	"	1		
	P-23	50	"	2		
	計			10		
	N-21	3	III	1		
	"	22	"	2		
	O-20	1	II	2		
	"	14	III	6		
	O-21	13	"	1		
	O-23	24	B2	1		
	P-21	1	III	1		
	合 計			24		
図VI-11-12	O-24	61	B2	61	II B	口径 15.8 底径 9.1 器高 20.8
	計			61		
図VI-16-57	O-21	14	III	11	III A	口径 (94.0) 底径 - 器高 (38.8)
	P-21	20	"	10		
	R-21		IIIb1	1		
	計			22		
	P-20	6	III	1		
	P-21	2	"	2		
	"	20	"	1		
	Q-20	1	II	1		
	"	4	III	1		
	合 計			28		
図VI-16-58	P-25	7	IIIb2	2	III A	口径 (18.3) 底径 6.1 器高 24.4
	Q-25		IIIb1	17		
	"	24	"	39		
	計			58		
(未接合 同一個体)	Q-25		IIIb1	14		
	合 計			72		
図VI-16-59	P-25	11	B2	2	III A	口径 (29.7) 底径 - 器高 (33.1)
	"	13	"	2		
	"	16		96		
	Q-25	31	B1	4		
	計			104		
	NP-13	13	覆土	1		
	P-25	11	B2	11		
(未接合 同一個体)	"	13	"	1		
	"	16	"	1		
	合 計			118		
図VI-17-60	O-24	38	IIIb2	31	III A	口径 20.4 底径 7.8 器高 23.5
	計			31		
	O-24	38	IIIb2	1		
(未接合 同一個体)	合 計			32		
図VI-17-61	M-20	96	III	57	III A	口径 27.4 底径 9.9 器高 35.1
	"		"	22		
	"	62	"	3		
	N-20		"	2		
	計			84		
図VI-18-62	P-18		IIIb2	51	III A	口径 30.1 底径 - 器高 (31.2)
	計			51		
図VI-19-63	P-18		IIIb2	34	III A	口径 (20.6) 底径 - 器高 (21.6)
	計			34		
	P-18		IIIb2	20		
(未接合 同一個体)	合 計			54		
図VI-19-64	N-19		III	55	III A	口径 (28.7) 底径 - 器高 (33.3)
	"			9		
	計			64		
	N-19		III	42		
	Q-19	4	"	1		
(未接合 同一個体)	合 計			107		
図VI-19-65	N-21	4	III	61	III A	口径 (25.0) 底径 9.1 器高 32.1
	計			61		
	N-21	4	III	12		
(未接合 同一個体)	合 計			73		
図VI-19-66	M-20		B	1	III A	口径 (23.6) 底径 - 器高 (18.3)
	N-19		III	2		
	"	56	"	1		
	O-18		"	3		
	O-19		III上	11		
	P-19		IIIb2	1		
	計			19		

VI 包含層の遺物

挿図番号	発掘区	遺物番号	層位	破片数	分類	大きさ (cm)
図VI-19-67  (未接合 同一個体)	O-23	12	III	31	III A	口径 34.0 底径 - 器高 (27.7)
	P-23	9	IIIb1	2		
	"	27	III	2		
	計			35		
	O-22	12	III	1		
	O-23	2	IIIb1	1		
	"	12	III	33		
	"	31	"	1		
	O-25	8	IIIb1	1		
	P-23	2	II	3		
	"	9	IIIb1	1		
	Q-21	19	B1	1		
	R-21	10	IIIb1	1		
	合 計			78		
図VI-20-68  (未接合 同一個体)	O-19		III上	21	III A	口径 23.2 底径 - 器高 (28.1)
	"		III	4		
	P-19		攪乱	1		
	計			26		
	O-19		III	1		
	"		III上	1		
	合 計			28		
図VI-20-69  (未接合 同一個体)	O-19	平坦面	III上	31	III A	口径 (23.9) 底径 8.4 器高 33.4
	"		III	2		
	"		I	1		
	P-19		攪乱	2		
	"		III上	2		
	計			38		
	O-19		III	1		
	P-18		IIIb2	1		
	合 計			40		
図VI-20-70  (未接合 同一個体)	O-19		III	3	III A	口径 (27.1) 底径 - 器高 (28.7)
	P-18		"	24		
	計			27		
	O-18		III	1		
	P-18		IIIb2	2		
	合 計			30		
図VI-20-71	L-20		III	4	III A	口径 (14.4) 底径 - 器高 (12.2)
計				4		
図VI-20-72  (未接合 同一個体)	N-20		III	15	III A	口径 (28.5) 底径 - 器高 (9.1)
	計			15		
	N-20		III	1		
	O-19		"	1		
	合 計			17		
図VI-20-73  (未接合 同一個体)	O-18		III	26	III A	口径 24.5 底径 - 器高 (30.6)
	P-17		"	2		
	P-18		IIIb2	17		
	P-19		"	1		
	計			46		
	O-18			4		
	合 計			50		

挿図番号	発掘区	遺物番号	層位	破片数	分類	大きさ (cm)
図VI-20-74  (未接合 同一個体)	Q-24	19	B1	2	III A	口径 32.4 底径 11.0 器高 38.7
	Q-25	11	"	14		
	"	26	"	3		
	R-24	5	"	1		
	R-25	2	"	2		
	"	4	"	2		
	計			24		
	Q-25	11	B1	5		
	R-25	4	"	2		
	合 計			31		
図VI-21-75 ⑫-75  (未接合 同一個体)	L-20			1	III A	口径 (29.3) 底径 - 器高 (41.2)
	N-19		I	1		
	"		III	4		
	O-18		"	4		
	O-19		III上	11		
	"		III	2		
	P-18		IIIb2	3		
	"		III	2		
	"		"	3		
	計			31		
	O-19		III上	8		
	P-18		III	1		
	合 計			40		
図VI-21-76  (未接合 同一個体)	N-19		III	46	III A	口径 32.7 底径 - 器高 (35.1)
	O-19		I	1		
	計			47		
	N-19		III	2		
	"		"	1		
	N-20		"	1		
	"		I	1		
	O-19		III	1		
	"		I	1		
	合 計			54		
図VI-21-77  (未接合 同一個体)	L-19		III	8	III A	口径 - 底径 8.4 器高 (25.5)
	"		"	11		
	M-19	26	"	1		
	"	27	"	1		
	M-20		"	1		
	計			22		
	L-19		III	2		
	"		"	5		
	M-19	26	"	3		
	"	27	"	1		
	"	28	"	1		
	合 計			34		
図VI-21-78	M-20		III	54	III A	口径 (27.2) 底径 - 器高 (26.3)
計				54		
図VI-22-79	M-20	31	III	19	III A	口径 23.3 底径 9.3 器高 28.2
	N-20	35	"	1		
	"		"	2		
	不 明 計			25 47		

挿図番号	発掘区	遺物番号	層位	破片数	分類	大きさ (cm)
図VI-22-80 (未接合 同一個体)	O-18 計		III	20 20	III A	口径 (21.9) 底径 — 器高 (16.4)
	O-18 P-18		III IIIb2	9 1		
	合 計			30		
図VI-22-81 (未接合 同一個体)	P-22	8	III	2	III A	口径 23.8 底径 — 器高 (20.9)
	"	9	IIIb1	1		
	"	19	III	1		
	"	28	"	9		
	"	34	"	1		
	R-21	1	"	1		
	不 明 計	7		1 16		
	Q-21	12	B2	1		
	合 計			17		
図VI-22-82 (未接合 同一個体)	O-23	2	II	1	III A	口径 (25.4) 底径 8.7 器高 33.5
	P-24	12	IIIb1	3		
	"	16	"	1		
	"	18	"	1		
	"	36	"	1		
	"	38	B2	2		
	P-25	7	"	2		
	P-27	2	IIIb1	5		
	Q-23	5	IIIb2	3		
	"	10	"	10		
	"	16	"	1		
	"	22	"	1		
	"	28	"	2		
	Q-24	1	II	1		
	"	12	IIIb1	2		
	不 明 計			1 37		
	O-22	22	III	1		
	O-23	12	"	1		
	P-27	2	IIIb1	1		
	合 計			40		
図VI-23-83 (未接合 同一個体)	N-19 計	21	III	13 13	III A	口径 17.6 底径 6.1 器高 17.6
	N-18		III	1		
	O-18		"	2		
	合 計			16		
図VI-23-84 (未接合 同一個体)	N-19		III	35	III A	口径 (27.5) 底径 — 器高 (20.0)
	O-18		"	1		
	O-19		III上	2		
	不 明 計			1 39		
	N-19		III	14		
	"		"	9		
図VI-23-85 (未接合 同一個体)	O-19 計		III	62 62	III A	口径 22.6 底径 10.3 器高 31.8
	O-19		III	3		
	合 計			65		

挿図番号	発掘区	遺物番号	層位	破片数	分類	大きさ (cm)
図VI-23-86 (未接合 同一個体)	O-20	1	II	1	III A	口径 30.1 底径 — 器高 23.1
	O-21	2	"	1		
	"	14	III	3		
	"	25	"	2		
	P-21	2	"	1		
	P-23	27	"	2		
	"	35	IIIb2	3		
	"	11	B2	2		
	R-21	1	II	4		
	"	2	III	2		
	計			21		
	P-20	6	III	1		
図VI-23-87	P-23	2	II	2	III A	口径 (23.5) 底径 — 器高 (28.6)
	P-25	11	B2	2		
	合 計			26		
図VI-23-88 (未接合 同一個体)	N-20	35	III	26 6 32	III A	口径 22.9 底径 — 器高 (23.6)
	不明 計					
	N-19 計	54	III	46 46		
	N-19		III <sup>2</sup> III I	2 3 1		
図VI-23-89	不 明 計			1 53	III A	口径 11.1 底径 6.0 器高 12.3
	合 計					
図VI-24-89	P-19		攪乱	4	III A	口径 14.6 底径 6.5 器高 16.2
	計			4		
図VI-24-90 (未接合 同一個体)	O-19		III上	1	III A	口径 19.2 底径 9.1 器高 18.4
	O-20	15	III	1		
	"	28	"	2		
	P-20	6	"	7		
	"	15	"	6		
	"	17	"	6		
	計			23		
	O-20	15	III	1		
	合 計			24		
図VI-24-91 (未接合 同一個体)	N-21 計	5	III	14 14	III A	口径 26.7 底径 — 器高 (21.4)
	不 明 計			28		
	合 計			42		
図VI-24-92 (未接合 同一個体)	Q-25 計	23	B1	58 58	III A	口径 22.8 底径 — 器高 (23.9)
	Q-25	23	B1	4		
	合 計			62		
⑮-93上	M-26		III	26	III A	口径 12.7 底径 5.4 器高 11.3
	計			26		
図VI-24-94	O-19		III	9	III A	口径 12.7 底径 5.4 器高 11.3
	"		III上	4		
	計			13		

VI 包含層の遺物

挿 図 番 号	発掘区	遺物 番号	層位	破片数	分類	大きさ (cm)
図VI-24-95	L-19	35	III	14	III A	口径 (29.8) 底径 — 器高 (23.2)
	"	39	"	14		
	L-20	34	"	3		
	M-20		I	3		
	"		III	2		
	N-19		"	4		
	N-20		"	1		
図VI-24-96	P-18			25	III A	口径 28.0 底径 — 器高 (25.0)
	O-18			9		
	計			34		
	P-18			12		
	O-18			7		
(未接合 同一個体)	合 計			53		
図VI-24-97	O-18		III	26	III A	口径 (22.1) 底径 — 器高 (18.2)
	計			26		
図VI-24-98	O-25	31	IIIb2	25	III A	口径 16.9 底径 10.0 器高 14.9
	計			25		
図VI-25-99	N-19		III	22	III A	口径 (28.0) 底径 — 器高 (26.3)
	計			22		
	N-19		I	1		
	"		III	3		
	O-18		"	3		
	O-19		I	1		
	"		III	3		
	"		III上	4		
	P-17		III	2		
	合 計			39		
図VI-25-100	M-20		III	2	III A	口径 (28.6) 底径 — 器高 (31.7)
	N-20		"	34		
	計			36		
	M-20		III	2		
	N-20	38	I	1		
(未接合 同一個体)	"		I	2		
	合 計			41		
図VI-25-101	P-18		III	9	III A	口径 (23.2) 底径 — 器高 (10.2)
	計			9		
	N-19		III	1		
	O-18		"	10		
(未接合 同一個体)	合 計			20		
図VI-25-102	N-17		III	3	III A	口径 (32.9) 底径 — 器高 12.3
	O-17		"	1		
	O-18		"	5		
	P-18		"	4		
	不 明			1		
	計			14		
	O-18		III	1		
	P-18		III上	1		
	合 計			16		

挿 図 番 号	発掘区	遺物 番号	層位	破片数	分類	大きさ (cm)
図VI-25-103	L-18		III	3	III A	口径 (22.1) 底径 — 器高 (16.9)
	"		床	3		
	P-22		覆土	1		
	計			7		
図VI-25-104	J-19		I	7	III A	口径 20.2 底径 — 器高 (23.3)
	"		III	11		
	K-19		I	3		
	計			21		
	J-19		I	1		
(未接合 同一個体)	"		III	2		
	合 計			24		
図VI-25-105	M-20		II	4	III A	口径 22.2 底径 9.8 器高 30.3
	"		III	27		
	N-20		風倒	3		
	計			34		
	K-18		II	2		
(未接合 同一個体)	M-20		"	2		
	"		III	6		
	合 計			44		
図VI-25-106	L-18		III	4	III A	口径 (17.7) 底径 10.6 器高 34.4
	"		攪乱	11		
	計			15		
	L-18		攪乱	1		
(未接合 同一個体)	合 計			16		
図VI-25-107	J-19		III	4	III A	口径 12.0 底径 — 器高 ( 8.3)
	計			4		
図VI-25-108	L-19		III	31	III A	口径 (15.6) 底径 5.0 器高 16.3
	L-20		"	1		
	P-19		"	1		
	計			33		
	L-19		III	2		
(未接合 同一個体)	"		"	1		
	合 計			36		
図VI-26-109	L-18		III	1	III A	口径 19.7 底径 — 器高 21.7
	L-19		"	4		
	計			5		
	K-17		風倒	1		
	M-20			2		
(未接合 同一個体)	合 計			8		
図VI-26-110	K-19		III	1	III A	口径 (21.7) 底径 — 器高 (15.6)
	L-16		"	1		
	L-18		木の根	1		
	L-19		III	3		
	M-19		"	1		
	M-20		"	4		
	N-20		"	3		
	O-19		III上	1		
	Q-18		III	1		
	計			16		
	L-18		III	1		
	L-19		"	4		
(未接合 同一個体)	L-20		"	5		
	M-20		風倒	2		
	合 計			28		

挿図番号	発掘区	遺物番号	層位	破片数	分類	大きさ (cm)
図VI-26-111 (未接合 同一個体)	L-19 計		III	22 22	III A	口径 (22.6) 底径 6.8 器高 26.6
	L-19		III	7		
	合 計			29		
図VI-26-112 (未接合 同一個体)	L-19		III	39	III A	口径 (25.5) 底径 8.2 器高 34.2
	"			39		
	不 明 計			2 80		
	K-19		III	1		
	L-19		"	4		
	"			7		
	合 計			92		
図VI-26-113	M-20	B	III	15	III A	口径 20.7 底径 7.4 器高 23.4
	計			15		
図VI-26-114 (未接合 同一個体)	L-19 計		III	36 36	III A	口径 (20.8) 底径 - 器高 (22.3)
	L-19		III	29		
	合 計			65		
図VI-27-115 (未接合 同一個体)	K-21	3	III	19	III A	口径 25.9 底径 - 器高 (21.6)
	L-21	1	"	6		
	計			25		
	K-20	3	III	9		
	L-21	5	"	2		
	"	21	"	2		
	合 計			38		
図VI-27-116 (未接合 同一個体)	L-19		III	35	III A	口径 (19.4) 底径 8.1 器高 28.1
	"		"	13		
	計			48		
	L-19		III	3		
	"		"	6		
	合 計			57		
図VI-27-117 (未接合 同一個体)	Q-25 計	32	B1	85 85	III A	口径 25.7 底径 9.9 器高 32.6
	Q-25	32	B1	34		
	合 計			119		
図VI-27-118	I-18		III	2	III A	口径 12.4 底径 6.8 器高 15.6
	"	10	"	1		
	"	11	"	1		
	"	19	"	1		
	"	20	"	2		
	"	21	"	1		
	"	23	"	1		
	"	26	"	1		
	"	41	"	3		
	"	42	"	2		
	計	71	"	1		
	計			16		
図VI-28-119 (未接合 同一個体)	I-21 計			54 54	III A	口径 19.9 底径 7.8 器高 24.5
	I-21			2		
	合 計			56		

挿図番号	発掘区	遺物番号	層位	破片数	分類	大きさ (cm)
図VI-27-120 (未接合 同一個体)	Q-21 計	4	IIIb2	35 35	III A	口径 21.7 底径 8.2 器高 26.2
	Q-21	4	IIIb2	8		
	合 計			43		
図VI-27-121 (未接合 同一個体)	R-21	1	II	1	III A	口径 (21.3) 底径 8.5 器高 28.1
	R-22	5	IIIb1	48		
	計			49		
	R-22	5	IIIb1	5		
	合 計			54		
図VI-28-122	P-24	27	B2	19	III A	口径 (17.6) 底径 5.9 器高 19.6
	計			19		
図VI-28-123 (未接合 同一個体)	I-21	2	III	1	III A	口径 27.8 底径 10.5 器高 (43.6)
	J-21	2	"	1		
	J-22	2	"	4		
	J-23	2	"	30		
	不 明 計			5 41		
	I-21	2	III	1		
	I-22	2	"	1		
	I-23	1	"	6		
	J-21	4	"	1		
	J-22	2	"	17		
	J-23	2	"	13		
	"	6	"	3		
	合 計			83		
図VI-28-124 (未接合 同一個体)	L-24	3	III	1	III A	口径 (30.1) 底径 11.2 器高 33.3
	"	6	"	1		
	"	10	"	1		
	"	13	"	8		
	M-22	5	"	1		
	"	2	"	1		
	"	12	"	19		
	"	25	"	1		
	"	39	"	5		
	M-23	14	"	2		
	"	26	"	1		
	計			41		
	M-22	12	III	1		
	N-24	24	"	1		
	O-24	7	IIIb2	1		
	合 計			44		
図VI-28-125 (未接合 同一個体)	H-18		III	10	III A	口径 (24.8) 底径 9.1 器高 34.6
	I-18		"	97		
	"		風倒	3		
	J-17		III	2		
	J-18		"	1		
	計			113		
図VI-28-125 (未接合 同一個体)	I-18		III	13	III A	口径 (24.8) 底径 9.1 器高 34.6
	"		風倒	1		
	合 計			127		

VI 包含層の遺物

挿図番号	発掘区	遺物番号	層位	破片数	分類	大きさ (cm)
図VI-28-126 (未接合 同一個体)	O-18		III上	53	III A	口径 (26.8) 底径 (10.5) 器高 37.1
	P-18		IIIb2	11		
	計			64		
	O-18		III	15		
図VI-29-127 (未接合 同一個体)	P-18		IIIb2	6	III A	口径 15.3 底径 7.7 器高 17.4
	計			85		
	O-20	17	III	1		
	O-21	14	"	1		
図VI-29-128 (未接合 同一個体)	P-20	17	"	1	III A	口径 25.3 底径 7.8 器高 23.8
	P-21	2	"	8		
	"	19	"	3		
	"	27	"	1		
	"	29	"	2		
	"	37	"	2		
	計			19		
	O-22	3	III	1		
	O-23	23	"	1		
	P-20	6	"	1		
	P-21	2	"	4		
	"	19	"	1		
	計			27		
	K-21	12	III	6		
	M-21	2	"	3		
	"	12	"	4		
図VI-29-129 (未接合 同一個体)	N-20	35	"	1	III A	口径 15.0 底径 6.1 器高 16.3
	N-21	6	"	2		
	"	24	"	3		
	計			19		
	M-21	12	III	2		
	N-20	23	II	1		
	N-21	6	III	2		
	O-21	2	II	1		
図VI-29-130 (未接合 同一個体)	計			25	III A	口径 14.6 底径 6.0 器高 18.8
	P-23	21	IIIb2	1		
	"	27	"	2		
	"	48	"	8		
図VI-29-131 (未接合 同一個体)	"	52	"	1	III A	口径 9.6 底径 4.0 器高 10.4
	Q-23	5	"	1		
	計			13		
	R-22	4	IIIb1	19		
図VI-29-132 (未接合 同一個体)	"	5	"	29	III A	口径 12.3 底径 5.5 器高 10.7
	"	28	"	1		
	計			49		
	R-22	4	IIIb1	3		
図VI-29-133 (未接合 同一個体)	"	5	"	3	III A	口径 (12.2) 底径 - 器高 (16.8)
	計			55		
	P-18		III	1		
	計			7		
図VI-29-134 (未接合 同一個体)	M-21	2	III	5	III A	口径 21.3 底径 9.6 器高 25.4
	"	12	"	2		
	計			7		
	計			7		
図VI-29-135 (未接合 同一個体)	O-21	14	III	25	III A	口径 26.7 底径 - 器高 (27.6)
	計			25		
	O-21	14	III	6		
	計			31		
図VI-29-136 (未接合 同一個体)	L-22	10	III	12	III A	口径 (6.0) 底径 2.1 器高 5.7
	"	26	"	31		
	"	27	"	1		
	計			44		
図VI-29-137 (未接合 同一個体)	L-22	15	III	1	III A	口径 7.3 底径 3.4 器高 5.3
	"	26	"	2		
	計			47		
	計			47		
図VI-29-138 (未接合 同一個体)	N-17		III	28	III B	口径 8.0 底径 3.6 器高 8.7
	"		I	5		
	計			33		
	N-17		III	3		
図VI-29-139 (未接合 同一個体)	"		I	1	III A	口径 22.1 底径 - 器高 16.0
	計			37		
	J-17		III	3		
	計			3		
図VI-29-140 (未接合 同一個体)	J-21	2	II	1	III A	口径 8.0 底径 3.6 器高 8.7
	"	4	III	1		
	不明			2		
	計			4		
図VI-29-141 (未接合 同一個体)	I-21	9	III	1	III A	口径 22.1 底径 - 器高 16.0
	計			5		
	K-21	3	III	9		
	計			9		
図VI-29-142 (未接合 同一個体)	K-21	3	III	2	III A	口径 13.3 底径 - 器高 15.5
	計			11		
	N-31	10	IIIb	7		
	計			7		
図VI-29-143 (未接合 同一個体)	P-27	9	B1	1	III B-1	口径 (13.3) 底径 - 器高 15.5
	計			8		
	L-32	4	IIIa	17		
	"	14	IIIb1	4		
図VI-29-144 (未接合 同一個体)	計			21	III B-1	口径 15.8 底径 5.6 器高 7.5
	L-32	4	IIIa	5		
	L-32	14	IIIb1	7		
	計			33		
図VI-29-145 (未接合 同一個体)	O-30	10	IIIb1	13	III B	口径 22.9 底径 - 器高 (22.8)
	"	2	III	1		
	計			14		
	O-30	2	III	1		
図VI-29-146 (未接合 同一個体)	"	10	IIIb1	3	III B-1	口径 22.9 底径 - 器高 (22.8)
	計			18		
	N-31	29	IIIb1	27		
	計			27		
図VI-29-147 (未接合 同一個体)	N-31	29	IIIb1	11	III B-1	口径 22.9 底径 - 器高 (22.8)
	計			38		
	N-31	29	IIIb1	11		
	計			38		



挿図番号	発掘区	遺物番号	層位	破片数	分類	大きさ (cm)
図VI-43-258 (未接合 同一個体)	M-31 計	13	IIIb1	16 16	IV A	口径 13.1 底径 8.3 器高 17.1
	M-31	13	IIIb1	29		
	合 計			45		
図VI-43-259 (未接合 同一個体)	K-32	2	IV	5	IV A	口径 14.1 底径 — 器高 15.1
	L-32	15	IIIb1	1		
	"	16	"	6		
	"	23	B1	7		
	計			19		
	K-31	2	III	1		
	L-32	15	IIIb1	2		
	"	16	"	2		
図VI-44-277 (未接合 同一個体)	L-32	2	II	3	V A	口径 (13.3) 底径 — 器高 11.2
	"	8	IIIa	9		
	"	13	IIIb1	1		
	計	16	"	1		
図VI-44-278 (未接合 同一個体)	L-32	2	II	2	V B	口径 23.2 底径 5.3 器高 25.0
	"	8	IIIa	1		
	合 計			17		
図VI-44-279 (未接合 同一個体)	N-31 計	20	IIIa	62 62	V B	口径 (32.4) 底径 — 器高 (12.1)
	N-31	20	IIIa	8		
	合 計			70		
図VI-44-280 (未接合 同一個体)	B96-40-C M-31 計		III	4 4 8	V B	口径 (18.1) 底径 — 器高 (9.0)
	M-31	3	III	17		
	N-32	6	IIIb1	1		
	合 計			26		
図VI-44-281 (未接合 同一個体)	N-31 " O-31 計	4 12 4	IIIa IIIb1 III	18 1 6 25	V B	口径 15.8 底径 5.6 器高 7.5
	M-31 " N-31	3 7 4	III IIIa "	20 4 16		
図VI-44-282 (未接合 同一個体)	L-33 計	12	IIIa	91 91	V B	口径 16.3 底径 7.7 器高 16.1
	L-33	12	IIIa	1		
	合 計			92		
図VI-44-283 (未接合 同一個体)	M-31 計	1	II	1 1	V B	口径 3.0 底径 — 器高 2.2
図VI-44-284 (未接合 同一個体)	P-23 " " Q-23 計	10 19 28 5	IIIb2 IIIb2 III IIIb1	7 66 1 2 76	VI	口径 (20.7) 底径 7.7 器高 (31.3)
	P-23 " Q-23 S-24 計	19 17 6 2	IIIb2 攪乱 IIIb1 IIIb1	19 1 5 1 102		
図VI-44-285 (未接合 同一個体)	K-31 L-32 " 計	5 15 17	III IIIb1 "	12 1 2 15	VII	口径 (21.0) 底径 — 器高 (19.2)
	K-31 L-32 計	5 23	III B1	3 1 19		
図VI-44-286 (未接合 同一個体)	K-31 L-32 " 不明 計	5 17 24	III IIIb1 B1 "	1 1 5 2 9	VII	口径 — 底径 5.7 器高 11.8

表VI-2 包含層出土の掲載土器(拓本)

挿図番号	遺構名 発掘区	遺物 番号	層位	破片数	分類
図VI-12-13	P-24	1	II	3	II B
	P-25	14	IIIb2	6	"
	"	6	"	1	"
	N-21	23	III	2	"
-14	P-20	5	"	1	"
-15	N-21	3	"	1	"
-16	"	32	"	1	"
-17	R-18	"	"	2	"
-18	P-24	40	IIIb2	1	"
	O-20	14	III	1	"
	O-21	13	"	1	"
-19	O-22	14	"	5	"
	"	21	"	1	"

挿図番号	遺構名 発掘区	遺物 番号	層位	破片数	分類
図VI-12-19	N-22	6	III	2	II B
	M-21	1	"	1	"
	N-21	22	"	1	"
	不 明			1	"
-21	P-21	2	II	1	"
	O-21	13	III	2	"
-22	N-21	22	"	1	"
	"	3	"	1	"
	N-22	47	"	1	"
	"	"	"	2	"
	"	38	"	2	"
-23	O-21	13	"	2	"
	P-21	1	"	2	"

挿図番号	遺構名 発掘区	遺物 番号	層位	破片数	分類
図VI-12-24	O-18	13	III	5	II B
	L-23	11	"	1	"
	"	5	"	1	"
	M-23	13	III	1	"
-25	N-22	8	"	1	"
-26	NF17-18	20	B 2	1	"
-27	O-25	26	IIIb2	2	"
	"	46	根	1	"
図VI-13-28	Q-20	15	III	6	"
	Q-21	3	IIIb2	1	"
	Q-23	17	"	2	"
	R-20	10	IIIb1	7	"
-29	P-22	27	III	4	"

VI 包含層の遺物

挿図番号	遺構名 発掘区	遺物 番号	層位	破片数	分類
図VI-13-29	P-22	33	III	1	II B
-30	N-24	4	"	1	"
-31	Q-22	6	IIIb2	8	"
	Q-26		B 1	2	
	Q-不明	1		2	
-32	P-20	5	III	2	"
	P-21	28	"	1	
	P-21	36	"	1	
-33	P-22	11	IIIb2	9	"
	不明			1	
-34	K-24	3	III	3	"
-35	P-24	3	IIIb2	5	"
図VI-14-36	O-25	8	"	1	II B
	N-22	8	III	1	
	M-24	4	"	2	
	M-22	38	"	2	
-37	P-22	33	"	3	"
-38	P-23	1	"	1	"
	"	50	"	1	"
	不明			4	
-39	P-21	1	"	2	"
	P-22	27	"	1	
-40	M-24	5	"	1	"
	P-22	33	"	1	
	P-23	26	"	1	
	"	31	"	1	
-41	Q-21	3	IIIb2	1	"
-42	N-21	3	III	1	"
-43	P-23	78	IIIb2	1	"
-44	M-22	11	III	3	"
	"	38	"	3	
	N-22	8	"	2	
-45	Q-20	12	IIIb2	1	"
-46	P-16	7	III	1	"
	"	12	"	1	
-47	N-22	48	"	1	"
-48	P-23	52	"	1	"
-49	O-20	14	II	4	"
-50	O-20	15	III	2	"
図VI-15-51	NF17・18周	6	B 2	4	II B
-52	N-22	8	III	1	"
	O-22	14	"	1	
	不明			1	
-53	P-19	4	III	6	"
	P-18	7	"	2	
-54	L-22	9	"	1	"
	"	14	"	1	
	"	24	"	1	
-55	P-24	4	B 2	1	"
	"	37	"	1	
	"	47	IIIb2	1	
-56	O-18	3	III	3	"
	Q-19	5	"	2	
図VI-30-139	N-24	2	II	1	III A
	"	5	III	3	
	O-24	27	IIIa	1	
-140	Q-26	14	B 1	2	"

挿図番号	遺構名 発掘区	遺物 番号	層位	破片数	分類
図VI-30-141	O-24	44	III	1	III A
-142	P-23	27	IIIb2	2	"
	"	52	"	1	
	"	62	"	1	
	"	2	"	2	
	"	9	"	2	
-143	Q-24	1	III	1	"
	"	2	IIIb1	1	
	"	7	"	1	
	"	9	II	1	
	"	12	IIIb1	1	
	Q-25	2	"	1	
	S-26	3	"	1	
-144	M-20		III	7	"
	不明			4	
	N-20		III	7	
	"		"	1	
-145	P-22	28	"	3	"
-146	O-21	1	"	1	"
	P-21	1	II	2	
図VI-31-147	O-17		III	1	III A
	R-17		"	1	
	P-17		"	1	
-148	N-22	37	"	2	"
	"	39	"	1	
	"	48	"	1	
-149	P-20	6	"	4	"
-150	M-23	14	"	1	"
	N-23	7	"	1	
-151	O-24			6	"
-152	P-21	2	III	2	"
-153	L-24	13	"	2	"
	"	3	"	2	
	不明			1	
-154	M-20	62	III	5	"
	"		"	3	
	不明			1	
-155	M-20	44	II	1	"
	"		"	1	
	L-20		"	2	
	不明			1	
図VI-32-156	P-25	11	B 2	1	"
-157	N-20	"	風倒	4	"
	M-20	"	III	1	
-158	N-20	33	I	1	"
	"	38	"	1	
-159	L-19		III上	1	"
	不明			1	
-160	L-18		III	6	"
-161	O-25	16	B 2	1	"
-162	O-21	14	III	1	"
	"	27	"	1	
	P-21	1	"	3	
	"	2	"	3	
	R-23	10	IIIb1	1	
	不明			1	
-163	O-21	14	III	3	"

挿図番号	遺構名 発掘区	遺物 番号	層位	破片数	分類
図VI-32-163	P-21	37	III	1	
	P-20	6	"	1	
-164	M-21	2	"	1	III A
	"	6	"	1	
	"	12	"	2	
	不明			2	
	N-21	6	III	3	
	"	24	"	3	
	不明			1	
図VI-33-165	P-25	2	II	1	"
	"	7	IIIb2	1	
	"	11	B 2	5	
	"	20		1	
-166	L-21	5	III	4	"
	"	21	"	6	
	M-21	12	"	1	
-167	M-24	5	"	4	"
-168	O-19	27	III下	1	"
	O-19		III	1	
	O-18		"	1	
-169	O-17		III上	1	"
	O-18		III	1	
-170	N-18		根	3	"
-171	M-22	12	III	4	"
	"	39	"	2	
図VI-34-172	O-24	32	IIIb2	1	"
	"	41	IIIb2	2	
	P-23	35	IIIb2	1	
-173	O-19		III上	3	"
	不明			3	
-174	N-19		III	3	"
-175	L-15		"	2	"
-176	O-17		"	1	"
	"		III上	1	
-177	J-19		III	8	"
	"		I	1	
	J-12			1	
図VI-35-178	M-20			10	"
	O-19		III	1	
	不明			2	
	M-20			2	
	O-19		III	1	
	"		"	2	
	"		III上	4	
	P-18		III	2	
-179	M-21	6	"	1	"
	不明			2	
-180	N-20	35	III	2	"
	"	38	"	1	
	不明			2	
-181	O-25	31	IIIb2	1	"
-182	N-19			1	"
-183	R-24	3	IIIb1	7	"
-184	N-23	3	II	4	"
	"	7	III	2	
	"	22	"	1	
-185	M-20			4	"

插图番号	遺構名 発掘区	遺物 番号	層位	破片数	分類
図VI-36-186	N-20	35		2	ⅢA
-187	M-19	26	Ⅲ	2	"
	不明			1	
-188	O-18		Ⅲ	3	"
	L-11		"	1	
	P-10		"	1	
	L-18	22	"	4	
	不明			1	
-189a	K-19		Ⅲ	1	"
	"		"	6	
	P-19		"	1	
	J-19		"	1	
	不明			2	
-189b	不明			1	"
-190	L-24	13	Ⅲ	1	"
-191	Q-24	12	Ⅲb1	4	"
-192	Q-24	5	B1	2	"
	"	5	B1	1	
	"	12	Ⅲb1	1	
	不明			1	
-193	P-23	10	Ⅲb2	1	"
	"	35	"	1	
	"	83	"	1	
-194	K-18		Ⅲ	4	"
図VI-37-195	L-22	39	Ⅲ	2	"
	"	48	"	2	
-196	N-22	45	"	1	"
-197	N-18		"	1	"
-198	N-18		"	2	"
-199	L-22	2	Ⅱ	2	"
	"	10	Ⅲ	4	
	L-23	6	"	2	
-201a	K-21	3	"	4	"
-201b	P-21	2	"	2	"
	P-21	2	"	3	
-202	L-23	6	"	6	"
-203	不明			1	"
-204	O-22	11	Ⅲ	1	"
	P-6	80	"	1	
-205	L-24	3	"	2	"
	"	13	"	2	
	不明			1	
-206	J-23	2	Ⅲ	2	"
図VI-38-207	O-23	12	Ⅲ	3	"
	"	31		1	
-208	N-18		根	1	"
-209	P-23			8	"
	"	41	Ⅲ	9	
	"	35	"	1	
-210	L-19		"	2	"
-211	P-23			6	"
	P-23	52	Ⅲ	1	
-212	L-22	26	"	1	"
	"	27	"	1	
-213	L-22	27	"	3	"
	"	10	"	2	
-214	M-20	20	I	1	"

插图番号	遺構名 発掘区	遺物 番号	層位	破片数	分類
図VI-38-215	L-22	10	Ⅲ	2	ⅢA
-216	Q-21	4	Ⅲb2	2	"
	"	5	"	2	
図VI-39-217	L-22	26	Ⅲ	8	"
-218	O-19		Ⅲ上	1	"
	"		"	1	
-219	J-18		"	1	"
-220	L-21	5	"	2	"
-221	L-20		"	2	"
	M-20	44	"	1	
	M-21	12	"	1	
-222	L-22	25	"	9	"
	L-23	6	"	1	
-223	J-18		I	1	"
	J-17		Ⅲ	1	
	不明			1	
-224	O-19	25	Ⅲ上	1	"
図VI-40-225	O-17		Ⅲ上	1	"
	P-16		Ⅲ	1	
	P-18		Ⅲ上	1	
-226	O-18		Ⅲ	5	"
	O-19		Ⅲ上	1	
	O-17		Ⅲ	1	
-227	P-24	26	B2	22	"
-228	M-19		Ⅲ	1	"
	O-19		Ⅲ上	1	
-229	L-18		Ⅲ	6	"
-230	M-21	6	"	2	"
	"	12	"	1	
-231	O-18		"	5	"
-232	L-17		"	4	"
-233	P-20		"	18	"
-234	L-20		"	3	"
	K-20	3	"	1	
図VI-41-235	N-24	2	Ⅱ	4	"
-236	M-23	26	"	3	"
	"	14	"	2	
-237	P-20	6	"	8	"
-238	R-21	1	Ⅱ	2	"
	P-21	2	Ⅲ	1	
	"	20	Ⅲ	1	
-239	M-24	5	Ⅲ	4	"
-240	P-18		"	2	"
-241	M-23	14	Ⅲ	1	"
-242	K-18		"	5	"
-243	O-29	1	Ⅲa	2	"
	"	3	Ⅲb1	2	
-244	K-19		Ⅲ	1	"
-245	P-19		"	6	"
-246	O-18		"	1	"
	O-19		"	1	
	"		Ⅲ上	1	
	不明			1	
-247	O-23	23	Ⅲ	2	"
	"	12	"	1	
-248	R-20	4	Ⅲb1	3	"
	Q-20	13	Ⅲ	3	

插图番号	遺構名 発掘区	遺物 番号	層位	破片数	分類
図VI-42-253	N-20	10	Ⅲb	1	ⅢB-1
-254	O-30	2	Ⅲ	1	"
-255	P-29	1	Ⅲb1	1	"
-256	Q-21	6	"	2	ⅢB-2
-257	Q-21	6	"	3	"
図VI-43-260	M-31	14	Ⅲb1	1	IVA
	"	18	"	1	
-261	N-31	13	"	4	"
	"	12	"	2	
-262	N-30	3	"	1	"
	N-31	11	"	1	
	"	16	"	1	
-263	N-31	11	"	1	"
-264	M-32	13	"	1	"
-265	L-33	18	B1	1	"
	L-32	18	Ⅲa	1	
-266	K-31	9	Ⅲ	1	"
	L-31	5	Ⅲb1	1	
	L-32	22	"	1	
-267	K-33	7	Ⅲ	1	"
-268	M-32	8	Ⅲa	2	"
-269	P-17			1	"
-270	N-31	11	Ⅲb1	2	"
-271	N-30	12	"	1	"
-272	M-31	17	"	1	"
-273	L-31	7	B1	1	"
-274	N-31	32	Ⅲb1	1	"
-275	K-33	3	Ⅲ	6	"
-276	N-31	11	Ⅲb1	5	"
図VI-44-284	L-32	8	Ⅲa	1	VB
-285	N-31	10	Ⅲb1	1	"
	"	2	Ⅲa	1	
-286	L-32	2	Ⅱ	2	"
-287	L-33	1	Ⅲa	1	"
	L-32	7	"	1	
-288	L-32	23	B1	1	"
-289	M-31	3	Ⅲ	2	"
-290	M-31	3	"	4	"
-291	M-32	9	Ⅲa	1	"
-292	M-31	3	Ⅲ	1	"
-293	O-28	4	Ⅲa	3	"
-294	N-32	3	"	1	"
-295	N-32	8	Ⅲb1	2	"
-297	K-31	4	Ⅲ	5	VI
	K-32	13	"	1	
-298	O-26	12	Ⅱ	1	"
	O-26	15	Ⅲa	1	
-299	R-21	3	Ⅱ	1	"
-302	L-33	16	B1	3	VII
	K-31	5	Ⅲ	2	
-303	S-26	2	Ⅱ	1	"
-304	L-32	24	B1	1	"

## 2. 石器等

### (1) 石器等の出土状況

遺物包含層からは石器778点、礫・礫片・剝片ほか3,018点、土・石製品19点の合計3,815点が出土した(表I-1)。石器全体および点数の多い3器種の分布を図VI-54~56に示す。全体として斜面の下部から段丘面2にかけて出土点数が多いが、北海道式石冠では22~25ライン、石皿では18~21ラインなどに偏る傾向があり、石冠とII群B類土器の分布の類似が認められる。以下に一括出土遺物の出土状況を記す。(越田賢一郎)

#### 1) 剝片石器

一括石器1(図VI-46~48, 図版7・46)

O-26区のB2層を調査中に、標高145.9m付近で頁岩製の剝片多数が径2mほどの範囲に集中しているのを確認した。遺物は図IV-6でB2-12層とした暗褐色の砂混り粘土質シルト層の上面から上部にかけて含まれていた。遺物の出土する範囲を50cm四方の方格13個に区切り、方格の中の土壌を採取しながら遺物が見られなくなるまで掘り下げた。方格によって異なるが確認面から1~2cm程度の深さまで採取している(図VI-46)。

採取した土壌を1.41mm目の篩を用いて水洗した結果、頁岩製の遺物1,688点、重量にして907.8gが得られた。音叉振動式デジタル表示の電子天秤を用いて遺物全点の重量を計った結果を図VI-46と表VI-3aに示す。遺物の点数は方格によってかなり異なり、少なくともロ・ヘ区付近とワ区付近の2つ以上の集中箇所があるようである。遺物の大きさをみると、全体としては0.10g未満の遺物が80%以上を占める点で主に剝片石器の細部調整の産物と考えられた函館市中野A遺跡の剝片集中4・6(縄文時代早期)<sup>1</sup>などに近いが、5gを超えるような大型の遺物がある程度見られる点に特徴がある。川寄りにあるワ区の遺物が相当細かいところをみると、おそらく洪水の影響は受けていないが、雨水の洗い出しで微細な遺物が標高の低いワ区付近に集まった可能性がある。

0.40g以上の遺物<sup>2</sup>153点のうち、行方不明となった1点を除く152点を観察した結果を表VI-3bに示す。礫面を残す遺物、礫打面・平坦打面をもつ剝片が目立って多い。一部の方格で焼けた遺物が出土したが、発掘中には焼土などは確認されていない。水洗に際して炭化物が幾らか見出されたので、現地で焼けた可能性は残る。剝片以外に石核と原石(図VI-48-5)が少数存在するが、剝片石器やその破片は見出されなかった。

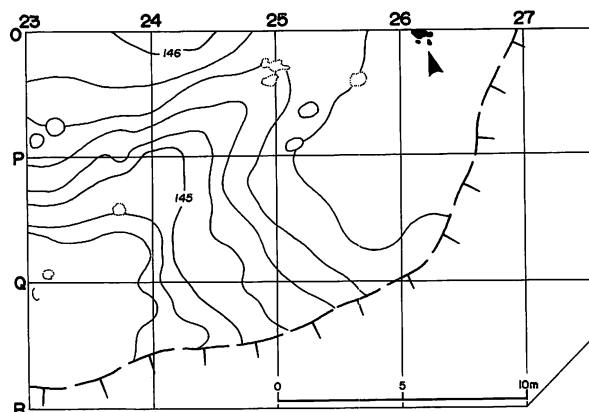
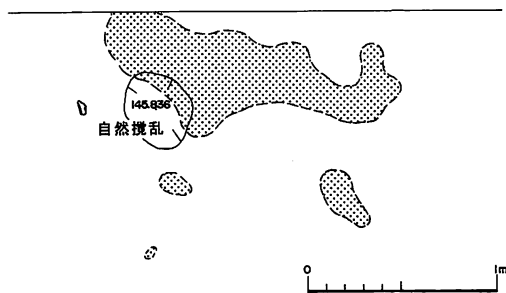
観察した遺物152点にO-26区のB2層出土の剝片49点(やはり重さ0.40g以上のもの)を加えて接合を試み、剝片剝離作業の概要を窺うことのできた接合資料4件を図示した。

接合資料1(図VI-47-1a・b): 方格ロ・ヘ出土品を中心に28点の遺物が接合した。直方体に近い礫の角から剝離が始まり、片面の約2/3周で礫面が取り除かれる(模式図1~5)。生じた剝離面を打面として石核の一端から剝離がおこなわれ(6~9)、何回目かに末端の非常に大きい石核全体の半分以上もある剝片が生じる(10)。この剝片は中央で折られ(あるいは剝離時に折れ)、折面を打面に小さい剝片が剝離される(11・13~15)。末端側の破片では礫面からも剝離がおこなわれる(12・16~18)。残された小さい石核でも何回か剝離があるが(20・22)、途中で折れたらしい(21)。残核は確認できない。

接合資料2(図VI-47-2): 方格ロ出土品を中心に16点が接合した。やはり礫の角に近い部分から剝離が始まり、側縁を打面にして打面を転移しながら進む(模式図1~5)。大

# 一括石器 1

未調査



9	418	64	33	9
295	108	38	144	36
32	10	492		

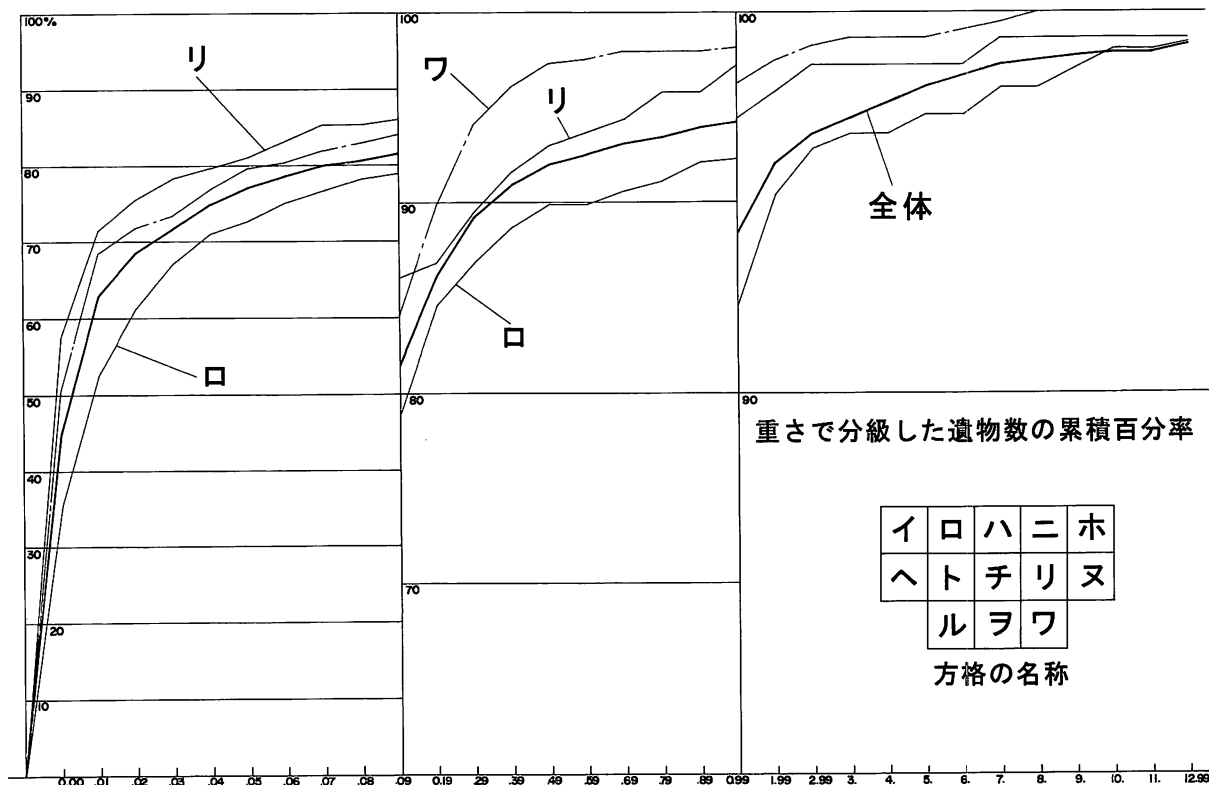
各方格の遺物点数

145.920	.956	.960	.969	.967	.960
.904	.993	.906	.997	.939	.976
.874	.911	.905	.909	.944	.943
.892	.889	.894	.852		

確認面の標高

145.907	.953	.948	.950	.961	.962
.901	.891	.895	.893	.926	.925
.868	.887	.893	.900	.933	.935
.895	.899	.892	.941		

取り上げ終了時の標高

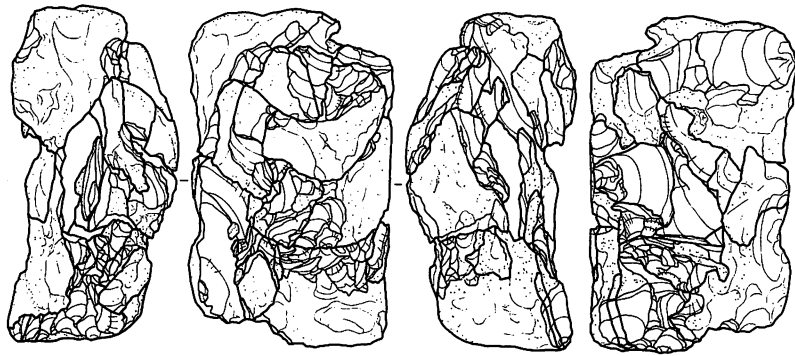


図VI-46 一括石器 1

型の剥片（5）が剥離されたあとで石核が分割され（あるいは剥離に際して割れ）、生じた一片（6～11）の縁辺から礫面を取り除くように剥離がなされる（6～8）。この作業の途中でも節理割れらしいものが生じている（9・10・11の分離）。残された石核でも引き続いて小さい剥片が剥離されている（12～15）。残核は確認できなかった。

接合資料 3（図VI-48-3）：方格リ・ワ出土品を中心に15点が接合。やや扁平な礫を素材に節理面起源の平坦な礫面を打面、側面を作業面として主に横長の剥片が連続的に剥離

VI 包含層の遺物

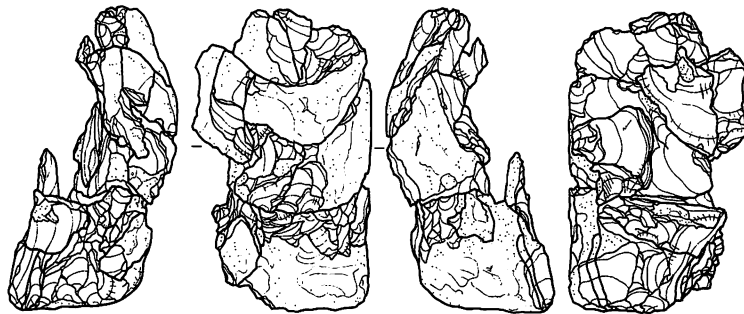
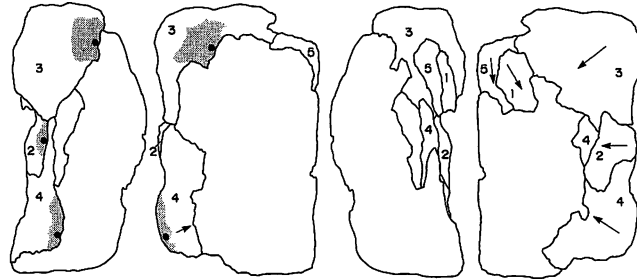


	10	2		
6	2			

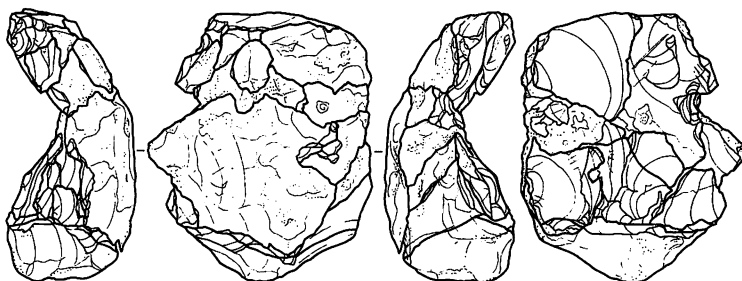
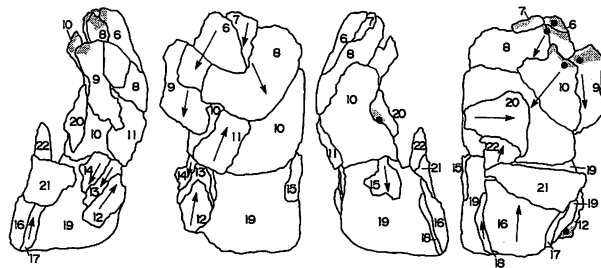
方格別出土点数



1a



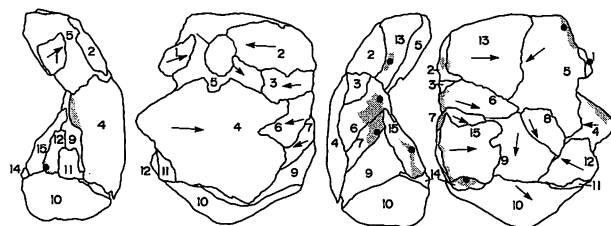
1b



	10	2		
	2		1	

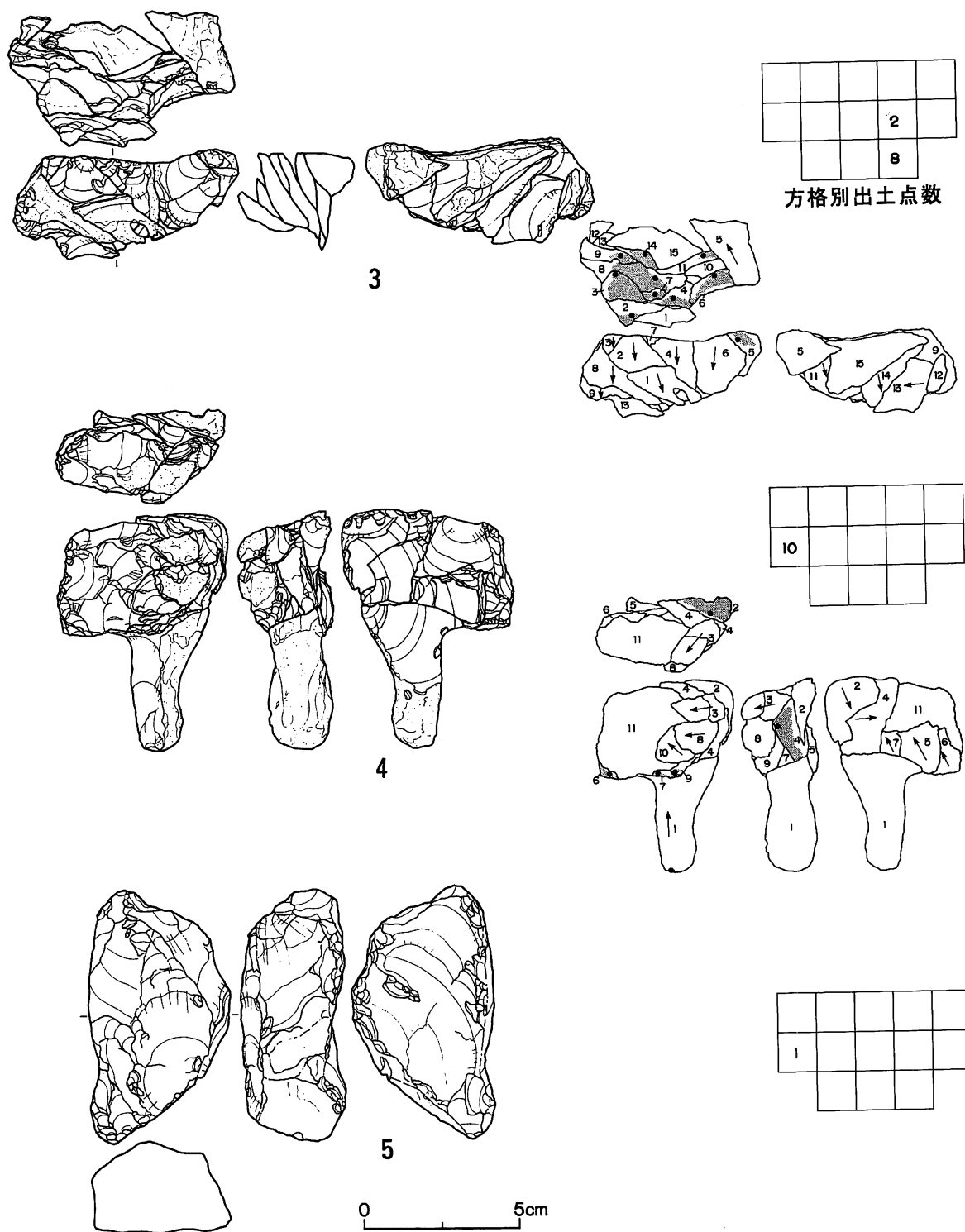


2



0 5cm

図VI-47 一括石器1の遺物(1)



図VI-48 一括石器1の遺物(2)

される（1～4・6～11・14）。途中で作業面の剝離面を打面として石核の側面に剝離が入る（5・12）。この側面の剝離面を打面とする剝離も確認できる（13）。残核の一部らしいもの（15）を確認した（15）が、折られているように見える。

接合資料4（図VI-48-4）：方格へ出土品を中心に12点が接合した。礫の側面・端部を打面に剝離が始まり（1・2），その途中の事故で石核が折れたらしい（1の剝離時のウールパッセ）。残された最も大きい破片で打面を転移しながら剝片が剝離される（4

表VI-3 一括石器1集計表

a. 点数・重量

方格	点数 (点)	総重量 (g)	重さ別点数																			
			0.00	0.01	0.02	0.03	0.04	0.05	0.06	0.07	0.08	0.09	0.1x	0.2x	0.3x	0.4x	0.5x	0.6x	0.7x	0.8x	0.9x	1.xx
イ	9	0.57	4	1	0	0	0	1	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0
ロ	418	188.27	149	72	35	25	16	7	10	7	6	3	24	9	8	5	0	3	2	4	1	12
ハ	64	97.14	22	11	5	1	0	3	0	0	0	0	3	2	0	0	1	0	1	0	0	4
ニ	33	91.45	13	7	1	1	0	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2
ホ	9	0.07	8	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ヘ	295	319.94	118	71	23	8	13	4	3	2	1	2	10	7	3	2	4	2	0	2	1	7
ト	108	75.96	49	15	6	4	2	4	1	0	1	1	6	6	3	3	1	0	0	1	0	0
チ	38	9.66	9	4	3	2	3	2	1	2	0	1	3	1	0	1	0	2	0	0	0	3
リ	144	38.61	83	20	6	4	2	2	3	3	0	1	1	4	3	2	1	1	2	0	2	1
ヌ	36	0.32	31	3	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ル	32	25.54	17	7	0	1	1	0	1	0	0	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0
ヲ	10	0.11	7	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ワ	492	60.12	248	89	16	8	17	14	4	7	5	6	28	21	10	6	1	2	0	0	1	3
合計	1688	907.76	758	302	96	54	55	38	25	21	13	14	79	52	28	19	9	10	5	7	5	30

b. 遺物の観察 観察は重さ0.40g以上の遺物153点のうち行方不明となった1点を除く152点についておこなった。打面の項は打面の位置を確認できた点数に対する百分率、他は観察点数に対する百分率である。

方格	観察数 (点)	礫面あり (点/%)	打面の分類 (点/%)								背面の特徴(点/%)		焼けた遺物 (点/%)	剥片以外の遺物(点/%)				
			礫	打面	平坦打面	切子打面	線	打面	点	打面	分類不明	打面欠損		対向剥離	ボシ面	原	石	石
ロ	47	36/76.5	20/45.5	5/11.4	1/2.3	0/0	0/0	1/2.3	17/38.6	4/8.5	3/6.4	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
ハ	17	5/29.4	5/38.5	3/23.1	1/7.7	0/0	2/15.4	1/7.7	1/7.7	0/0	0/0	3/17.6	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
ニ	8	8/100	4/57.1	0/0	0/0	0/0	0/0	1/14.3	2/28.6	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
ヘ	30	22/73.3	5/20.0	12/48.0	4/16.0	1/4.0	0/0	0/0	3/12.0	3/10.0	1/3.3	1/3.3	1/3.3	1/3.3	2/6.7	0/0	0/0	0/0
ト	9	6/66.7	1/11.1	4/44.4	0/0	0/0	0/0	1/11.1	3/33.3	1/11.1	0/0	1/11.1	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
チ	7	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	1/14.3	6/85.7	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
リ	12	7/58.3	1/10.0	3/30.0	1/10.0	1/10.0	0/0	1/10.0	3/30.0	1/8.3	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
ル	3	2/66.7	2/66.7	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	1/33.3	1/33.3	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
ヲ	19	11/57.9	5/26.3	7/36.8	1/5.3	1/5.3	2/10.5	0/0	3/15.8	2/10.5	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
合計	152	97/63.8	43/31.6	34/25.0	8/5.9	3/2.2	4/2.9	6/4.4	38/27.9	11/7.2	5/3.3	6/3.9	1/0.7	2/1.3				

～10)。打面は縁辺に沿って少しずつ転移するようだが、作業面の入れ替えは頻繁である。事故後の剥離作業で生じた残核が確認されている(11)。

以上の遺物はKo-g火山灰より上位、II群B類土器より下位で出土しており、土器ともなっていない。前期後葉からその幾らか前の時期が考えられる。本遺跡では層位的に確認できる範囲で最も古い遺物である。

遺物の観察と接合作業の結果から礫素材の石核による剥片剥離作業の産物が多く含まれていることは確実である。剥片剥離の経過は接合資料3をのぞいてかなり共通している。礫の角から剥離が始まり、やがて大きい剥片の剥離がおこなわれ、事故が起き、残された破片から再び剥離が続くという状況である。微細な遺物の多さから、細部調整作業の産物が含まれている可能性は小さくない。しかし接合資料を見る限りでは石器の素材になり難い小型の剥片が多く、接合資料3のようにほとんどそれだけを剥離している例もある。0.40g未満の遺物の観察をおこなってから検討する必要があるが、石器の素材生産と細部調整の産物が複合したものと容易に結論し難いところがある。

接合資料の出土状況から、剥片剥離がその場でおこなわれたか、あるいは幾つかの礫による剥離作業の産物が個別に遺棄されたことが考えられる。遺物の集中は未調査範囲に続いているようであるので、全体の調査を待って石器製作の有無を含めこの一括遺物の性格について再度検討されるべきであろう。

## 2) 礫石器

## 一括石器3 (図VI-49・50)

P-26区の調査中にB2層下面(標高145.9m前後)付近で北海道式石冠と扁平打製石器各2点が狭い範囲から出土した。付近を精査したが遺構は確認できず、自然のものと思われる径0.5mほどの不整形落ち込みの中になお1点の扁平打製石器があるのを発見した。本来B2層上部～IIIb2層にあったものと思われる、前期後葉か中期の遺物とみられる。



図VI-49-1・2は北海道式石冠, 3~5は扁平打製石器である。1は礫面を大きく残り2は全面を敲打整形。ともに平滑なすり面の周縁に粉っぽい(細かい敲打痕の複合した)部分がある。3は扁平な円礫を素材に上縁・両端のほぼ片面のみ整形。4・5も礫素材でほぼ全周の両面を整形, 5の上縁・左端は折面である。3点とも粉っぽいすり面が発達。

5点の一括性には疑問もあるが, それほど礫石器の多くない地区での出土でもあり(図VI-54・55), 人為的に集めて配置ないし遺棄した可能性を考えてよいであろう。

#### 石皿(図VI-50~52, 図版7-3)

遺構や一括土器の付近にある石皿についてはこれまでに出土状況を示したが, それ以外の包含層の石皿の中にも縄文時代当時の位置や態勢をとどめているものがあると考えられる。堆積が平坦で遺物の移動が少ないと考えられた段丘面のB2・IIIa・IIIb1層のうち, 4か所で石皿の出土状況を記録し, これにW-1~4という調査記号を付した。

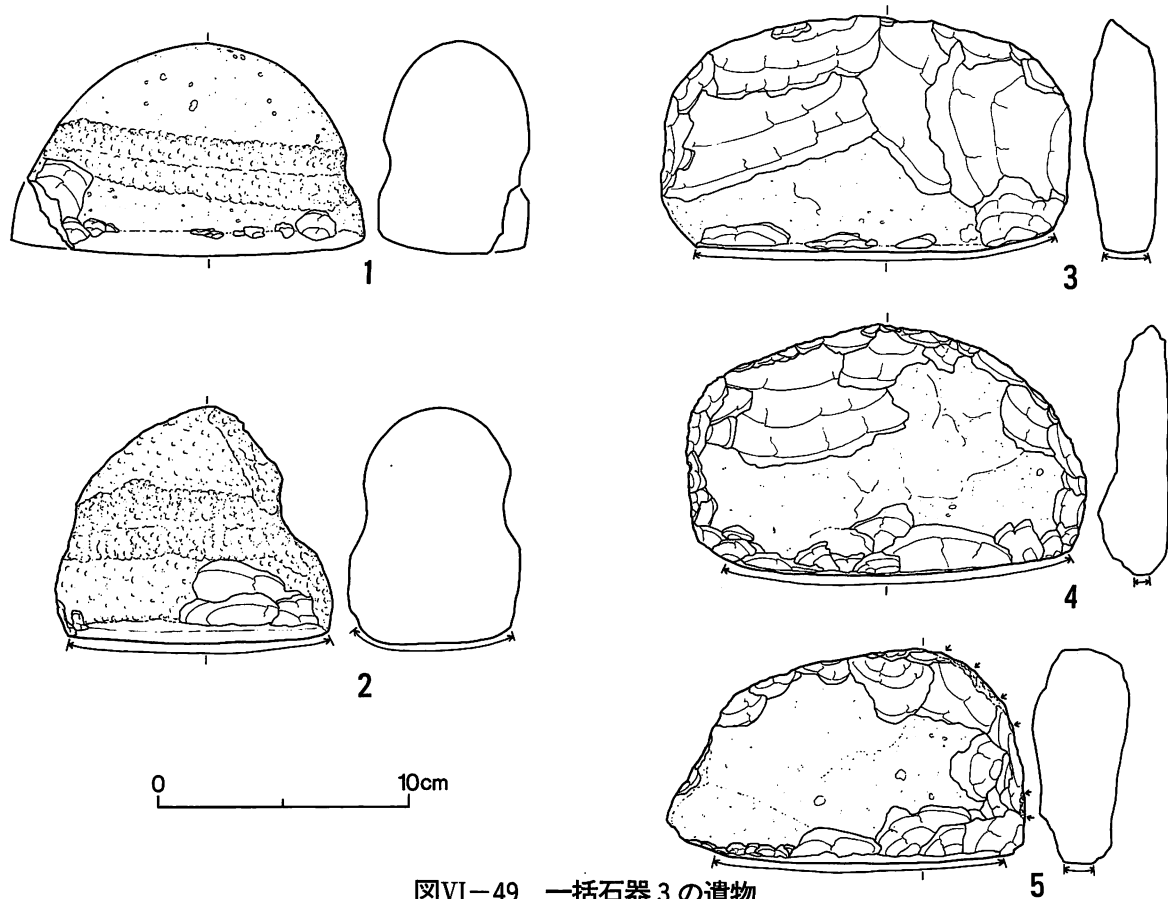
W-1はQ-23, W-3はQ-22区のB2層で出土した縄文時代前期の石皿である。W-1では2点の石皿がすり面を上にして水平に据えられた状態で上下に重なって出土した。下位の石皿が埋もれたために新たに同じ位置に石皿を据えたものと思われる。軟弱な土壌に石皿が沈み込んだのか, 新たな堆積のために埋もれたのかは不明であるが, 石皿を中心とするある程度の範囲が継続的な作業の場所として意識されていたことを示す可能性がある。W-3は石皿を含む4点の礫が炉の石囲いのように配置され, 脇に2点の礫が水平に置かれていた。囲いの内部はB2層が流入し, 固有の覆土や焼土は確認できない。人為的に据え付けたものかどうか, また石皿の使用にともなう配置かどうか不明である。図VI-52-1はW-1上位, 3はW-1下位, 4はW-3の石皿である。1は礫の片面中央付近に平滑で弱く凹んだすり面を形成。敲打痕は見られず, 図の下縁に1か所剥離がある。2は礫の片面のほぼ全体に2つ以上の弱く凹んだすり面が複合しているようで, 一端に近くざらついた手触りのやや強く凹んだすり面がある。これらすり面の縁辺部に敲打痕, また中央部では平滑なすり面に深い凹みが複合している。図の下縁は石皿下面からの打撃で大きく打ち欠かれている。4は一端の欠けた礫の両面にすり面を形成する。出土時には図化した面が下を向いていた。この面では広い範囲に2つ以上の弱く凹んだ平滑なすり面が複合。すり面と複合して深い凹みが少数見られ, 石器の一端には敲打痕の集中する部分がある。下面にも礫の破面に沿って凹んだ平滑なすり面を1か所形成。

W-4はN-31区IIIb1層出土の石皿である。すり面を上にして, 下位のB1層上面の傾斜に沿って少し傾いた石皿の周囲に数点の大~巨礫とIV群A類土器が見られ, 縄文時代後期初頭の可能性が高い。石皿の確認面からIIIb1層下部に見られる薄い氾濫堆積物層の上面まで3×1.5mの範囲の遺物出土状況を記録した(図VI-51)。図VI-52-2はW-4の石皿である。礫の片面に側縁に沿ってほとんど平坦で平滑なすり面が見られる。

W-2はN-31区IIIa層出土の石皿である。層の傾斜に沿って少し傾いた状態で出土し, 下を向いている面にすり面が見られた。周囲のIIIa層では主にV群土器が出土し, 縄文時代晩期の石皿の可能性が高い。遺物を図示していないが安山岩の薄い板状の礫片(あるいは節理割れ面の新鮮な礫)を素材とし, 細かい凹凸の多い割れ面の中央付近に掌より小さく平滑でほとんど平坦なすり面が形成されている。敲打痕は見られなかった。

#### 3) 礫

##### 一括石器2(図VI-50・図版46)



図VI-49 一括石器3の遺物

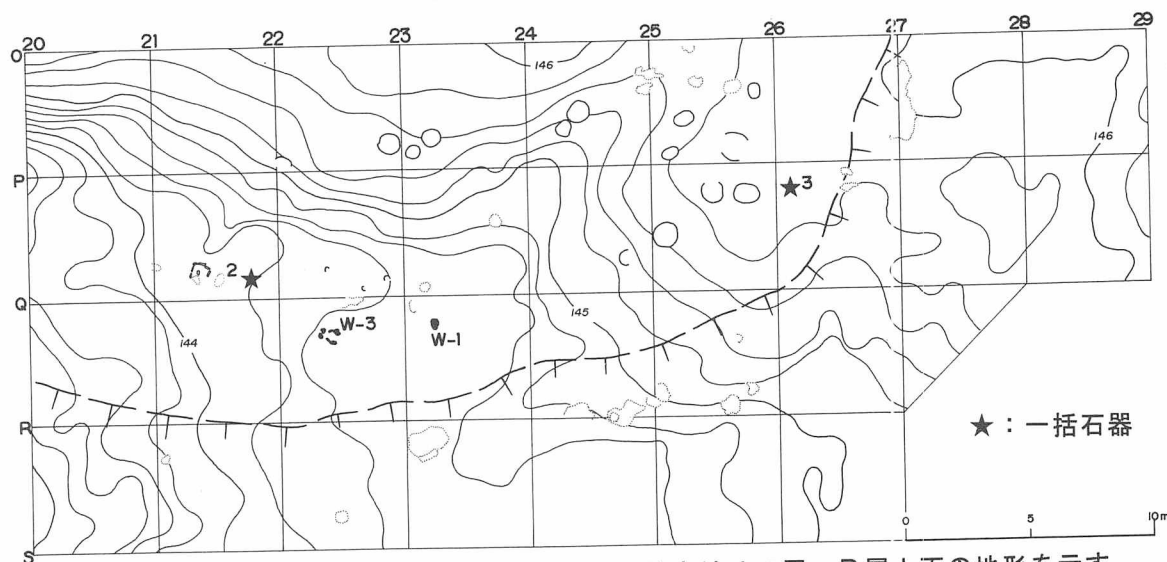
P-21区B2層の調査中に標高144.2m付近で8点の礫が狭い範囲から出土した。加工のない礫であるのではじめに出土した1点は捨てられたが、間もなく付近から次々と7点が出土したという。調査員が確認した時点では遺物は取り上げられており、自然の攪乱と思われる径0.3mほどの暗色の落ち込みが認められた。周囲はB2層の比較的下部にあたり、人工遺物や径の大きい礫のほとんど見られない層位であるので、礫群はこの落ち込みの中に位置していた可能性が高い。

残された7点はいずれも風化の進んだ安山岩の円礫で、特に長手でも扁平でもなく、球形からも遠いびつな形状であるが大きさは似通っている(表VI-4)。出土層位からみて縄文時代前期以降のもので、人為的に集めたことが想像される以外性格は不明である。

(西脇対名夫)

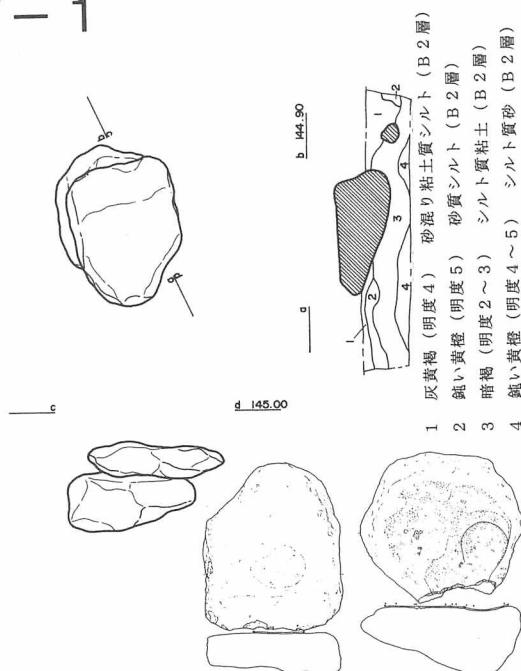
表VI-4 一括石器2・3, W-1・3・4出土石器計測表

挿 図	番号	地区名	遺物番号	層 位	名 称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	石 質	備 考
図版46	1	P-21	44	B 2	礫	5.8×6.6×5.7	230	安山岩	一括石器2
	2	P-21	44	B 2	礫	5.9×6.4×4.9	220	安山岩	"
	3	P-21	44	B 2	礫	5.4×6.7×4.2	184	安山岩	"
	4	P-21	44	B 2	礫	4.5×5.6×4.5	130	安山岩	"
	5	P-21	44	B 2	礫	5.6×6.3×4.5	176	安山岩	"
	6	P-21	44	B 2	礫	5.8×5.1×4.8	188	安山岩	"
	7	P-21	44	B 2	礫	5.5×5.3×4.1	140	安山岩	"
VI-49	1	P-26	29		北海道式石冠	13.0×8.2×5.9	920	安山岩	一括石器3
	2	P-26	30		北海道式石冠	10.6×9.1×6.6	1000	安山岩	"
	3	P-26	28		扁平打製石器	16.9×9.0×2.7	640	閃緑岩	"
	4	P-26	31		扁平打製石器	15.3×9.7×2.8	548	安山岩	"
	5	P-26	32		扁平打製石器	13.9×8.3×3.8	560	安山岩	"
VI-52	1	Q-23	35	B 2	石皿	36.0×28.5×8.5	14000	安山岩	
	2	N-31	1	III b1	石皿	43.0×33.5×16	35000	安山岩	
	3	Q-23	36	B 2	石皿	34.5×33.5×16	19000	安山岩	
	4	Q-22	1	B 2	石皿	29.0×28.0×16	1400	安山岩	

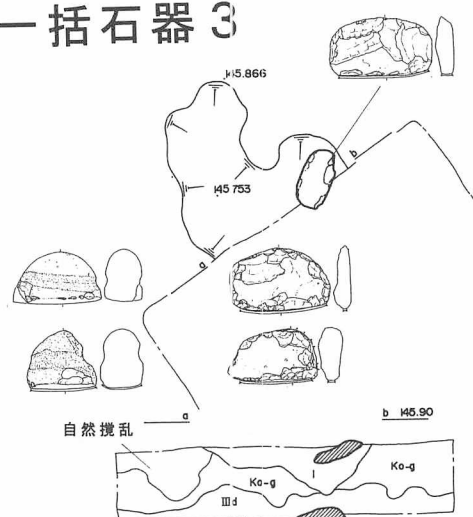


等高線はV層・B層上面の地形を示す。

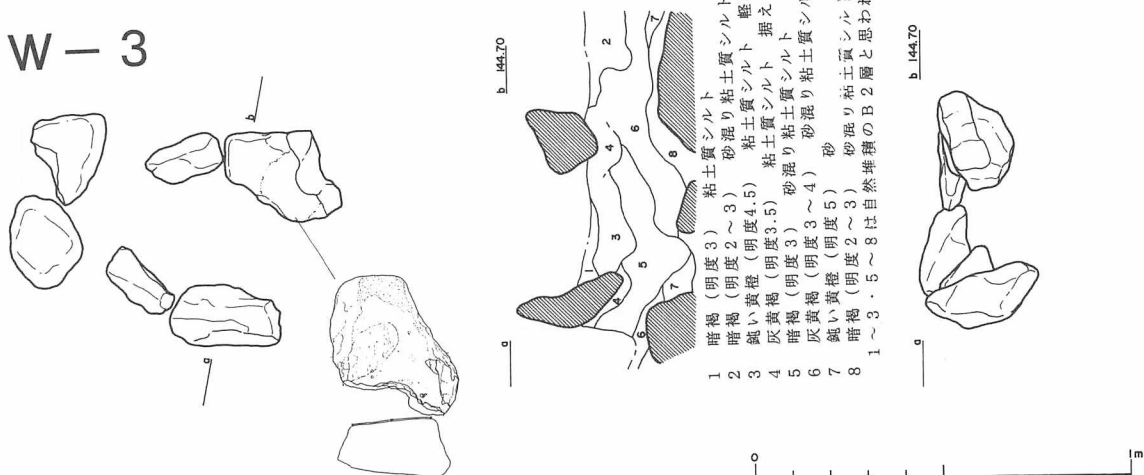
## W-1



## 一括石器3

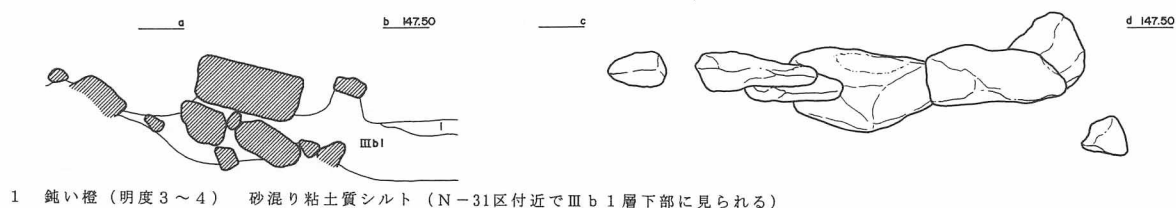
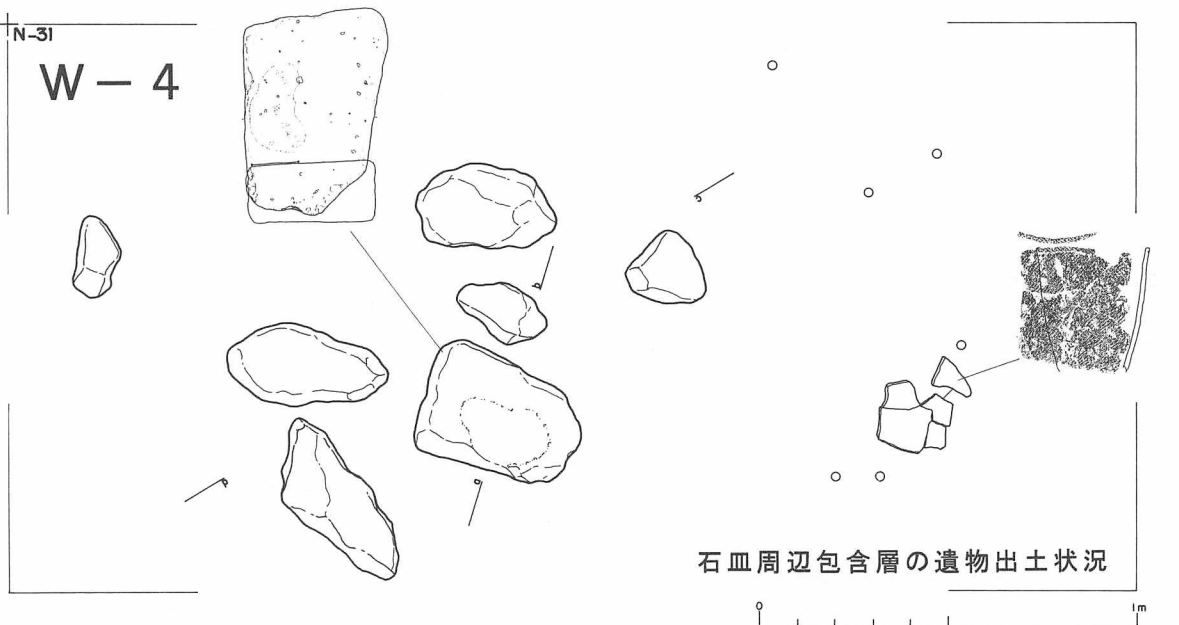
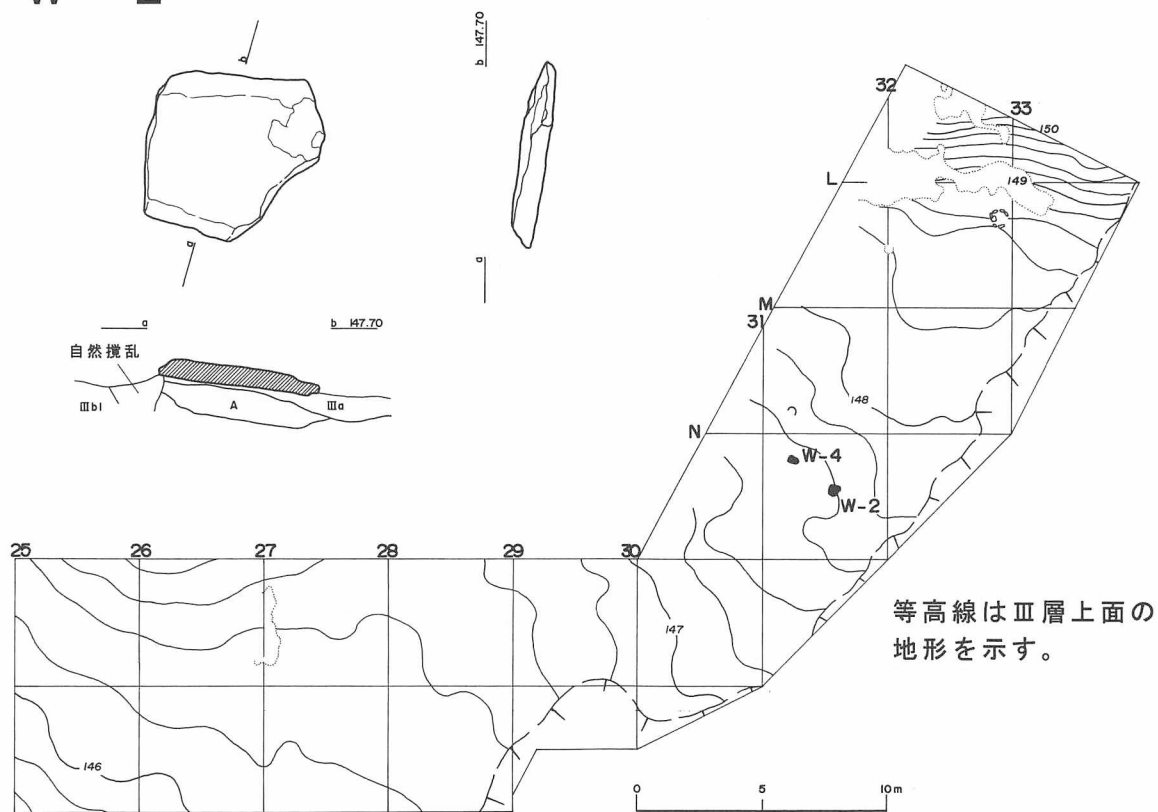


## W-3

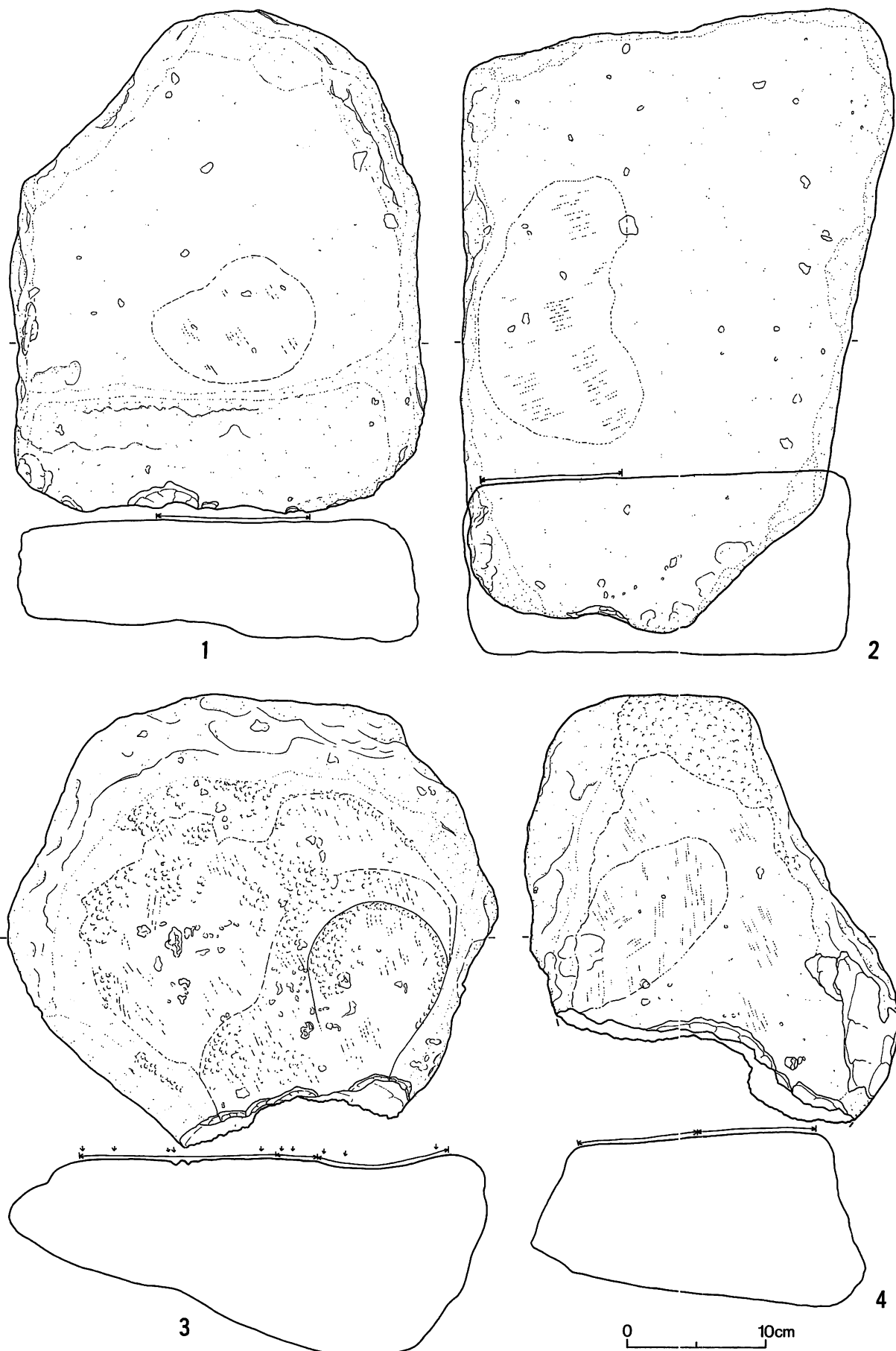


図VI-50 一括石器2・3および石皿出土状況(1)

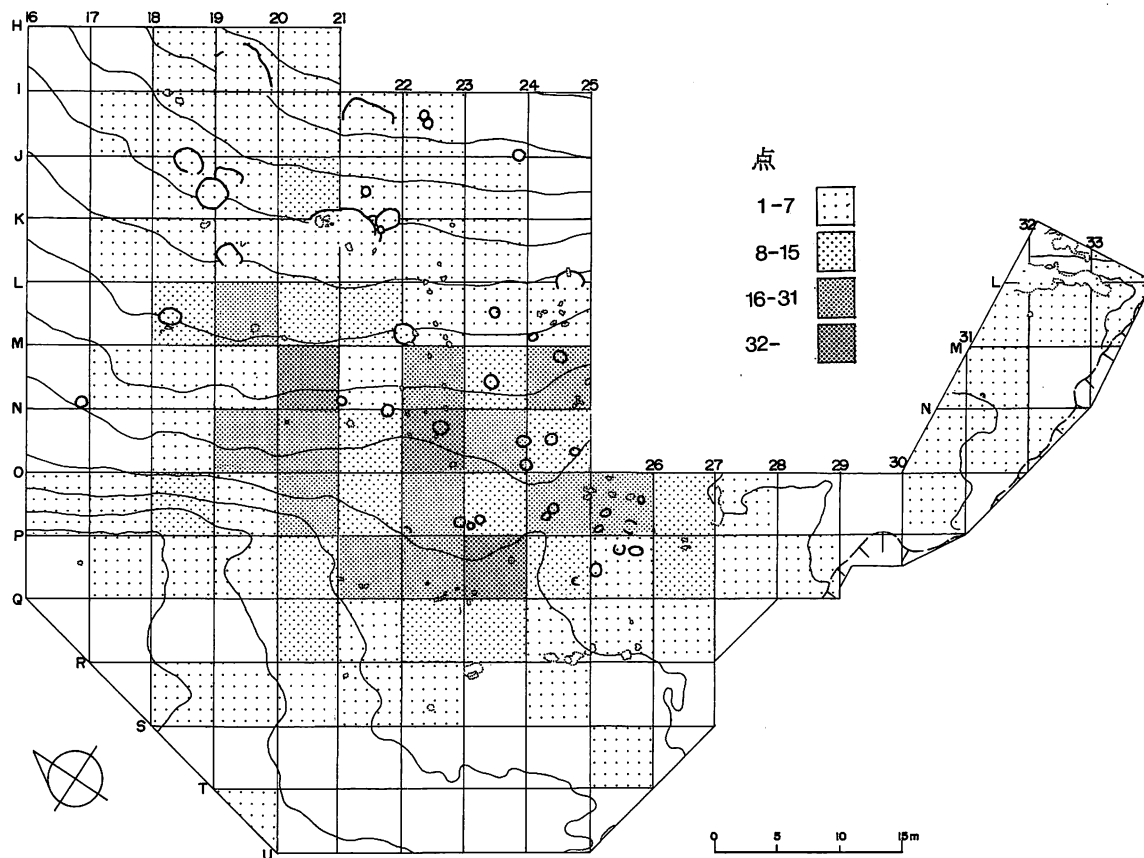
W-2



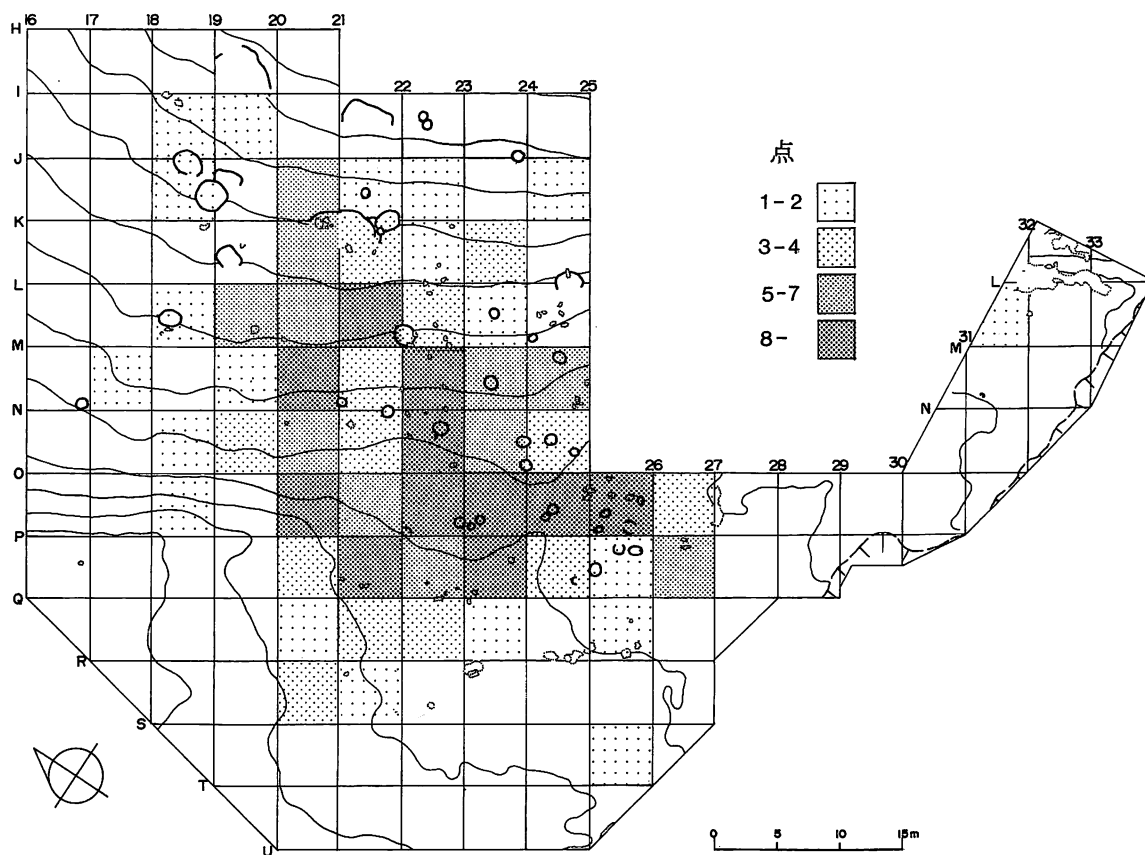
図VI-51 石皿出土状況(2)



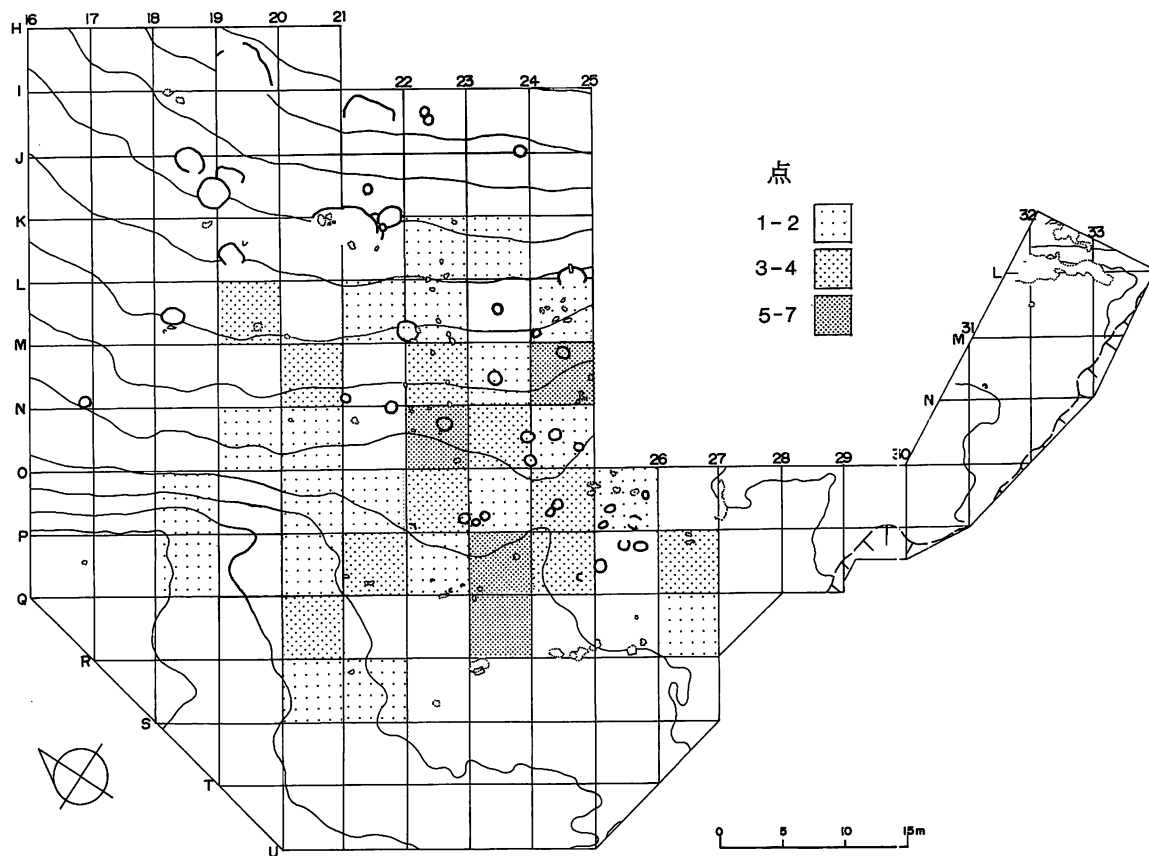
图VI-52 W-1·3·4出土石皿



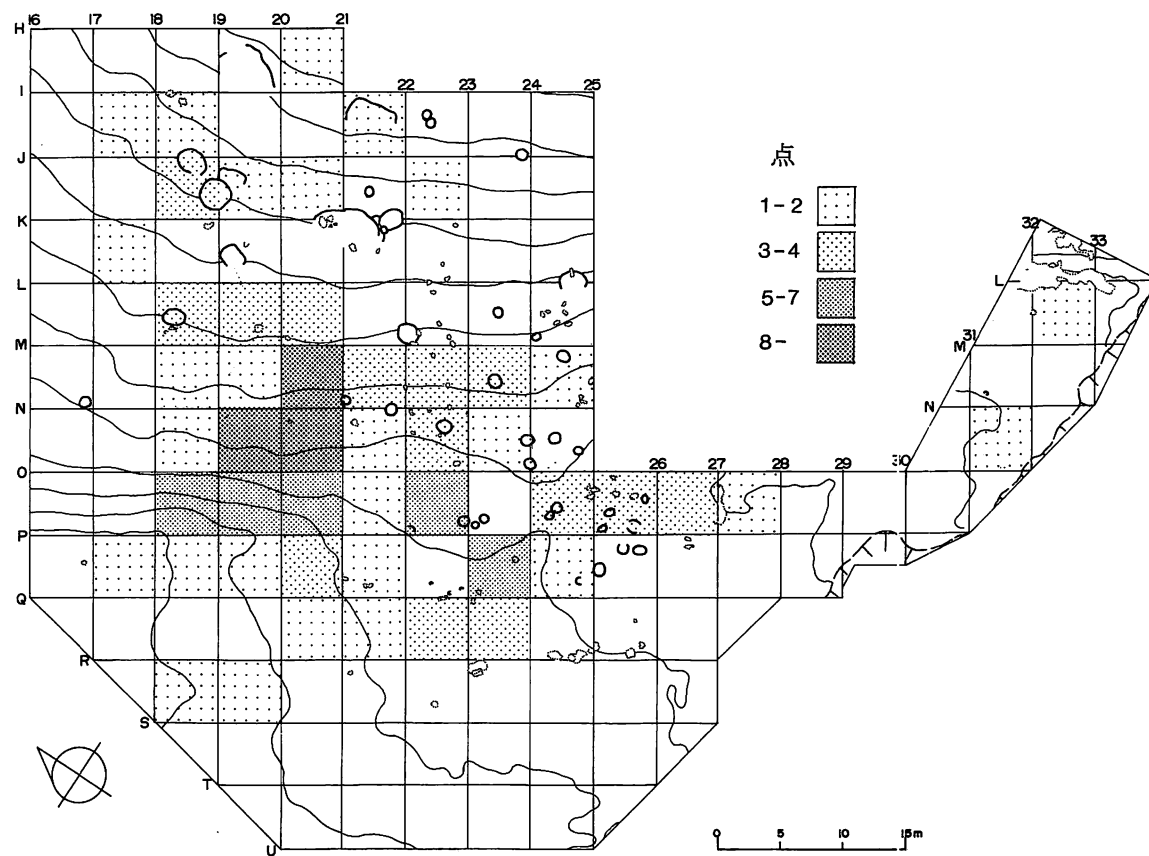
図VI-53 石器の分布



図VI-54 扁平打製石器の分布



図VI-55 北海道式石冠の分布



図VI-56 石皿の分布

## (2) 包含層出土の石器

## 石鏃 (図VI-58: 1~37)

42点出土している。いわゆる有茎鏃がほとんどである。黒曜石製の4点(28・32・35・37)を除き頁岩製か白色を呈する硅質頁岩製である。

## 茎の明瞭に見られないもの(1~7)

1は唯一の三角形鏃である。小型で薄身であり、辺はやや丸みを帯び、ハート形に近い。2から5は柳葉形または木葉形を呈するものである。6と7は棒状で厚みがある。7は基部が欠損している。

## 茎をもつもの(8~35)

主体を占めるもので、長径2 cmに満たない小形の物から、5 cmを超す大形のものまである。茎部は、10~13, 15, 25, など、一方のえぐりが大きくなる特徴を持つものがある。装着法と関連するものと思われる。

## その他(36・37)

36は剝片の一部を打ち欠き、一側縁に調整を加えたものだけのもので、断面は三角形を呈する。製作中に破損したものを利用したものかもしれない。37は基部の破片である。

## 石錐 (図VI-58: 38~40)

5点出土している。いずれも頁岩製。

38は両頭のものである。形態は石鏃に類似しているが、両端が尖っていて反りがあることから、錐に分類しておいた。39は先端に使用痕が認められる。40は下端に回転痕が見られる。石鏃の転用であろう。

## 槍先またはナイフ (図VI-58: 41・42)

2点のみの出土で、共に頁岩製である。

41は崖部直下の沢跡, Ko-g 直上の砂層から出土した。出土層位が明確な遺物のうち、最下層からの出土である。下部が欠損したのは、正面図左側からの強い打撃によるものである。刃部には再加工と思われる細かい連続した剝離が施されている。42も下部が欠損している。刃部右側縁が使用と再加工によってやや抉れている。この状況からみて、破損箇所は柄部との境であり、横からの力(ねじれ?)によって破損したものと考えられる。

## つまみ付きナイフ (図VI-59: 43~58)

21点出土している。頁岩または硅質頁岩製で、ほとんどが完形で出土している。

## 両面加工のもの(43)

1点のみの出土である。粗い加工が両面に施されている。

## 片面加工のもの(44~58)

44は片面全体に加工がなされている。裏面右側縁には、剝離を行うための打面が作り出されている。その他は、縦長剝片の周縁のみを打ち欠いている。57と58は特に不定形な剝片が利用されており、57には礫の表皮が残っている。正面右側に刃部を作出するものが多いが、54と58は左側縁を刃部としている。



#### ナイフおよびスクレイパー (図VI-60~62: 59~97)

剥片石器では最も数が多く、107点にのぼる。頁岩または珪質頁岩製である。薄身のものをナイフ、厚手で急角度の刃部をもつものをスクレイパーとして区分しておいたが、その差が明瞭でないものが多い。なお59を除き、主剥離面(裏面)のバルブを上にして実測しておいた。

#### ナイフ (59~61, 68~79)

59から61は小形のナイフである。1側縁に刃部を持つ。

68から79は縦長の剥片を利用したナイフで、周縁を打ち欠いて一側縁を刃部として使用している。形態や打ち欠き方法がつまみ付きナイフに類似したものが多い。68の裏面の打ち欠きは、使用痕が見られないことから刃部を作り出すためでなく、表面を剥離する際の打撃面として利用したものと考えられる。刃部は左側縁にある。69は左右対称形であるが、右側縁の使用痕がはっきりしている。中央の軸線にあたる上端と下端中央に抉りがある。78には礫表皮が残る。79は主剥離面に刃部を作っている。

#### 石べら (62~64)

62から64はいわゆる「石べら」である。部厚い造りで、62と63は表面に自然面を残している。いずれも下端に刃部を持つ。

#### スクレイパー (65~67, 80~97)

石器の原形となる剥片の形状から、縦長剥片の一側縁を利用するもの(65~67, 80~86)と、横長剥片の下端を利用するもの(87~97)とにわけて図示した。バルブの部分若干薄くする調整は行いが、刃部の部分に剥離が集中する。いずれも刃部は一辺に限られる。曲刃とみなせる83・87・88を除いて、6~7cmのほぼまっすぐな刃を持つものがほとんどである。刃部の形態からみて、剥片の利用の仕方と関係なく、同じ使用法がとられたものと考えられる。

なお、86は大きな剥片の一部を使用したもの、88・92・96は主剥離面に刃部を作り出したものである。

#### 石斧 (図VI-63: 98~104)

24点出土しているが、ほとんどが破片で全体形がわかるものは少ない。石材は緑色泥岩が多く、砂岩質のものや黒色片岩も使われている。原石を打ち欠いてから研磨による整形をしており、擦り切り痕や敲打痕は見られない。100・102・104は同地点から出土した。

98と99は大形で部厚く、重量は500gを越す。100・101・102・104は最も形態を良く残すもので、いずれも薄手で両刃となる。100は黒色片岩製。103は小形の破片で、推定重量は20g程度である。

#### たたき石 (図VI-64: 105~115)

43点出土している。円礫を使用しているため破損が少なく、ほとんどが完形品である。安山岩、砂岩、泥岩、閃緑岩、珪岩など各種の石材が使用されている。素材の形を変更することなく使用しており、いずれも手にもちやすい大きさの礫が選ばれている。礫の形と、使用個所によって、次のように分けられる。

1) 球形またはそれに近い形の礫の一部に使用痕(105)。

## 2) 長円球形の礫の長軸両端に使用痕(106~108)。

砂岩、珪岩などの転礫が使われている。遺跡から離れた地域から持ち込まれた石材でかなり使い込まれたものが多い。安山岩は少ない。

## 3) 細長い礫の両端に使用痕(112)。

安山岩が利用されており、形態は不揃いなものが多い。

## 4) 扁平な円形礫の周縁と腹背面に使用痕(109・110)。

定形的なもので、閃緑岩が使われている。

## 5) 楕円形礫の周縁と腹背面に使用痕(111・113・114・115)。

凹み石と言われるもの。安山岩が使用され不定形なものもある。

このほか、図示しなかったが、細長い礫の腹背面に使用痕をもつ例がある。

## すり石 (図VI-65~71: 116~187)

石器では最も数が多く、383点出土している。手に持てる程度の礫の一部にすり面を残すもので、すり面の幅は広狭様々である。いわゆる「扁平打製石器」と「北海道式石冠」を含めている。

## 扁平打製石器 (116~163)

254点と石器では最も多く出土している。安山岩礫素材がほとんどであるが、わずかに礫を打ち欠いた剝片を素材としたもの(116, 124, 156)がある。

## 1) 周縁を打ち欠いて半月形に整形したもの。幅の狭い刃部を持つ。(116~132)

形態の整っているものを選んだ。半月形で両側面に抉りを持つものがある(130~132)。

## 2) 周縁を打ち欠いて整形したもの。側面形が不揃いで、やや広めの刃部を持つ(133~144)。

133~138は、北海道式石冠と似た側面形を呈するが、刃部幅がやや狭い。

## 3) 礫をそのままの形で使用したもの。打ち欠きは刃部に集中する(145~163)。

145~148・154のように、ほとんど刃部を打ち欠かないにもかかわらず、側面に打撃を加えていることが特色としてあげられる。

包含層と遺構から出土した扁平打製石器のうち、完形品170点について計測値をグラフ化した(図VI-57)。横幅は15cmを平均値としてほぼ10~20cmの幅に、縦長は9cmを平均値にして6~13cmに納る。また重量は、450~550gを中心にしてほぼ標準の度数分布を示す。一定の大きさの礫が意図的に集められた結果であろう。

## 北海道式石冠 (164~175)

95点出土している。安山岩を使用しているが、鳴川の河原でみられるものより緑がかっており、扁平打製石器とは多少石材を異にしている。

175を除き、いずれも丁寧に敲打による整形を行っている。175は礫を半割後、打ち欠きによる整形をしているが、まだ敲打による調整が行われておらず、未製品とみなした。

## その他のすり石 (176~187)

176は、扁平な閃緑岩の礫の一辺を使用したものである。打ち欠きによる整形後、すり面が形成されている。すり幅は広めである。

177から181は両端の抉りが付き、すり幅は広めである。いずれも閃緑岩が使われている。

182・183は、断面三角形の礫の一稜を使用したもの、184から187は、長円礫の一侧縁または二側縁を使用しているもの。いずれも安山岩製。

石皿・台石 （図VI-72・73：188～190）

破片を含め、151点出土している。いずれも、河原にある大形の扁平礫を利用している。188と190は、凹みとなるはっきりした使用痕を持つもので、深い穴になっている部分がある。ともに凹みの一端を打ち欠いているのは、おそらく流し口にしたものであろう。図示した様なはっきりした使用痕を持つものはほとんどなく、平坦面の一部にすり跡を持つだけで、凹みとなっていないものが多い。このほか、石皿としたものと同規模の大形礫が、斜面部の各所で見うられた。使用痕がはっきりしないものの、意図的に持ち上げられたものであり、台石などとして使用されたものも含まれている。

石核 （図VI-73：193～197）

11点出土した。いずれも頁岩製である。

石棒 （図VI-73：191～192）

完成品は1点のみのである。192は斜面部のⅢ層上面からの出土で、遺構とは関連していない。側面は良く研磨され、両端部には打ち欠きと敲打による整形が見られる。やや緑色を帯びた、北海道式石冠と同様の石材が使われている。

191は、棒状の安山岩の4稜を打ち欠いたものである。石棒の未製品としておいた。

石製品 （図VI-74：209）

円礫の一剥片を利用している。熊の掌状の突起は、研磨によって作りだされているが、表面の一部が剥落している。穴は自然の状態であっていたものに、後から加工を加えて整形していると思われる。

土偶 （図VI-74：198～199）

198は、斜面部のⅢ層から出土した完形の土偶である。棒状のものを芯にして、粘土を巻きつけるように製作しているため、径5mmの穴が通っている。足先が前に大きく伸び出した形が特徴的である。胸と腹部の膨らみが表現されている。このままでは立てておくことはできない。

199は板状土偶の胴部と思われる。

土製品 （図VI-74：200～205）

201は現存長14cmほどのへら形をした土製品で、文様はない。5片が接合した。200は別個体の一部と思われる。

202は平玉で、片面に刺突による文様が付けられる。

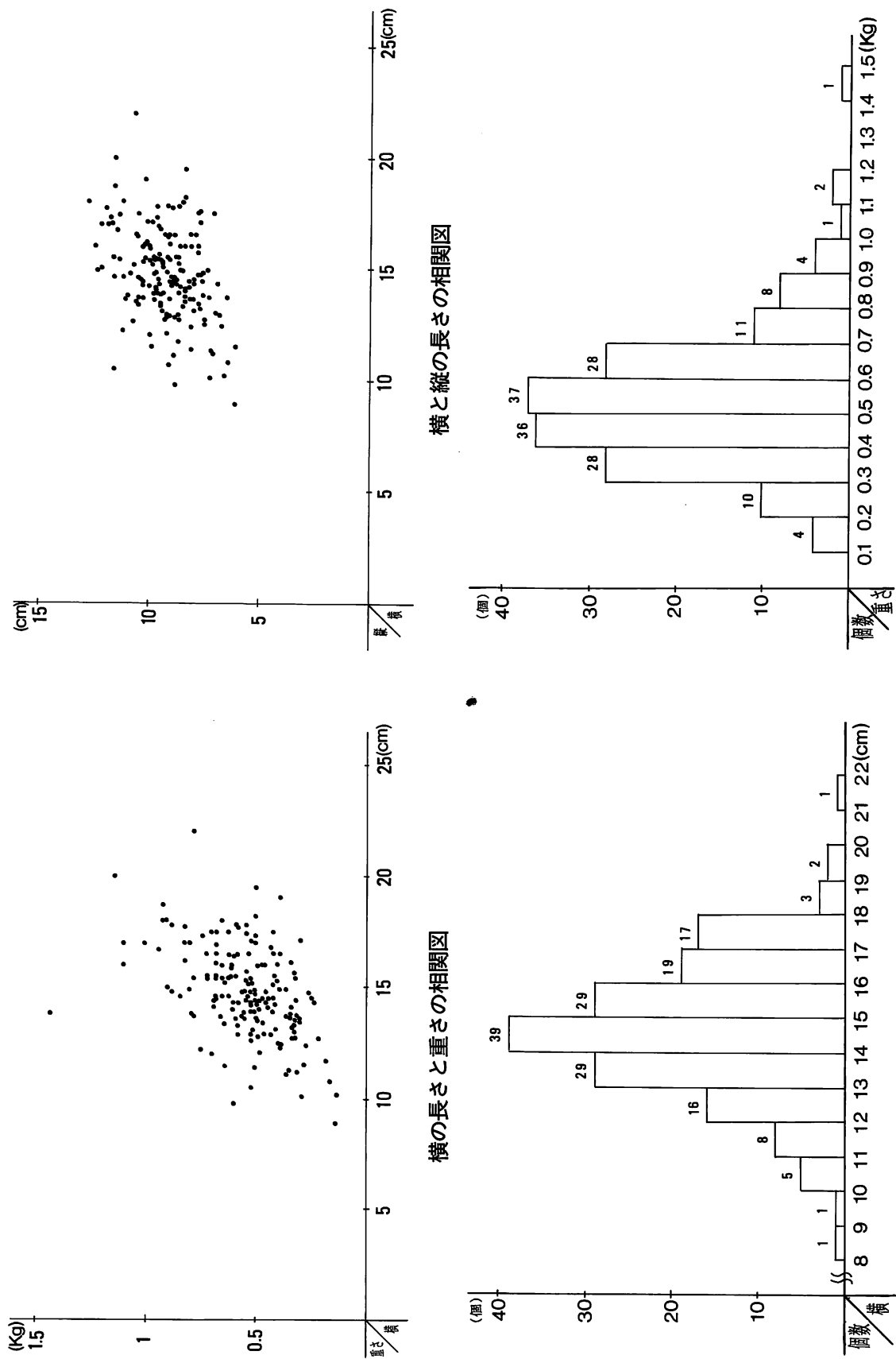
203・204は中央に穴を持つ垂飾品である。いずれも一面のみに文様がある。耳栓のように周縁が平にはなっていない。

205は縦に穴があいている。206は焼成粘土塊、207・208は土製円板である。（越田賢一郎）

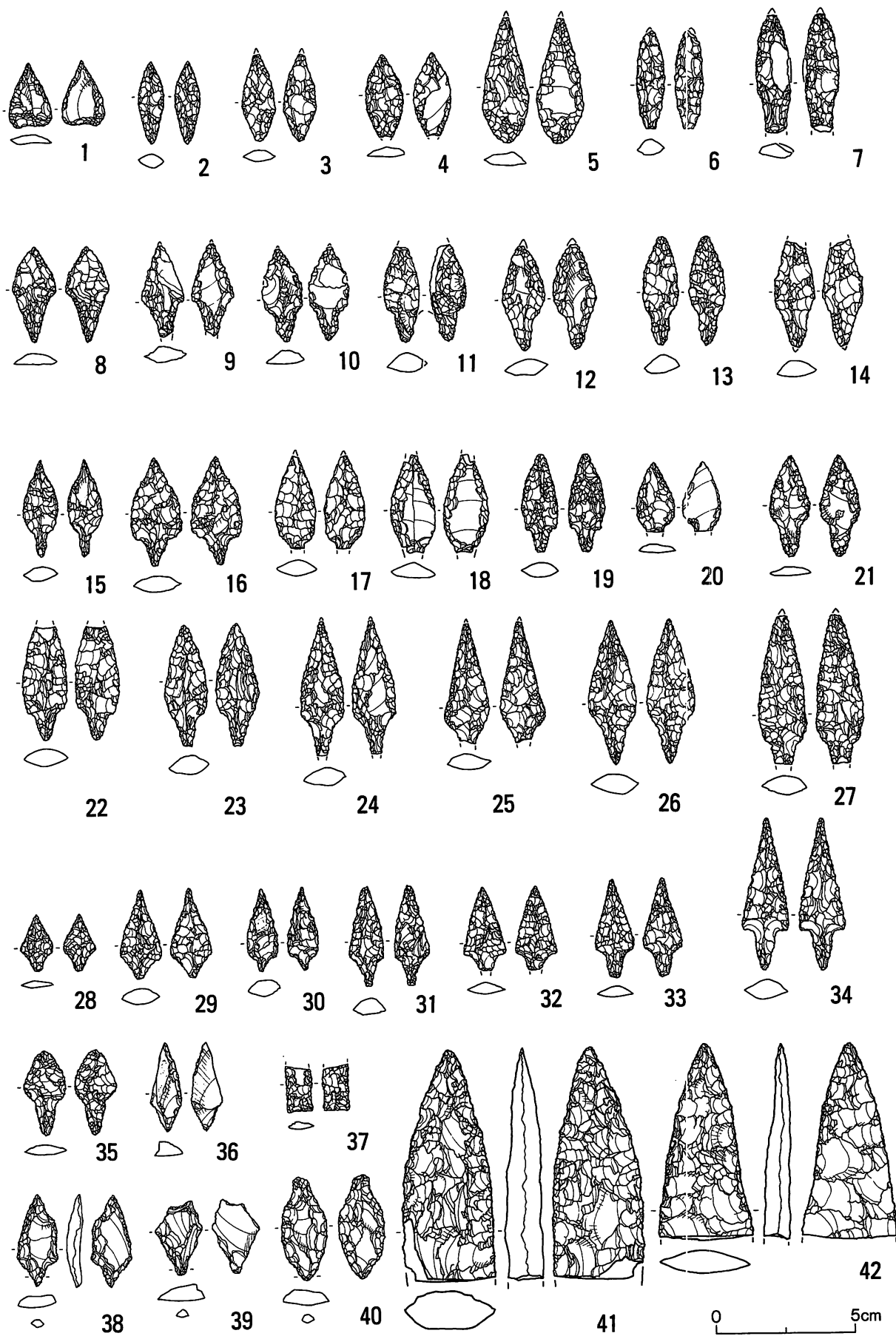
註

1. 〔北海道埋蔵文化センター編 1992 『函館市中野A遺跡』 同センター

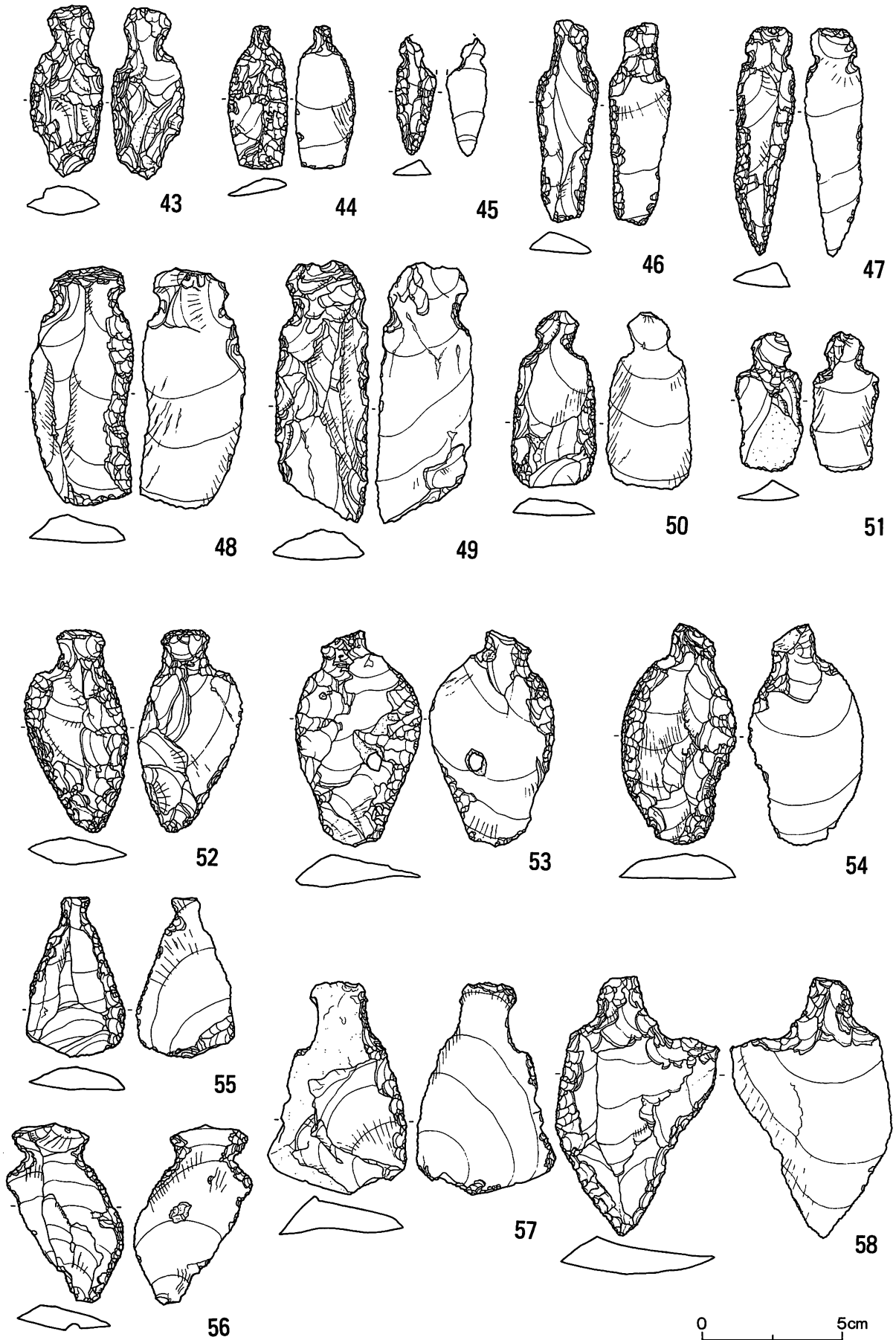
2. 0.4g未満の剥片は経験的に言って通常の発掘作業で見落されることが多い（〔北海道埋蔵文化センター編 1992 『清水町上清水4遺跡・共栄2遺跡・共栄3遺跡』 同センター、表IV-2・6〕）。



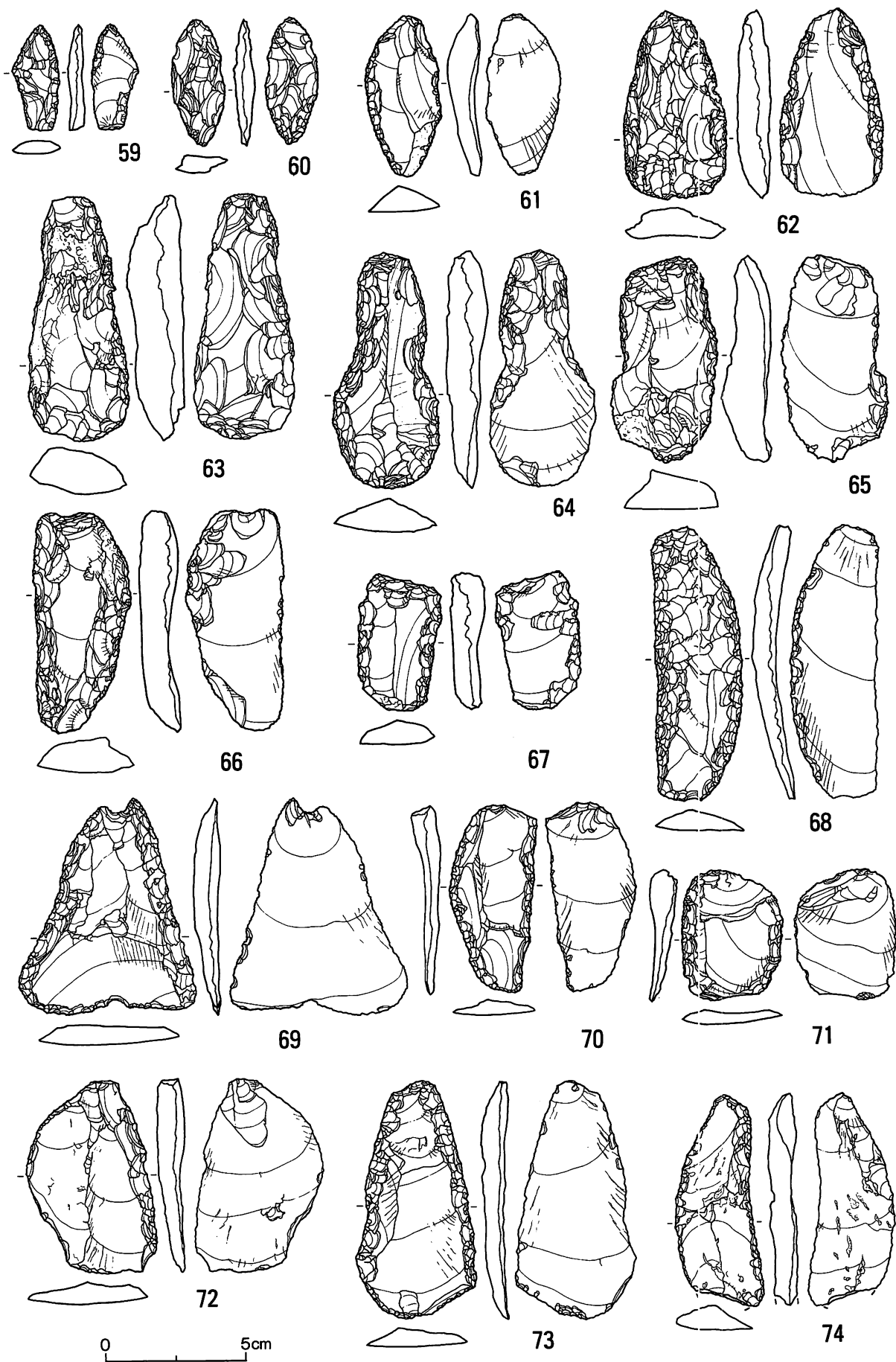
図VI-57 扁平打製石器の属性グラフ



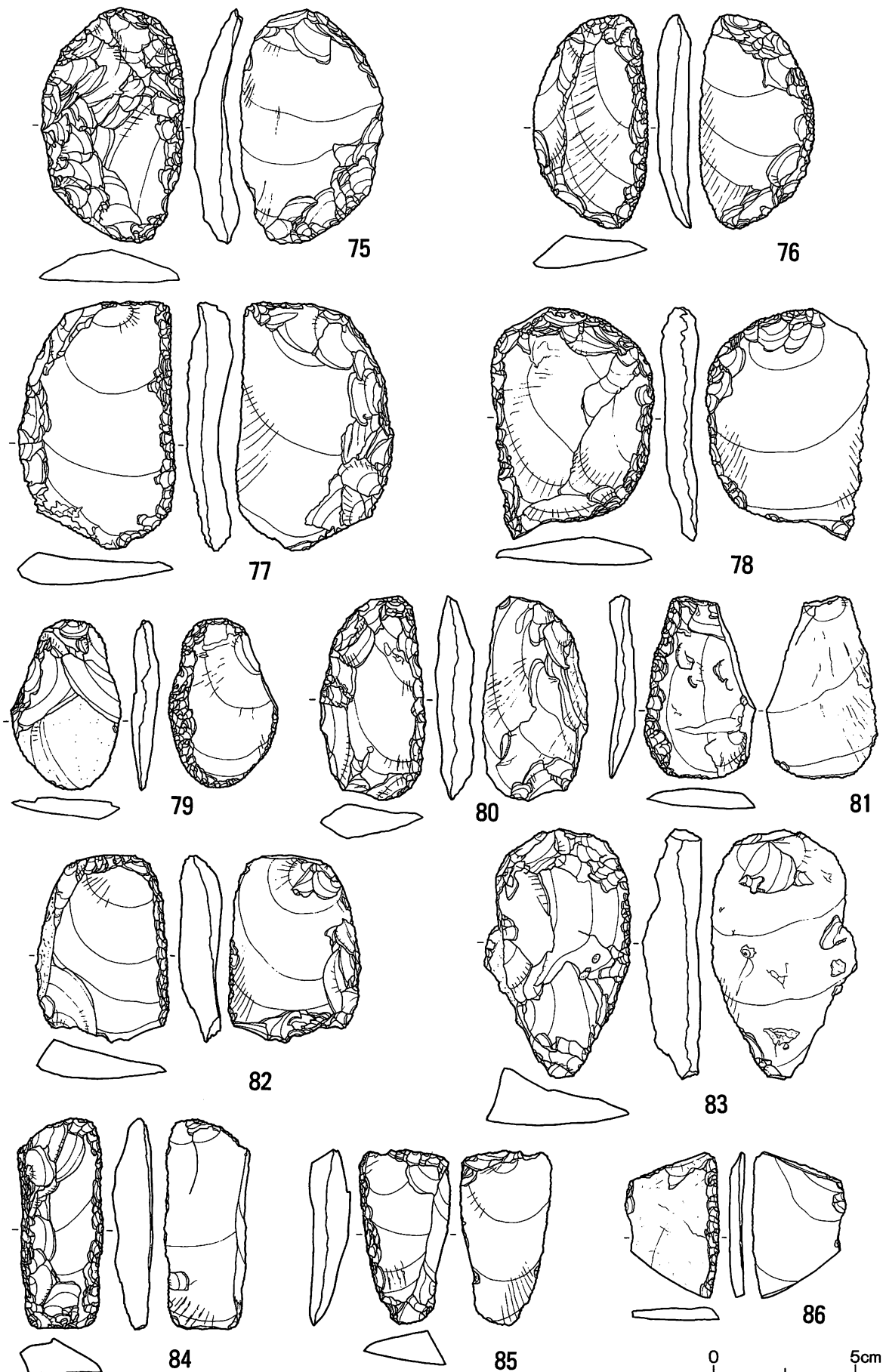
図VI-58 包含層出土の石器(1)



図VI-59 包含層出土の石器(2)

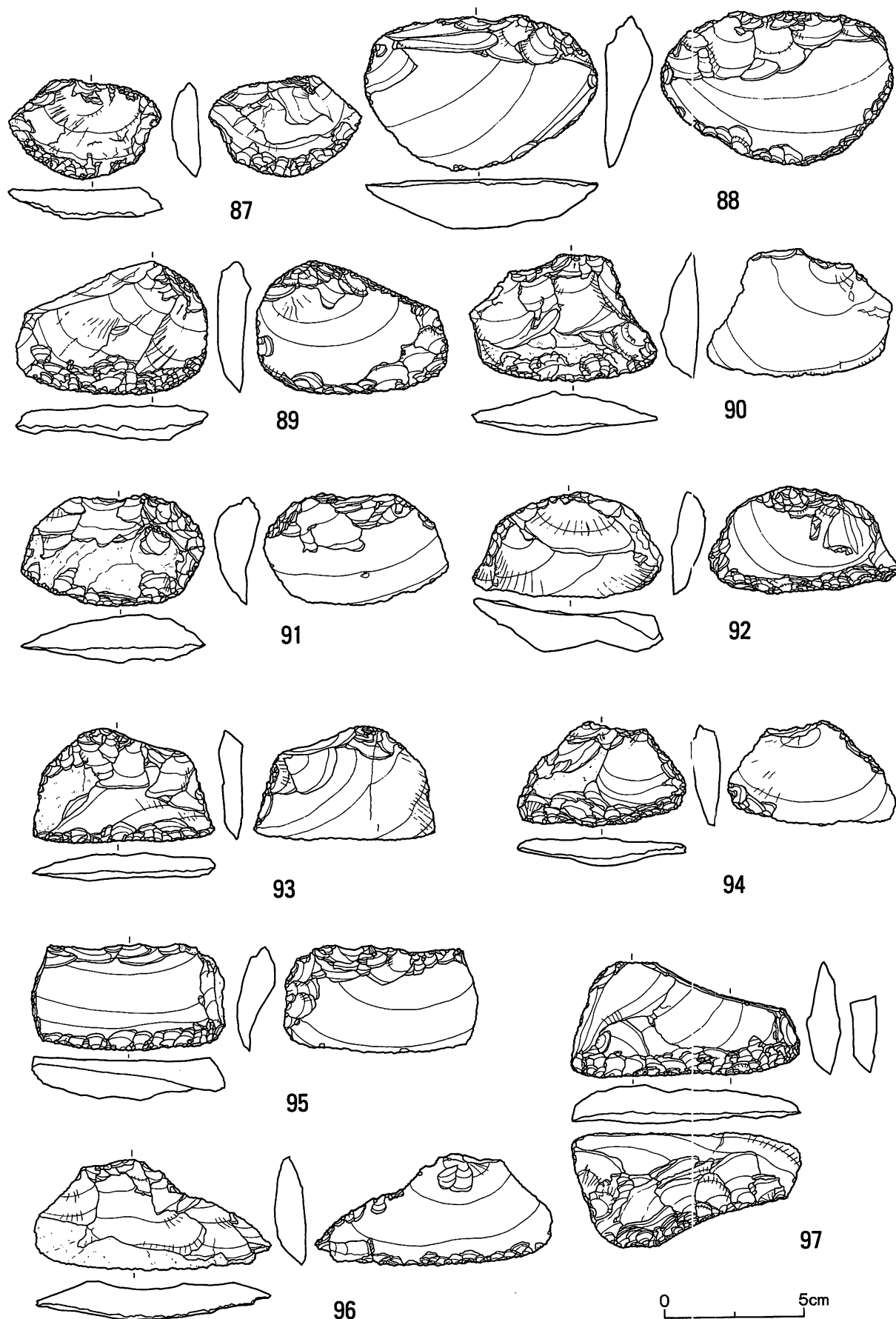


図VI-60 包含層出土の石器(3)

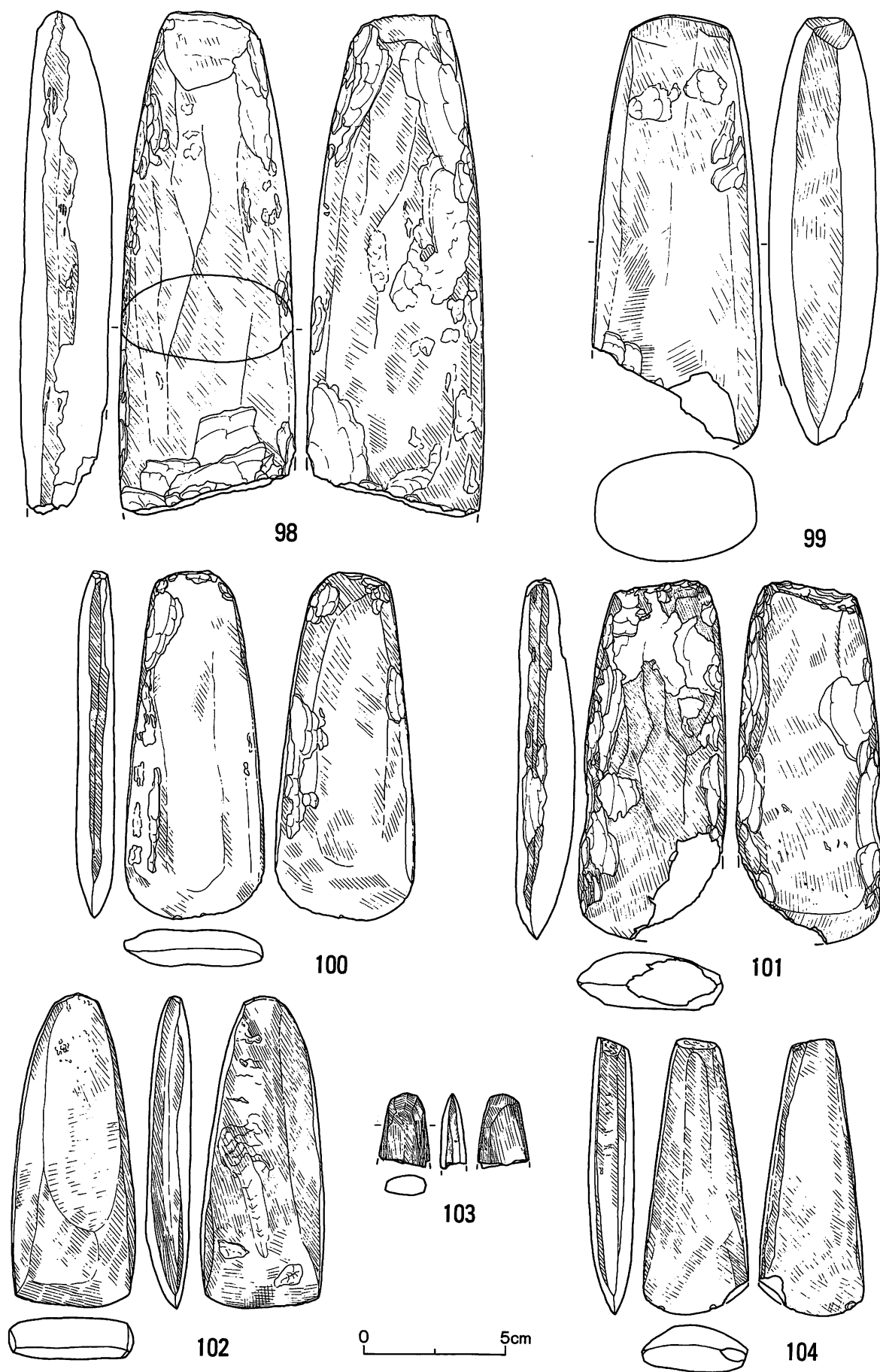


図VI-61 包含層出土の石器(4)

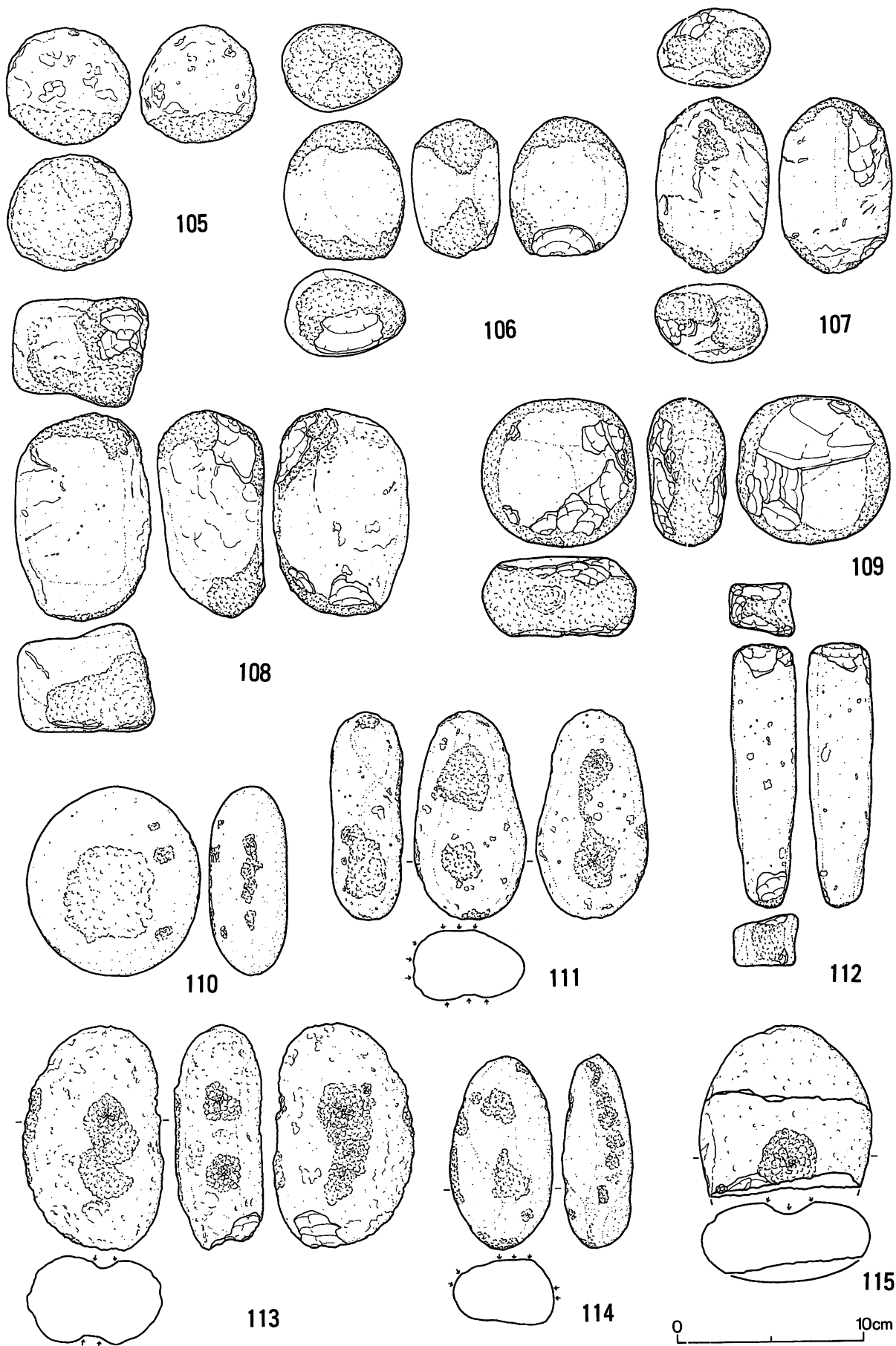




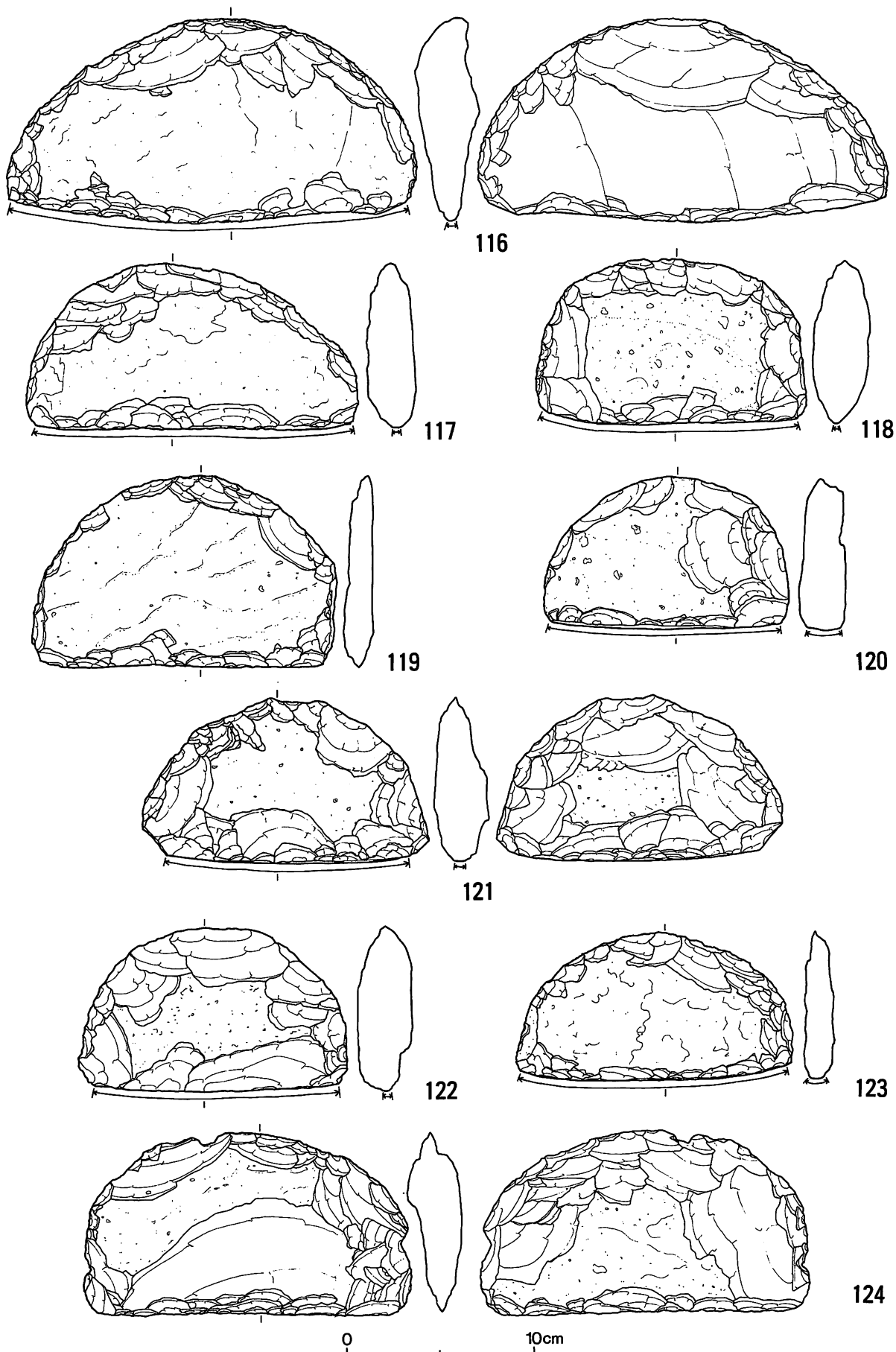
図VI-62 包含層出土の石器(5)



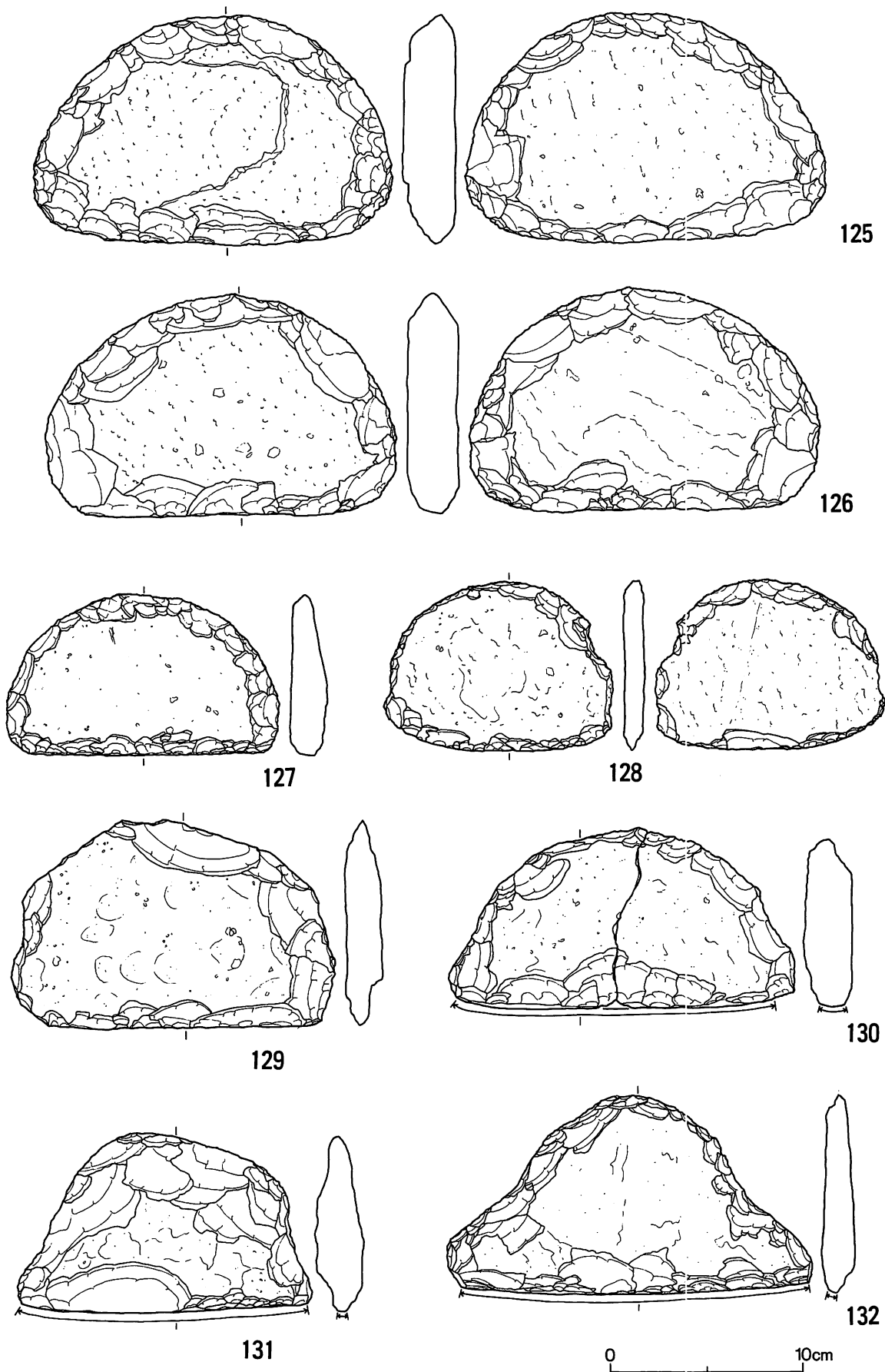
図VI-63 包含層出土の石器(6)



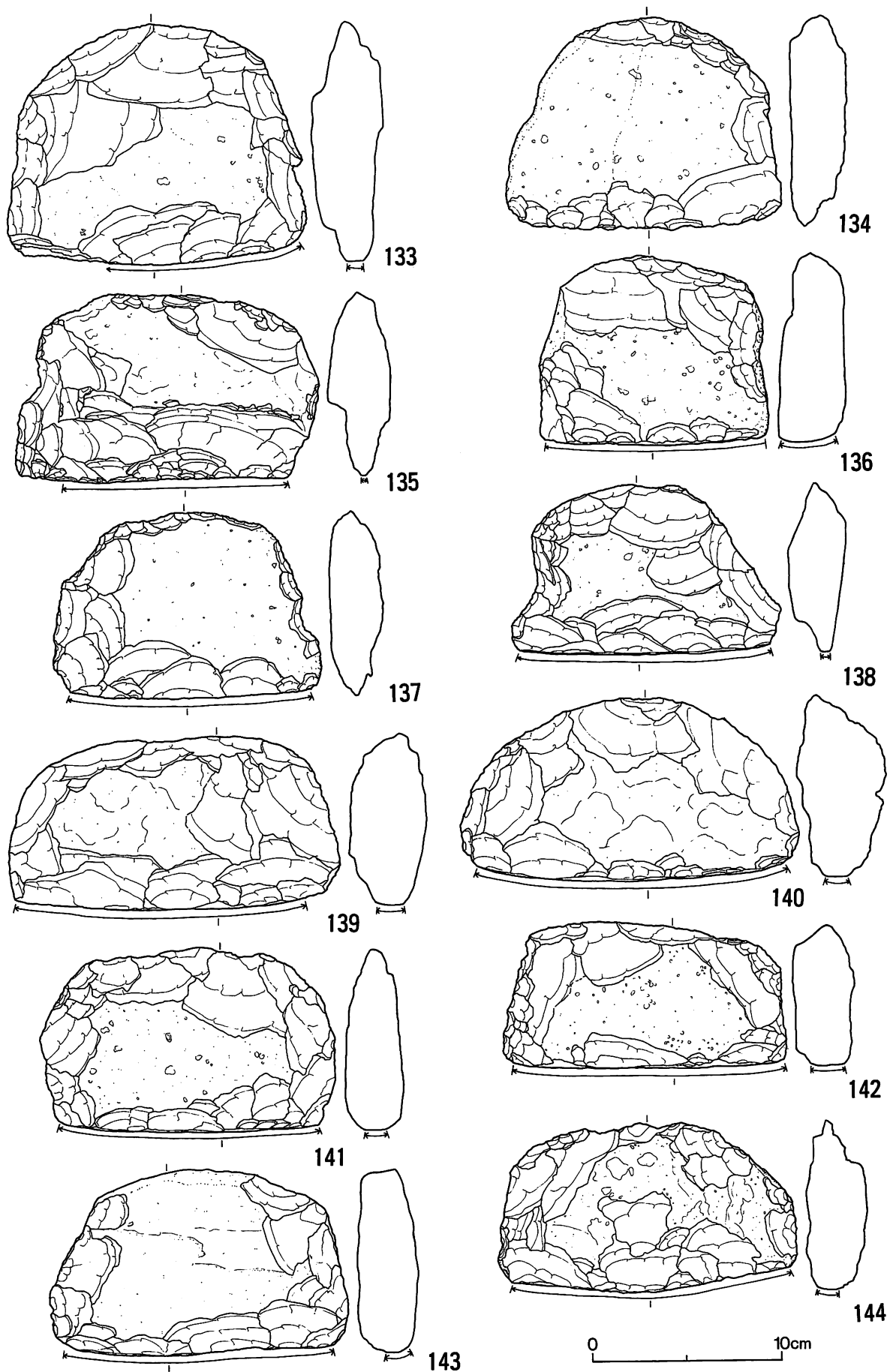
図VI-64 包含層出土の石器(7)



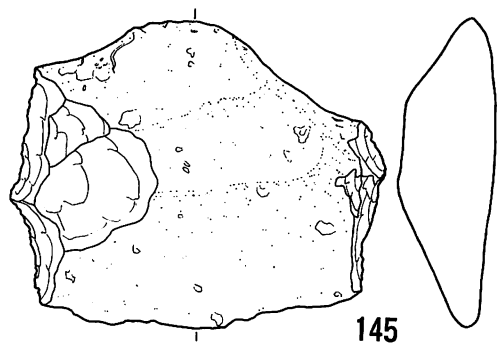
図VI-65 包含層出土の石器(8)



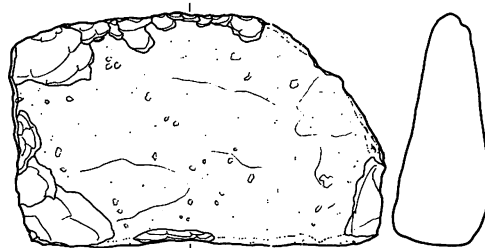
図VI-66 包含層出土の石器(9)



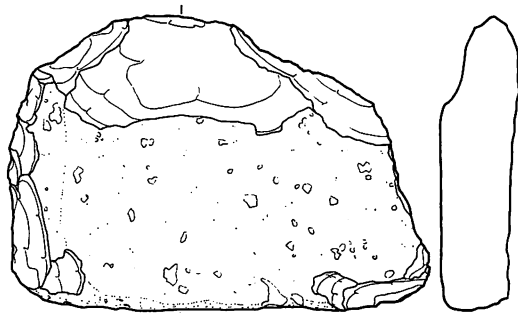
図VI-67 包含層出土の石器(10)



145



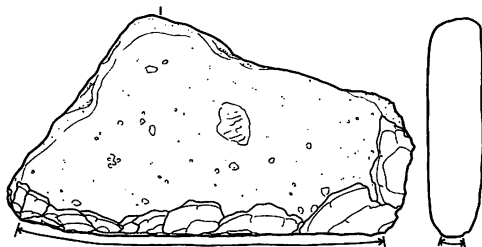
146



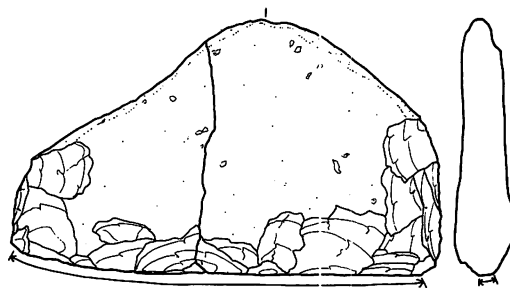
147



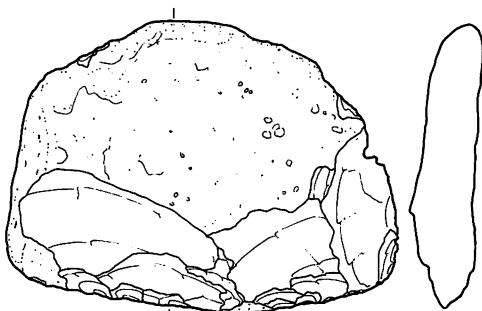
148



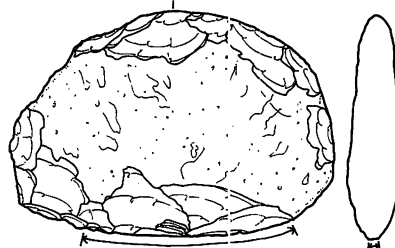
149



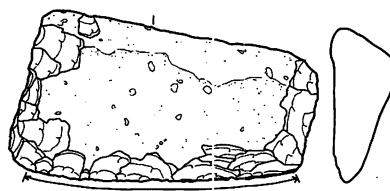
150



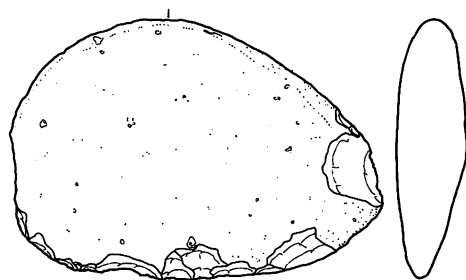
151



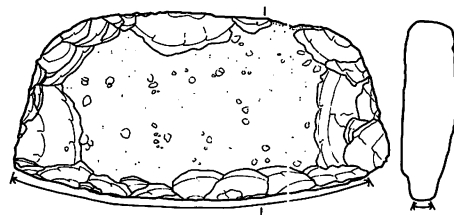
152



153



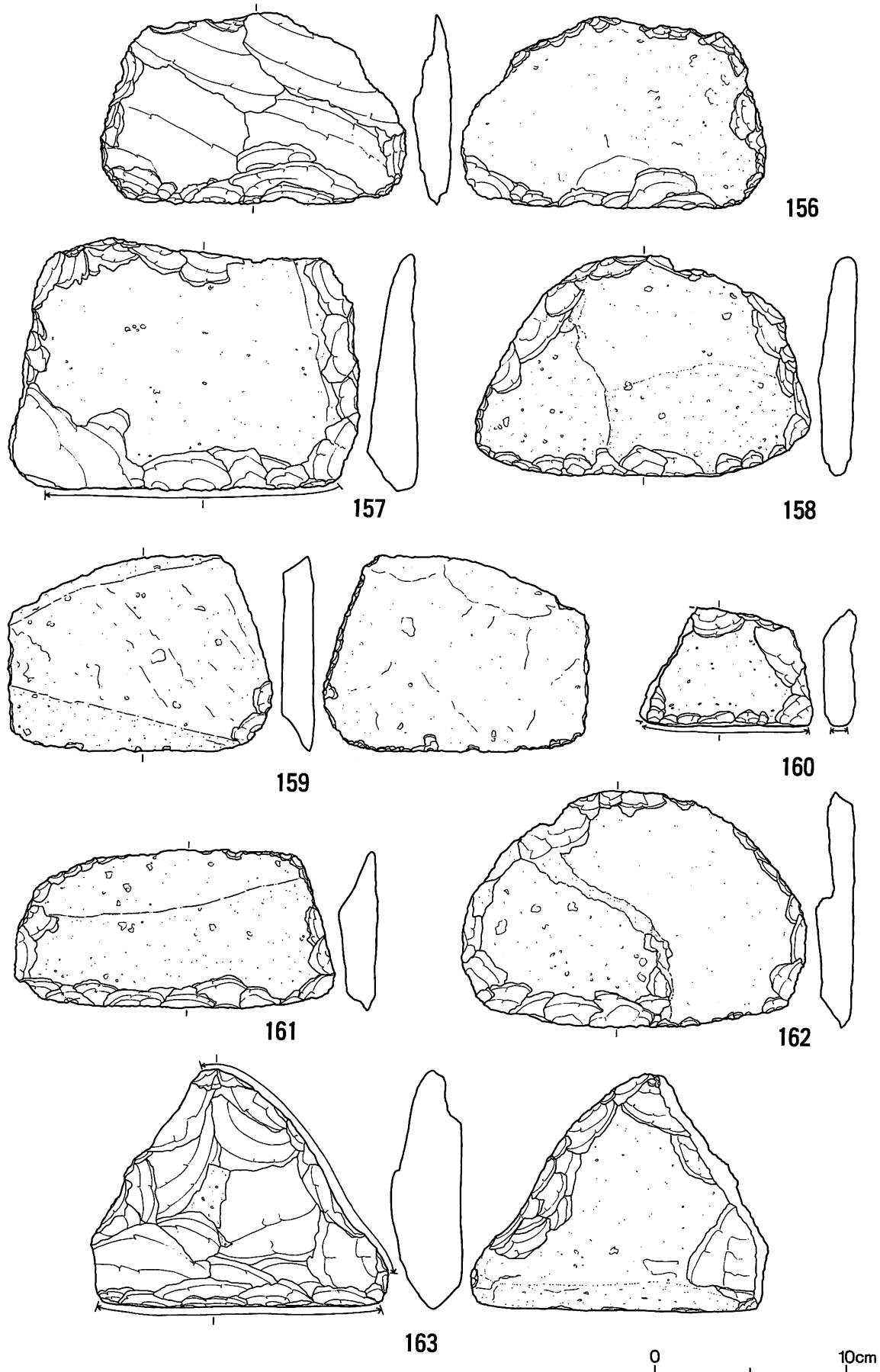
154



155

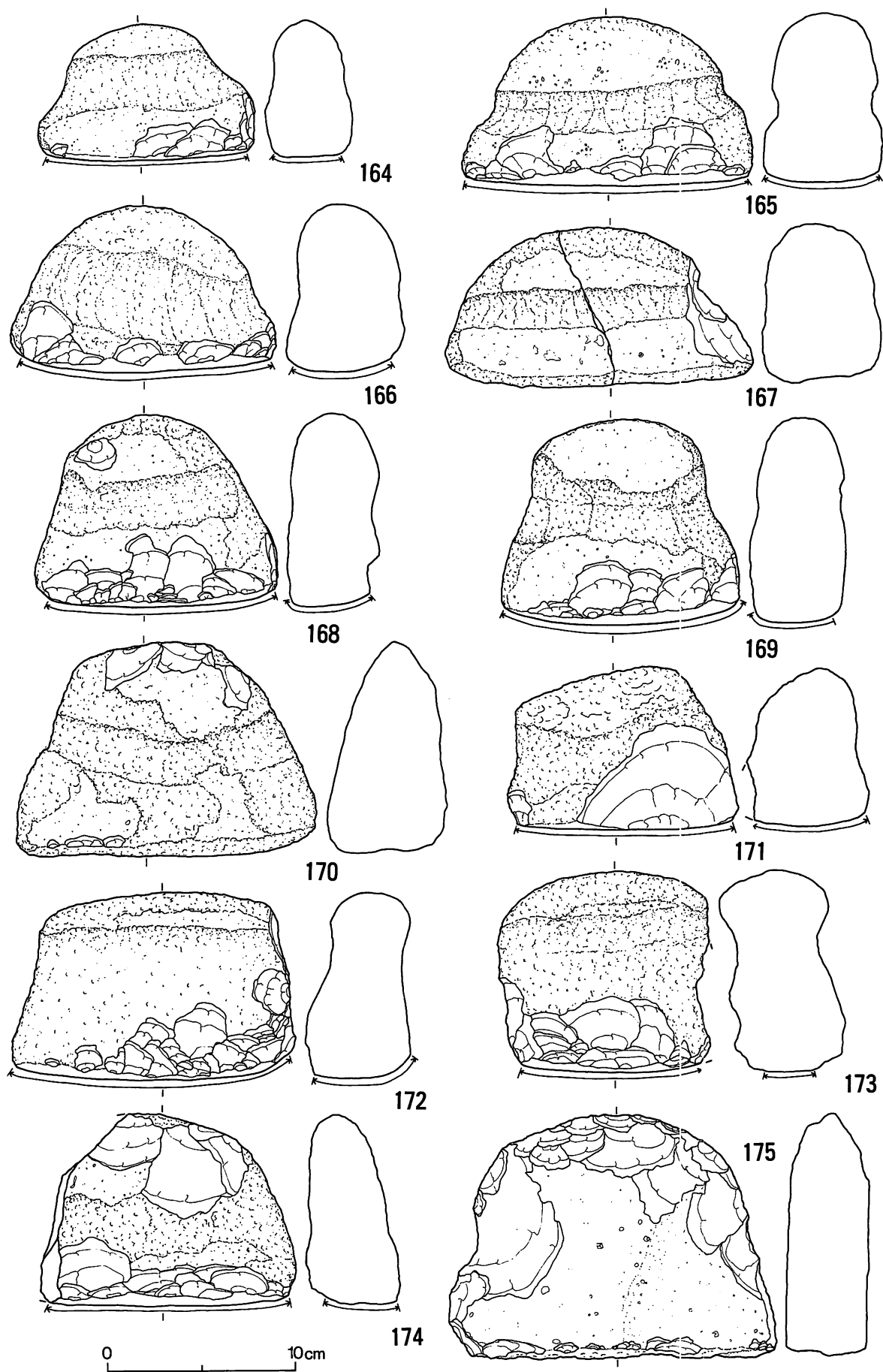
0 10cm

図VI-68 包含層出土の石器(11)

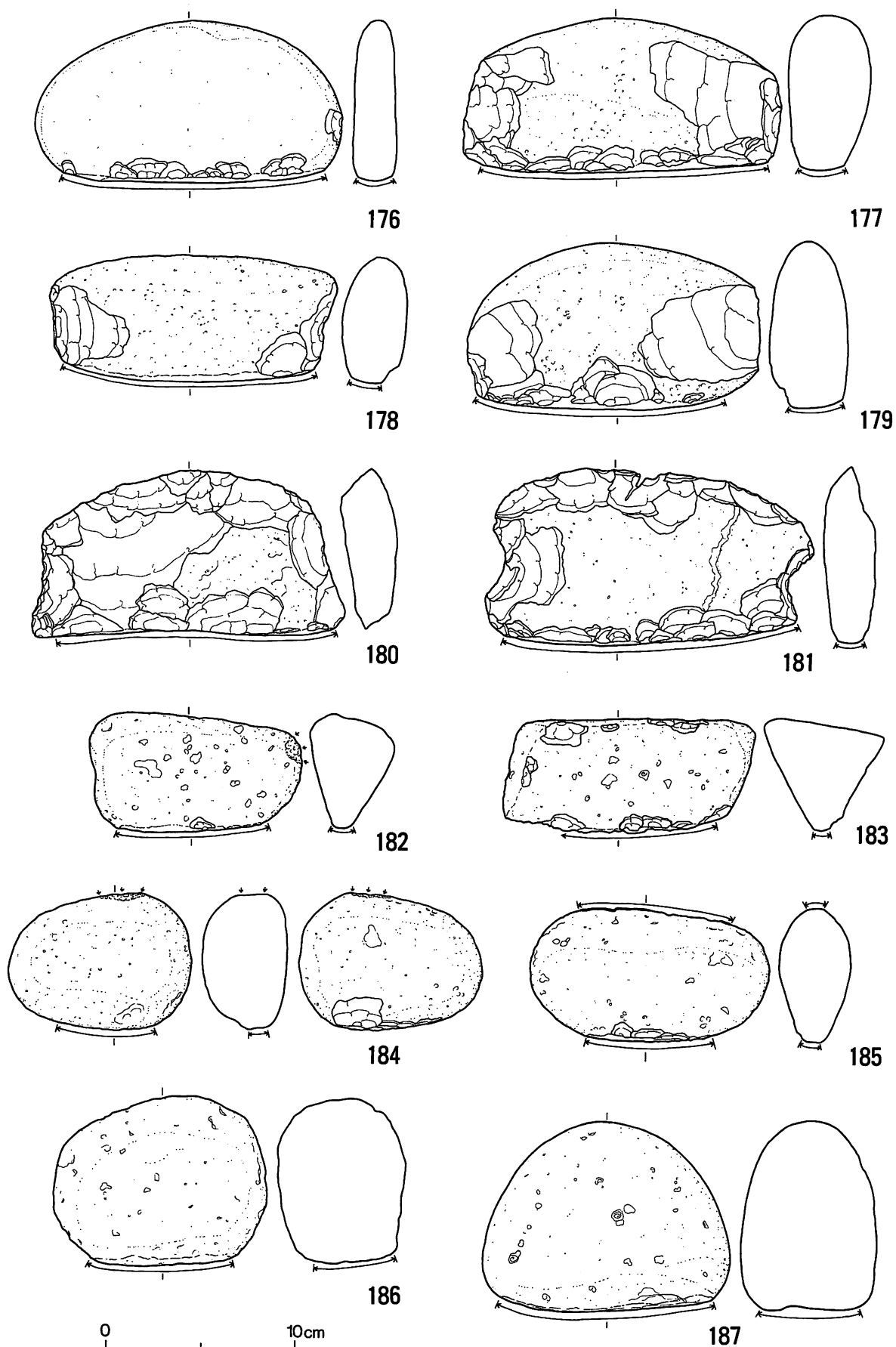


図VI-69 包含層出土の石器(12)

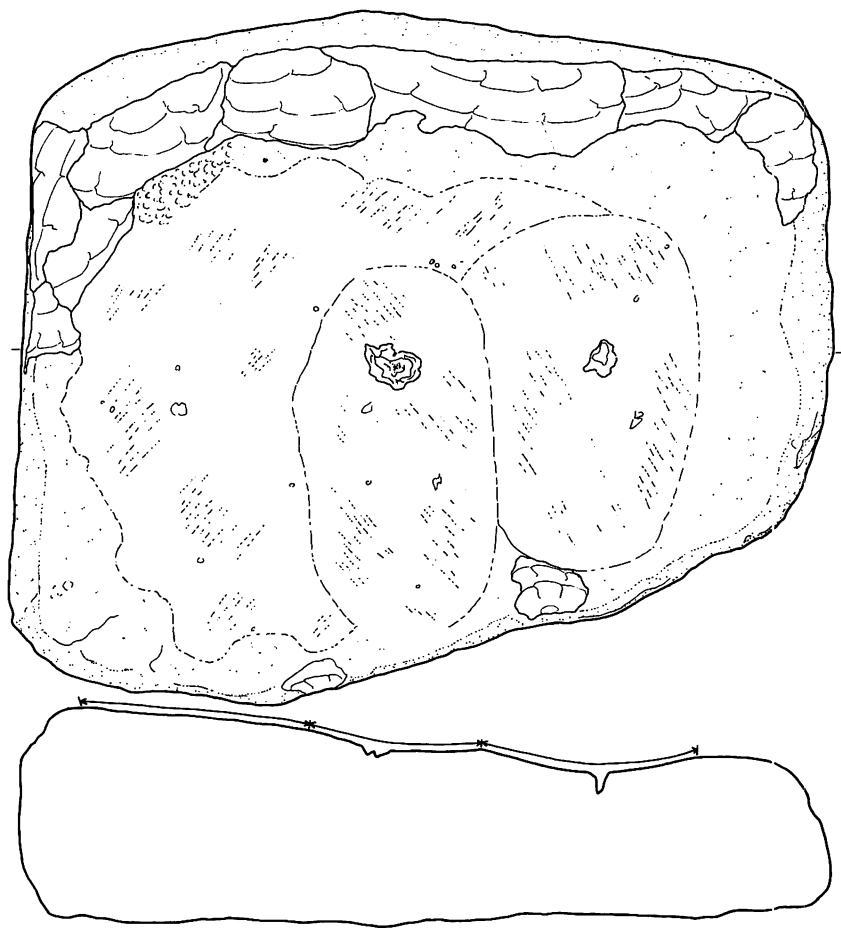




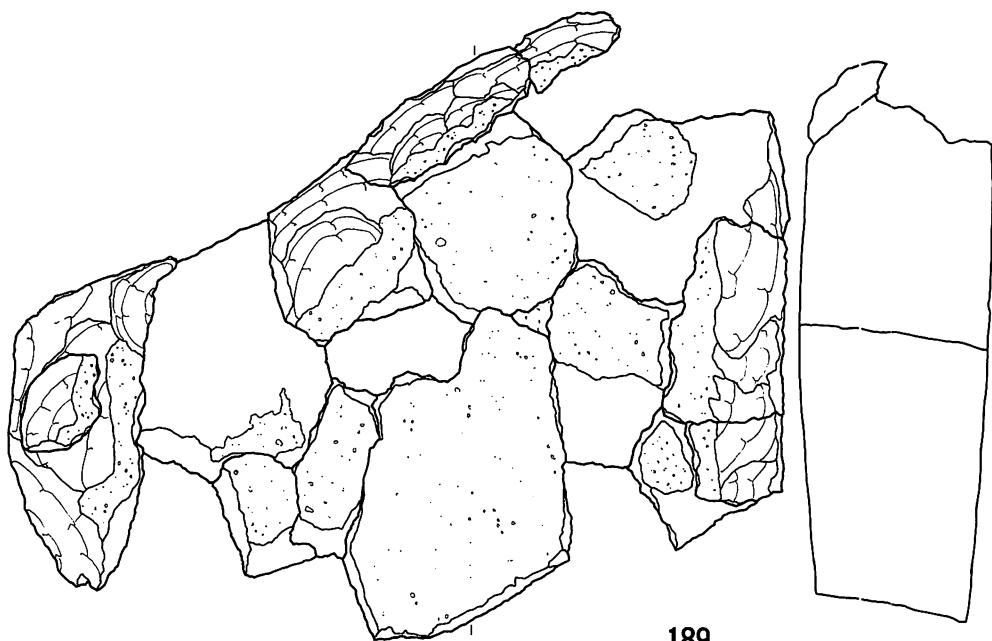
図VI-70 包含層出土の石器(13)



図VI-71 包含層出土の石器(14)



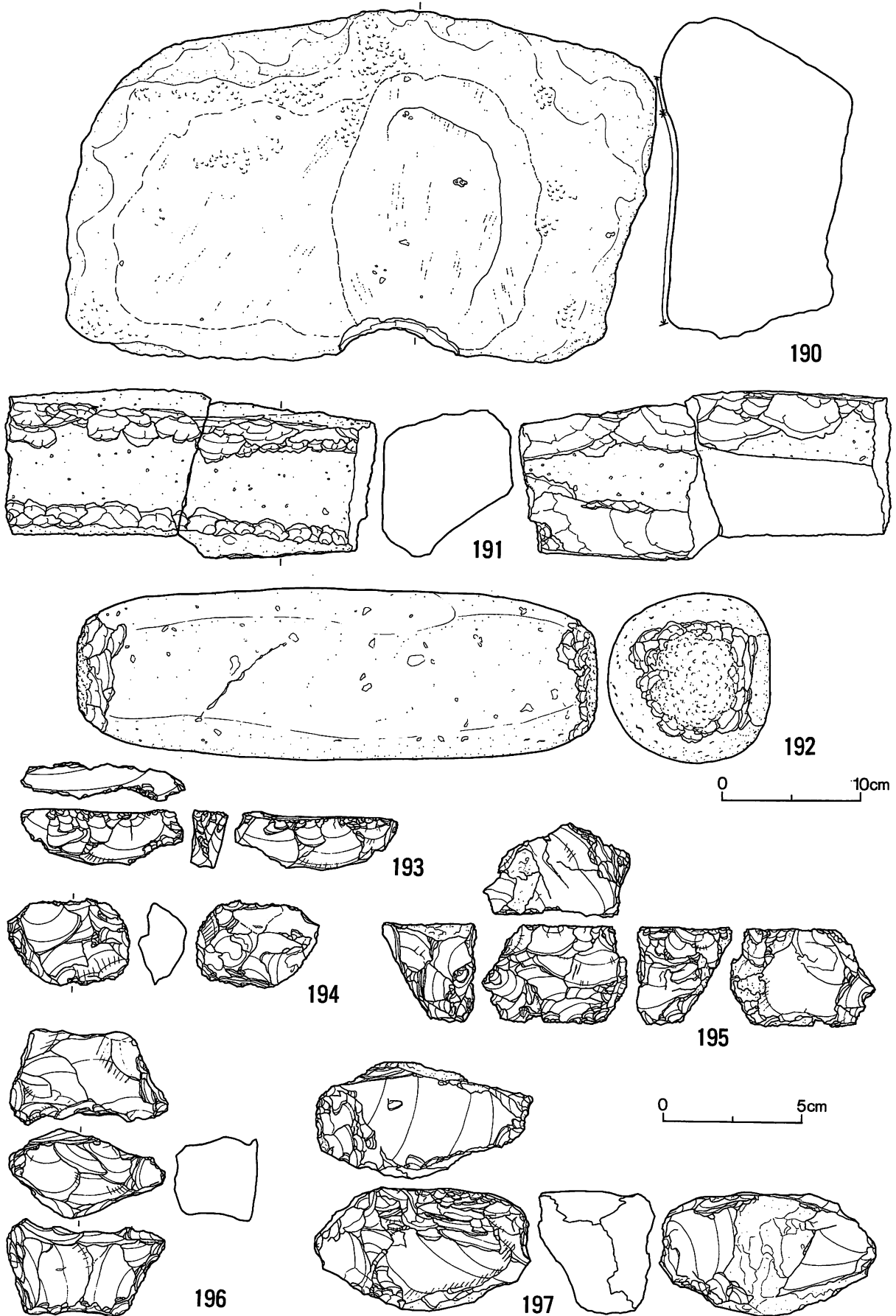
188



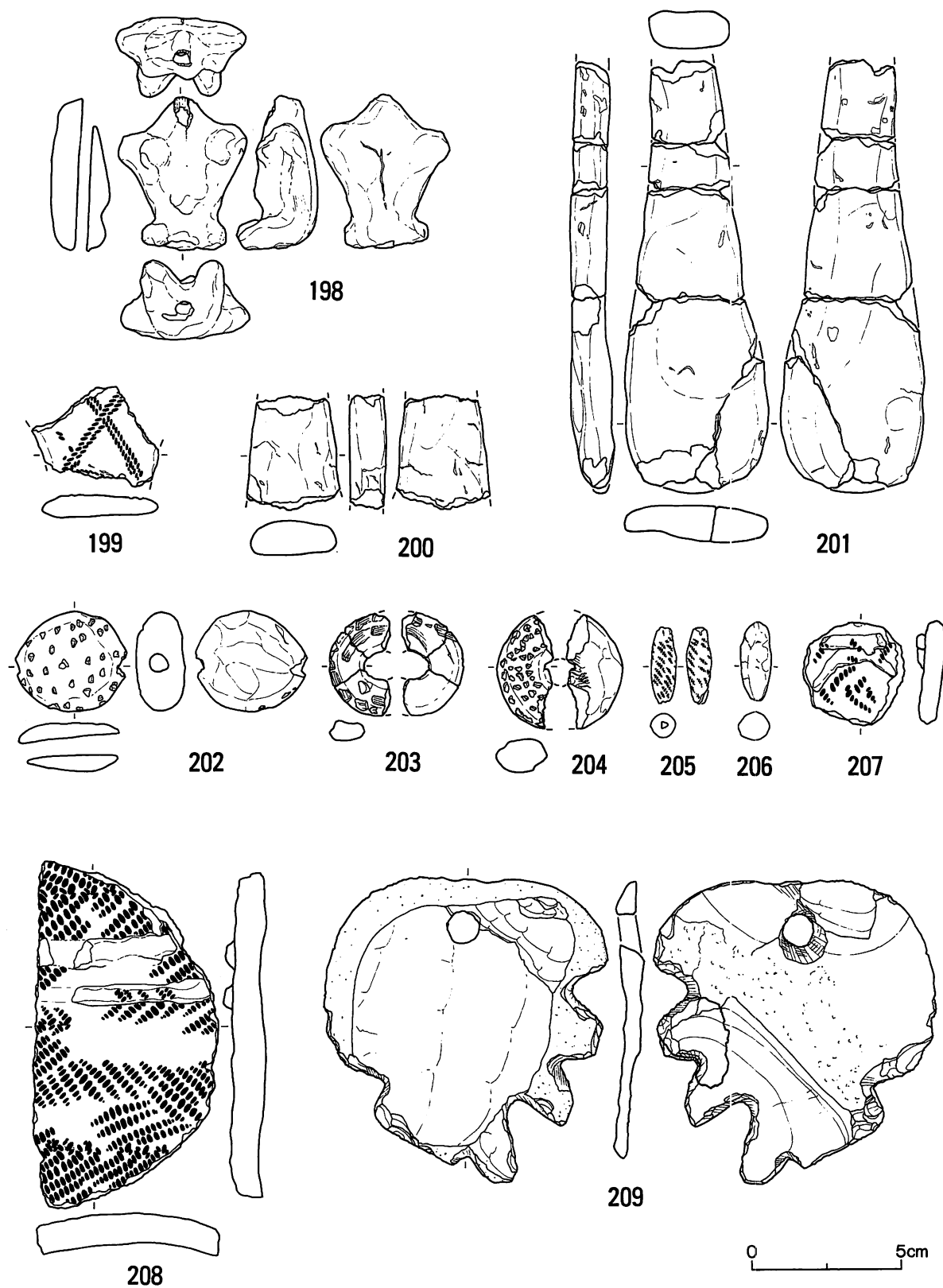
189

0 10cm

図VI-72 包含層出土の石器(15)



図VI-73 包含層出土の石器・石製品(16)



図VI-74 包含層出土の石器・石製品(17)

表VI-5 包含層出土の掲載石器

挿 図	番号	発掘区	遺物 番号	層位	名 称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	石 質	接合関係
図VI-58	1	N-23	14	III	石鏃	2.3×1.5×0.4	1.1	頁岩	
"	2	L-21	6	III	石鏃	2.9×0.9×0.5	1.2	頁岩	
"	3	L-18	3	III	石鏃	(3.0)×1.2×0.4	(0.8)	頁岩	
"	4	O-24	46	III b2	石鏃	(3.0)×1.3×0.4	(1.6)	頁岩	
"	5	N-20	33	III	石鏃	(4.5)×1.7×0.4	(2.6)	頁岩	
"	6	L-24	4	III	石鏃	(3.5)×1.0×0.6	(2.2)	頁岩	
"	7	P-21	4	III2	石鏃	(4.2)×1.3×0.6	(2.1)	硅質頁岩	
"	8	N-22	27	III	石鏃	3.4×1.7×0.5	1.2	硅質頁岩	
"	9	L-20	21	III	石鏃	(3.2)×1.5×0.6	(1.9)	頁岩	
"	10	M-17	4	I	石鏃	(3.3)×1.4×0.5	(1.7)	頁岩	
"	11	N-20	16	風倒	石鏃	(3.4)×1.3×0.6	(2.7)	頁岩	
"	12	N-20	21	風倒	石鏃	(3.8)×1.5×0.6	(2.9)	頁岩	
"	13	I-18	14	III	石鏃	3.8×1.2×0.7	1.5	硅質頁岩	
"	14	N-19	35	III	石鏃	(3.8)×1.5×0.6	(3.0)	頁岩	
"	15	M-31	26	III b1	石鏃	3.5×1.3×0.6	1.7	硅質頁岩	
"	16	N-23	23	III	石鏃	3.9×1.9×0.7	3.4	頁岩	
"	17	O-18	15	III	石鏃	(3.3)×1.4×0.6	(2.4)	頁岩	
"	18	N-19	36	III	石鏃	(3.5)×1.5×0.6	(3.1)	頁岩	
"	19	M-22	4	III	石鏃	3.5×1.3×0.6	2.3	頁岩	
"	20	L-20	20	III	石鏃	(2.5)×1.8×0.3	(1.1)	頁岩	
"	21	O-20	17	III	石鏃	3.6×1.5×0.4	1.8	頁岩	
"	22	N-20	60	III	石鏃	(4.0)×1.5×0.7	(3.8)	頁岩	
"	23	O-17	5	III	石鏃	4.4×1.5×0.8	3.6	頁岩	
"	24	N-20	59	III	石鏃	(4.7)×1.5×0.6	(3.7)	頁岩	
"	25	N-31	6	III a	石鏃	(4.2)×1.6×0.6	(2.4)	頁岩	
"	26	P-28	4	III b1	石鏃	5.1×1.7×0.8	5.1	頁岩	
"	27	M-24	28	III	石鏃	(5.7)×1.7×0.7	(5.9)	頁岩	
"	28	P-23	53	III b2	石鏃	1.9×1.1×0.2	0.4	黒曜石	
"	29	M-22	8	II	石鏃	3.1×1.5×0.6	2.1	硅質頁岩	
"	30	P-22	22	III b2	石鏃	2.9×1.1×0.6	1.6	硅質頁岩	
"	31	N-22	59	III	石鏃	3.5×1.3×0.6	1.1	硅質頁岩	
"	32	L-32	9	III b1	石鏃	(2.9)×1.4×0.3	1.3	黒曜石	
"	33	N-32	10	III b	石鏃	3.5×1.4×0.5	1.3	硅質頁岩	
"	34	M-24	33	III	石鏃	5.4×1.6×0.8	3.8	頁岩	
"	35	U-19	1	III	石鏃	2.8×1.4×0.3	1.1	黒曜石	
"	36	N-22	28	III	石鏃	3.0×1.1×0.6	1.7	硅質頁岩	
"	37	M-17	5	III	石鏃	(14.0)×7.8×1.9	(0.5)	黒曜石	
"	38	M-31	27	III b1	石錐	3.3×1.6×0.5	2.3	硅質頁岩	
"	39	N-21	25	III	石錐	2.8×1.8×0.6	2.5	硅質頁岩	
"	40	R-22	9	III b1	刺突器	3.8×1.8×0.6	3.8	頁岩	
"	41	P-17	19	III b2	槍先	(8.2)×3.4×1.3	(38.2)	頁岩	
"	42	M-24	10	III	石槍片	(6.9)×(3.5)×0.9	(17.1)	頁岩	
図VI-59	43	I-19	4	III	つまみ付きナイフ	6.1×2.7×1.0	15.1	頁岩	
"	44	M-20	41	III	つまみ付きナイフ	5.0×2.1×0.4	5.4	硅質頁岩	
"	45	L-23	13	III	つまみ付きナイフ	(4.2)×1.5×0.6	(2.7)	頁岩	
"	46	I-22	3	III	つまみ付きナイフ	7.2×2.3×0.8	13.4	頁岩	
"	47	O-23	15	III	つまみ付きナイフ	8.1×2.2×0.9	11.9	頁岩	
"	48	L-19	31	III	つまみ付きナイフ	8.4×3.6×0.2	33.8	頁岩	
"	49	M-20	39	III	つまみ付きナイフ	9.3×3.2×0.2	35.4	硅岩	
"	50	P-23	29	III b2	つまみ付きナイフ	6.4×3.1×0.8	14.3	頁岩	

挿 図	番号	発掘区	遺物 番号	層位	名 称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	石 質	接合関係
図VI-59	51	N-19	5	I	つまみ付きナイフ	4.9×2.4×0.7	6.0	頁岩	
"	52	M-22	13	III	つまみ付きナイフ	7.2×3.6×0.1	22.5	頁岩	
"	53	L-18	24	木根	つまみ付きナイフ	7.6×4.5×0.2	27.2	硅質頁岩	
"	54	M-24	7	III	つまみ付きナイフ	7.8×4.0×0.1	30.4	頁岩	
"	55	P-22	36	III b2	つまみ付きナイフ	5.7×3.6×0.9	16.9	頁岩	
"	56	O-20	29	III	つまみ付きナイフ	6.8×3.4×0.9	18.5	硅質頁岩	
"	57	N-22	29	III	つまみ付きナイフ	7.5×5.0×1.4	34.5	頁岩	
"	58	O-20	16	III	つまみ付きナイフ	9.2×5.7×0.1	46.3	頁岩	
図VI-60	59	Q-24	15	III b2	ナイフ	3.8×1.7×0.5	3.1	頁岩	
"	60	N-22	60	III	ナイフ	4.4×1.9×0.7	4.7	硅質頁岩	
"	61	K-19	32	III	ナイフ	5.6×2.7×1.1	12.3	硅岩	
"	62	J-23	3	III	石べら	6.6×3.6×1.2	29.3	頁岩	
"	63	M-20	80	III	石べら	8.7×3.6×2.0	60.2	頁岩	
"	64	N-21	10	III	石べら	8.3×3.7×1.4	34.3	頁岩	
"	65	R-24	7	砂 B1	スクレイパー	7.3×3.6×1.6	40.9	頁岩	
"	66	O-24	66	III b2	スクレイパー	7.9×3.4×1.3	42.4	頁岩	
"	67	R-18	8	III b1	スクレイパー	4.7×3.0×1.1	18.6	頁岩	
"	68	H-20	2	III	ナイフ	9.6×3.1×0.8	26.6	頁岩	
"	69	O-21	7	II	ナイフ	7.7×6.3×0.9	34.8	頁岩	
"	70	M-20	14	III	ナイフ	6.6×3.0×0.8	14.4	頁岩	
"	71	N-22	31	III	ナイフ	4.7×3.6×0.7	11.4	頁岩	
"	72	H-18	6	III	ナイフ	6.8×4.3×1.0	25.2	頁岩	
"	73	O-16	1	III	ナイフ	8.4×4.3×0.8	26.5	頁岩	
"	74	K-19	29	III	ナイフ	7.6×2.8×1.0	17.4	硅岩	
図VI-61	75	L-18	31	III	ナイフ	8.2×5.0×1.2	47.5	頁岩	
"	76	N-22	32	III	ナイフ	7.4×4.2×1.1	36.7	頁岩	
"	77	L-24	11	III	ナイフ	8.6×5.4×1.3	67.6	頁岩	
"	78	P-24	14	III b2	ナイフ	8.2×5.8×1.3	56.8	頁岩	
"	79	P-21	23	III b2	ナイフ	5.9×3.9×0.8	16.6	頁岩	
"	80	I-19	20	III	スクレイパー	7.0×3.7×1.4	32.5	頁岩	
"	81	P-21	5	III b2	スクレイパー	6.3×3.9×0.8	19.7	頁岩	
"	82	M-19	19	III	スクレイパー	6.7×4.6×1.3	41.6	頁岩	
"	83	O-26	43	III b2	スクレイパー	8.8×5.1×1.9	68.5	硅質頁岩	
"	84	Q-20	18	III b2	スクレイパー	7.5×3.0×1.4	33.9	頁岩	
"	85	M-19	10	III	スクレイパー	6.1×3.2×1.3	22.1	硅質頁岩	
"	86	O-24	24	III b2	スクレイパー	5.1×3.3×0.5	10.1	頁岩	
図VI-62	87	M-24	8	III	スクレイパー	5.5×3.6×1.0	22.0	硅質頁岩	
"	88	I-19	8	III	スクレイパー	8.3×5.6×1.7	71.2	頁岩	
"	89	L-19	18	III	スクレイパー	7.0×4.8×1.3	38.3	硅質頁岩	
"	90	P-21	27	III b2	スクレイパー	6.4×4.5×1.6	37.6	頁岩	
"	91	L-24	9	III	スクレイパー	6.7×3.8×1.7	38.9	硅質頁岩	
"	92	N-23	24	III	スクレイパー	6.8×3.8×1.3	32.1	頁岩	
"	93	O-24	47	III b2	スクレイパー	6.6×4.1×0.9	24.4	頁岩	
"	94	I-21	6	III	スクレイパー	6.1×3.8×1.0	20.4	頁岩	
"	95	N-30	13	III b1	スクレイパー	7.0×3.9×1.2	35.0	頁岩	
"	96	L-31	16	III b1	スクレイパー	8.4×3.9×1.3	32.6	頁岩	
"	97	P-21	38	III b2	スクレイパー	8.2×4.1×1.3	38.8	頁岩	
図VI-63	98	J-20	7	III	磨製石斧	(17.6)×6.2×3.2	(590)	砂岩	
"	99	M-20	22	I	磨製石斧	(15.1)×5.9×3.9	(520)	泥岩	
"	100	S-25	7	III b1	磨製石斧	12.2×4.8×1.2	138.5	黒色片岩	
"	101	O-24	50	III b2	磨製石斧	(12.4)×5.0×2.1	(192.9)	緑色泥岩	
"	102	S-25	8	III b1	磨製石斧	11.0×4.3×1.6	130.7	緑色泥岩	
"	103	M-18	11	III	磨製石斧片	(2.6)×(1.8)×0.9	(5.7)	緑色泥岩	

## VI 包含層の遺物

挿 図	番号	発掘区	遺物 番号	層位	名 称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	石 質	接合関係
図VI-63	104	S-25	6	III b1	磨製石斧	9.8×3.7×1.6	(87.3)	緑色泥岩	
図VI-64	105	N-20	50	風倒	たたき石	5.8×6.5×6.1	258	安山岩	
"	106	M-19	15	III	たたき石	7.2×6.3×4.6	306	砂岩	
"	107	N-24	25	III	たたき石	9.2×5.5×4.2	348	硅岩	
"	108	O-25	53	III b2	たたき石	11.0×6.5×5.7	562	砂岩	
図VI-64	109	P-23	66	III b2	たたき石	8.0×7.8×4.2	474	閃緑岩	
"	110	O-30	16	III b1	たたき石	9.9×9.1×4.2	560	安山岩	
"	111	N-19	43	III	たたき石	11.0×6.0×3.7	320	安山岩	
"	112	K-22	14	III	たたき石	13.7×3.2×2.7	258	安山岩	
"	113	M-20	88	III	たたき石	11.7×7.1×4.6	518	安山岩	
"	114	N-19	29	III	たたき石	11.8×5.4×3.7	236	安山岩	
"	115	Q-24	13	III b2	たたき石	8.6×8.9×4.2	440	泥岩	
図VI-65	116	O-25	42	III b2	扁平打製石器	10.7×22.0×2.9	780	安山岩	
"	117	O-24	33	III b2	扁平打製石器	8.7×17.8×2.6	590	安山岩	
"	118	L-19	43	III	扁平打製石器	8.8×14.3×3.3	580	安山岩	
"	119	N-19	37	III	扁平打製石器	10.1×16.0×1.4	400	安山岩	
"	120	P-25	3	II	扁平打製石器	8.0×13.1×2.8	410	安山岩	
"	121	Q-25	25	III b1	扁平打製石器	8.7×15.2×3.1	530	安山岩	
"	122	M-20	35	III	扁平打製石器	8.6×14.2×2.9	498	安山岩	
"	123	O-20	21	III	扁平打製石器	7.7×14.7×1.6	260	安山岩	
"	124	N-20	67	III	扁平打製石器	9.7×17.3×1.3	500	安山岩	
図VI-66	125	L-20	33-3	風倒	扁平打製石器	11.6×18.7×2.7	920	安山岩	
"	126	L-20	33-2	風倒	扁平打製石器	11.2×18.0×2.9	920	安山岩	
"	127	L-20	33-1	風倒	扁平打製石器	8.2×14.1×1.2	343	安山岩	
"	128	L-20	33-5	風倒	扁平打製石器	8.7×11.7×1.1	180	安山岩	
"	129	L-20	33-4	風倒	扁平打製石器	10.6×16.5×2.2	530	安山岩	
"	130	M-20	76	III	扁平打製石器	9.2×17.8×2.5	540	安山岩	
"	131	P-22	40	III b2	扁平打製石器	9.4×15.1×2.6	422	安山岩	
"	132	O-26	32	抜根	扁平打製石器	10.2×19.0×1.9	385	凝灰岩	
図VI-67	133	O-24	68	III b2	扁平打製石器	12.5×16.0×3.8	1100	安山岩	
"	134	O-18	12	III	扁平打製石器	11.2×14.6×3.1	680	安山岩	
"	135	N-18	4	III	扁平打製石器	9.8×15.4×3.5	680	安山岩	
"	136	M-24	14	III	扁平打製石器	10.0×12.0×3.5	700	安山岩	
"	137	Q-22	12	III b2	扁平打製石器	9.7×14.0×2.7	480	砂岩	
"	138	P-21	9	III b2	扁平打製石器	8.7×13.9×3.2	500	安山岩	
"	139	M-20	65	III	扁平打製石器	9.0×17.7×4.2	820	安山岩	
"	140	L-19	13	III	扁平打製石器	9.7×17.8×4.5	880	安山岩	
"	141	M-20	66	III	扁平打製石器	7.6×14.8×3.0	520	安山岩	
"	142	N-20	13	III	扁平打製石器	9.7×15.4×3.2	720	安山岩	
"	143	M-17	2	I	扁平打製石器	9.8×15.4×3.5	780	安山岩	
"	144	N-20	75	III	扁平打製石器	8.8×15.5×3.4	590	安山岩	
図VI-68	145	P-23	75	III b2	扁平打製石器	12.2×15.0×4.0	900	安山岩	
"	146	N-20	12	III	扁平打製石器	8.9×14.4×3.7	690	安山岩	
"	147	I-18	2	III	扁平打製石器	11.5×16.7×3.1	940	安山岩	
"	148	M-20	77	III	扁平打製石器	9.2×16.4×3.3	600	安山岩	
"	149	M-24	29	III	扁平打製石器	8.6×16.0×2.3	464	安山岩	
"	150	P-21	41	III b2	扁平打製石器	9.9×17.0×2.3	1000	安山岩	P21-42と接合
"	151	J-18	25	I	扁平打製石器	11.4×15.4×3.0	620	安山岩	
"	152	Q-21	10	III	扁平打製石器	8.8×12.7×2.0	322	安山岩	
"	153	O-25	32	III b2	扁平打製石器	6.1×11.5×2.9	282	安山岩	
"	154	N-22	52	III	扁平打製石器	10.3×14.3×3.1	600	安山岩	
"	155	O-20	2	I	扁平打製石器	7.4×14.9×2.2	356	安山岩	
図VI-69	156	O-23	3	II	扁平打製石器	9.6×15.6×2.0	328	安山岩	



挿 図	番号	発掘区	遺物 番号	層位	名 称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	石 質	接合関係
図VI-69	157	M-21	20	III	扁平打製石器	12.8× 18.0 ×2.7	900	安山岩	
"	158	L-19	21	III	扁平打製石器	11.4× 17.4 ×2.2	540	安山岩	
"	159	L-19	44	III	扁平打製石器	11.1× 13.6 ×1.7	341	安山岩	
"	160	O-20	12	II	扁平打製石器	6.1× 8.9 ×2.4	140	安山岩	
"	161	M-20	51	III	扁平打製石器	8.2× 16.5 ×2.2	424	安山岩	
"	162	N-22	50	III	扁平打製石器	12.0× 17.7 ×2.0	580	安山岩	
"	163	P-20	11	III b2	扁平打製石器	12.4× 14.9 ×3.7	800	安山岩	
図VI-70	164	M-20	33	III	北海道式石冠	7.3× 11.4 ×4.7	540	安山岩	
"	165	M-22	3	II	北海道式石冠	9.1× 15.2 ×5.3	1140	安山岩	
"	166	L-19	14	III	北海道式石冠	8.8× 14.0 ×6.5	1.00	安山岩	
"	167	L-19	27.5	III I	北海道式石冠	8.3× 16.4 ×6.5	1260	安山岩	2点接合
"	168	M-24	11	III	北海道式石冠	10.1× 12.9 ×4.7	920	安山岩	
"	169	P-21	42	III b2	北海道式石冠	10.8× 12.5 ×4.9	1080	安山岩	
"	170	O-22	29	III	北海道式石冠	11.2× 16.4 ×6.4	1540	安山岩	
"	171	O-18	27	III	北海道式石冠	18.7× 11.8 ×6.3	880	安山岩	
"	172	Q-23	12	III b2	北海道式石冠	9.7× 14.9 ×5.9	1240	安山岩	
"	173	N-20	74	III	北海道式石冠	13.8× 11.0 ×6.0	1090	安山岩	
"	174	P-18	23	III b2	北海道式石冠	10.5× 13.5 ×4.8	940	安山岩	
"	175	M-22	33	III	北海道式石冠	12.7× 17.6 ×4.4	1420	安山岩	
図VI-71	176	Q-24	3	III b2	すり石	8.3× 16.5 ×2.4	580	閃緑岩	
"	177	M-31	30	III b1	すり石	8.0× 16.2 ×4.5	840	閃緑岩	
"	178	Q-25	22	砂 B1	すり石	6.5× 14.9 ×3.2	550	閃緑岩	
"	179	N-23	13	III	すり石	8.6× 15.3 ×4.1	820	閃緑岩	
"	180	L-19	25	III	すり石	8.6× 16.5 ×3.0	500	閃緑岩	
"	181	R-21	7	II	すり石	9.2× 17.0 ×2.6	600	閃緑岩	
"	182	M-22	20	III	すり石	6.1× 10.9 ×4.5	384	安山岩	
"	183	M-22	45	III	すり石	11.9× 6.0 ×5.8	620	安山岩	
"	184	M-20	93	III	すり石	7.1× 9.5 ×4.5	376	安山岩	
"	185	R-20	8	III b1	すり石	12.5× 6.8 ×3.8	430	安山岩	
"	186	P-23	56	III b2	すり石	8.9× 11.1 ×7.1	780	安山岩	
"	187	P-20	12	III b2	すり石	17.1× 12.8 ×7.3	1200	閃緑岩	
図VI-72	188	O-26	46	III b2	石皿	42.5× 37.0 ×15	3400	安山岩	
"	189	N-20	63	III	石皿	(41.5)×(34.0)×10	(1600)	安山岩	多数接合
図VI-73	190	P-24	46	III b2	石皿	40.0× 26.5 ×16	2400	安山岩	
"	191	N-18	1	I	石棒	(26.0)× 11.3 ×10	(4600)	安山岩	2点接合
"	192	K-20	1	I	石棒	37.5× 12.0 ×12	9500	安山岩	
"	193	O-23	13	III	石核	5.9× 2.0 ×1.2	8.9	硅質頁岩	
"	194	P-21	26	III b2	石核	4.4× 2.9 ×1.7	23	硅質頁岩	
"	195	M-23	16	III	石核	5.3× 3.4 ×2.9	56.9	硅質頁岩	
"	196	P-22	39	III b2	石核	5.4× 3.0 ×3.2	58	硅質頁岩	
"	197	N-20	27	III	石核	7.6× 5.1 ×4.0	145.2	硅質頁岩	
図VI-74	198	M-20	60	III	土偶	5.0× 4.3 ×2.2	29.5		
"	199	O-19	44	III	土偶	3.1× 4.3 ×0.8	9.2		
"	200	N-23	1	II	土製品	3.8× 3.1 ×1.2	11.8		
"	201	M-22	10	III	土製品	14.2× 4.8 ×1.3	61.4		N22-10~12
"	202	O-19	26	III	土玉	3.5× 3.3 ×1.7	16.4		
"	203	P-23	32	III b2	土玉	3.3× (1.2)×0.1	(3.6)		
"	204	M-20	28	II	土玉	(3.8)× (1.8)×1.2	(6.9)		
"	205	M-32	5	III b1	土玉	2.5× 0.9 ×0.9	1.4		
"	206	O-22	20	III	焼成粘土塊	2.6× 1.1 ×1.0	2.2		
"	207	M-20	15	III	土製円板	3.5× 3.4 ×0.9	8.4		
"	208	M-19	41	III	土製円板	11.6× 6.0 ×1.7	84.5		
"	209	Q-25	12	砂 B1	石製品	10.1× 9.4 ×1.2	(86.0)	泥岩	

## VII 自然科学的手法による分析結果

### 1 鳴川右岸遺跡出土の黒曜石製遺物の原産地分析

藁科 哲男、東村 武信  
(京都大学原子炉実験所)

#### はじめに

石器石材の産地を自然科学的な手法を用いて、客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると言う目的で、蛍光 X 線分析法によりサヌカイトおよび黒曜石遺物の石材産地推定を行なっている。<sup>1,2,3)</sup>

黒曜石、サヌカイトなどの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には異同があると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行ない、これを産地を特定する指標とした。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めている各原石群の元素組成の平均値、分散などと遺物のそれを対比して産地を推定する。この際多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。

蛍光 X 線分析法は試料を破壊せずに分析することができて、かつ、試料調整が単純、測定操作も簡単である。石器のような古代人の日用品で多数の試料を分析しなければ遺跡の正しい性格が分からないという場合にはことさら有利な分析法である。

今回分析を行なった試料は、北海道亀田郡七飯町字桜町695-11に位置する鳴川右岸遺跡の縄文時代晩期出土の黒曜石製石器 1 個および縄文時代前期・中期出土の黒曜石製石器 5 個の合計 6 個の産地分析の結果が得られたので報告する。

#### 黒曜石原石の分析

黒曜石原石の風化面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネルギー分散型蛍光 X 分析装置によって元素分析を行なう。主に分析した元素は K, Ca, Ti, Mn, Fe, Rb, Sr, Y, Zr, Nb の各元素である。塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それでもって産地を特定する指標とした。黒曜石は、Ca/K, Ti/K, Mn/Zr, Fe/Zr, Rb/Zr, Sr/Zr, Y/Zr の比量をそれぞれ用いる。

黒曜石の原産地は北海道、東北、北陸、東関東、中信高原、伊豆箱根、伊豆七島の神津島、山陰、九州の各地に黒曜石の原産地は分布する。調査を終えた原産地を図 1 に示す。黒曜石原産地のほとんどすべてがつくされている。元素組成の上から、これら原石を分類すると表 1 に示すように 95 個の原石群に分かれる。

ここでは北海道地域および一部の東北地域の産地について記述すると、白滝地域の原産地は、北海道紋別郡白滝村に位置し、鹿砦北方 2 km の採石場の露頭、鹿砦東方約 2 km の幌加沢地点、また白土沢などより転礫として黒曜石が採取できる。この露頭からの黒曜石原石は白滝第一群にまとり、白土沢の転礫は白滝第二群にまとまる。幌加沢よりの転礫の

中で、70%は幌加沢群にまとまるが、この群は白滝第二群と一致し、元素組成から両群を区別できない。さらに、幌加沢産原石の30%は白滝第一群に一致する。

置戸産原石は、北海道常呂郡置戸町の清水の沢林道より採取され、この原石の元素組成は置戸群にまとまる。この原産地は、常呂川に通じる流域にあり、この常呂川流域で黒曜石の円礫が採取されるが現在まだ調査していない。

十勝三股産原石は、北海道河東郡上士幌町の十勝三股の十三ノ沢の谷筋および沢の中より原石が採取され、この原石の元素組成は十勝三股群にまとまる。この十勝三股産原石は十三の沢から音更川さらに十勝川に流れた可能性があり、十勝川から採取される黒曜石円礫の組成は、十勝三股産の原石の組成と相互に近似している。また、上士幌町のサンケオルベ川より採取される黒曜石円礫の組成も十勝三股産原石の組成と相互に近似している。これら組成の近似した原石の原産地は区別できず、遺物石材の産地分析でたとえ、この遺物の原石産地が十勝三股群に同定されたとしても、これら十勝三股、音更川、十勝川、サンケオルベ川の複数の地点を考えなければならない。しかし、この複数の産地をまとめて、十勝地域としても、古代の地域間の交流を考察する場合、問題はないと考えられる。また、清水町、新得町、鹿追町にかけて広がる美蔓台地から産出する黒曜石から2個の美蔓原石群が作られた。この原石は産地近傍の遺跡で使用されている。

名寄市の智南地域、智恵文川および忠烈布貯水池から上名寄にかけて黒曜石の円礫が採集される。これらを組成で分類すると88%は名寄第一群に、また12%は名寄第二群にそれぞれなる。

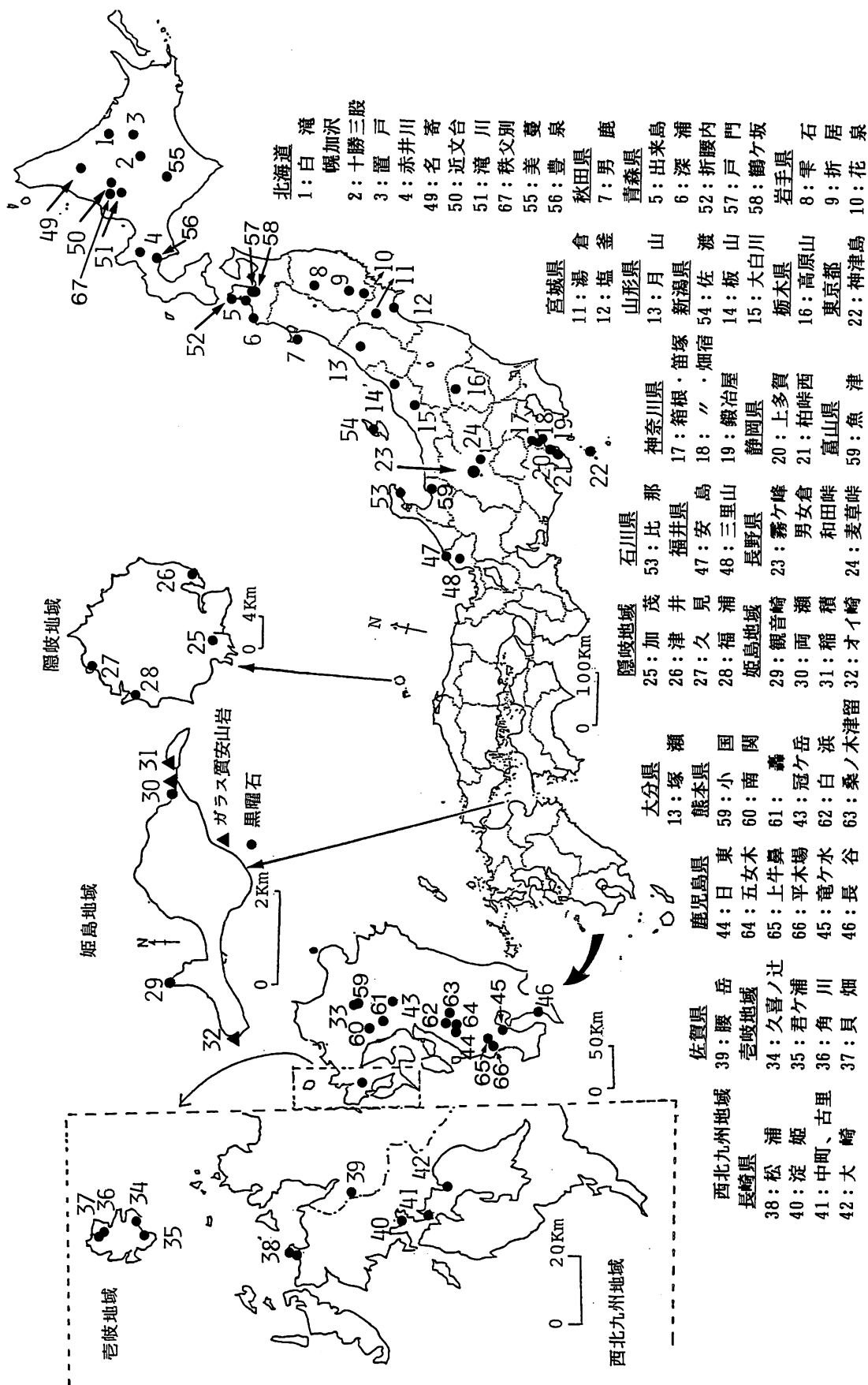
旭川市の近文台、嵐山遺跡付近および雨文台北部などから採集される黒曜石の円礫は、20%が近文台第一群、69%が近文台第二群、11%が近文台第三群それぞれ分類された。また、滝川市江別乙で採集される親指大の黒曜石の礫は、組成で分類すると約79%が滝川群にまともり、21%が近文台第二、三群に組成が一致する。滝川群に一致する組成の原石は、北竜市恵袋別川培本社からも採取される。秩父別町の雨竜川に開析された平野を見下す丘陵中腹の緩斜面から小円礫の黒曜石原石が採取される。産出状況とか礫状は滝川産黒曜石と同じで、秩父別第一群は滝川第一群に組成が一致し、第二群も滝川第二群に一致しさらに近文台第二群にも一致する。

赤井川産原石は、北海道余市郡赤井川村の土木沢上流域およびこの付近の山腹より採取できる。ここの原石には、少球果の列が何層にも重なり石器の原材として良質とはいえないものも多く、稀に球果の見られない、またあっても非常に少ない握り拳半分大の良質な原石が少数みられた。これら原石の元祖組成は赤井川群にまとまる。

豊泉産原石は豊浦町から産出し使用圏は道南地方に広がり、一部は青森県に伝播している。

出来島群は青森県西津軽郡木造町七里長浜の海岸部より採取された円礫の原石で作られた群で、この出来島群と相互に似た組成の原石は、岩木山の西側を流れ鰻ヶ沢地区に流入する中村川の上流で1点採取され、また、青森市の鶴ヶ坂および西津軽郡森田村鶴ばみ地区より採取されている。

深浦群は青森県西津軽郡深浦町の海岸とか同町の六角沢およびこの沢筋に位置する露頭より採取された原石で作られた群である。深浦群と相互に似た群は青森市戸門地区より産出する黒曜石で作られた戸門第二群である。戸門第一群は赤井川産原石と弁別は可能であ



圖VII-1 黑曜石原產地

るが両産地の原石の組成は比較的似ている。戸門産黒曜石の産出量は非常に少なく、また大きさも石鏃が作れる程度である。

## 結果と考察

遺跡から出土した石器、石片は風化しているが、黒曜石製のものは風化に対して安定で、表面に薄い水和層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗いするだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。産地分析で水和層の影響は、軽い元素の分析ほど大きいと考えられるが、影響はほとんど見られない。Ca/K、Ti/Kの両軽元素比量を除いて産地分析を行なった場合、また除かずに産地分析を行った場合同定される原産地に差はない。他の元素比量についても風化の影響を完全に否定することができないので、得られた確率の数値にはやゝ不確実さを伴うが、遺物の石材産地の判定を誤るようなことはない。

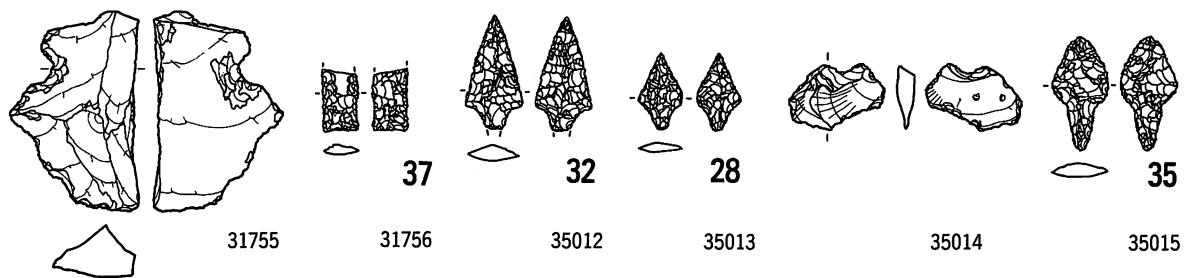
今回分析した鳴川右岸遺跡の黒曜石製石器の分析結果を表VII-2に示した。

石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするため Rb/Zr の一変量だけを考えると、表VII-2の試料番号 35012番の遺物では Rb/Zr の値は0.771で、置戸群の〔平均値〕±〔標準偏差値〕は、 $0.824 \pm 0.034$ である。遺物と原石群の差を標準偏差値 ( $\sigma$ ) を基準にして考えると遺物は原石群から  $1.5\sigma$  離れている。ところで置戸原産地から100ヶの原石を採ってきて分析すると、平均値から  $\pm 1.5$  のずれより大きいものが13個ある。すなわち、この遺物が、置戸群の原石から作られていたと仮定しても、 $1.5\sigma$  以上離れる確率は13%であると言える。だから、置戸群の平均値から  $1.5\sigma$  しか離れていないときには、この遺物が置戸群の原石から作られたものではないとは、到底言い切れない。ところがこの遺物を白滝第一群に比較すると、白滝第一群の平均値からの隔たりは、約  $9\sigma$  である。これを確率の言葉で表現すると、白滝第一群の原石を採ってきて分析したとき、平均値から  $9\sigma$  以上離れている確率は、十億分の一であると言える。このように、十億個に一個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は白滝第一群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめて言うと、「この遺物は置戸群に13%、白滝第一群に千万分の1%の確率でそれぞれ帰属される」。各遺跡の遺物について、この判断を表1のすべての原石群について行ない、低い確率で帰属された原産地を消していくと残るのは、置戸の原産地だけとなり、置戸産地の石材が使用されていると判定される。実際は Rb/Zr といった唯1ヶの変量だけでなく、前述した5ヶの変量で取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならない。例えば A 原産地の A 群で、Ca 元素と Rb 元素との間に相関があり、Ca の量を計れば Rb の量は分析しなくても分かるようなときは、A 群の石材で作られた遺物であれば、A 群と比較したとき、Ca 量が一致すれば当然 Rb 量も一致するはずである。したがって、もし Rb 量だけが少しずれている場合には、この試料は A 群に属していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングの  $T^2$  検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて産地を固定する<sup>45)</sup> 鳴川右岸遺跡より出土した黒曜石製石器の産地推定の結果を表VII-3に示す。原産地は確率の高い産地のものだけを選んで記した。原石群を作った原石試料は直径 3 cm 以上であるが、多数の試料を処理するために、小さな遺物試料の分析に多くの時間をかけられない事情が

あり、短時間で測定を打ち切る。このため、得られた遺物の測定値には、大きな誤差範囲が含まれ、ときには、原石群の元素組成のパラッキの範囲を越えて大きくなる。したがって、小さな遺物の産地推定を行なったときに、判定の信頼限界としている0.1%に達しない確率を示す場合が比較的多くみられる。この場合には、原石産地（確率）の欄の確率値に替えて、マハラノビス距離  $D^2$  の値を記した。この遺物については、記入された  $D^2$  の値が原石群の中で最も小さな  $D^2$  値で、この値が小さい程、遺物の元素組成はその原石群の組成と似ていると言えるため、推定確率は低いが、そこの原石産地と考えてほぼ間違いないと判断されたものである。今回、分析した鳴川右岸遺跡の縄文時代晩期出土の1個は置戸産原石、縄文時代前期・中期の5個は赤井川産原石がそれぞれ使用されていることが明らかになった。分析個数は少ないが本遺跡が置戸産原石、赤井川原石の使用が確認されたことから、これら原産地地方の情報が本遺跡に伝播していたと推理できる。

### 参考文献

- 1) 藁科哲男・東村武信 (1975), 蛍光 X 線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定 (II)。考古学と自然科学, 8: 61-69
- 2) 藁科哲男・東村武信・鎌木義昌 (1977), (1978), 蛍光 X 線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定 (III)。 (IV)。考古学と自然科学, 10, 11: 53-81: 33-47
- 3) 藁科哲男・東村武信 (1983), 石器原材の産地分析。考古学と自然科学, 16: 59-89
- 4) 東村武信 (1976), 産地推定における統計的手法。考古学と自然科学, 9: 77-90
- 5) 東村武信 (1990), 考古学と物理化学。学生社



図VII-2 分析遺物

表VII-1-1 各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差

原産地 原石群名	分析 個数	Ca/K ±σ	Ti/K ±σ	Mn/Zr ±σ	Fe/Zr ±σ	Rb/Zr ±σ	Sr/Zr ±σ	Y/Zr ±σ	Nb/Zr ±σ	Al/K ±σ	Si/K ±σ
北海道	114	0.478±0.011	0.121±0.005	0.035±0.007	2.011±0.063	0.614±0.032	0.574±0.022	0.120±0.017	0.024±0.016	0.033±0.002	0.451±0.010
	12	0.315±0.011	0.106±0.003	0.023±0.005	1.796±0.070	0.692±0.043	0.264±0.017	0.293±0.018	0.039±0.020	0.029±0.002	0.401±0.010
	130	0.173±0.014	0.061±0.003	0.079±0.013	2.714±0.142	1.340±0.059	0.283±0.019	0.341±0.030	0.073±0.026	0.028±0.002	0.374±0.010
	23	0.139±0.009	0.023±0.001	0.099±0.015	2.975±0.102	1.794±0.077	0.104±0.010	0.470±0.037	0.103±0.027	0.027±0.002	0.369±0.007
	27	0.138±0.004	0.021±0.002	0.102±0.015	3.049±0.181	1.855±0.088	0.097±0.016	0.492±0.039	0.107±0.019	0.027±0.002	0.368±0.006
	30	0.819±0.013	0.165±0.006	0.081±0.010	3.286±0.117	1.855±0.088	0.097±0.016	0.492±0.039	0.107±0.019	0.027±0.002	0.368±0.006
	107	0.517±0.011	0.099±0.005	0.067±0.009	2.773±0.097	0.812±0.037	0.815±0.034	0.197±0.024	0.041±0.019	0.035±0.002	0.442±0.009
	17	0.514±0.012	0.098±0.005	0.066±0.010	2.765±0.125	0.814±0.068	0.815±0.042	0.199±0.039	0.078±0.008	0.034±0.002	0.443±0.011
	51	0.249±0.017	0.122±0.006	0.078±0.011	1.614±0.099	0.955±0.037	0.458±0.023	0.235±0.024	0.023±0.021	0.022±0.004	0.334±0.013
	25	0.506±0.016	0.098±0.005	0.070±0.011	2.750±0.099	0.805±0.042	0.808±0.032	0.197±0.024	0.027±0.016	0.027±0.003	0.371±0.010
	31	0.253±0.018	0.122±0.006	0.077±0.009	1.613±0.090	1.017±0.045	0.459±0.025	0.233±0.029	0.038±0.018	0.025±0.003	0.370±0.023
	15	0.510±0.015	0.098±0.005	0.068±0.009	2.740±0.072	0.802±0.019	0.812±0.019	0.192±0.028	0.032±0.023	0.030±0.004	0.393±0.031
	65	0.326±0.008	0.128±0.005	0.045±0.008	1.813±0.062	0.824±0.034	0.454±0.020	0.179±0.023	0.044±0.020	0.030±0.002	0.412±0.010
	60	0.256±0.018	0.074±0.005	0.068±0.010	2.281±0.087	1.097±0.055	0.434±0.023	0.334±0.029	0.064±0.025	0.029±0.002	0.386±0.013
	41	0.499±0.020	0.124±0.007	0.052±0.010	2.635±0.181	0.802±0.061	0.707±0.044	0.199±0.029	0.039±0.023	0.033±0.002	0.442±0.015
	28	0.593±0.036	0.144±0.012	0.056±0.010	3.028±0.251	0.762±0.040	0.764±0.051	0.197±0.028	0.038±0.022	0.034±0.002	0.449±0.009
	50	0.254±0.029	0.070±0.004	0.086±0.010	2.213±0.104	0.969±0.060	0.428±0.021	0.249±0.024	0.058±0.022	0.027±0.002	0.371±0.009
	75	0.473±0.019	0.148±0.007	0.060±0.015	1.764±0.072	0.438±0.027	0.607±0.028	0.157±0.020	0.025±0.017	0.032±0.002	0.469±0.013
	35	0.190±0.015	0.075±0.003	0.040±0.008	1.575±0.066	1.241±0.046	0.318±0.014	0.141±0.033	0.076±0.021	0.024±0.002	0.348±0.010
	27	0.346±0.022	0.132±0.007	0.231±0.019	2.268±0.085	0.865±0.044	1.108±0.056	0.399±0.038	0.179±0.031	0.038±0.003	0.499±0.013
	36	0.080±0.008	0.097±0.011	0.013±0.002	0.697±0.021	0.128±0.008	0.002±0.002	0.064±0.007	0.035±0.004	0.026±0.002	0.379±0.010
	28	0.250±0.024	0.069±0.004	0.068±0.012	2.356±0.257	1.168±0.062	0.521±0.063	0.277±0.065	0.076±0.025	0.026±0.002	0.362±0.015
	28	0.084±0.006	0.104±0.004	0.013±0.002	0.691±0.021	1.123±0.006	0.002±0.002	0.069±0.010	0.033±0.005	0.025±0.002	0.369±0.007
	33	0.344±0.017	0.132±0.007	0.232±0.023	2.261±0.143	0.861±0.052	1.081±0.060	0.390±0.039	0.186±0.037	0.037±0.002	0.496±0.018
青森県	43	0.293±0.007	0.087±0.004	0.223±0.015	1.637±0.072	1.512±0.082	0.920±0.054	0.287±0.042	0.125±0.031	0.027±0.002	0.362±0.006
	25	0.636±0.033	0.187±0.012	0.052±0.007	1.764±0.061	0.305±0.016	0.431±0.021	0.209±0.018	0.045±0.014	0.041±0.003	0.594±0.014
	30	0.615±0.035	0.180±0.016	0.058±0.007	1.751±0.062	0.306±0.033	0.421±0.051	0.228±0.079	0.045±0.011	0.041±0.003	0.594±0.014
岩手県	25	0.596±0.046	0.177±0.018	0.056±0.008	1.742±0.072	0.314±0.019	0.420±0.025	0.220±0.016	0.044±0.011	0.041±0.003	0.586±0.030
	21	2.174±0.068	0.349±0.017	0.057±0.005	2.544±0.149	0.116±0.009	0.658±0.024	0.138±0.015	0.020±0.013	0.073±0.003	0.956±0.040
	37	4.828±0.395	1.630±0.104	0.178±0.017	11.362±1.150	0.168±0.018	1.298±0.063	0.155±0.016	0.037±0.018	0.077±0.002	0.720±0.032
宮城県	21	0.285±0.021	0.123±0.007	0.182±0.016	1.906±0.096	0.966±0.069	1.022±0.071	0.276±0.036	0.119±0.033	0.033±0.002	0.443±0.014
	34	0.228±0.013	0.078±0.006	0.020±0.005	1.492±0.079	0.821±0.047	0.288±0.018	0.142±0.018	0.049±0.017	0.024±0.004	0.338±0.013
	12	0.263±0.032	0.097±0.018	0.020±0.006	1.501±0.053	0.717±0.106	0.326±0.029	0.091±0.022	0.046±0.015	0.026±0.002	0.338±0.009
新潟県	44	0.232±0.011	0.068±0.003	0.169±0.017	2.178±0.110	1.772±0.098	0.772±0.046	0.374±0.047	0.154±0.034	0.027±0.002	0.359±0.009
	22	0.569±0.012	0.142±0.007	0.033±0.005	1.608±0.049	0.261±0.012	0.332±0.011	0.150±0.015	0.033±0.011	0.036±0.003	0.491±0.014
	40	0.738±0.067	0.200±0.010	0.044±0.007	2.016±0.110	0.381±0.025	0.502±0.028	0.190±0.017	0.023±0.014	0.036±0.002	0.516±0.012
栃木県	56	0.381±0.014	0.136±0.005	0.102±0.011	1.729±0.079	0.471±0.027	0.689±0.037	0.247±0.021	0.090±0.028	0.036±0.003	0.504±0.012
	23	0.317±0.015	0.120±0.009	0.114±0.014	1.633±0.093	0.545±0.033	0.555±0.033	0.333±0.034	0.137±0.028	0.033±0.002	0.471±0.009
	30	6.765±0.254	2.219±0.057	0.228±0.019	9.282±0.622	0.048±0.017	1.757±0.061	0.252±0.017	0.025±0.019	0.140±0.008	1.528±0.046
神奈川県	40	2.056±0.084	0.669±0.019	0.076±0.007	2.912±0.104	0.062±0.007	0.680±0.029	0.202±0.011	0.011±0.010	0.080±0.005	1.126±0.031
	31	1.663±0.071	0.381±0.019	0.056±0.007	2.139±0.097	0.073±0.008	0.629±0.025	0.154±0.009	0.011±0.009	0.067±0.005	0.904±0.020
	31	1.329±0.078	0.294±0.018	0.041±0.006	1.697±0.068	0.087±0.009	0.551±0.023	0.138±0.011	0.010±0.009	0.059±0.004	0.856±0.018
静岡県	35	1.213±0.164	0.314±0.028	0.031±0.004	1.699±0.167	0.113±0.007	0.391±0.022	0.143±0.007	0.009±0.009	0.047±0.004	0.683±0.020
	12	0.278±0.013	0.065±0.004	0.064±0.008	2.084±0.095	0.906±0.057	0.641±0.046	0.194±0.014	0.102±0.021	0.027±0.002	0.372±0.009
	17	0.370±0.014	0.087±0.004	0.060±0.009	2.699±0.167	0.639±0.028	0.534±0.023	0.172±0.028	0.052±0.018	0.032±0.002	0.396±0.017
石川県	21	0.407±0.007	0.123±0.005	0.038±0.006	1.628±0.051	0.643±0.041	0.675±0.030	0.113±0.020	0.061±0.016	0.032±0.002	0.450±0.010
	21	0.350±0.018	0.123±0.008	0.036±0.006	1.561±0.081	0.608±0.031	0.798±0.039	0.069±0.020	0.062±0.013	0.028±0.002	0.381±0.008
福井県	21	0.350±0.018	0.123±0.008	0.036±0.006	1.561±0.081	0.608±0.031	0.798±0.039	0.069±0.020	0.062±0.013	0.028±0.002	0.381±0.008
	21	0.350±0.018	0.123±0.008	0.036±0.006	1.561±0.081	0.608±0.031	0.798±0.039	0.069±0.020	0.062±0.013	0.028±0.002	0.381±0.008
	21	0.350±0.018	0.123±0.008	0.036±0.006	1.561±0.081	0.608±0.031	0.798±0.039	0.069±0.020	0.062±0.013	0.028±0.002	0.381±0.008

又：平均値、σ：標準偏差

表VII-1-2 各黒耀石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原産地	原石群名	分析個数	Ca/K ±σ	Ti/K ±σ	Mn/Zr ±σ	Fe/Zr ±σ	Rb/Zr ±σ	Sr/Zr ±σ	Y/Zr ±σ	Nb/Zr ±σ	Al/K ±σ	Si/K ±σ
長野県	霧ヶ峰	171	0.138±0.009	0.066±0.003	0.104±0.011	1.339±0.057	1.076±0.047	0.360±0.023	0.275±0.030	0.112±0.023	0.026±0.002	0.361±0.013
	和田峠第一	143	0.167±0.028	0.049±0.008	0.117±0.011	1.346±0.085	1.853±0.124	0.112±0.056	0.409±0.048	0.139±0.026	0.025±0.002	0.355±0.016
	第二	17	0.146±0.003	0.032±0.003	0.151±0.010	1.461±0.039	2.449±0.135	0.036±0.135	0.517±0.044	0.186±0.025	0.027±0.002	0.368±0.007
	第三	62	0.248±0.048	0.064±0.012	0.114±0.011	1.520±0.182	1.673±0.140	0.274±0.104	0.374±0.044	0.122±0.024	0.025±0.003	0.348±0.017
	第四	37	0.144±0.017	0.063±0.004	0.094±0.009	1.373±0.085	1.311±0.037	0.208±0.030	0.263±0.038	0.090±0.022	0.023±0.002	0.331±0.019
	第五	47	0.176±0.019	0.075±0.010	0.073±0.011	1.282±0.086	1.053±0.196	0.275±0.098	0.184±0.042	0.066±0.023	0.021±0.002	0.306±0.013
	第六	53	0.156±0.011	0.055±0.005	0.095±0.012	1.333±0.094	1.523±0.093	0.134±0.031	0.279±0.039	0.101±0.017	0.021±0.002	0.313±0.012
	鷹山・第三	53	0.138±0.004	0.042±0.002	0.123±0.010	1.259±0.041	1.978±0.067	0.045±0.101	0.442±0.039	0.142±0.022	0.026±0.002	0.360±0.012
	男倉	119	0.223±0.026	0.102±0.010	0.059±0.008	1.169±0.081	1.701±0.109	0.409±0.052	0.128±0.024	0.053±0.017	0.026±0.002	0.354±0.008
	麦草峠	68	0.263±0.020	0.138±0.011	0.049±0.008	1.403±0.069	0.532±0.048	0.764±0.031	0.101±0.018	0.056±0.016	0.029±0.002	0.401±0.017
島根県	加津茂	20	0.154±0.008	0.092±0.009	0.118±0.003	0.943±0.029	0.288±0.016	0.006±0.003	0.047±0.010	0.144±0.019	0.022±0.001	0.269±0.017
	津井見	31	0.150±0.008	0.100±0.003	0.015±0.002	0.919±0.023	0.305±0.010	0.013±0.003	0.046±0.013	0.132±0.007	0.022±0.001	0.258±0.006
大分県	久保	41	0.216±0.017	0.045±0.003	0.428±0.057	6.897±0.806	1.829±0.220	1.572±0.180	0.325±0.089	0.622±0.099	0.035±0.002	0.418±0.011
	音崎	33	0.221±0.021	0.045±0.003	0.450±0.061	7.246±0.668	1.917±0.194	1.660±0.173	0.355±0.057	0.669±0.105	0.035±0.002	0.419±0.009
	瀬瀬第二	32	0.634±0.047	0.140±0.013	0.194±0.026	4.399±0.322	0.614±0.077	3.162±0.189	0.144±0.031	0.240±0.041	0.038±0.002	0.451±0.011
	第三	10	0.1013±0.140	0.211±0.026	0.126±0.012	3.491±0.231	0.305±0.067	4.002±0.174	0.109±0.021	0.137±0.028	0.040±0.004	0.471±0.017
	才	29	1.074±0.110	0.224±0.024	0.122±0.012	3.460±0.301	0.286±0.048	4.010±0.197	0.101±0.022	0.133±0.025	0.040±0.003	0.469±0.014
	稲	25	0.653±0.066	0.141±0.016	0.189±0.030	4.398±0.425	0.605±0.096	3.234±0.264	0.151±0.033	0.245±0.050	0.037±0.002	0.449±0.015
	塚	30	0.313±0.023	0.127±0.009	0.065±0.010	1.488±0.124	0.600±0.051	0.686±0.062	0.175±0.018	0.102±0.020	0.028±0.002	0.371±0.009
	腰	26	0.214±0.015	0.029±0.001	0.076±0.012	2.694±0.110	1.686±0.085	0.441±0.030	0.293±0.039	0.257±0.029	0.027±0.002	0.356±0.008
	久喜ノ辻	37	0.165±0.012	0.066±0.002	0.034±0.003	1.197±0.030	0.403±0.012	0.005±0.004	0.114±0.012	0.326±0.008	0.024±0.002	0.294±0.008
	角川	28	0.161±0.011	0.064±0.002	0.034±0.003	1.209±0.032	0.405±0.008	0.005±0.004	0.119±0.016	0.322±0.010	0.025±0.002	0.294±0.006
熊本県	冠白	21	0.258±0.009	0.0214±0.006	0.033±0.005	0.794±0.078	0.329±0.017	0.275±0.010	0.086±0.011	0.033±0.009	0.020±0.003	0.243±0.008
	桑ノ木津留	40	0.197±0.020	0.104±0.008	0.025±0.006	1.405±0.073	1.048±0.087	0.348±0.028	0.163±0.023	0.033±0.017	0.019±0.001	0.273±0.007
	第二群	47	0.207±0.015	0.094±0.006	0.070±0.009	1.521±0.075	1.080±0.048	0.418±0.020	0.286±0.034	0.063±0.024	0.020±0.003	0.314±0.011
	第三群	33	0.261±0.015	0.094±0.006	0.066±0.010	1.743±0.095	1.242±0.060	0.753±0.039	0.205±0.029	0.047±0.036	0.022±0.002	0.323±0.019
	出水(日東)	42	0.262±0.018	0.143±0.006	0.022±0.004	1.178±0.040	0.712±0.028	0.408±0.025	0.100±0.018	0.029±0.013	0.019±0.001	0.275±0.006
	五上	37	0.266±0.021	0.140±0.006	0.019±0.003	1.170±0.064	0.705±0.027	0.405±0.021	0.108±0.015	0.028±0.013	0.019±0.001	0.275±0.006
	木島	41	1.629±0.098	0.804±0.037	0.053±0.006	3.342±0.215	0.188±0.013	1.105±0.056	0.087±0.009	0.022±0.009	0.038±0.002	0.391±0.011
	平場	34	1.944±0.054	0.912±0.028	0.062±0.018	3.975±0.182	0.184±0.011	1.266±0.049	0.093±0.010	0.021±0.010	0.038±0.003	0.408±0.011
	電ヶ谷	28	0.514±0.032	0.167±0.008	0.063±0.009	1.524±0.079	0.619±0.038	0.719±0.054	0.115±0.019	0.082±0.016	0.037±0.003	0.523±0.009
	長	30	0.553±0.032	0.137±0.006	0.065±0.010	1.915±0.062	0.944±0.028	0.553±0.029	0.146±0.021	0.086±0.020	0.037±0.003	0.524±0.012
鹿児島県	JG-1	127	0.755±0.010	0.202±0.005	0.076±0.011	3.759±0.111	0.993±0.036	1.331±0.046	0.251±0.027	0.105±0.017	0.028±0.002	0.342±0.004

又: 平均値、σ: 標準偏差値、\*: ガラス質安山岩  
a): Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. (1974). 1974 compilation of data on the GSJ geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal Vol. 8, 175-192.



表Ⅶ－２－１ 鳴川右岸遺跡出土の黒曜石製遺物分析結果（平成４年度）

試料番号	Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	元 Fe/Zr	素 Rb/Zr	比 Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K
31755	.254	.068	.088	2.257	.901	.432	.233	.000	.021	.341
31756	.248	.062	.069	2.015	.931	.406	.213	.054	.024	.345

表Ⅶ－２－２ 鳴川右岸遺跡出土の黒曜石製遺物分析結果（平成５年度）

分析番号	Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	元 Fe/Zr	素 Rb/Zr	比 Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K
35012	.331	.128	.042	1.816	.771	.459	.155	.022	.023	.334
35013	.245	.068	.121	2.462	1.042	.459	.260	.000	.022	.314
35014	.263	.073	.102	2.183	.960	.396	.222	.000	.020	.305
35015	.255	.064	.084	2.184	.933	.419	.169	.029	.024	.302

表Ⅶ－３－１ 鳴川右岸遺跡出土の黒曜石製遺物の原材産地推定結果（平成４年度）  
（北海道亀田郡七飯町字桜町695-11）

試料番号	名称・位置・層位	時代（伴出土器）	原石産地（確率）	判定	遺物品名	備考	試料提供者
31755	ナー 1, K-19-45, 風倒木痕	縄文時代中期	赤井川（17%）	赤井川	剥片		
31756	ー 2, M-17-5, III	〃	〃（21%）	〃	石鏃		

表Ⅶ－３－２ 鳴川右岸遺跡出土の黒曜石製遺物の原材産地推定結果（平成５年度）

分析番号	試料番号	遺跡番号	遺物出土区	層位	時代（伴出土器）	原石産地（確率）	判定	遺物品名（備考）
35012	1	ナー 3,	L-32-9,	III a 層	縄文時代晩期	置戸（16%）	置戸	石鏃
35013	2	ナー 4,	P-23-53,	III 層	縄文時代前期・中期	赤井川（4%）	赤井川	〃
35014	3	ナー 5,	P-26-12,	III b 層	〃	〃（10%）	〃	U フレイト
35015	4	ナー 6,	U-19-1,	III 層	〃	〃（12%）	〃	石鏃

## 2. 放射性炭素年代測定結果

山田 治 (京都産業大学)

KSU-2313	鳴川右岸遺跡 炭化木片	4280±60 BP
	NH-4 No. 2	
KSU-2314	鳴川右岸遺跡 炭化木片	4270±40 BP
	NH-4 No. 3	
KSU-2315	鳴川右岸遺跡 炭化木片	3920±30 BP
	NH-4 No. 5	

<sup>14</sup>C年代測定値の表現についての国際的約束

<sup>14</sup>C年代測定値の表現方法には次のような国際的な約束がありますので、ご承知の上、測定結果をご使用ください。

(1) BP という記号は Before Present の頭文字を採ったものであります。ただし、Present が毎年移動しては困るので、西暦紀元1950年を Present と約束します。

さらに厳密な絶対年代を必要とする場合に備えて、年輪年代と <sup>14</sup>C年代との細かな比較対照表が作製されています。必要があれば炭素年代測定に関する国際的雑誌 Radiocarbon の1986年版 (Vol. 28, No. 2B 805-1030 pp) を参照してください。

(2) 測定値の前に、KSU という記号と数字がありますが、KSU は Radiocarbon 誌に登録されている測定機関名、京都産業大学を表わす記号です。数字は測定値の通し番号すなわち測定番号です。

遺跡の <sup>14</sup>C年代測定値を記載する際には、必ずこの機関記号と測定番号を一緒に結合させて記載しなければなりません。この記号と番号がないと、索引照合ができないので証拠としての価値がなくなるだけでなく、捏造されたデータとして扱われることになります。

(3) 国際的に <sup>14</sup>C年代測定に使用されている <sup>14</sup>Cの半減期は5568年です。現在、最も確からしい <sup>14</sup>Cの半減期は、5730±30年ですが、将来測定の精度があがればもっと正確な数値が現われるでしょう。その度に数字を変えて行くのは煩わしいので、世界中での了解が成立するまで <sup>14</sup>C年代測定においてはずっと5568年が国際的に使用されます。

(4) <sup>14</sup>C年代測定の誤差は1標準偏差を用いる約束です。誤差と言うものは測定精度の目安であって、真の値が必ずそのなかにはいるということではありません。

純粋に数学的な統計誤差だけの問題であれば、1標準偏差の幅の中に真の値が含まれる確率は68%です。1標準偏差を1シグマともいいますが、1シグマの2倍、2シグマの中には真の値は95%含まれます。誤差幅3シグマでは、真の値が含まれる確率は99.7%になり、1000個の測定値のうち3個だけはずれることになります。4シグマからはずれる確率は1万分の1以下です。

人間のおこなう測定では統計誤差のほかに必ず実験誤差が入ってきます。通常、実験誤

差は統計誤差より小さいとされていますが、確認されているわけではなく、測定の方法や測定者によっても変わることを覚悟して置かねばなりません。

安全性を考えると、誤差の幅の少し広く2シグマないし3シグマまで考えたほうがよいでしょう。例えば誤差が1シグマで100年と書いてあっても、3シグマの300年をとれば信頼度99.7%となります。誤差20年であれば、60年の幅の中に99.7%はいるわけです。

### 3. 北海道亀田郡鳴川右岸遺跡で検出された植物種子

よし ぎき まさ かず  
吉 崎 昌 一

#### (1) 遺跡の概要

- a : 遺跡の名称 鳴川右岸遺跡  
b : 遺跡の所在 北海道 亀田郡 七飯町 字 桜町695  
c : 調査機関 財北海道埋蔵文化財センター  
d : 調査日時 平成5年7月19日～10月30日  
e : 遺跡の年代 縄文時代前期後半～中期, 後期初頭, 晩期  
f : 調査担当者 越田賢一郎ほか

#### (2) 報告した資料について

ここで扱った炭化植物種子資料は、縄文時代前期後半～中期, 後期初頭, 晩期の各層準から検出されたものである。それらの検出地点と層準, それぞれに伴った土器型式については、一括して表に示した(表V-1)。

資料は、調査担当者の指示でフローテーション処理によって土壌中から炭化した植物片だをとりだし、送付されてきた。これを双眼実体顕微鏡下で分類をおこない、必要に応じて走査型電子顕微鏡を利用して観察した。

#### (3) 検出された植物種子(表VII-4)

報告する植物種子は、炭化しているもののみを選別と分類の対象とした。混入のリスクを排除するための措置である。こうしてヒエ属, マタタビ属, ニワトコ属, キハダ属, ウルシ属, ミズキ属, ブドウ属, タデ属, アサダ属, クルミ属の10属が同定されたが、タデ属, アサダ属に関しては資料が不足していて明確でない部分がある。これらのほかに、分類不明の種子が1粒とダメージが大きくて同定不能のものがある。主な資料は次のようになる。

ヒエ属 *Echinochloa* Beauv. 図VII-3-1

NH-4 堅穴住居の主床面より若干上位のNF-60焼土<sup>(1)</sup>の資料番号71として採取された土壌から1粒検出された。この焼土よりやや上で、1個体分の縄文時代中期中葉のサイベ沢VII式土器が発掘されている。調査担当者によれば、F-60焼土を埋積土の一部とするH-4 堅穴住居の時期はサイベ沢VII式土器を指標とするもので、床面直上から出土した炭化木材の<sup>14</sup>C年代測定で4280±60 BP (KSU-2313), 3920±30 BP (KSU-2315) が得られている。したがって、土器型式の継続時間を考慮しても、この種子の年代はB.P.4000よりは古いと考えられる。

種子は、他の遺跡の検出例と同様に穎が完全に剥落した状態であるが、加熱のために一部変形しており、あまり良好な保存状態ではない。このような状態のものでは、穎果表皮の細胞構造は観察できない。したがって、残存する胚の剥離した痕跡の形態や大きさなどから、これまで縄文ヒエ(吉崎:1991)として扱っていたものと同じグループであると判断した。長さ1.8mm, 幅1.25mm, 厚さ0.75mm。

マタタビ属 *Actinidea* Lindl. 図VII-3-2

卵形で一端に基部の小突起がある。表面には六角形あるいは不正円形の単位で接続する皿状・網目型の構造が認められる。サイベ沢VI~VII式土器の焼土から2粒検出されている。長さ1.9mm, 幅1.3mm, 厚さ0.8mm。

ニワトコ属 *Sambucus* L. 図VII-3-3

先端がやや尖る扁卵形, 他端には基部のヘソのわずかな凹みがあるが, この写真ではよく見えない。しかし, 横走するニワトコ特有の粗い不規則なしわがよく観察される。縄文時代前期と中期の層準, P-12, F-17から各1粒, F-33から2粒検出されている。保存は余りよくない。長さ2.1mm, 幅1.4mm, 厚さ0.5mm。

キハダ属 *Phellodendron* Rupr. 図VII-3-4

正面観は二等辺三角形に近い扁卵形。断面は長楕円形。表面は不正円形皿状の構造が観察される。表に示したように破片を含めて15点と他のものより出土量が多い。その中でも縄文時代中期後葉~後期初頭と考えられるF-33からは11点と最も多く検出された。長さ3.7mm, 幅1.9mm, 厚さ1.2mm。

ウルシ属 *Rhus* Miq. 図VII-3-5

未成熟なキノコを思わせるような, 特有の形態を持つウルシ属の種子がF-34, F-64ならびに縄文時代後期初頭のF-71から出土している。図に提示したものは長さ3.1mm, 幅2.0mm, 厚さ1.5mm。

ミズキ属 *Cornus* L. 図VII-3-6

扁平な球形で, 一見カボチャを思わせるような縦溝のあるミズシ (*Cornus controversa* Hemsl.) の小堅果 (石果) が, 縄文時代中期中葉のP-12および焼土F-68から各1粒ずつ検出された。図示した資料は上面から撮影したもの。径4.8mm×4.0mm。

ブドウ属 *Vitis* L. 図VII-3-7a, 7b

F-59の焼土および縄文時代中期中葉の焼土F-62からブドウ属の種子が各1粒ずつ検出された。両方とも類似した形態を持つ。広卵状球形で先端がとがる。背面のヘソ部分は余りはっきりしない。この部分が舌状のカバーで覆われていればノブドウであるが, それは観察されなかった。腹面は縦筋の両側に深くぼみがある。ヤマブドウ *Vitis coignetiae* Pulliat であろう。図示した資料は長さ5.1mm, 幅3.8mm。

タデ属? *Polygonum* L. 図VII-4-8a

タデ属の瘦果らしきものが縄文時代前期後葉の焼土F-17から4粒, 中期中葉のP-12から1粒, 時期の明瞭でない焼土F-40から1粒検出された。ふくらんだ扁平短卵形で頭部が尖り基部がやや丸い紡錘形の正面観を持つ。拡大してみたが, 編目斑紋の痕跡らしきものが見えるだけで, あまり特徴ある構造は観察されなかった。ただし, このような編目斑紋の構造はカヤツリグサ科 (CYPERACEAE) の仲間にも見ることができる。タデ属も種類と変異が多く, 我々の持っている現生比較資料だけでは十分な検討はむづかしい。この場合はヤナギタデ *Polygonum hydropiper* L. の可能性が高いと考える。長さ2.3mm, 幅1.5mm, 厚さ0.75mm。

アサダ属? *Ostrya* scop. 図VII-3-9a

アサダ属の種子 (子葉) ではないか, と見られるものが縄文時代中期~後期初頭の焼土F-33から3粒, 時期のやや不明な焼土F-34から7粒検出されている。どれも加熱のた

めか若干ふくらんでおり、保存はあまりよくない。そのうち、もっとも形態がよく残っていたものを9aに図示しておく。正面観は涙滴を長く引き伸ばしたような形状を持つ。横断面は長楕円形。基部は涙滴の底部にあたる部分か。当初、この資料が何であるかはなかなか判明しなかったが、現在のアサダ *Ostrya japonica* Sarg. の小堅果の果皮を除去し、子葉を観察したところ極めてよく似た比較標本が得られた。それでこの子葉の表面を走査型電子顕微鏡で拡大観察したところ、出土した資料と同様の深い皿状でつながる細胞構造が確認された。ただし、このような構造はゴマ<sup>(2)</sup>にも観察されるので注意したい。9bに示したものは、出土資料に見られた同じ部位の細胞構造である。現生標本とのこうした類似性から、出土資料はアサダとして分類できる可能性が高いと考えたい。図示した資料は長さ4.4mm、幅1.9mm、厚さ1.5mm。

クルミ属 *Juglans* L. 図VII-3-10a, 10b

破碎されたクルミの堅果片がサンプル土壌を採取したほぼ全域から検出されている。表には出土個数ではなく、乾燥重量で示しておいた。こうした出土状態は、縄文時代遺跡にはごく普通に見られる。

不明種子 図VII-3-11

資料が不足して同定がかなわなかった種子があるので、図示しておきたい。ご教示を賜れば幸いである。これ以外に炭化の過程や保存状態の上でダメージが大きく扱うことの出来なかった種子が44粒あった。

#### (4)補遺

ヒエ属、マタタビ属、キハダ属、クルミ属が食用や薬用の植物であることは言うまでもないが、ヤナギタデの実生も香辛料としての利用が知られている。アサダ属の材は美しい紅褐色の心材を持つ重硬で粘り強い性質のものである。ミズキはその逆で、材は柔らかく白色。小細工ものに使われる。両者ともにその材の性質を利用して、アイヌ民族がよく利用していたことが報告されていることに留意したい。

#### 〔謝辞〕

この報文を作成するにあたって、(財)北海道埋蔵文化財センターの越田賢一郎、西脇対名夫の両氏を初め多数の方々にお世話になった。また、整理作業、撮影などについては、いっつもながら椿坂恭代氏の手を煩わせた。末尾ながら感謝の意を表したいと思う。

#### 〔引用文献〕

吉崎昌一

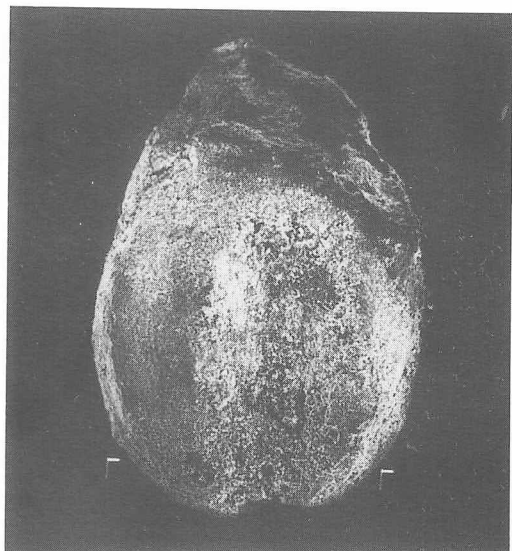
1991：『フゴツベ貝塚から出土した植物遺体とヒエ属種子についての諸問題』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第72集，pp. 535-547 (財)北海道埋蔵文化財センター

#### 〔注〕

- (1) NF-60のNは鳴川右岸遺跡の頭文字，Fは焼土または炉の略号である。表中の記号はこれに準ずる。
- (2) 青森県風張遺跡の縄文時代中期後半の遺跡で、大量のヒエ属種子と共に検出した種子を日本ゴマ学会会長の小林氏の教示でゴマであろうと記載したことがある。しかし今回の作業で、再検討が必要になった。後日、検討結果の詳細について報告したい。

表VII-4 1992・93年 鳴川右岸遺跡出土炭化種子表

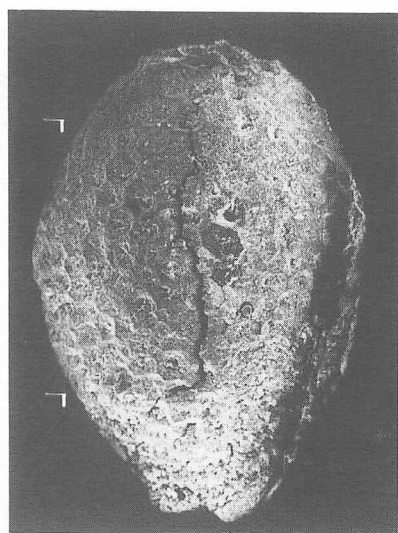
遺構	層位	ヒエ属 (粒)	マタタビ属 (粒)	ニワトコ属 (粒)	キハダ属 (粒)(片)	ウルシ属 (粒)	ミズキ属 (粒)	ブドウ属 (粒)	タデ属? (粒)	アサダ属? (粒)	クルミ属 (g)	不明 (粒)	資料のダメージ大 きく同定不可(粒)	遺構の時期 (縄文)
H-1	HF-1										0.19			
H-3	HF-1										<0.01			中期中葉
P-12	覆土4層								1				2	中期中葉
P-12	覆土7層			1	1		1				<0.01			中期中葉
F-1	焼土										0.05			
F-3	焼土										0.02		1	
F-4	焼土										0.02		1	
F-5	焼土										0.02		1	
F-10	焼土										<0.01			前期後葉
F-12	焼土										<0.01			前期後葉
F-13	焼土										<0.01			前期後葉
F-14	焼土										0.05			前~中期
F-15	焼土										0.24		2	前~中期
F-16	焼土										0.06			前期後葉
F-17	焼土			1					4				6	前期後葉
F-19	焼土										0.43			中期中葉
F-20	焼土				1						<0.01			前期後葉
F-21	焼土										0.03	1		前期後葉
F-22	焼土												3	前期後葉
F-25	焼土				1									
F-26	焼土										<0.01			
F-28	焼土										<0.01			
F-29	焼土										<0.01			
F-31	焼土										<0.01			
F-32	焼土										<0.01		2	
F-33	試料No.1~3			2	1	10				3	0.03		3	中~後期
F-34	焼土					3				7	<0.01		3	
F-37	焼土										<0.01			
F-38	焼土										<0.01			
F-39	焼土										<0.01			
F-40	焼土								1		<0.01			
F-41	焼土										<0.01			
F-42	焼土										<0.01			
F-45	焼土										<0.01			
F-46	焼土										<0.01			
F-49	焼土										<0.01			
F-50	焼土										0.07			中期中葉
F-51	焼土										<0.01			中期中葉
F-52	焼土										0.28			中期中葉
F-53	焼土										<0.01		2	中期中葉
F-55	焼土												1	
F-57	焼土										<0.01			
F-58	焼土										0.04			
F-59	焼土							1			0.17			
F-60	焼土	1									0.18			中期中葉
F-61	焼土										<0.01		1	中期中葉
F-62	焼土							1			<0.01		3	中期中葉
F-64	焼土試料					1					0.05		5	
F-65	焼土試料										<0.01			
F-67	焼土										<0.01		1	中期中葉
F-68	焼土		2				1				<0.01			中期中葉
F-70	焼土										0.66			
F-71	焼土				1	1					0.66		2	後期初頭
F-72	焼土												1	中期中葉
F-73	焼土										<0.01		1	中期中葉
F-75	焼土										<0.01		2	中期中葉
計		1	2	4	2	13	5	2	2	6	10	2.69	1	44



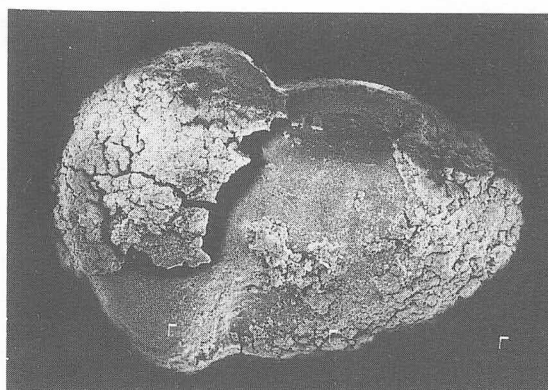
1 ヒエ属 ×35



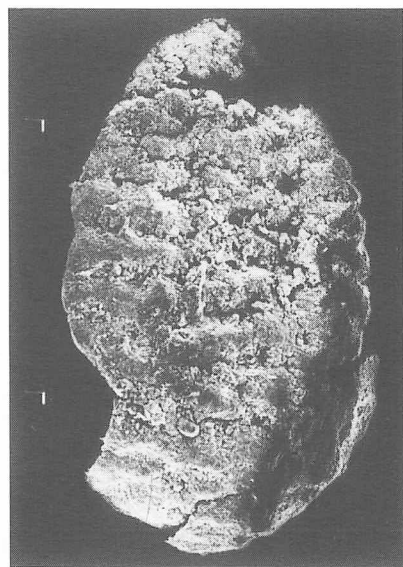
4 キハダ属 ×35



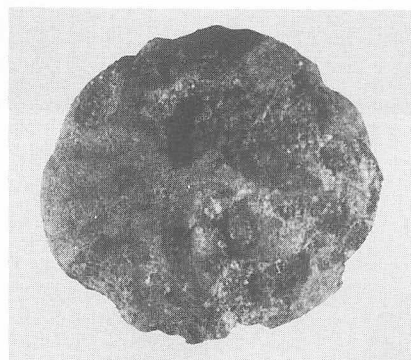
2 マタタビ属 ×35



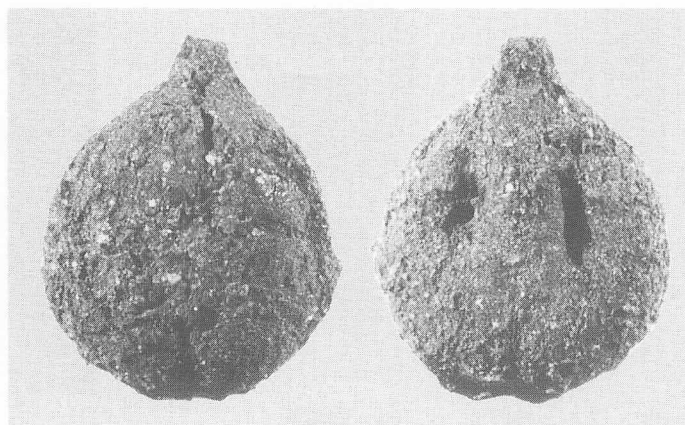
5 ウルシ属 ×35



3 ニワトコ属 ×35



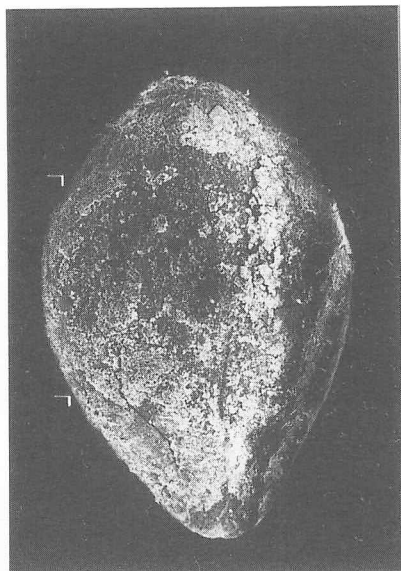
6 ミズキ属



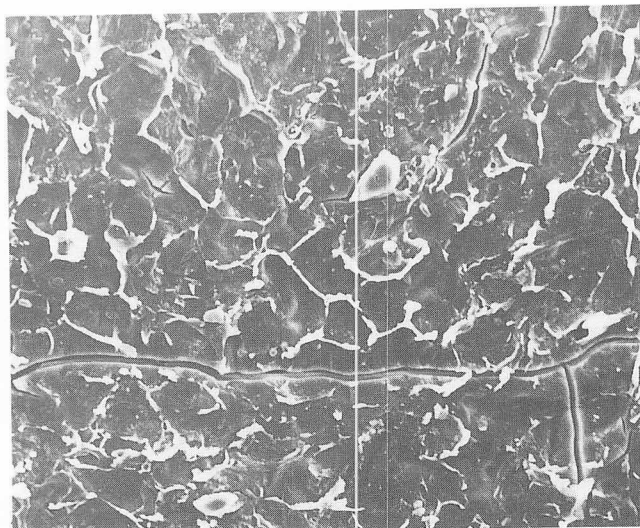
7 a ブドウ属 背面 7 b 同 腹面

図VII-3 出土種子(1) ×000は撮影時の倍率

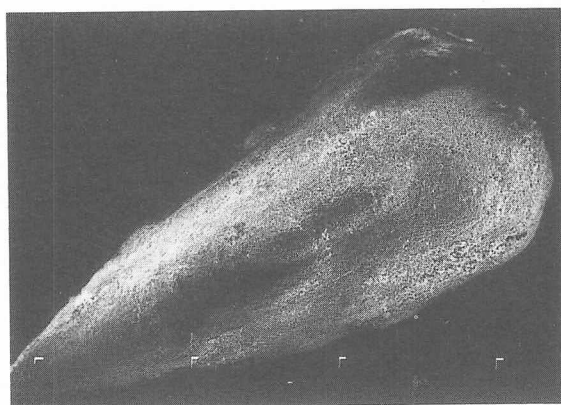




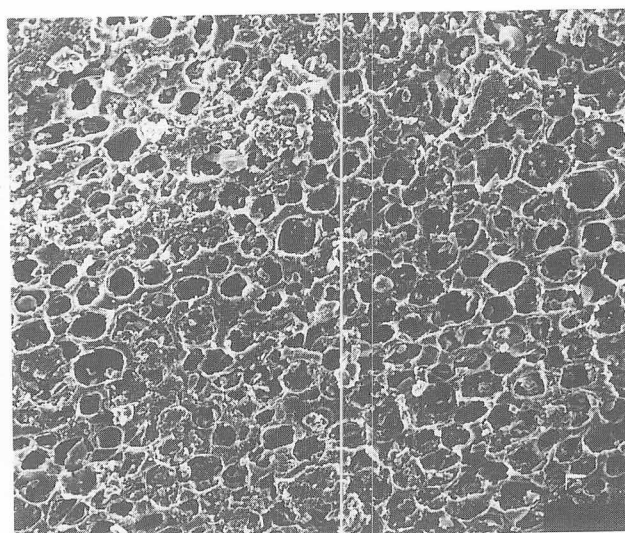
8a タデ属? ×35



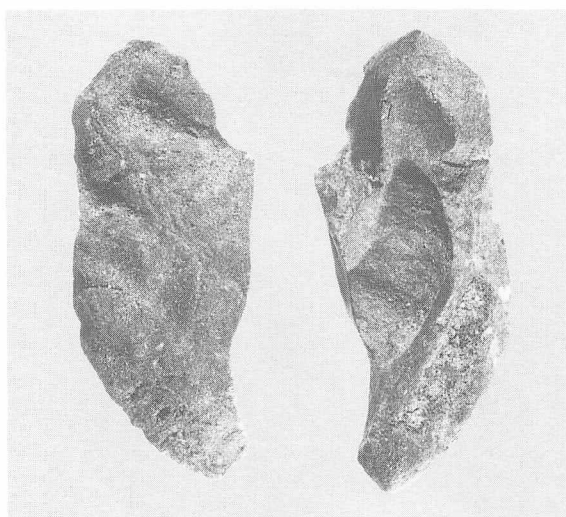
8b 8aの拡大 ×1500



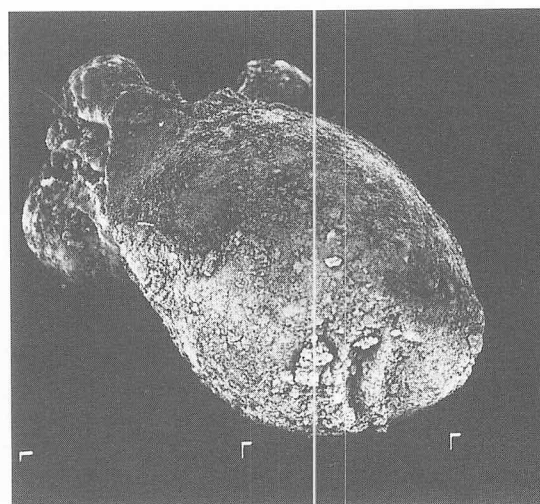
9a マサダ属? ×35



9b 9aの拡大 ×500



10a クルミ核表面 10b 同裏面



11 不明種子 ×35

図VII-4 出土種子(2)

#### 4. 鳴川右岸遺跡住居跡H-4出土の炭化材

##### (1) 出土状況と試料の採取

V章でも記述したように、縄文時代中期の住居跡H-4の床面付近で住居の建築材の一部と思われる炭化材を確認した(図VII-5)。1/20で平面図を作成し、炭化材上端・下端および炭化材下の床面の標高を記録した後、遺存状態が良好で量の多い5点を選んでNo. 1~5の番号を付し全量を取り上げた。明らかな加工の痕は見られなかったので特に保存処理はおこなわず、アルミホイルで包んでコンテナに納め必要以上の粉碎を避けるに留めた。

##### (2) 炭化材の観察

採取した材は風乾の後、直径・年輪数・芯の有無などについて観察した(表VII-5)。いずれも径35~40mm程度の比較的細いもので樹心があり、9~31年輪が数えられた。

##### (3) 樹種同定

乾燥後の炭化材から径2cmほどの塊を選び、これを3分割してそれぞれ木口面・柃目面・板目面が観察できるよう木取り、イオンスパッターリング装置で金被覆(10mA・DC 1.2KVで約2分間、被膜は200Å程度)の後、走査型電子顕微鏡(JEOL-JSM-T200型)を用いて加速電圧25KV、WD20mmで観察した。樹種の同定を農林水産省森林総合研究所の平川泰彦氏に依頼し、結果報告と木材組織についての教示を頂いた。5点全ての樹種が異なり、クワ・カエデ・キハダ・ミズキ・ニレの5属に同定された。(表VII-5)。

##### (4) 年代測定

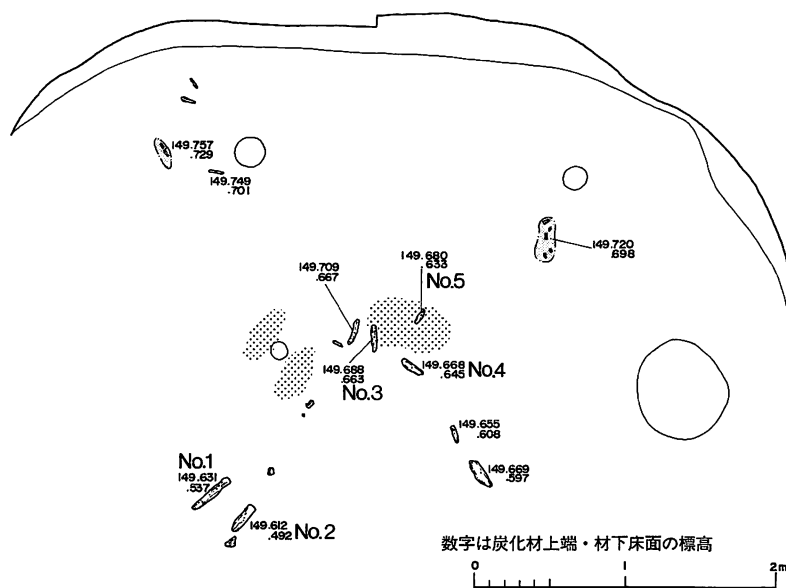
乾燥後の炭化材のうちNo. 2・3・5の3点から約13.0~14.0gの試料を採り、京都産業大学理学部の山田治氏に送付して<sup>14</sup>C年代測定を依頼した(VII章2節)。3点は樹種同定の結果それぞれ明らかに別の材であることが分かっているが、No. 2と3(KSU-2313・2314)では非常に良く一致した値が得られている(表VII-5)。

##### (5) H-4出土炭化材の問題点

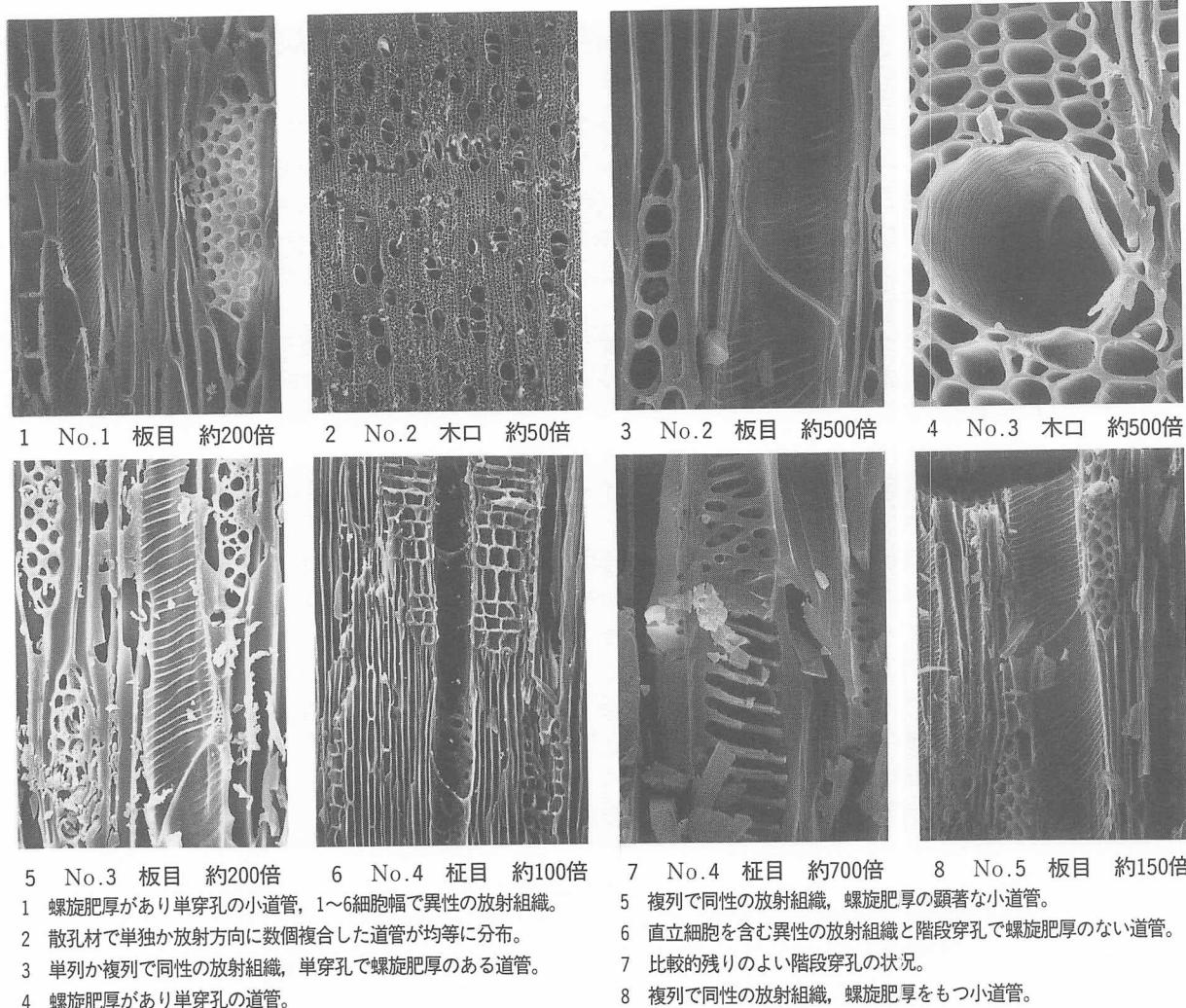
道南地方ではこれまでに函館市西桔梗D遺跡<sup>1</sup>・同石川1遺跡<sup>2</sup>・同桔梗2遺跡<sup>3</sup>・七飯町上藤城7遺跡<sup>4</sup>などで縄文時代中期住居跡出土炭化材の樹種同定がおこなわれており、全てが広葉樹材でクリ材が非常に多く、トネリコ属もしばしば出現することが報告されている。今回の試料も全点広葉樹材と同定されたがクリ・トネリコ属材がなく、キハダ・ミズキ・ニレの3属については道南地方の中期住居跡出土炭化材として初見ではないと思われる。従来中期住居跡でクリ・トリネコ属材と同定されたものの多くが竪穴の周縁部で出土

し、主に壁材ではないかと思われるのに対して、H-4の炭化材は竪穴の中央と周縁を結んで放射状に出土し、屋根材かと想像されるものである。木古内町新道4遺跡のCH-2住居跡は縄文時代後期後葉のものではあるが、トリネコ属を主体にしなからクワ・ニレ・カエデ属などの炭化材も確認され<sup>5</sup>、これら3属は細い炭化材が放射状に出土した点で本遺跡H-4の例に類似している。中期の住居跡についても、建物のどの部位が遺存するかによって確認される樹種が変化するという可能性を考えるべきかも知れない。

(西脇対名夫)



図VII-5 炭化材の出土状況



図VII-6 H-4 出土炭化材の組織

註

1. 石田茂雄 1974 「縄文時代住居址内発見の炭化材について」(千代 肇編 『西桔梗』 函館圏開発事業団 pp. 428-431)
2. 三野紀雄 1988 「石川1遺跡より得た炭化木片について」(勸北海道埋蔵文化財センター編 『函館市石川1遺跡』 同センター pp. 255-259)
3. 三野紀雄 1988 「函館市桔梗2遺跡より得た炭化木片について」(勸北海道埋蔵文化財センター編 『函館市桔梗2遺跡』 同センター pp. 202-206)
4. 三野紀雄 1991 「上藤城7遺跡出土の炭化木片について」(石本省三編 『上藤城7遺跡』 七飯町教育委員会 pp. 70-71, pl. 27)
5. 三野紀雄 1988 「新道4遺跡CH-2住居址から出土した炭化木材の樹種同定」(勸北海道埋蔵文化財センター編 『木古内町新道4遺跡』 同センター pp. 661-664)

表VII-5 試料採取炭化材の一覧表

番号	写真	径mm	心	年輪	割裂・切削	属名	年代測定結果	備考
No.1	1	40	有	9	確認せず	クワ <i>Morus</i>		年輪数は樹心から数えられる最低数。以下同じ。
2	2・3	40	有	12	確認せず	カエデ <i>Acer</i>	KSU-2313:4280±60y.B.P.	11年目に偽年輪?
3	4・5	35	有	17	確認せず	キハダ <i>Phellodendron</i>	KSU-2314:4270±40y.B.P.	
4	6・7	35	有	31	確認せず	ミズキ <i>Cornus</i>		
5	8	35	有	9	確認せず	ニレ <i>Ulmus</i>	KSU-2315:3920±30y.B.P.	



図版 1 遺跡の位置と環境



1. 遺跡遠景（西から）



2. 遺跡付近の地形（北西から）

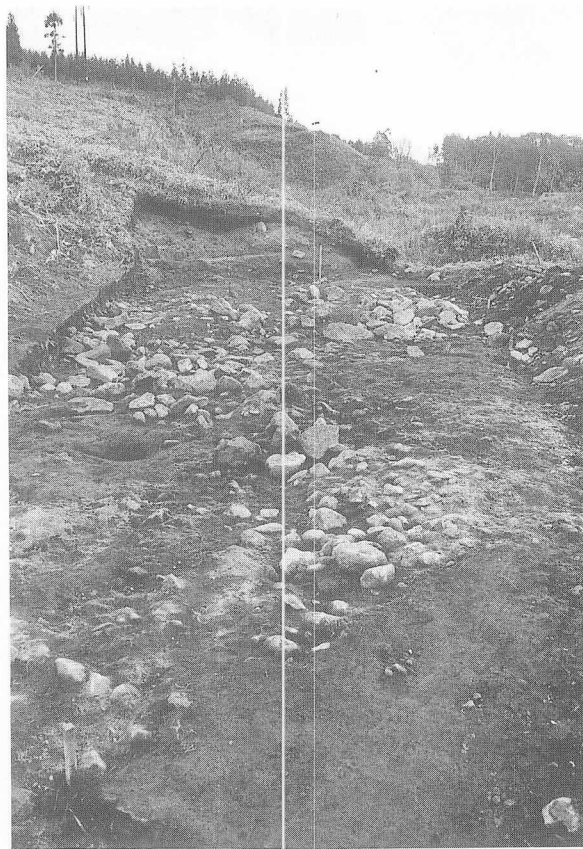
## 図版2 各年度調査区



1. 平成4年度の調査区（南から）



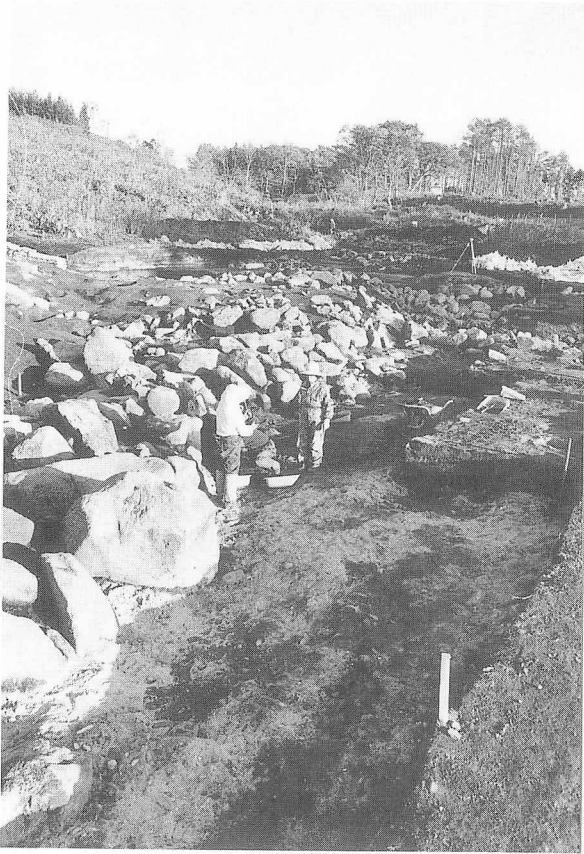
2. 平成5年度の調査区（西から）



3. 砂防工事用地内調査区（西から）



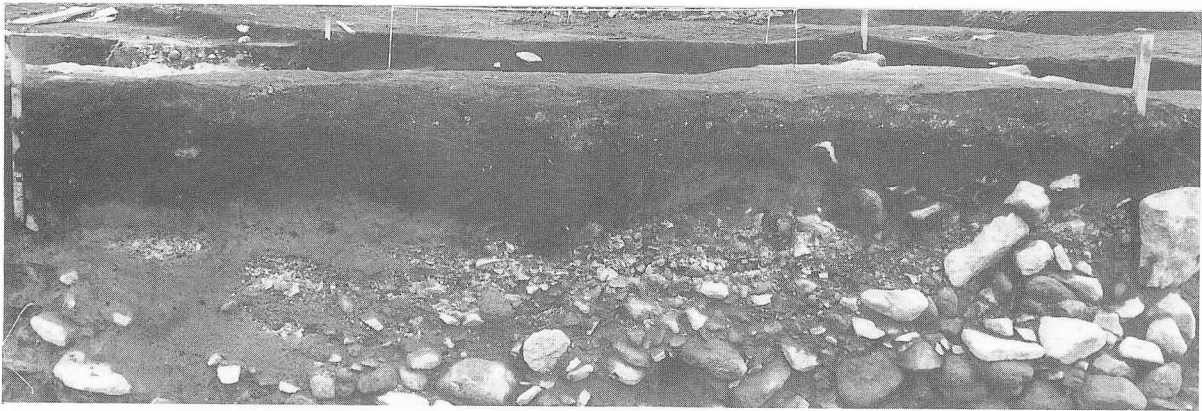
図版3 段丘面1の地形と地層



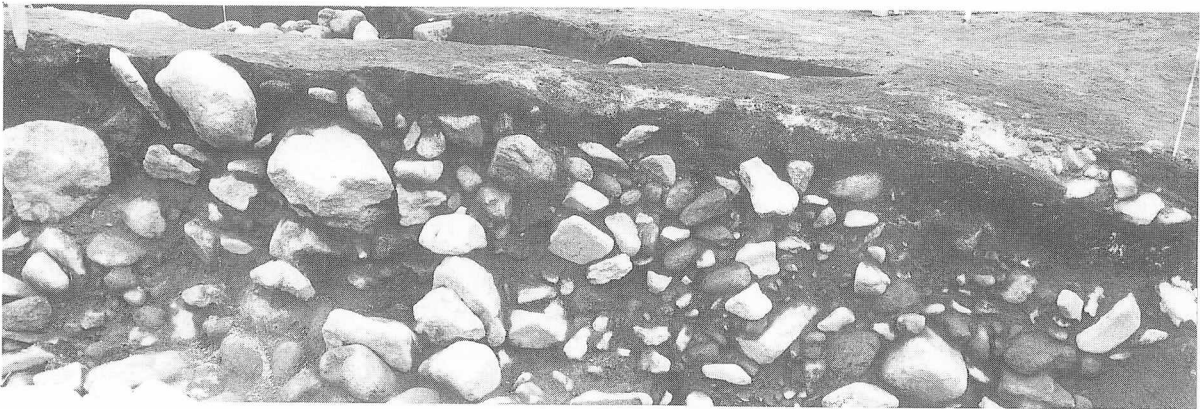
1. 埋没した段丘崖 (右側が段丘面1 北西から)



2. Q-26区の土層断面 (西から)



3. R-26区の土層断面 (北西から)

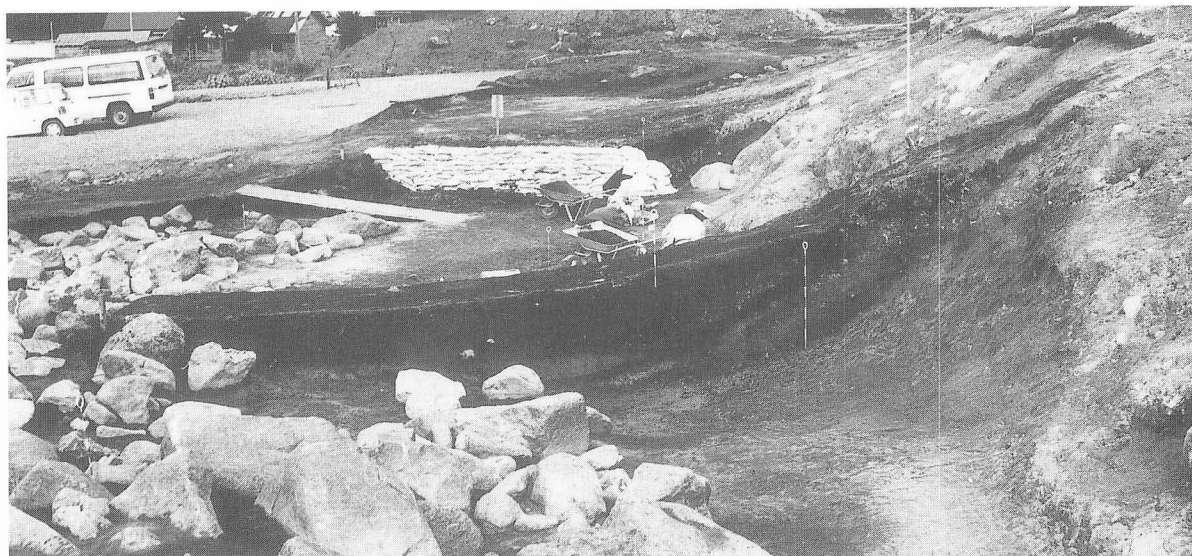


4. S-26区の土層断面 (北西から)

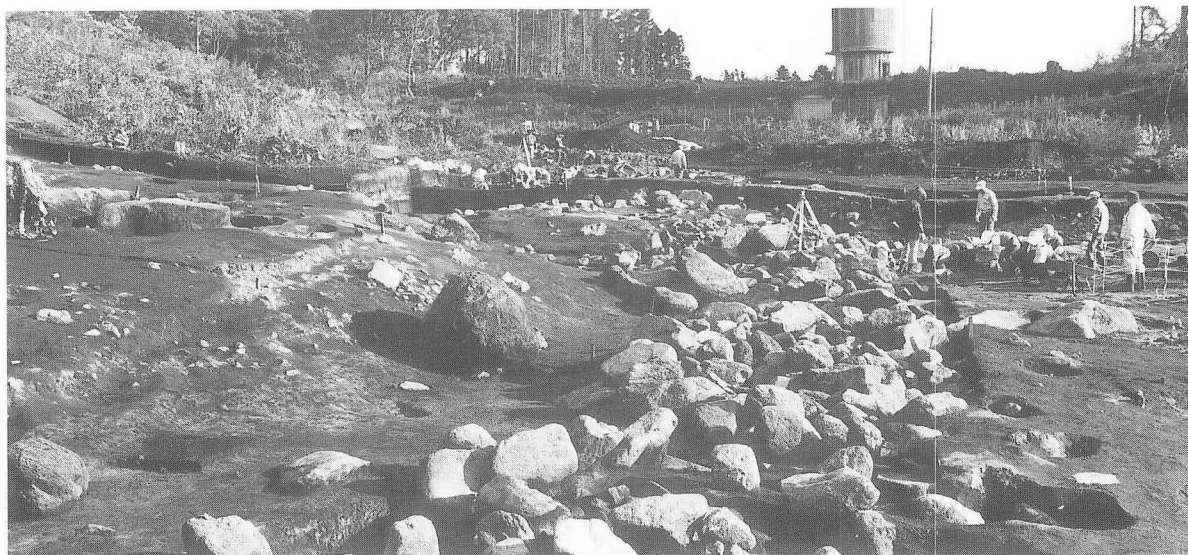
図版 4 段丘面 2 の地形と地層



1. O-26区の土層断面（北西から）



2. P・Q-18区の土層断面（南から）



3. Ko-g層上面の地形（北西から）





1. 焼土群の確認 (M・N-22区 南から)



2. 一括土器6の出土状況 (南から)



3. 一括土器23の出土状況 (西から)



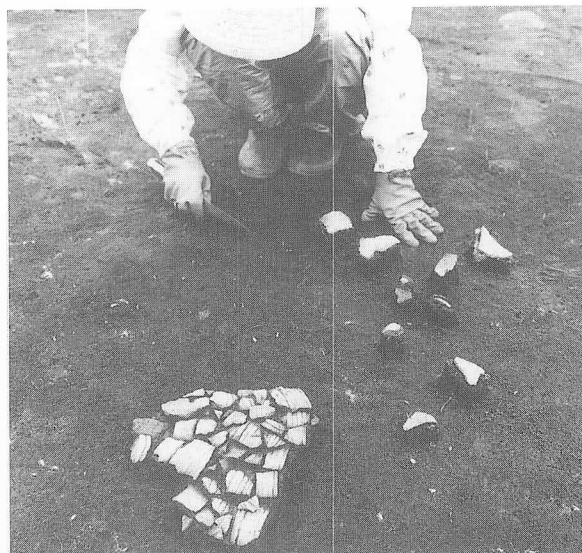
図版 6 段丘面 1 の調査



1. III b1層の調査（西から）



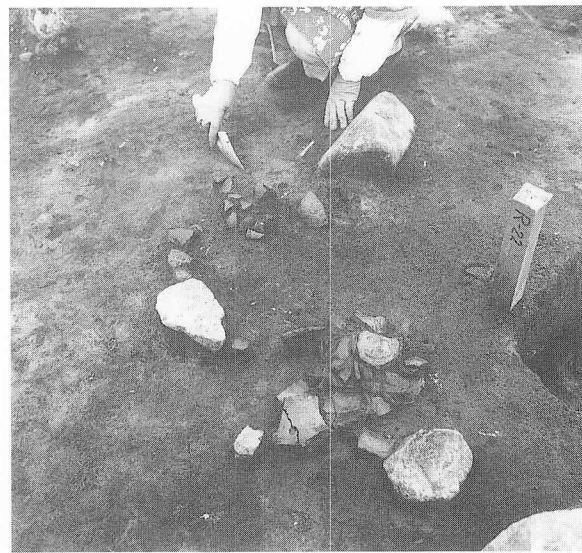
2. B1層上面の地形（南西から）



3. 一括土器29の出土状況（北から）



4. 石囲炉F-71と周囲の遺物（南西から）



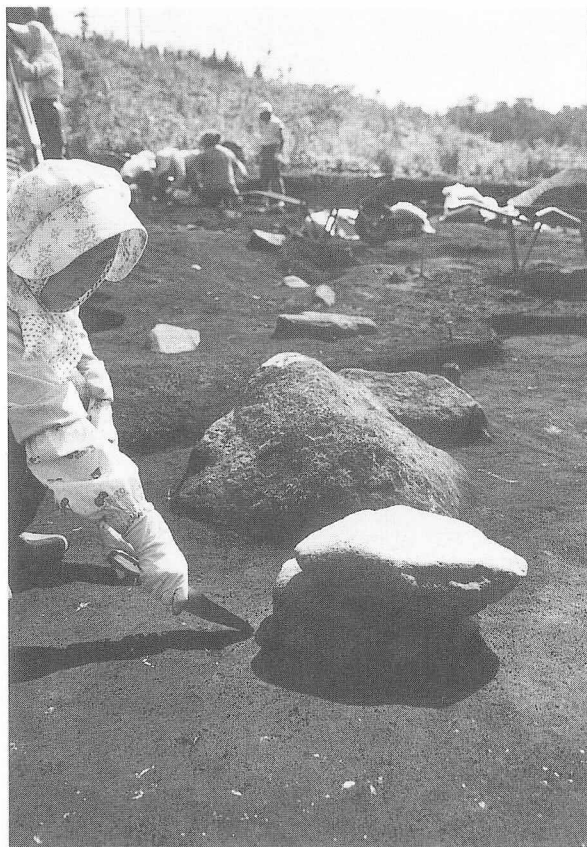
5. 一括土器9の出土状況（東から）



1. F-16~18と周辺の遺物（南から）



2. 一括土器21の出土状況（西から）



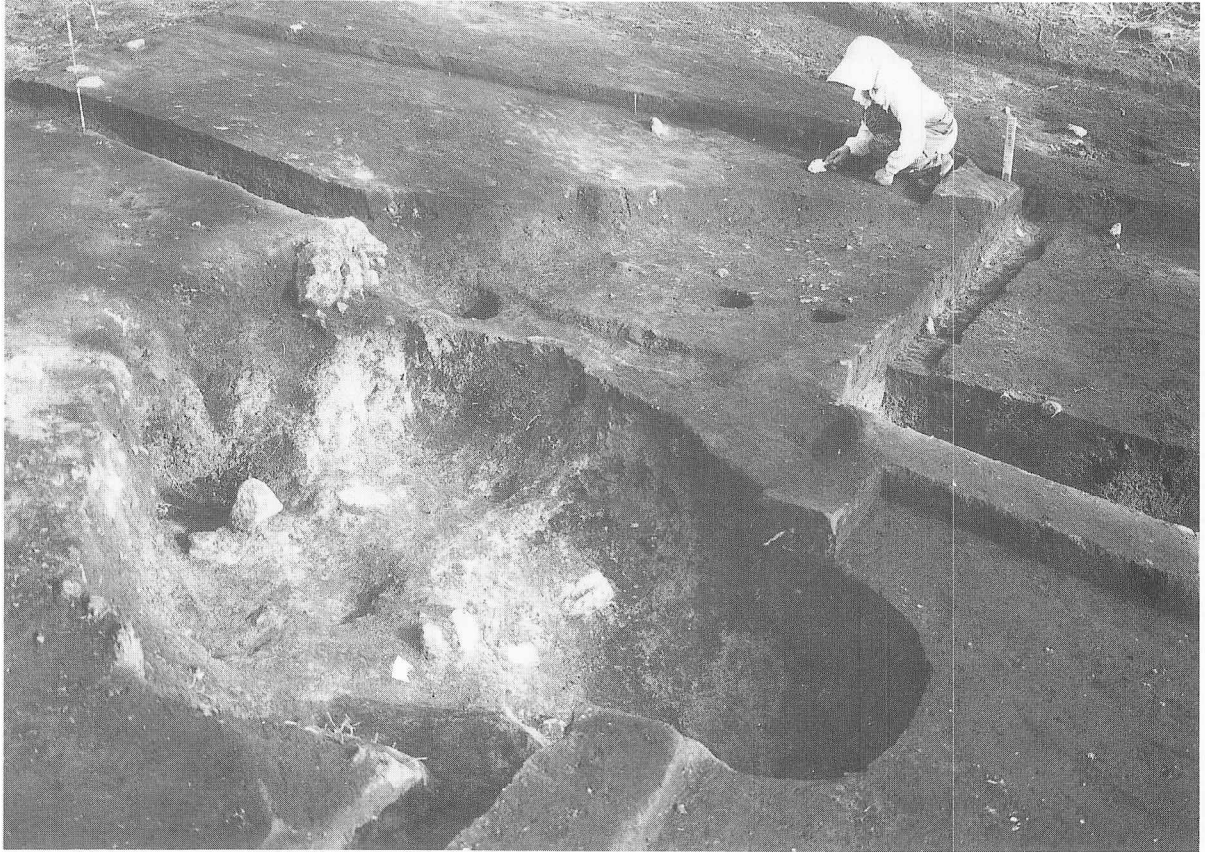
3. 石皿の出土状況（NW-1 北西から）



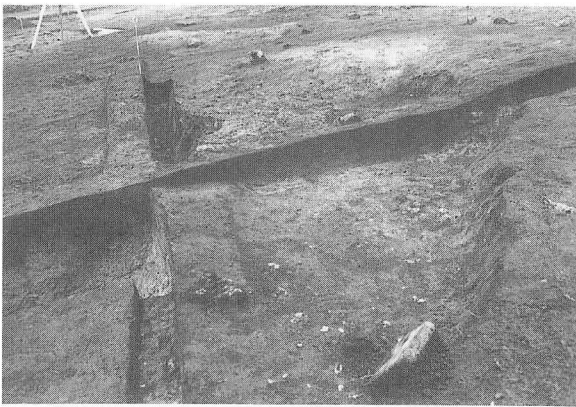
4. 一括石器1の出土状況（南から）



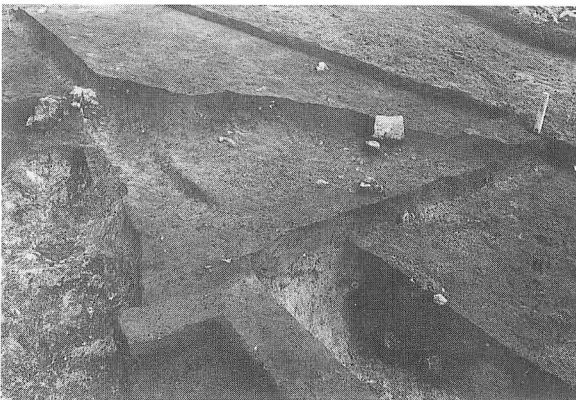
図版 8 住居跡H-1



1. 完堀（北西から）



2. 土層断面（南から）



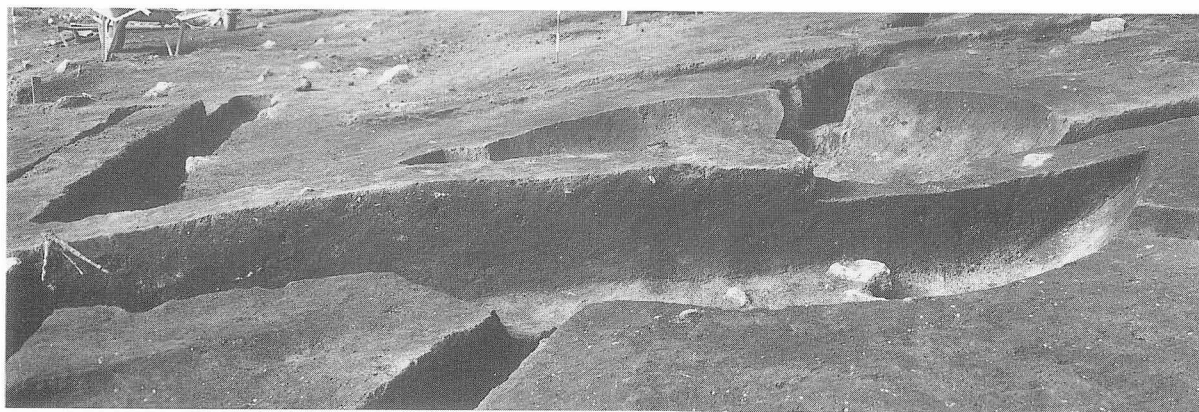
3. 覆土の遺物出土状況（西から）



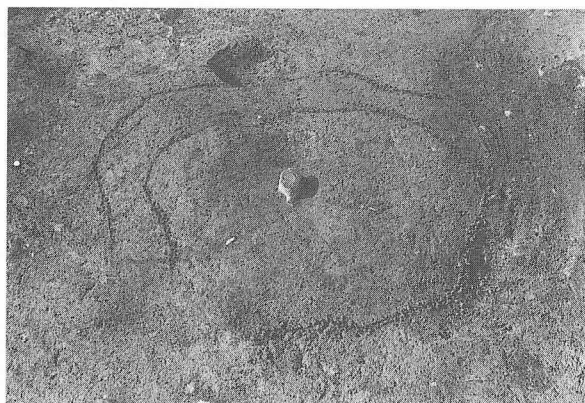
4. 完堀（南から）



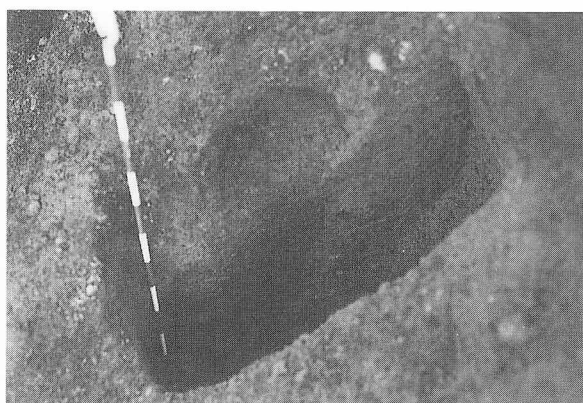
1. 完堀（西から）



2. 土層断面（南東から）



3. 炉跡 HF-1（南東から）



4. 柱穴 HP-1（南から）



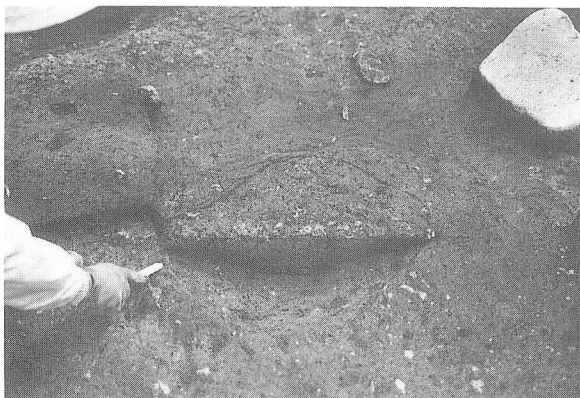
図版10 住居跡H-3



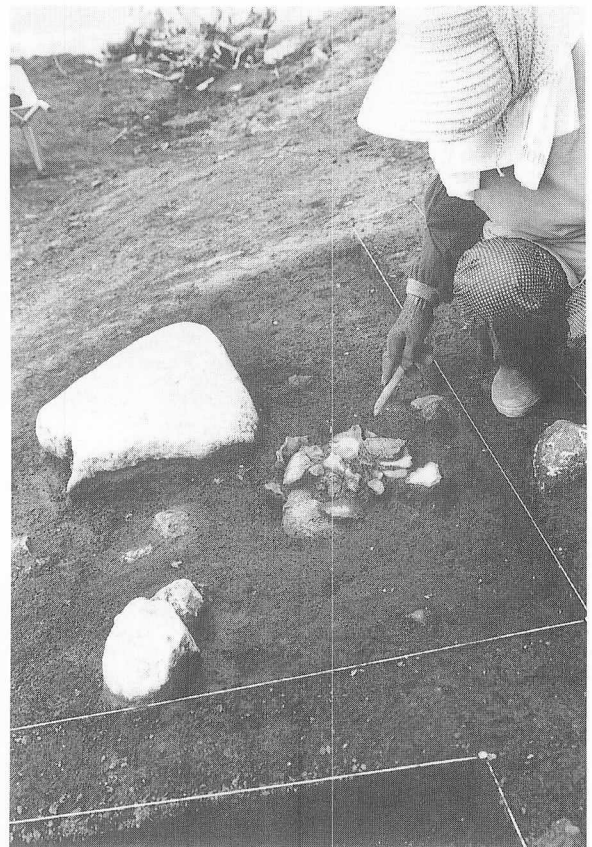
1. 覆土の遺物出土状況（西から）



2. 遺構確認（西から）



3. 炉跡 HF-1（西から）



4. 一括土器17の出土状況（南東から）



1. 完堀（西から）



2. 覆土の遺物出土状況（南から）



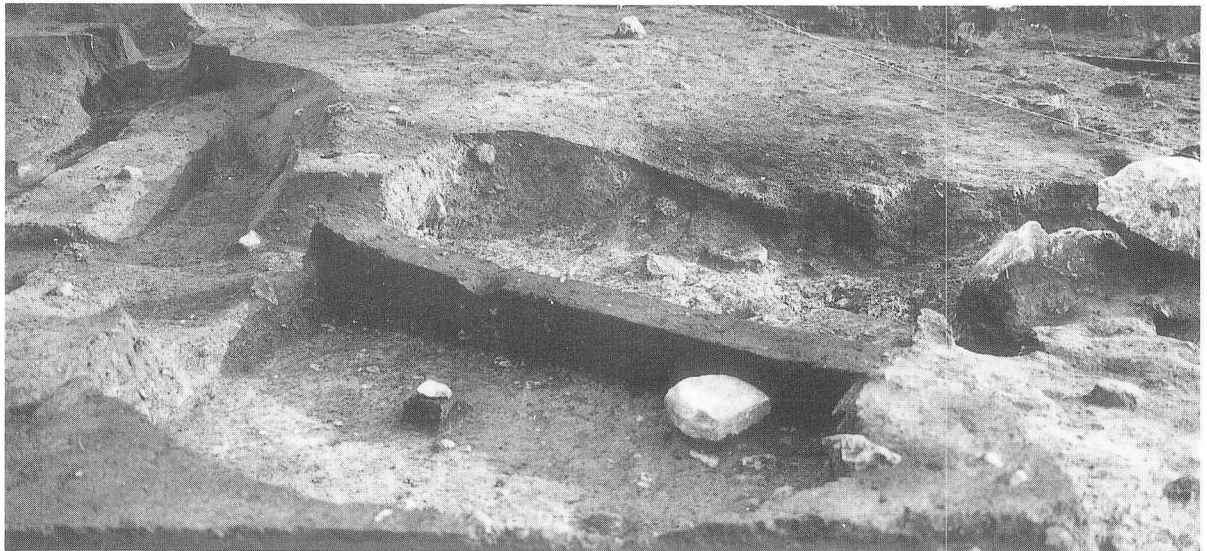
3. 一括土器25の出土状況（南西から）



図版12 住居跡H-5



1. 完堀（南から）



2. 土層断面（西から）



1. P-3 完堀 (南から)



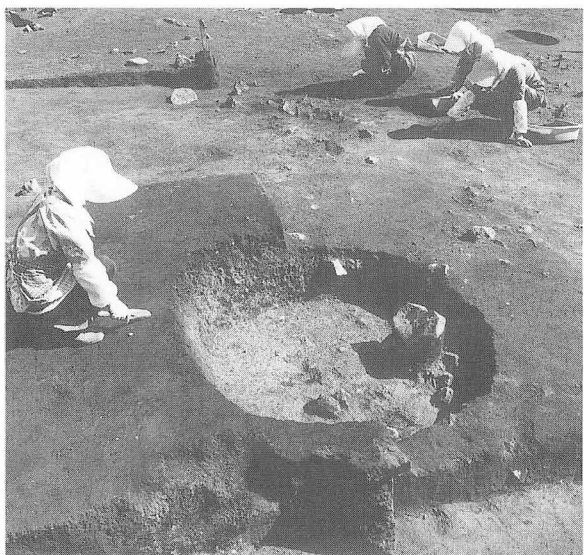
2. P-4 完堀 (南から)



3. P-5 覆土の遺物出土状況 (南から)



4. P-5 完堀 (南西から)



5. P-33 完堀 (西から)



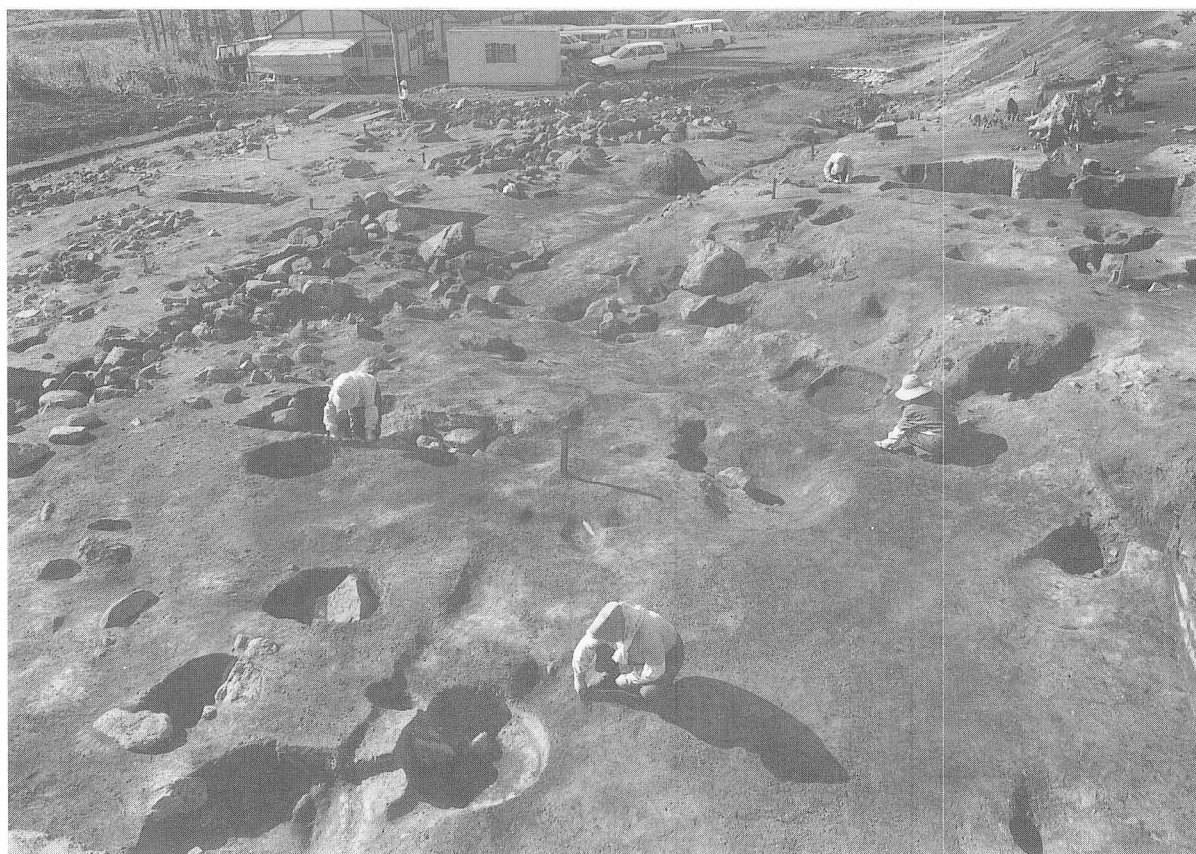
6. P-42 完堀 (南から)



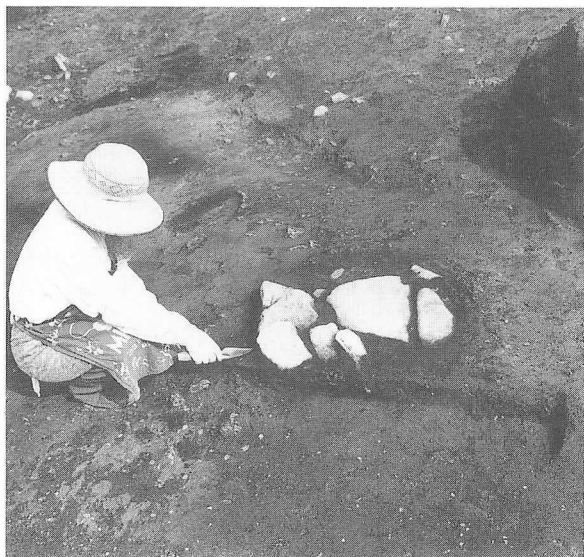
図版14 土壌B類(1)



1. 斜面の土壌群 (南東から)



2. 段丘面2の土壌群 (南東から)



1. P-8 確認 (南西から)



2. P-8 覆土の遺物出土状況 (南西から)



3. P-9 覆土の遺物出土状況 (西から)



4. P-9 完掘 (西から)



5. P-12 覆土の遺物出土状況 (南から)



6. P-12 完掘 (西から)



図版16 土壌B類(2)



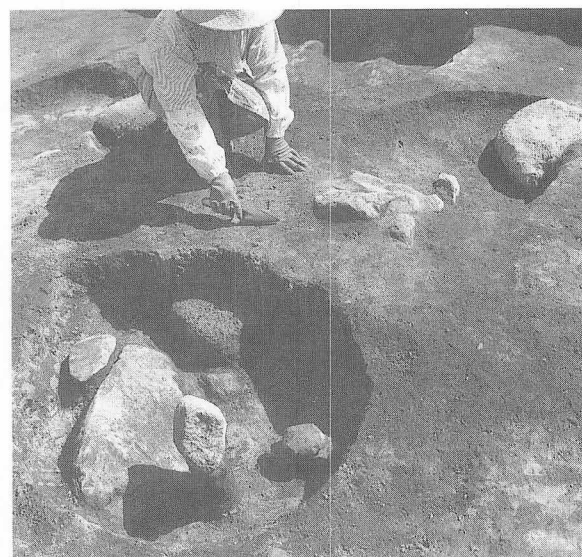
1. P-20覆土の遺物出土状況(西から)



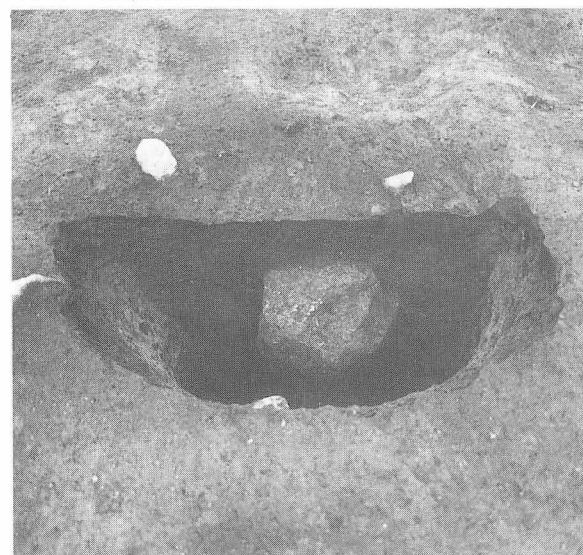
2. P-20完掘(西から)



3. P-22土層断面(南西から)



4. P-22完掘(西から)



5. P-29土層断面(南西から)



6. P-29完掘(西から)

図版17 土壌B類(3)・その他の土壌



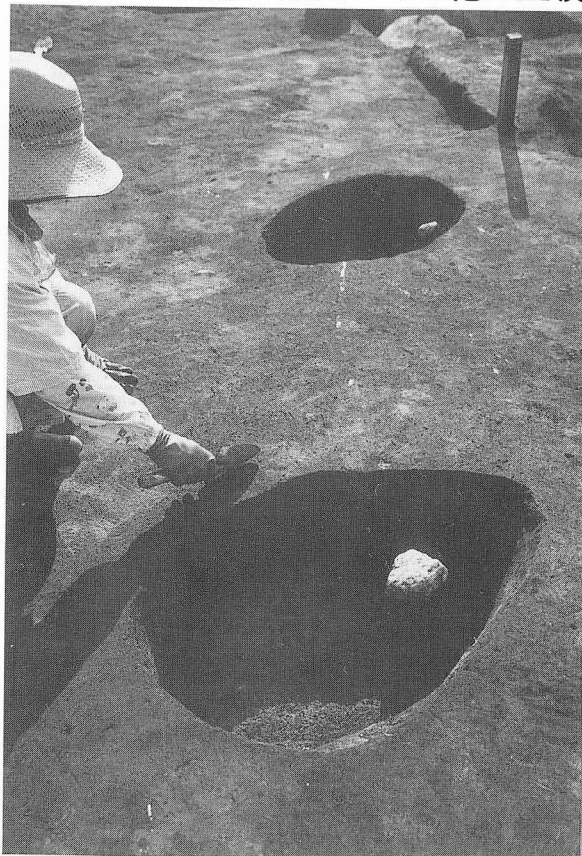
1. P-35覆土の遺物出土状況（南西から）



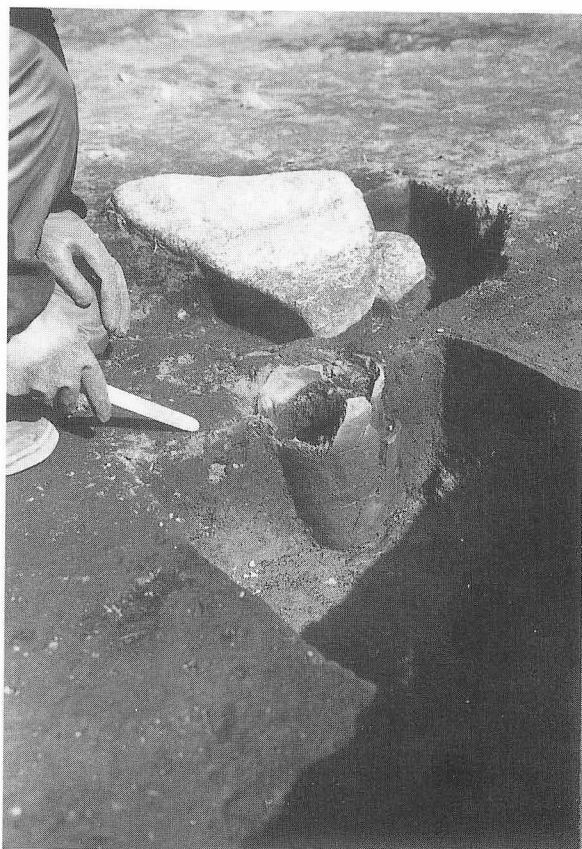
2. P-44覆土の遺物出土状況（東から）



3. P-36覆土の遺物出土状況（南から）



4. P-10・11完掘（東から）



5. 埋設土器1の遺物出土状況（南から）



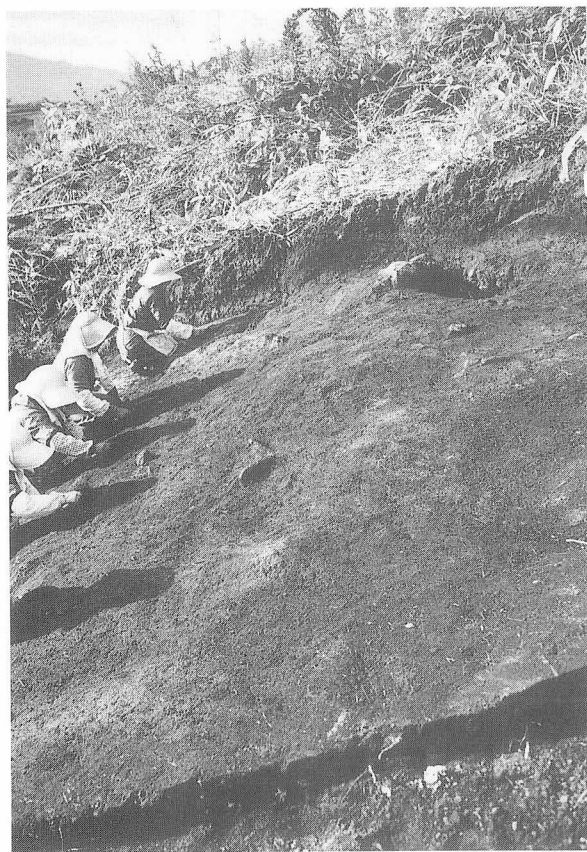
図版18 斜面の焼土



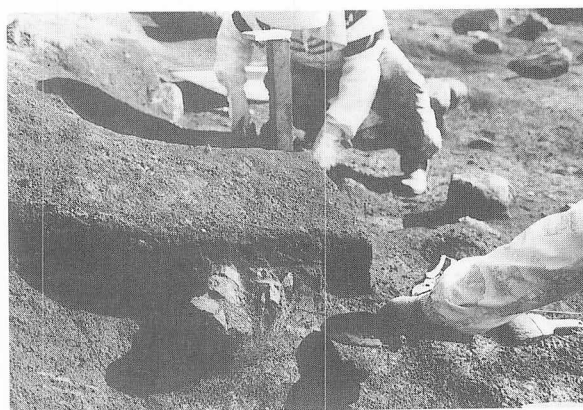
1. F-2・3と一括土器2出土状況（南東から）



2. F-57~59確認（南東から）



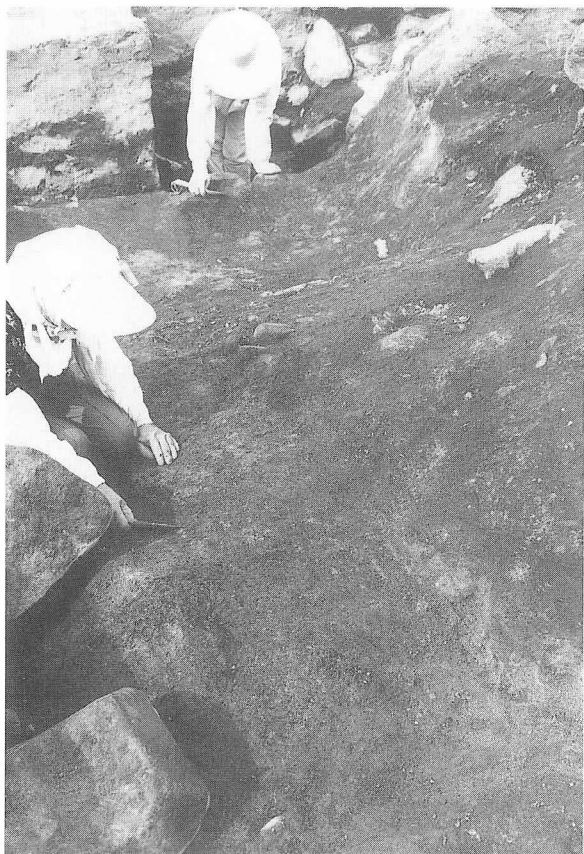
3. F-65確認（南東から）



4. F-64覆土の遺物出土状況（北西から）



5. F-64土層断面（南東から）



1. F-61・62確認 (南から)



2. F-69確認 (南東から)



3. F-12完堀 (南西から)



4. F-22確認 (北西から)



図版20 土器(1)



1. H-2の土器



2. H-3の土器



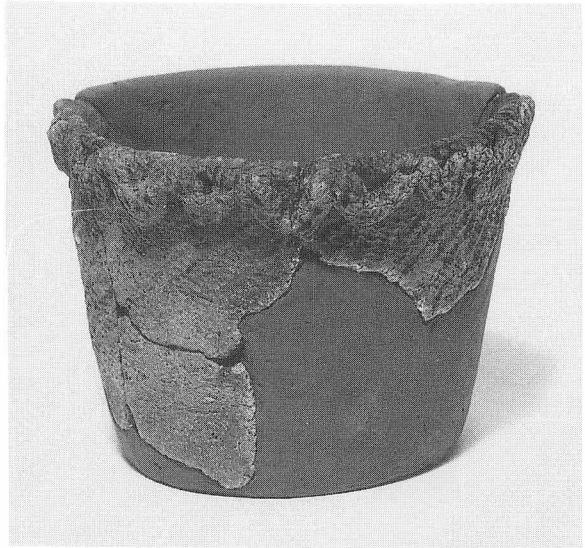
3. H-4の土器



4. P-13の土器



1. P-36の土器



2. F-17・18周辺の土器



3. II群B類 (図VI-10-2)



4. III群A類 (図VI-29-135)



図版22 土器(3)



1. II群B類 (図VI-10-4)



2. II群B類 (図VI-10-5)



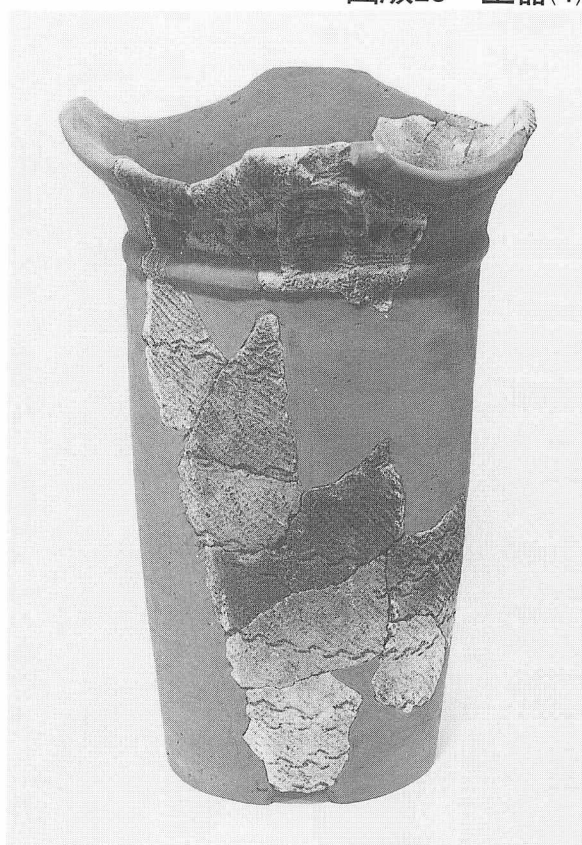
3. II群B類 (図VI-10-6)



4. II群B類 (図VI-11-7)



1. II群B類 (図VI-11-12)



2. III群A類 (図VI-16-57)



3. III群A類 (図VI-16-58)



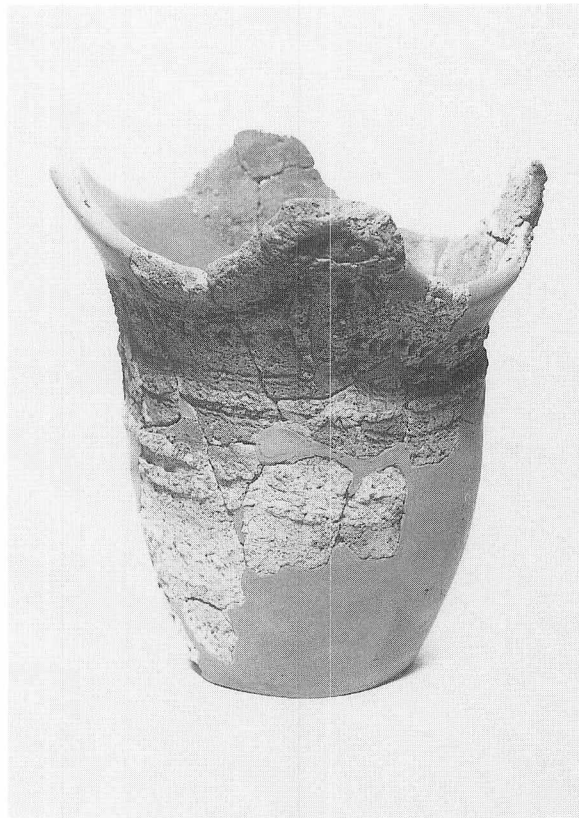
4. III群A類 (図VI-17-61)



図版24 土器(5)



1. III群A類 (図VI-18-62)



2. III群A類 (図VI-19-63)



3. III群A類 (図VI-19-66)



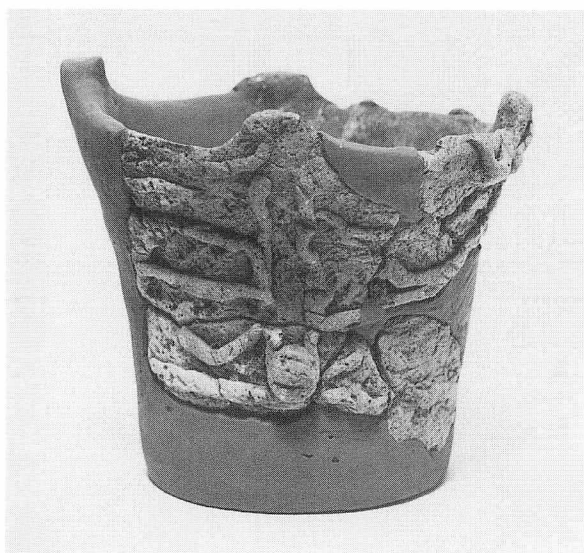
4. III A類 (図VI-20-68)



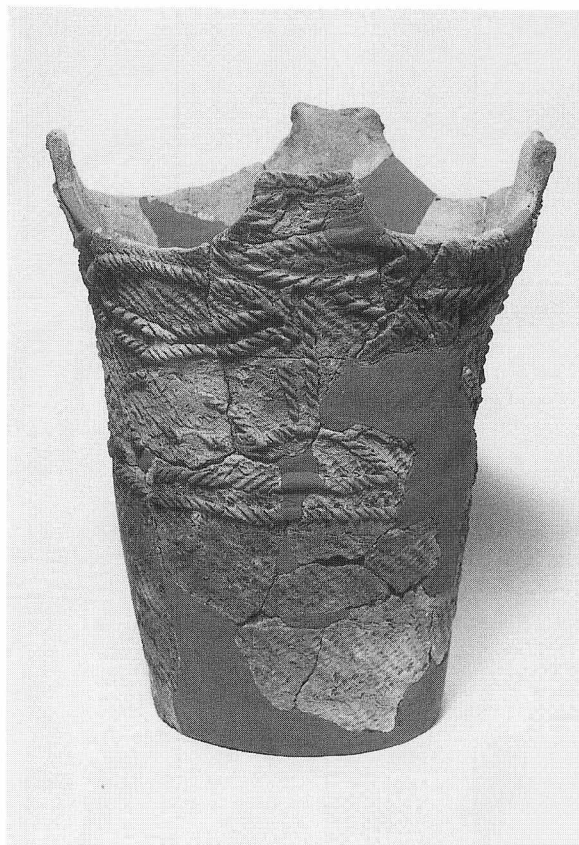
1. III群A類 (図VI-20-69)



2. III群A類 (図VI-20-70)



3. III群A類 (図VI-20-72)



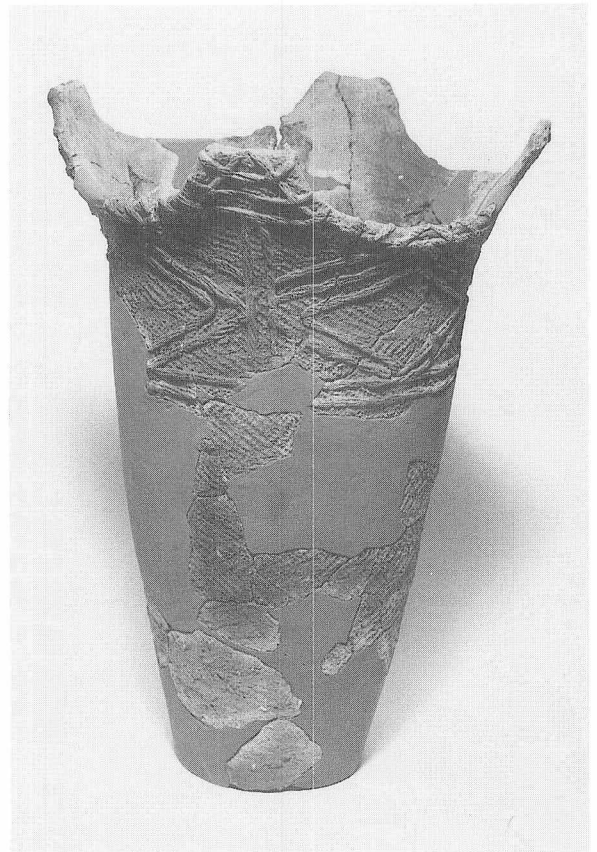
4. III群A類 (図VI-20-73)



図版26 土器(7)



1. III群A類 (図VI-21-75)



2. III群A類 (図VI-21-76)



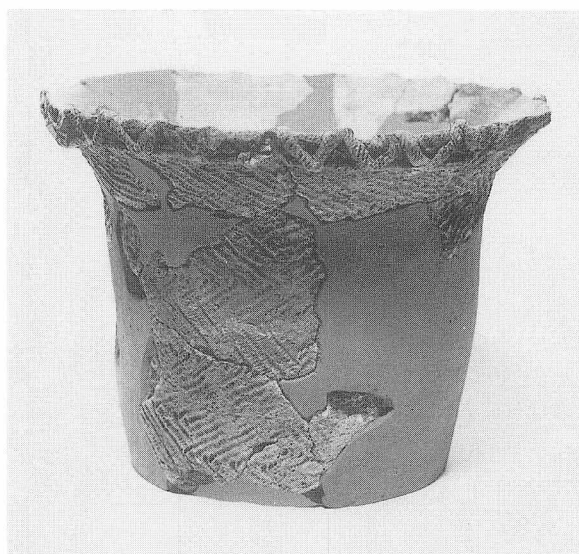
3. III群A類 (図VI-21-78)



4. III群A類 (図VI-22-79)



1. III群A類 (図VI-23-83)



2. III群A類 (図VI-23-84)



3. III群A類 (図VI-23-85)



4. III群A類 (図VI-23-87)



図版28 土器(9)



1. III群A類 (図VI-23-88)



2. III群A類 (図VI-24-91)

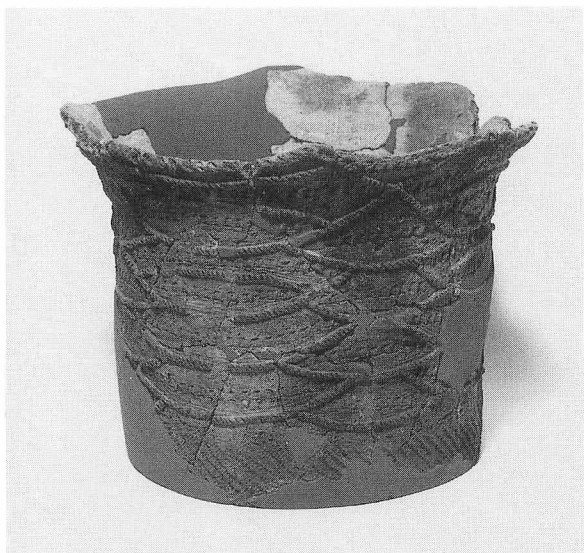


3. III群A類 (図VI-24-93)



4. III群A類 (図VI-24-94)

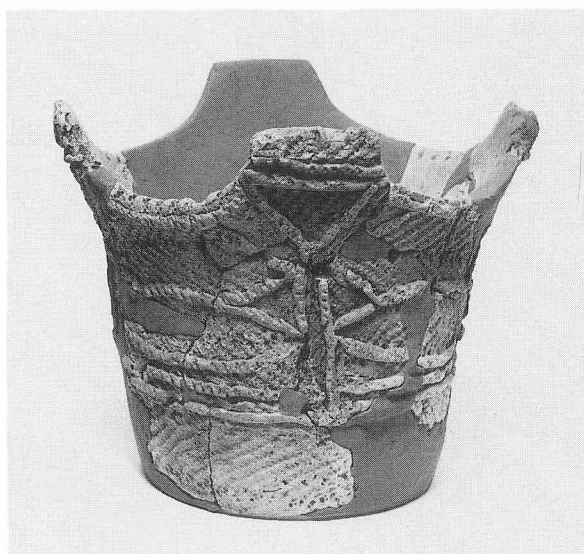




1. III群A類 (図VI-24-95)



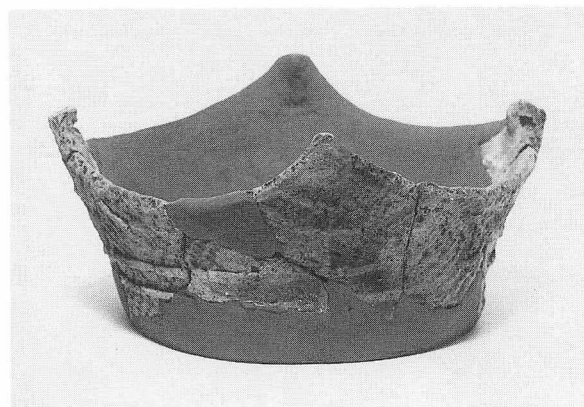
2. III群A類 (図VI-24-96)



3. III群A類 (図VI-24-97)



4. III群A類 (図VI-24-89)



5. III群A類 (図VI-25-101)



6. III群A類 (図VI-25-103)

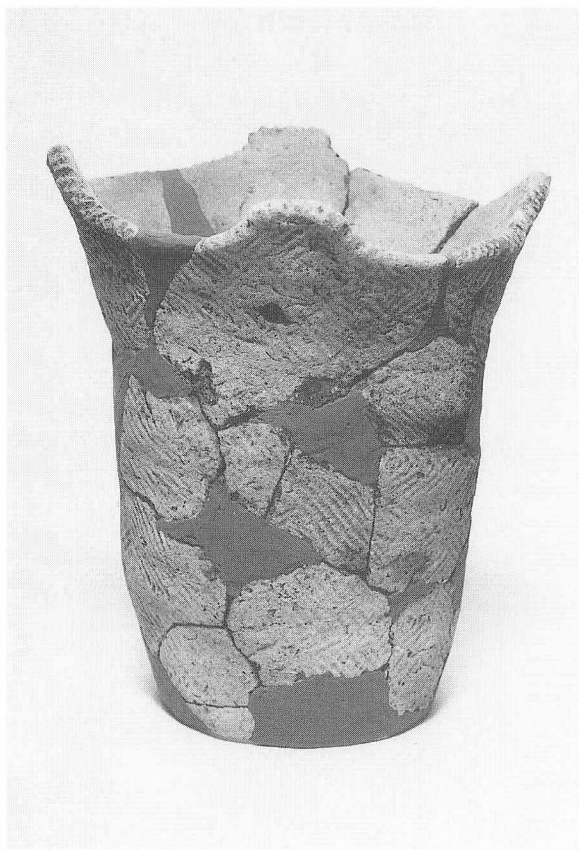
図版30 土器(1)



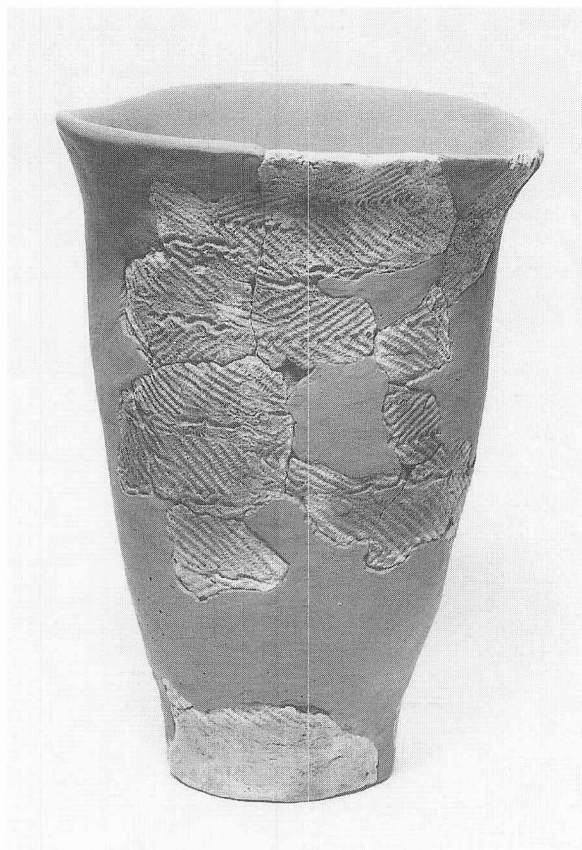
1. III群A類 (図VI-25-99)



2. III群A類 (図VI-25-100)



3. III群A類 (図VI-25-104)

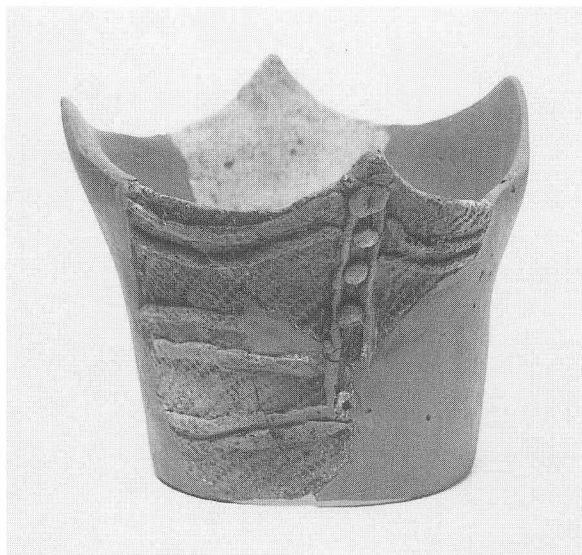


4. III群A類 (図VI-25-105)





1. III群A類 (図VI-25-106)



2. III群A類 (図VI-26-107)



3. III群A類 (図VI-26-108)



4. III群A類 (図VI-26-109)

図版32 土器(13)



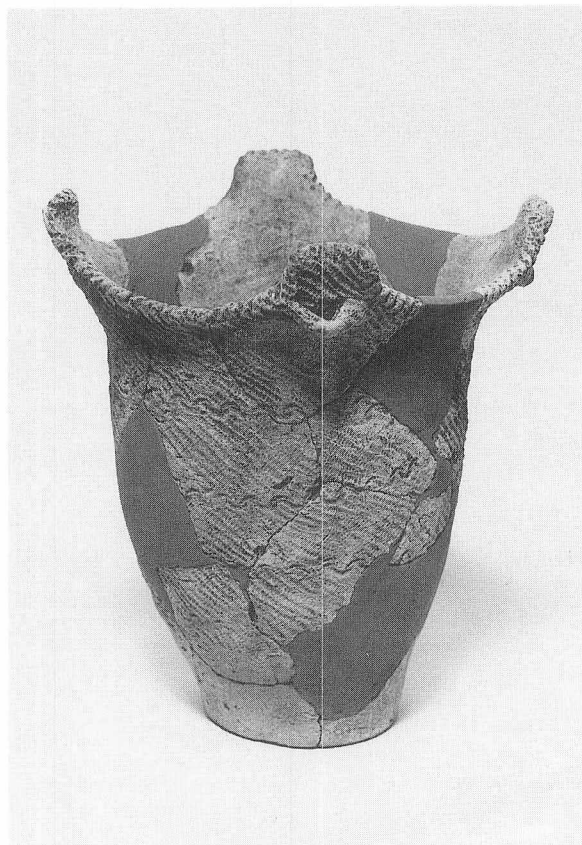
1. III群A類 (図VI-26-110)



2. III群A類 (図VI-26-112)

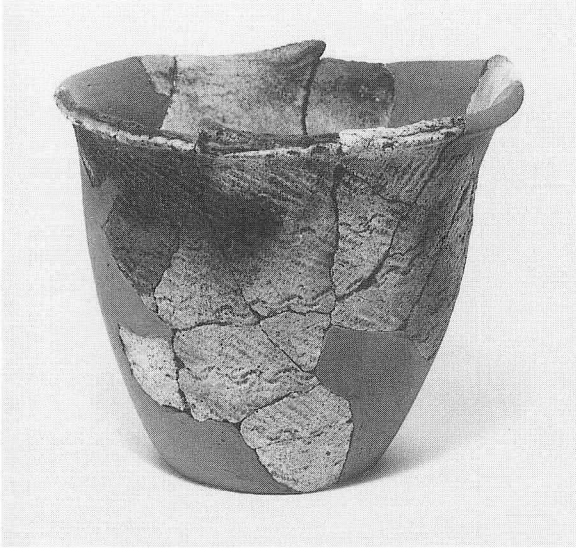


3. III群A類 (図VI-26-111)

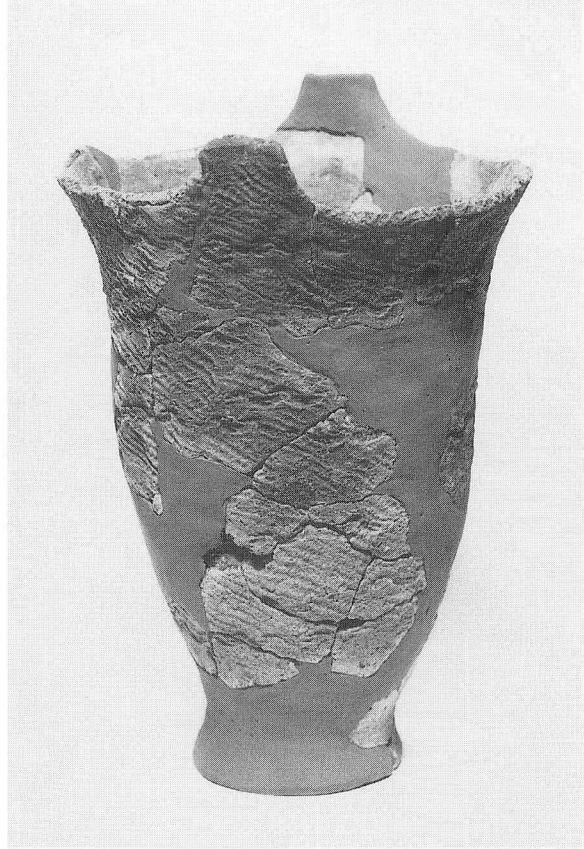


4. III群A類 (図VI-26-113)





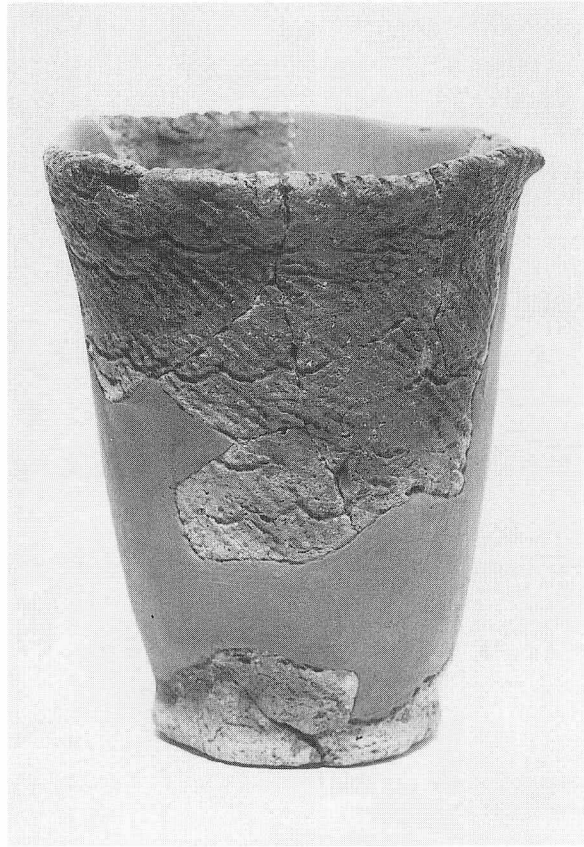
1. III群A類 (図VI-27-115)



2. III群A類 (図VI-27-116)



3. III群A類 (図VI-27-117)



4. III群A類 (図VI-27-118)

図版34 土器(15)



1. III群A類 (図VI-27-119)



2. III群A類 (図VI-26-114)



3. III群A類 (図VI-27-120)



4. III群A類 (図VI-27-121)





2. III群A類 (図VI-28-124)



1. III群A類 (図VI-28-122)



3. III群A類 (図VI-28-125)



4. III群A類 (図VI-28-126)



図版36 土器(17)



1. III群A類 (図VI-29-128)



2. III群A類 (図VI-29-129)



3. III群A類 (図VI-29-130)



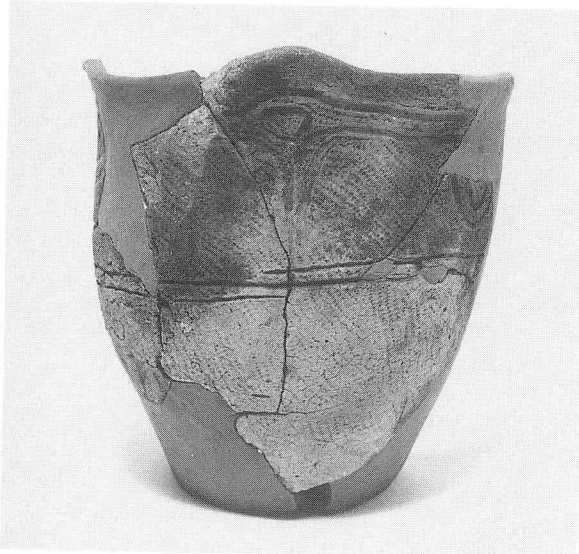
4. III群A類 (図VI-29-131)



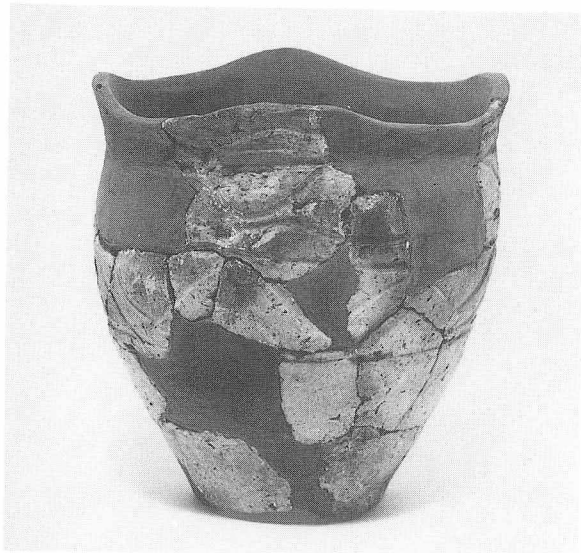
1. III群A類 (図VI-29-132)



2. III群A類 (図VI-29-135)



3. III群B類 (図VI-42-249)

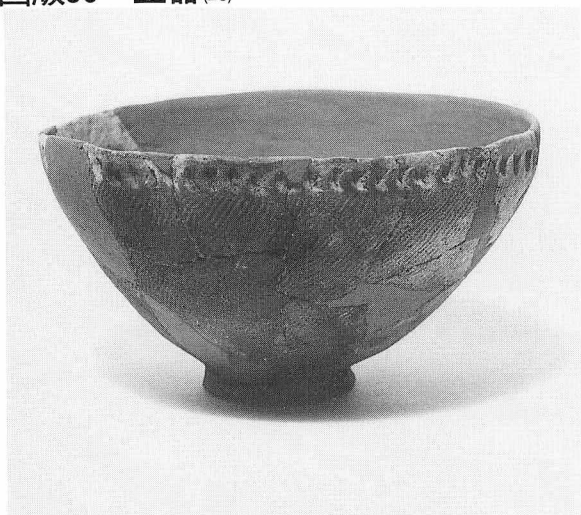


4. IV群A類 (図VI-43-259)



5. VI群A類 (図VI-43-258)

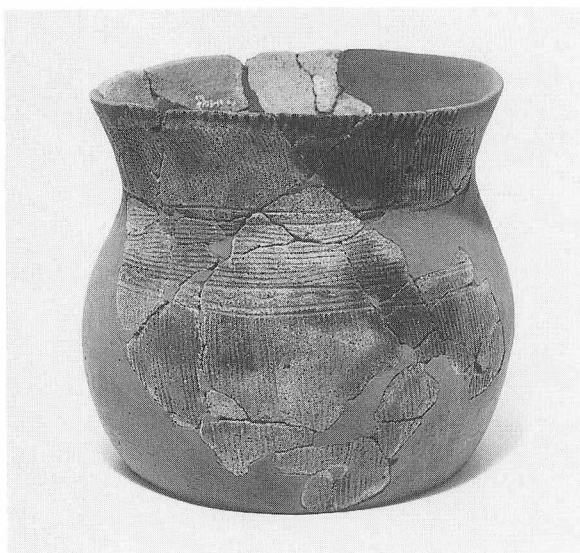
図版38 土器(19)



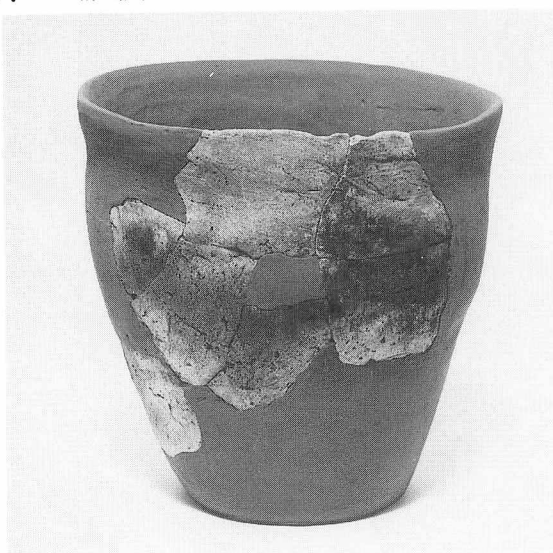
1. V群A類 (図VI-44-277)



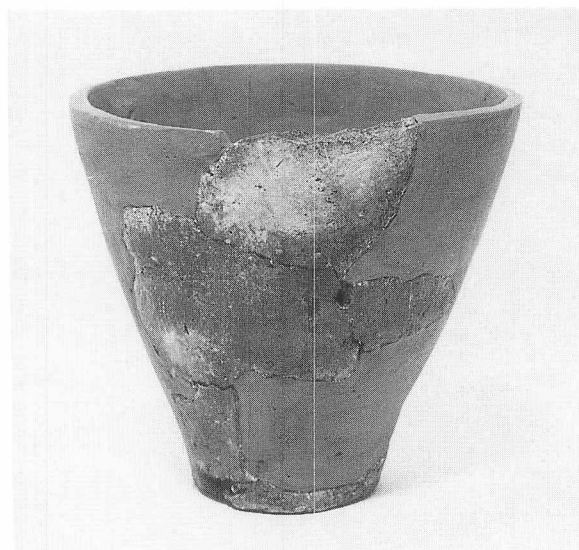
2. V群B類 (図VI-44-279)



3. VI群 (図VI-45-296a)

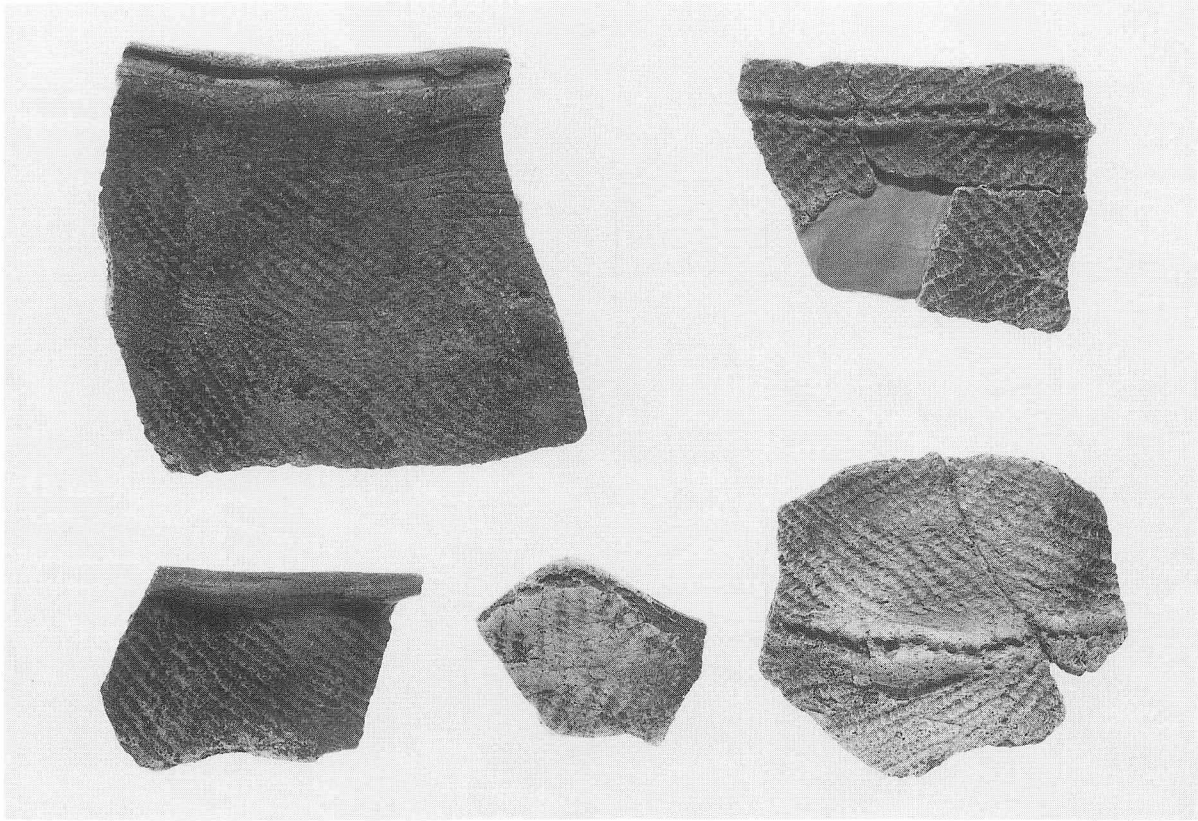


4. (図VI-45-300)

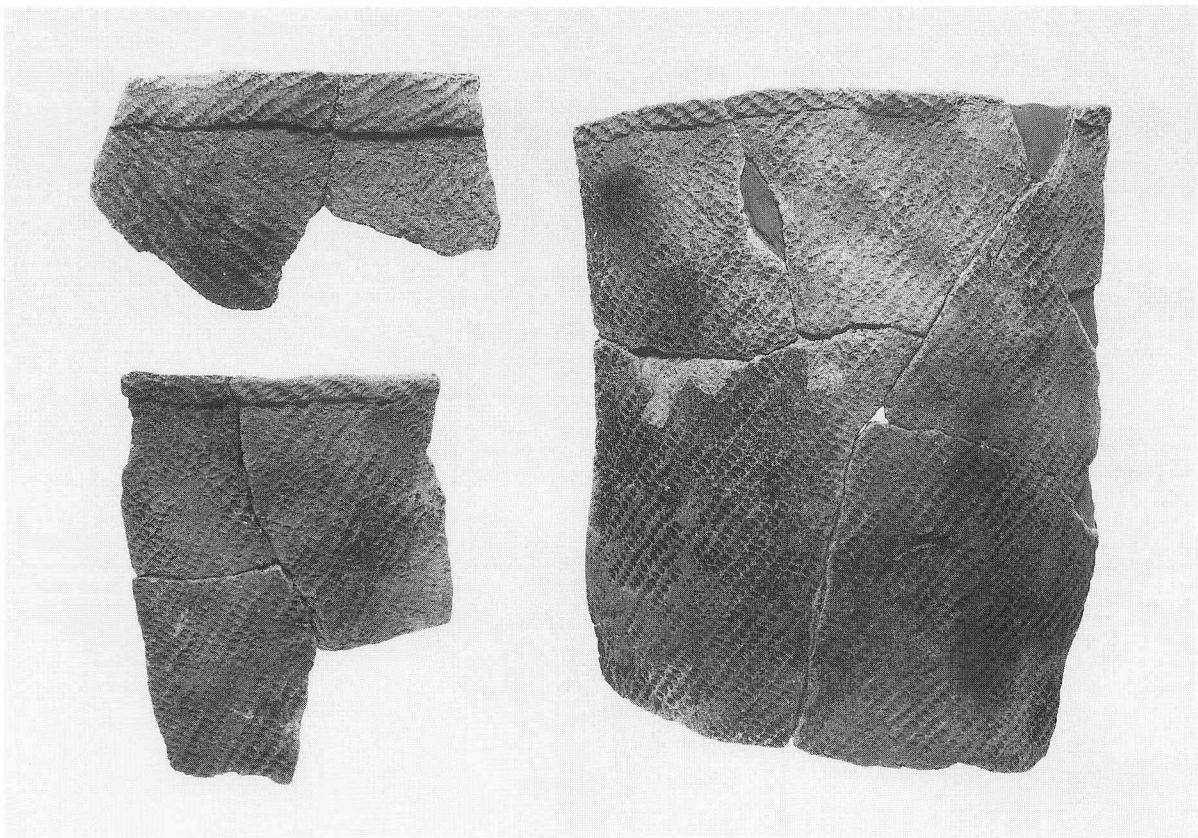


5. (図VI-45-301)

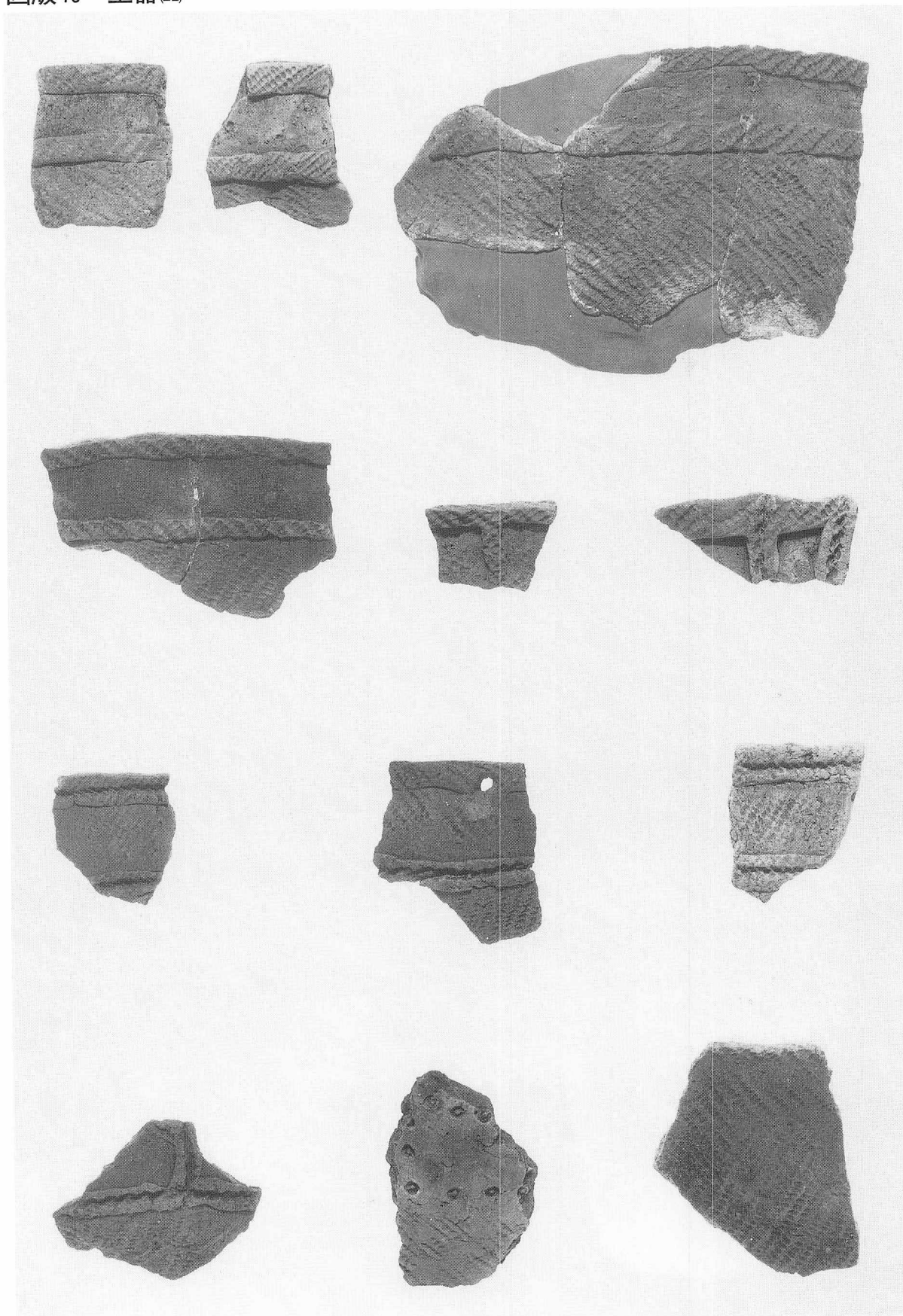




1. III群B類

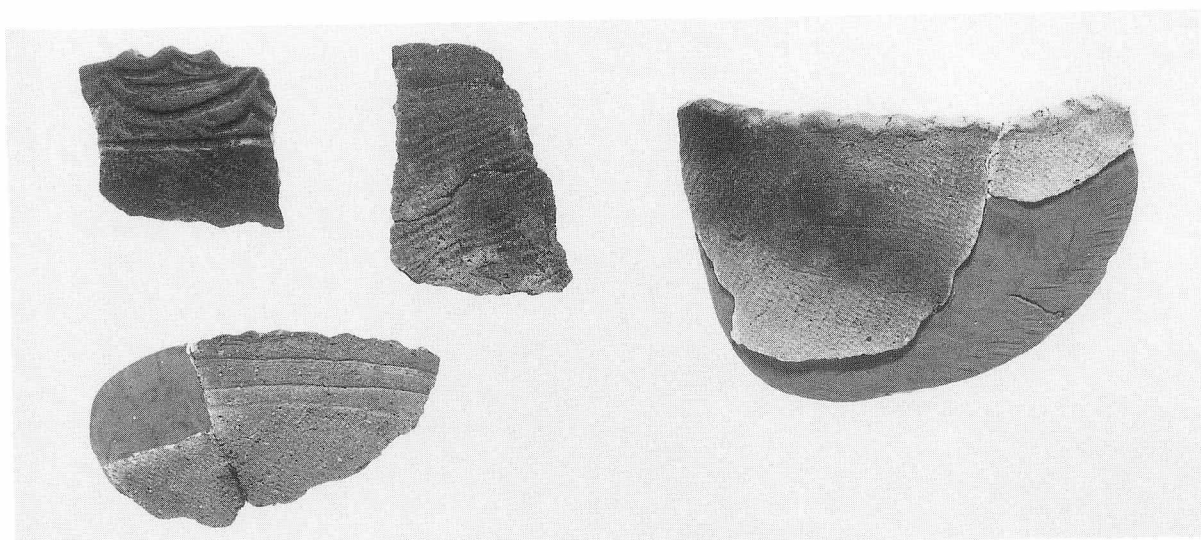


2. IV群A類

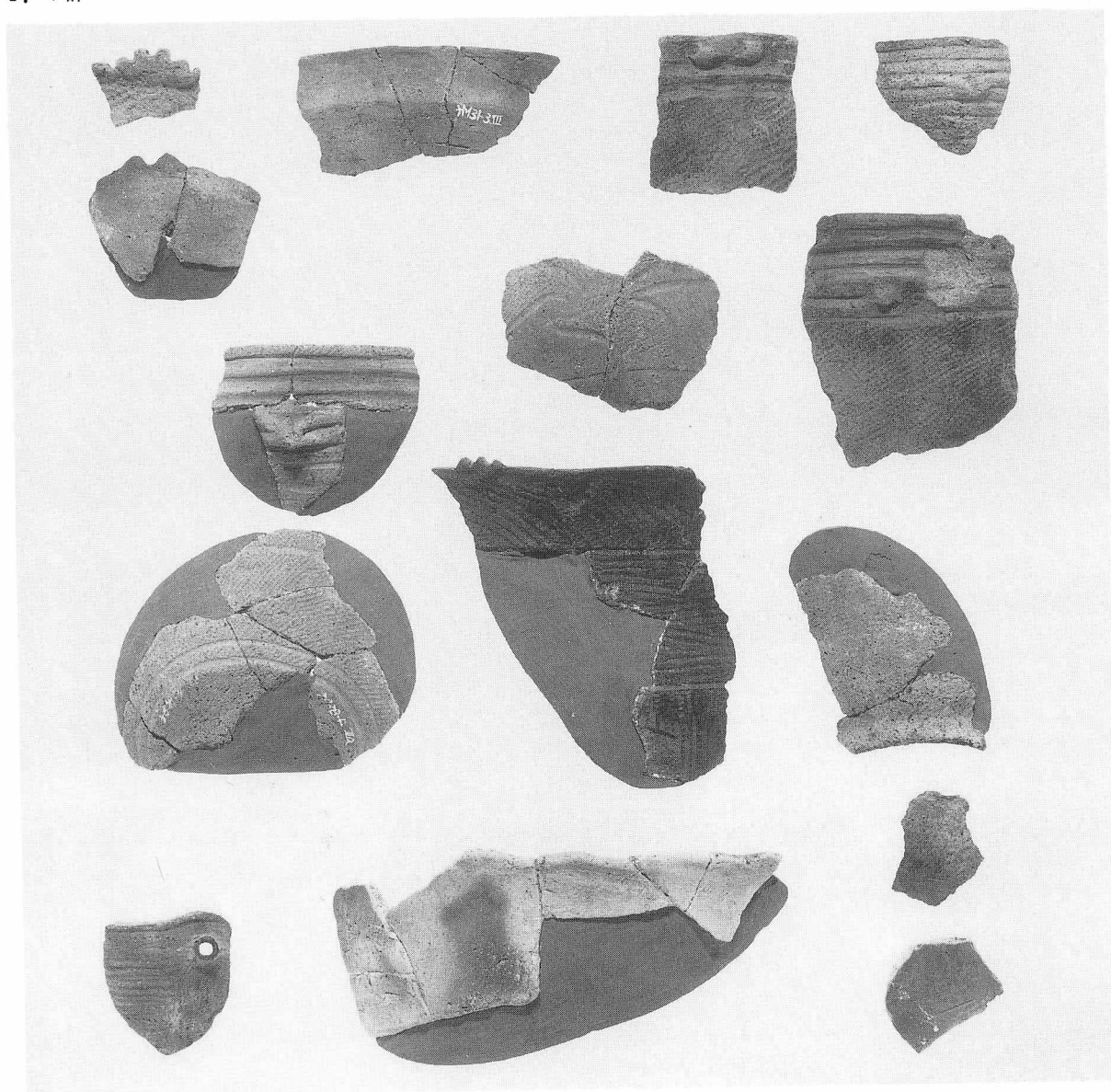


1. IV群A類





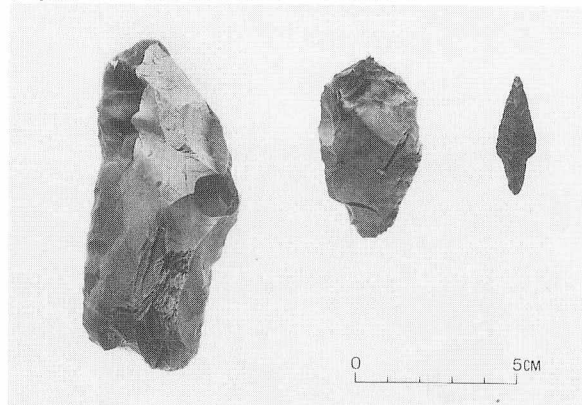
1. V群



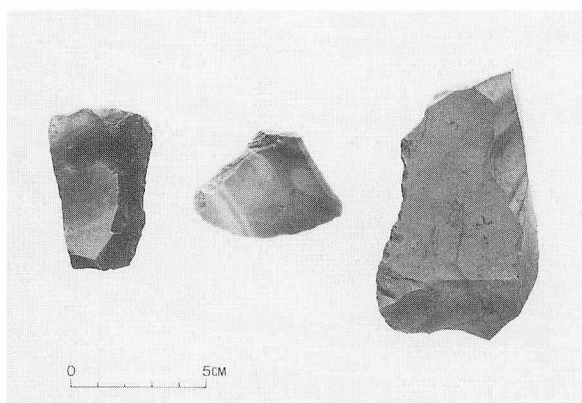
2. V群・VI群・VII群



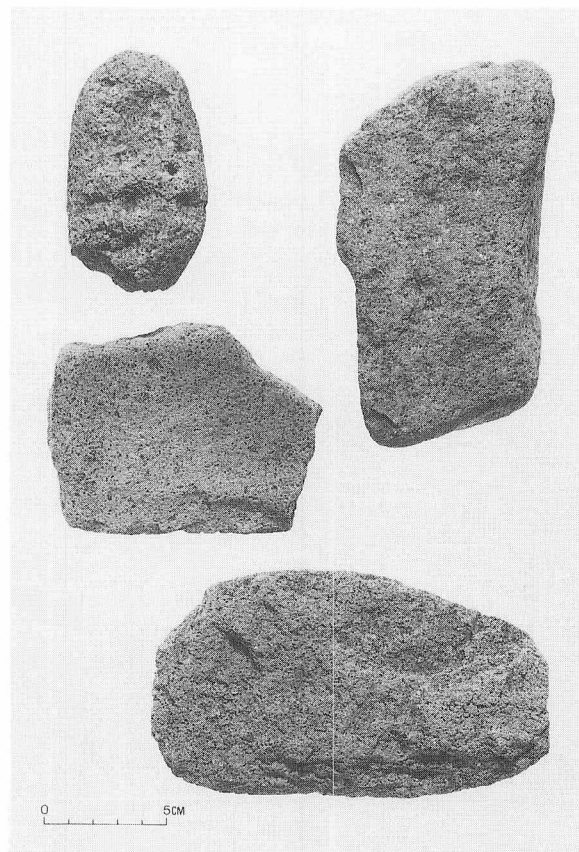
図版42 遺構出土の石器(1)



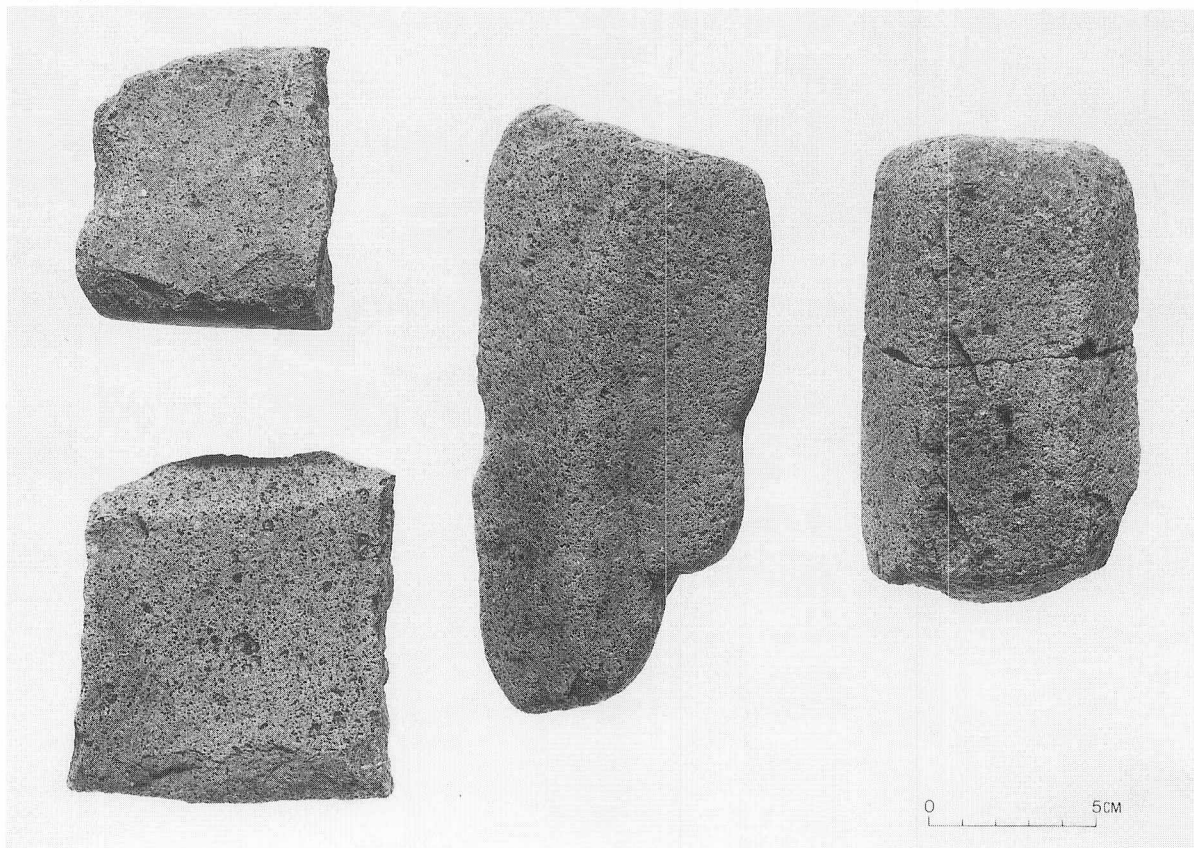
1. H-2・3・4出土の剥片石器



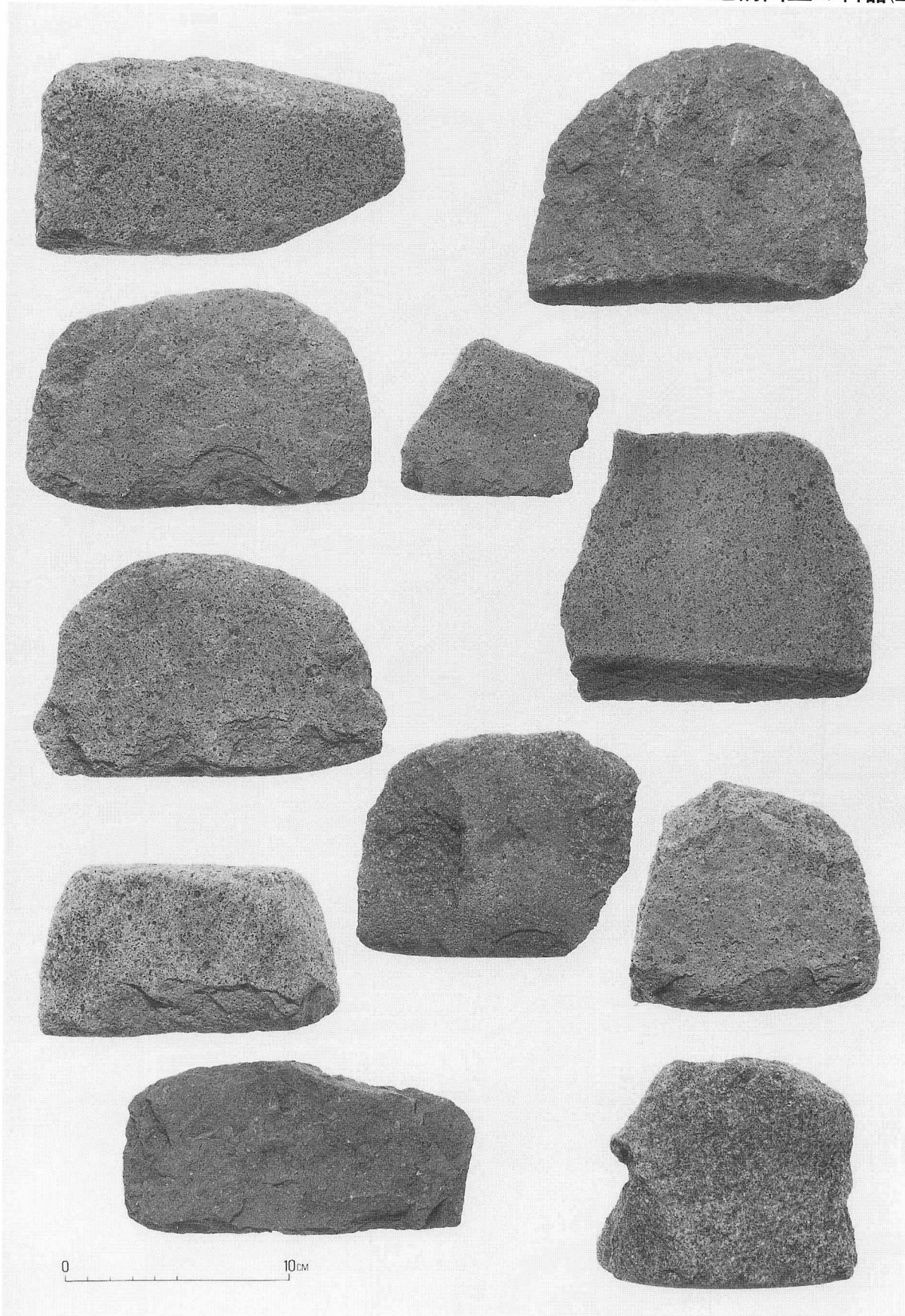
2. 土壌A類出土の剥片石器



3. H-4出土の礫石器



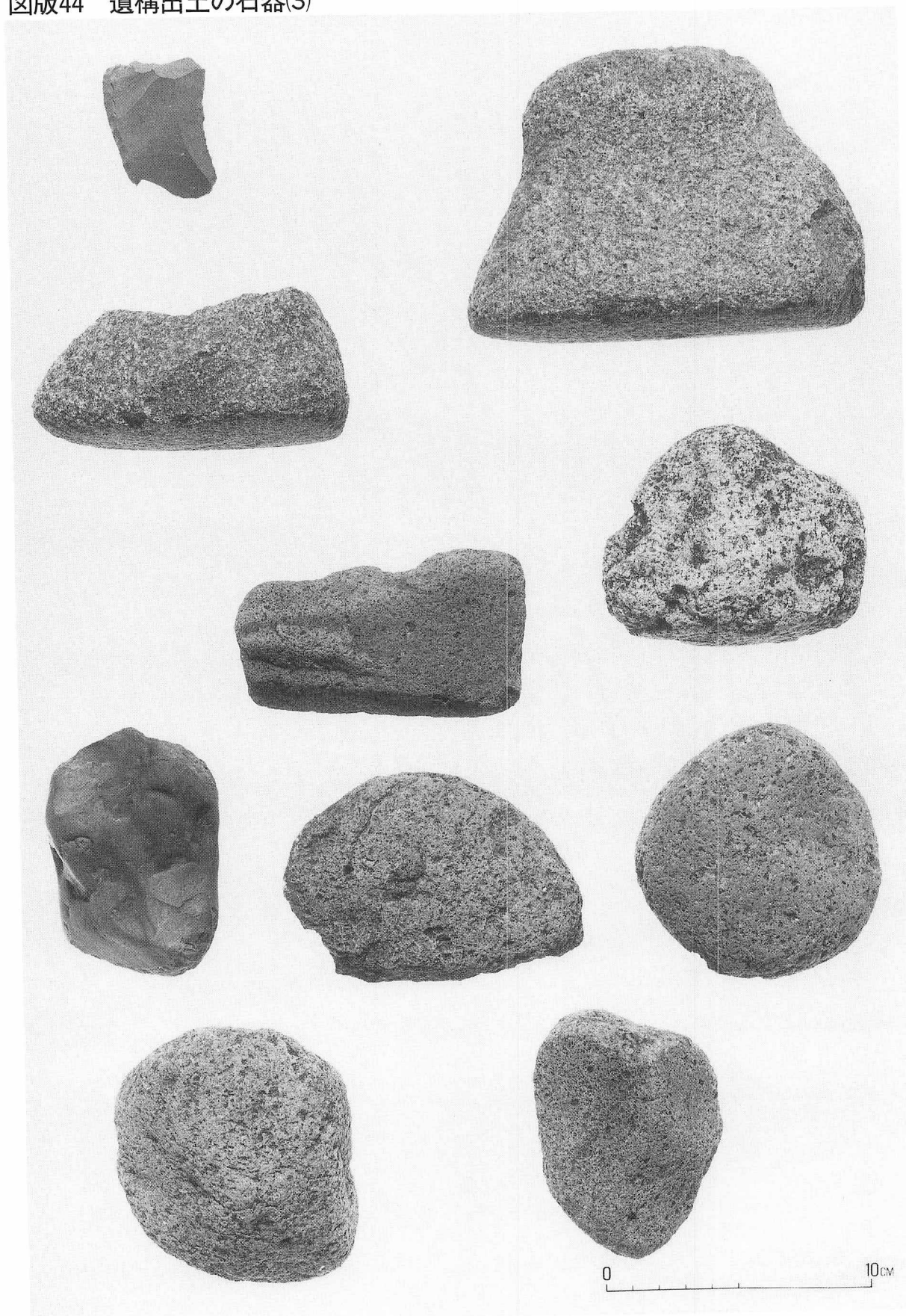
4. 土壌A類出土の礫石器



1. 土壌B類覆土・周辺包含層出土の礫石器

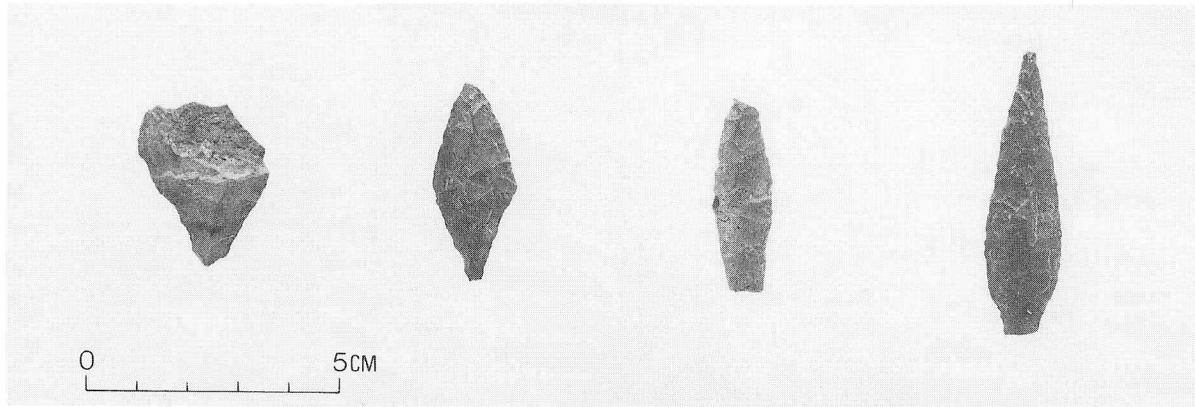


図版44 遺構出土の石器(3)

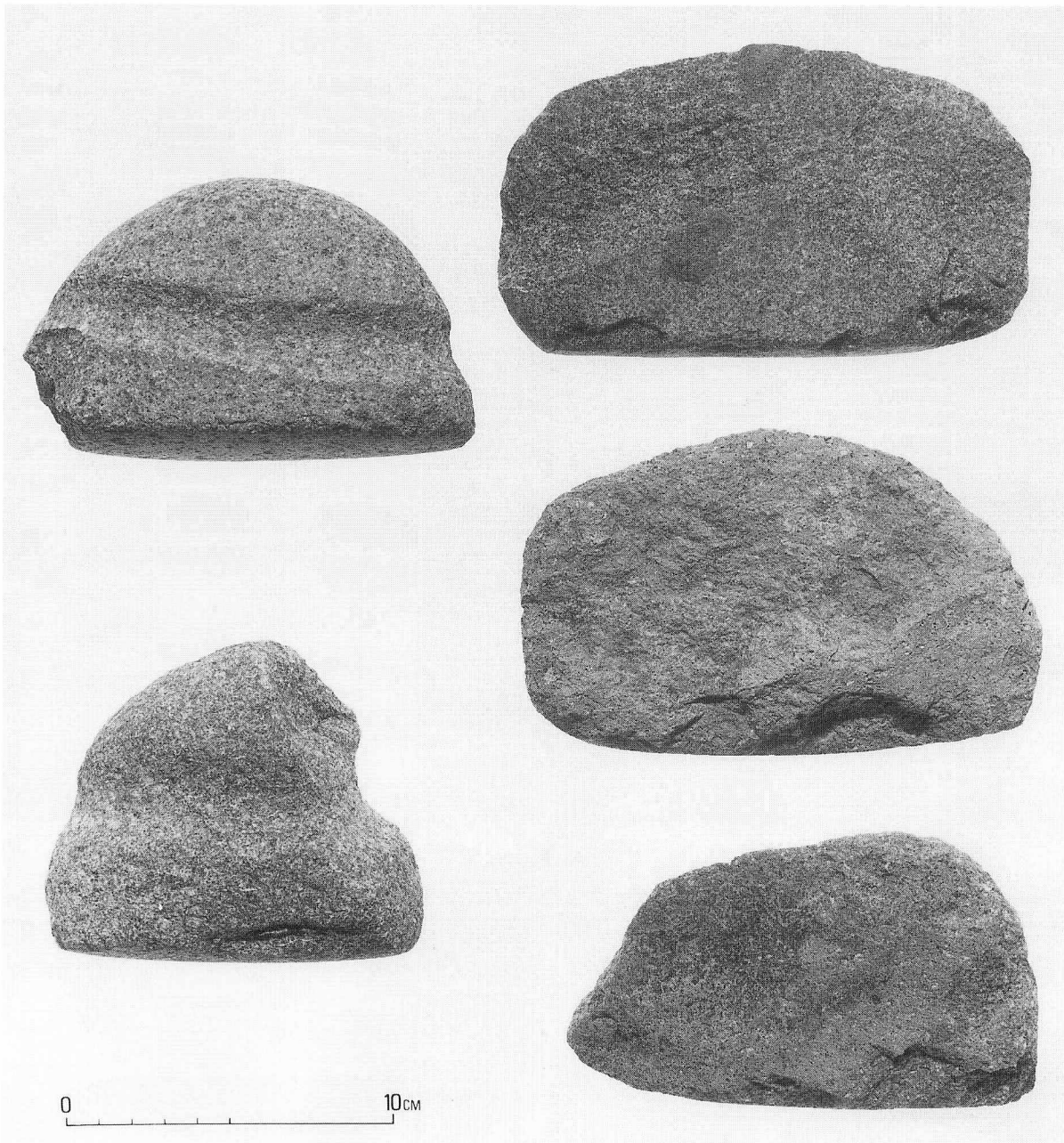


1. 炉・焼土とその周辺包含層出土の石器

図版45 遺構出土の石器(4)・包含層出土の一括石器(1)



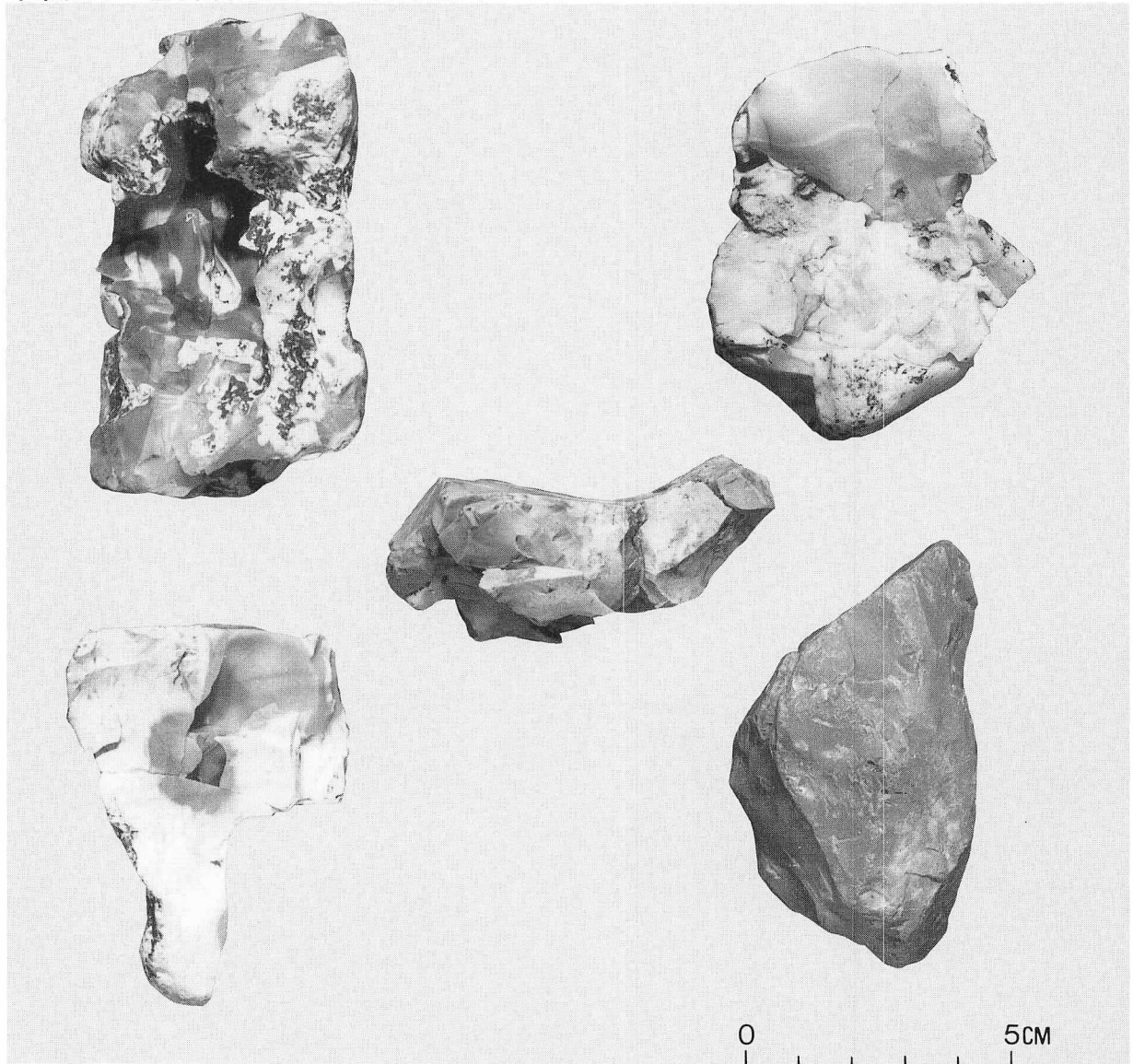
1. 土壌B類覆土・周辺包含層出土の剥片石器



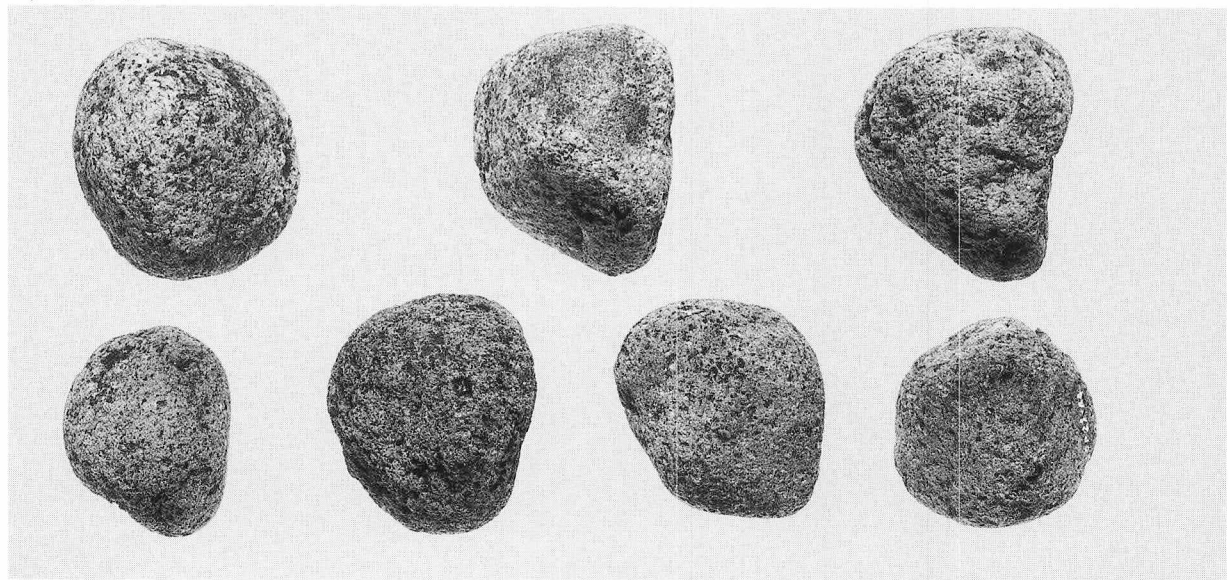
2. 一括石器 3 出土の礫石器



図版46 包含層出土の一括石器(2)

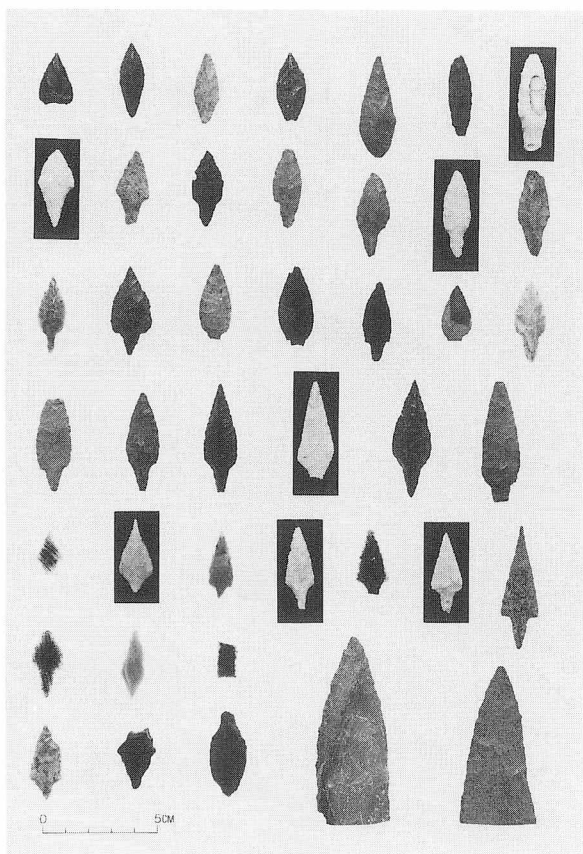


1. 一括石器 1 出土の接合資料・原石

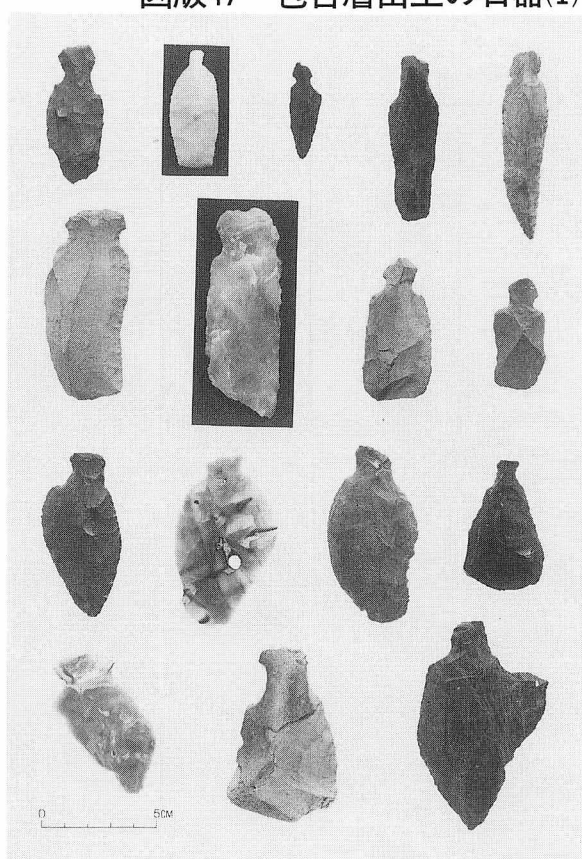


2. 一括石器 2 出土の礫

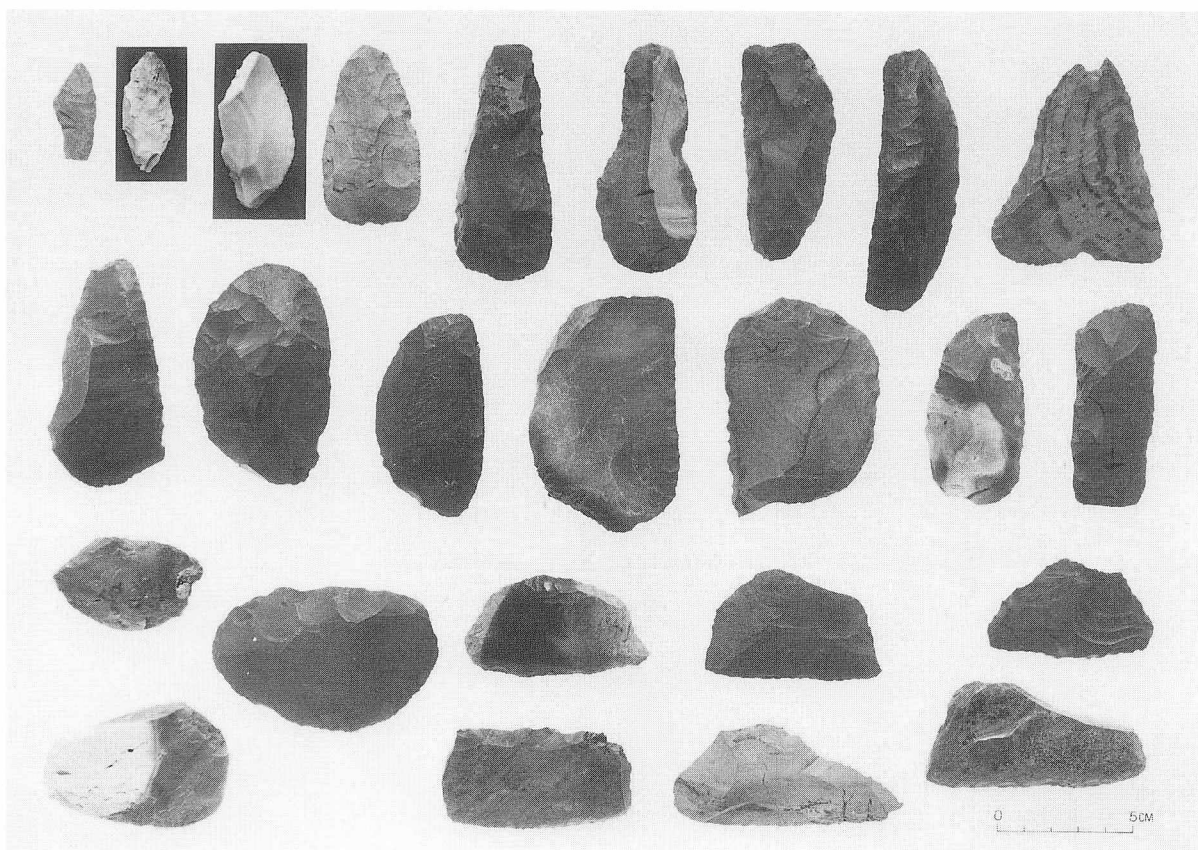
図版47 包含層出土の石器(1)



1. 石鏃



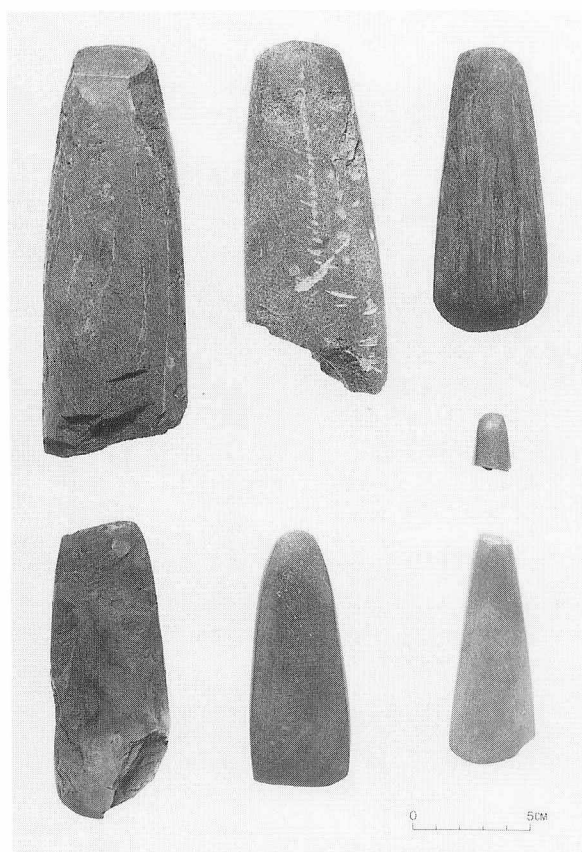
2. つまみ付きナイフ



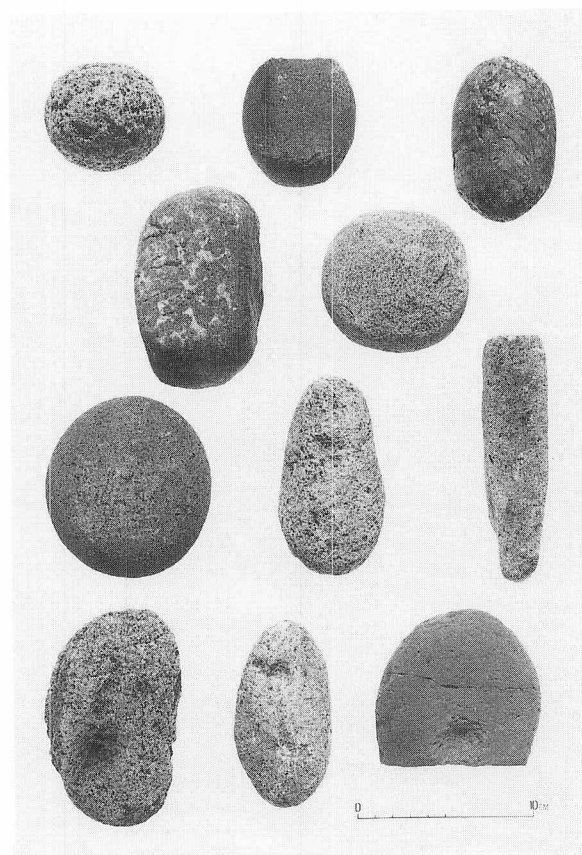
3. ナイフ・スクレイパー



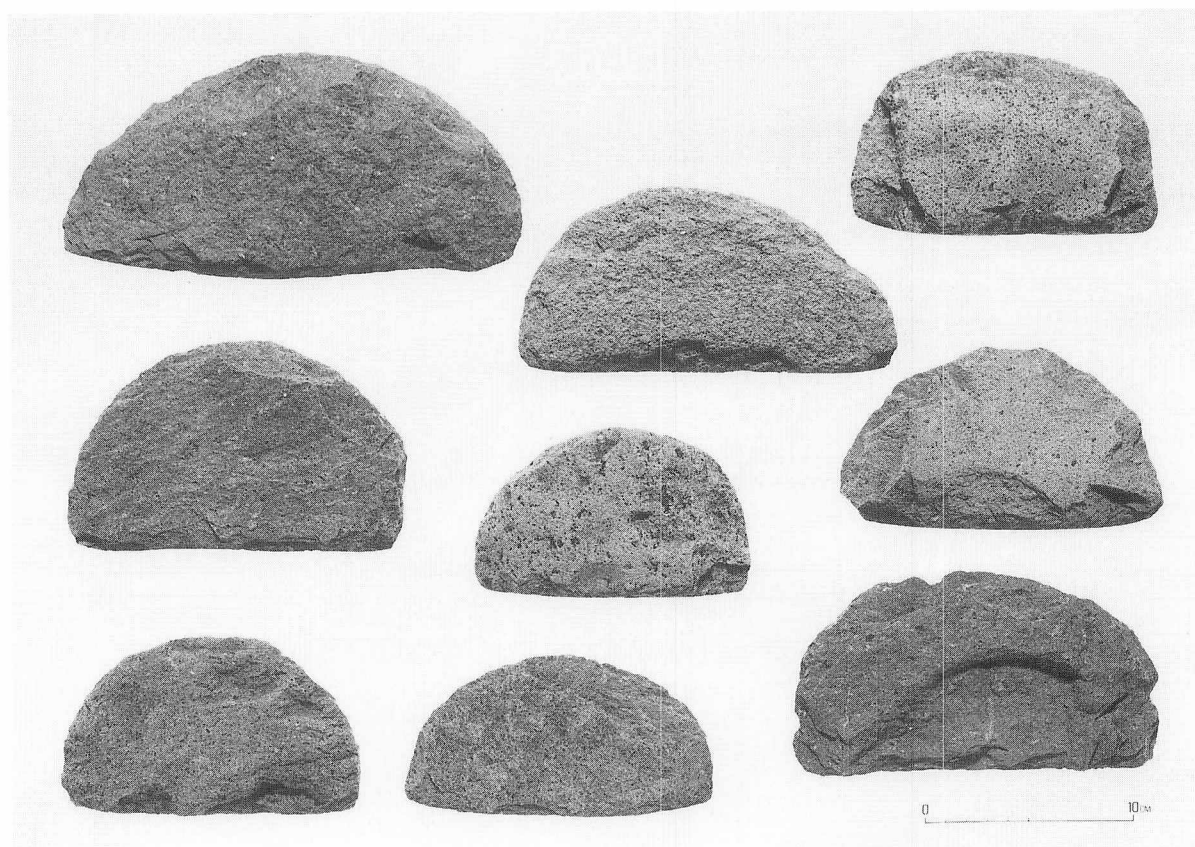
図版48 包含層出土の石器(2)



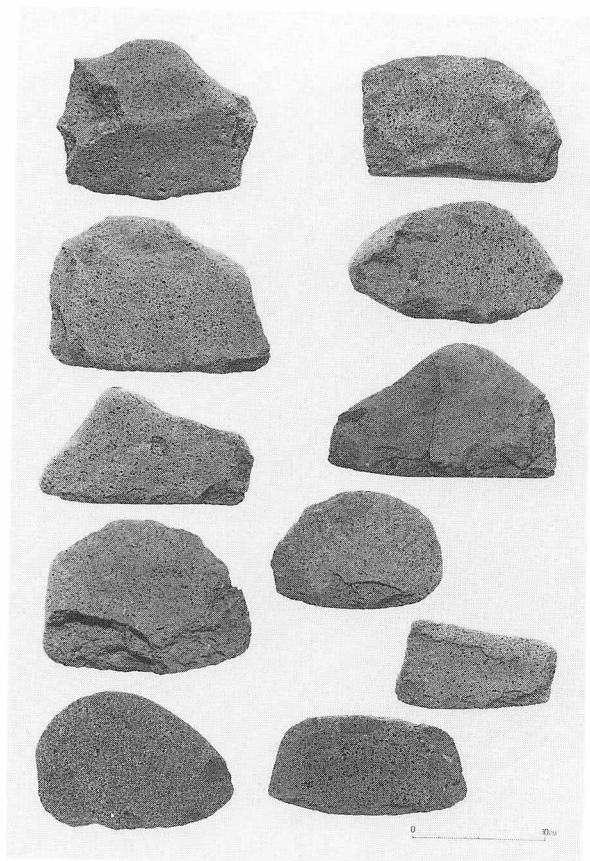
1. 石斧



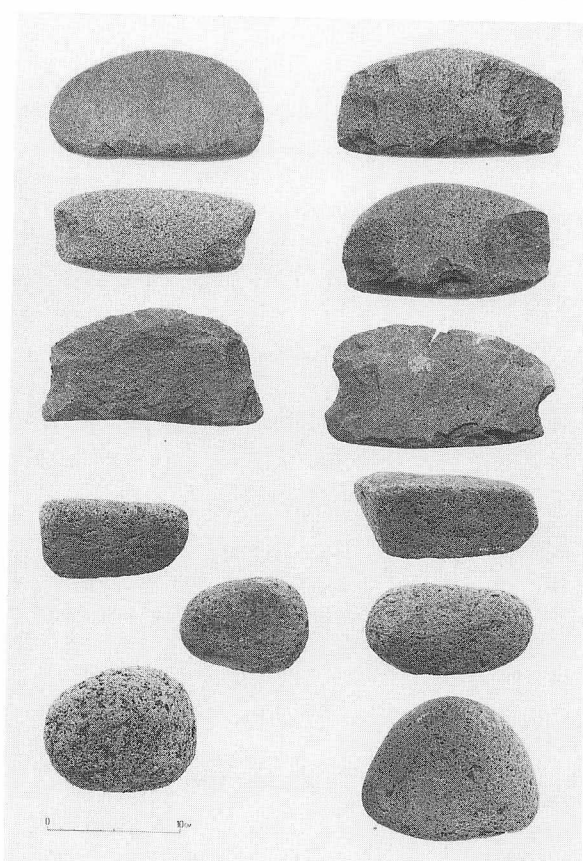
2. たたき石



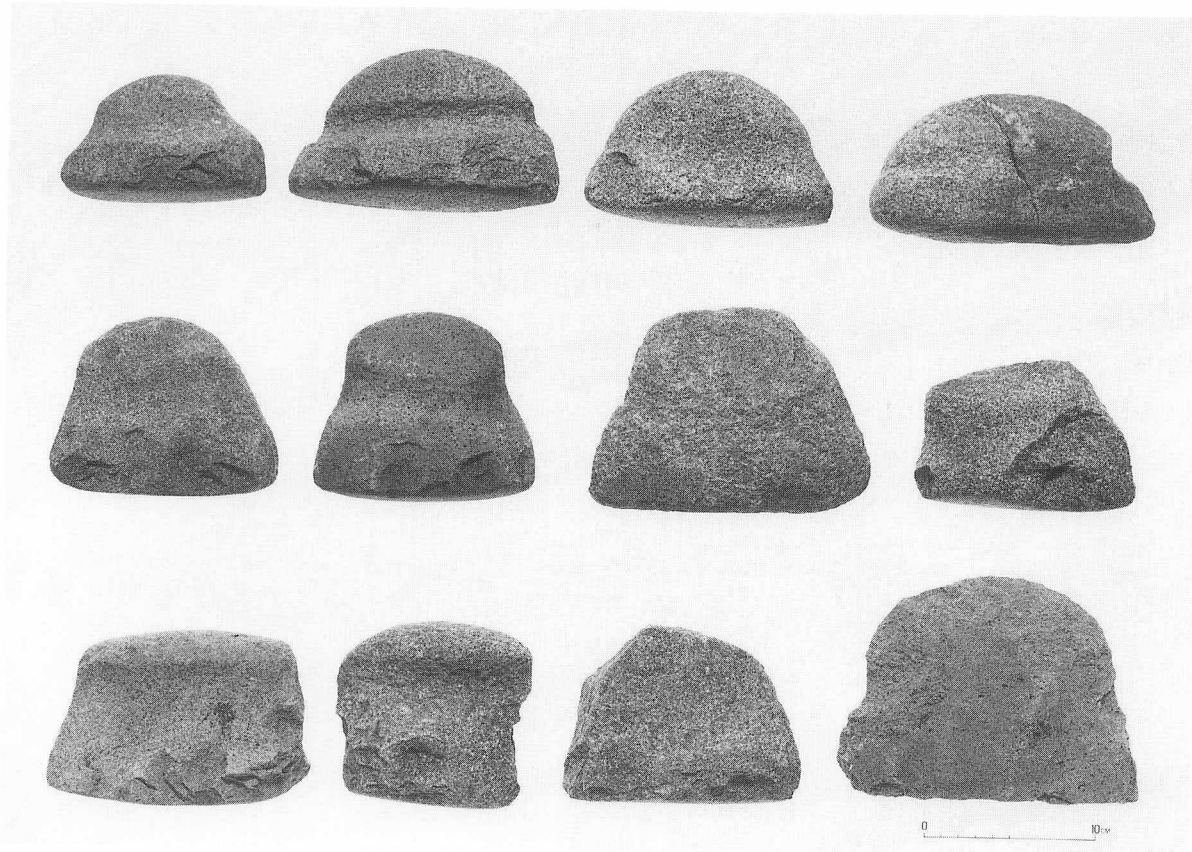
3. 扁平打製石器



1. 扁平打製石器



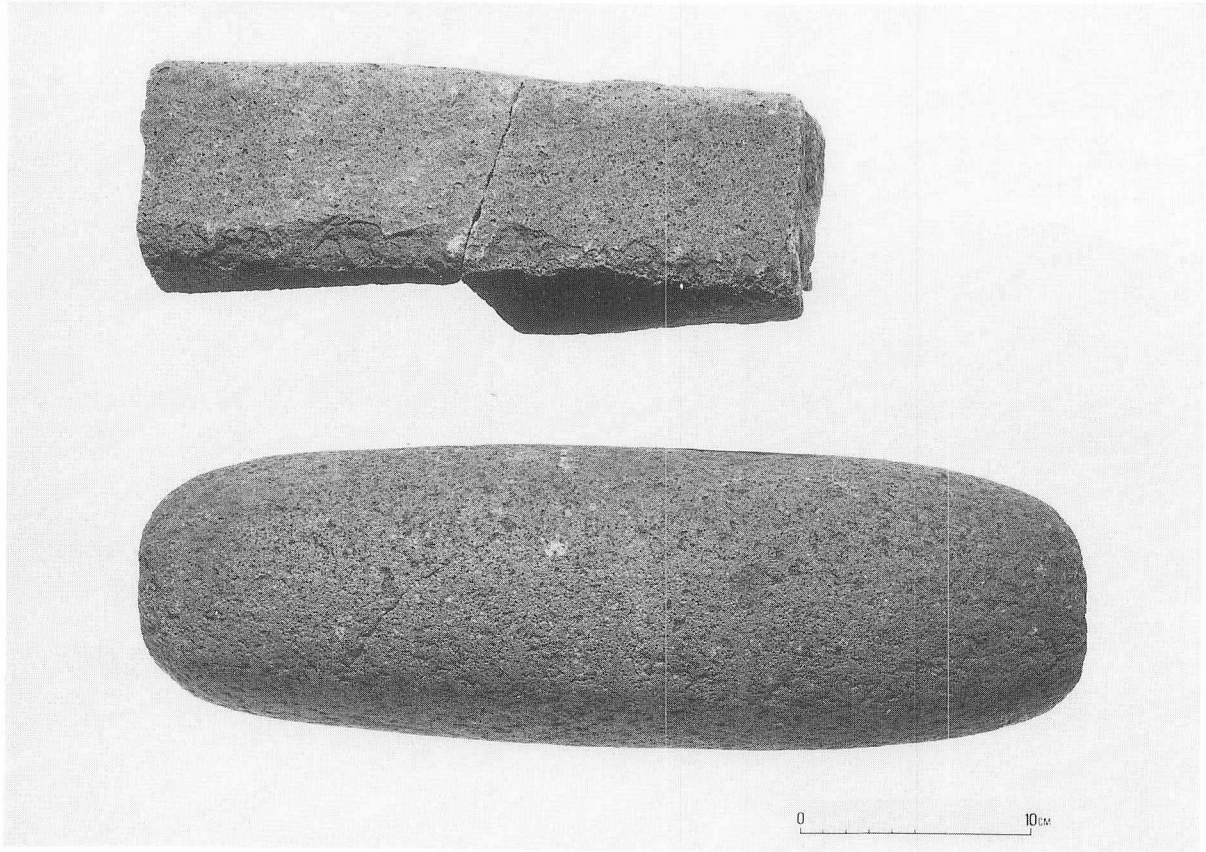
2. すり石



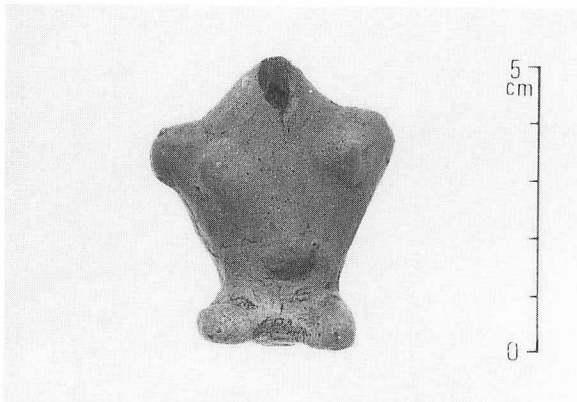
3. 北海道式石冠



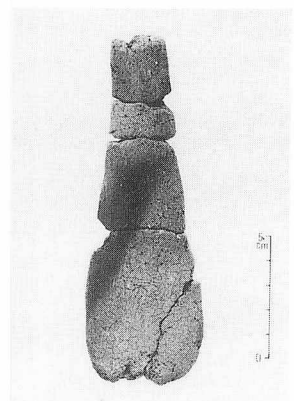
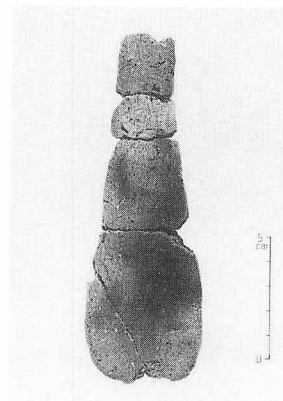
図版50 包含層出土の土製品・石製品



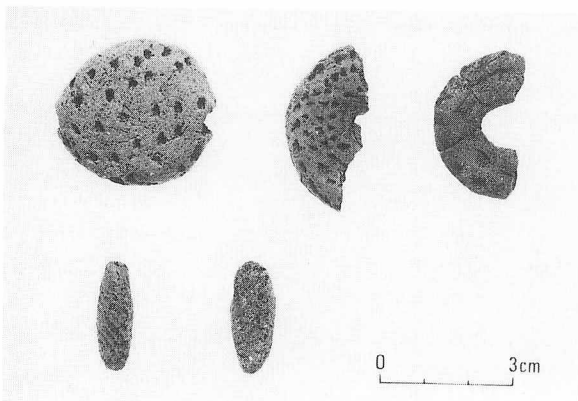
1. 石棒



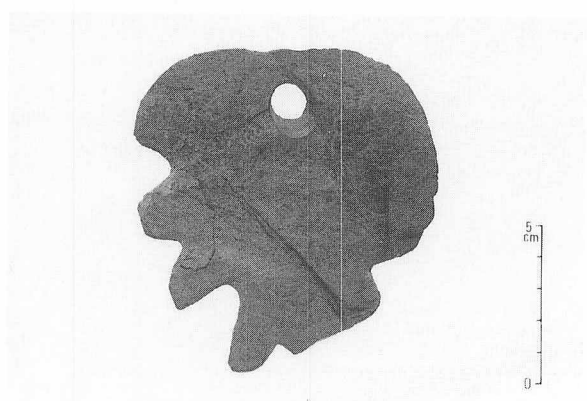
2. 土偶



3. 筧状土製品



4. 土製玉類



5. 石製品

---

---

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第87集

七 飯 町  
鳴 川 右 岸 遺 跡

---

平成6年3月25日

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

〒064 札幌市中央区南26条西11丁目

Tel (011)561-3131

印 刷 興国印刷株式会社

〒063 札幌市西区西町南13丁目1番40号

Tel (011)665-4155

---

---

この報告書は、北海道開発局函館開発建設部及び北海道函館土木  
現業所の了解を得て増刷したものです。







